県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

尾崎西遺跡

2008年1月

香川県教育委員会

県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

尾崎西遺跡

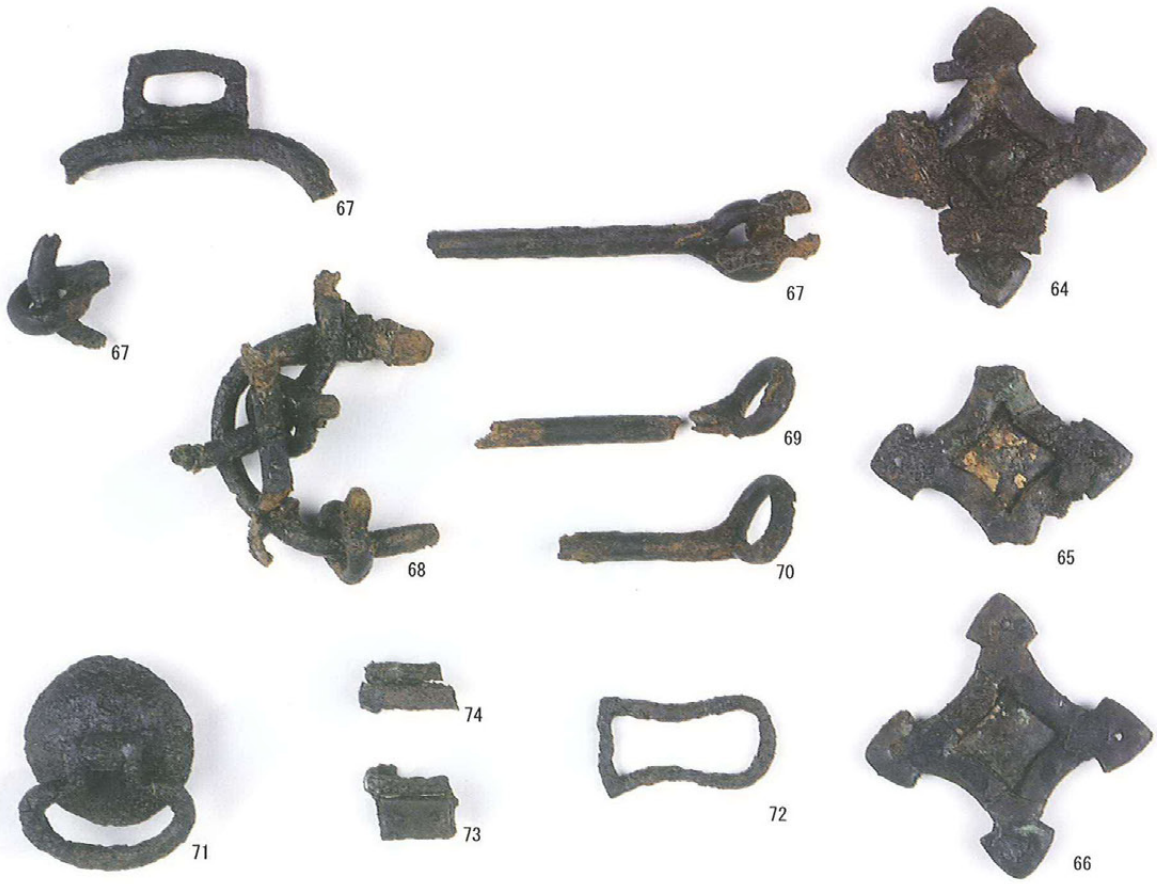
２００８．１

香川県教育委員会

尾崎西遺跡より高松平野を望む（東より）

円形周溝墓 ST01（南より）

古墳 ST03 玄室（西より）



古墳 ST03 玄室出土の馬具

土壙墓 ST05 玉類出土状況（西より）

古墳・土壙墓出土の玉類

Ｃ地区出土の陶質土器・韓式系土器

巻頭図版６

Ｃ地区流路跡 SR05 弥生土器出土状況

Ｃ地区流路跡 SR05 Ｇ群出土の弥生土器

序　　文

尾崎西遺跡は、県道高松長尾大内線道路改良事業に伴い発掘調査が行われた香川県さぬき市長尾町に所在する縄文時代から中世にかけての集落跡および墳墓跡の遺跡です。

調査は、香川県教育委員会から委託を受けた財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが、平成４年度に実施し、縄文時代の貯蔵穴や落し穴、弥生時代から古墳時代の集落跡・墳墓跡・河川跡、中世の集落跡などを検出しました。このうち弥生時代の円形周溝墓は当地域における古墳の出現を考える上で重要な資料であり、また古墳時代の河川跡から出土した陶質土器・韓式系土器は当時の朝鮮半島との人々の交流を彷彿させる興味深い資料です。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、県土木部や関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成20 年　1月　31 日

香川県埋蔵文化財センター
所長　渡部　明夫

例　言

1．本報告書は、県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県さぬき市（発掘調査時は香川県大川郡）長尾町東に所在する尾崎西遺跡（おさきにしいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課から依頼を受け、平成４年度に香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．調査にあたって、下記の関係諸機関及び各位の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、旧長尾町教育委員会、さぬき市教育委員会、宝蔵院極楽寺、地元自治会、旧長尾町文化財保護協会、さぬき市文化財保護協会、長尾小学校、長尾中学校、瀬戸内海歴史民俗資料館、大川広域行政組合、霧生孝弘、石野博信、六車恵一、藤井洋一、福岡澄男、田中清美、定森秀夫、松井章、三辻利一、中村豊、中勇樹、氏家敏之、柴田昌児、多田仁、吉田広、菅榮太郎、宮城一夫、李柱憲、白承玉、李澤求、網伸也、木下亘、大庭重信、高橋工、青柳泰介、大久保徹也、三吉秀充、松本敏三

4．本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は、森下英治が担当した。

5．本報告書で用いる方位の北は、日本測地系国土座標第Ⅳ系の北であり、標高はＴ．Ｐを基準としている。また遺構は、下記の略号により表示した。

ＳＨ　竪穴住居跡　ＳＢ　掘立柱建物跡　ＳＤ 溝跡　ＳＲ　自然河川跡　ＳＡ　柵跡
ＳＥ　井戸跡　ＳＫ　土坑　ＳＰ　柱穴跡　ＳＴ　墓跡　ＳＸ　不明遺構

なお遺構番号は、本報告にあたり、概ね東から西の順に上記略号に続く２桁の数字で表示した。ただし、柱穴等個別遺構の番号については、調査時に使用した４桁番号を踏襲したものもある。

6．挿図の一部に、国土地理院の数値地図25000（地図画像）『徳島』の一部、旧長尾町発行『長尾町都市計画図』を使用した。

7．巻末にＣＤ１枚を添付した。ＣＤの内容を目次に示した。

8．本文頁、挿図・表・図版番号は通し番号とし、本文末尾に参考文献を付した。なお、第６章の参考文献については、各節の末尾に付した。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過……1
第２節　整理作業の経過と経緯……2
第３節　調査体制……3

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……9

第３章　Ａ地区調査

第１節　概要……13
第２節　土層序……14
第３節　縄文時代……17
第４節　弥生時代～古墳時代……24
第５節　中世以後……77

第４章　Ｂ地区の調査

第１節　概要……112
第２節　土層序……112
第３節　縄文時代～弥生時代……115
第４節　古代以後……125

第５章　Ｃ地区の調査

第１節　概要……138
第２節　土層序……138
第３節　縄文時代……144
第４節　弥生時代前期～中期前半……148
第５節　弥生時代後期以後……151
第６節　流路跡……180

第６章　自然科学的調査

第１節　プラント・オパール分析……245
第２節　花粉分析……248
第３節　種実同定……255
第４節　動物遺存体……259
第５節　尾崎西遺跡出土陶質土器・初期須恵器の蛍光Ｘ線分析……260
第６節　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光Ｘ線分析……265

第７章　まとめ……276

参考文献……292

遺物観察表……295

付図１　尾崎西遺跡Ａ地区遺構平面図
付図２　尾崎西遺跡Ｂ地区遺構平面図
付図３　尾崎西遺跡Ｃ地区遺構平面図
付図４　尾崎西遺跡Ｃ地区遺構平面拡大図

付属ＣＤ　カラー写真図版　(PDF 形式)……CD 図版目次参照
　　カラー挿図　(PDF 形式)……本文 p257 ～ 259・283
　　詳細遺物観察表　(PDF 形式)……土器のみ
　　詳細遺物観察表　(CSV 形式)……土器のみ

挿図目次

第 1 図 尾崎西遺跡の位置…… 1
第 2 図 調査地区割図 (1/5,000) …… 2
第 3 図 尾崎西遺跡周辺の地形・地質概要図…… 4
第 4 図 尾崎西遺跡周辺の微地形及び条里型地割分布図…… 5
第 5 図 連続土層断面図 (1/3000) …… 6
第 6 図 尾崎西遺跡周辺遺跡分布図…… 8
第 7 図 A地区主要遺構分布状況…… 13
第 8 図 A地区土層断面図 (1) …… 15
第 9 図 A地区土層断面図 (2) 及び土層断面概略図…… 16
第 10 図 A地区縄文遺構分布状況…… 17
第 11 図 土坑 SK01 ～ 03 平・断面図…… 18
第 12 図 土坑 SK03 出土遺物…… 18
第 13 図 土坑 SK04 平・断面図…… 19
第 14 図 土坑 SK04 出土遺物…… 19
第 15 図 土坑 SK05・06 平・断面図 …… 19
第 16 図 土坑 SK07・08 平・断面図及び SK08 出土遺物…… 20
第 17 図 土坑 SK09 平・断面図…… 20
第 18 図 土坑 SK10 ～ 18 平・断面図…… 21
第 19 図 土坑 SK19 ～ 24 平・断面図…… 23
第 20 図 A地区墳墓分布図…… 25
第 21 図 円形周溝墓 ST01 周溝内転落礫法量グラフ…… 26
第 22 図 円形周溝墓 ST01 平・断面図…… 27
第 23 図 円形周溝墓 ST01 等高線図…… 28
第 24 図 円形周溝墓 ST01 周溝内出土遺物分布図…… 29
第 25 図 円形周溝墓 ST01 出土遺物…… 30
第 26 図 古墳 ST02 (極楽寺東古墳) 墳丘測量及び周濠平面図…… 31
第 27 図 古墳 ST02 断面図及び出土遺物…… 32
第 28 図 古墳 ST03 平・断面図…… 33
第 29 図 古墳 ST03 旧地形及び石室掘り方…… 34
第 30 図 古墳 ST03 断面図…… 35
第 31 図 古墳 ST03 平・断面図…… 37
第 32 図 古墳 ST03 人骨・土器出土分布図…… 38
第 33 図 古墳 ST03 鉄器出土分布図…… 38
第 34 図 古墳 ST03 副葬品及び棺台から想定される棺配置…… 39
第 35 図 古墳 ST03 出土遺物 (1) …… 40
第 36 図 古墳 ST03 出土遺物 (2) …… 41
第 37 図 古墳 ST03 出土遺物 (3) …… 42
第 38 図 古墳 ST03 出土遺物 (4) …… 43
第 39 図 古墳 ST03 出土遺物 (5) …… 44
第 40 図 古墳 ST03 出土遺物 (6) …… 45
第 41 図 古墳 ST03 出土遺物 (7) …… 46
第 42 図 古墳 ST03 出土遺物 (8) …… 47
第 43 図 古墳 ST03 出土遺物 (9) …… 48
第 44 図 古墳 ST04 平・断面図…… 49
第 45 図 古墳 ST04 断面図…… 50
第 46 図 古墳 ST04 石室平面図…… 51
第 47 図 古墳 ST04 石室掘り方…… 52
第 48 図 古墳 ST04 基底石平面図…… 52
第 49 図 古墳 ST04 石室上面図…… 52
第 50 図 古墳 ST04 層位別礫床・副葬品分布図…… 53
第 51 図 古墳 ST04 玄室内人骨出土位置及び棺配置の復元…… 54
第 52 図 古墳 ST04 土器出土分布図…… 55
第 53 図 古墳 ST04 鉄器出土分布図…… 56
第 54 図 古墳 ST04 出土遺物 (1) …… 57
第 55 図 古墳 ST04 出土遺物 (2) …… 58
第 56 図 古墳 ST04 出土遺物 (3) …… 59
第 57 図 A地区東丘陵土壙墓分布図…… 61
第 58 図 土壙墓 ST05 平・断面図、出土遺物 (1) …… 62
第 59 図 土壙墓 ST05 管玉・水晶玉出土分布図…… 63
第 60 図 土壙墓 ST05 出土遺物 (2) …… 64
第 61 図 土壙墓 ST05 出土遺物 (3) …… 65
第 62 図 土壙墓 ST06・07 平・断面図…… 66
第 63 図 土坑 SK27・落込遺構 SX01 出土遺物…… 66
第 64 図 古墳 ST08 ～ 10 平・断面図…… 67
第 65 図 古墳 ST08 周溝遺物出土状況…… 68
第 66 図 古墳 ST08 出土遺物…… 69
第 67 図 溝跡 SD01 平・断面図…… 70
第 68 図 溝跡 SD01 出土遺物…… 71
第 69 図 流路跡 SR01 平・断面図…… 72
第 70 図 流路跡 SR01 出土遺物 (1) …… 73
第 71 図 流路跡 SR01 出土遺物 (2) …… 74
第 72 図 流路跡 SR01 出土遺物 (3) …… 75
第 73 図 流路跡 SR01 出土遺物 (4) …… 76
第 74 図 A地区東丘陵中世遺構分布状況…… 77
第 75 図 A地区建物群A建物分布状況平面図…… 77
第 76 図 掘立柱建物跡 SB01・02・03 平・断面図…… 78
第 77 図 柵列跡 SA01 ～ 05 断面図…… 79
第 78 図 A地区建物群B平・断面図…… 79
第 79 図 A地区建物群C平面図…… 80
第 80 図 A地区東丘陵出土遺物…… 81
第 81 図 井戸 SE01 平・断面図、出土遺物…… 82
第 82 図 A地区西丘陵中世遺構分布状況…… 83
第 83 図 掘立柱建物跡 SB07・08 平・断面図…… 83
第 84 図 掘立柱建物跡 SB09 平・断面図…… 84
第 85 図 掘立柱建物跡 SB10 平・断面図…… 85
第 86 図 掘立柱建物跡 SB11 平・断面図…… 86
第 87 図 A地区西丘陵出土遺物…… 87
第 88 図 井戸跡 SE02 平・断面図、出土遺物 (1) …… 88
第 89 図 井戸跡 SE02 出土遺物 (2) …… 89
第 90 図 井戸跡 SE02 出土遺物 (3) …… 90
第 91 図 井戸跡 SE02 出土遺物 (4) …… 91
第 92 図 井戸跡 SE03 平・断面図、出土遺物 (1) …… 92
第 93 図 井戸跡 SE03 出土遺物 (2) …… 93
第 94 図 井戸跡 SE04 平・断面図、出土遺物 (1) …… 95
第 95 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (2) …… 96
第 96 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (3) …… 97
第 97 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (4) …… 98
第 98 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (5) …… 99
第 99 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (6) …… 100
第 100 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (7) …… 101
第 101 図 井戸跡 SE05 平・断面図、出土遺物…… 101
第 102 図 溝跡 SD04 平・断面図…… 102
第 103 図 溝跡 SD04 出土遺物 (1) …… 102
第 104 図 溝跡 SD04 出土遺物 (2) …… 103
第 105 図 溝跡 SD04 出土遺物 (3) …… 104
第 106 図 溝跡 SD04 出土遺物 (4) …… 105
第 107 図 溝跡 SD04 出土遺物 (5) …… 106
第 108 図 溝跡 SD04 出土遺物 (6) …… 107
第 109 図 溝跡 SD04 出土遺物 (7) …… 108
第 110 図 溝跡 SD04 出土遺物 (8) …… 109
第 111 図 溝跡 SD02 平・断面図…… 110
第 112 図 A地区包含層等出土遺物 (1) …… 110
第 113 図 A地区包含層等出土遺物 (2) …… 111
第 114 図 B地区全体概要図…… 112
第 115 図 B地区土層断面図 (1) …… 113
第 116 図 B地区土層断面図 (2) …… 114
第 117 図 竪穴住居跡 SH01 平・断面図…… 115
第 118 図 竪穴住居跡 SH01 出土遺物…… 116
第 119 図 溝跡 SD05 平・断面図…… 117
第 120 図 溝跡 SD05 出土遺物 (1) …… 118
第 121 図 溝跡 SD05 出土遺物 (2) …… 119
第 122 図 溝跡 SD05 出土遺物 (3) …… 120
第 123 図 溝跡 SD05 出土遺物 (4) …… 121
第 124 図 溝跡 SD06 平・断面図…… 122
第 125 図 溝跡 SD06 出土遺物 (1) …… 123
第 126 図 溝跡 SD06 出土遺物 (2) …… 124
第 127 図 溝跡 SD07 断面図…… 124
第 128 図 掘立柱建物跡 SB14 平・断面図…… 125
第 129 図 掘立柱建物跡 SB15・柵列跡 SA08 平・断面図…… 126
第 130 図 掘立柱建物跡 SB16 平・断面図…… 127
第 131 図 掘立柱建物 SB17・18 平・断面図…… 128
第 132 図 掘立柱建物 SB19・柵列跡 SA09 ～ 11平・断面図…… 129
第 133 図 B地区柱穴跡出土遺物…… 130
第 134 図 B地区土坑分布状況…… 131
第 135 図 土坑 SK30 ～ 35 平・断面図…… 131
第 136 図 土坑 SK33・36 出土遺物…… 131
第 137 図 B地区東側河川域の遺構平・断面図…… 133
第 138 図 B地区東側河川域出土遺物…… 134
第 139 図 不明遺構 SX10 断面図、出土遺物…… 135
第 140 図 B地区包含層等出土遺物 (1) …… 136
第 141 図 B地区包含層等出土遺物 (2) …… 137
第 142 図 C地区土層断面図 (1) …… 139
第 143 図 C地区土層断面図 (2) …… 140
第 144 図 C地区土層断面図 (3) …… 141
第 145 図 C地区土層断面図 (4) …… 142
第 146 図 C地区土層断面図 (5) …… 143
第 147 図 貯蔵穴跡 SK37 平・断面図…… 144
第 148 図 貯蔵穴跡 SK38 ～ 41 平・断面図…… 146
第 149 図 C地区縄文貯蔵穴跡群と低地帯 SX11 分布図…… 146
第 150 図 貯蔵穴跡 SK37、低地帯 SX11 出土遺物 …… 147
第 151 図 土坑 SK42・43・46 平・断面図…… 149
第 152 図 C地区弥生前期～中期前半遺構出土遺物…… 150
第 153 図 C地区弥生時代後期～終末期の遺構分布状況…… 151
第 154 図 住居跡 SH02 平・断面図…… 152
第 155 図 住居跡 SH02 出土遺物…… 153
第 156 図 住居跡 SH03 平・断面図、出土遺物…… 154
第 157 図 住居跡 SH04 平・断面図…… 154
第 158 図 溝跡 SD13・14 平・断面図…… 156

第 159 図 溝跡 SD12・15・16 平・断面図……156
第 160 図 住居跡 SH04、溝跡 SD12・13 出土遺物……157
第 161 図 住居跡 SH05 平・断面図、出土遺物……158
第 162 図 住居跡 SH06 平・断面図……159
第 163 図 住居跡 SH07・09 平・断面図……160
第 164 図 住居跡 SH08 平・断面図……161
第 165 図 住居跡 SH10 平・断面図……162
第 166 図 住居跡 SH11・12 平・断面図……163
第 167 図 住居跡 SH13・14 平・断面図……164
第 168 図 柵列跡 SA12 平・断面図……164
第 169 図 C地区掘立柱建物跡分布状況……165
第 170 図 掘立柱建物跡 SB20 平・断面図……165
第 171 図 掘立柱建物跡 SB21・柵列跡 SA13・14・16 平・断面図…166
第 172 図 掘立柱建物跡 SB22・柵列跡 SA17 平・断面図……167
第 173 図 掘立柱建物跡 SB23 平・断面図……168
第 174 図 掘立柱建物跡 SB24・柵列跡 SA15 平・断面図……169
第 175 図 掘立柱建物跡 SB25 平・断面図……170
第 176 図 C地区建物跡群出土遺物……170
第 177 図 溝跡 SD17・18・19 平・断面図……171
第 178 図 溝跡 SD18 出土遺物……171
第 179 図 溝跡 SD17 出土遺物……172
第 180 図 古代に所属する溝跡分布……173
第 181 図 条里方向の溝跡分布（主に中世）……173
第 182 図 C地区溝跡群断面図……174
第 183 図 溝跡 SD20 ～ 32 出土遺物……175
第 184 図 溝跡 SD33 出土遺物（1）……176
第 185 図 溝跡 SD33 出土遺物（2）……177
第 186 図 溝跡 SD34・35 出土遺物……178
第 187 図 溝跡 SD36 ～ 44出 土遺物……178
第 188 図 砂糖製造竈跡 SX13 平・断面図、出土遺物……179
第 189 図 溝跡 SD45 出土遺物……179
第 190 図 流路跡 SR04 平・断面図……180
第 191 図 流路跡 SR04 出土遺物（1）……181
第 192 図 流路跡 SR04 出土遺物（2）……182
第 193 図 流路跡 SR04 出土遺物（3）……183
第 194 図 流路跡 SR04 出土遺物（4）……185
第 195 図 流路跡 SR04 出土遺物（5）……186
第 196 図 流路跡 SR04 出土遺物（6）……187
第 197 図 流路跡 SR04 出土遺物（7）……188
第 198 図 流路跡 SR04 出土遺物（8）……189
第 199 図 流路跡 SR04 出土遺物（9）……190
第 200 図 流路跡 SR04 出土遺物（10）……191
第 201 図 流路跡 SR04 出土遺物（11）……192
第 202 図 流路跡 SR05・SR06 遺物出土位置……194
第 203 図 流路跡 SR05 断面図……195
第 204 図 流路跡 SR05 出土遺物（1）……196
第 205 図 流路跡 SR05 出土遺物（2）……197
第 206 図 流路跡 SR05 出土遺物（3）　A～D群……198
第 207 図 流路跡 SR05 出土遺物（4）　E群……199
第 208 図 流路跡 SR05 出土遺物（5）　F群……200
第 209 図 流路跡 SR05 出土遺物（6）　G群 1……201
第 210 図 流路跡 SR05 出土遺物（7）　G群 2……202
第 211 図 流路跡 SR05 出土遺物（8）　G群 3……203
第 212 図 流路跡 SR05 出土遺物（9）　G群 4……204
第 213 図 流路跡 SR05 出土遺物（10）　G群 5……205
第 214 図 流路跡 SR05 出土遺物（11）　南側・北側黄色砂層……206
第 215 図 流路跡 SR05 出土遺物（12）　北側黒色砂質土下層……207
第 216 図 流路跡 SR05 出土遺物（13）　南側黒色砂質土下層 1…208
第 217 図 流路跡 SR05 出土遺物（14）　南側黒色砂質土下層 2…209
第 218 図 流路跡 SR05 出土遺物（15）　北側黒色砂質土上層 1…210
第 219 図 流路跡 SR05 出土遺物（16）　北側黒色砂質土上層 2…211
第 220 図 流路跡 SR05 出土遺物（17）　南側黒色砂質土上層 1…212
第 221 図 流路跡 SR05 出土遺物（18）　南側黒色砂質土上層 2…213
第 222 図 流路跡 SR05 出土遺物（19）　古墳時代 1……216
第 223 図 流路跡 SR05 出土遺物（20）　古墳時代 2……217
第 224 図 流路跡 SR05 出土遺物（21）　石器・石製品 1……219
第 225 図 流路跡 SR05 出土遺物（22）　石器・石製品 2……220
第 226 図 流路跡 SR05 出土遺物（23）　石器・石製品 3……221
第 227 図 流路跡 SR05 出土遺物（24）　石器・石製品 4……222
第 228 図 流路跡 SR05 出土遺物（25）　木器……223
第 229 図 流路跡 SR06 土層断面図……225
第 230 図 流路跡 SR06 出土遺物（1）　弥生前期～中期土器……227
第 231 図 流路跡 SR06 出土遺物（2）　A群・B群……228
第 232 図 流路跡 SR06 出土遺物（3）　C群……229
第 233 図 流路跡 SR06 出土遺物（4）　北側黒色砂質土・黄灰色砂質土1…230
第 234 図 流路跡 SR06 出土遺物（5）　北側黒色砂質土・黄灰色砂質土2…231
第 235 図 流路跡 SR06 出土遺物（6）　北側黒色砂質土・黄灰色砂質土3…232
第 236 図 流路跡 SR06 出土遺物（7）　南側黒色砂質土・黄灰色砂質土1…233
第 237 図 流路跡 SR06 出土遺物（8）　南側黒色砂質土・黄灰色砂質土2…234
第 238 図 流路跡 SR06 出土遺物（9）　古墳時代 1……237
第 239 図 流路跡 SR06 出土遺物（10）古墳時代 2……238
第 240 図 流路跡 SR06 出土遺物（11）石器 1……239
第 241 図 流路跡 SR06 出土遺物（12）石器 2……240
第 242 図 流路跡 SR07 出土遺物（1）……241
第 243 図 流路跡 SR07 出土遺物（2）……242
第 244 図 C地区包含層出土遺物……243
第 245 図 追加報告遺物（SD32・SX11・SR04）……244
第 246 図 尾崎西遺跡のプラント・オパール分析結果……246
第 247 図 尾崎西遺跡のC地区（V区⑱）南壁における花粉ダイアグラム・251
第 248 図 尾崎西遺跡のC地区（V区⑲）SK37における花粉ダイアグラム・252
第 249 図 尾崎西遺跡のC地区（V区⑲）SK38における花粉ダイアグラム・254
第 250 図 尾崎西遺跡のＰＯ……257
第 251 図 尾崎西遺跡の種実……257
第 252 図 尾崎西遺跡の花粉・胞子……258
第 253 図 尾崎西遺跡C地区 SK37 出土の動物遺体……259
第 254 図 尾崎西遺跡胎土分析資料（初期須恵器・陶質土器）…262
第 255 図 尾崎西遺跡出土初期須恵器・陶質土器の両分布……263
第 256 図 尾崎西遺跡出土初期須恵器・
陶質土器の産地推定（1）K, Ca, Rb, Sr……263
第 257 図 尾崎西遺跡出土初期須恵器・
陶質土器の産地推定（2）K, Ca, Rb, Sr……263
第 258 図 宮山群と三郎池群の相互識別（K, Ca, Rb, Sr）……263
第 259 図 陶邑群と三郎池群の
相互識別（K, Ca, Rb, Sr）……263
第 260 図 韓式系土器の両分布図……271
第 261 図 布留系土師器の両分布図……271
第 262 図 A-1 と分類された土器の両分布図……271
第 263 図 A-2 と分類された土器の両分布図……271
第 264 図 土師器の両分布図……272
第 265 図 B-1、B-2 と分類された弥生土器の K-Ca 分布図……272
第 266 図 B-1、B-2 と分類された弥生土器の Rb-Sr 分布図……272
第 267 図 尾崎西遺跡胎土分析資料（軟質韓式系土器）……273
第 268 図 尾崎西遺跡胎土分析資料（土師器）……273
第 269 図 尾崎西遺跡胎土分析資料（B類系弥生土器）……274
第 270 図 尾崎西遺跡胎土分析資料（A類系弥生土器・その他）……275
第 271 図 尾崎西遺跡遺構変遷図 1……277
第 272 図 尾崎西遺跡遺構変遷図 2……278
第 273 図 尾崎西遺跡遺構変遷図 3……279
第 274 図 尾崎西遺跡弥生時代後期後半古相の資料……281
第 275 図 弥生土器胎土蛍光Ｘ線分析データ解析グラフ……283
第 276 図 さぬき市大末遺跡出土の土器棺資料……284
第 277 図 尾崎西遺跡出土陶質土器・韓式系土器の器種分類……287
第 278 図 尾崎西遺跡出土韓式系土器と類例資料との口縁部形態比較……288
第 279 図 尾崎西遺跡出土の古墳時代中期土器組成（須恵器・土師器）……289

表目次

第 1 表　調査体制表……3
第 2 表　A地区縄文遺構一覧表……17
第 3 表　香川県、尾崎西遺跡におけるプラント・オパール分析結果…246
第 4 表　尾崎西遺跡における花粉分析結果……250
第 5 表　尾崎西遺跡における種実同定結果……256
第 6 表　尾崎西遺跡出土陶質土器・初期須恵器の蛍光Ｘ線分析……261
第 7 表　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光Ｘ線分析（1）……268
第 8 表　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光Ｘ線分析（2）……269
第 9 表　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光Ｘ線分析（2）……270
第 10 表 尾崎西遺跡弥生土器の器種別胎土分類集計表……282

写真図版目次

図版 1　A地区空中写真 1
図版 2　A地区空中写真 2
図版 3　A地区空中写真 3
図版 4　A地区空中写真 4
図版 5　A地区空中写真 5
図版 6　B地区空中写真 1
図版 7　B地区空中写真 2
図版 8　C地区空中写真 1
図版 9　C地区空中写真 2
図版 10　C地区空中写真 3
図版 11　C地区空中写真 4
図版 12　A地区土坑 SK04 出土土器
図版 13　A地区包含層出土石器
図版 14　A地区 SR01 出土石器
図版 15　A地区古墳出土の須恵器
図版 16　A地区古墳 ST08 出土土器
図版 17　A地区中世～近世遺物 1
図版 18　A地区中世～近世遺物 2
図版 19　B地区出土縄文土器・弥生土器
図版 20　B地区出土弥生土器
図版 21　B地区出土弥生土器・石器

CDカラー写真図版目次（付属CD収録）

遺跡から高松方面を望む　2
遺跡から鴨部川下流域を望む（南より）　2
遺跡から大川方面を望む　3
C地区微高地から南方の陵遺跡を望む（北より）　3
B地区周辺の空中写真（南より）　4
A地区現地説明会風景　4
埋没した古墳 ST03 と極楽寺山門（北より）　5
B地区微高地（南より）　5
古墳時代の溝跡 SD01（上面より）　5
C地区東側遺構分布（南より）　6
C地区東側微高地（南より）　6
A地区円形周溝墓 ST01（南より）　7
A地区円形周溝墓 ST01（南より）　7
A地区円形周溝墓 ST01 供献土器出土状況（西より）　8
A地区円形周溝墓 ST01 供献土器出土状況 2（西より）　8
A地区円形周溝墓 ST01 周溝跡断面Dライン（東より）　8
A地区円形周溝墓 ST01 周溝跡断面Bライン（北より）　9
A地区円形周溝墓 ST01 周溝跡転落列石出土状況（北より）　9
A地区円形周溝墓 ST01 周溝跡転落列石出土状況（南より）　9
A地区極楽寺東古墳調査前状況（西より）　10
A地区極楽寺東古墳 ST02 周縁検出状況（南より）　10
A地区古墳 ST03 全景（北より）　11
A地区古墳 ST03 石室検出状況（北より）　11
A地区古墳 ST03 石室断面 1（北より）　11
A地区古墳 ST03 石室断面 2（北より）　12
A地区古墳 ST03 石室（南より）　12
A地区古墳 ST03 石室検出状況（西より）　12
A地区古墳 ST03 玄門部（西より）　12
A地区古墳 ST03 石室（西より）　12
A地区古墳 ST03 石室礫床面（西より）　13
A地区古墳 ST03 石室礫床（玄門より）　14
A地区古墳 ST03 石室礫床（西より）　14
A地区古墳 ST03 石室遺物出土状況 1（南より）　14
A地区古墳 ST03 石室遺物出土状況 2（西より）　15
A地区古墳 ST03 石室遺物出土状況 3（北より）　15
A地区古墳 ST03 石室遺物出土状況 4（北より）　15
A地区古墳 ST03 石室掘り形完掘（東より）　16
A地区古墳 ST03 墳丘調査（東より）　16
A地区古墳 ST03 墳丘調査（上面より）　16
A地区古墳 ST03 羨道側壁（北より）　17
A地区古墳 ST03 羨道部断面（東より）　17
A地区古墳 ST03 羨道下部（東より）　17
A地区古墳 ST03 周濠（北より）　18
A地区古墳 ST03 周濠断面（南より）　18
A地区古墳 ST03（東より）　18
A地区古墳 ST03 石室北側掘り形検出状況（東より）　19
A地区古墳 ST03 石室奥壁掘り形検出状況（東より）　19
A地区古墳 ST03 基底石除去後（南より）　19
A地区古墳 ST04 最終礫面（南より）　20
A地区古墳 ST04・SX01（北より）　20
A地区古墳 ST04 最終礫床（南より）　20
A地区古墳 ST04 礫床面（南より）　21
A地区古墳 ST04 奥壁際人骨出土状況（南より）　21
A地区古墳 ST04 礫床面 2（南より）　21
A地区古墳 ST04 石室掘り形（南より）　22
A地区古墳 ST04 礫床面奥壁前（東より）　22
A地区古墳 ST04 周縁遺物出土状況（北より）　22
A地区古墳 ST04 石室（南より）　23
A地区古墳 ST04 遺物出土状況（東より）　23
A地区古墳 ST04（南より）　24
A地区古墳 ST04（西より）　24
A地区古墳 ST08・09 断面Dライン（南より）　24
A地区古墳 ST08（北より）　25
A地区古墳 ST09 断面Bライン（西より）　25
A地区古墳 ST09（南より）　25
A地区古墳 ST10（南より）　26
A地区土坑 SK01（南より）　26
A地区土坑 SK02 断面（南より）　26
A地区土坑 SK03 小穴検出状況（南より）　27
A地区土坑 SK03 断面（南より）　27
A地区土坑 SK04 断面（西より）　27
A地区土坑 SK04（北より）　28
A地区土坑 SK05（北より）　28
A地区土坑 SK06 断面（北より）　28
A地区土坑 SK16 断面（南より）　29
A地区土坑 SK17 断面（南より）　29
A地区土坑 SK19 断面（北より）　29
A地区土壙墓 ST05（西より）　30
A地区土壙墓 ST05 玉類検出状況（西より）　30
A地区土壙墓 ST05 棺床礫検出状況（西より）　30
A地区土壙墓 ST05 礫床検出状況（西より）　31
A地区土壙墓 ST05 断面（西より）　31
A地区土壙墓 ST07 断面（東より）　31
A地区土壙墓群検出状況（西より）　32
A地区東丘陵中世建物群A検出状況（東より）　32
A地区東丘陵建物群A（東より）　32
A地区西丘陵中世建物群B（西より）　33
A地区西丘陵中世建物群C SE06 断面（東より）　33
A地区西丘陵井戸跡 SE04 下部断面（東より）　33
A地区西丘陵井戸跡 SE04 断割断面（東より）　34
A地区西丘陵南壁断面（北より）　34
A地区西丘陵大溝跡 SD04 断面（北より）　34
A地区西丘陵大溝跡 SD04（南より）　35
A地区西丘陵建物 SB09（北より）　35
A地区西丘陵建物 SB09（南より）　35
B地区 SB15（南より）　36
B地区 SD05（北東より）　36
B地区 SD06（北東より）　36
B地区 SR03・SD09・SD10（東より）　37
B地区微高地（東より）　37
B地区 SD3075（南より）　37
B地区東端調査区北壁　38
C地区 SD12 北側土器出土状況　38
C地区 SD12 南側土器出土状況　38
C地区 SD12 遺物出土状況（南より）　39
C地区 SD15 断面（断面不掲載）　39
C地区 SD15 断面（断面掲載）　39
C地区 SD16 断面（断面掲載）　40
C地区 SD21・24 断面（北より）　40
C地区 SD35 断面（南より）　40
C地区 SH02 上層床面　41
C地区 SH02 下層床面 1　41
C地区 SH02 下層床面 2　41
C地区 SH02 下層床面 3　42
C地区 SH02 下層遺物　42
C地区 SH02 南北断面　42
C地区 SH03　43
C地区 SH03・SH06・SH07・SH09　43
C地区 SH02 周辺　43
C地区 SH03 遺物出土状況　44
C地区 SH05（南より）　44
C地区 SH07_1　44
C地区 SH08 周溝跡断面　45
C地区 SH14　45
C地区 SR04W（北より）　45
C地区 SR04 南壁断面（西より）　46
C地区 SR04 弥生中期土器出土状況　46
C地区 SR04 赤褐色陶質土器出土状況　46
C地区 SR04 青銅器片出土状況　47
C地区 SR04 E（北より）　47
C地区 SR05 断面（南より）　47
C地区 SR05 木製品出土状況 1　48

C地区 SR05 木製品出土状況２ 48
C地区 SR05 G群遺物出土状況（北より） 48
C地区 SR06 断面（南より） 49
C地区南壁断面 SX11 付近（西より） 49
C地区古代・中世溝跡群（南より） 49
C地区土坑 SK42（西より） 50
C地区土坑 SK43（北より） 50
C地区土坑 SK46 断面（西より） 50
C地区東調査区（西より） 51
C地区溝跡 SD12 遺物出土状況（南より） 51
C地区溝跡 SD15 断面（東より） 51
C地区溝跡 SD17・18（南より） 52
C地区砂糖製造竈跡 SX13（北より） 52
C地区溝跡 SD19（北より） 52
C地区西側微高地北半全景 53
C地区西側微高地北半 53
C地区西側微高地北半全景_2 53
C地区貯蔵穴 SK37 堅果類出土状況 54
C地区貯蔵穴 SK37（北より） 54
C地区貯蔵穴 SK38（北より） 54
C地区貯蔵穴 SK39（北より） 55
C地区貯蔵穴 SK40（北より） 55
C地区貯蔵穴 SK41（北より） 55
C地区貯蔵穴分布（北より） 56
A地区土坑 SK04 出土遺物 57
A地区土坑 SK03・SK08 出土遺物 57
A地区円形周溝跡墓 ST01 出土遺物 58
A地区円形周溝跡墓 ST01 出土遺物 59
A地区古墳 ST02 出土遺物 60
A地区古墳 ST02 出土遺物 61
A地区古墳 ST03 出土遺物 62
A地区古墳 ST03 出土遺物 63
A地区古墳 ST03 出土遺物 64
A地区古墳 ST03 出土遺物 65
A地区古墳 ST04 出土遺物 66
A地区古墳 ST04 出土遺物 67
A地区古墳・土壙墓出土の玉類 68
A地区土壙墓 ST05 出土遺物 69
A地区土壙墓 ST05 出土遺物 70
A地区落込遺構 SX01・土坑 SK27 出土遺物 70
A地区古墳 ST08 出土遺物 71
A地区溝跡 SD01 出土遺物 71
A地区溝跡 SD01 出土遺物 72
A地区流路跡 SR01 出土遺物 73
A地区流路跡 SR01 出土遺物 74
A地区東丘陵出土遺物 75
A地区溝跡 SD02 出土遺物 76
A地区井戸跡 SE01 出土遺物 76
A地区井戸跡 SE01 出土遺物 77
A地区不明遺構 SX06・07 出土遺物 78
A地区井戸跡 SE02 出土遺物 79
A地区井戸跡 SE02 出土遺物 80
A地区井戸跡 SE03 出土遺物 81
A地区井戸跡 SE03 出土遺物 82
A地区井戸跡 SE04 出土遺物 83
A地区井戸跡 SE04 出土遺物 84
A地区井戸跡 SE04 出土遺物 85
A地区溝跡 SD04 出土遺物 86
A地区溝跡 SD04 出土遺物 87
A地区溝跡 SD04 出土遺物 88
A地区溝跡 SD04 出土遺物 89
A地区溝跡 SD04 出土遺物 90
A地区溝跡 SD04 出土遺物 91
A地区包含層出土遺物 91
A地区包含層等出土遺物 92
A地区包含層等出土遺物 93
A地区包含層等出土遺物 94
B地区溝跡 SD05 出土遺物 95
B地区溝跡 SD05 出土遺物 96
B地区溝跡 SD05 出土遺物 97
B地区溝跡 SD05 出土遺物 98
B地区溝跡 SD06 出土遺物 99
B地区住居跡 SH01 出土遺物 100
B地区溝跡 SD06 出土遺物 101
B地区溝跡 SD06 出土遺物 102
B地区柱穴跡出土遺物 103
B地区土坑 SK33・36 出土遺物 103
B地区溝跡 SD08 出土遺物 103
B地区包含層等出土遺物 104
C地区貯蔵穴 SK37 出土遺物 105
C地区西側微高地出土遺物 105
C地区低地帯 SX11 出土遺物 106
C地区土坑 SK42 出土遺物 106
C地区弥生前期遺構出土遺物 107
C地区住居跡 SH02 出土遺物 108
C地区住居跡 SH02 出土遺物 109
C地区住居跡 SH02 出土遺物 110
C地区住居跡 SH03 出土遺物 110
C地区溝跡 SD12 出土遺物 111
C地区溝跡 SD12 出土遺物 112
C地区住居跡 SH05 出土遺物 113
C地区建物群出土遺物 113
C地区溝跡 SD17・18 出土遺物 114
C地区溝跡 SD33 出土遺物 114
C地区溝跡 SD30 出土遺物 115
C地区溝跡 SD33 出土遺物 115
C地区溝跡 SD22 出土遺物 116
C地区溝跡 SD33 出土遺物 116
C地区溝跡 SD33 出土遺物 117
C地区溝跡 SD33 出土遺物 118
C地区溝跡 SD34 出土遺物 118
C地区溝跡 SD33 出土遺物 119
C地区砂糖製造竈跡 SX13・溝跡 SD45 出土遺物 120
C地区流路跡 SR04 出土遺物 120
C地区流路跡 SR04 出土遺物 121
C地区流路跡 SR04 出土遺物 122
C地区流路跡 SR04 出土遺物 123
C地区流路跡 SR04 出土遺物 124
C地区流路跡 SR04 出土遺物 125
C地区流路跡 SR04 出土遺物 126
C地区流路跡 SR04 出土遺物 127
C地区流路跡 SR04 出土遺物 128
C地区流路跡 SR04 出土遺物 129
C地区流路跡 SR04 出土遺物 130
C地区流路跡 SR04 出土遺物 131
C地区流路跡 SR04 出土遺物 132
C地区流路跡 SR04 出土遺物 133
C地区流路跡 SR04 出土遺物 134
C地区流路跡 SR04 出土遺物 135
C地区流路跡 SR05 出土遺物 A・B群 136
C地区流路跡 SR05 出土遺物 C群 137
C地区流路跡 SR05 出土遺物 D群 137
C地区流路跡 SR05 出土遺物 E群 137
C地区流路跡 SR05 出土遺物 F群 138
C地区流路跡 SR05 出土遺物 G群 138
C地区流路跡 SR05 出土遺物 G群 139
C地区流路跡 SR05 出土遺物 G群 140
C地区流路跡 SR05 出土遺物 G群 141
C地区流路跡 SR05 出土遺物 G群 142
C地区流路跡 SR05 出土遺物 143
C地区流路跡 SR05 出土遺物 144
C地区流路跡 SR05 出土遺物 145
C地区流路跡 SR05 出土遺物 146
C地区流路跡 SR05 出土遺物 147
C地区流路跡 SR05 出土遺物 148
C地区流路跡 SR05 出土遺物 149
C地区流路跡 SR05 出土遺物 150
C地区流路跡 SR05 出土遺物 151
C地区流路跡 SR05 出土遺物 152
C地区流路跡 SR06 出土遺物 153
C地区流路跡 SR06 出土遺物 A群 154
C地区流路跡 SR06 出土遺物 A・B群 155
C地区流路跡 SR06 出土遺物 B群 155
C地区流路跡 SR06 出土遺物 B群 156
C地区流路跡 SR06 出土遺物 C群 156
C地区流路跡 SR06 出土遺物 157
C地区流路跡 SR06 出土遺物 158
C地区流路跡 SR06 出土遺物 159
C地区流路跡 SR06 出土遺物 160
C地区流路跡 SR06 出土遺物 161
C地区流路跡 SR06 出土遺物 162
C地区出土絵画土器 162
C地区流路跡 SR06 出土遺物 163
C地区流路跡 SR06 出土遺物 164
C地区流路跡 SR06 出土遺物 165
C地区流路跡 SR06 出土遺物 166
C地区流路跡 SR06 出土遺物 167
C地区流路跡 SR06 出土遺物 168
C地区流路跡 SR06 出土遺物 169
C地区流路跡 SR07 出土遺物 170
C地区包含層出土遺物 170
C地区包含層出土遺物 171
C地区低地帯 SX11 出土遺物 172
C地区包含層出土遺物 172
C地区流路跡 SR04 出土遺物 173

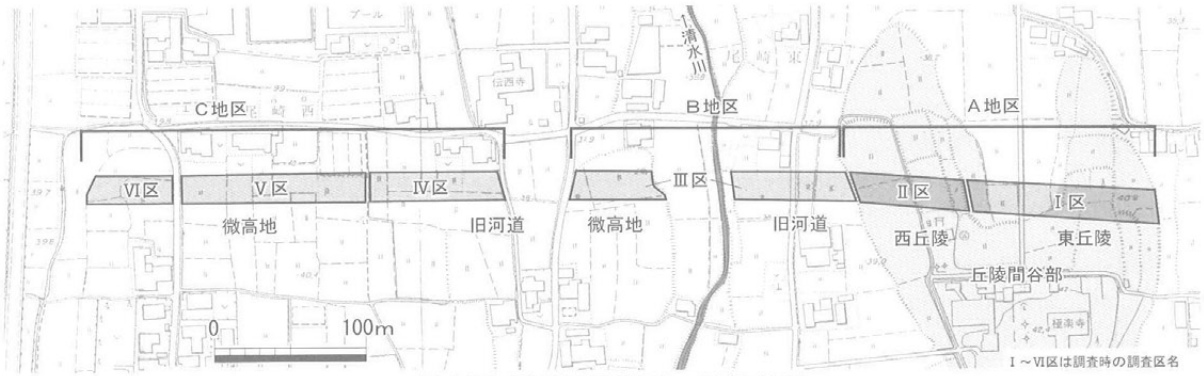
第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

平成３年、香川県教育委員会は、県道高松長尾大内線道路改良工事区域の内、三木・長尾・寒川地区の試掘調査を実施した。その結果、長尾地区の大川郡長尾町東（現在のさぬき市長尾町東）の周辺において、11,000 ㎡の範囲で保護措置の必要な区間が確認され、「尾崎西（おさきにし）遺跡」と命名された。その試掘結果に基づき香川県教育委員会は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下財団センターと略称）及び香川県土木部道路建設課と協議を進め、平成 4年度に財団センターが事前調査を実施することで合意し、平成 4年 4月 1日付けで、香川県教育委員会と財団センターとの間で「埋蔵文化財委託契約書」を締結した。

財団センターは、発掘調査の一部に工事請負方式を採用し、これによる発掘調査掘削工事を平成 4年 4月 19 日に開始し、平成 5年 3月 19 日に終了した。また、発掘調査は平成５年度開催予定の「東四国国体」へ向けた道路整備が急がれていた関係で、東より西にむけて進めた。調査区の設定は、調査時には地形に応じて東からⅠ～Ⅵ区を設定したが、今回の本報告にあたり、旧Ⅰ・Ⅱ区をＡ地区、旧Ⅲ

第１図 尾崎西遺跡の位置



第2図 調査地区割図 (1/5,000)

区をB地区、旧IV・V・VI区をC地区と振り替え、新調査区ごとに章を立てて報告した。

発掘調査の概略は次のとおりである。4月中に事務所設置や仮設道敷設などを行い、5月初頭よりA地区（調査時のI区、第3章参照）から発掘作業を開始した。調査の結果、A地区からは弥生時代後期の円形周溝墓、古墳時代後期の墳墓群、中世寺院極楽寺跡との関連が推測できる建物遺構等を検出した。そして、A地区の調査成果を中心にした現地説明会を 7月25日に開催した。B地区では弥生時代・中世の集落跡、C地区では縄文時代・弥生時代・古墳時代の溝跡・集落跡・河川跡を検出した。そのうち、C地区の河川跡では韓半島との交流関係を示す「韓式系土器及び陶質土器」が出土し、当遺跡の重要性を確認した。なおC地区では、当初の調査範囲の西側にも遺跡が広がる可能性が生じ、県教委は当初調査範囲の西側隣接地について、トレンチ調査を実施して遺跡の内容を確認した。今回の報告では、そのトレンチ調査の成果（旧VI区）も含めた。発掘調査による出土遺物は28リットル入りコンテナで換算して350箱である。

発掘調査にあたっては、航空測量および空中写真撮影を実施した。A地区についてはバルーンによる撮影、B・C地区ではヘリにより写真撮影を実施した。C地区西端のトレンチ調査（旧VI区）を除いて、全範囲で1/50縮尺の平面図、また一部で1/20平面図を図化した。出土した鉄器・木器の一部については保存処理を委託して実施した。さらに、C地区の縄文時代貯蔵穴跡より出土した獣骨の鑑定を、奈良国立文化財研究所（現 奈良文化財研究所）松井章氏に依頼した。

なお、当発掘調査終了後、尾崎西遺跡では長尾町教育委員会（現、さぬき市教育委員会）による隣接地の発掘調査が3箇所（A地区西丘陵北隣接･･･2次調査、B地区微高地北隣接地･･･3次調査、A地区東丘陵北隣接･･･4次調査）で実施されている（森下1995、森下･萬木1996）。また、A地区東丘陵南隣接地では、県教委が当該道路改良事業に伴う進入路工事の立会調査を実施し、「取り付き道路部分」として調査成果の一部を報告している（國木1993）。

第2節 整理作業の経過と経緯

平成15年度末に、財団センターが廃止となり、埋蔵文化財業務は香川県直営の香川県埋蔵文化財センターが引き継いだ。これにより、当遺跡の整理業務も香川県埋蔵文化財センターが実施することとなった。整理期間は平成18年4月より平成19年3月までの12ヶ月間である。専門職員1名と6名の臨時職員が整理業務を担当した。

整理業務に伴い、平成４年度の調査当時に採取した土壌資料について、花粉分析・プラントオパール分析・種実同定を委託して実施した。また、一部の遺物写真撮影を委託した。そのほか、韓式系土器・陶質土器等についての胎土分析を、大阪大谷大学三辻利一氏に依頼した。

整理業務後の出土遺物は、報告書掲載遺物（一覧表掲載を含む）と不掲載遺物に区分し、調査記録類とともに、香川県埋蔵文化財センターにて収蔵している（平成19年3月31日現在)。

第３節　調査体制

発掘調査、整理作業における調査体制は下表のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課				(財) 香川県埋蔵文化財調査センター		香川県埋蔵文化財センター	
平成４年度		平成18年度		平成４年度		平成18年度	
総括	課長　中村 仁	総括	課長　三谷 雄治	総括	所長　松本 豊胤	総括	所長　渡部 明夫
	主幹　菅原 良弘	総務	課長補佐　中村 禎幸		次長　市原 敏則		次長　榊原 正人
	課長補佐　小原 克己		副主幹　河内 一裕	総務	係長　土井 茂樹	総務課	課長　野口 孝一
総務	係長　宮内 憲生 (～5.31)		副主幹　谷　主昌		係長　今田　修		主任　嶋田 和司
	係長　源田 和幸 (6.1～)		主任　林　照代		主任主事 黒田 晃郎 (～5.31)		主任　田中 千晶
	主事　桜木 新士		主任　脇　悠介		主任主事 大西 健司 (6.1～)		課長　廣瀬 常雄
	主事　石川恵美子	文化財	課長補佐　藤好 史郎	調査	文化財専門員 西村 尋文	資料普及課	主任文化財専門員 西村 尋文
埋蔵文化財	係長　藤好 史郎		副主幹　林 文夫		技師　山本 主税		文化財専門員　森下 英治
	主任技師　國木 健司		主任　山下 平重		技師　森下 英治		臨時職員　岡崎江伊子
	技師　北山健一郎		主任　御厨 義道		嘱託　安川 彰司		山地真理子
			文化財専門員 信里 芳紀				市川孝子
			文化財専門員 乗松 真也				三谷和子
							佐々木博子
							長谷川郁子 (～2.28)

第１表 調査体制表

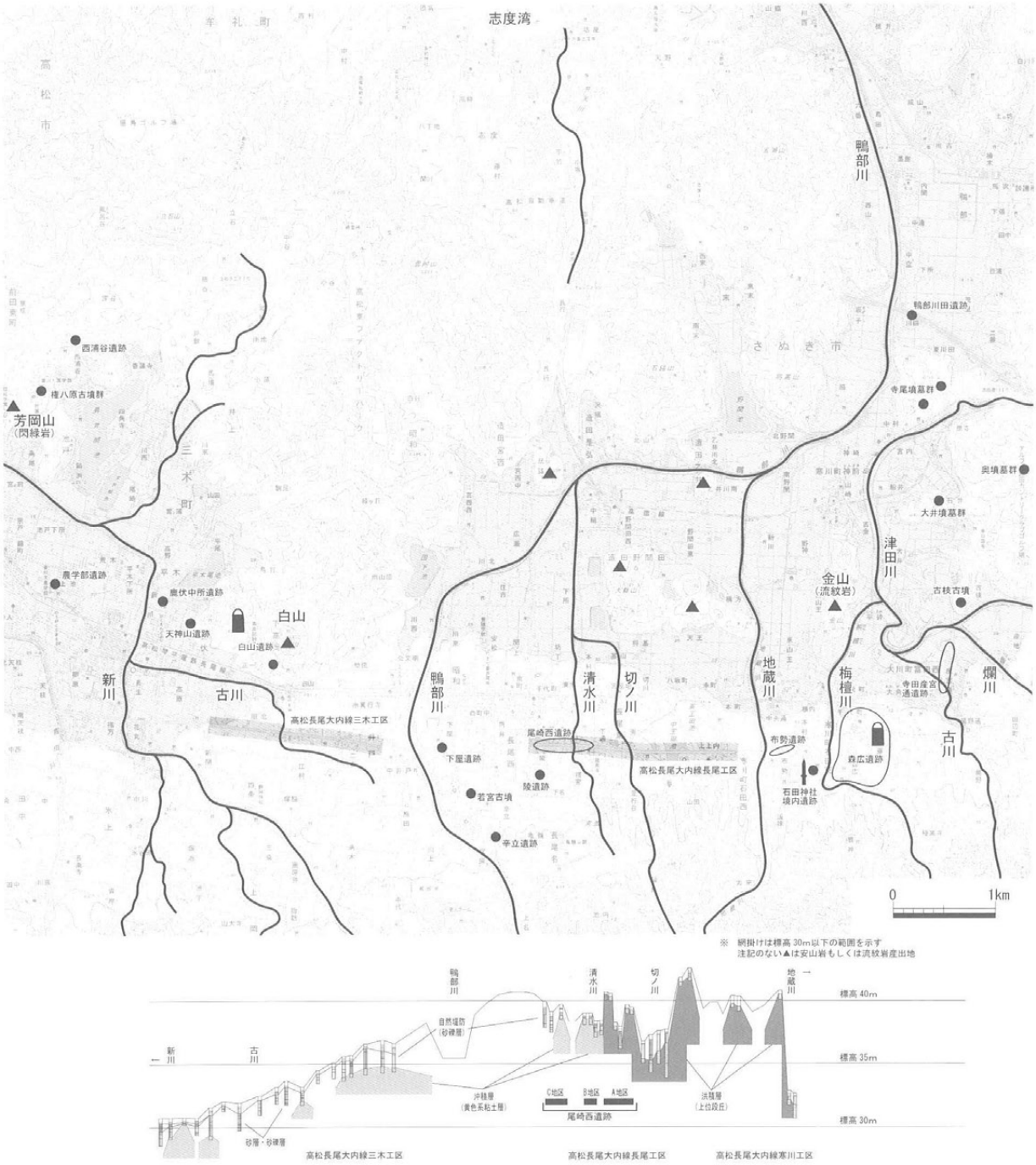
第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

（１）地勢・水系

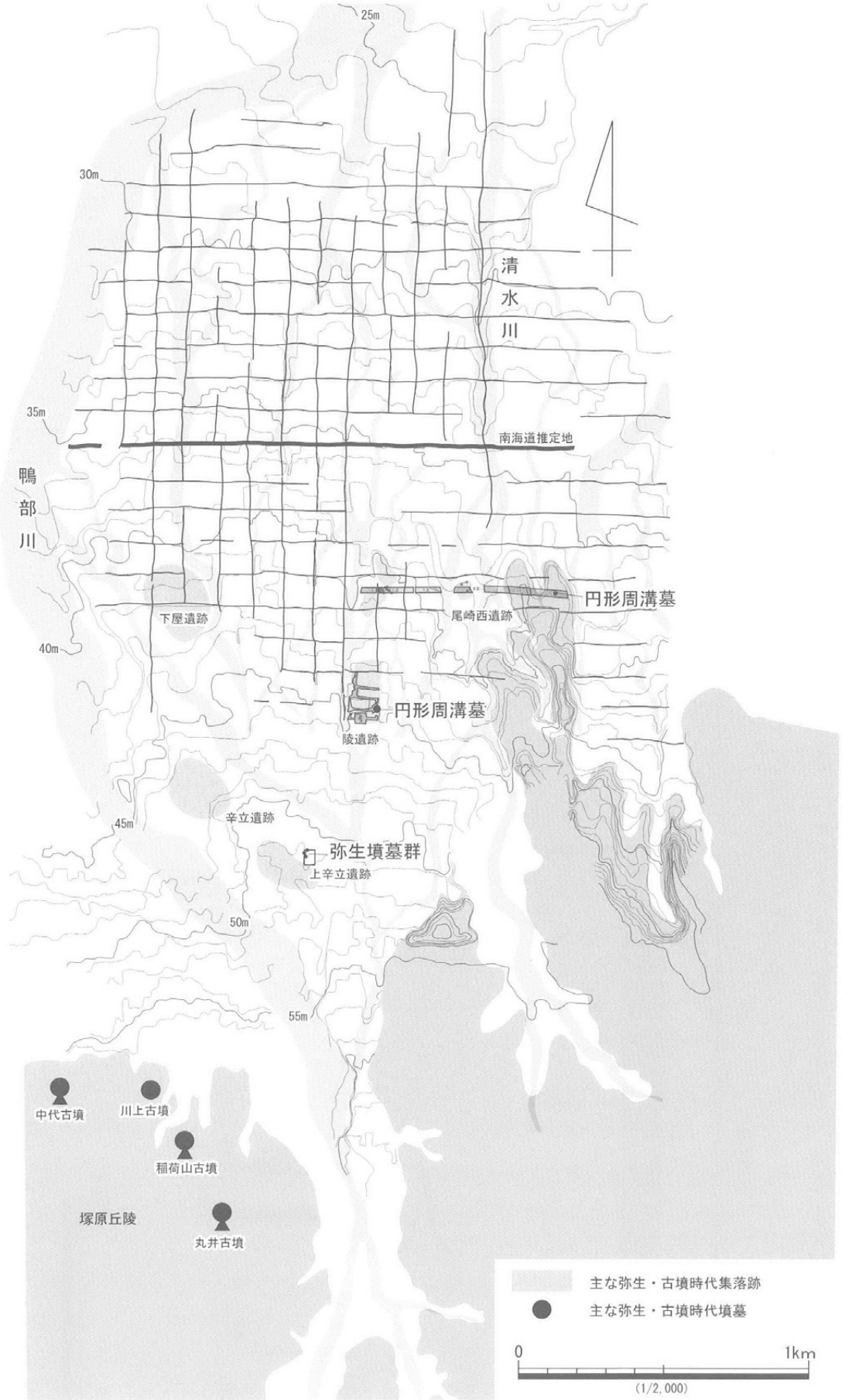
尾崎西遺跡は香川県東部のさぬき市長尾町東（調査時は大川郡長尾町東）に所在する遺跡である。高松平野の東最奥部にあたるが、地形的には南の阿讃山脈と、瀬戸内海にそって連なる北側の山塊で画された盆地的様相の強い平野に立地する。「盆地的」と言っても、当遺跡が立地する平野は、単一の河川水系に属す訳ではない。西から新川、鴨部川、清水川、切ノ川、地蔵川、梅檀川、古川、爛川、津田川が北流、合流し、山塊の狭隘な地峡を介して、瀬戸内海へ注ぐ。このうち、新川は西に方向を変えて西方の高松方面へ流下する。清水川・切ノ川・地蔵川は、鴨部川が流れを大きく東に変えるところで合流し、旧志度町鴨部付近の盆地を介して北方の志度方面へ抜ける。梅檀川・古川・爛川は津田川に合流し、鴨部川に接近した後に流れを大きく東に変え、東方の津田湾に抜ける。つまり、当遺跡周辺の水系は、高松方面への新川、志度方面への鴨部川、津田方面への津田川の３水系に分けることができる（第３図)。

ところで、今回の発掘調査に先立って平成３年度に香川県教育委員会が実施した県道高松長尾大内線建設に伴う試掘調査では、三木工区で延長1.7km、長尾工区で延長2.0ｍの東西に長い範囲で地下の遺構の有無、および表層地質の確認を行っている。第３図下段には、その成果を連続柱状図として示した。また、当遺跡周辺の地形を分かり易くするために、標高30ｍ以下の範囲を網掛けし、低地の分布を示

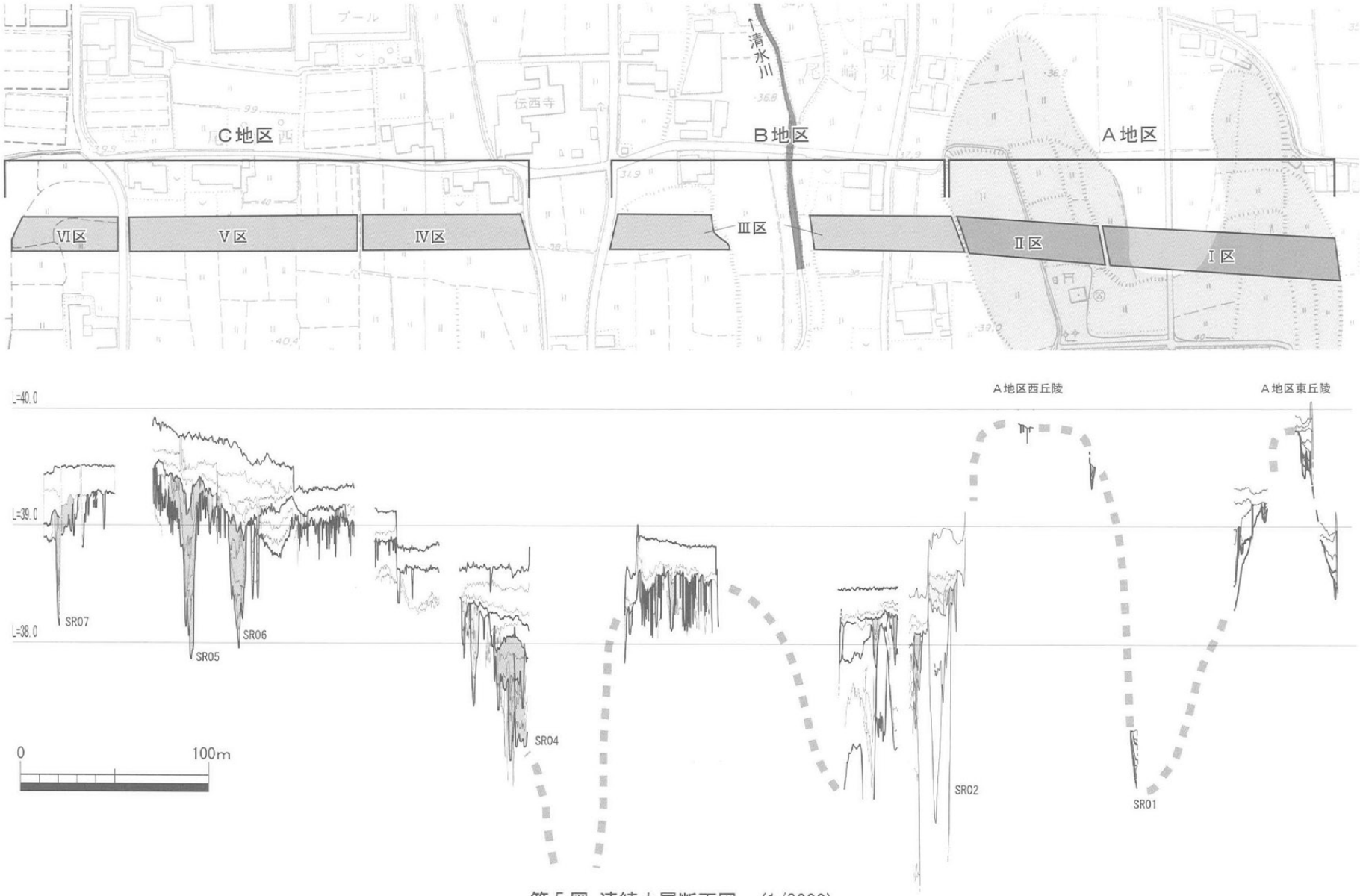


第 3 図 尾崎西遺跡周辺の地形・地質概要図

した。これによれば、新川水系と鴨部川・津田川水系の間には標高 30 mを下回る地域がなく、低地が分断されていることがわかる。試掘調査の柱状図を参照すると、全体としては東から西に向かって地形が降下しつつも、鴨部川周辺では厚い砂・砂礫層の堆積による自然堤防の形成が顕著で、これにより、現水系の境界が形成されたことがわかる。つまり、新川水系と鴨部川水系の境は、新川北岸にある白山と長尾の塚原丘陵との間に埋没した尾根が存在する訳ではなく、鴨部川自体の堆積作用によって形成されている。したがって、鴨部川の沖積作用が進む過程で、高松方面へ流下した河川が途絶えたことが想定できる。その流路痕跡が現在の新川支流である古川に認められる。鴨部川の河川域の固定化がどの段



第4図 尾崎西遺跡周辺の微地形及び条里型地割分布図



第 5 図 連続土層断面図 (1/3000)

階で生じたか、考古学的な材料は試掘調査では十分に得られていないが、砂礫層より若干の弥生土器や石器片が採集されており、人々の営み以前に河川域が固定化されたものではなく、弥生・古墳時代にはまだ現在のような地形的な水系区分が生じていなかった可能性が高い。鴨部川・津田川の最接近点付近でも、同様に安定した河川は形成されていなかったものと考えられる。なお、鴨部川から旧古川が分岐していたことが予測される地点には、延喜式内社「和爾賀波神社」が存在し、室町期には少なくとも当該場所に立地したことが知られている。中世以前に河川の固定化が行われた可能性を示す材料である。当遺跡は、その鴨部川と古川の分岐点から東に約 1.5km、鴨部川支流の清水川東西両岸にまたがって立地する。

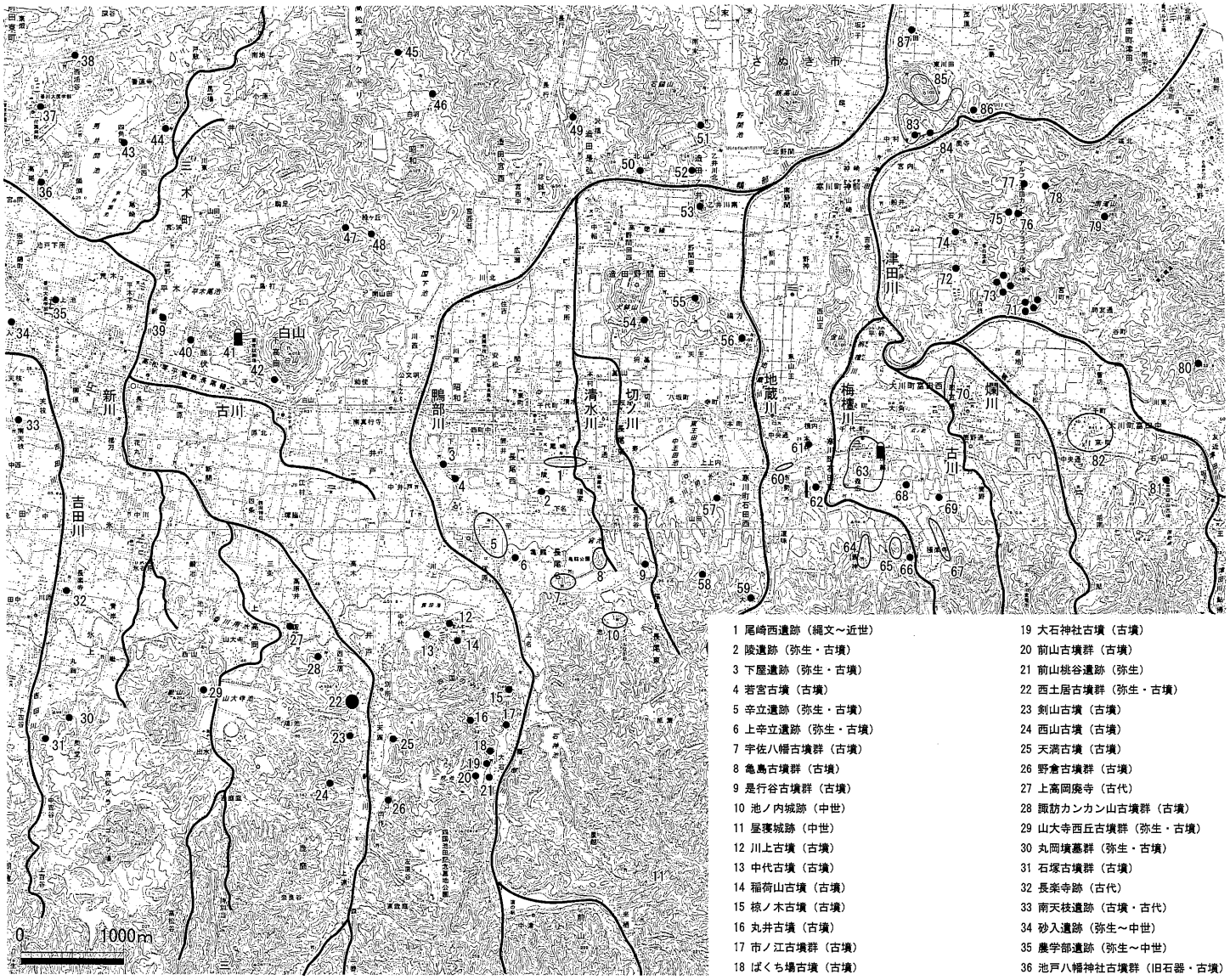
（2）地質

周辺山塊の基盤は大部分が領家帯の花崗岩からなる。花崗岩は第3図の範囲では多くが花崗閃緑岩で、鴨部川西岸の山塊に黒雲母花崗岩がみられる。徳島県境に近い香東川最上流域には中生代白亜紀に形成された和泉砂岩が分布するが、当遺跡周辺の鴨部川、新川水系の最上流域にはほとんど和泉層群の分布はみられない。今回の整理業務に関連して、鴨部川河床で採集した 100 点の拳大の自然石を観察しても、花崗岩 70 点に対して砂岩は 6 点認められたにすぎず、当該地域の主要構成礫が花崗岩を主体とすることを示している。また、その他の石材として、脈岩（半深成岩）が 21 点認められた。これは灰色～灰緑色の石基中に大形の斑晶が目立つ岩石で、花崗岩中に貫入した火山岩の一種である。この岩石は、県内至る所に分布し、磨製石斧や叩き石の石材として用いられることがある。東かがわ市白鳥にみられる天然記念物ランプロファイヤー岩脈はこのような貫入岩の一種である。なお、徳島県吉野川流域の中央構造線沿いに産出する「みかぶ緑色岩」と呼ばれる玄武岩系岩石に、この脈岩によく似たものがあり、徳島県下では石斧石材として使用されている。これらは変成作用による比重に違いがあり、石器石材産地の推定において重要な視点となりつつある。

このほか、第3図西端の芳岡山では閃緑岩が分布する。閃緑岩は角閃石を多く含む風化土壌を形成する岩石である。高松平野西部では峰山丘陵南端や津内山に分布する風化土壌が、茶褐色を呈する弥生土器の粘土素材として使用されたことが推定されており（奥田 1995）、芳岡山周辺の風化土壌も、同様な検討材料になり得る。

当該地域の南側山塊が頂上部まで含めて花崗岩による岩脈であるのに対して、瀬戸内海との境にある北側の大小の山塊のうち、第3図に示した独立丘陵山頂付近には安山岩などの火山岩類が分布する。これらは約 1,500 万年前の瀬戸内火山活動による溶岩もしくは火山砕屑岩で、当遺跡から北東へ約 3km にある金山（サヌカイト原産地の坂出市金山とは異なる）には流紋岩が分布する。これは弥生時代の磨製石庖丁石材、あるいは近世の陶磁器素地粘土として使用された可能性が指摘されている。

当遺跡の東側の遺構面は、拳大のクサリ礫を多く含む橙色～黄色系粘質土で形成されており、これらは洪積層（上位段丘層）と考えられる。当遺跡から南東方向へはこのような段丘層が分布し、細かな尾根状の低丘陵を形成する。同様に、新川を南に望む三木町の標高 20 ～ 30 mの範囲も上位段丘層が発達する。



1 尾崎西遺跡（縄文～近世）
2 陵遺跡（弥生・古墳）
3 下屋遺跡（弥生・古墳）
4 若宮古墳（古墳）
5 辛立遺跡（弥生・古墳）
6 上辛立遺跡（弥生・古墳）
7 宇佐八幡古墳群（古墳）
8 亀島古墳群（古墳）
9 是行谷古墳群（古墳）
10 池ノ内城跡（中世）
11 屋寝城跡（中世）
12 川上古墳（古墳）
13 中代古墳（古墳）
14 稲荷山古墳（古墳）
15 椋ノ木古墳（古墳）
16 丸井古墳（古墳）
17 市ノ江古墳群（古墳）
18 ばくち場古墳（古墳）
19 大石神社古墳（古墳）
20 前山古墳群（古墳）
21 前山桃谷遺跡（弥生）
22 西土居古墳群（弥生・古墳）
23 剣山古墳（古墳）
24 西山古墳（古墳）
25 天満古墳（古墳）
26 野倉古墳群（古墳）
27 上高岡廃寺（古代）
28 諏訪カンカン山古墳群（古墳）
29 山大寺西丘古墳群（弥生・古墳）
30 丸岡墳墓群（弥生・古墳）
31 石塚古墳群（古墳）
32 長楽寺跡（古代）
33 南天枝遺跡（古墳・古代）
34 砂入遺跡（弥生～中世）
35 農学部遺跡（弥生～中世）
36 池戸八幡神社古墳群（旧石器・古墳）
41 白山銅鐸出土地（弥生）
42 白山遺跡（弥生）
43 四角寺古墳群（旧石器・古墳）
44 始覚寺跡（古代）
45 白羽池ノ内古墳（古墳）
46 白羽ハリノキ古墳（古墳）
47 陰浦古墳群（古墳）
48 緑ヶ丘古墳群（古墳）
49 沢福寺山古墳（古墳）
50 願興寺跡（古代）
51 乙井古墳（古墳）
52 西山田古墳（古墳）
53 諏訪山古墳（古墳）
54 将基山古墳（古墳）
55 野間田東古墳群（古墳）
56 天王山古墳群（古墳）
57 赤山古墳（古墳）
58 山田古墳（古墳）
59 大末古墳群（弥生・古墳）
60 布勢遺跡（弥生・古墳）
61 本村横内遺跡（古代）
62 石田神社境内古墳群・銅剣出土地（弥生・古墳）
63 森広遺跡・石田高校校庭内遺跡（縄文～古代）
64 蓑神古墳群・蓑神遺跡（弥生・古墳）
65 蓑神東古墳群（古墳）
66 極楽寺墳墓群・極楽寺遺跡（弥生・古墳）
67 極楽寺古墳群（古墳）
68 極楽寺跡（古代）
69 中尾古墳（古墳）
70 寺田産宮通遺跡（弥生～古代）
71 古枝古墳（古墳）
72 大井墳墓群（弥生・古墳）
73 古枝墳墓群（弥生・古墳）
74 石井廃寺（古代）
75 奥10号墳（弥生）
76 奥11号墳（弥生）
77 奥3号墳（古墳）
78 奥14号墳（古墳）
79 雨滝城跡（中世）
80 川東古墳（古墳）
81 富田茶臼山古墳（古墳）
82 千町遺跡（古墳～古代）
83 寺尾墳墓群（弥生・古墳）
84 八坂神社古墳（古墳）
85 ズバ山遺跡（弥生）
86 ズバ山東遺跡（弥生）
87 鴨部川田遺跡（弥生）

第6図 尾崎西遺跡周辺遺跡分布図

第２節　歴史的環境

（１）旧石器時代

当遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は未だ知られていない。ただし、当遺跡周辺には南から北に八手状に突き出た上位段丘面が広がっており、同様の地形を呈する三木町池戸丘陵では男井間池や池戸八幡神社古墳群（第６図の36、以下同じ）周辺からナイフ形石器などが採集されている。したがって今後同様の段丘面で、新たな遺跡が確認される可能性がある。なお、阿讃山地を南に越えた、徳島県吉野川北岸地域ではサヌカイトを主要石材とする遺跡が多数知られている。当遺跡の近隣を含めて、今後香川県東部に旧石器時代の遺跡が見つかるかどうかは、山地を越える人々の遊動ルートの解明に関わる。

（２）縄文時代

縄文時代の周辺の遺跡では主に河川跡がみつかっている。さぬき市森広遺跡（63）で縄文後期の河川跡、東かがわ市原間遺跡では、縄文時代前期の河川跡が知られる。今回の調査で出土した尾崎西遺跡の押型文土器片は、これらの中でも特に古い縄文早期のものである。

三木町西浦谷遺跡（38）、尾端遺跡、高松市小山南谷遺跡では、縄文時代と目される落とし穴が見つかっている。このうち小山南谷遺跡では縄文後期の土器が伴う（片桐孝編 2006）。今回の調査でみつかった落とし穴遺構は、縄文時代晩期後半に所属するものを含んでおり、これらのなかでは新しい時期に位置づけられよう。また、堅果類貯蔵穴跡は高松市本郷遺跡（北山 2005）や三豊市須田中尾瀬遺跡などで検出されている。いずれも河川跡や低地帯に面する緩傾斜地に立地する。

縄文時代晩期後半の突帯文期には、さぬき市石仏遺跡（81）や森広遺跡（63）、八丁地遺跡などで河川跡や遺物包含層が知られている。

（３）弥生時代

前期の遺跡　弥生時代前期の遺跡は、その前半期ではあまり多くはない。今回報告する尾崎西遺跡では、Ｂ地区の溝跡やＣ地区の河川跡で前半期にさかのぼる土器片が出土している。森広遺跡（63）のベース層で出土した前期土器は、頸部が内傾し口縁部が短く屈曲して外反する突帯文系壺、あるいは縦方向の多条沈線を施文した突帯文系深鉢の口頸部片、口縁部下に削出突帯をもつ壺など、前期前半に位置づけられる土器（真鍋 1988）である。

一方、前半でも新相に位置づけられる土器は、環壕集落跡として知られるさぬき市志度の鴨部川田遺跡（87）や三木町農学部遺跡（35）などで出土する。これらの遺跡は、前期後半期に至って規模が拡大する。

鴨部川田遺跡では前期後半期を中心に、石器や木器の未製品が多数出土する。石庖丁は流紋岩・安山岩・サヌカイトを石材として、打製・磨製ともに製作する。また木製品は未製品の多くが農具で、出土する材もカシ属が最も多い。一方で、伐採用石斧は120本を越える量が出土しているが、未製品はほとんどない。このように、素材を多方面から入手し、農業用の収穫具や耕具を生産する活動が顕著で、比較的広域に素材や生産物を需給する関係が前期後半に成立していた可能性が高い。

新川沿いの自然堤防上には、農学部遺跡のほかに古川堤防で昭和35年に出土したとされる土器が知られ、前節のとおり鴨部川から新川への河川流入と、その周辺での人々の営みが想定できる。

中期から後期の遺跡　中期の集落遺跡は三木町鹿伏・中所遺跡（39）で知られるが、低地の集落域を調査した事例は少ない。むしろ、丘陵地で集落跡が見つかっており、当遺跡から南約3kmの鴨部川に面

した丘陵上に立地する前山桃山遺跡（21）では、中期中葉から後半にかけての竪穴住居跡数棟が発掘調査により確認されている（長尾町史編集委員会 1986）。同様に、極楽寺墳墓群（66）では弥生時代終末期から古墳時代前期の墳墓遺構の下層で中期後半の竪穴住居跡が出土している（片桐節 1998）。三木町白山遺跡（42）では、中期末から後期前半の竪穴住居跡が見つかっており、近接地（41）では明治初年に扁平鈕式銅鐸が１口出土している。また、鎌田郷土博物館に収蔵されている磨製石剣１点（松本・岩橋 1883）がこの周辺で出土したものとされる。このように、丘陵部を中心に中期の集落が展開し、それに対応するように青銅器や石剣などの祭器が伴う。

後期には遺跡数が急速に増加する。なかでも森広遺跡（63）とその周辺では、直径約 2km 円内でこの時期の遺構が各所でみられる。森広遺跡では小河川域を挟む複数の微高地上に同時期の遺構が存在しており、全体として一つの遺跡と考えて良いものといえる。その中には、扁平鈕式銅鐸７片が出土した加藤遺跡、巴形銅器８点が出土した森広天神遺跡（松本・岩橋 1883）、平形銅剣３口が出土した石田神社境内遺跡（松本・岩橋 1883）、大形のヒスイ製勾玉が出土した布勢遺跡、ガラス玉、小形仿製鏡、大形の袋状鉄斧などが出土した寺田産宮通遺跡（70）などがある。また、寺田大角遺跡では後期後半の竪穴住居跡が確認されている。このように森広遺跡周辺は、遺跡の集中度と青銅器・玉類など貴重品の保有量からみて、県東部でも突出した弥生遺跡中核域といえる。この中で、寺田産宮通遺跡の産宮通地区では木器未製品が多数出土し、石田高校校庭内遺跡の平成 17 年度調査地区では土器焼成時の失敗品がまとまって出土、森広遺跡平成９年度調査地区では製塩土器が集中するなど、エリアごとに生産道具類や生産物が異なり、機能分化が生じていることも指摘されている（森下英 2007）。

遺跡集中箇所はほかにも指摘することができる。当遺跡が含まれる鴨部川東岸域（陵遺跡、辛立遺跡、石聖天遺跡）、弥生前期から継続する鹿伏・中所遺跡を中心とする新川中流域（農学部遺跡、砂入遺跡、白山遺跡など）など、直径２～ 3km の範囲に遺跡が集中して分布し、遺跡群を形成している。

弥生期の墳墓　当遺跡の調査後、周辺では弥生時代の墳墓資料が増加している。当遺跡Ｃ地区の南に近接する陵遺跡（2）では、当遺跡Ａ地区で検出した円形周溝墓（ST01）と同様に列石を巡らせる円形周溝墓（ST02）が確認された。また、南西の上辛立遺跡（6）では土器棺墓跡を含む８基の墳墓跡が確認された。竪穴式石室、箱式石棺、石囲い木棺など埋葬形式は多彩である。これらはいずれも弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置づけられる。

このほか雨滝山丘陵周辺では奥 10 号墓（75）、11 号墓（76）、大井墳墓群（72）、古枝墳墓群（73）などが古くから知られる弥生墳墓である。森広遺跡では円形周溝墓が２基存在し、居住域に隣接して墳墓を作るパターンは陵遺跡や上辛立遺跡に共通する。これに近い丘陵には木棺墓や竪穴式石室等からなる極楽寺墳墓群（66）がある。丘陵上に立地する八坂墳墓群（83）は、尾根筋に直交する７基の木棺墓が整列して分布する。

新川上流域では、列石をもつ方形台状墓、西土居遺跡 16 号墓（22）が知られる。主体部は木棺墓と推定され、内部から勾玉３点、ガラス小玉約 140 点、列石前面より弥生後期後半の土器片が出土している。狭隘な小谷に面する尾根斜面に立地し、同時期の竪穴住居跡に近く、また古墳時代後期の群集墳の分布と重複するが、列石は弥生墳丘墓に通有の形態で、現段階では玉類を中心とした副葬品をもつ希少な弥生墓と考えられる。一方、別丘陵には尾根上約 120 ｍの範囲に３群に区分できる約 30 基の土壙墓群がある。そのうち、西土居 17 号墓は尾根に直交する溝跡と平行する溝跡が組み合い、区画墓の形態をもつ。同 18 号墓は、尾根に直交する溝跡を伴う。主体部はいずれも複数の土壙墓が想定される。尾根上に展

開する土壙墓群は、ほかにも新川北岸の天神山遺跡に見ることができる。山大寺池西丘3号墓（29）は土壙墓3基を埋葬主体とする台状墓で、調査時期が古く詳細が明確でない丸岡墳墓群（30）は、丘陵上で土壙墓と区画墓が伴うものと考えられる。これらもやはり、弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃と考えられる。新川中流域では、久米池丘陵や権八原遺跡（37）に同様の墳墓が知られている。

このように当遺跡周辺の弥生墓は、いずれも後期後半から古墳時代初頭ごろに位置づけられるが、立地では集落域の近隣に立地する区画墓、丘陵上に立地する区画墓を含む土壙墓群、丘陵上に立地する区画墓等の多様性がある。

一方で、当遺跡南の塚原丘陵高所に立地する全長30ｍの丸井古墳（16）は、主体部に排水溝を備えた竪穴式石室2基、副葬品に画文帯神獣鏡や大形鉄鏃を有し、讃岐の前期古墳に類例の多い広口壺を墳丘に供献するなど、平地の墳墓と比較して卓越した内容をもつ。主体部の構造は、奥10号・11号と同様に上開きの石積みをもち、列石は尾崎西ST01や陵ST02や西土居16号墓などに共通するなど、各所に弥生墓の伝統を認めることはできるものの、これらと比較すると副葬品の優位性が目立つ。古墳時代初頭に位置づけられる古墳と言える。

（4）古墳時代

古墳時代前期の集落遺跡は、辛立遺跡（5）、鹿伏・中所遺跡（39）、当尾崎西遺跡などで知られるが、このうち、鹿伏・中所遺跡では古墳時代前期後半に至ると集落は廃絶する。この傾向は当遺跡Ｃ地区の遺構変遷にも窺うことができ、古墳前期および中期の土器が出土している辛立遺跡（市畑遺跡、成就坊遺跡含む）においても同様かもしれない。

弥生時代後期から継続する上述の平地の墳墓については、前期前半ごろまで墳墓の築造が行われている可能性があるが、前期後半期までは継続しないものと考えられる。一方で、丘陵上には上述の丸井古墳のように、全長30ｍクラスの前方後円墳が多数分布する。まず、当遺跡南側の塚原丘陵では、中代古墳（13）、稲荷山古墳（14）が築造される。雨滝山丘陵では奥3号墳（77）、古枝古墳（71）、川東古墳（80）、奥13・14号墳（78）が知られる。寺尾丘陵では前期から中期にかけての墳墓群（83）が知られる。このほか、当遺跡南東の是行谷古墳群（67）では後漢鏡の位至三公鏡、三角縁神獣鏡がいずれも鏡片の状態で出土している。出土時の詳細な記録がないので時期決定が困難であるが、前期の墳墓が所在した可能性は高い。

中期の集落遺跡は三木町砂入遺跡（34）、高松市六条・上所遺跡で中期の出土遺物が多く、当該期集落の一角にあたるものと考えられる。このうち、六条・上所遺跡では陶質土器や軟質韓式系土器が出土し、砂入遺跡でも上面に切り込みをもつ土師器の甑把手片や初期須恵器など、同様の時期を示す資料が出土している。韓式系土器はこのほか、東かがわ市成重遺跡でも出土しており、これを含めて、県東部では古墳時代中期の集落遺跡が多い。

中期古墳は四国最大の前方後円墳である富田茶臼山古墳（81）が当遺跡東方6kmに所在する。全長138ｍで周濠をもち、前方部側に規格的に陪塚を設けるなど畿内的色彩の強い古墳である。出土した埴輪から中期前半に位置づけられる。一方、塚原丘陵の川上古墳（12）は直径22ｍの円墳で、埋葬主体部に上開きの竪穴式石室をもち、甲冑や鉄製武器類、そのほか多数の初期須恵器が出土した。須恵器からみて5世紀中葉ごろに位置づけられる（花谷編 1991）。石室床面には木槨を反映する礫配置があり、韓半島墳墓の影響も想定できる。このほか、埋葬主体部の発掘調査が行われた事例は少ないが、近隣の大石神社古墳（19）や森広遺跡に近い石田神社境内古墳群（62）、造田宮西周辺では初期須恵器が出土

しており（松本敏 1980）、当該時期の古墳が存在するものと考えられる。

後期に至ると、周辺では陵遺跡（2）や下屋遺跡（3）で竈付き竪穴住居跡が検出されている。また、7世紀には、森広遺跡（63）、布勢遺跡（60）、寺田産宮通遺跡（70）、南天枝遺跡（33）などで掘立柱建物跡などが検出されている。これらは建物方位を正方位に設定するものが多い。

古墳は各所で横穴式石室を埋葬主体とする群集墳が展開する。当遺跡に近い宇佐八幡古墳群（7）、亀島古墳群（8）では、合計約50基の古墳が分布する。塚原丘陵では、前山古墳群（20）、市ノ江古墳群（17）、椋ノ木古墳（15）、大石北谷古墳などがある。発掘調査が行われた前山1号墳は鉄釘を伴い、7世紀末～8世紀前半の須恵器を副葬する。北谷古墳でも7世紀後半の須恵器が出土する。総じて新しい時期まで古墳築造、追葬が行われている。同様に、長尾北部の緑ヶ丘古墳群（48）、陰浦古墳群（47）においても7世紀後半～8世紀前半の須恵器の出土が知られる。

（5）古代

当遺跡周辺は古代の寒川郡に属し『和名抄』による長尾郷に含まれる。文献史料によれば、寒川郡出身の讃岐公広直、永直、永成が明法博士に任じられるなど、9世紀前半から10世紀にかけて中央で活躍した法律関係の官人が多い。

周辺にはほぼ正方位の条里型地割が広く分布する。条里地割を復元した金田章裕によると、高松平野条里地割にみられる余剰帯から推定される南海道推定線を東に延伸し、三木町白山付近に屈曲点を設けると、旧長尾街道付近が古代南海道に推定できるという（金田 1988）。つまり、当遺跡から北0.45 kmの東西ラインが古代南海道となる。集落跡は調査例は少ないが、三木町尾端遺跡では区画溝を伴う8世紀の建物跡群が出土しており、丘陵裾の小水路跡では木樋が出土している。

白鳳期の寺院として、極楽寺跡、石井廃寺（さぬき市寒川町）、願興寺跡（同市長尾町）、上高岡廃寺、長楽寺跡、始覚寺跡（木田郡三木町）が分布する。このうち、極楽寺跡は、昭和44年の発掘調査により、一町半を寺域とする四天王寺式伽藍配置の寺院であることが推定されている。瑞花双鳳八花鏡、鉄製錫杖、小金銅仏などが出土している。極楽寺は、後に志度鴨部に移転し、その後当遺跡に隣接する現在の宝蔵院極楽寺に移ったとされる（宝蔵院古暦記）。

願興寺跡では、藤原宮式軒平瓦、重弧文軒平瓦などが出土している。また、現在の願興寺には、国重要文化財に指定されている奈良時代製作とされる乾漆造聖観音像がある。

（6）中世

南北朝期、宝蔵院古暦記によると極楽寺が志度鴨部から、当調査地に隣接する現在の極楽寺に移転したことが記されている。また讃岐守護を代々収めた細川氏との結びつきが強く、14世紀後半には多数の寄進を受けた記録がある。

標高448 mの昼寝城跡の発掘調査では、山頂部の削平地の礎石群、その下方の堀切、土橋、土塁などが確認されている。出土遺物には、青磁、白磁などとともに刀装具などの金属器が出土している。この地域の在地領主である寒川氏の本城とされる。

第３章　Ａ地区調査

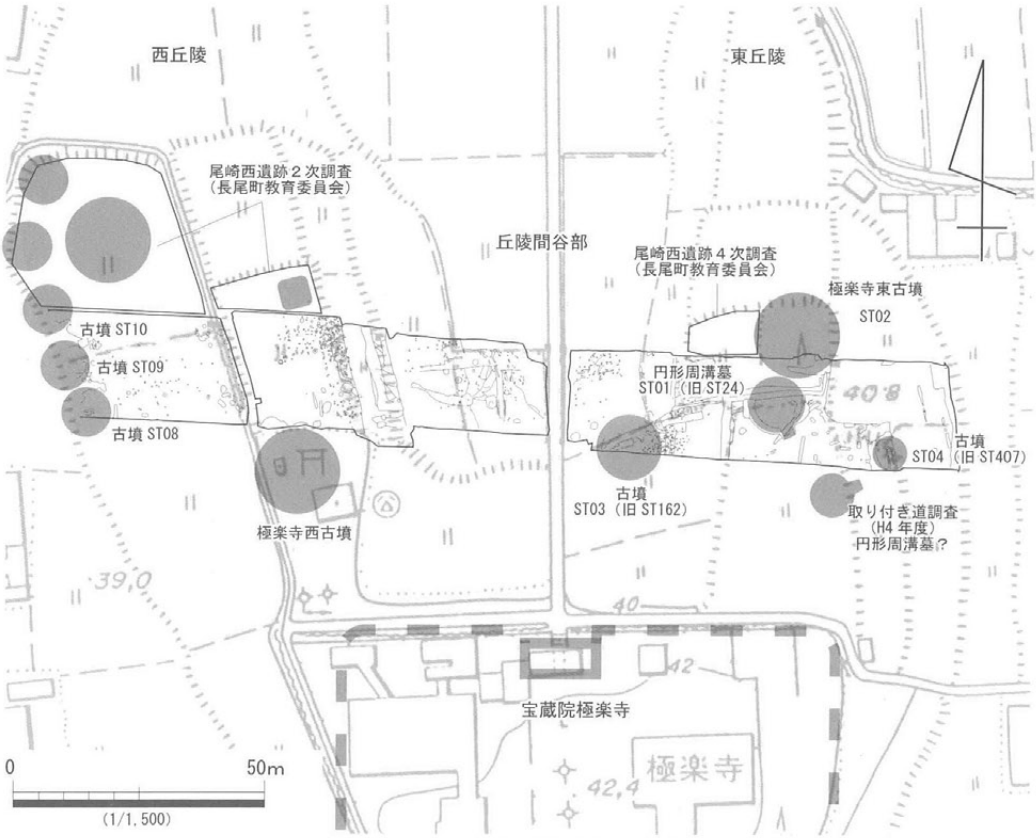
第１節　概要

尾崎西遺跡Ａ地区は、阿讃山地から北に八手状に伸びる丘陵の末端部に位置し、東丘陵と西丘陵に分かれる。東丘陵では、調査着手前より周知の遺跡である「極楽寺東古墳」が所在しており、西丘陵には「極楽寺西古墳」が所在していた。今回の発掘調査範囲は、極楽寺東古墳の南側近接地と、極楽寺西古墳の北側隣接地が対象に含まれており、事前に極楽寺東古墳の墳丘測量を実施して調査に臨んだ。

発掘調査の結果、極楽寺東古墳はその南側の周濠の一部を検出し、須恵器等が出土した。一方、極楽寺西古墳は調査範囲内に関連する遺構が見られず、古墳の検討材料は得られなかった。しかし、新たに削平された古墳を東丘陵で２基、西丘陵で３基検出し、これにより極楽寺古墳群が大小の古墳で構成される群集墳であることが明らかとなった。

また、東丘陵では弥生時代後期後半に所属する突出部付きの円形周溝墓を検出した。これは、昭和63年に高松市林・坊城遺跡で、平成３年に同市空港跡地遺跡で検出された方形周溝墓・円形周溝墓と同様、集落域に近接する小規模な区画墓の存在を確実視するものとして注目された。調査後、尾崎西遺跡周辺では、陵遺跡・森広遺跡・上辛立遺跡などで同様の弥生墓が次々と確認されている。

そのほか、縄文時代晩期後半の土坑を24基検出した。これらは東西丘陵に一定の間隔で分布しており、比較的短期間の構築が想定される。そのうち１基の埋土から縄文時代晩期後半の突帯文土器が出土した。これらは遺構の形状・分布から、「落とし穴遺構」と考えられる。同様の遺構から土器が出土することは稀れで、当該資料は貴重な資料となる。さらに、両丘陵間の谷筋では、弥生時代中期ごろの遺物包含



第７図　Ａ地区主要遺構分布状況

層（SR01）を確認した。今回の調査対象地では当該期の遺構は見られなかったが、周辺に居住遺構が埋没している可能性を示した。

東西丘陵間の谷筋は、調査対象地のすぐ南で収束する。その収束点に南北朝時代に現在の場所に建築されたとされる「極楽寺」が現存する。寺伝の『宝蔵院古暦記』によれば、同寺はさぬき市寒川町石田で白鳳期に創建し、平安期に志度の鴨部に移転した後、現在の場所に安定したという。今回の調査では、14 世紀後半以降の遺構が多数見られた。少なからず、極楽寺が現在の場所に創建した時期を考古学的に推定する資料が得られたものと考える。

第２節　土層序

Ａ地区の土層は、主に東丘陵の東西傾斜面を中心に記録している。西丘陵は東丘陵に比べて削平が著しく、多くは耕作土を除去すると段丘風化礫層の遺構面が露出していた。したがって、旧地形を反映する一部分のみ記録した。ここでは、主に東丘陵の断面図を中心に提示し、西丘陵は断面概略図を作成するにとどめた。

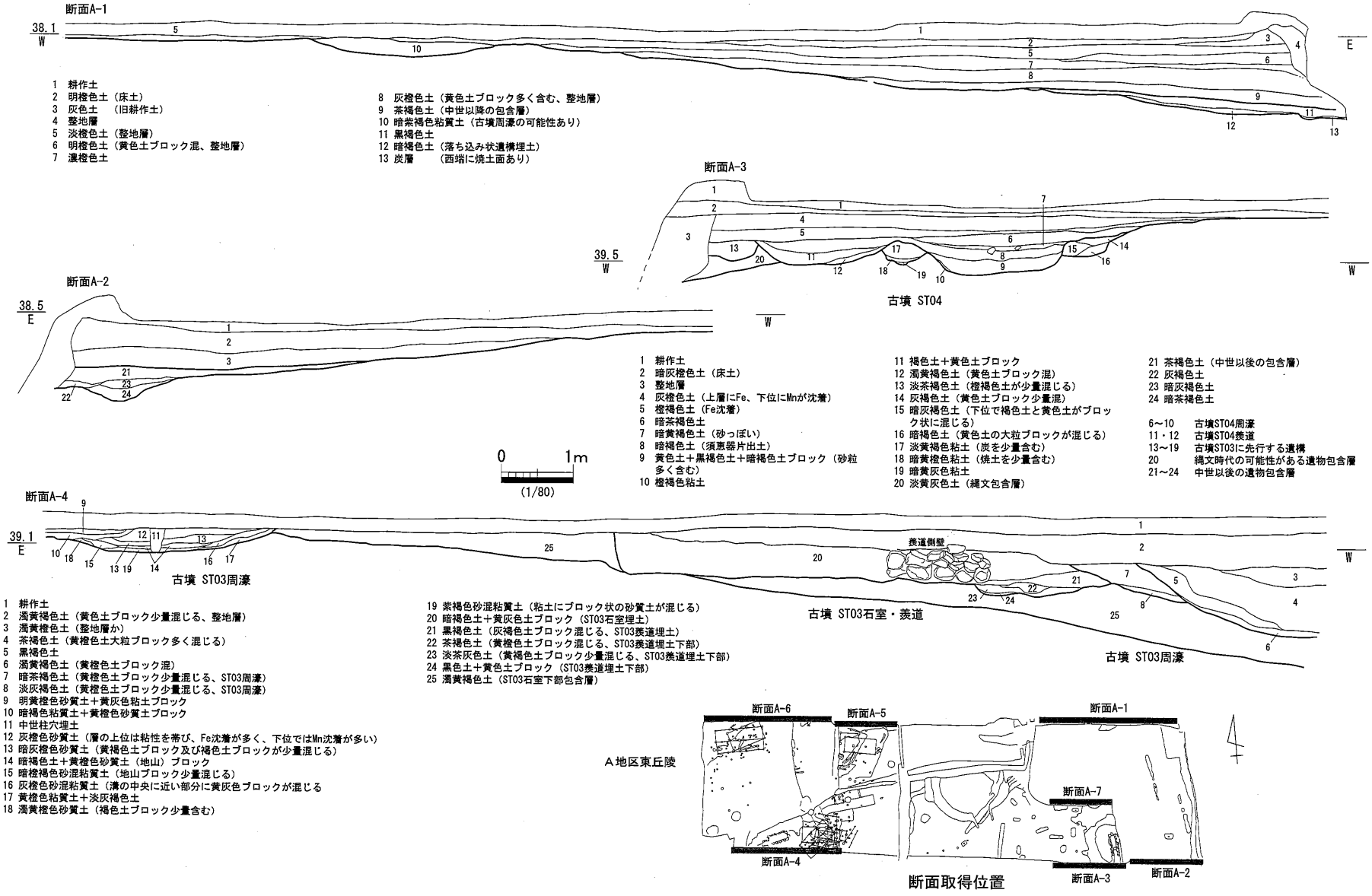
第 8 図の断面 A-1 は東丘陵東端の調査区北壁断面である。東半分に旧地形の傾斜が残る。しかし、11 ～ 13 層においても中世の遺物が出土することから、中世段階で削平された傾斜面と言える。ただし、10 層は他の古墳の周濠に類似する土層であり、調査区北側に未知の古墳が存在する可能性が考えられる。平面的に検出した溝状の遺構からは、出土遺物はなかった。

断面 A-2、A-3 は約１ｍの崖を介してほぼ連続する断面図である。断面 A-2 は整地層（1 ～ 3 層）と中世以後の包含層（21 ～ 24）で構成され、断面 A-1 と同じ層序だが、断面 A-3 では、古墳 ST04 の羨道および周濠埋土の下層に、縄文時代と推定される包含層（20 層）が僅かに確認できた。また、時期不明だが古墳築造以前の遺構を示す落ち込み(17 ～ 19 層)も認められた。調査区側には伸びないことから、調査区の南側に遺構が存在するものと考えられる。

断面 A-4 では、古墳 ST03 の周濠（3 ～ 8、12 ～ 19 層）や石室等埋土（20 ～ 24）の下位に弥生時代もしくは縄文時代の包含層（25 層）がみられる。断面 A-5、A-6 は中世建物群Ｂ、Ｃの削平面の断面である。

断面 A-7 は西丘陵東斜面の旧地形を示す断面で、下位層まで中世以後に堆積した土層とみられる。ただし、中世の大溝を確認した調査区中央部付近とは約 0.6 ｍの高低差があり、調査区全体を反映したものではない。大溝検出面は、段丘風化礫層面が完全に水平になるまで削平されており、旧地形は遺存していなかった。西丘陵の断面概略図で示したように、西丘陵西側の丘陵上部は、すべて削平された面である。中世建物跡や縄文期の土坑などの遺構も、多くは上部を削平されて浅い。西端の古墳３基も墳丘中央付近まで削平が及んでおり、盛土は全く遺存していなかった。Ｂ地区の河川域とは２ｍ以上の崖面を介しており、その削平時期は比較的新しいものと推定されるが、判断材料が得られなかった。

なお、北側への傾斜は若干北に向かって下がるが、どの調査区においても段丘風化礫層面（遺構面）は平坦で、旧地形をとどめた断面を得ることができなかった。また、東西丘陵間の谷部では、弥生時代の河川 SR01 を検出している。これについては、第４節において詳細を記述する。



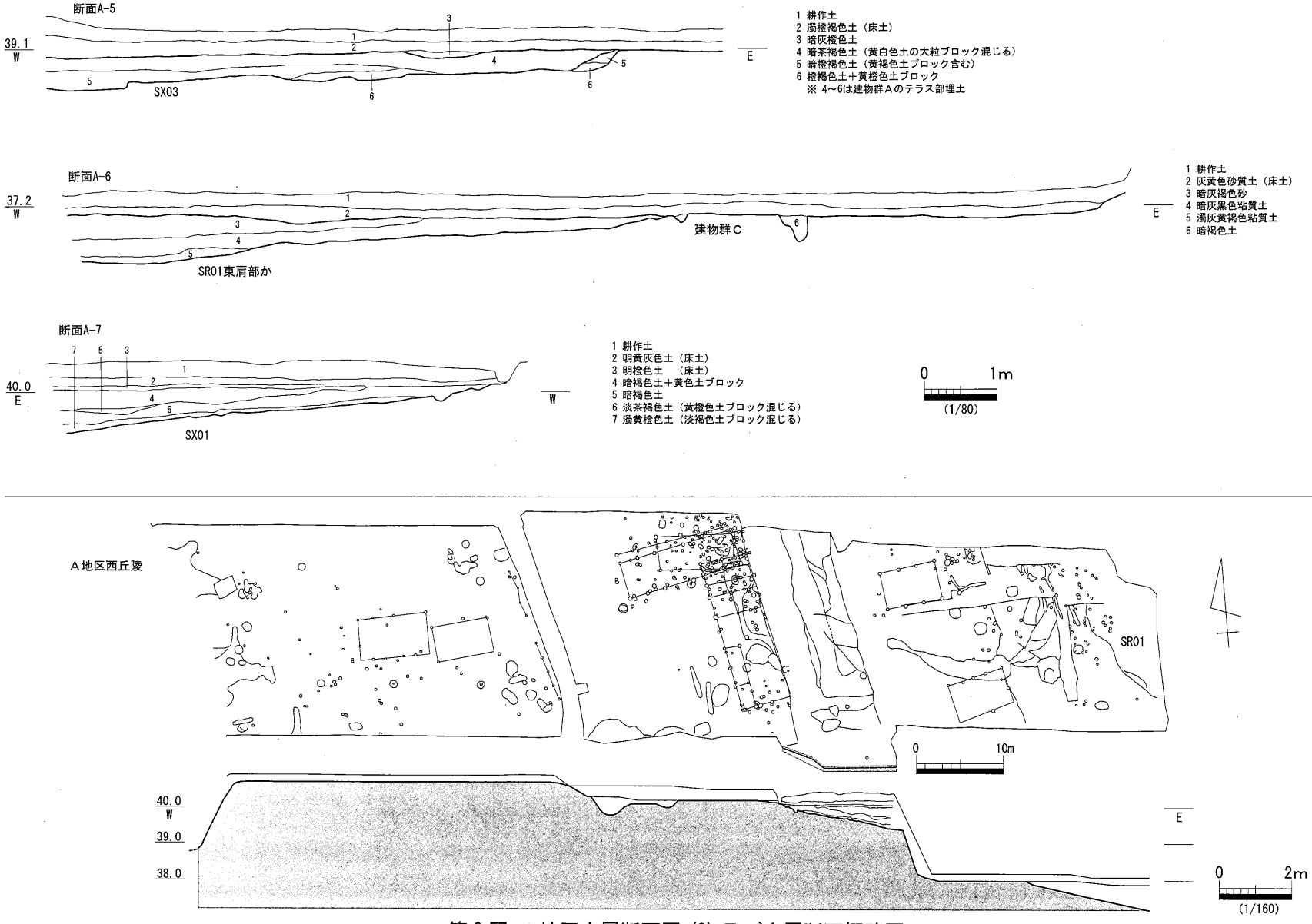
1 耕作土
2 明橙色土（床土）
3 灰色土 （旧耕作土）
4 整地層
5 淡橙色土（整地層）
6 明橙色土（黄色土ブロック混、整地層）
7 濃橙色土
8 灰橙色土（黄色土ブロック多く含む、整地層）
9 茶褐色土（中世以降の包含層）
10 暗紫褐色粘質土（古墳周溝の可能性あり）
11 黒褐色土
12 暗褐色土（落ち込み状遺構埋土）
13 炭層 （西端に焼土面あり）

1 耕作土
2 暗灰橙色土（床土）
3 整地層
4 灰橙色土（上層にFe、下位にMnが沈着）
5 橙褐色土（Fe沈着）
6 暗茶褐色土
7 暗黄褐色土（砂っぽい）
8 暗褐色土（須恵器片出土）
9 黄色土＋黒褐色土＋暗褐色土ブロック（砂粒多く含む）
10 橙褐色粘土
11 褐色土＋黄色土ブロック
12 濁黄褐色土（黄色土ブロック混）
13 淡茶褐色土（橙褐色土が少量混じる）
14 灰褐色土（黄色土ブロック少量混）
15 暗灰褐色土（下位で褐色土と黄色土がブロック状に混じる）
16 暗褐色土（黄色土の大粒ブロックが混じる）
17 淡黄褐色粘土（炭を少量含む）
18 暗黄橙色粘土（焼土を少量含む）
19 暗黄灰色粘土
20 淡黄灰色土（縄文包含層）
21 茶褐色土（中世以後の包含層）
22 灰褐色土
23 暗灰褐色土
24 暗茶褐色土

6～10 古墳ST04周溝
11・12 古墳ST04羨道
13～19 古墳ST03に先行する遺構
20 縄文時代の可能性がある遺物包含層
21～24 中世以後の遺物包含層

1 耕作土
2 濁黄褐色土（黄色土ブロック少量混じる、整地層）
3 濁黄橙色土（整地層か）
4 茶褐色土（黄橙色土大粒ブロック多く混じる）
5 黒褐色土
6 濁黄褐色土（黄橙色土ブロック混）
7 暗茶褐色土（黄橙色土ブロック少量混じる、ST03周溝）
8 淡灰褐色土（黄橙色土ブロック少量混じる、ST03周溝）
9 明黄橙色砂質土＋黄灰色粘土ブロック
10 暗褐色粘質土＋黄橙色砂質土ブロック
11 中世柱穴埋土
12 灰橙色砂質土（層の上位は粘性を帯び、Fe沈着が多く、下位ではMn沈着が多い）
13 暗灰橙色砂質土（黄褐色土ブロック及び褐色土ブロックが少量混じる）
14 暗褐色土＋黄橙色砂質土（地山）ブロック
15 暗橙褐色砂混粘質土（地山ブロック少量混じる）
16 灰橙色砂混粘質土（溝の中央に近い部分に黄灰色ブロックが混じる
17 黄橙色粘質土＋淡灰褐色土
18 濁黄橙色砂質土（褐色土ブロック少量含む）
19 紫褐色砂混粘質土（粘土にブロック状の砂質土が混じる）
20 暗褐色土＋黄灰色土ブロック（ST03石室埋土）
21 黒褐色土（灰褐色土ブロック混じる、ST03羨道埋土）
22 茶褐色土（黄橙色土ブロック混じる、ST03羨道埋土下部）
23 淡茶灰色土（黄褐色土ブロック少量混じる、ST03羨道埋土下部）
24 黒色土＋黄色土ブロック（ST03羨道埋土下部）
25 濁黄褐色土（ST03石室下部包含層）

第8図 A地区土層断面図 (1)



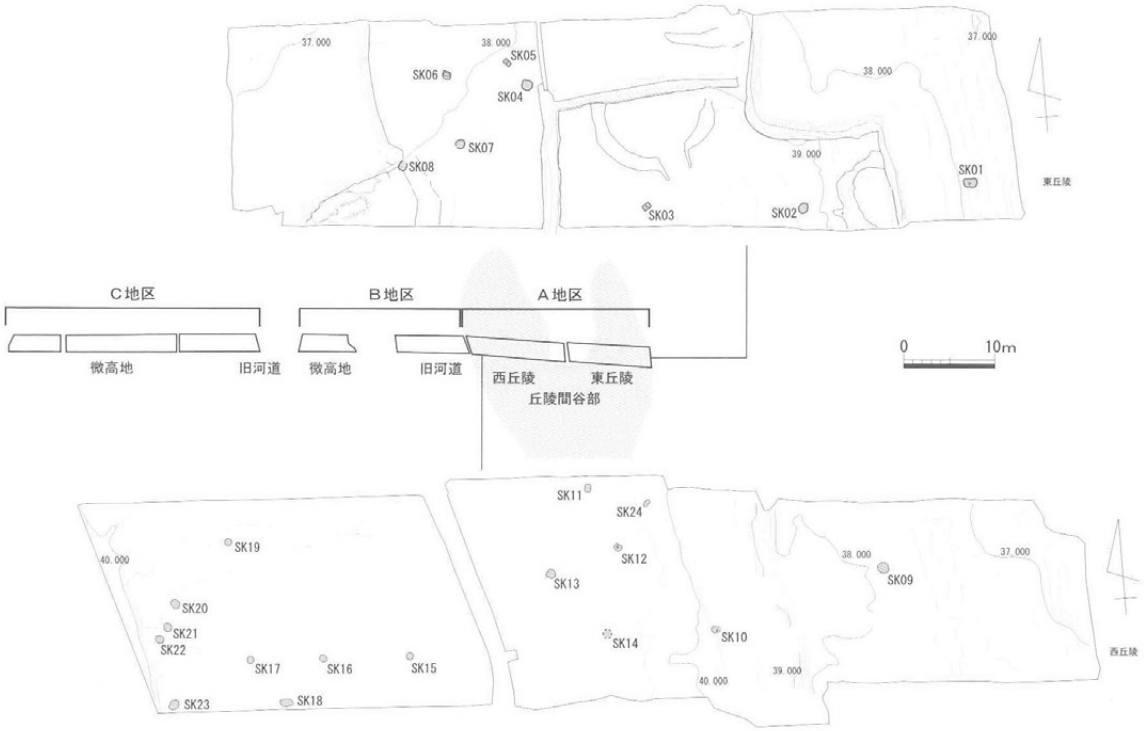
第９図 Ａ地区土層断面図 (2) 及び土層断面概略図

第３節　縄文時代

（１）遺構分布

検出した遺構は土坑 24 基である。うち東丘陵に８基、西丘陵に 16 基が分布する。これらの遺構は、全体的に出土遺物が少なく、時期決定が難しいが、SK04 より晩期後半の突帯文土器が出土したことに加え、遺構の埋土が粘性の強い黄色系粘土層で共通することから、縄文時代の遺構と認定した。

東丘陵に分布する SK01 ～ SK08 は、８～ 10 ｍの距離を隔てて各遺構が分布する。また、西丘陵 SK09 ～ SK24 も、やや距離が短くなるが、等間隔を隔てて遺構が分布する状況が読み取れる。これらは主に丘陵上の平坦面と、谷に向かっての傾斜面上半部に立地する。多くは「落とし穴遺構」と考えられる。



第 10 図　Ａ地区縄文遺構分布状況

遺構名	立地	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	底場ピット	出土遺物
SK01	東丘陵	1.50	1.00	1.35	○	なし
SK02	東丘陵	1.32		0.26	×	炭化物
SK03	東丘陵	0.92	0.60	0.57	○	石器
SK04	東丘陵	1.14		0.80	○	土器
SK05	東丘陵	0.88	0.54	0.73	○	なし
SK06	東丘陵	1.13	0.90	1.20	×	石器片
SK07	東丘陵	1.00		0.63	×	なし
SK08	東丘陵	1.00	0.88	0.52	×	石器片多数
SK09	西丘陵	1.20		0.60	×	なし
SK10	西丘陵	1.00+	0.68	0.42	○	なし
SK11	西丘陵	0.90	0.71	0.72	○	なし
SK12	西丘陵	0.88	0.80	0.50	○	なし

遺構名	立地	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	底場ピット	出土遺物
SK13	西丘陵	1.05	0.50	0.27	×	なし
SK14	西丘陵	0.75		0.00	○	なし
SK15	西丘陵	0.89	0.80	0.40	○	なし
SK16	西丘陵	0.88	0.80	0.22	○	なし
SK17	西丘陵	0.80	0.80	0.23	○	なし
SK18	西丘陵	1.50	0.82	0.70+	?	なし
SK19	西丘陵	0.82		0.73+	?	なし
SK20	西丘陵	1.06		1.27	×	なし
SK21	西丘陵	0.94		0.59	○	なし
SK22	西丘陵	0.94	0.89	1.28	×	なし
SK23	西丘陵	1.06	0.89	1.06+	?	なし
SK24	西丘陵	0.94	0.50	0.47	×	なし

第２表　Ａ地区縄文遺構一覧表

（2）各遺構の内容

土坑 SK01（第 11図）

東に向かって傾斜する斜面上部に位置する土坑である。長径 1.5 m、短径 1.0 m、やや隅丸の不整長方形を呈する。断面形は底に向かってすぼまる逆台形を呈し、深さは 1.35 m をはかる。底面中央に直径約 20cm の小穴を検出した。小穴は底に向かって細くなる形状である。

埋土は灰色～黄色系の粘土層で、底面から 0.8 mまでは、地山ブロックが多量に混在し、人工的に埋め戻された土とみられる。それより上部は、粘性が強い黄橙色系土が堆積しており、自然堆積による埋没層とみられる。

遺構埋土中からは、まったく遺物が出土しなかった。

土坑 SK02（第 11図）

東丘陵上部平坦面の東端に位置する土坑である。直径 1.32 mの円形を呈する。断面形は浅い皿状で、深さは 0.26 mをはかる。埋土は粘性の強い黄色系粘土層である。底場近くに炭化物粒を含むレンズ状堆積層があり、その上部には焼土を含む堆積層や薄い炭化物層がある。

このような断面形状・堆積状況を示す土坑は、SK01 やその他の土坑には認められない。

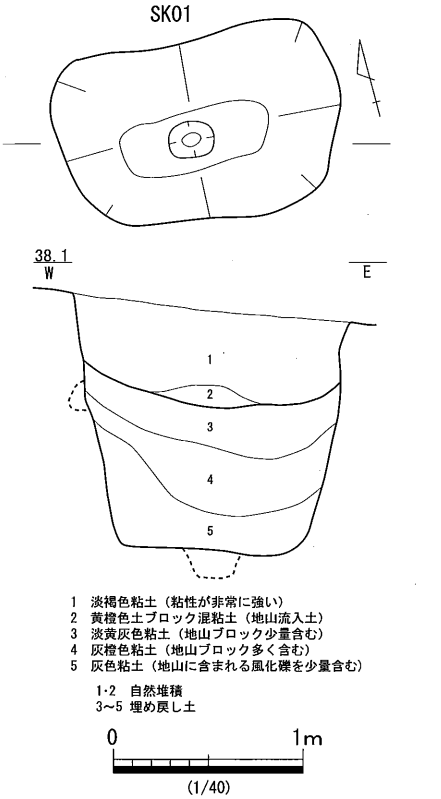
出土遺物はなかったが、埋土の色調や土質から縄文時代の遺構と認定した。

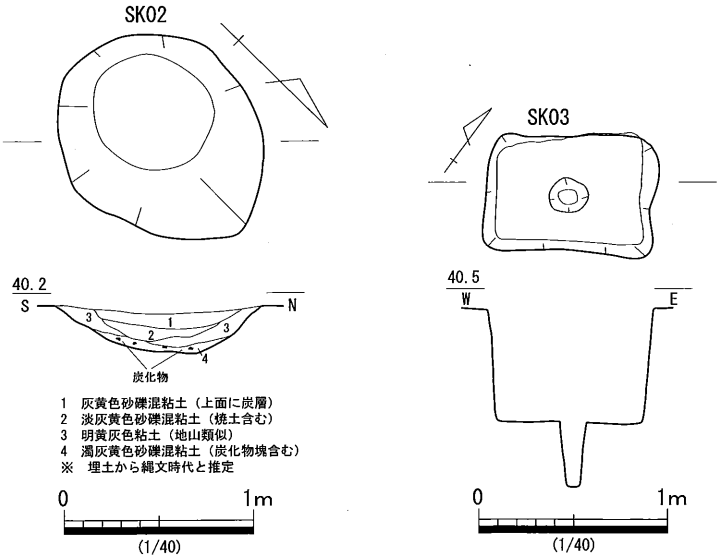
土坑 SK03（第 11図）

東丘陵上部平坦面中央に位置する土坑である。長辺 0.92 m、短辺 0.6 mで、やや隅丸の長方形を呈する。遺構の側壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形が矩形となる。底面までの深さは、0.57 mをはかる。底面は平坦で、中央に直径約 0.15 mの小穴が穿たれる。小穴の深さは 0.34 mで、先細りの断面形状を呈す。

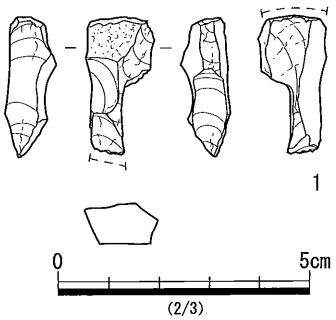
埋土は粘性が強く、ややシルトを含む黄色系粘土層である。

埋土中より、1 のサヌカイト製の楔形石核片が 1 点出土した。長さ 3cm ほどの小型石核で、 両極打撃によって生じた左右両側縁の裁断面および上下端の潰れが認められる。

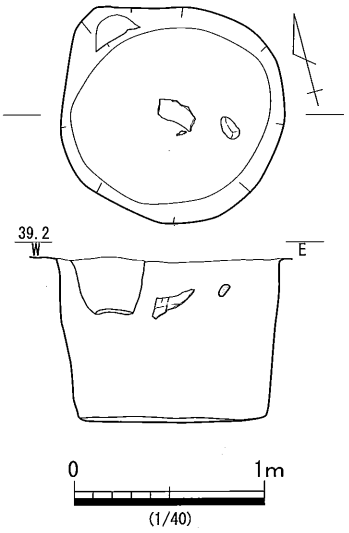




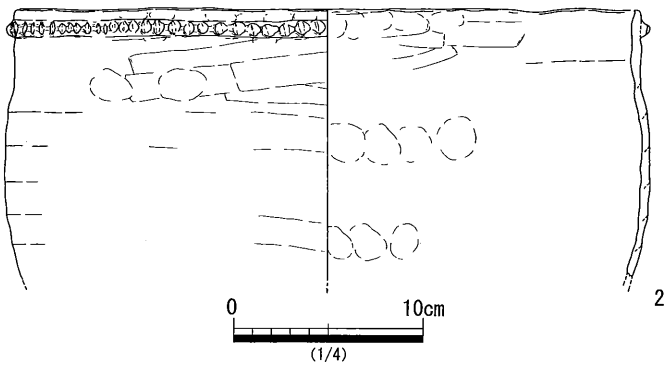
第 11図 土坑 SK01 ～ 03 平･断面図



第 12 図 土坑 SK03 出土遺物



第 13 図 土坑 SK04 平･断面図



第 14 図 土坑 SK04 出土遺物

土坑 SK04（第 13・14 図）

東丘陵平坦面の西端付近に位置する土坑である。直径 1.14 ｍの円形を呈し、側壁は垂直に立ち上がることから、断面形は円筒形となる。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは 0.8 ｍである。北側側壁の底面から 0.58 ｍの位置に、階段状の小段が備わる。なお、底面には他の土坑と同様に小穴が認められたが、十分に記録を行う前に埋め戻しを行ってしまい、写真記録しか残っていない。

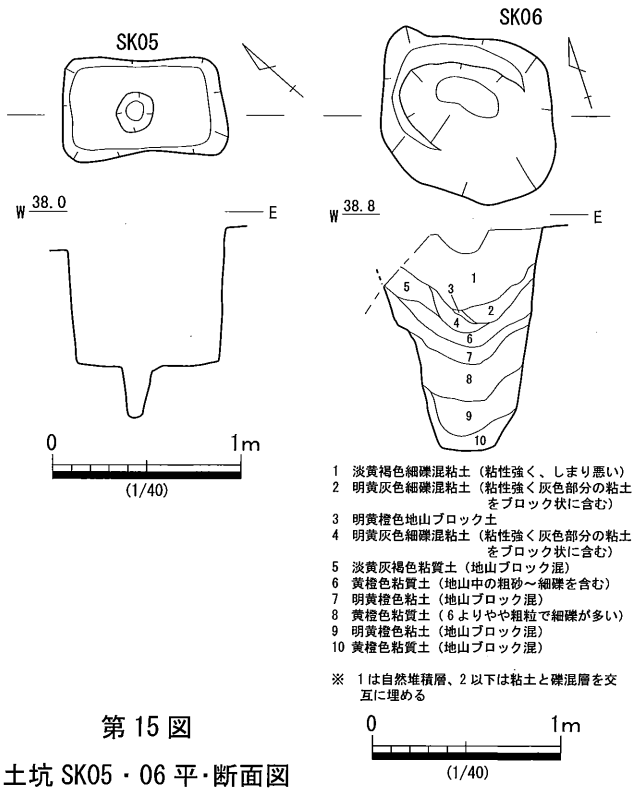
埋土は粘性の強い黄色系土で、底面から 0.5 ｍほど上部までブロック状の埋土、それより上部は中央が窪むレンズ状の堆積が認められた。2 は上部層で出土した晩期後半の突帯文土器の深鉢である。胴部から口頸部に至る器形の変化は緩やかだが、内彎する口頸部境の直上で僅かに屈曲して口縁部が直立する。口縁部の端部は面取りされ、上端からやや下がった位置に、大きい刻目を施した突帯が貼付される。口縁端部内面は強いナデ仕上げである。これらの属性は、坂出市櫃石島所在のガンド浜遺跡出土資料に共通し、突帯文期の古相に位置づけられる。

土坑 SK05（第 15 図）

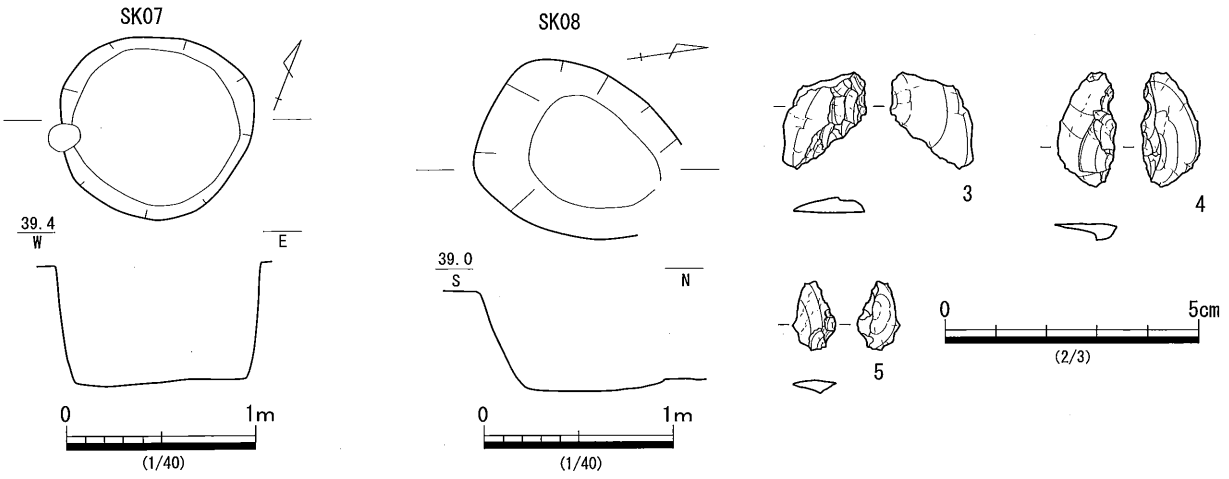
東丘陵平坦面西端、SK04 に近接して検出した土坑である。長辺 0.88 m、短辺 0.54 ｍで、やや隅丸の長方形を呈す。断面は矩形で、深さは 0.73 ｍをはかる。底面に小穴が認められる。SK03 と類似した形状である。埋土は、他と同様に、黄色系粘土層で、出土遺物はなかった。

土坑 SK06（第 15 図）

東丘陵の西側傾斜面上部に位置する土坑である。平面 1.13 ｍ× 0.9 ｍの不整楕円形を呈す。深さは、検出面から 1.2 ｍをはかり、断面形は下に向かって狭くなる。底面は中央がやや窪み、小穴は認められなかった。ただ、深い土坑のために、底面を確実に精査できたかどうか、不安が残る。出土遺物はサヌカイ



第 15 図
土坑 SK05・06 平･断面図



第 16 図 土坑 SK07・08 平・断面図及び SK08 出土遺物

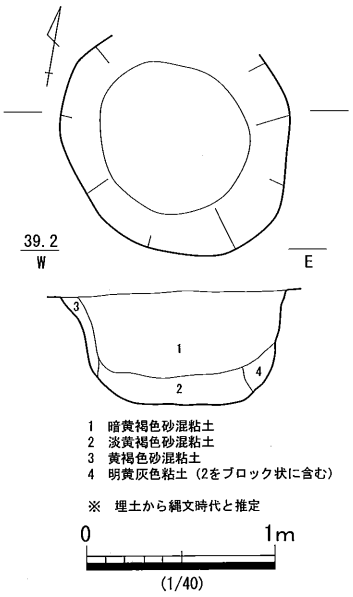
ト剥片少量のみである。

土坑 SK07（第 16 図）

直径 1.0 mの円形土坑である。深さ 0.63 mで、断面は円筒形である。底面は平坦で、小穴は検出できなかった。埋土は黄色系粘土で、出土遺物はなかった。

土坑 SK08（第 16 図）

直径約 1.0 mの不整円形土坑である。側壁の立ち上がりはやや緩やかで、底面は平坦である。埋土は黄色系粘土で、サヌカイト剥片が約 50 点出土した。これらは 1cm 以下の小剥片が多く、大きいものでも 2cm 程度である。そのうち 3 ～ 5 の 3 点を図化した。3 は点状の打点を有する小剥片で、打点付近の背面に細かな調整剥離痕が認められる。石核の周縁に調整加工を施した後、部分的に側縁の稜線上を敲打して剥離した剥片である。4 は口唇状の打点を有し、石核側縁の稜線をとどめた小剥片である。打点部周辺は表裏交互に調整加工が施される。5 も 4 と同様に石核側縁の稜線をとどめる。これらの剥片は、図化していない他の剥片を含めて、主に石鏃等小型製品の調整加工に関わる剥片類である可能性が高い。



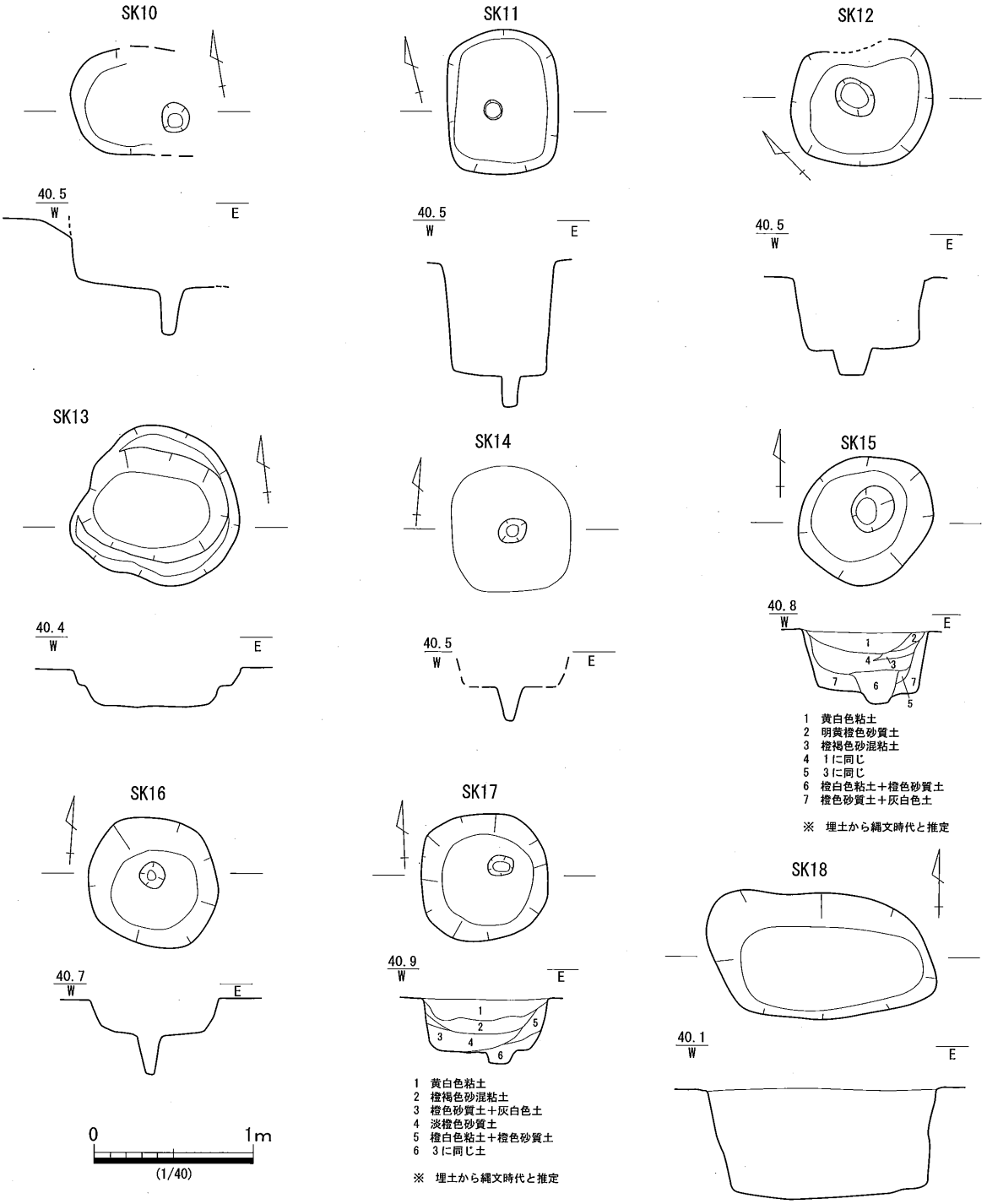
第 17 図 土坑 SK09 平・断面図

土坑 SK09（第 17 図）

直径 1.2 mの円形の土坑である。断面形は円筒形で、底面は平坦である。底面と側面の境は緩やかなカーブを描く。埋土は黄色系粘土で、底面付近にブロック状の流入土が認められた。出土遺物はなかったが、埋土の色調や土質から、縄文期の土坑と判断した。

土坑 SK10（第 18 図）

西丘陵の東斜面上部端に立地する。東半分は後世の整地により滅失する。長径 1.0 m以上、短径 0.68 mの長楕円形土坑である。主軸は東西方向を向く。検出面から 0.42 mで底面に至り、さらに底面中央に直径 0.15 mの小穴が穿たれる。小穴は深さ 0.3 mで、下方ほど細くなっており、杭痕跡と考えられる。黄色系埋土が認められた。出土遺物はなかった。



第 18 図 土坑 SK10 ～ 18 平･断面図

土坑 SK11（第 18 図）

西丘陵東側北端に立地する。長辺 0.9 m、短辺 0.71 mで隅丸方形の平面形を呈す。主軸は南北方向である。検出面から 0.72 mで底面に至り、底面中央やや西よりに、直径 0.11 mの小穴が穿たれる。小穴は深さ 0.21 mまで掘り下げたが、本来の深さはそれ以上が想定される。杭痕跡であろう。埋土は粘性の強い黄色系土で、出土遺物はなかった。

土坑 SK12（第 18 図）

西丘陵東側北側に立地する。直径 0.81 mの不整円形の平面を呈す。検出面から 0.5 mで底面に至り、

底面中央に、杭痕跡と考えられる直径0.25ｍの小穴が認められた。埋土は粘性の強い黄色系土で、出土遺物はなかった。

土坑SK13（第18図）

西丘陵中央東よりに立地する。1.05ｍ×0.95ｍの不整円形土坑である。断面は逆台形で、深さは0.27ｍと浅い。底面は平坦である。遺構の立地からみて、上部を大きく削平された可能性がある。埋土は粘性の強い黄色系土で、出土遺物はなかったが、埋土の土質や色調から、縄文期の遺構と判断した。

土坑SK14（第18図）

西丘陵中央東よりに立地する。遺構検出の段階で、直径（一辺）0.75ｍの範囲に濁黄色系土の広がりが認められたため、土坑と認定した。その後、遺構面精査による僅かな削平のため、埋土のほとんどが消失し、遺構調査段階では底面中央に穿たれた小穴を残すのみとなった。先のSK13とともに、上部を大きく削平された土坑であることを示している。小穴は直径0.18ｍで、深さ0.22ｍまで掘り下げたが、さらに下方に伸びているものと思われる。杭痕跡と判断できる。

土坑SK15（第18図）

西丘陵西側中央付近に立地する。直径0.8ｍの円形土坑である。深さは、検出面から0.4ｍで平坦な底面に至り、そのやや東よりに直径0.27ｍの小穴を穿つ。写真記録をみると、小穴はさらに深くなるものと考えられる。埋土は全体的に黄色系埋土だが、断面図から詳細をたどると、1・4層が淡い灰橙色～黄白色の粘性の強い堆積層で、中央が窪む断面を呈することから、自然堆積層と考えられる。その途上で主に東側から流入する2・3層は、地山類似の明橙色砂混粘土層などであり、周辺の整地に伴って一時的に流入した土層である。5・7層は橙白色系土と褐色系土が粗砂を交えながらブロック状に混在する土層であり、一度に埋められたか、あるいは短期間に至近から崩落した状態を復元できる。柱痕状にみえる6層は、上部が橙色、下部が濃褐色の土層で、杭痕跡と考えられるが、7層を切り込む部分もあることから、7層崩落堆積後も杭を設置し直すか、あるいは7層の崩落が杭材の腐朽に先行したかのいずれかであろう。

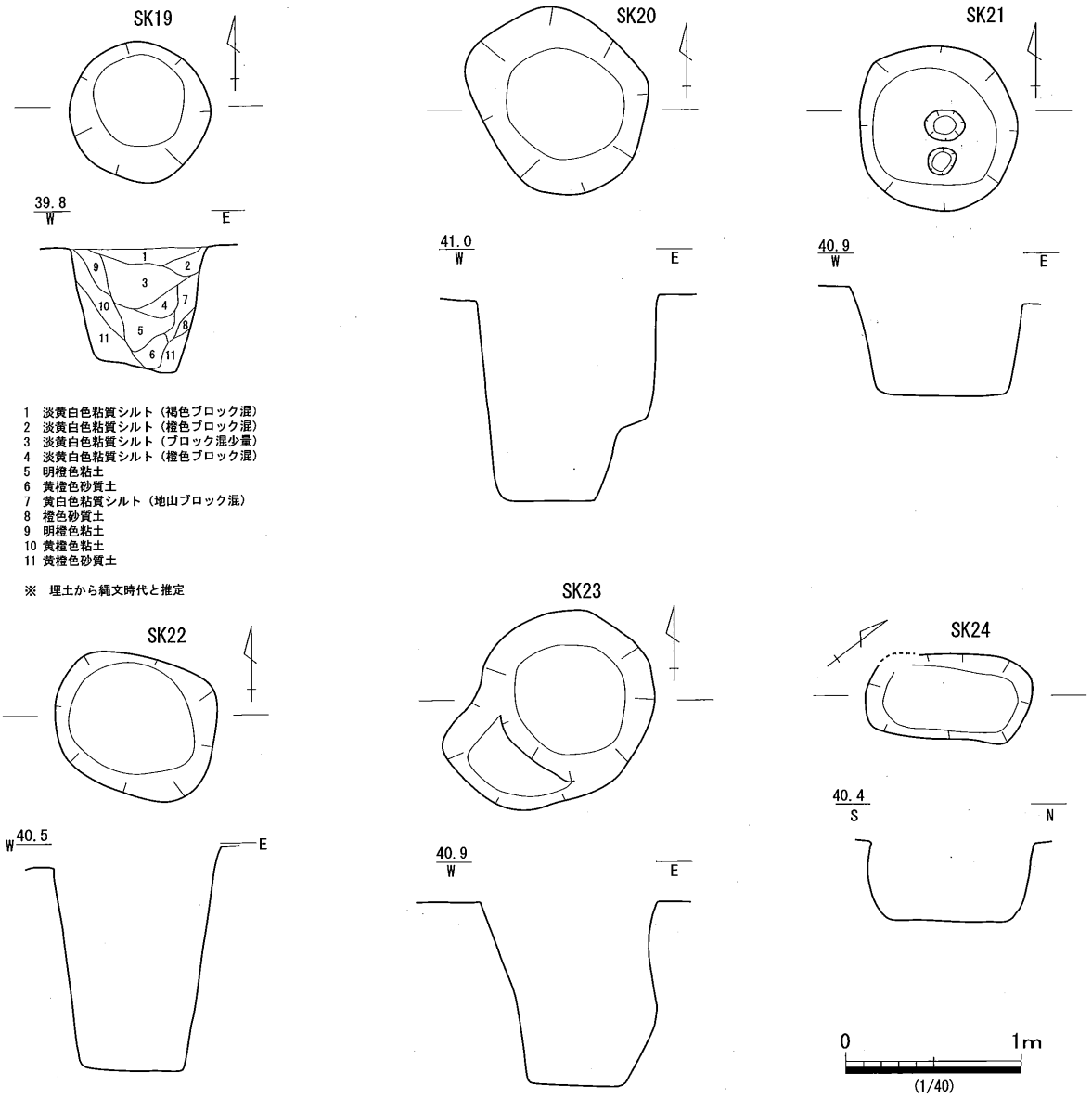
出土遺物はみられないが、埋土の土質や色調などから、縄文期の遺構と判断できる。

土坑SK16（第18図）

西丘陵中央のやや西よりに立地する土坑である。直径0.82ｍの平面円形、深さは検出面から0.22ｍで平坦な底面に至る。底面のやや北よりに、直径0.16ｍの小穴を穿つ。小穴は深さ0.26ｍまで調査したが、それ以上に下方に伸びるものと思われる。杭痕跡であろう。出土遺物はみられないが、埋土の土質や色調などから、縄文期の遺構と判断できる。

土坑SK17（第18図）

西丘陵中央のやや西よりに立地する土坑である。直径0.8ｍの平面円形、深さは検出面から0.23ｍで平坦な底面に至る。底面のやや北よりに、直径0.16ｍの小穴を穿つ。小穴は図より下方に深く伸びるものと思われる。杭痕跡であろう。埋土は、検出面から0.12ｍまで淡い灰橙色～黄白色の粘性の自然堆積と考えられる堆積層がある。その下方は、橙白色系土と褐色系土が粗砂を交えながら交互に堆積する土層で、遺構の周囲の至近から短期間に崩落したものと推定できる。杭痕跡と推定できる6層中の窪みには、記録写真からみると濃褐色土が明瞭にみられる。出土遺物はみられないが、埋土の土質や色調などから、縄文期の遺構と判断できる。



第 19 図 土坑 SK19 ～ 24 平･断面図

土坑 SK18（第 18 図）

西丘陵中央南端に立地する。長径 1.5 m、短径 0.82 mの長楕円形を呈する土坑である。側壁は直に立ち上がり、検出面からの深さは 0.7 m、底面は平坦である。ただし、記録写真をみると、主に西側底面の掘り下げが十分でなく、検出面からさらに深くなるものと推定できる。底面の杭痕跡の有無などは、不明とせざるをえない。出土遺物はみられないが、埋土の土質や色調などから、縄文期の遺構と判断できる。

土坑 SK19（第 19 図）

西丘陵北側に立地する。直径 0.82 mの円形土坑である。側壁は垂直に近く、断面形は円筒形を呈する。深さは 0.73 mまで確認しているが、記録写真をみる限り、さらに深くなりそうである。断面記録による埋没状況は、検出面から 0.34 mまで、淡黄白色系の粘質シルト層（1 ～ 3・9 層）が堆積し、それより下方は濃褐色系土である。記録写真で観察される底面の土層は半分だけ黄橙色土が見えており、対する部分は濃褐色系土が続く。他の縄文期土坑の堆積状況からみると、埋没初期に明橙色系土層が流入す

る状況がみられることから、当該遺構の記録時底面も、堆積土の除去途上であったものと考えられる。したがって、杭痕跡の有無等は不明である。

土坑 SK20（第 19 図）

西丘陵西端中央付近に立地する。直径 1.06 mの円形土坑で、深さは検出面から 1.27 mと深い。側壁は直に立ち上がるが、検出面から 0.75 mのところで、幅 0.15 mほどの小段を設ける。埋土は黄色系～黄白色系シルト層で、埋土下部は濃褐色系土が堆積する。中世の井戸のような黒色系の有機物を多数含む粘土層は見られず、やや軟質で砂混じりの褐色系土であることから、井戸跡とは考えられない。底面は平坦で、段丘礫の風化粒を含む黄橙色土が検出されていることから、調査は本来の底面まで達しているものと考えられる。記録写真では底面に杭痕跡などはみられない。

土坑 SK21（第 19 図）

西丘陵西端中央付近に立地する。直径 0.94 mの円形土坑である。断面形は円筒形に近く、深さは検出面から 0.59 mをはかる。底面に小穴２穴の記録があるが、詳細な写真がなく、調査状況は不明である。埋土は黄色系土で、遺物はない。調査時の埋土所見から、縄文期土坑としておく。

土坑 SK22（第 19 図）

西丘陵西端付近に立地する。直径 0.94 mの円形土坑である。SK20 と同様に中世の井戸に類似するが、黄色系土が堆積するという調査時の埋土所見から、縄文期の土坑としておく。

土坑 SK23（第 19 図）

西丘陵南西端に立地する土坑である。直径 1.06 mの円形土坑で、深さ 1.06 m、断面円筒形である。東側側壁はややオーバーハングする部分もある。断面写真をみると、埋土上半は淡灰橙色のシルト質土が堆積しており、下半は濃褐色土がみられる。さらに調査時の底面をみると、底面周縁部には地山の明黄橙色土を検出しているが、中央部には褐灰色土がまだ掘り残っている。したがって、底面の状態は不明である。

土坑 SK24（第 19 図）

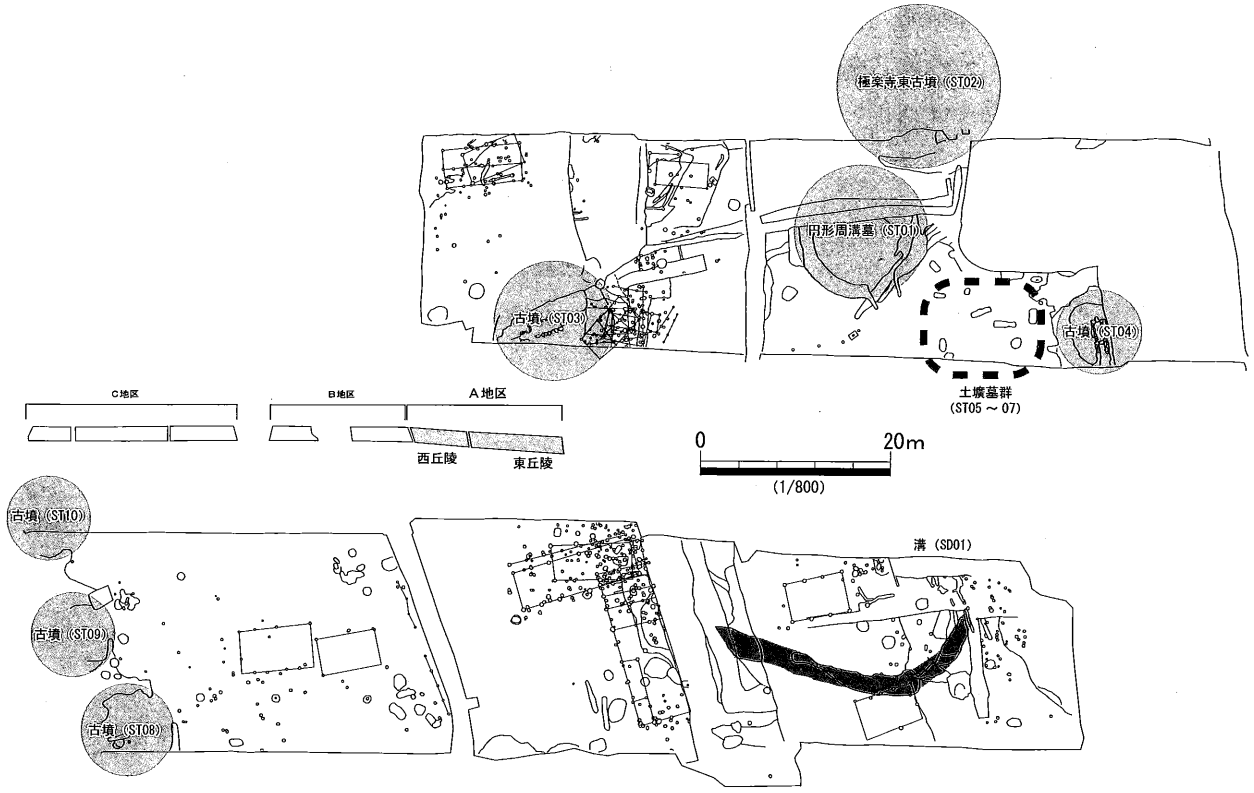
西丘陵東側北端部に立地する。長辺 0.94 m、短辺 0.5 mの長方形土坑である。断面形は台形状で、深さは 0.47 mをはかる。床面は平坦で、調査時には小穴を確認することができなかったが、床面の写真記録がなく、元来の床面形状は不明である。

第４節　弥生時代～古墳時代

西丘陵・東丘陵にあわせて１０基の墳墓がある。内訳は、弥生時代後期の円形周溝墓１基、古墳時代後期の古墳６基・土壙墓３基である。このうち、東丘陵の古墳 ST02 は、周知の埋蔵文化財包蔵地「極楽寺東古墳」の南縁にあたり、今回の調査によってその周濠を検出した古墳である。発掘調査にあわせて、現存の墳丘測量を行った成果も図示している。東丘陵の横穴式石室墳 ST03・ST04 は、今回の調査によって新たに発見した古墳である。土壙墓 ST05 ～ 08 は東丘陵の古墳 ST04 の西側にまとまっており、同じ位置に土壙墓の可能性がある不定形土坑も分布する。ST05 からは、多数の玉類が出土した。ST08 ～ 10 は西丘陵の小規模古墳群である。

円形周溝墓 ST01（第 22～２５図）

Ａ地区東丘陵上の中央部平坦面で検出した。突出部付円形周溝墓である。耕作により、墳丘・埋葬主



第 20 図　A 地区墳墓分布図

体部は削平を被るが、墳丘を区画した周溝を確認した。また、北半部は大きく削平を被り、周溝は遺存しない。

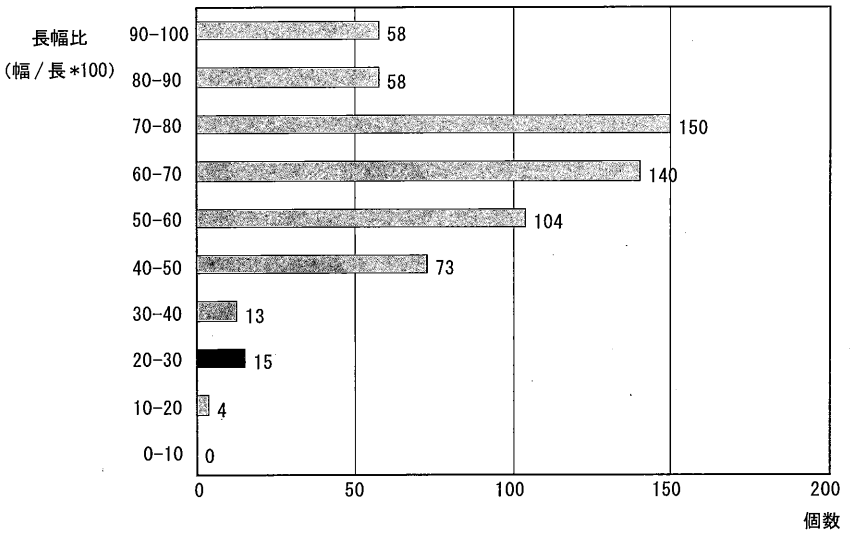
周溝は幅 1.5 m、深さ約 0.48 mで、断面形はU字状である。周溝の内側下端を基準とした墳丘基底部の直径は 12.5 m。南側に幅 3.0 m、長さ 2.8 mの突出部が付属する。突出部を区画する周溝は東西両側縁に浅くみられ、検出面では突出部南側、つまり突出部前面を区画する溝は見られない。もちろん、突出部側縁の周溝は深さ 10cm 内外と浅いことから、本来区画する周溝があったか、あるいは元来区画されないままであったか、いずれとも判断できない。少なくとも、円丘の主墳丘の周溝とは、明瞭な深さの差が認められる。また、周溝から想定できる突出部は、円丘の中心から想定できる主軸線よりやや東に振れる。

周溝内では底から 10 ～ 20cm 浮いて、10 ～ 20cm 大の礫が多量に見つかった。礫は花崗岩、安山岩など周辺流路跡で採取される岩石構成で、角が丸くなった亜角礫である。中でも、花崗岩が多く、合計 615 個の礫が認められた。これらは遺構の基盤となる段丘層中に含まれる風化礫とは異なり、器面の風化は進行していないことから、基盤の自然礫ではあり得ない。また、遺構検出段階で視認できた礫より、遺構掘削途上で検出した礫の方が圧倒的に多いが、出土状況から見て意図的に配置されたような状態ではなく、崩落したものと見られた。

周溝の埋没状況をｂライン・ｄライン断面でみると、最も円丘に近いｂライン 13 層、ｄラインの 11 層は、黒色化せず、地山ブロックを含む濁った黄褐色系を呈する土層である。したがって、初期段階の崩落土かもしくは掘削後に意図的に置かれた土、といえるが、崩落礫がまったく含まれていないことから見て、初期崩落とは考えにくい。したがって、礫を墳丘側面に配置する際の裏込め土と推定できる。礫はそれより外側の黒色土より出土している。底から 10 ～ 20cm 浮いて出土することから、墳丘盛土や

礫の裏込め土が比較的早期に周溝底に溜まり、その後周溝の埋没速度が遅くなった段階で礫が崩落したものと考えられる。

出土する礫は長さ10～16cmのものが多く、長さ×幅で礫の表面積を単純計算すると7.6㎡の合計面積を占める。周溝の遺存範囲が概ね1/2として、円周/2から突出部の長さ3m分を差し引くと、墳丘側面に高さ約45cmの貼石が復元できる計算となる。礫の形状は、幅／長比60～80%のものが多いが、20～30%にも若干のピークが認められる。



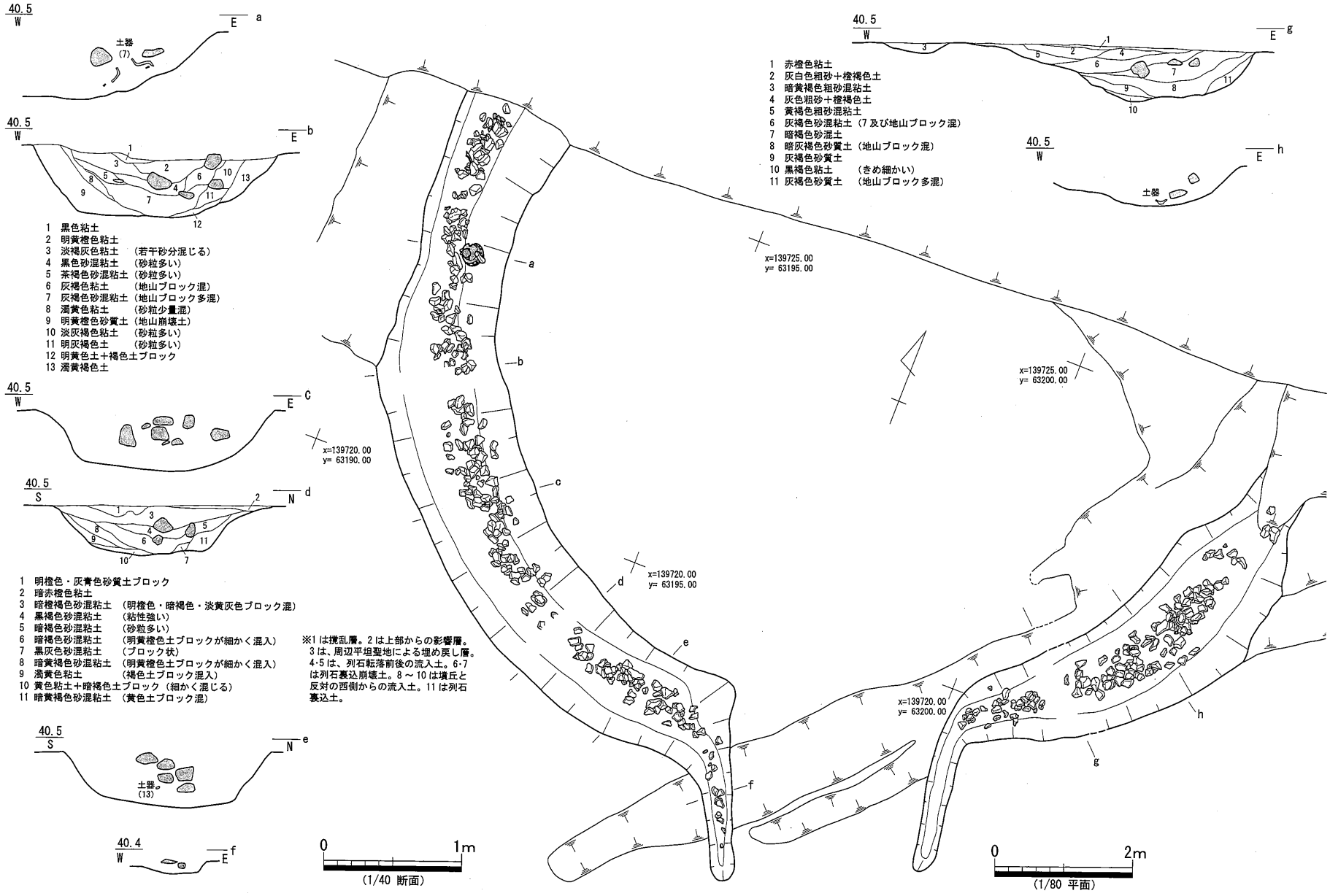
第21図 円形周溝墓ST01周溝内転落礫法量グラフ

周溝内からは、供献されたと推定される土器（6～17）が出土した。内訳は広口壺口縁部1点（6）、複合口縁壺口縁部1点（7）、小型直口壺1点（8）、甕口縁部片1点（9）、口縁部を欠損した鉢1点（16）そのほか、6と同一個体と考えられる底部片（13）、7と同一個体と考えられる底部片（15）、9と同一個体と考えられる底部片（10）、そのほかの底部4点（11・12・14・17）である。これらの土器は、墳丘の西側に多く、16の鉢のみ墳丘東側で出土した。また、突出部との境のくびれ部付近に特にまとまる訳ではなく、墳丘西側に満遍なく分布する。ただし、6・7の大型壺2点・8の小型直口壺は周溝遺存部北端の1mほどの範囲に集中して出土した。これらはaライン断面で7の土器の上部に大きめの礫が崩落していることからみて、礫の頻繁な崩落に先行して周溝内に転落したものと推定できる。また、図化していない土器片量が決して多いわけでなく、周溝に転落しなかった破片も多かったと考えざるを得ない。したがって、土器類は周溝至近に配置されたものではなく、周溝肩からやや内側に寄った位置に配置されたものと推定できる。

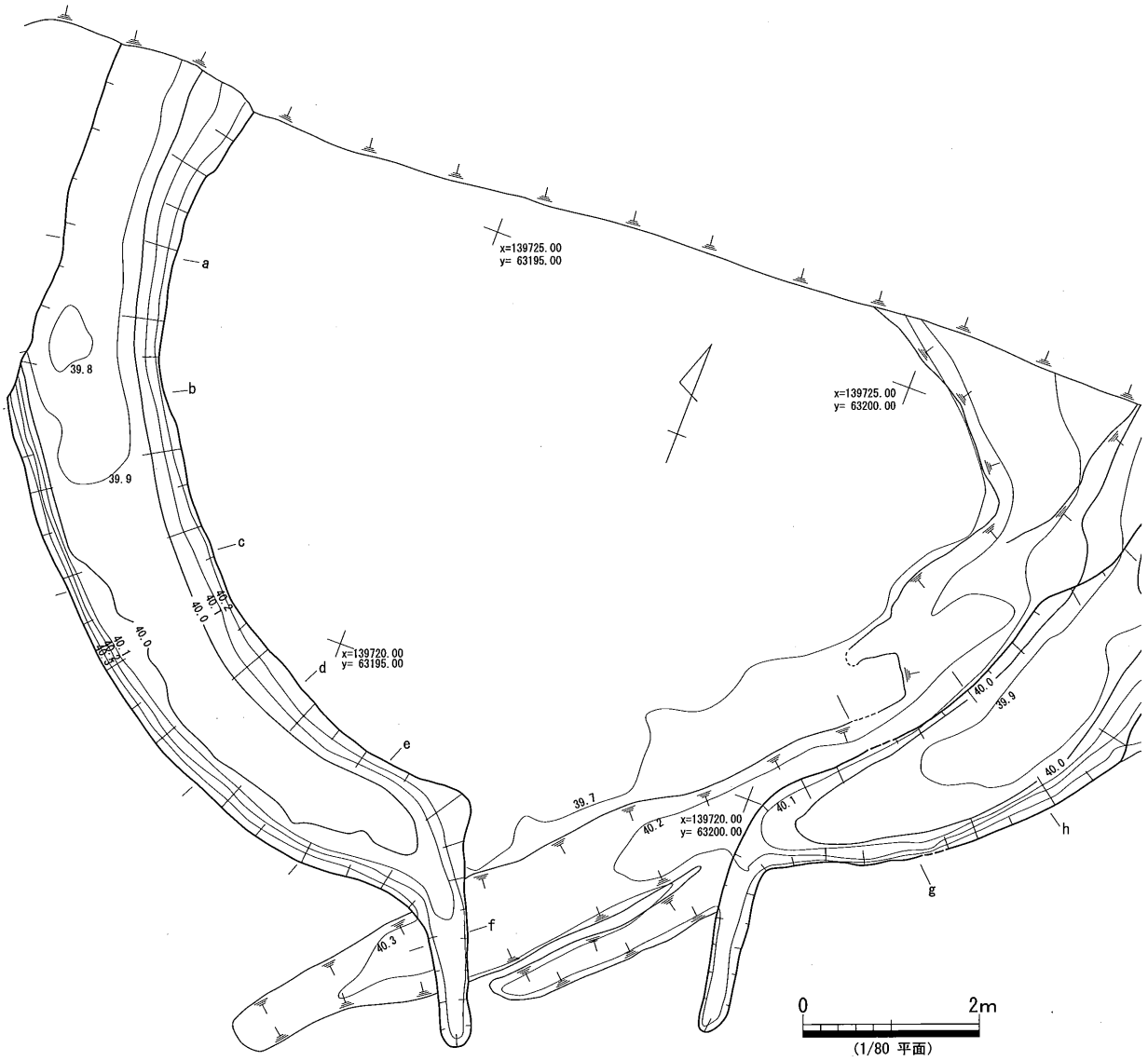
＜出土遺物＞

6は口縁部がラッパ状に大きく外反する形態の大型広口壺である。口縁部下端に断面三角形の粘土帯を貼付け、外端面に3条の凹線文および竹管押捺の円形浮文を施すものである。器表面の摩滅が顕著なため、器面調整は不明である。胎土は黄橙色系で、大粒の結晶片岩を含有することから、吉野川流域産と推定される。なお、13も同様な胎土であることから、6と同一個体と考えられる。

7は筒状の頸部に複合口縁が取り付く大型壺である。外反する口縁部を一旦作出し、高さ4cmの複合部粘土帯を貼付け、外面に等間隔の竹管押捺による円形浮文を施す。浮文貼付箇所の内面には、器面に指圧痕が認められる。器表面の摩滅が顕著なため、器面調整は不明である。胎土は明るい黄橙色系で、大粒の赤色粒・花崗岩粒が目立つ。この形態の壺は、当該遺構より西に約0.7kmにあたる当遺跡C地区の弥生時代後期土器群には見られず、当該遺構より東南3kmに所在するさぬき市寒川町の大末古墳群で出土した壺棺（第273図）に類似する。寒川地域との関係を示唆する資料であるなお、15も7と同様の胎土であることから、同一個体と考えられる。



第22図 円形周溝墓ST01 平・断面図

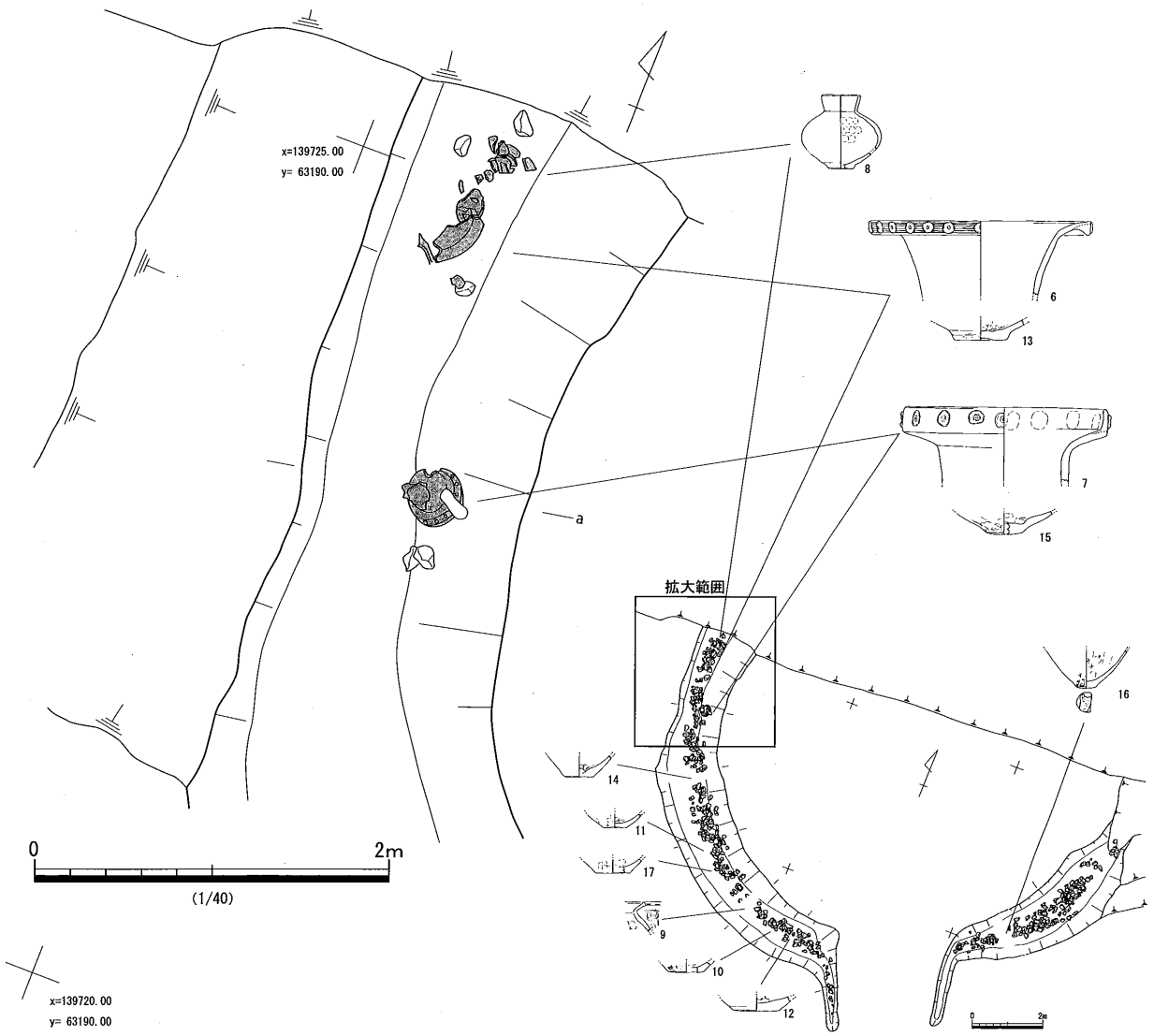


第 23 図 円形周溝墓 ST01 等高線図

8 は、小型の直口壺である。底部はやや上げ底気味の平底で、体部は扁球状を呈し、口縁部は短くやや外傾気味に立ち上がる。体部上半内面には顕著な指圧痕が残る。器面の摩滅のため、そのほかの調整は不明である。胎土は明るい茶褐色系で、赤色粒が目立つ。また、角閃石と考えられる小粒の黒色粒がある。高松平野香東川下流域産の所謂「下川津Ｂ類土器」（大久保 1990）と比較すると、口縁部が短いことと、赤色粒の含有が多いことが若干異なる。

9・10 は同一個体と考えられる甕口縁部・底部片である。口縁部と体部との境の屈曲は緩やかで、口縁端部は上下に僅かに拡張して端面に刷毛状工具によるナデが施される。底部は平底で、体部から底部にかけての外面には縦ハケが顕著である。色調は赤橙色を呈し、砂粒の含有は少ない。

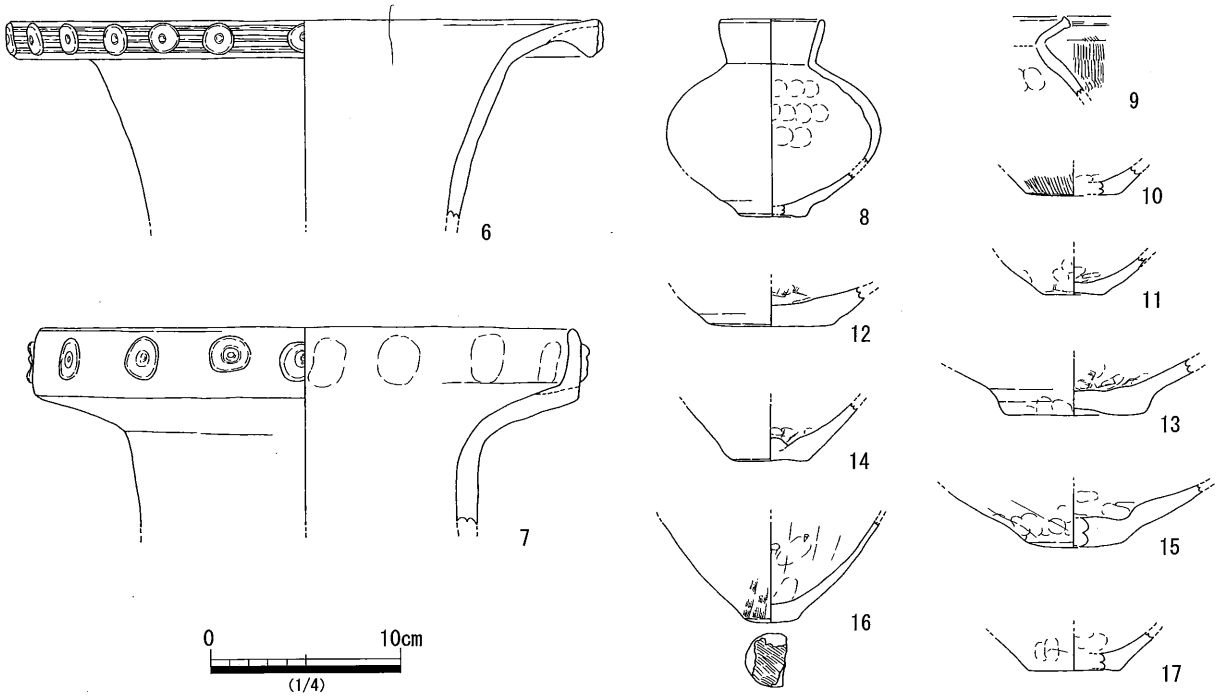
11 は鉢もしくは壺と推定される底部片である。底径は小さく、底縁の稜線は鈍い。器壁はやや薄手で、内面底に指圧痕が目立つ。12 は壺と推定される底部片である。底径が大きく、底面が肉厚。大粒の砂粒・赤色粒が目立つ。14 は甕と推定される底部片である。平底で、内面に絞り目が残る。胎土は大粒の砂粒・赤色粒が目立つ。16 は鉢と推定される底部片である。底径は小さいが、安定した平底である。口



第 24 図 円形周溝墓 ST01 周溝内出土遺物分布図

縁部は遺存しないが、遺存部の器壁が極めて薄いことから、直口鉢と推定される。17 は壺と推定される底部片である。底縁の稜線が緩やかで、器壁は薄い。淡褐色系のきめ細かい胎土で、角閃石と推定される砂粒を含む。「下川津Ｂ類土器」の可能性が高い。

以上の土器は、10 ～ 17 の平底を基調とする底部形状や、9 の甕の口縁部形状からみて弥生時代後期後半新相に一般的な土器様相である。また、6 の吉野川流域産壺は、阿波編年（近藤 2001）の様相４（後期後半新相）に相当する。さらに、7 の複合口縁壺に類似する大末古墳群出土壺棺は、後述のとおり後期後半新相と推定できる高杯（第 273 図）と共伴する。総合的に見て、当該遺構は弥生時代後期後半期新相に位置づけられる。



第 25 図 円形周溝墓 ST01 出土遺物

極楽寺東古墳 ST02（第 26・27 図）

ST02 は、A 地区東丘陵北側先端部に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地「極楽寺東古墳」南側周濠である。調査対象地となった旧田地は、周辺田地より 1 mほど地下げされており、その東側法面において、地下げ前の周濠約 3 m分と、地下げ面の耕土直下で延長 6 m分の周濠基底部を検出した。平面的には緩やかな円弧を描くことから、当該古墳は円墳と考えられる。断面図では、6 層から下位が周濠埋土である。検出部で最大の深さは 1 m、最大幅は 4 mをはかる。堆積層の下位の 10・11 層は地山ブロックを比較的多く含む初期堆積層、8 層・9 層は黒色味の強い粘土層で墳丘構築後長期にわたって開放状態にあった周濠の堆積層と考えられる。6 層・7 層は古墳周辺の平坦化に伴う埋め戻し土である。周辺遺構から推定して、中世 14 世紀ごろの埋め戻しと考える。

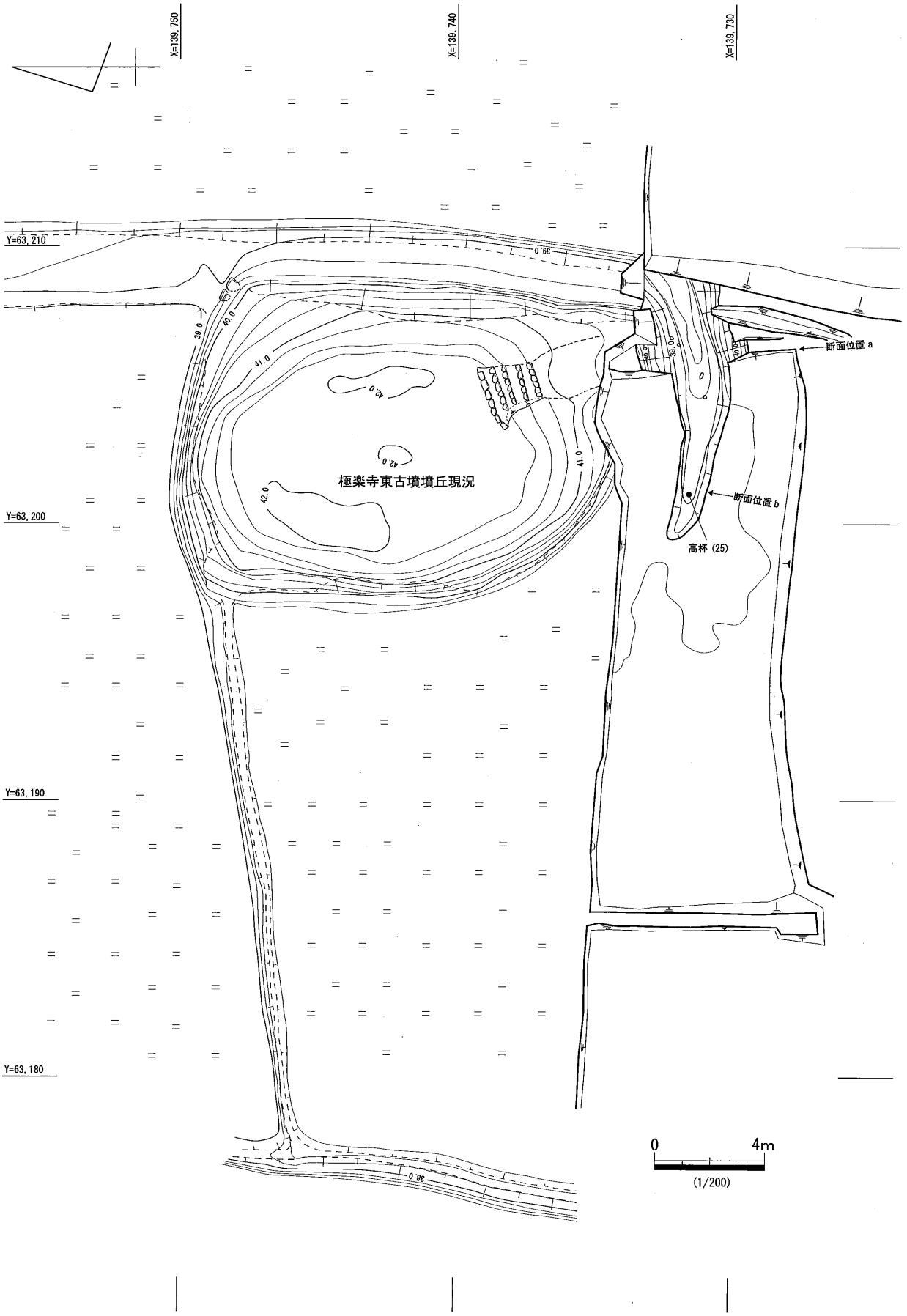
調査にあわせて墳丘測量を実施した。その結果、墳頂部から周濠内側基底部までの距離は 11 mと判明した。したがって、当該古墳の墳丘直径は 22 mと推定する。また、現況の墳頂部から周濠基底部までの高さは 3.8 mをはかる。

周濠基底から約 10cm 浮いて、須恵器の長脚高杯片が出土した。また周濠埋土から大小の破片が出土している。

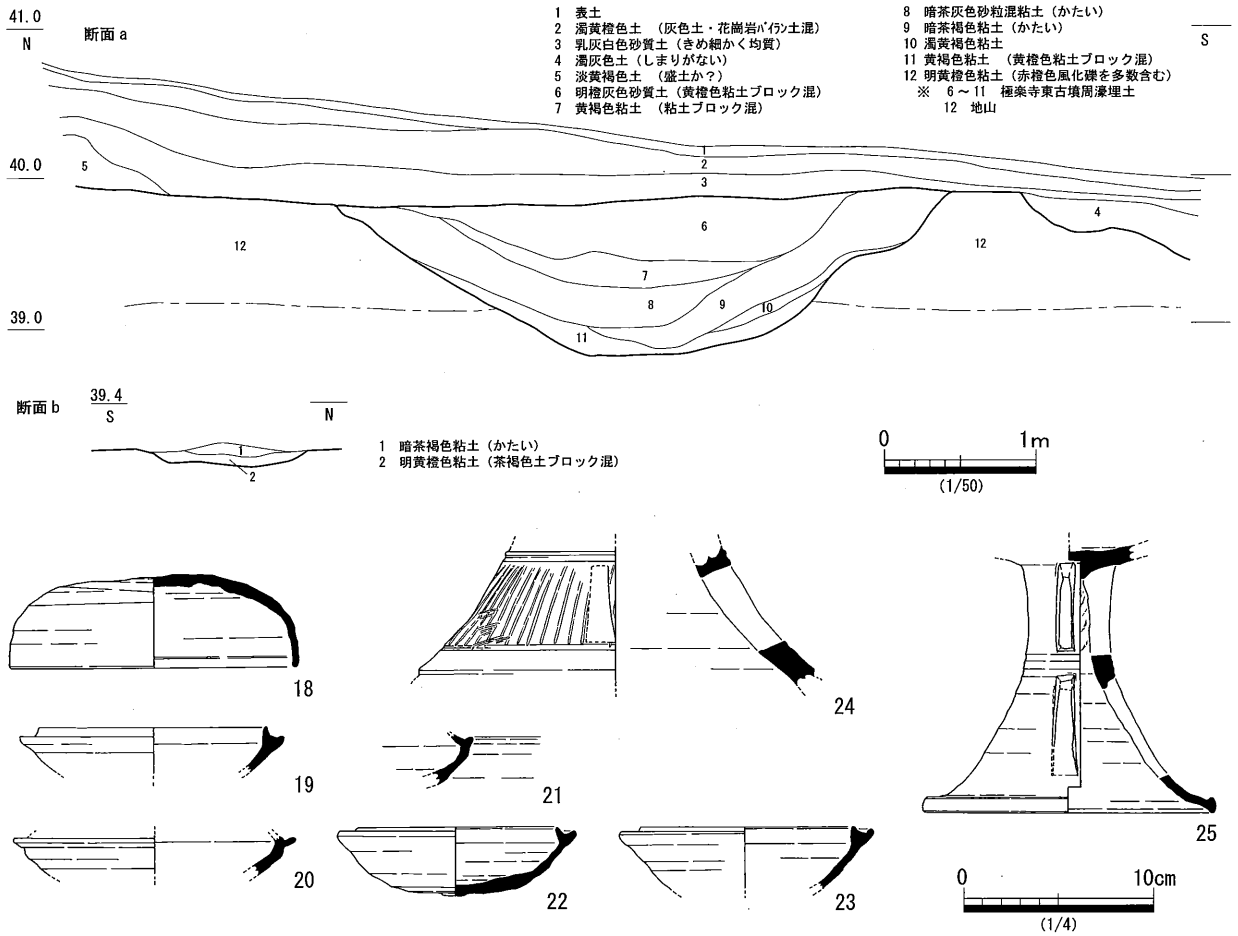
なお、今回の調査地に近接する墳丘西側田地では、平成 7 年度に旧長尾町教育委員会による発掘調査が行われた。周濠の延長部が検出され、多量の須恵器片や、元来石室内に副葬されたと推定される馬具などが出土している。したがって、当該古墳の石室開口部は南西側にあったものと推定する。

＜出土遺物＞

18 の須恵器杯蓋は周濠上部の客土層より出土した。口縁部と体部の器形境および口縁部内面の段が痕跡化するもので、陶邑編年 TK10 新相を上限とする。19 ～ 23 は口径 12 ～ 14cm の須恵器杯身である。いずれも周濠埋土層より出土した。陶邑編年 TK209 ～ TK217 に収まる。24 は須恵器器台、25 は周濠基底部より出土した長脚 2 段透かしの高杯脚部片である。脚端部が上下に拡張されており、TK10 新相～



第 26 図 古墳 ST02（極楽寺東古墳）墳丘測量及び周濠平面図



第 27 図 古墳 ST02 断面図及び出土遺物

TK209 に相当する。

以上の出土遺物とその年代幅により、極楽寺東古墳は陶邑編年 TK10 新相（6 世紀後半～末）に構築され、陶邑編年 TK217 （7 世紀中葉） まで追葬が行われたものと考えられる。

古墳 ST03（第 28 ～ 43 図）

A地区東丘陵の南西斜面で検出した横穴式石室墳である。墳丘は滅失して田地化されているが、周濠の東側一部と石室基底部が遺存する。

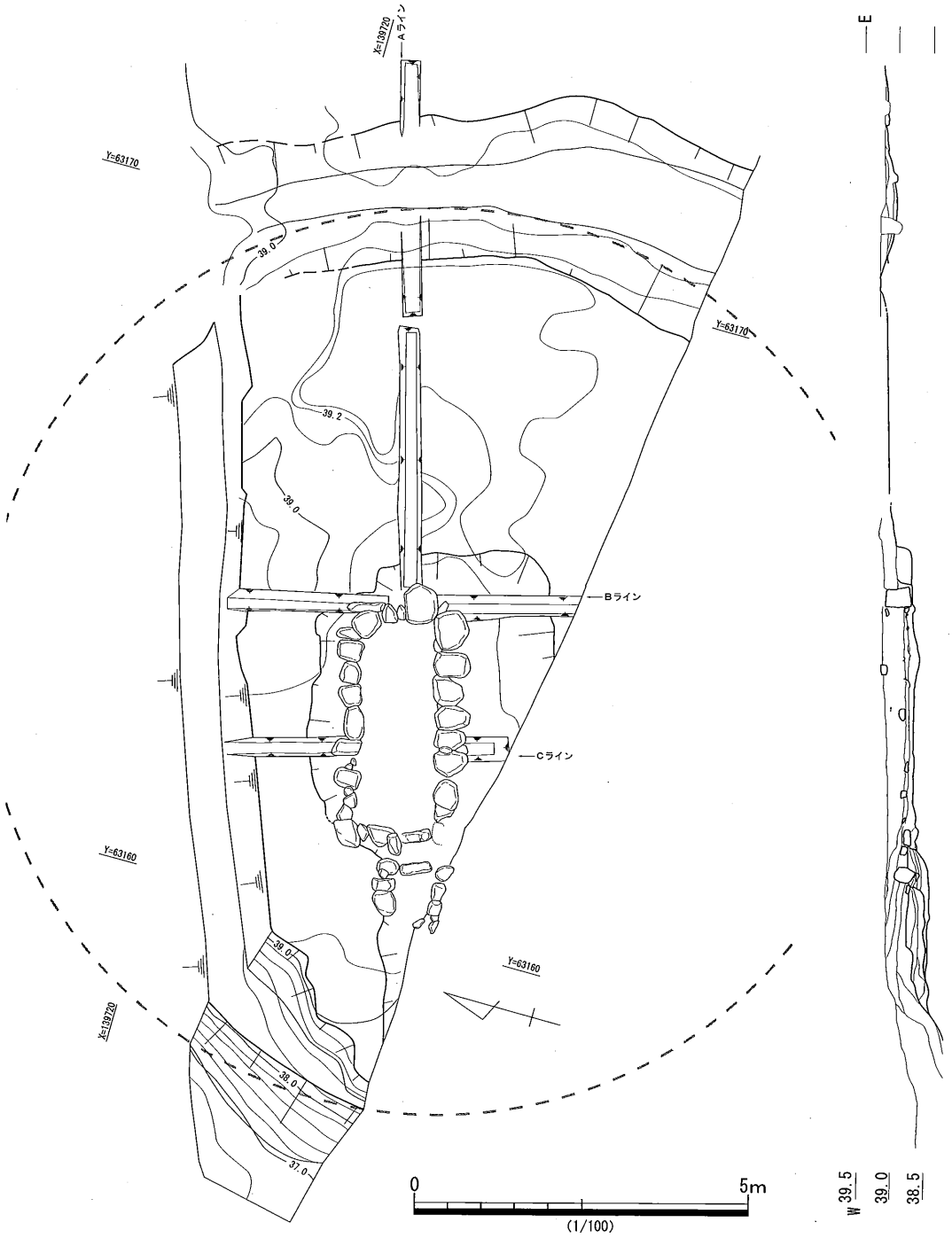
＜墳丘＞

墳丘基底部直径は現存する範囲で計測して 14.3 mである。玄室中央点と墳丘中心点がほぼ一致する。石室は右片袖式の横穴式石室で、玄室と羨道の一部が遺存する。石室を構築する石材は基底石から２石目までが残り、羨道部は３石目までが残る。羨道部床面は基底石下端より 0.2 ～ 0.25 m溝状に掘り下げられ、排水溝もしくは墓道として機能したものと推定される。墳丘裾との接続部は調査対象地外となるため不明だが、羨道部の溝跡が緩やかに広がって墳丘下部の傾斜に収束する可能性が高い。

墳丘構築前の旧地表は北西に向かって 10 mにつき１m下がる緩斜面である。土層断面から復元される墳丘構築手順は概ね次の４段階に区分することができる。

－第１段階－

まず、石室掘り形掘削と墳丘外周部の盛土を並行して行う工程である。Cライン断面では、旧地形が下降する北西側（図の右側）に地山に良く似た黄橙色系土が認められる。この黄橙色系土は、上下２層

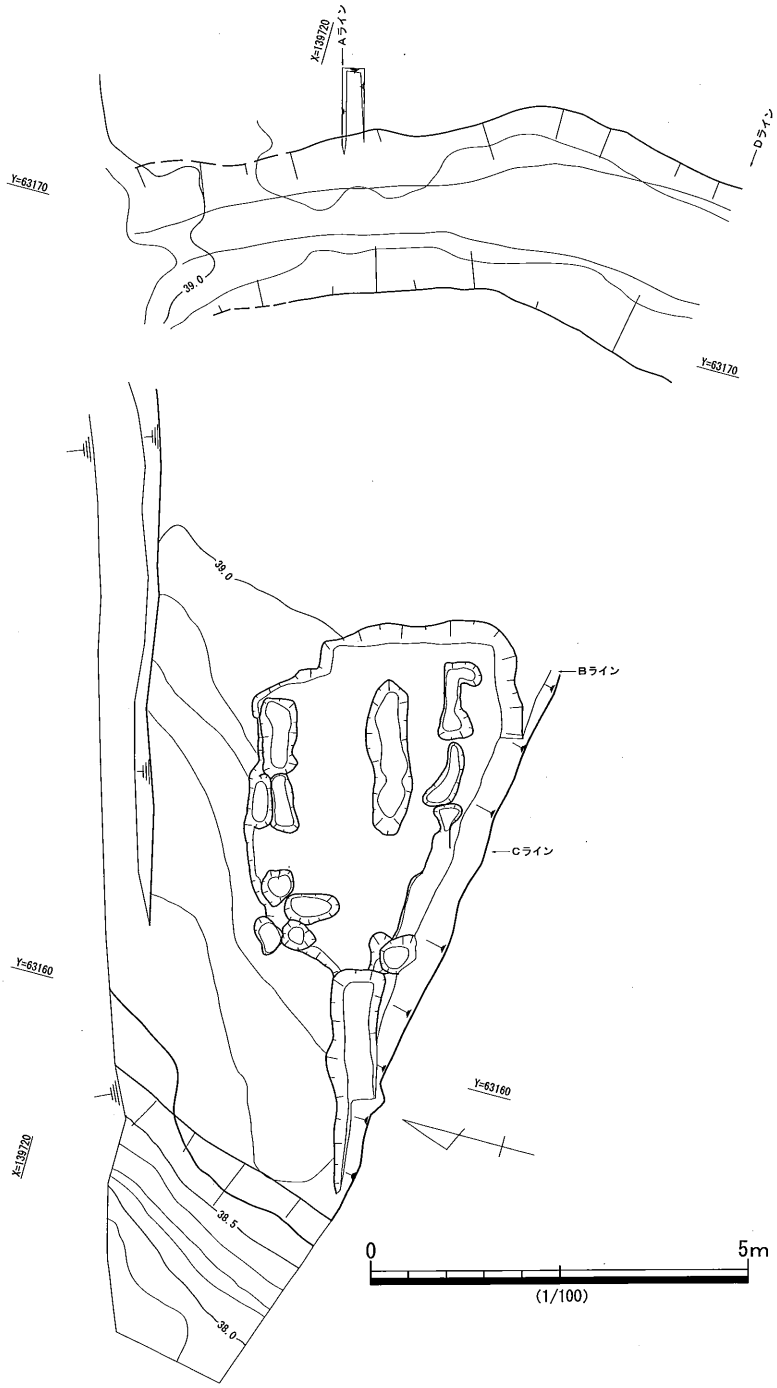


第 28 図 古墳 ST03 平・断面図

に分けられ、間層に灰黒色系土が薄く置かれる。この層より下位が初期盛土である。石室掘り形掘削時に排出された土を、掘り形肩部から約 0.6 m外側に盛土したものである。この段階で、石室掘り形の窪みとその周囲に標高約 38.8 mの平坦面が形成されたと推測できる。石室掘り形は、東西（主軸）長さ 4.6 m、南北幅が 3.5 mである。羨道部の溝は南北幅の中心よりやや北側に取り付く。

－第 2 段階－

第 2 段階は石室構築に先行して、石室掘り形の埋め戻しを行う工程である。石室基底石は、第 1 段階で生成された石室掘り形の中で、北に偏って配置されている。したがって、Ｂライン断面 7 ～ 13 層に



第 29 図 古墳 ST03 旧地形及び石室掘り方

示したように、細かなピッチで版築状に盛土を締めながら南側の空閑部を埋め戻したものと考えられる。Ａライン 31 層やＢライン 5 層も、ブロック状の土層であり、石室基底石の配置前に一旦掘り形を埋めたことを示す。これにより、石室掘り形が半分ほど埋まり、構築される石室の設計にあわせて掘り形が形状変更されたものと考えられる。

－第 3 段階－

第 3 段階は石室基底石の配置である。Ｂライン 4 層やＡライン 30 層などは、基底石にあわせて掘り形内の土層を削って調整した際の置き土と考える。

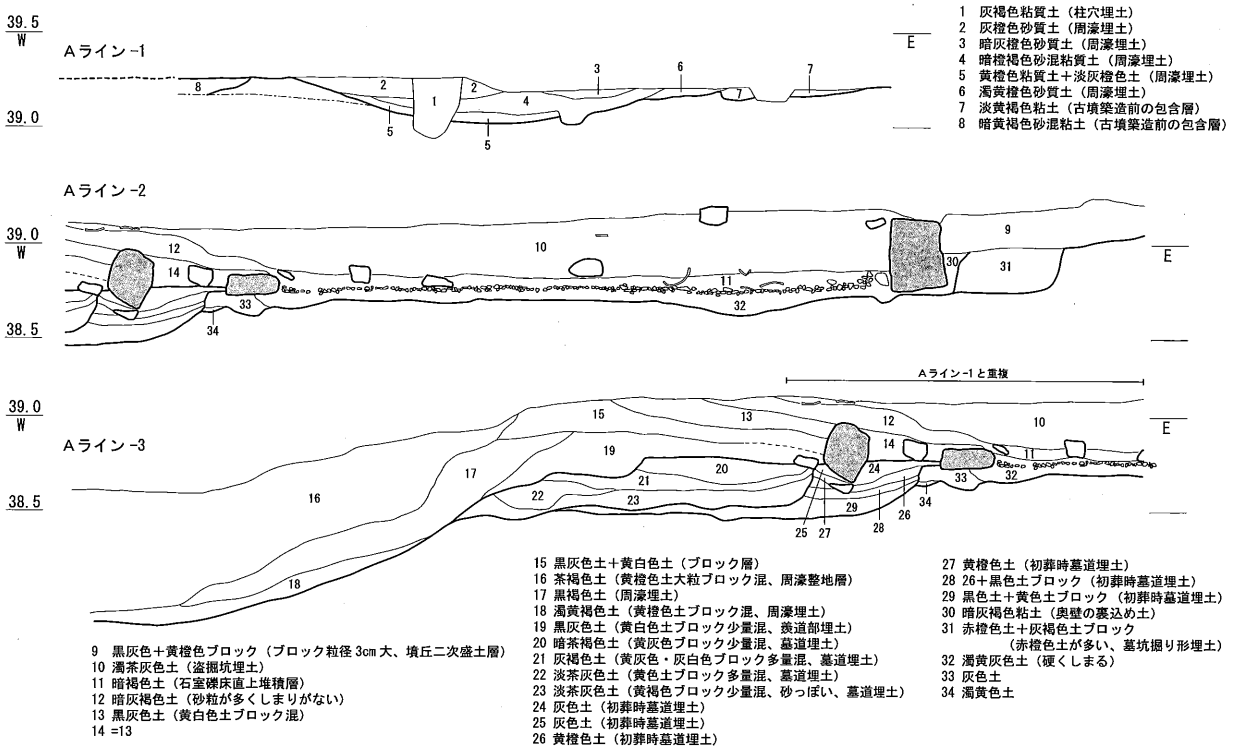
－第 4 段階－

第 4 段階となる基底石配置後は、Ｂライン 1 層やＡライン 7 層のように、黄色系土が一度に盛られ、合わせて 2 石目から上の石室が構築されたものと考えられる。この盛土に使用した土は、地形的に高所となる墳丘東側の周濠を掘り下げることによって賄われたと推測する。

以上の墳丘構築工程では、第 2 段階とした掘り形を半分埋め戻す工程が通常とは異なる。掘り形南側の基底石の裏を版築状に締める点は、大型石室墳の石室下部石材の裏込め土に類似し、基底石の補強に相当するが、本遺構の場合は当初の石室掘り形と最終的に構築された石室基底石配置の位置関係が一致せず、一旦掘り形を埋め戻して、基底石にあわせて再掘削している。第 1 段階と第 2 段階の時間差も考慮できる資料である。

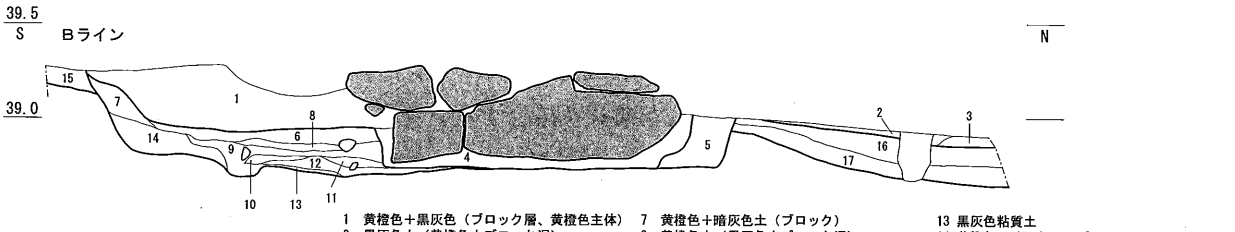
＜石室＞

石室は長さ 3.3 m、幅 1.3 m、残存高さ 0.5 mの右片袖式の横穴式石室である。玄室の石組は 2 段だけが残り、奥壁は幅 108cm、高さ 50cm と、幅 50cm、高さ 34cm の 2 つの安山岩礫で構成される。このうち、小石裏面は、加工した際のノミ痕が残る。側壁は幅 60 ～ 80cm、高さ 20 ～ 25cm の扁平な安山岩を

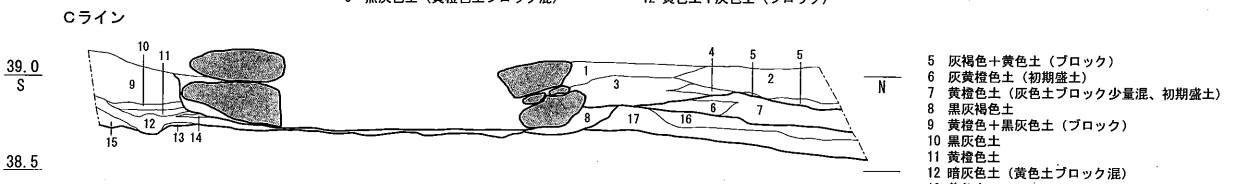


1 灰褐色粘質土（柱穴埋土）
2 灰橙色砂質土（周濠埋土）
3 暗灰橙色砂質土（周濠埋土）
4 暗橙褐色砂混粘質土（周濠埋土）
5 黄橙色粘質土＋淡灰橙色土（周濠埋土）
6 濁黄橙色砂質土（周濠埋土）
7 淡黄褐色粘土（古墳築造前の包含層）
8 暗黄褐色砂混粘土（古墳築造前の包含層）

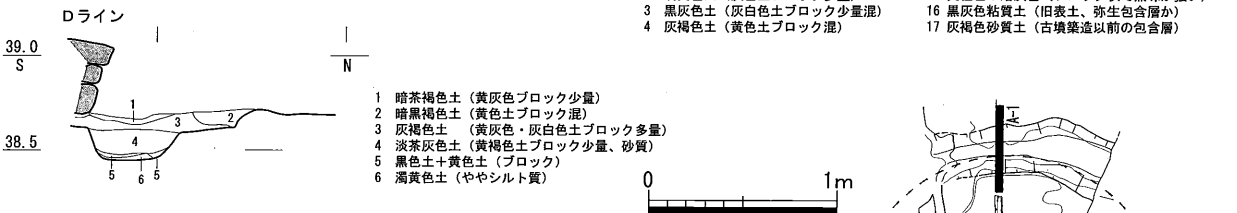
9 黒灰色＋黄橙色ブロック（ブロック粒径 3cm 大、墳丘二次盛土層）
10 濁茶灰色土（盗掘坑埋土）
11 暗褐色土（石室礫床直上堆積層）
12 暗灰褐色土（砂粒が多くしまりがない）
13 黒灰色土（黄白色土ブロック混）
14 =13
15 黒灰色土＋黄白色土（ブロック層）
16 茶褐色土（黄橙色土大粒ブロック混、周濠整地層）
17 黒褐色土（周濠埋土）
18 濁黄褐色土（黄橙色土ブロック混、周濠埋土）
19 黒灰色土（黄白色土ブロック少量混、羨道部埋土）
20 暗茶褐色土（黄灰色ブロック少量混、墓道埋土）
21 灰褐色土（黄灰色・灰白色ブロック多量混、墓道埋土）
22 淡茶灰色土（黄色土ブロック多量混、墓道埋土）
23 淡茶灰色土（黄褐色ブロック少量混、砂っぽい、墓道埋土）
24 灰色土（初葬時墓道埋土）
25 灰色土（初葬時墓道埋土）
26 黄橙色土（初葬時墓道埋土）
27 黄橙色土（初葬時墓道埋土）
28 26＋黒色土ブロック（初葬時墓道埋土）
29 黒色土＋黄色土ブロック（初葬時墓道埋土）
30 暗灰褐色粘土（奥壁の裏込め土）
31 赤橙色土＋灰褐色土ブロック
（赤橙色土が多い、墓坑掘り形埋土）
32 濁黄灰色土（硬くしまる）
33 灰色土
34 濁黄色土



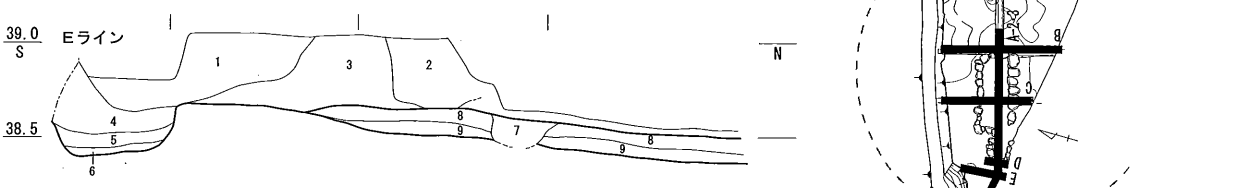
1 黄橙色＋黒灰色（ブロック層、黄橙色主体）
2 黒灰色土（黄橙色土ブロック混）
3 黄橙色土
4 暗灰褐色粘土（黄色土ブロック少量混）
5 黒灰色＋黄色土（ブロック）
6 黒灰色土（黄橙色土ブロック混）
7 黄橙色＋暗灰色土（ブロック）
8 黄橙色土（黒灰色土ブロック混）
9 暗灰色土（黄色土ブロック多混）
10 大粒黄色土 （ブロック状）
11 黄色土 （ブロック）
12 黄色土＋灰色土（ブロック）
13 黒灰色粘質土
14 黄橙色＋暗灰色土（ブロック、黄色土大粒）
15 暗灰褐色砂質土
16 黒灰色粘質土（旧表土、弥生包含層か）
17 灰褐色砂質土（古墳築造以前の包含層）



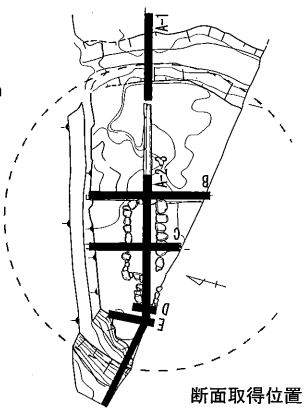
1 黒灰色土（黄色土ブロックは少量）
2 明黄色土（灰色土ブロック少量）
3 黒灰色土（灰白色土ブロック少量混）
4 灰褐色土（黄色土ブロック混）
5 灰褐色＋黄色土（ブロック）
6 灰黄橙色土（初期盛土）
7 黄橙色土（灰色土ブロック少量混、初期盛土）
8 黒灰褐色土
9 黄橙色＋黒灰色土（ブロック）
10 黒灰色土
11 黄橙色土
12 暗灰色土（黄色土ブロック混）
13 黄色土
14 黒灰色粘土
15 黄橙色＋暗灰色（ブロック状で黒味が強い）
16 黒灰色粘質土（旧表土、弥生包含層か）
17 灰褐色砂質土（古墳築造以前の包含層）



1 暗茶褐色土（黄灰色ブロック少量）
2 暗黒褐色土（黄色土ブロック混）
3 灰褐色土 （黄灰色・灰白色土ブロック多量）
4 淡茶灰色土（黄褐色土ブロック少量、砂質）
5 黒色土＋黄色土（ブロック）
6 濁黄色土（ややシルト質）



1 濁灰褐色土 （黄灰色の不規則なブロック混じる）
2 灰褐色土 （黄色土ブロック混 中世包含層？）
3 黒褐色土 （灰白色土ブロック混）
4 暗灰褐色砂質土（黄色土ブロック少量混）
5 黒色土＋黄色土（ブロック）
6 濁黄色土 （ややシルト質）
7 黒灰色砂質土
8 黒灰色粘質土（旧表土）
9 灰褐色砂質土（古墳築造以前の包含層）



断面取得位置

第 30 図 古墳 ST03 断面図

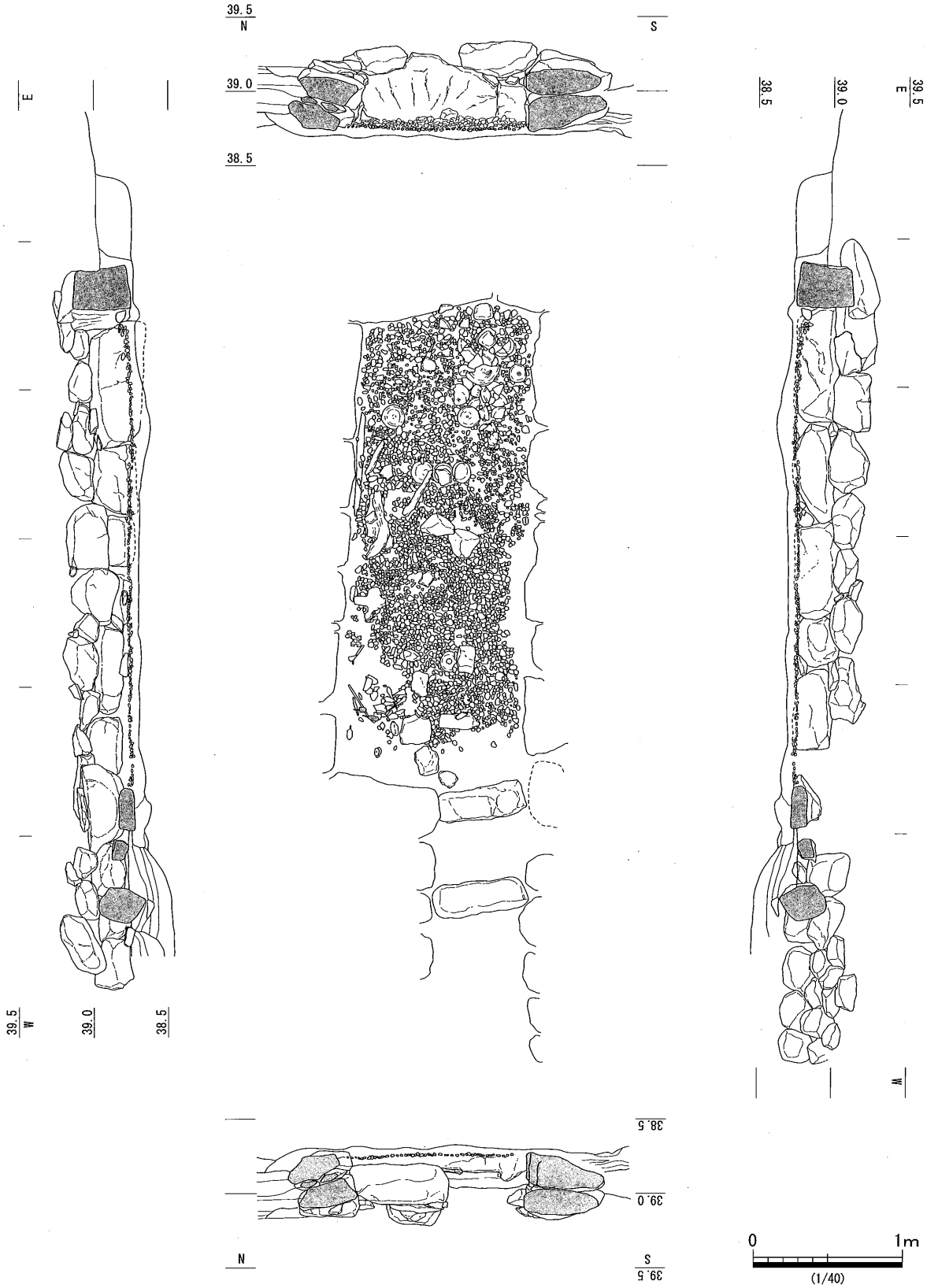
配置する。石室表面側は石材を加工した痕跡は顕著でない。袖石は幅80cm、高さ35cm、奥行き40cmの花崗岩礫である。側壁の石材と大きく異なることなく、横長の石を配置する。したがって立柱による玄門形式ではなく、積石による玄門形式である。玄門床面には花崗岩の柱状石材を横置きし、仕切石とする。玄室床面には3cm前後の大きさの礫をほぼ全面に敷き、礫床を形成する。

羨道部は長さ1.8m、幅0.65mをはかり、側壁の石組は南側に概ね3段、北側は2段が遺存する。ただし、石材の大きさは玄室の石材と比べ2分の1から3分の1程度と小さい。先の玄門部と、そこから0.6m西側の羨道部の2ヶ所に仕切石が置かれる。羨道は玄門の仕切石を境に玄室床面よりさらに0.25m程低く掘り窪め、そのまま西の周濠に接続する。羨道部の仕切石は追葬時に設置されたものとみられ、一旦埋没した羨道および墓道（もしくは排水溝）をその仕切石を境に再掘削した状況が、下層断面で確認できる。

床面南西部は盗掘による撹乱を被るが、同北西部から馬具や武器類及び耳環が、中央部北壁付近には鉄刀や人骨、南東部奥壁付近には集積された須恵器と玉類等多数の遺物が出土した。

ところで礫床面は1面だが、礫床上では転落石とは考え難い13個の石を検出した。これらの石はその上端の高さを同じくする2つのグループに分けられる。奥壁側のものは奥壁付近に破砕して密集する須恵器群の上端と一致し、また玄門側のものは玄門の仕切石の上端と一致する。このことはこれらの石や須恵器が追葬時に棺台として利用されていたことを示唆する。少なくとも1回の追葬がこのように確認でき、さらに複数回の追葬が行われたものと考える。床面出土遺物、特に須恵器杯をみると追葬関係が明らかとなる。須恵器の出土状況および接合関係を第34図に示した。石室南東で破砕された須恵器群中には、3セットの杯の身蓋があり、いずれも破片を接合すると完形に復元できる。同様に破砕された須恵器に提瓶2点（48・49）がある。一方、27・34・32は完形で出土しており、破砕須恵器群の上に置かれた状態で出土している。これらのことから、破砕須恵器群副葬後に一旦片付け行為があったと考えられる。また、玄室中央付近には完形の須恵器杯（26・40）が配置され、その西側には副葬品が分布しない範囲がある。これは最終追葬時に遺体が配置された位置を示している可能性が高く、棺台と推定される石の分布と整合的である。以上のことから、破砕須恵器群の段階（1段階）→完形の須恵器27・34・32が配置された段階（2段階）→玄室西側に最終追葬された段階（3段階）の三時期の埋葬を復元できる。杯蓋以外の副葬須恵器は1段階に提瓶2点（48・49）＋短頸壺1点（46）、2段階に有蓋高杯蓋1点（32）、3段階に無蓋高杯2点（42・43）がある。

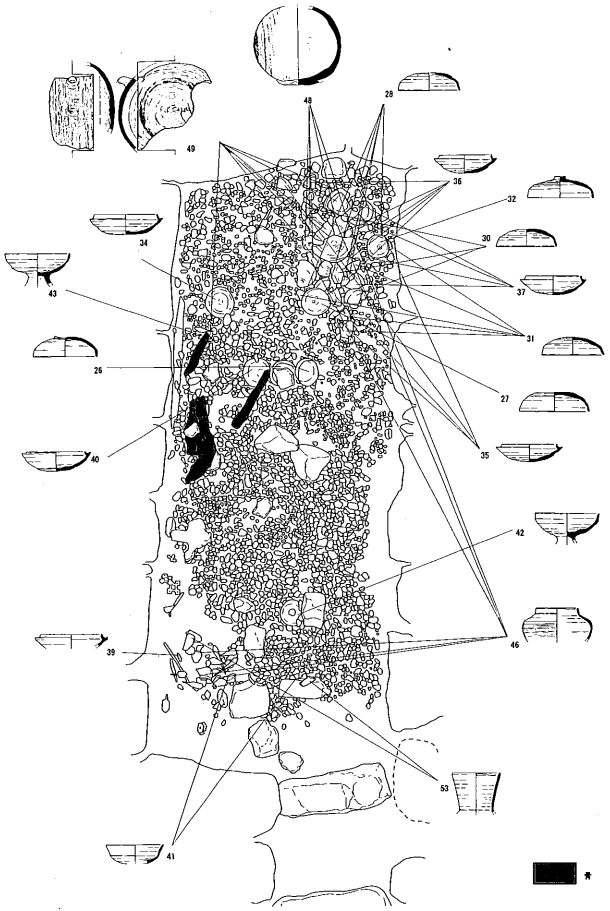
次に鉄器の出土状況をみる。第33図に示したようにA～D群の4群に区分できる。A群は破砕須恵器群周辺の鉄器で長頸鏃3点（102・103・110）がある。B群は鉄刀とその周辺で出土した小片である。C群は馬具を中心とした一群、D群は石室北西隅の鉄鏃を中心とした一群である。B・C群はまとまった状態で出土しており、原位置をとどめている可能性が高いが、D群の鉄鏃は方向が揃わないことから二次的な移動を被っているものと考える。矢柄部分が追葬時に障害となったことが推定できよう。またC群では元来棺内副葬と推定できる耳環が出土しており、B群の横では人骨片が出土している。これらのことから、1段階（初葬時）には玄室のほぼ中央北よりに棺を配置し、棺外右（北）側縁に東から鉄刀・馬具・矢の順で配置、棺外左奥（南東）に須恵器の一群（破砕須恵器群）を配置したものと考える。2段階には玄室奥の須恵器を破砕し、これを棺台として転用、周辺のA群鉄器を副葬したものと考える。棺の位置は玄室左奥寄りであろう。3段階では玄室手前に棺を配置し、第1段階の棺内遺物を右側壁沿いに片付け、棺の配置に障害となった矢の一群も右側壁にまとめたものと考える。



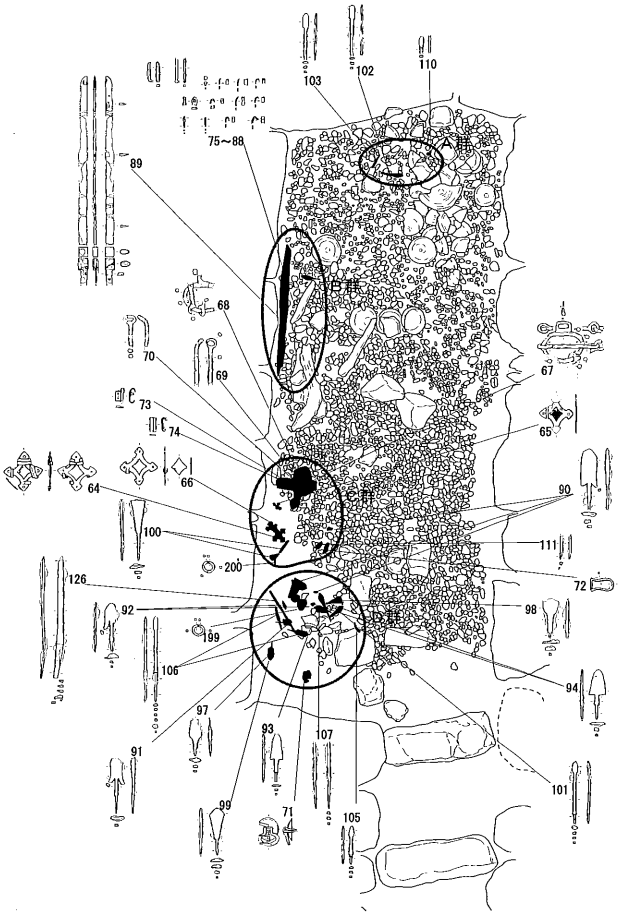
第 31 図 古墳 ST03 平･断面図

＜出土遺物＞

26 ～ 33（32 を除く）は須恵器杯蓋である。口径 12.5 ～ 15.2cm で、口縁部と体部の器形境の段がすでになく、口縁端部内面の段もみられない。体部上半は回転ヘラ削りをとどめるものが多いが、26 は



第 32 図 古墳 ST03 人骨・土器出土分布図



第 33図　古墳 ST03 鉄器出土分布図

天井部ヘラ切り後未調整である。34 ～ 40 は須恵器杯身である。34・38 はかえりがやや長く、直線的に内傾する。その他は、かえりが短く外反する形態である。底部は回転削りを残すものが多いが、40 は底部ヘラ切り後未調整である。

身と蓋のセット関係は、26・40 が受部に残る重焼痕で接合することから完全なセット関係をもつ。31・35、28・37、30・36 は接合関係はないが、微妙な焼成変化などが一致しており、生産地におけるセット関係を維持している可能性がある。一方、27・34 は他の杯蓋と異なり、口径が一回り大きく、色調が蓋と身で異なる。少なくとも生産地におけるセット関係は維持しない。

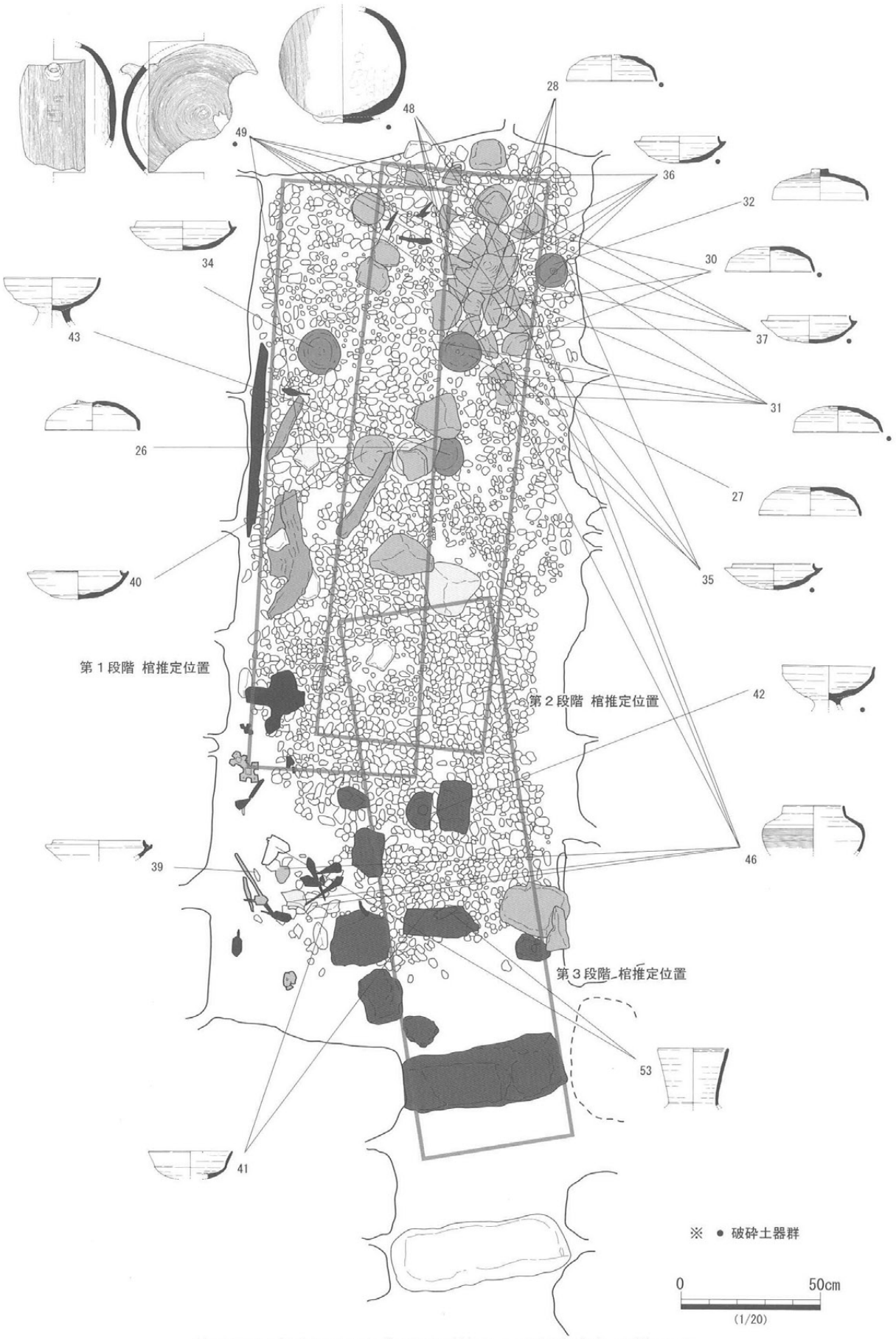
32 は須恵器有蓋高杯の蓋である。ただし、有蓋高杯本体は出土していないことから、単体で副葬されたものと考える。天井部に短い円柱状把手があり、カキ目で体部上半を調整する。

41 ～ 43 は須恵器無蓋高杯体部である。また 44 は土師質焼成の無蓋高杯体部片である。41 は破片資料で、口縁部下端の段が明瞭で自然釉が目立つ。42・43 は淡灰色系の焼成不良品である。脚部片が出土していないことから、脚が欠損した状態で持ち込まれているものと考える。44 は土師質だが、杯部下半をカキ目調整し、口縁部下端に鋭い段をもつなど、須恵器の整形技法に共通する。

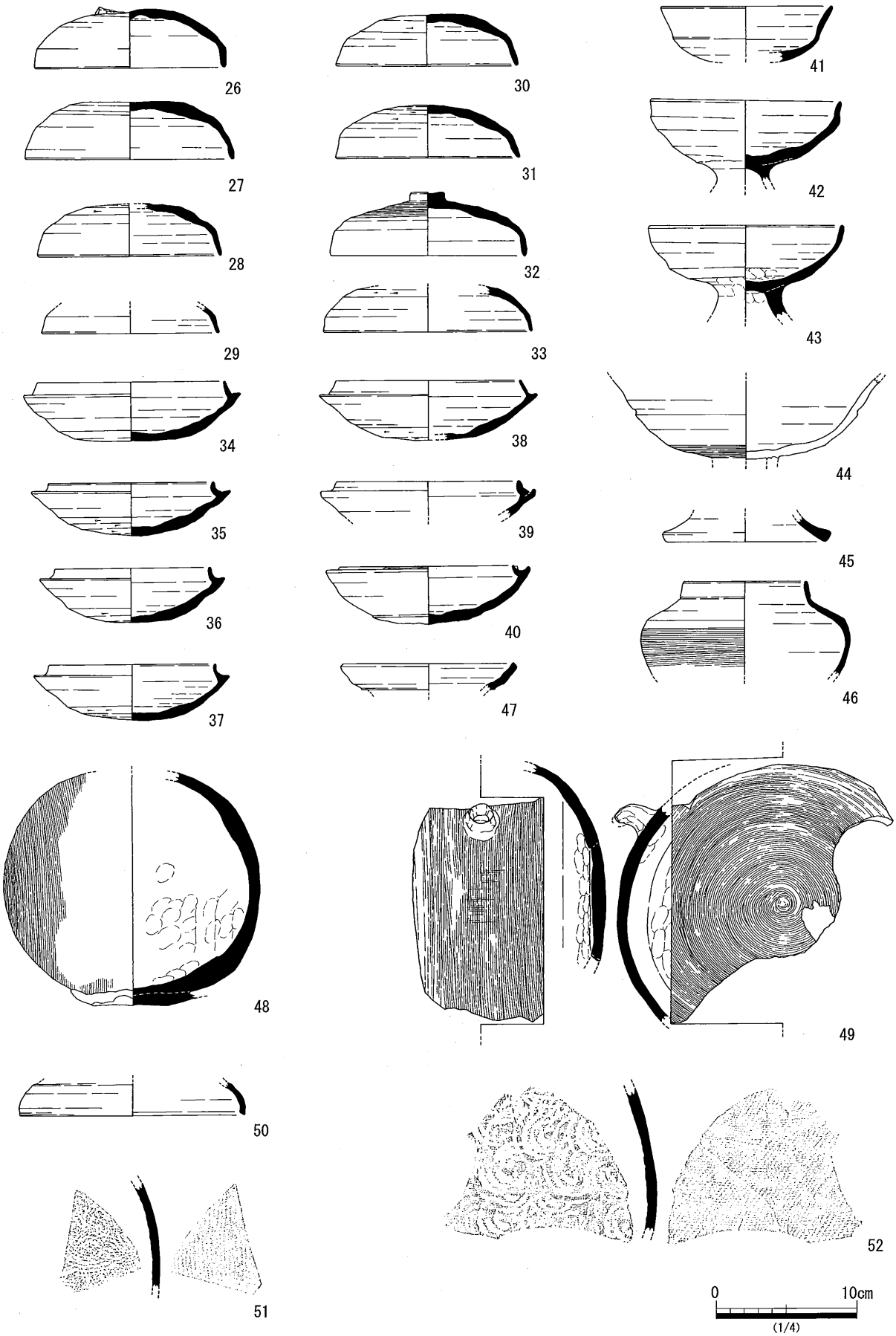
45 は須恵器高杯脚端部片だが、胎土・焼成からみて 41 ～ 43 の脚端部には該当しない。

46 は須恵器短頸壺である。48・49 は石室内出土の提瓶、50 ～ 52 は羨道部埋土から出土した杯蓋・甕体部片である。

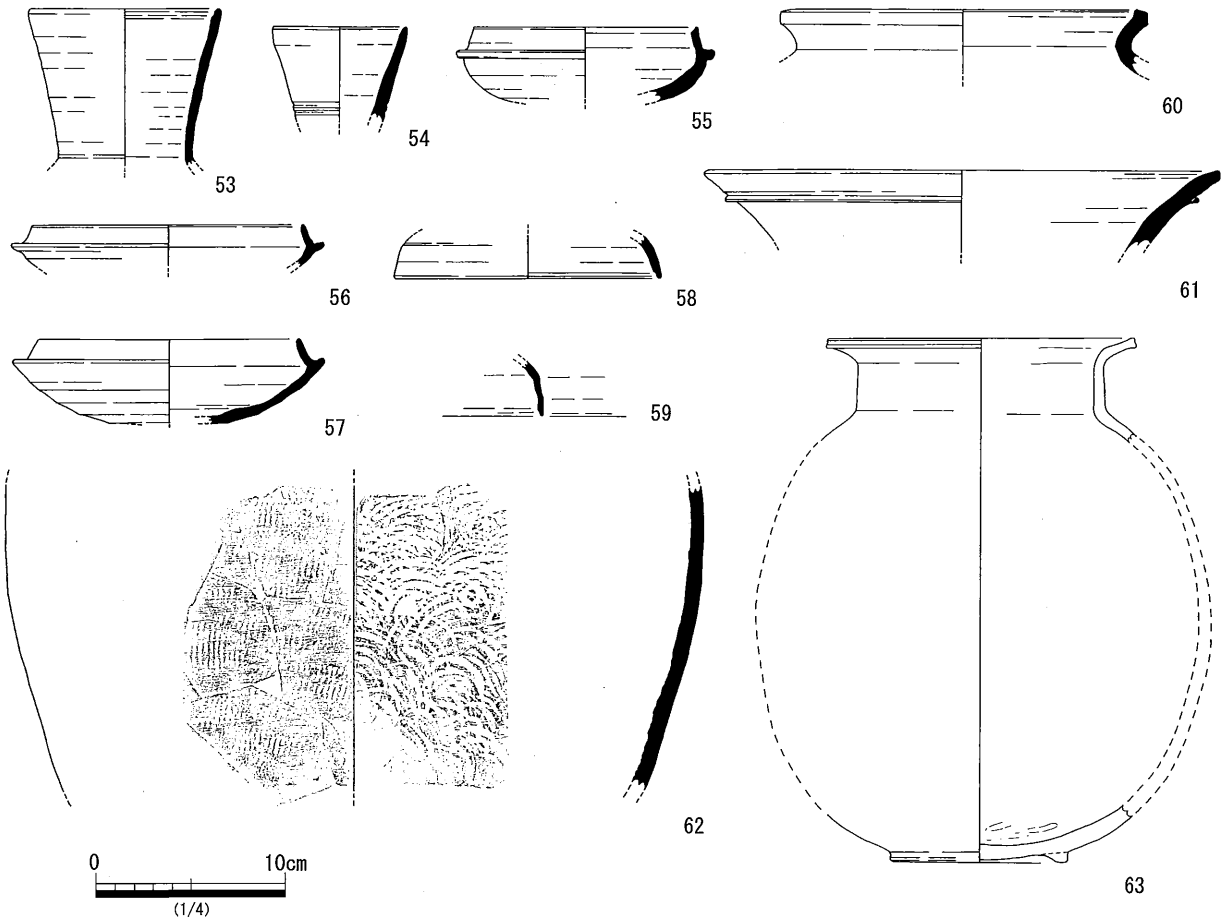
53 は石室内出土、54 は上面精査中出土の直口壺である。55 は古墳周辺精査で出土した須恵器杯身。



第 34 図 古墳 ST03 副葬品及び棺台から想定される棺配置



第 35 図 古墳 ST03 出土遺物 (1)



第 36 図 古墳 ST03 出土遺物 (2)

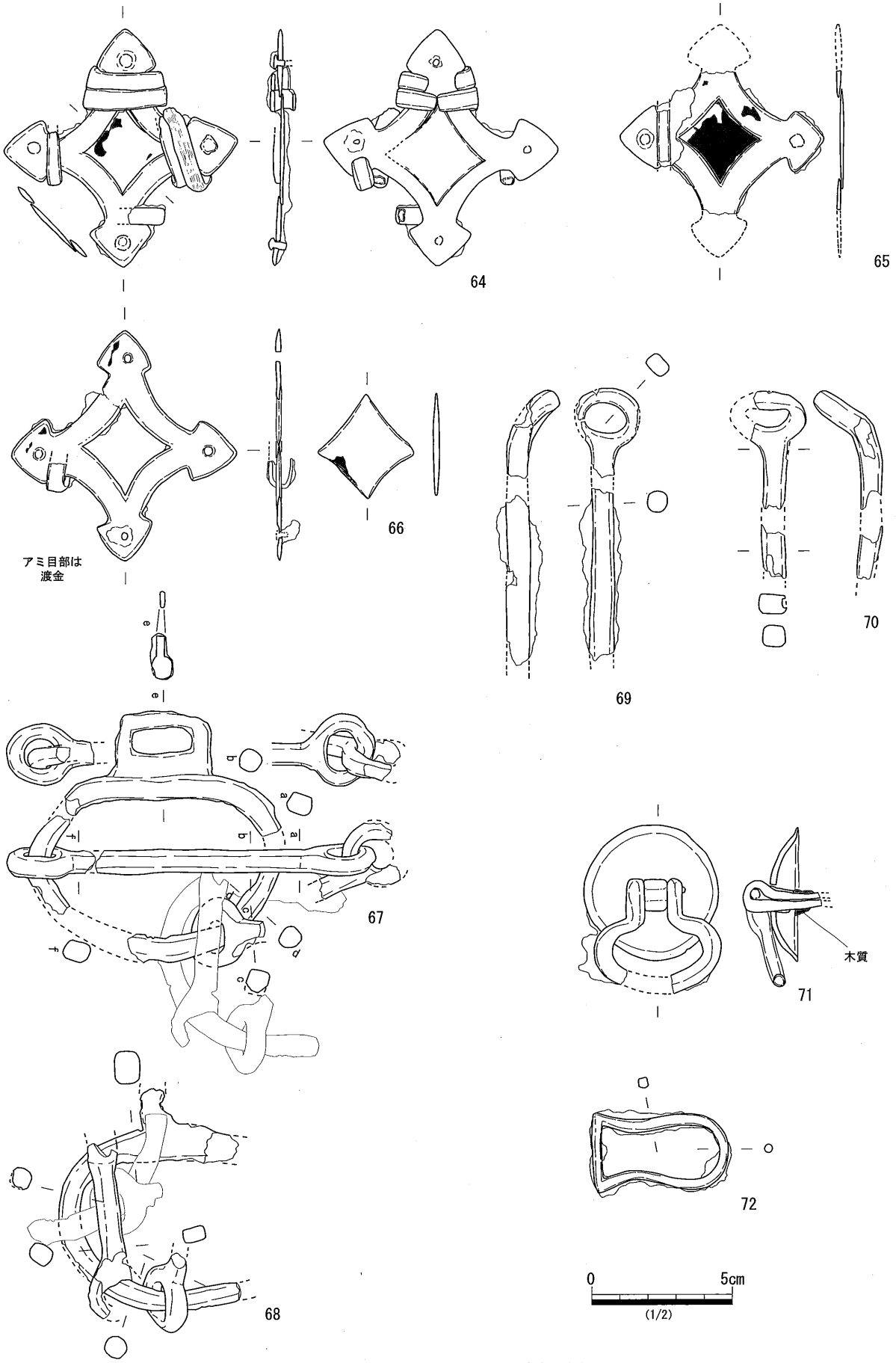
56 ～ 58 は石室掘り形内より出土した須恵器杯である。59 は周濠出土の須恵器杯蓋片。これらの杯は、口縁部内面に僅かに段をとどめ、口縁部と天井部境にも段が残る。石室内出土須恵器杯と比べやや古相を呈する。

60・61 は古墳上面精査中出土の須恵器壺・甕口縁部片である。いずれも小片であり、当古墳に伴うか明らかでない。

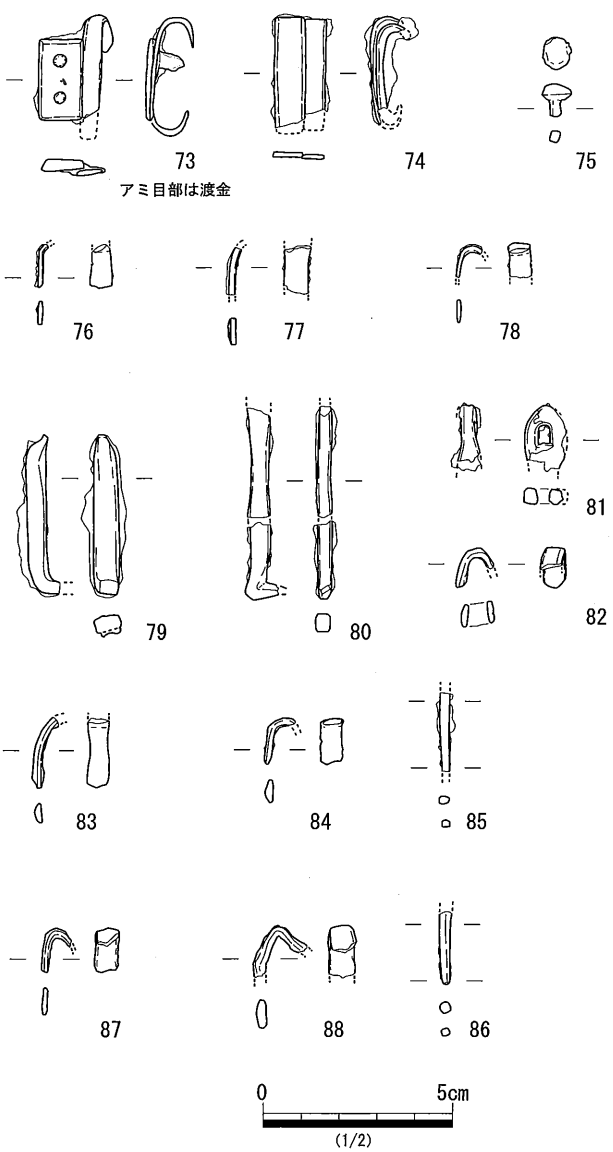
62 は周濠出土の須恵器甕体部片、63 は周濠出土の土師器壺である。63 の壺は、口縁から頸部に古式土師器の形状をとどめるが、同一個体と考えられる底部は高台状の輪状粘土帯の貼付がみられる。体部は長胴と推定できる。胎土は精良な赤褐色系土で、後述の土壙墓 ST05 出土短頸壺（278）に類似する。

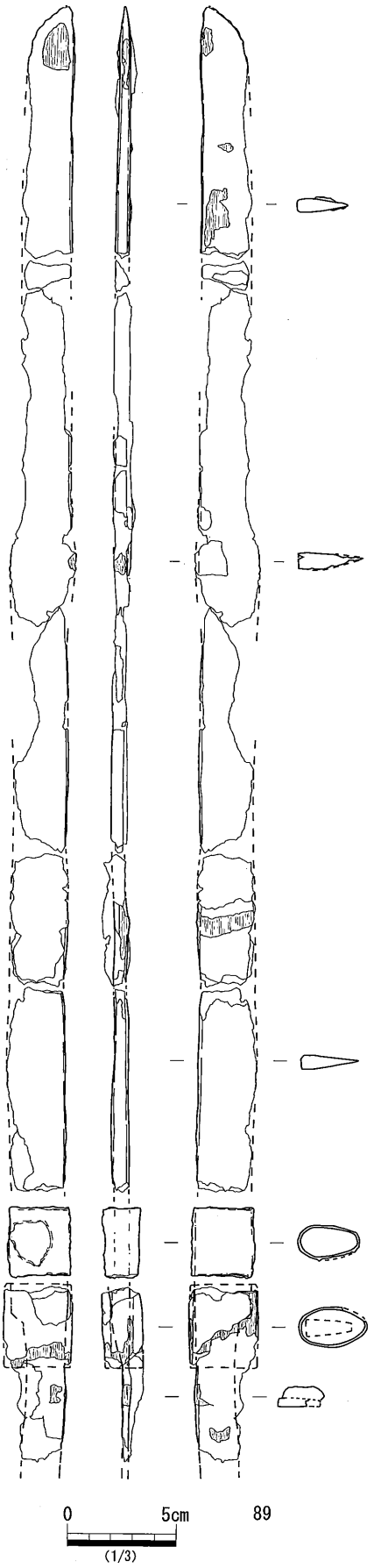
石室内より出土した須恵器杯は、床面の追葬の検討に合致して、グルーピングが可能である。玄室南東隅で破砕状態で出土した 31・35、28・37、30・36（A群とする）、それらの破片の上部に位置する 27・34（B群とする）、そして須恵器杯類で最も玄門よりで出土した 26・40（C群とする）の３群である。副葬の先後関係はA→B→Cの順である。和泉陶邑窯跡 TK209 から TK217 にかけての須恵器に対応するものと考えられる。ただし、A群の杯蓋の口径が 13cm、B群が 15cm、C群が 13.3cm で、陶邑の杯法量の時間的な変化に必ずしも一致しない。

64 ～ 88 は石室内出土の馬具である。素環鏡板２点（67・68）、引手金具２点（69・70）、馬銜といった轡関係（67・68 に付属）が一式、鞍金具（71）、鋲具（72）そして鉄地金銅張の組合せ式板状辻金具（64 ～ 66）３点、同じく鉄地金銅張の雲珠脚部推定品（73）、そのほか締金具・留金具類（74 ～ 88）が出土



第 37 図 古墳 ST03 出土遺物 (3)

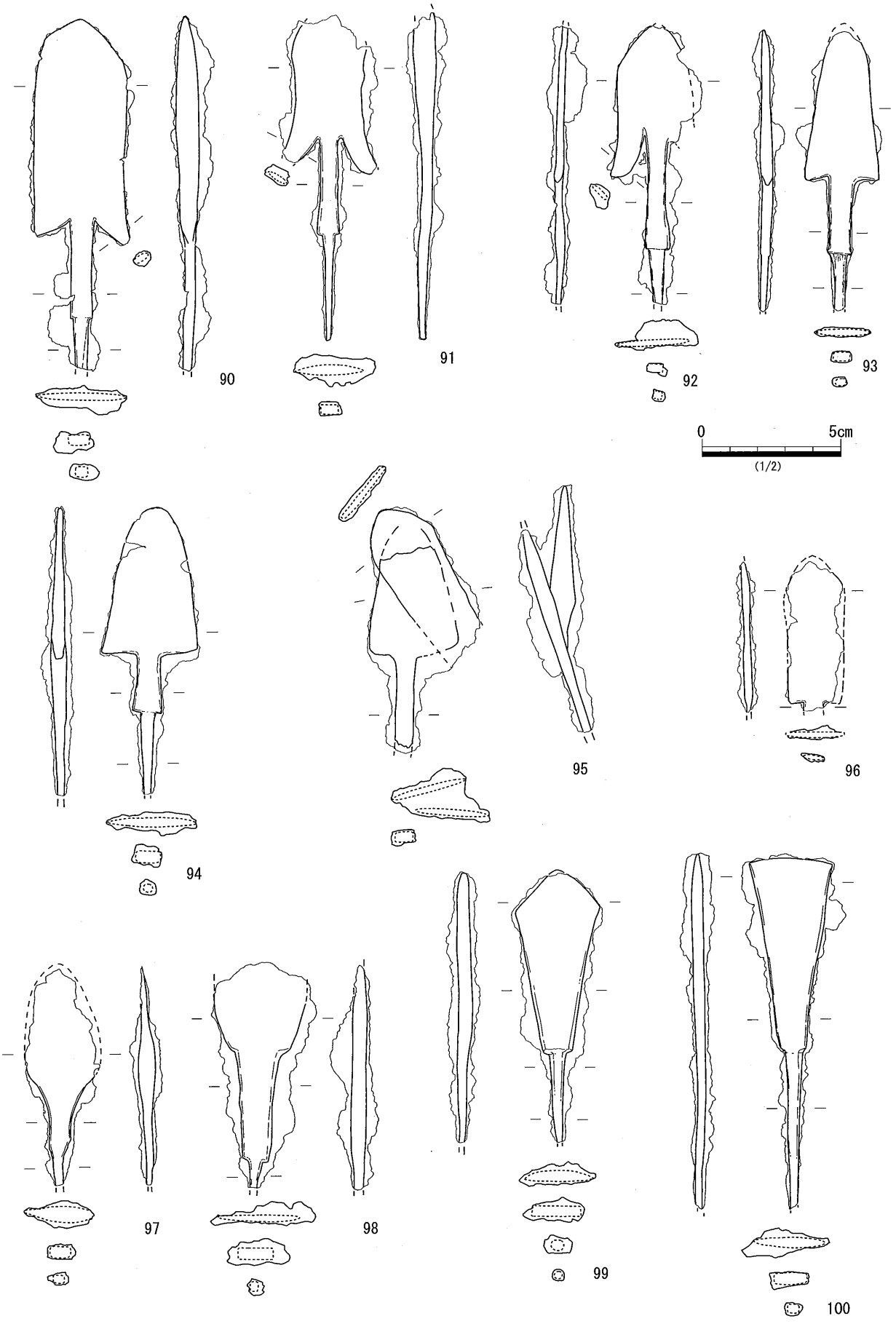




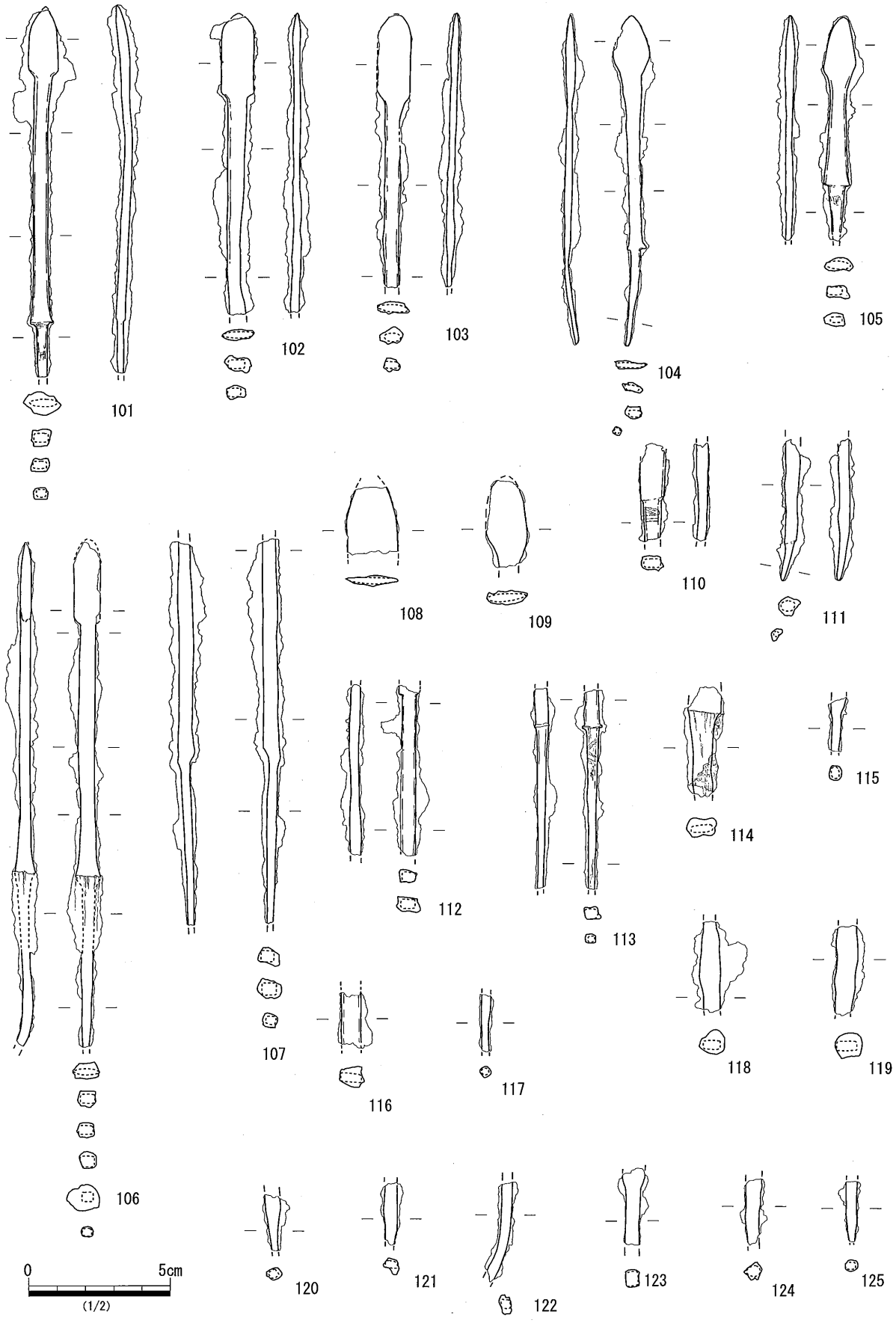
第 38 図 古墳 ST03 出土遺物 (4)

している。

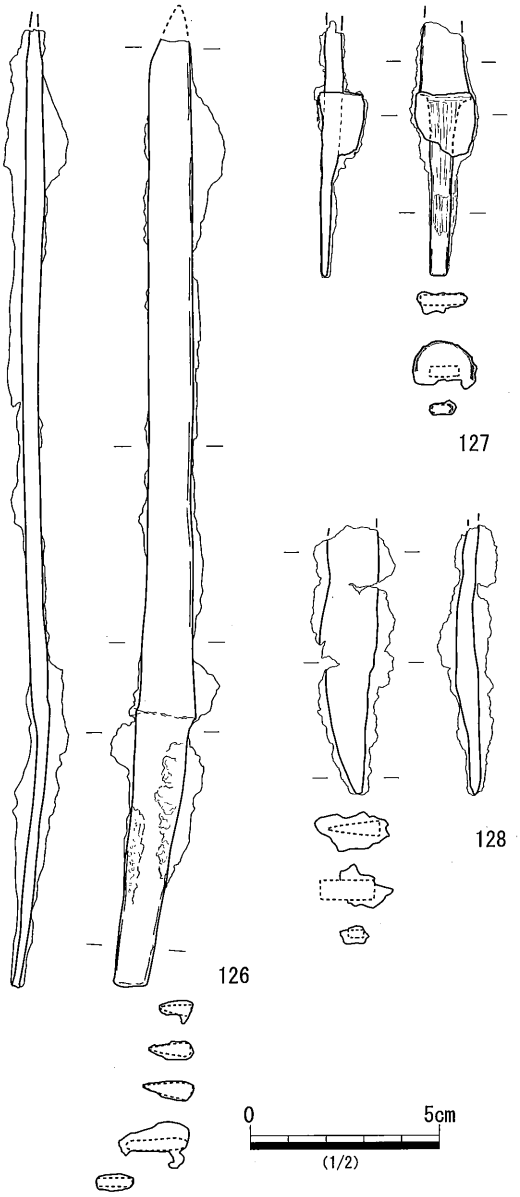
このうち、64 ～ 66 の組み合わせ式辻金具は、本体が中窓形状の菱形で、各頂部に剣菱状突起を作出する。括れ部に２帯１セットの締具を取り付けて、中窓の菱形鉄板と革紐を固定し、さらに剣菱状突起の中央の鋲で革紐を固定する構造である。金具本体と、中窓鉄板には鍍金を施す。出土した際にはそれぞれの部材がセットになるか、もしくは近い位置で出土している。また、71 の鞦金具は鞍具で、把手部と円形金具の緊縛を兼ねる留金具先端には木質が遺存していたことから、木製鞍が想定できる。67 ～ 70 の轡部材も出土状況からみて、セットとして副葬されており、革紐で連結された馬具一式として副葬されたことがわかる。



第 39 図 古墳 ST03 出土遺物 (5)



第 40 図 古墳 ST03 出土遺物 (6)



第 41 図 古墳 ST03 出土遺物 (7)

89 は石室北側に副葬された鉄刀である。長さ 65cm 以上の直刀で、鞘金具・関金具がある。本体側面の木質遺存状況から見ても、鞘に入った状態で副葬していることがわかる。目釘穴は遺存箇所にはみられず、柄部もさらに長かったものと推定される。

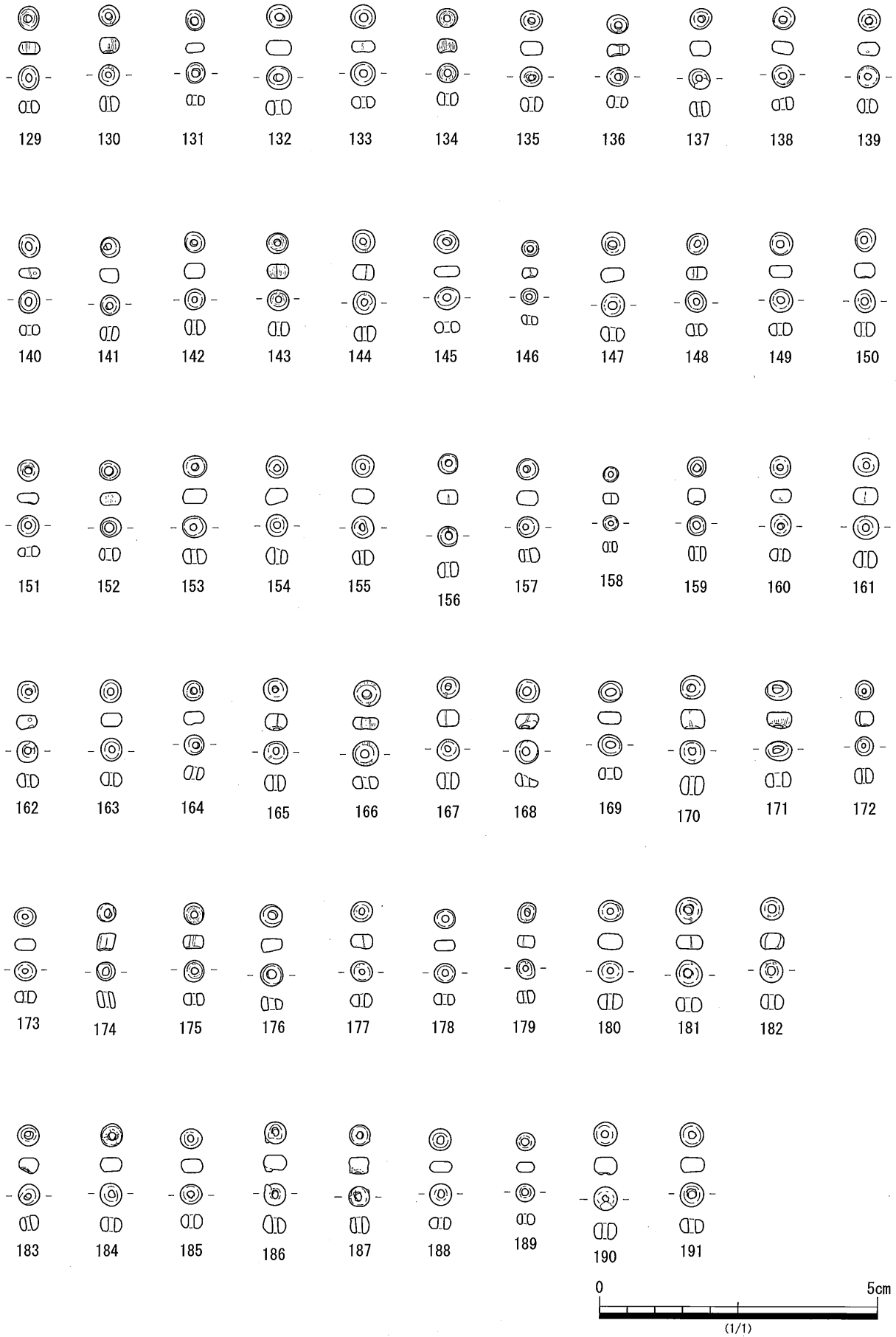
90 ～ 100 は石室内から出土した無頸・短頸の鉄鏃である。90 ～ 92 は鏃身下端の関に腸抉を持つものである。特に 91・92 は腸抉が深く、下端部の外反が顕著である。93 ～ 96 は鏃身下端に平坦、もしくは上向きの関をもつものである。97・98 は鏃身から頸部に向かって緩やかに移行する柳葉系鉄鏃で、98 は鏃身頸部間に僅かな関をとどめる。以上の鉄鏃の頸部はいずれも短く、頸部下端の関は頸部の身幅を維持するもの (90・98)、裾広がりのもの(91・92・94)、稜状突起をもつもの(93)がある。99・100 は無頸鉄鏃で、99 は鏃身先端が圭頭状、100 は平坦である。鏃身下半は側縁に面をもち、茎との境の関はいずれも裾拡張がない。以上の無頸・短頸鉄鏃は合計で 11 個体となる。

101 ～ 125 は石室内出土の長頸の鉄鏃である。108 以降は、接合に至らなかった各部破片を図化したもので、108 以降の個体数は鏃身片と頸茎間関部片がそれぞれ３個体あることから、３点と推定できる。したがって 101 ～ 107 の７点とあわせて、長頸鏃は合計 10 個体となる。これらは長さで３種に区分できる。最も短い 105 は先端から頸茎間関部まで 6cm、104 は 8.3cm、そのほかは 11 ～ 12cm となる。頸茎間関部の形状は裾広タイプと稜線状突起のタイプが併存する。鏃身頸部間関部はいずれも下向きの関形状で、小型の 104・105 は頸部境に稜をもたない。

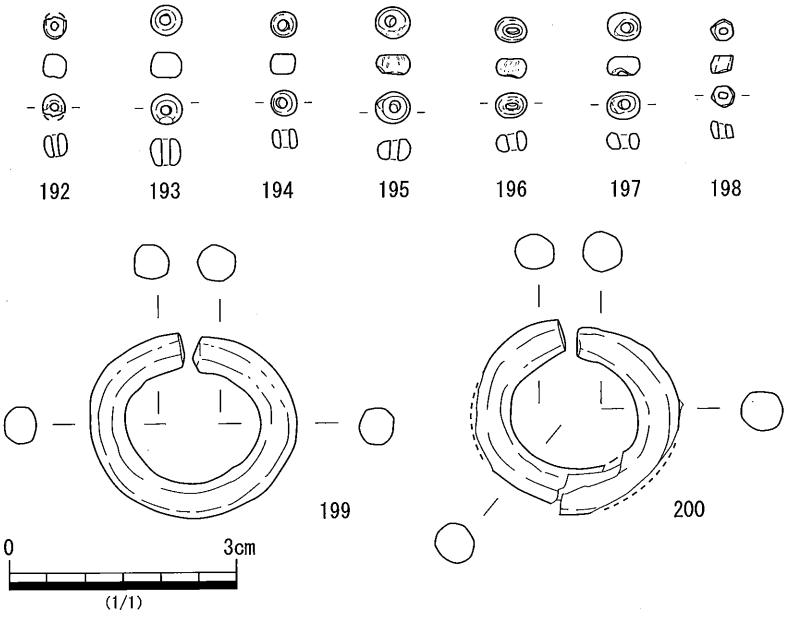
126 ～ 128 は鉄製刀子である。このうち 126 は柄が鹿角装で関部は僅かな稜線状突起が認められる。127 は長さ不明の関部から柄部にかけての破片である。柄頭には関金具が認められる。128 は遺存状態が悪く、Ｘ線写真からみて刀子の可能性が高いとしたものである。128 を除くと、明確な刀子は２点が副葬されたと見ておく。

玉類は、ガラス玉が 69 点（破損した小片は除く）が出土した。これ以外に破損した小片があり、総計は 70 点以上と推定される。これらのガラス玉は、法量、形状、色調、ガラスの質感、製作痕跡と推定される擦痕、研磨痕や部分突出形状、などにより次の７つに分類することができる。以下、分類ごとに特徴を記す。

Ａ類（129 ～ 182）54 点ある。直径約 4mm の中型品が多く、直径約 3mm の小型品が少量まじる。小口面は研磨が施され、平坦に仕上げられたものが多い。小口面と側面との境の形状は、稜線をとどめるも



第 42 図 古墳 ST03 出土遺物 (8)



第 43 図 古墳 ST03 出土遺物 (9)

のや、丸く仕上るものなどがあり、研磨の程度に応じて多様である。色調はコバルトブルーで透明度が高い。器体内部に縦長の気泡や縦方向の気泡列が認められる。研磨の程度に応じて、器体外面に縦方向の擦痕が、小口面に螺旋状の擦痕が観察できる。

B 類（183 ～ 191）9 点ある。直径約 4mm の中型品に直径 3mm の小型品が 1 点まじる。小口面はほとんど研磨せず、平坦面をもつものは少ない。軸孔側端部が内側に花弁状に張り出すものがある（189・190 など）。色調はやや薄い白濁コバルトブルーで、器体内部には多数の気泡があるが、気泡の方向性は認められない。器面はクレータ状の窪みが認められ、研磨を施さないものが多い。

E 類（192 ～ 195）3 点ある。直径 4mm でほぼ大きさは揃う。小口面は丸く収めるものと、研磨により平坦面を持つものがある。色調は淡青緑色で、器体内部に縦方向の気泡列が認められる。

H 類（196・197）2 点ある。直径 4 ～ 4.5mm で、全体が丁寧に研磨され、擦痕がみられない。小口は研磨により丸く仕上げる。軸孔が楕円を呈し、全体形状が歪む。色調は黒色である。器体内部に気泡がみられるが、気泡列の方向は不明である。

I 類（198）1 点である。直径 2.9mm で器幅に対して器高が高く、上下の小口面は平行しない。側面は面取りにより多面形を呈す。色調は明赤褐色で、黒色夾雑物による縦縞が認められる。

耳環が 2 点出土した。199・200 ともに表面が剥落し、中実の銅芯が露出する。表面遺存部は淡緑色の錆で覆われるが、部分的に黒褐色の平滑面が観察できることから、銀被膜が施されていた可能性が高い。

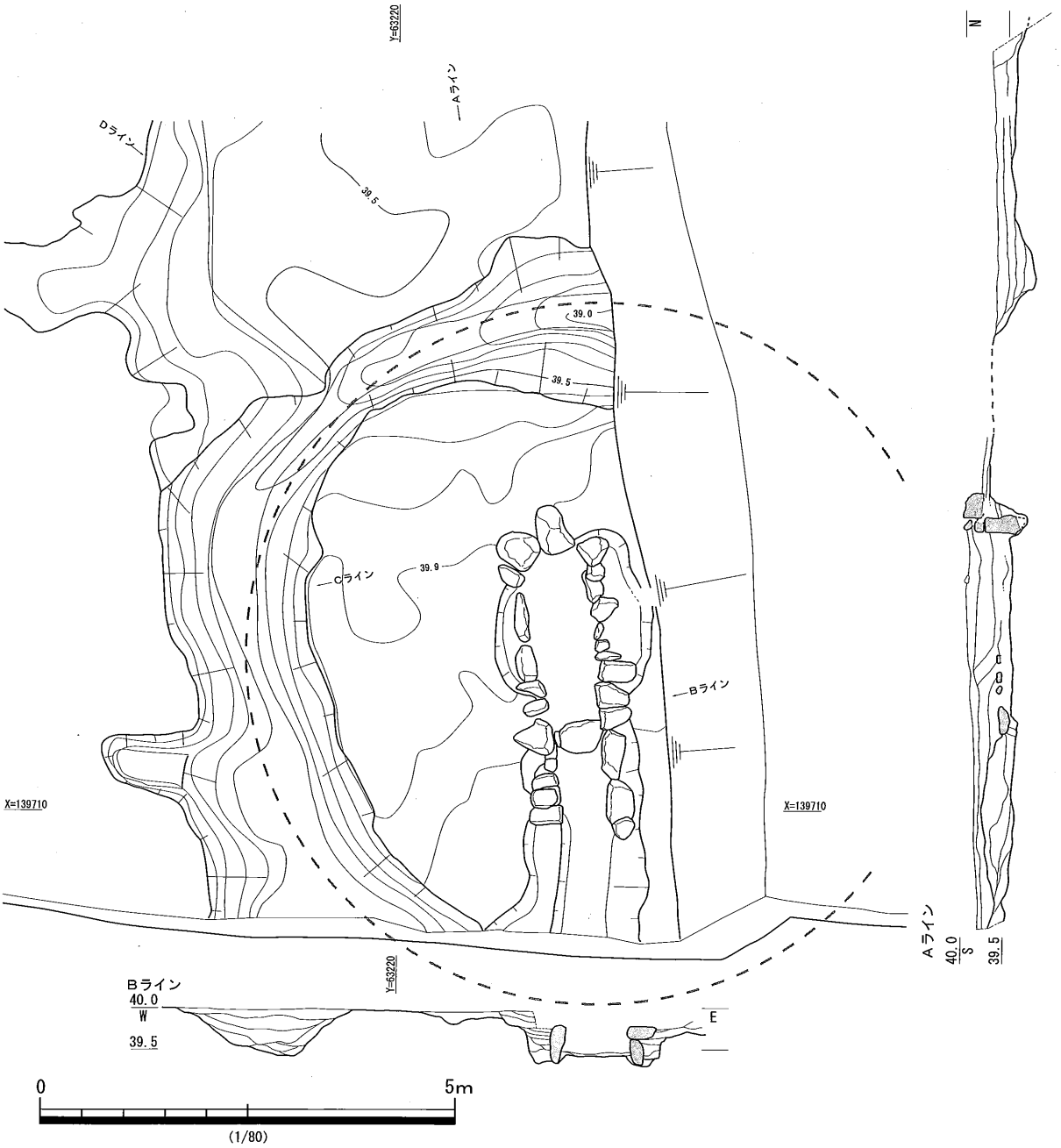
以上の内容から、当古墳は 6 世紀末ごろに築造され、7 世紀前半まで追葬されたものと推定される。鉄地金銅張の馬具や多数の武器類など、小規模墳ながら豊富な副葬品をもつ点で特徴的である。

古墳 ST04（第 44～ 56 図）

A 地区東丘陵の東斜面で検出した横穴式石室を埋葬主体とする円墳である。墳丘は滅失して田地化されているが、周濠の西側、北側一部と石室基底部が遺存する。

＜墳丘＞

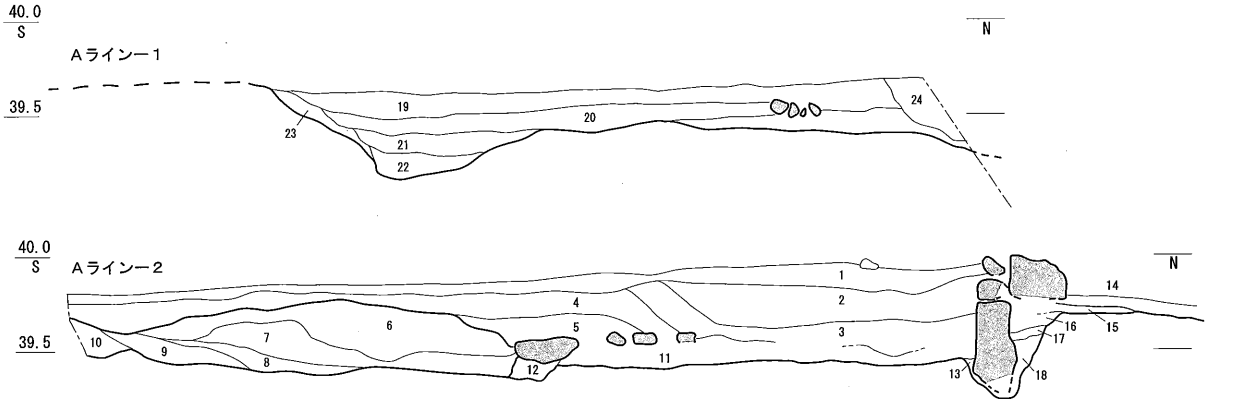
墳丘基底部直径は 8.4 m と推定され、石室のほぼ中央に墳丘中心点が収まる。石室は南に開口する無袖式の横穴式石室で、玄室、羨道、墓道が遺存する。石室を構築する石材は基底石がすべて遺存し、一部 2 石目までが残る。羨道部は 1 石分が残る。羨道部床面は基底石下端より 0.15 ～ 0.20 m 掘り下げら



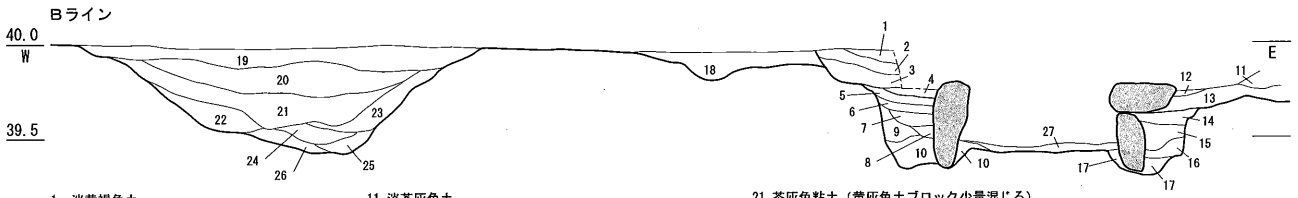
第 44図　古墳 ST04 平・断面図

れ、そのまま墓道につながる。墓道は羨道から南に向かって幅を広げ、墳丘裾に接続する。墳丘構築前の旧地表は北に向かって僅かに下がるが、ほぼ丘陵上の平坦面に作られたとみてよい。

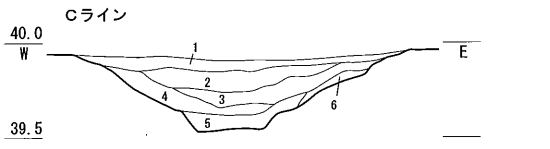
周濠は幅 1.0 ～ 1.8 ｍで、石室が開口する南側に向かってやや幅を広げる。深さは 0.55 ｍで、南に向かって若干深くなる。周濠の墳丘と反対側、すなわち西側肩部に部分的な突出部がみられる。これは、後述する土壙墓群を取り囲む溝跡の可能性が考えられる。当墳周濠との切り合いは認められなかった。一方、当墳北側の幅広い落ち込み SX01 は墳丘断面Ｄラインで示したように、4 ～ 6 層の周濠埋土が埋没した後に掘開されているように見える。SX01 が何の遺構に伴うか、明らかではないが、ここには前後関係を認めることができる。



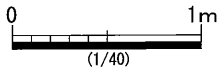
1 黄灰褐色粘土（盗掘坑埋土）
2 暗黄灰褐色粘土（全体的にMnが沈着、粘性強い、盗掘坑埋土）
3 暗黄褐色粘土（盗掘坑埋土）
4 茶褐色粘土（盗掘坑埋土）
5 暗茶褐色粘土（盗掘坑埋土）
6 黒褐色粘土（黄橙色土ブロック混、羨道部埋土）
7 暗黄褐色粘土（黄橙色土ブロック混、羨道部埋土）
8 暗灰色粘土（羨道部埋土）
9 暗褐色粘土（黄色土・炭化物粒の細ブロック混、羨道部埋土）
10 暗黄褐色粘土（羨道部埋土）
11 淡灰黒色粘土（きめ細かい、礫床下部層）
12 濁黄褐色土（褐色土をブロック状に含み、しまりがない）
13 濁灰褐色土（灰色粘土、黄色土ブをブロック状に含み、粘性強い）
14 濁黄橙色土（黄色土・褐色土ブロック混）
15 明橙色粘土
16 明橙色粘土（15層と類似）
17 淡褐色土
18 暗黄灰色土（粘性強い）
19 淡茶灰色砂礫混砂質土（全体的に薄くFe沈着）
20 暗茶褐色砂礫混粘土
21 茶灰色粘土（黄灰色土ブロック少量混）
22 明黄色土＋暗褐色土（ブロック層）
23 黒灰色粘土層
24 撹乱層

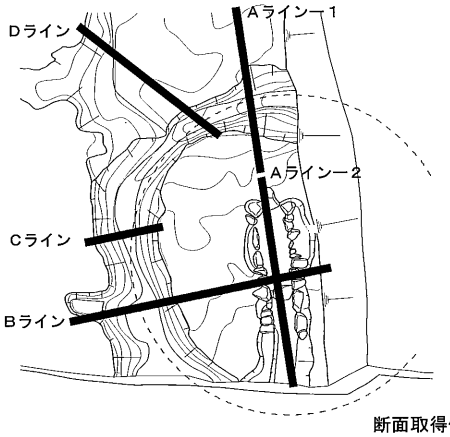


1 淡黄褐色土
2 明黄橙色土（粘性帯びる）
3 淡灰茶色土（橙色土ブロック混じる）
4 明橙色土
5 褐色土（粘性帯びる）
6 淡黄橙色土（灰色ブロック混）
7 暗黄褐色土（粘性強い）
8 黄褐色土
9 暗褐色土（橙色土ブロック混）
10 灰黄色土粘性土
11 淡茶灰色土
12 淡茶灰色土
13 黄橙色土（茶色土ブロック混じる）
14 淡茶褐色土
15 暗黄褐色土
16 淡灰黄色粘性土
17 濁灰褐色土
18 淡褐灰色土
19 淡茶灰色砂利混砂質土（全体的に薄くFeが沈着）
20 暗茶褐色砂利混粘土
21 茶灰色粘土（黄灰色土ブロック少量混じる）
22 灰黄褐色粘土
23 淡灰黄褐色粘土
24 明黄色土＋暗褐色土（ブロック層）
25 黒灰色粘土
26 濁黄灰色粘土
27 淡灰黒色粘土

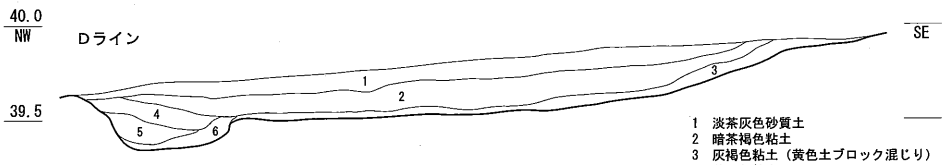


1 淡茶灰色砂利混砂質土（全体的に薄くFeが沈着）
2 暗茶褐色砂利混粘土
3 茶灰色粘土（黄灰色土ブロック少量混じる）
4 黒灰色粘土層
5 明黄色土＋暗褐色土（ブロック層）
6 灰黄褐色粘土



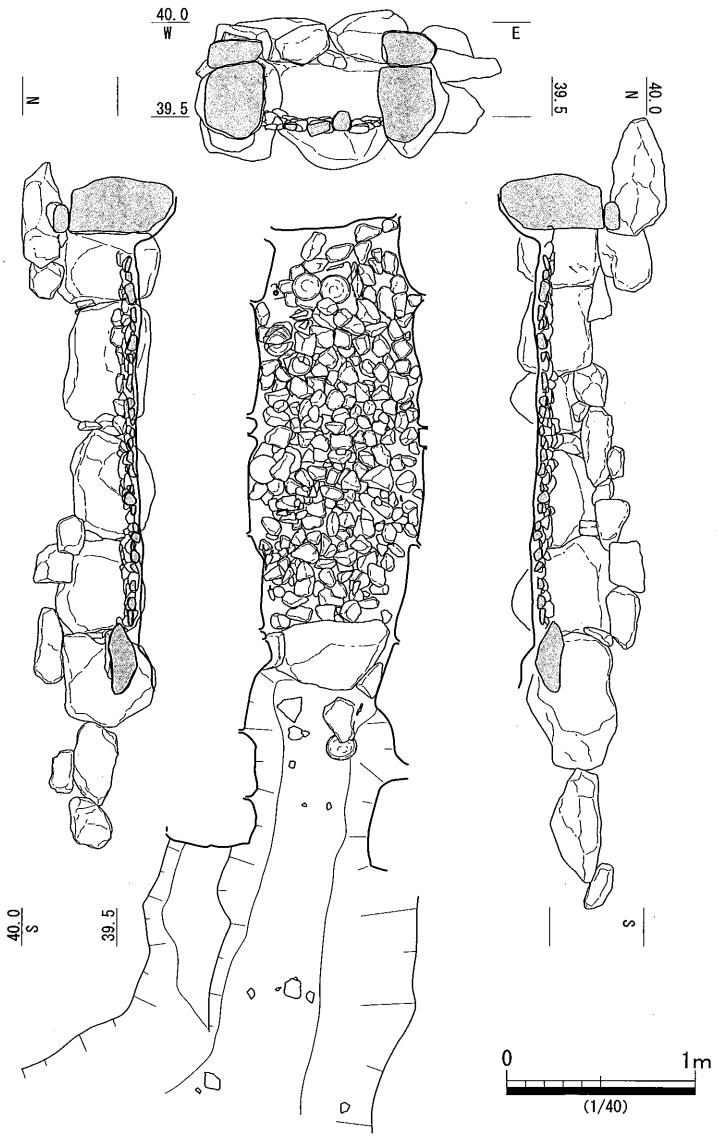


断面取得位置



1 淡茶灰色砂質土
2 暗茶褐色粘土
3 灰褐色粘土（黄色土ブロック混じり）
4 茶灰色粘土
5 明黄色土＋暗褐色土（ブロック層）
6 濁黄灰色粘土
1～3はSX01
4～6はST04周溝

第45図 古墳ST04断面図



第46図 古墳ST04石室平面図

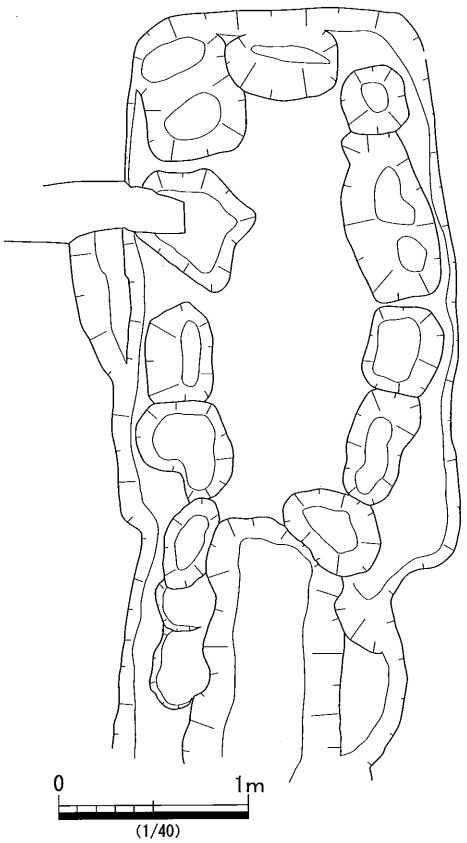
＜石室＞

石室は長さ3.4ｍ、幅0.84ｍ、残存高さ0.59ｍの無袖式の横穴式石室である。玄室の石組は基底石がすべて残るが、２石目は奥壁部と左側壁前面にのみ残る。奥壁は石室側内法で幅62cm、高さ30cm、石材としては幅80cm、高さ60cmの花崗岩１石を基底石として配置する。その上部に幅約40cmの２つの花崗岩を２石目として配置する。これら２石目は、いずれも塊石の小口部を石室内面に向けており、石材の長辺は55～60cmある。さらに２石は石室を取り囲むように角度をつけ、さらに小口面が内傾するように、持ち送りの状態で配置される。側壁は幅40～50cm、高さ20～25cmの花崗岩亜角礫を配置する。側壁の基底石石材は、左側壁で奥から６石目まで、右側壁で５石目までの大きさが概ね揃う。それぞれの最南の石の前面に仕切石が置かれ、玄室と羨道を区画する玄門部となる。これらの２石を袖石と認定できるが、袖石自体は前面に突出することはない。2石目は幅30cm、高さ20cmほどの花崗岩亜角礫である。これも小口を内側に向け、やや内傾する面を作る。仕切石までを計測した玄室の内法長さは2.14ｍである。玄室の床面には10cm内外の花崗岩亜円礫による礫床が認められる。礫床は一部追葬に伴う追加敷きが行われており、追葬時の棺配置を検討する材料となる。

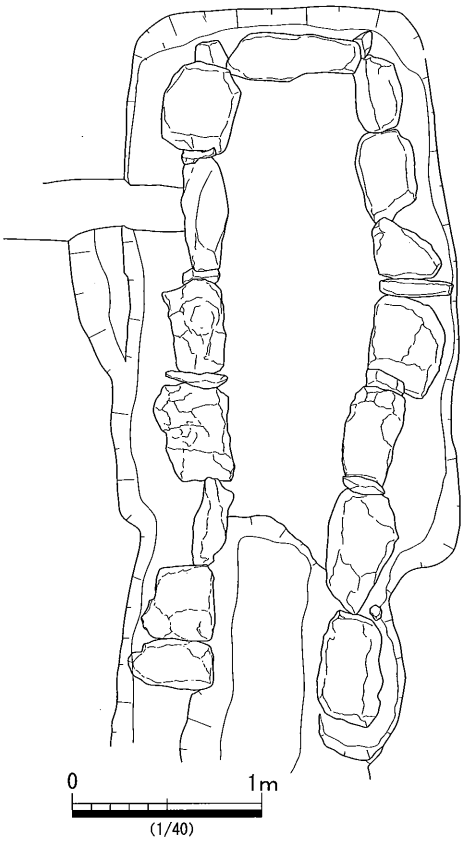
羨道部は長さ1.0ｍ、幅0.6ｍをはかり、基底石１石分が残る。幅30～50cm、高さは20cmほどの扁平な石を使う。羨道床面は玄門の仕切石を境に玄室床面よりさらに0.2ｍ程低く掘削され、そのまま墓道に接続する。墓道は南から西にやや彎曲し、調査区外へ伸びる。

石室掘り形は、南北3.0ｍ、東西1.8ｍの長方形状を呈す。羨道部掘り形が中央からやや西寄りに取り付く。石室南東部で掘り形に屈曲部がみられる。掘削当初に玄室掘り形として掘り分けられた痕跡と考えられる。

玄室床面の礫床は、第50図に示したように、３面に分けることができる。このうち、３面目（第３次礫床）は礫床というより、棺台礫の配置である。まず１面は玄室ほぼ全面に10cmほどの亜角礫を敷き詰める。この上面で須恵器や鉄器などの多くの副葬品を検出した。出土した須恵器には、完形で出土

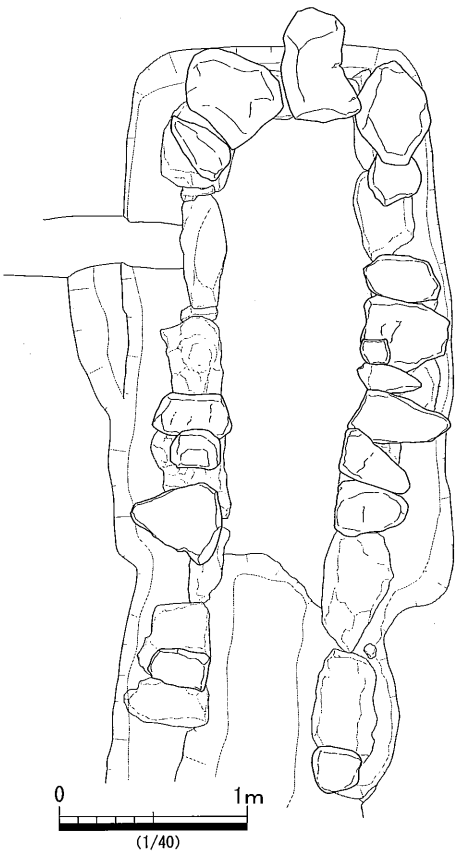


第47図 古墳ST04石室掘り方

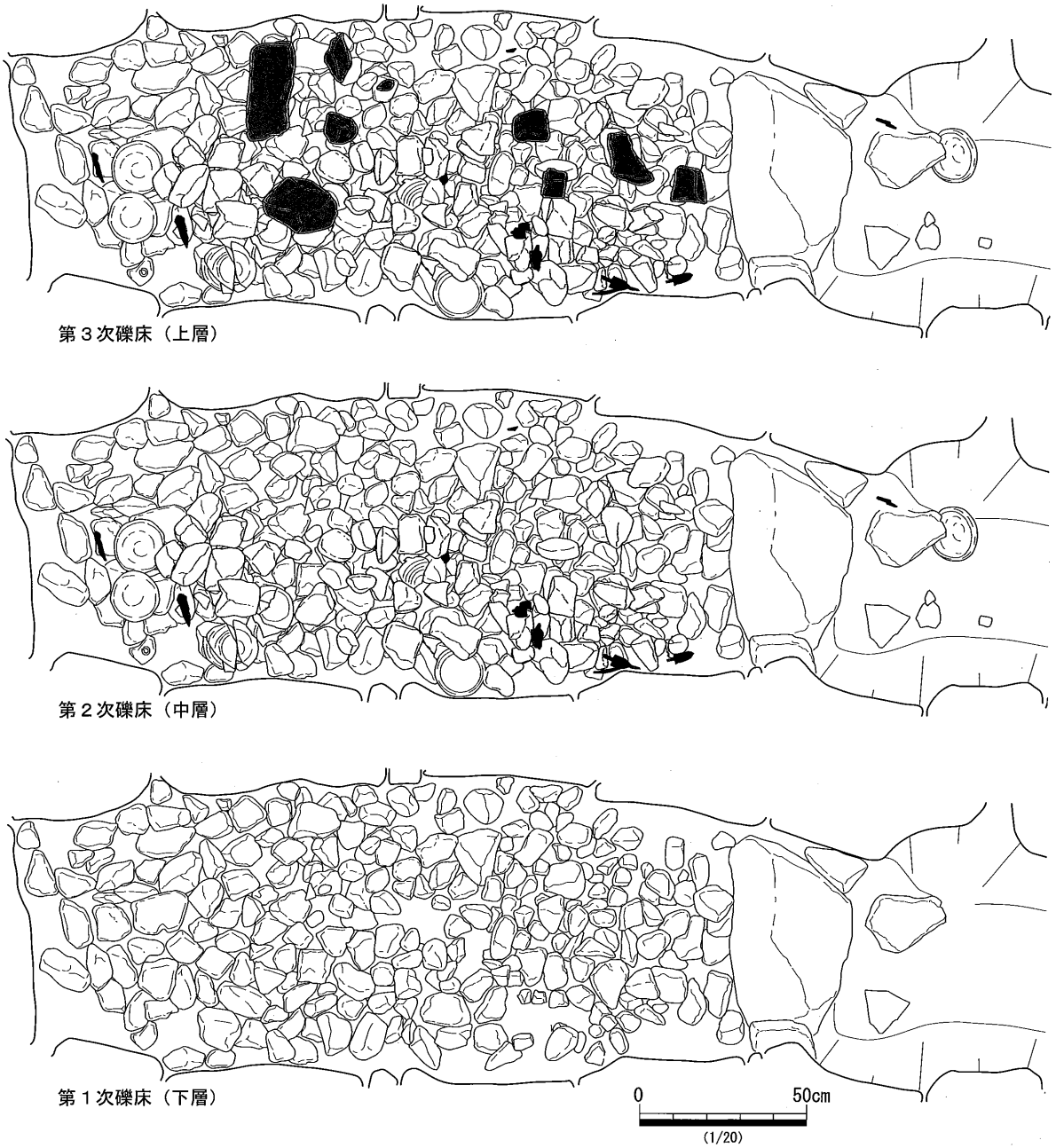


第48図 古墳ST04基底石平面図

したものと、割れて分散して出土するものがある。割れて出土したものは、概ね次の２面に置かれた追加礫の下から出土し、完形のものは、追加礫の外縁部で出土する。２面（第２次礫床）の礫床は主に玄室の西側に追加礫を敷き詰める。追加礫の範囲は長さ1.5ｍ、幅0.5ｍをはかる。追葬時の棺の大きさを示すものと考えられる。須恵器類はこの礫の下部で出土するが、鉄器の一部はこの礫の上部で出土している。３面は玄室の主に東側に大きめの石を置いたものである。長さ30cm、幅12cm、厚さ12cmの礫が最も大きく、その他の礫も、高さをこれに揃えるように配置される。３面の追加礫の範囲は、長さ1.35ｍ、幅0.5ｍで、２面の追加礫床図の大きさに近似する。この３面の礫と同時に検出したのが、多数の人骨（第51図）である。遺存状態が良好でなかったので、十分な取上げができなかったが、太い骨であることから、大腿骨や腕骨などと考えられる。これらは、３面の追加礫から復元できる追葬棺の範囲外で、特に奥壁側にまとまって出土



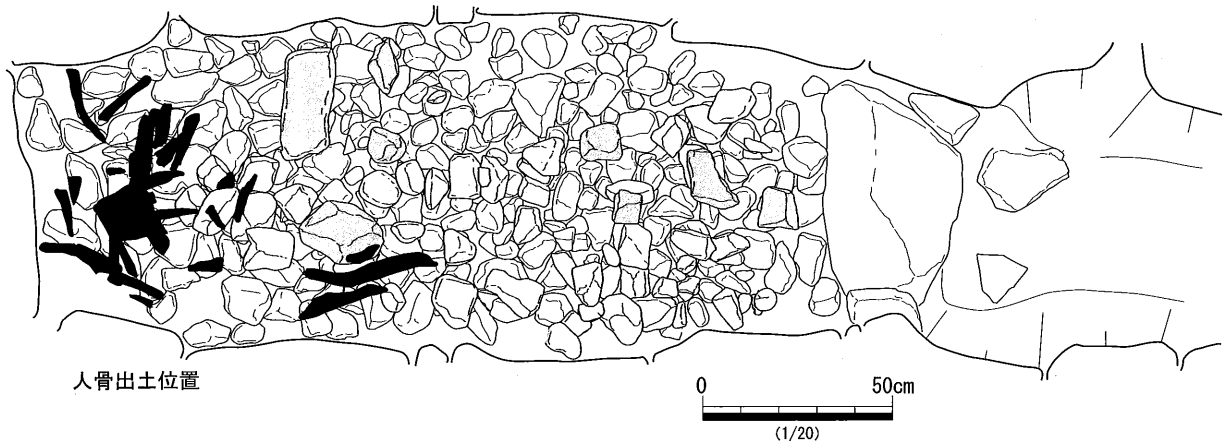
第49図 古墳ST04石室上面図

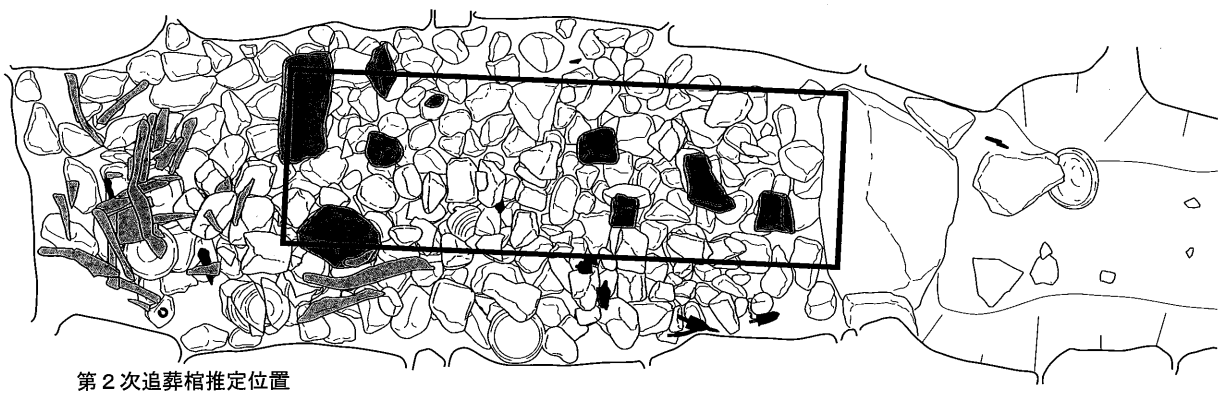


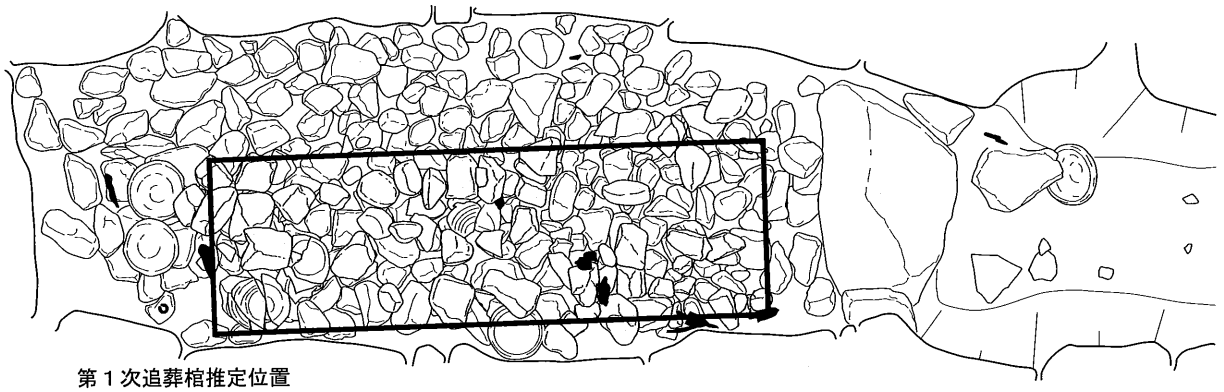
第 50 図 古墳 ST04 層位別礫床･副葬品分布図

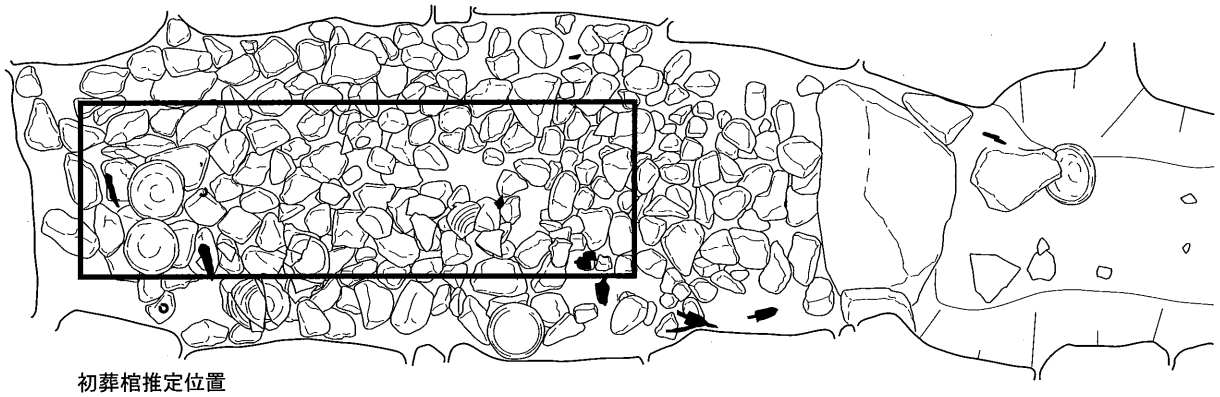
している。追葬の際の先行棺の片付け行為を反映したものであろう。

そのほかの副葬品の出土状況は、202・209 の杯セット、211 の提瓶、215 の土師器高杯が破砕された状態で第２面追加礫の下位で出土したことから、初期段階の副葬土器と考えられる。また、201・207 の杯セット及び 206 の杯身は、第２面追加礫の外縁部、第３面の人骨群の下位で出土することから、第２面の追葬に伴う副葬土器と考えられる。羨道部出土須恵器は所属時期はわからない。鉄器は、221・225・216・218 の鉄鏃が第２面追加礫の上位で出土したことから、追葬に伴う可能性が高い。そのほかは、追加礫下位で出土している。なお、217・219・220・224 の鉄鏃は、切先を玄門側に向けて出土した。奥壁寄りでは、耳環１対が２面追加礫下位で出土している。

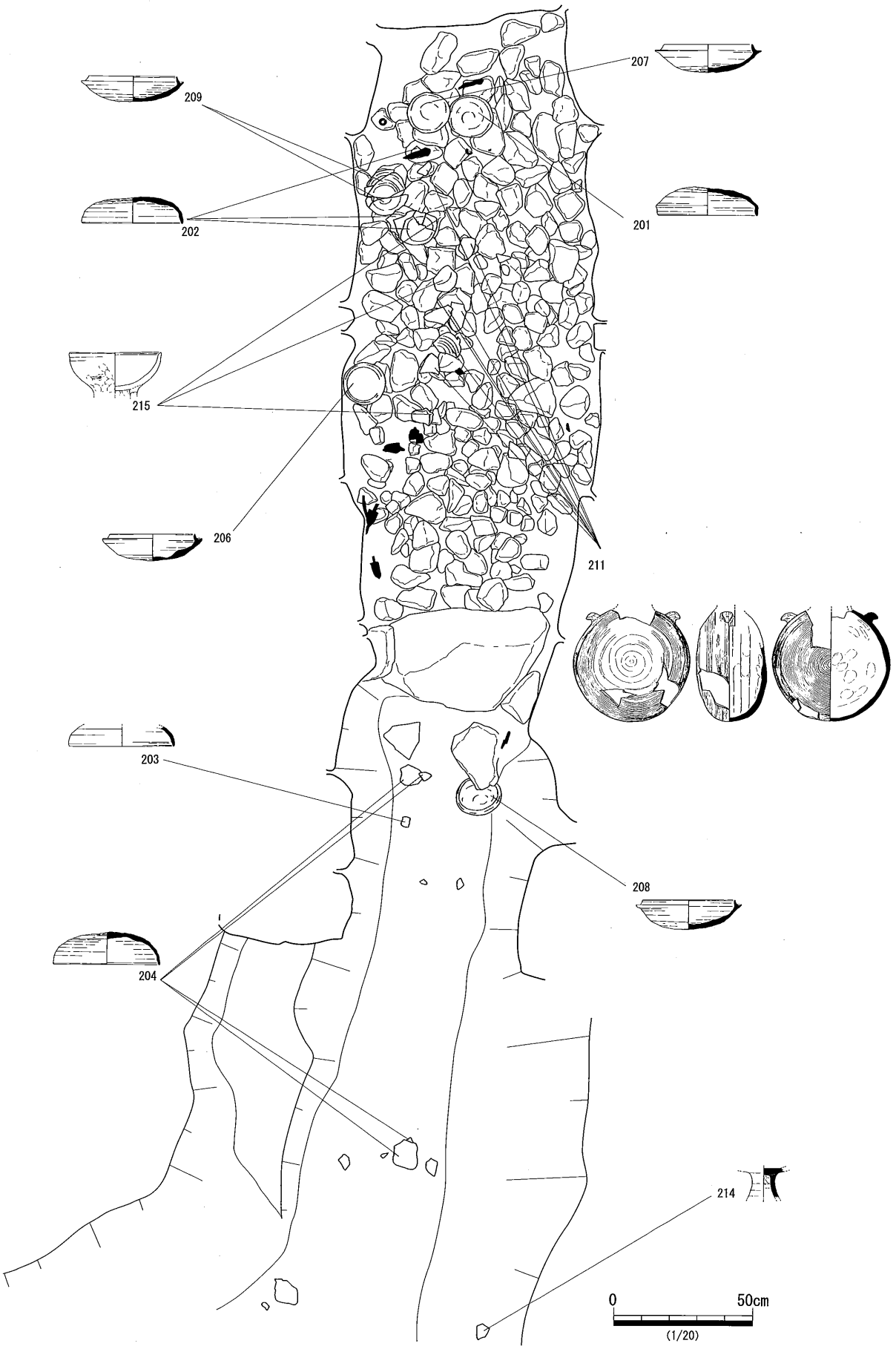




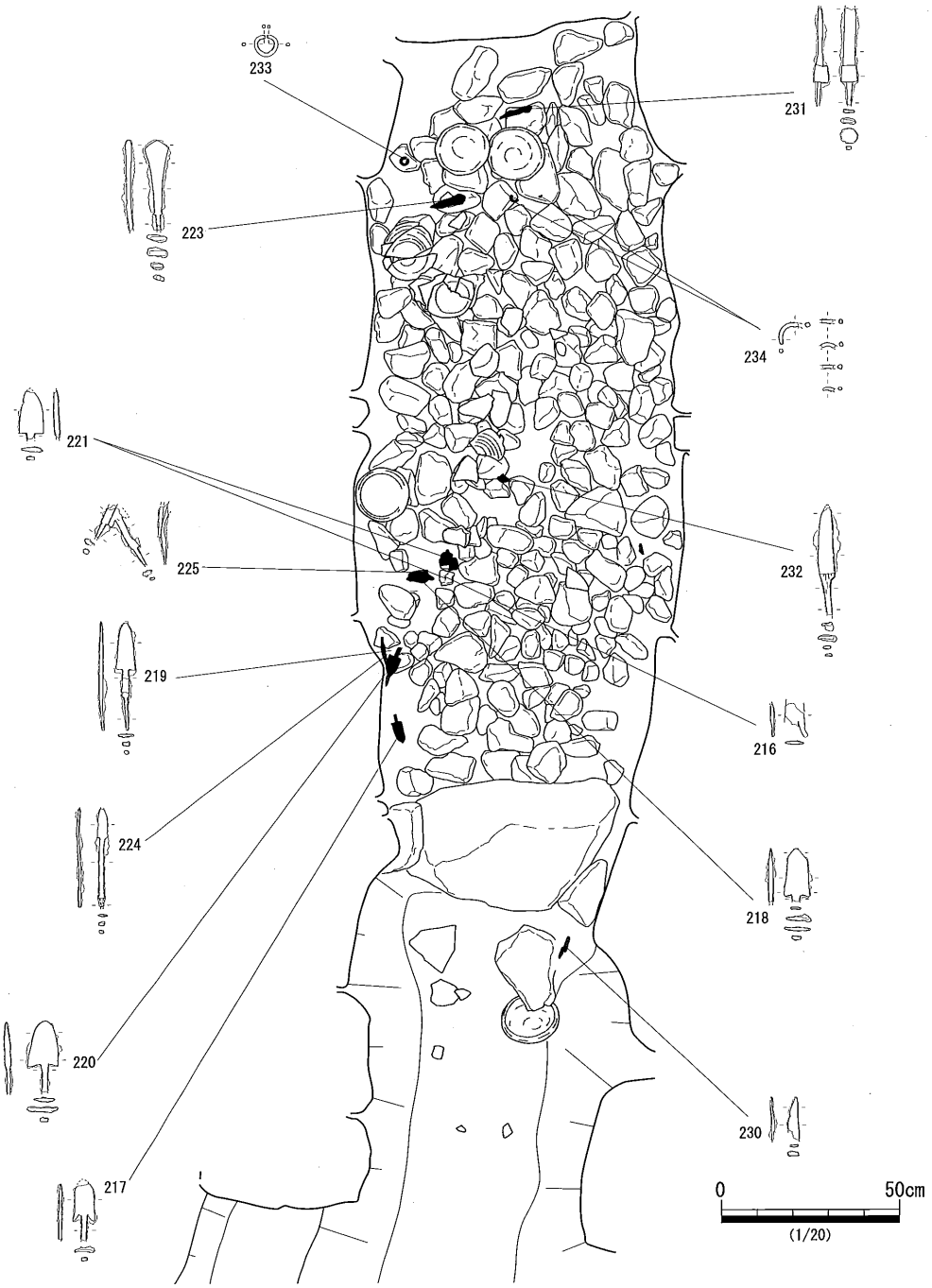




第 51 図 古墳 ST04 玄室内人骨出土位置及び棺配置の復元



第 52 図 古墳 ST04 土器出土分布図



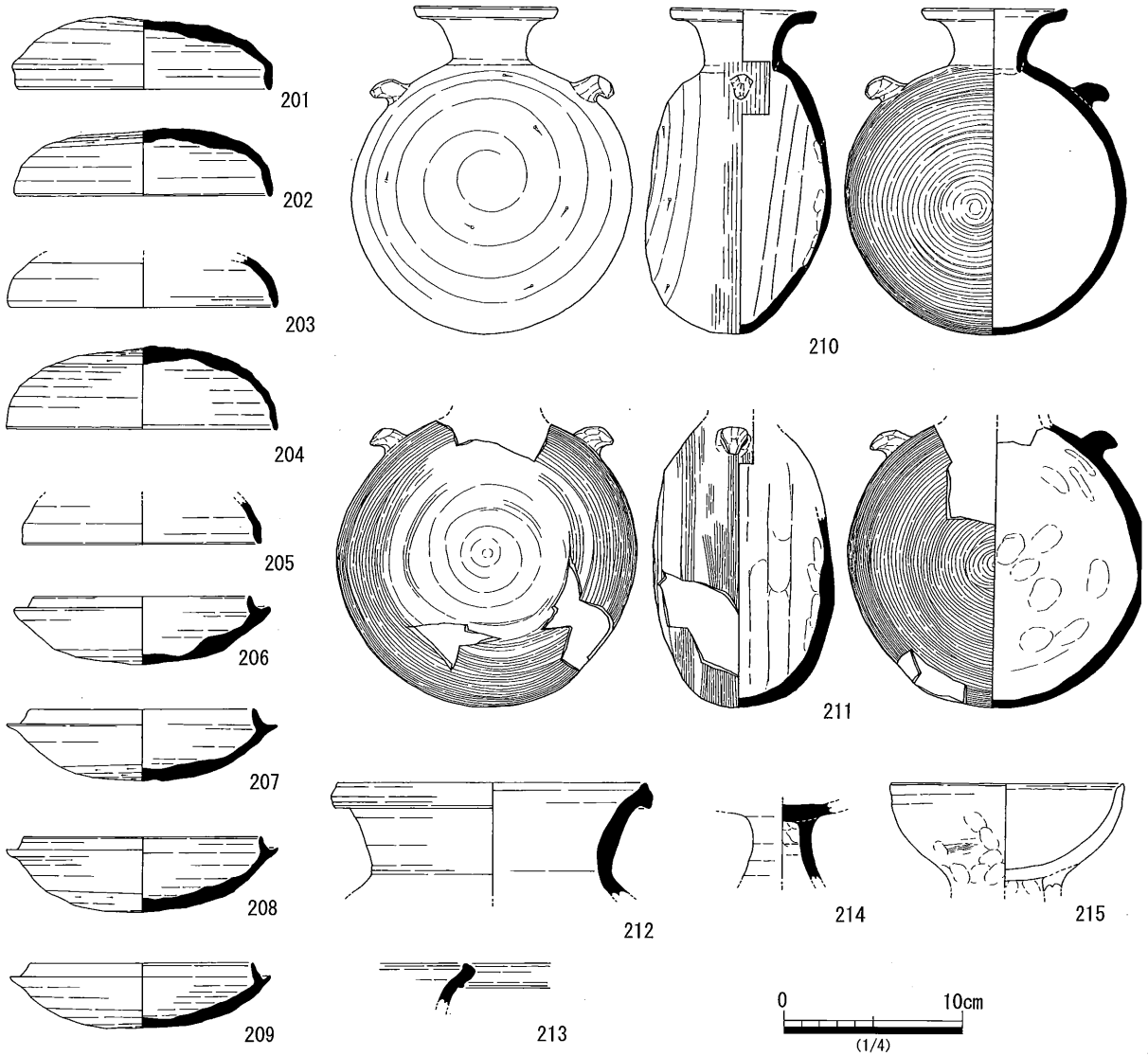
第 53 図 古墳 ST04 鉄器出土分布図

＜出土遺物＞

玄室床面・羨道部・周濠から出土した遺物である。

須恵器杯蓋は 5 点（201 ～ 205）ある。このうち、201・202 は玄室内出土、203 ～ 205 は羨道部から出土したものである。主に口径 14 ～ 15cm で、205 のみ 13cm 程度で器高が高い。天井部は 1/3 ほどの範囲に回転ヘラ削りが残る。204 は焼成不良で淡黄褐色系の色調を呈している。また、203 は胎土中に 0.5 ～ 2mm 大の黒色球状粒が多数含まれる。201 の内面には淡黄褐色の付着物が認められる。

なお、201・202 は、細部の形態・調整技法等に共通性がみられる。一つに、口縁部内面に強い回転ナ

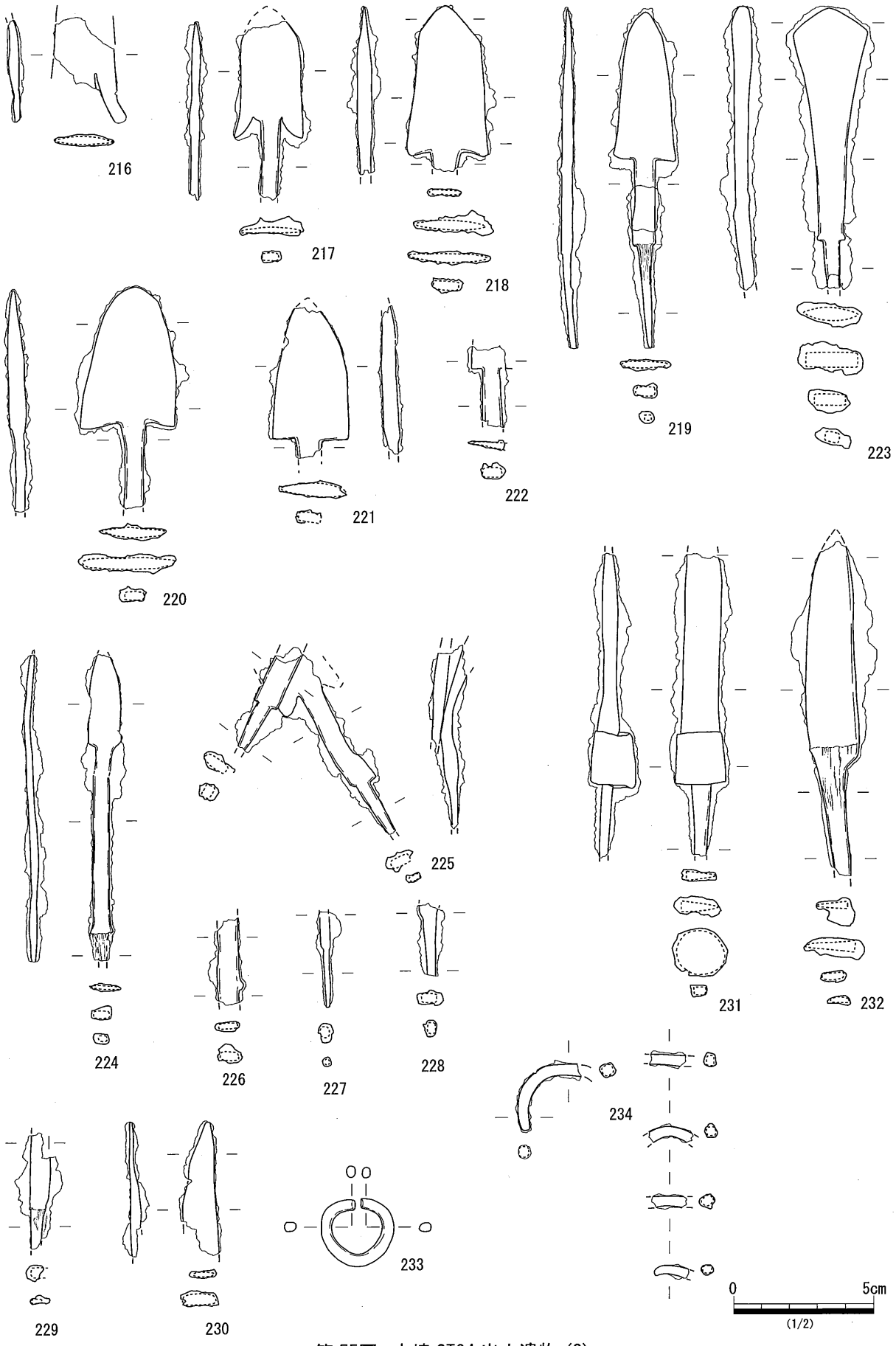


第 54 図 古墳 ST04 出土遺物 (1)

デを施し口縁端部付近が肉厚となる形態。二つに、口縁部外面に斜め方向の皺が多数みられる点。これは右回りのロクロ回転により、粗成形時の粘土接合痕もしくはタタキなどの器面調整痕が左下方（製作時は右上方）に引伸ばされ、不十分な回転ナデのために消されず残ったものと考えられる。三つに、天井部内面中央にロクロ停止後の直線ナデを施す点である。これらは、在地生産が盛んになる当該期の須恵器について、生産･供給関係を検討する材料となりうる。

須恵器杯身は 4 点（206 ～ 209）ある。208 が羨道部出土品、それ以外の 3 点は玄室出土である。受部の径は 14.5 ～ 15.5cm に収まり、かえり部の立ち上がりは 9 ～ 10mm で短小化に至らず、直線的に内傾して端部で若干外反する形態である。底部 1/3 ほどに回転ヘラ削りをとどめる。形態的には、受部下端が強く括れるもの（207・208）と、ほとんど括れがないもの（206・209）に分けられるが、胎土や焼成からみると、207・209 が暗灰色系の色調で、底部内面にロクロ回転停止後の直線ナデがみられる点で共通する。また、207 の内面には淡黄褐色の付着物が認められる。

なお、206 は杯蓋 203 の胎土と同様に黒色球状粒を多量に含む。両者とも、その黒色球状粒は内面の



第 55図　古墳 ST04 出土遺物 (2)

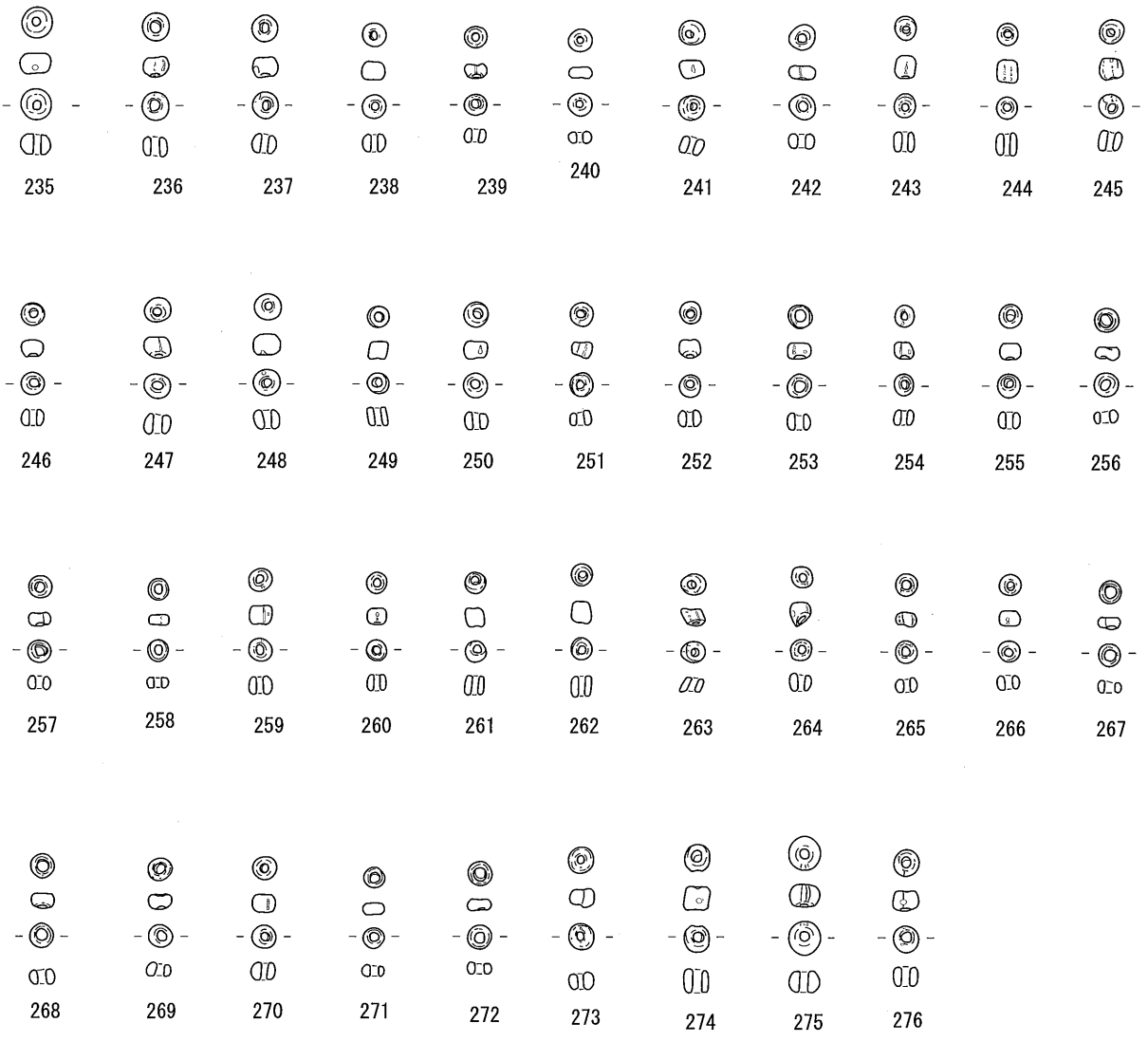
器面に多数認められ、外面の器面には少量しか見られない。ただし、外面にはそれと同じ大きさの球状の気泡が多数あり、黒色粒の破片が少量気泡内に遺存する箇所もあることから、元来外面にも多数の黒色球状粒があり、何らかの理由で外面側のみ抜け落ちたものと推定される。焼成後の経年風化、焼成時の融解などの原因が考えられるが、球状粒を拡大観察すると、鉄器生産時に生成される球状滓などに類似する。

以上の須恵器杯の特徴から、蓋 201 と身 207、蓋 202 と身 209、蓋 203 と身 206 は、セットで生産され、消費された共伴遺物とみることができる。

210・211 は周濠より出土した須恵器提瓶である。両者とも法量、形態、胎土が類似する。211 のカキ目調整による条線が深く明確な点が若干異なる程度である。

212 は周濠より出土した須恵器壺口縁、213・214 はいずれも羨道部出土の須恵器壺・高杯である。215 は玄室内に破片で散在していた土師器高杯である。脚上部径が大きいことから、器台の可能性もある。

当古墳出土の土器は、須恵器の和泉陶邑窯 TK43 ～ 209 形式に該当し、6 世紀末から 7 世紀前葉にか



第 56 図 古墳 ST04 出土遺物 (3)

けての古墳の築造、追葬を反映するものと考える。

出土した金属器には、鉄鏃・刀子などの鉄器と耳環がある。

216 ～ 222 は短頸の鉄鏃である。216・217 は腸抉が深く、特に 216 は下端部が長く下方に広がる。218 ～ 222 は鏃身頸部間の関が直角に近いタイプである。頸茎間の関まで遺存するのは 219 のみで、裾広がりはみられない。223 は無頸の鉄鏃で圭頭状の鏃身を呈する。関には明瞭な突起が認められる。

224 ～ 228 は長頸の鉄鏃である。頸茎間関からみて合計 6 個体と考えられる。229 ～ 232 は刀子である。231 は柄頭がみられる。

233・234 は耳環である。233 は銅芯で黒褐色の表面被膜痕跡がある。銀被膜の可能性が高い。234 は錆化が進行した中実耳環である。銅芯と推定されるが、被膜痕跡は不明である。

玄室床面よりガラス小玉 43 点が出土した。これらは、法量、形状、色調、ガラスの質感、製作痕跡と推定される擦痕、研磨痕や部分突出形状、などにより次の 7 つに分類することができる。以下、分類ごとに特徴を記す。

A類（235）1 点ある。ST03 に多いタイプで、小口は研磨により平坦面を持つ。色調はコバルトブルーで透明度が高い。器体内部に縦方向の気泡列が認められる。器体全面に研磨が及ぶ。縦方向の擦痕が僅かに認められる。

D類（236 ～ 269）34 点ある。直径約 3 ～ 4mm で、大きさや形状が一定しない。小口は丸く収めたものが多く、研磨による平坦面をもつものは（258）1 点のみである。色調は青緑色で、器体内部に縦方向の気泡列が認められる。このうち、261・269 は器面に凹凸がみられ、器体のガラス内部に細かな夾雑物が混じる。

E類（270）1 点ある。直径 3.5mm で、小口は丸く収め、平坦面を持たない。色調は不透明な淡青緑色で、器体内部に縦方向の気泡列が認められる。

F類（271）1 点ある。薄身で、器幅に対して孔径が大きい。小口は丸く収め、平坦面を持たない。色調は透明感のある青緑色で、器体内部に縦方向の気泡列が認められる。

G類（272）1 点ある。薄身で、器幅に対して孔径が大きい。小口は丸く収め、平坦面を持たない。色調は黄緑色で、縦方向の気泡列や白色夾雑物の縦縞が認められる。

K類（273・274）2 点ある。透明感のある明青色で、縦方向の気泡列や白色夾雑物の縦縞が認められる。157 は直径に比べ高さがあり、器体に夾雑物が多い。

L類（275）1 点ある。濃緑色を呈し、縦方向の気泡列や白色夾雑物の縦縞が認められる。

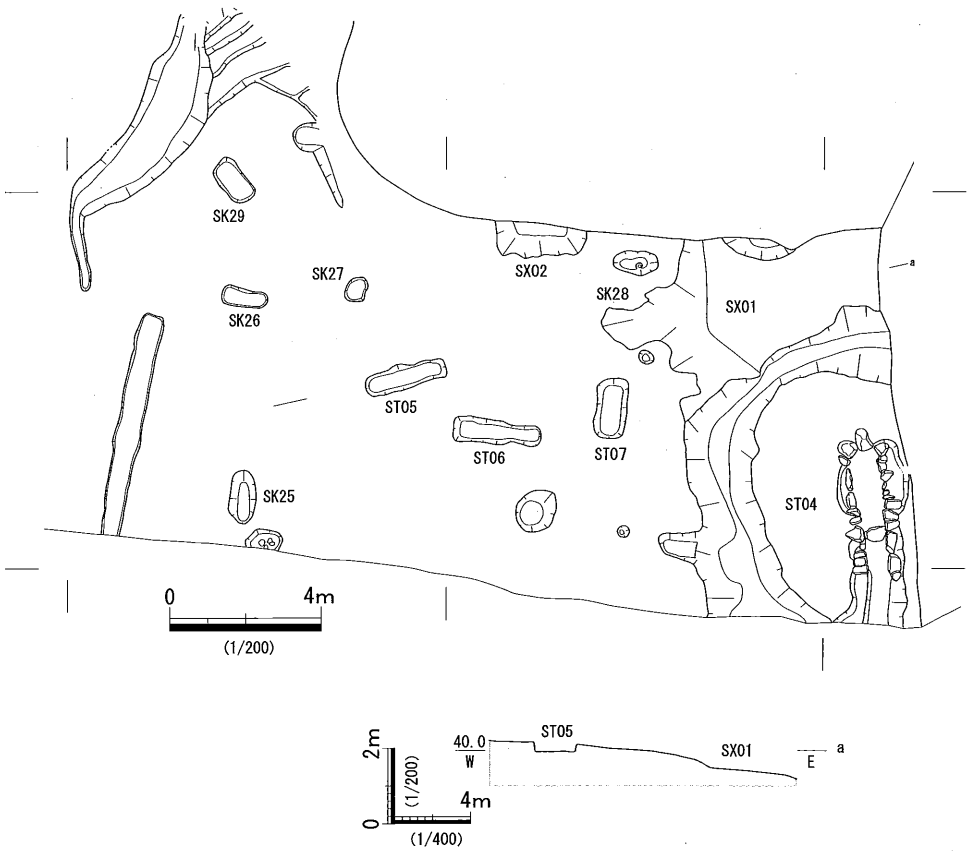
M類（276）1 点ある。淡緑色を呈し、縦方向の気泡列や白色夾雑物の縦縞が認められる。

土壙墓群（第 57 図）

A地区東丘陵の東肩部付近、古墳 ST04 と円形周溝墓 ST01 の間の径 14 mほどの範囲に、土壙墓 3 基、墓壙状の土坑 4 基が分布する。このうち ST05 は多数の玉類、土器が出土したが、そのほかの土壙墓・土坑は出土遺物がなく所属時期が明確でない。しかし、これらの遺構が 1 ～ 3.7 mの間隔を置き、互いに重複することなく分布すること、また北東部に不定形な落込遺構 SX01 が所在し、何らかの区画である可能性が高いことなどから、ST05 の状況を援用し、土壙墓群と位置づけた。

土壙墓 ST05（第 58 ～ 61 図）

長さ 2.16 m、東側幅 0.54 m、西側幅 0.51 m、深さ 0.23 mの細長い長方形の掘り形をもつ土壙墓で



第 57 図　A 地区東丘陵土壙墓分布図

ある。主軸は N-75°-E。側壁は垂直に近く掘られ、底場は平坦である。底場に 10 ～ 23cm 大の花崗岩亜円礫をまばらに敷く。礫上面の高さは、西側から中央部までほぼ一定だが、東端から西へ 30cm 付近で礫を２段に積み、9cm ほど周囲より高くする。その東端は周辺と同じ高さに下がる。東側ほど大きい礫を組み合わせて配置する。

このうち、東から約 40cm の礫上の傾斜面で、管玉・算盤玉・棗玉・ガラス小玉など合計 75 点の玉類が出土した。玉類は直径約 10cm の円形範囲内で出土しており、被葬者の首にかけられたものが、ほぼ原位置を保って出土したものと言える。これにより埋葬頭位が判明する。また、西端から 40cm の位置、すなわちで足位側の礫上面で、赤橙褐色系胎土の土師器短頸壺が出土した。

土壙横断面は大きく３区分できる。最上層の１層は黄色土ブロックを含み中央が大きく窪む。次の中層となる２層・３層は褐色土ブロックを含み、斜め上方から中央下方にラミナ状に堆積する。最下層の４層は、礫近くに粘性の強い灰色土が目立ち、側壁側に向かって黄色系土に置き換わる。なお、この４層上面は、図面では水平だが写真では必ずしも層境が明瞭ではない。断面観察からは、土壙上面には木蓋が置かれ、蓋の腐朽により、最上層が一度に崩落したものと考えることができるが、礫上面のレベルや中層・下層の土層堆積状況からみて、遺体は木棺に収められなかた可能性が高い。頭部位置の礫が枕状に高まっていることを考えると、直接もしくは布などの柔らかい素材で包むなどして、遺体を礫上に埋置したものと推測できる。

頭部の玉類出土状況は、装身具構成の一端を示す。管玉・切子玉・棗玉は直径 14cm 強の範囲で出土しており、被葬者の首に掛かった状態を相当にとどめているものと考えられる。玉類は大型の玉類とガ

ラス小玉に分けられ、大型玉類の長さの合計は27.3cm、ガラス小玉の合計は15.4cmである。総計は42.7cmとなるが、実際には玉間の「あそび」が必要となり、それを２割～３割と見込むと、総計が54～55cmとなる。したがって現在の成人の頭部径と比較して、さほど大きな矛盾はない。

玉類の配置から装身具の構造を復元すると、向かって右から時計回りにみて、Ａ群（284・291・283）が碧玉製管玉２点、木製棗玉１点で構成される。棗玉が２本の管玉に挟まれる形状である。Ｂ群(290・282・287)は水晶玉→管玉→管玉という順で３点である。これに隣接するＣ群(281・289・280・279)は管玉→水晶玉→管玉２点の順で４点が連なる。5cmほど離れて、Ｄ群（286・285）は管玉２点で構成される。各群間は、ＡＢ間、ＣＤ間、ＤＡ間にそれぞれ５～10cmの間隔があり、ＢＣ間の間隔はほとんどない。配列に従って、出土位置が不明な288を仮にＣ群末尾に置き、ＢＣ群を概観すると、管玉３点につき水晶玉が１点というセット関係が読み取れる。Ａ群では、管玉と長さがよく似た棗玉が配され、管玉相当の長玉３点が連なることになる。つまり長玉３点と短玉１点のセット、長さ９～9.5cm分が首飾を構成する玉配置の基本単位長と考えられる。

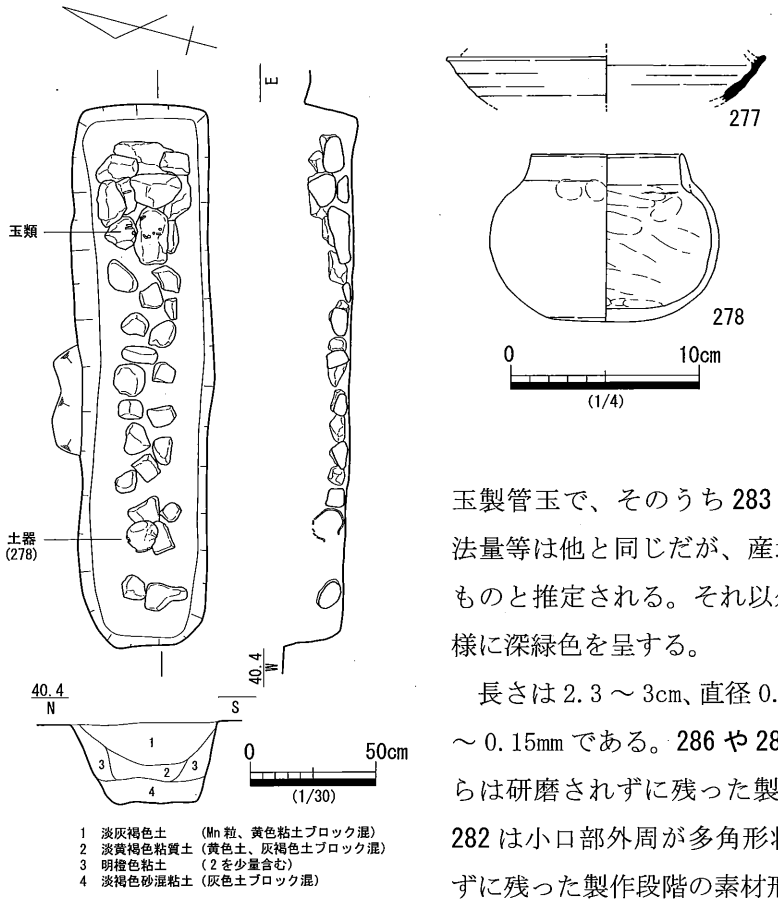
ガラス小玉は、次に述べる分類のうち、Ａ～Ｅ類が量的にまとまった資料である。その他を一括した場合、６つの玉群に分けられ、一つの群が2.5～3.2cmの長さを有する。ガラス小玉は出土位置を記録していないので、推定の域を出ないが、大玉類のＢＣ間を除く各群間に小玉２群づつが配置されたか、あるいは、間隔が広い大玉配置ＤＡ間に小玉の４つの群が配されたか、２通りの可能性を考えることができる。

以下、出土遺物の詳細を報告する。

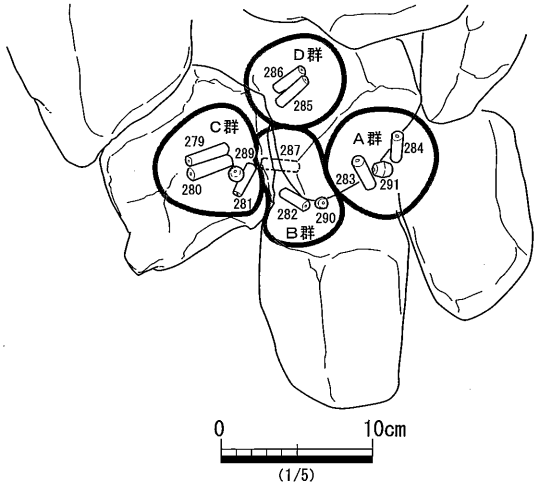
277は埋土中より出土した須恵器杯身片である。底部から1/2の高さまで回転削りがみられる。受部は短く、上面は平坦である。和泉陶邑窯TK10新相に相当するものと考えられる。278は副葬された土師器短頸壺である。赤褐色系で砂粒を多く含む胎土は、ST04出土の土師器高杯と類似する。

279～291は大型玉類である。279～288は碧玉製管玉で、そのうち283は風化が顕著で明緑色を呈する。法量等は他と同じだが、産地（もしくは石質）が他と異なるものと推定される。それ以外の管玉は器面の風化がなく、一様に深緑色を呈する。

長さは2.3～3cm、直径0.85～0.95cm、孔径は最細部で0.1～0.15mmである。286や285は器表面に剥離痕が残る。これらは研磨されずに残った製作時の石材剥離痕である。また、282は小口部外周が多角形状を呈しており、これも研磨されずに残った製作段階の素材形状痕跡である。



第58図 土壙墓ST05平・断面図、出土遺物(1)



第 59 図 土壙墓 ST05 管玉・水晶玉出土分布図

穿孔は一方の径が広く、一方が狭いことから、すべて一方向から施されたものである。279 は広径側の外縁付近に小さな失敗孔がある。また、288 は僅かながら狭径側からも穿孔作業を行った形跡がある。器面の最終研磨は、穿孔部稜線を磨き取るものが多いことから、穿孔作業後に行われたものと推定される。各個体の小口面には最終研磨が及ばなかったために残った線状痕が、主に外周にみられる。

289・290 は水晶製の算盤玉である。器表面は研磨により白濁する。穿孔は一方向から行われており、狭径部には穿孔時に剥離した透明な剥離面が残る。その剥離面の縁辺は最終研磨により磨き取られ、鋭い稜線は残っていない。

291 は木製もしくは硅化木製の棗玉である。硬質の樹種で光沢のある漆黒色を呈する。器表面は丁寧に研磨され、上下二方向から穿孔する。体部中央に緩い稜線が残る。

ガラス玉は完形品が 63 点出土した。これ以外に破損した小片があり、総計は 70 点以上と想定される。

これらのガラス玉は、法量、形状、色調、ガラスの質感、製作痕跡と推定される擦痕、研磨痕や部分突出形状、などにより次の 7 つに分類することができる。以下、分類ごとに特徴を記す。

A 類（292 ～ 303） 12 点ある。直径約 5.5mm の大型品と、直径 2.5 ～ 4mm の中小型品がある。小口は研磨により平坦面を持つものが多い。色調はコバルトブルーで透明度が高い。器体内部に縦長の気泡や縦方向の気泡列が認められる。器体外面に縦方向の擦痕が、小口面に螺旋状の擦痕が残る。

B 類（304 ～ 317） 14 点ある。直径約 5mm の大型品と、直径 2.5 ～ 3mm の中小型品がある。小口はほとんど研磨せず、製作時に生じたと推定される花弁状（304・308・309 など）・螺旋状（310）の突起をとどめるものが多い。色調はやや薄い白濁コバルトブルーで、器体内部には横方向の気泡列が認められる。

C 類（318 ～ 324） 7 点ある。直径約 3.5 ～ 4mm で、大きさが揃う。小口は丸く収めており、平坦面をほとんど持たない。色調は黄色で、縦方向の気泡が目立つ。小口が僅かに突出したもの（319）が 1 点ある。

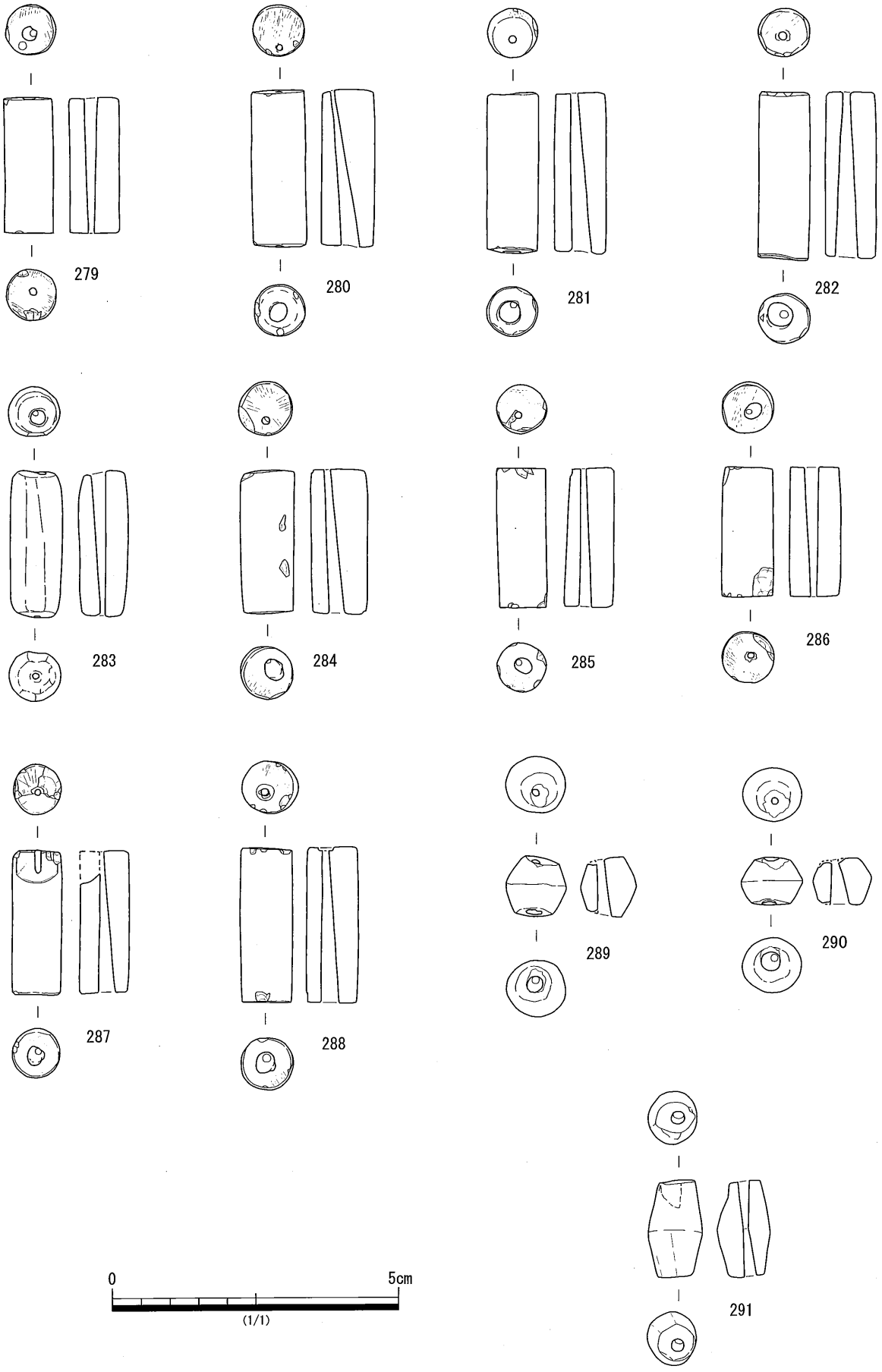
D 類（325 ～ 334） 10 点ある。直径約 3mm でほぼ大きさは揃う。小口は丸く収め、平坦面をほとんど持たない。色調は青緑色で、器体内部に縦方向の気泡列が認められる。

E 類（335 ～ 345） 11 点ある。直径 3 ～ 4mm でほぼ大きさは揃う。小口は丸く収め、平坦面を持たない。色調は淡青緑色で、器体内部に縦方向の気泡列が認められる。

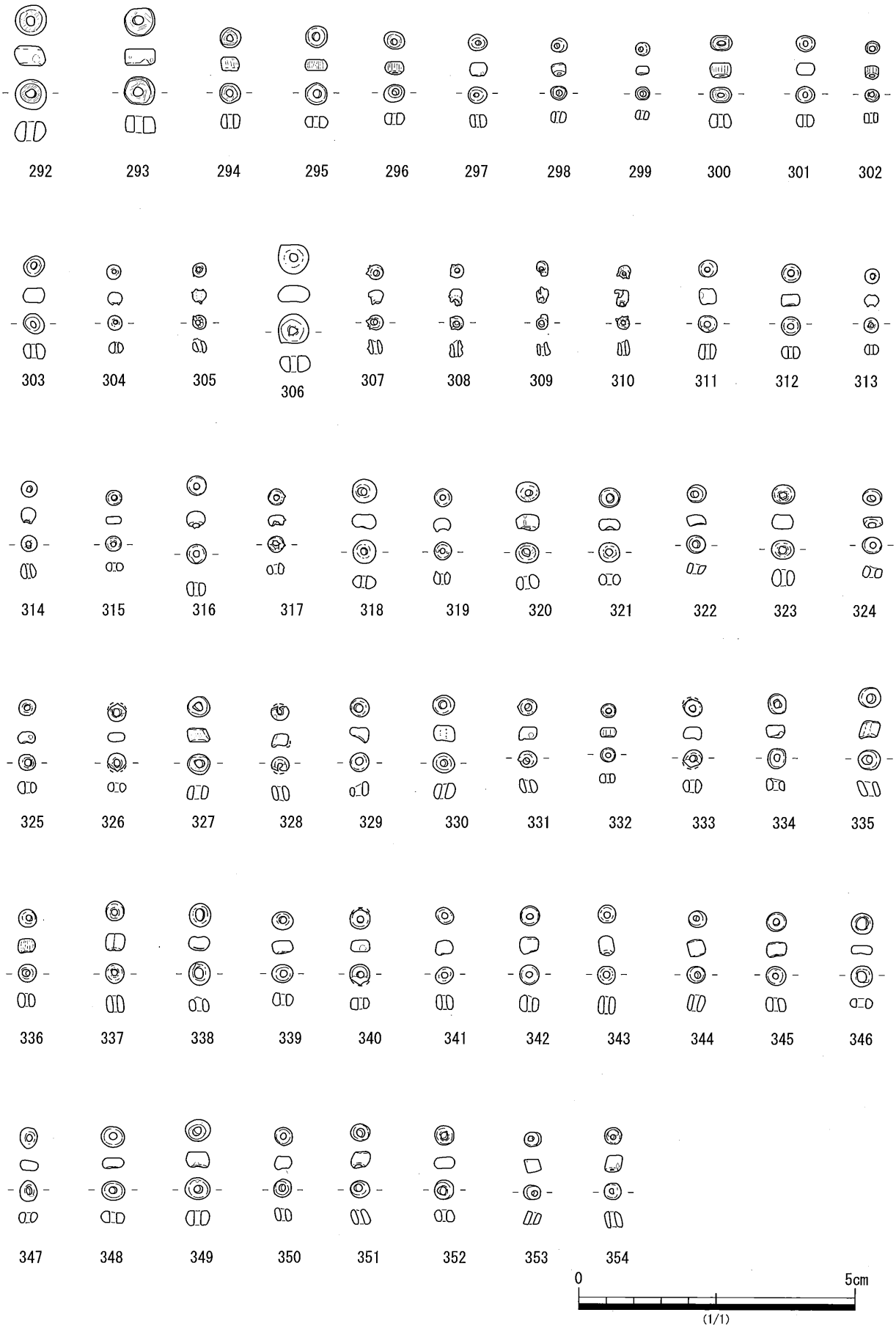
F 類（346・347） 2 点ある。直径 3.5 ～ 4.5mm で、いずれも薄身である。346 は器幅に対して孔径が大きい。小口はいずれも丸く収め、平坦面を持たない。色調は透明感のある青緑色で、器体内部に縦方向の気泡列が認められる。

G 類（348・349） 2 点ある。直径 4.5mm で、小口は丁寧に研磨し、平坦面をもつ。色調は黄緑色で、縦方向の気泡列や白色夾雑物の縦縞が認められる。

H 類（350 ～ 352） 3 点ある。直径 3.5mm で、全体が丁寧に研磨され、擦痕がみられない。小口は研



第 60 図 土壙墓 ST05 出土遺物 (2)

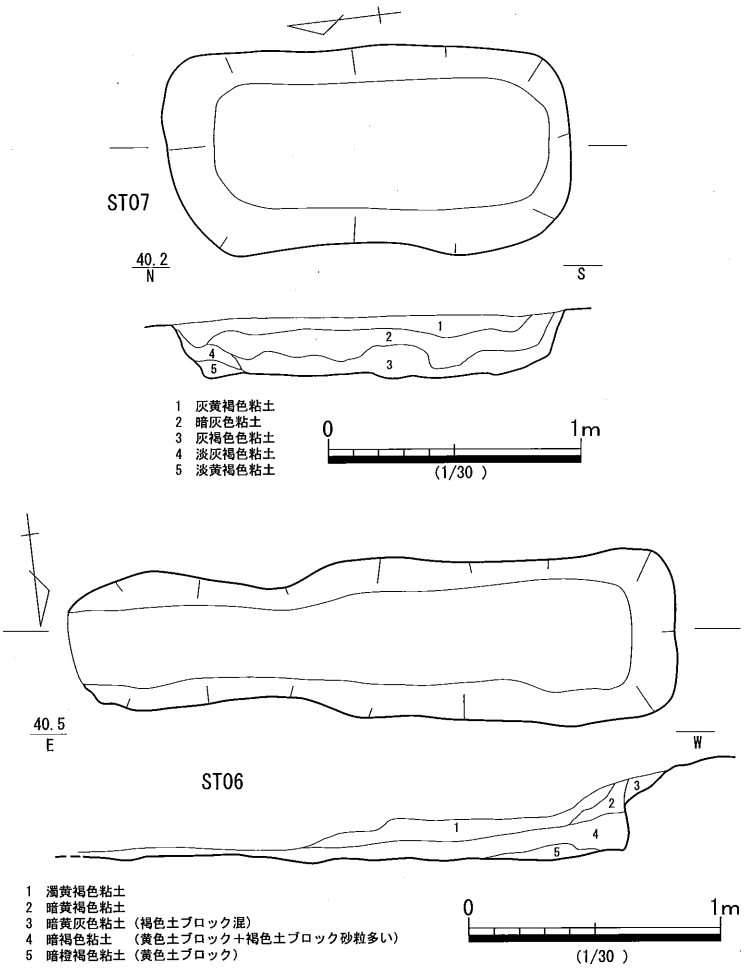


第 61 図 土壙墓 ST05 出土遺物 (3)

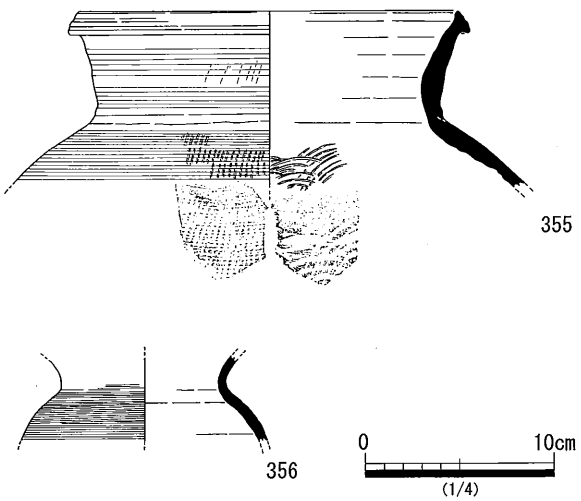
磨により丸く仕上げる。色調はやや透明感をもつ黒色である。器体内部に気泡がみられるが、気泡列の方向は不明である。

I類（353）１点ある。直径2.5mmで器幅に対して器高が高く、上下の小口面は平行しない。色調は明赤褐色で、黒色夾雑物による縦縞が認められる。

J類（354）１点ある。直径3mmで器幅に対して器高が高く、上下の小口面は平行しない。色調は明黄橙色で、縦方向の気泡が僅かに認められる。



第62図 土壙墓ST06・07平・断面図



第63図 土坑SK27・落込遺構SX01出土遺物

土壙墓ST06（第62図）

ほぼ東西方向に主軸を向ける土壙墓である。長さ2.4m、幅0.7m、深さ0.34mをはかる。東側は削平されており、さらに東に伸びるものと思われる。底場はほぼ平坦で、底場付近の側壁の立ち上がりは急である。図の１～３層は中央に向かって窪むように堆積する。４層は粘質土、５層は地山に類似する土である。掘り形の形状から土壙墓と認定した。出土遺物はない。

土壙墓ST07（第62・63図）

南北方向に主軸をもつ土壙墓である。長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.26mをはかる。側壁の立ち上がりは緩やかで、堆積土は淡褐色系の粘質土で３層に分かれ、いずれも中央が緩やかに窪む。ST04周濠とST06のほぼ中間に位置し、ST06と主軸が直交することから、計画的に配置された遺構と推定できる。

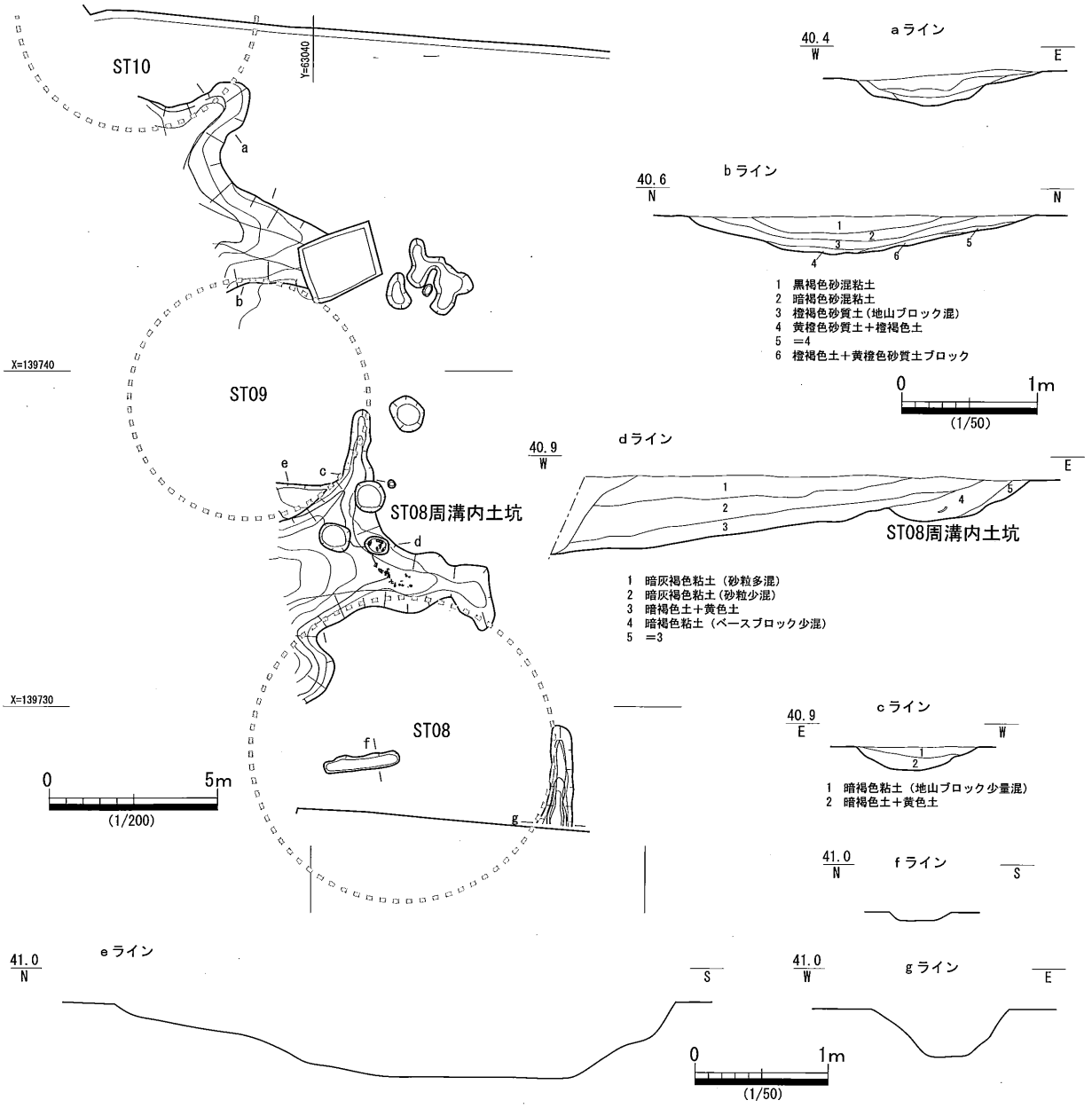
その他の土坑（第63図）

そのほかの土坑より、須恵器が１点出土している。356は土坑SK27より出土した須恵器壺頸部片である。

落込遺構SX01（第57・63図）

ST04の北側周濠からさらに北に派生する落ち込み遺構である。調査時に切り合いを明確

にできなかったが、検出状況写真などを点検すると、ST04に先行する可能性がある。北東方向に0.8mほどの緩やかな落ち込みだが、一部西側に長さ1.5m、幅1.0mの溝が付属する。また、ST04周濠も西側に浅い溝が取りつく部分もあり、ST07はその両溝の内側に収まる。したがって、ST04の西側に当該土坑群を埋葬主体とする盛土が施されていた可能性が考えられる。355はSX01の本体中央付近の底場で出土した須恵器壺である。肩部に顕著なカキ目調整を施すもので、形態的に6世紀中葉ごろのものと推定される。



第64図 古墳ST08～10平・断面図

A地区西丘陵の古墳（第64図）

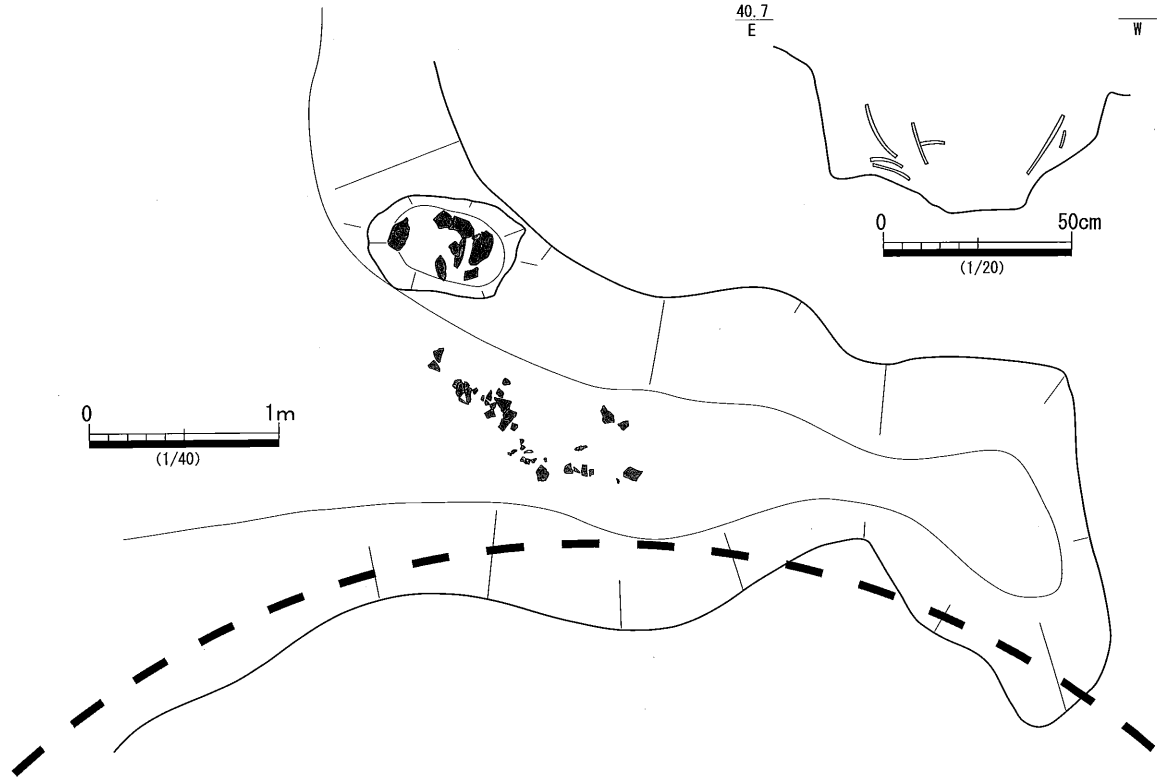
A地区西丘陵西側は、耕地造成による土地改変によって、B地区河川域との間に現況で約2mほどの段差がある。この削平で分断された不定形な溝跡が調査区西端の3箇所にみられた。溝跡は直線のものはなく、緩やかなカーブを描きながら複数の溝跡が交わる状況を呈している。溝底のレベルは西に深く、東に浅い。溝跡東端は削平により溝跡が消失した形状で終る。埋土中より須恵器が出土し、隣接地の調査では小規模円墳が確認されている。これらのことから、小規模な3基の古墳が削平され、周濠の一部のみが残存したものと判断した。

古墳ST08（第65・66図）

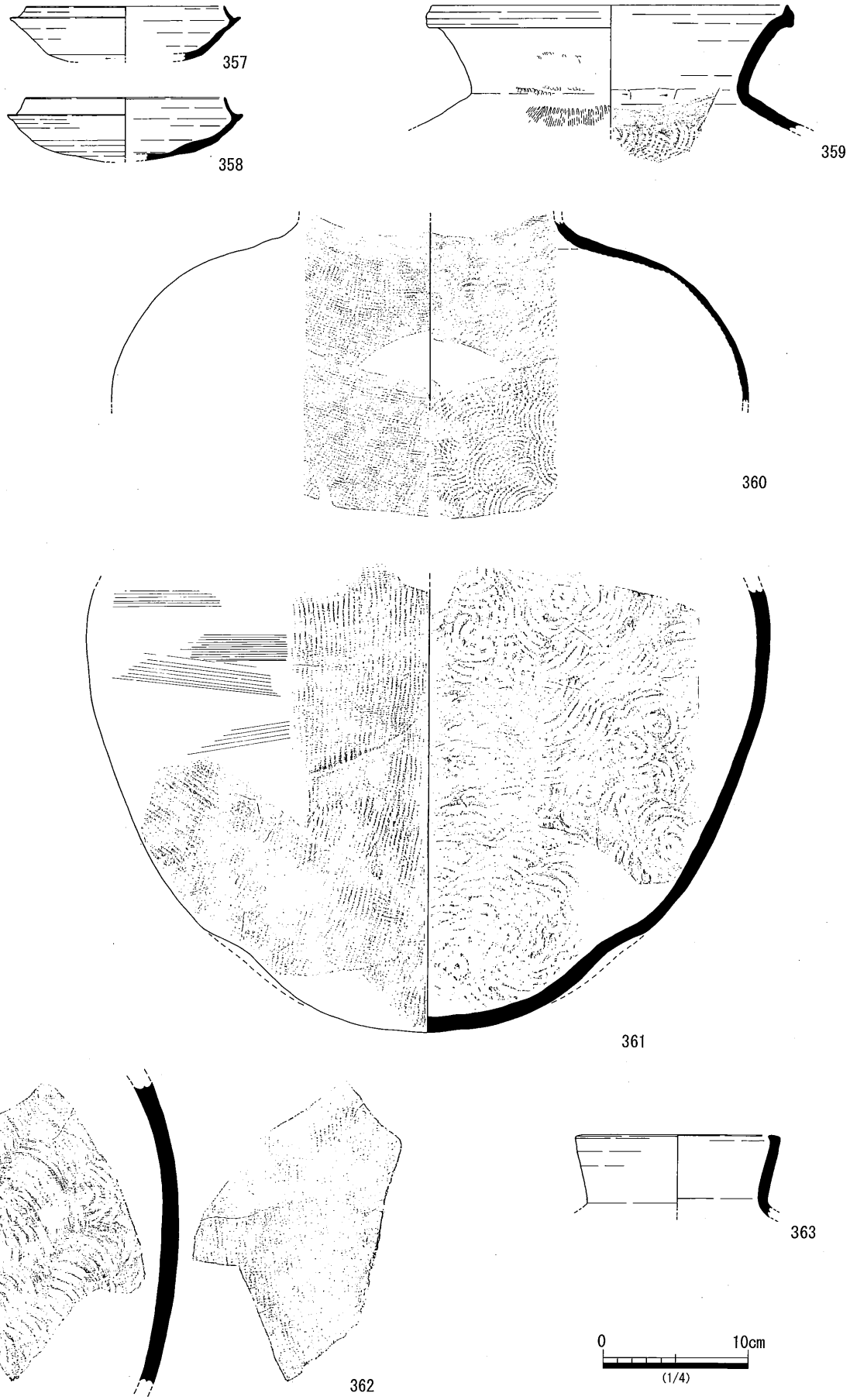
調査範囲の南端に位置する復元直径9mの円墳である。北東から南西に向かって傾斜する斜面地に立地し、西側を除く、北と東に周濠がある。古墳基底面の最上部である北東側の両周濠間は3.5mにわたって途切れる。西端では墳丘内側に抉るように周濠が広がる部分を確認した。北側周濠は最深部で0.6m弱をはかり、eライン南側で急な墳丘裾の傾斜が確認できる。この傾斜は、古墳北西側の周濠拡幅部にも同様に認められる。この拡幅は、推測の域をでないが、横穴式石室の墓道前庭の可能性が考えられる。

周濠からは主に北側で須恵器が出土した。これらの須恵器は、周濠底場より出土したものと、古墳と反対側斜面の不定形土坑より出土したものに分けられる。

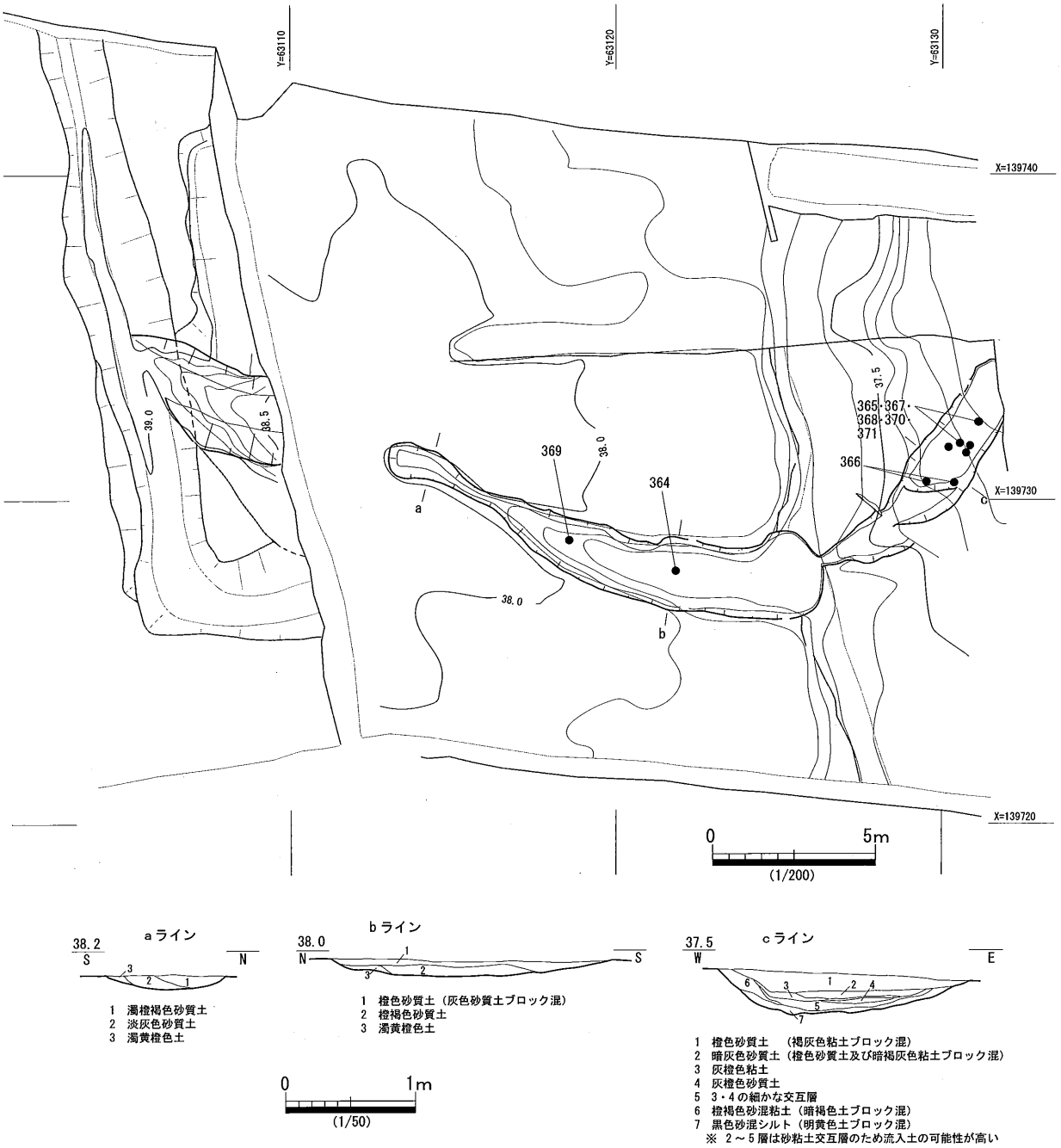
357は、ST08周濠底場で出土した須恵器杯身、358は不定形土坑から出土した須恵器杯身である。いずれも器壁が薄く、かえり部が斜め上方に長めに立ち上がるものである。受部径は16cm前後で、TK43型式に相当する。357は濃灰色を呈し、358は淡灰色を呈す。359～362は須恵器大型壺の各部破片である。359・360は周濠底場、361・362は不定形土坑から出土したものである。359は淡灰色を呈し、断面部はクリーム色となる胎土で、頸部外面の丁寧なナデ、頸胴部内面境の手持ちナデ、胴部内面の当て具痕の軽いナデなどが特徴である。360は鉄滓状の黒色球状粒を含む胎土で、胴部内面の当て具痕を軽くナ



第65図 古墳ST08周溝遺物出土状況



第 66図　古墳 ST08 出土遺物



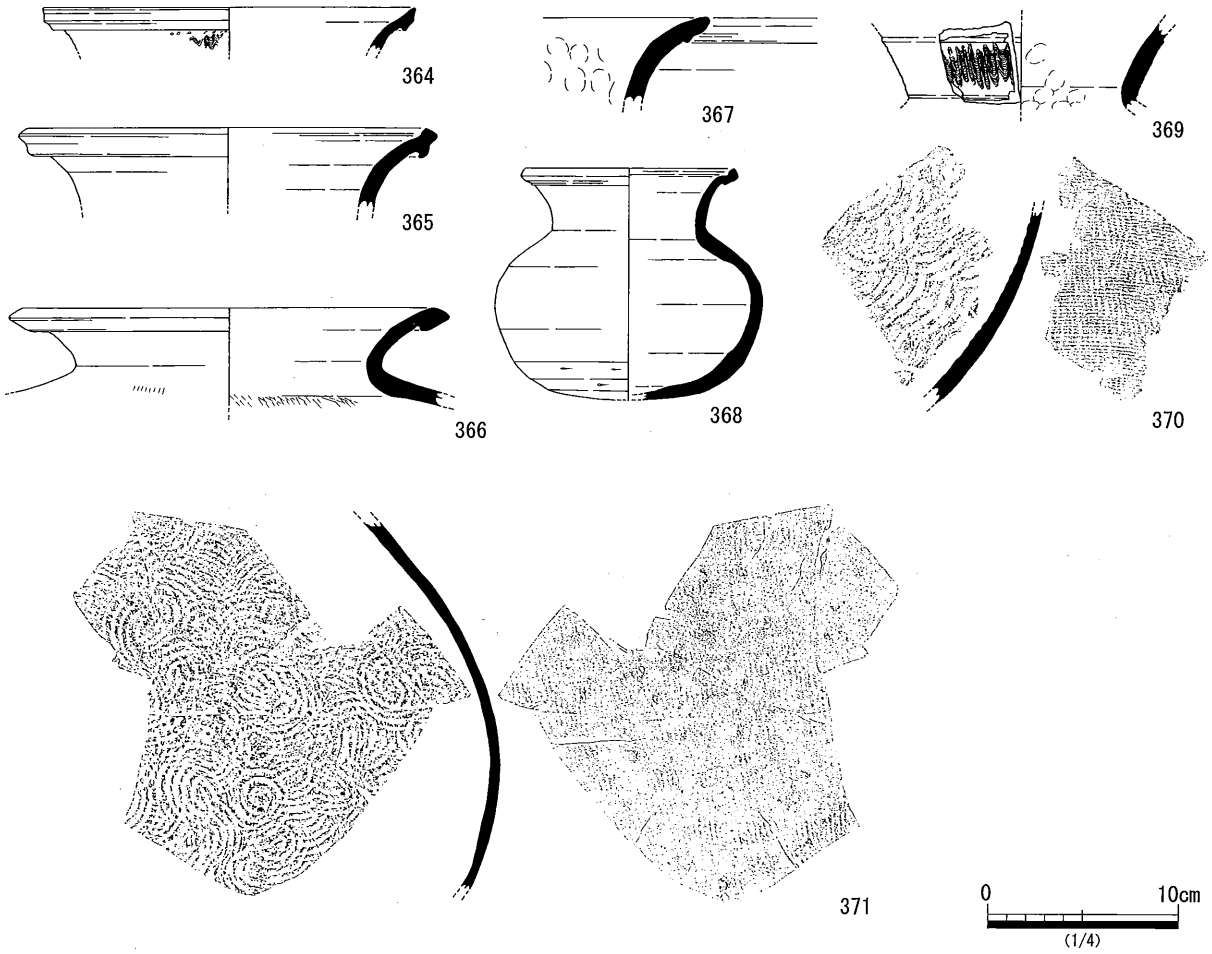
第 67 図 溝跡 SD01 平・断面図

デるものである。361 は外面に目の細かい擬格子叩きを施し、濃灰色系胎土をもつ。362 は内外面の器面調整を相当にナデ消すものである。363 は、鉄滓状の黒色球状粒を含む胎土をもつ須恵器壺である。

溝跡 SD01（第 67・68 図）

A地区西丘陵東斜面で検出した溝跡である。西から東に向かって、幅 3.0 m、深さ最大 0.5 m、断面U字形の溝跡が地形等高線に直交して延長 23 m流下した後、北東方向に屈曲し、東西丘陵間の谷に収束する。西端は、中世大溝 SD04 との重複箇所まで確認したが、それより西には伸びない。溝跡底場の高低差は、東西で約 2 mに及ぶ。

埋土は、a～c ラインのそれぞれ 1 層に、周辺地山土に類似した橙褐色土と灰褐色土のブロック層が認められる。このことから、溝跡の廃絶もしくは周辺整地に伴って埋め戻しが行われたものと推定され

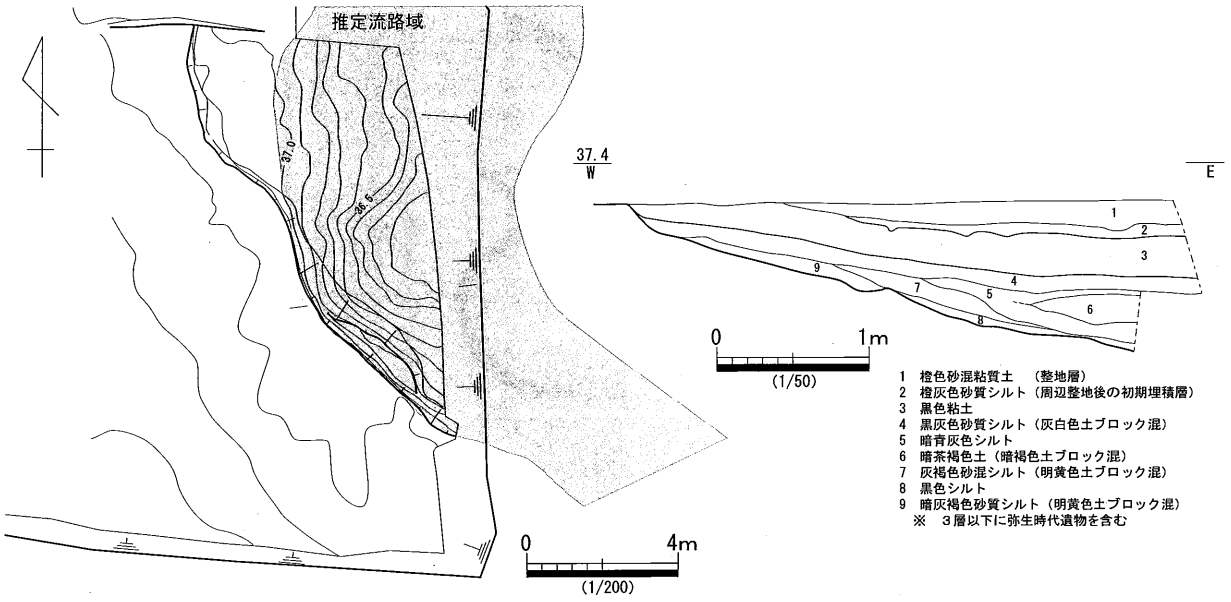


第 68 図 溝跡 SD01 出土遺物

る。c ラインでは、埋め戻し前の土層がよく残っており、2 ～ 5 層は粘土と砂質土が交互に堆積した土層である。したがって、上部からの流入土である可能性が高い。6・7 層は黒色系土層で、地山土の細かなブロックが混じる。主に、この土層から須恵器がまとまって出土した。

364 ～ 371 は、溝跡の東端（c ライン付近）で出土した須恵器である。364 ～ 368 は壺、369 は瑞、370・371 は壺体部片である。364 は口縁部を上下に拡張し端面に強いナデを施すもので、頸部には目の細かい工具による櫛描波状文を施す。365・366 は口縁部を矩形に仕上げ、365 は内面に強いナデを施す。367 は外反口縁の端部からやや下がった位置に、突線を作り出すものである。365 と 367 はセピア調の胎土である。368 は小型壺で、口縁部形態は 365 に類似する。370・371 の体部片と他の口縁部片を胎土・焼成の面から比較すると、371 の体部片が 366 の壺口縁部に、370 が 365 の壺口縁部に対応するものと考えられる。大型壺 2 個体（365・366）、小型壺 1 個体（368）は完形で溝跡に投棄される。

以上の出土遺物から、本遺構は 6 世紀中葉から後葉にかけて、和泉陶邑窯跡の TK10 ～ MT85 の時期幅に相当すると言える。本遺構周辺は中世段階の地形改変が著しく、遺構の性格を検討する材料に乏しいが、須恵器の壺を中心とした器種組成からみて、通常の集落遺構とは考えにくい。溝跡の平面形は、L 字形に屈曲する形態であり、古墳周濠の可能性もあるが、一つの古墳と考えると、規模が大きすぎる点と、屈曲部の角度が鈍角になる点で矛盾が多い。周辺には墳墓遺構が多く認められることから、墓域内の何らかの区画を行った施設である可能性が高い。



第 69 図 流路跡 SR01 平･断面図

流路跡 SR01（第 69 ～ 73 図）

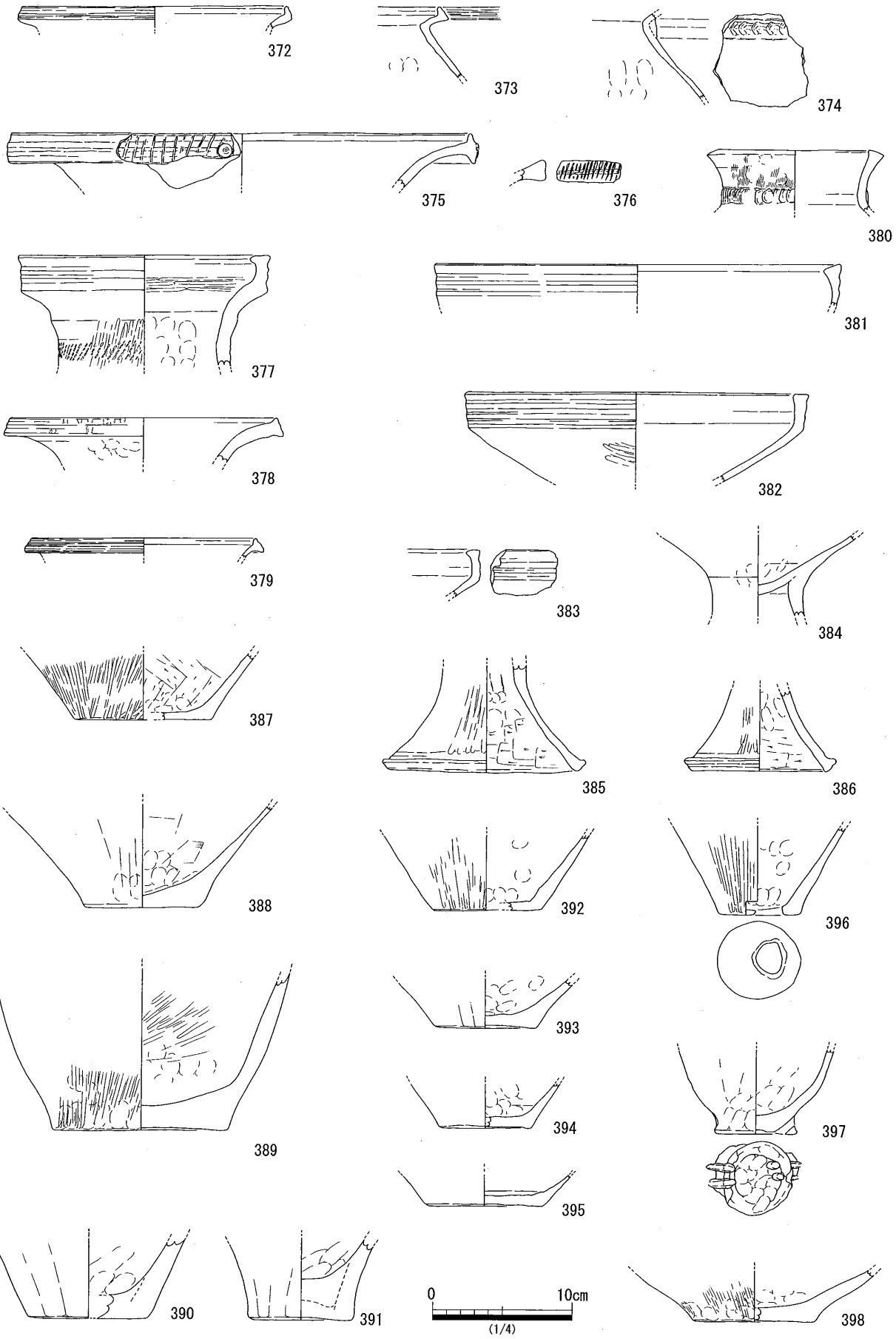
A地区東西丘陵間の谷筋は、現在、調査地南側に隣接する極楽寺山門に至る参道である。参道直下の調査は実施できなかったが、参道に隣接する西側丘陵裾部において、旧谷地形を示す流路跡 SR01 西肩を検出した。調査対象地内で深さが約１m、元来の谷の深さはさらに深い。平面的には、南東から北西に向かって流下した後、北方向に流れを変えており、蛇行しながら北側低地部に至る。なお、東丘陵裾では谷地形を示す流路跡がないことから､現参道の西側を中心に旧谷地形が広がっていたものと考える。

第 69 図の１・２層は周辺整地の際に埋められた土層である。それ以下に谷地形埋土が認められる。3層は均質な黒色粘土で、湿地状態で自然堆積した土層である。5 層以下も水流痕跡が少ない。粘質土中に地山土の小粒を多く含むことから、少なくとも調査対象地内は谷底の水流域からやや外れた環境にあったものと言える。

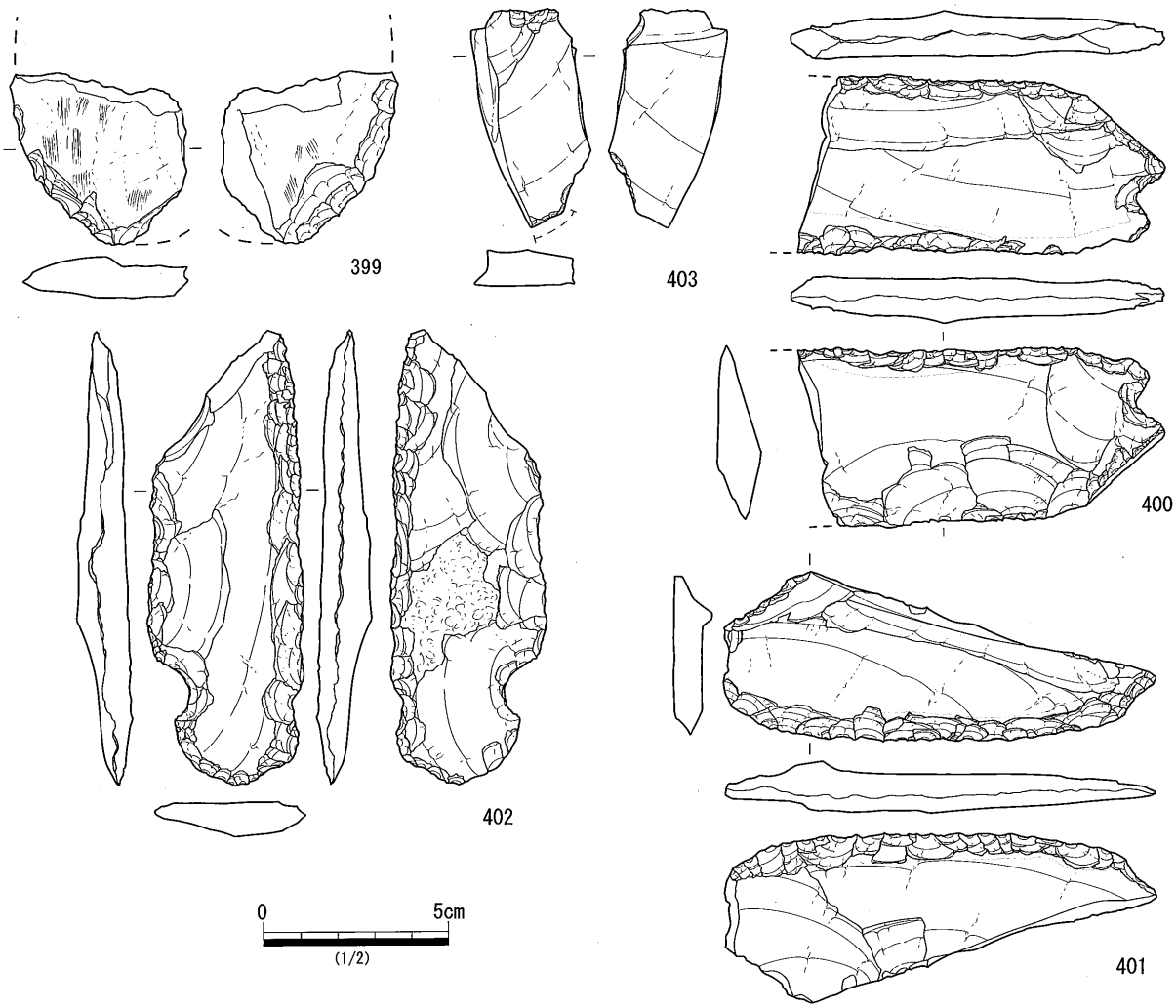
出土遺物は主に３層下部から 5 層で弥生時代中期後半の土器･石器が出土した。

372 ～ 374 は甕である。口縁端部を上方にのみ拡張し、端面にやや浅い凹線文を施す。374 は口縁部胴部境に押捺突帯を貼付する。突帯の上下端はナデ仕上げで器壁と一体化しており、押捺は円弧状である。

375 ～ 380 は壺である。377 は口縁部が屈曲して上方へ折れ曲がるタイプの複合口縁壺、380 は口縁部が短く斜め上方に立ち上がる短頸壺、それ以外は広口壺である。375 は口縁端部を上下に大きく拡張し凹線文を施した後に縦線を施し、円形浮文を貼付する。376 は口縁端部上下拡張が緩やかで、密で細い縦線（刻目）を施す。377 の頸部の刻み原体は刷毛状工具の小口を利用する。378 は口縁部端面に棒状浮文痕跡が僅かに残る。378 は他と異なり黒色雲母粒を含む胎土である。380 の頸部押捺突帯は突帯上下端に粘土接合痕跡が残る。381 ～ 383 は口縁部外面に凹線文を施す高杯杯部である。384 ～ 386 は高杯脚部片である。384 は脚杯間の括れ部が幅広く、大型の円板粘土を充填する。385・386 の裾端部は上方への拡張が少ない。387 ～ 398 の底部はいずれも安定した平底である。387・392・395 など、胴部下半が直線的に窄まり、底面が平坦で底部厚が胴部器壁に対して厚くならないものは、壺底部である。



第 70 図 流路跡 SR01 出土遺物 (1)



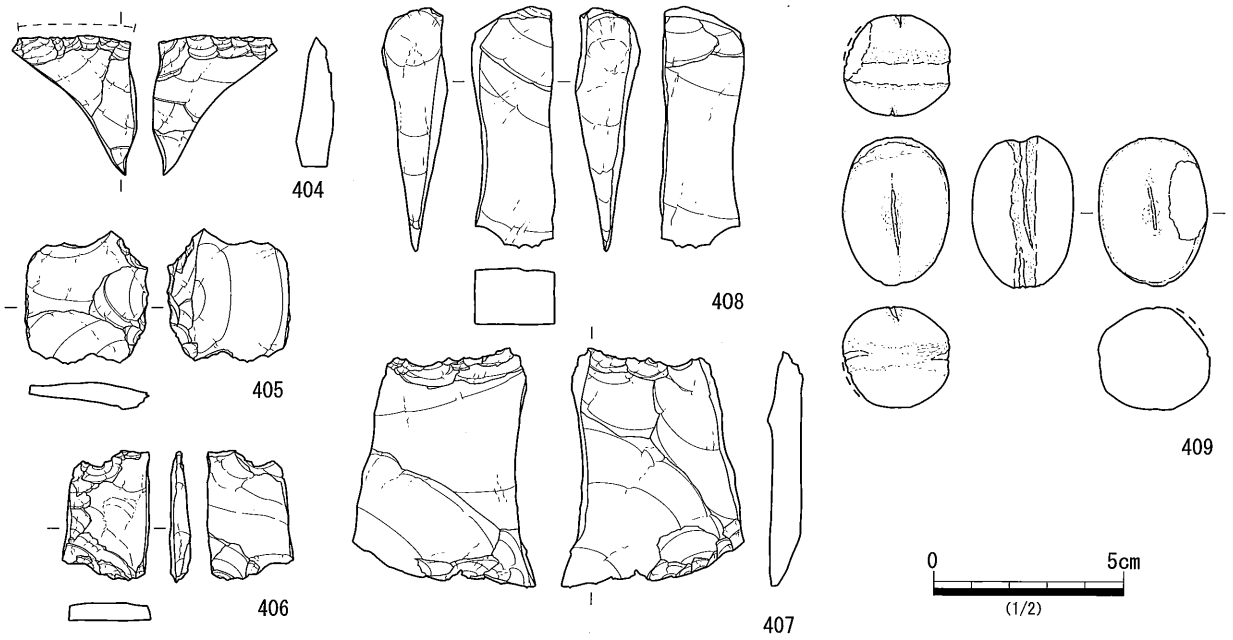
第 71 図 流路跡 SR01 出土遺物 (2)

また、胴部下半が直立気味となる 389・397 は鉢底部と推定され、397 の底面には紐掛穴がみられる。それ以外の甕底部は底部の厚みが一定しない。

以上の弥生土器の特徴は次のとおりである。甕は、口縁部の端部拡張や凹線施文が十分発達せず、押捺突帯をとどめる。壺は、口縁端面凹線文施文後の刻目（縦線）や浮文貼付などの施文がある。一方、高杯は口縁部外面に凹線文以外の装飾文様がなく、377 の複合口縁壺の口縁部にも凹線施文後の装飾文様はない。甕や広口壺には中期後半古相の特徴を残すが、高杯や複合口縁壺には中期後半中相から新相にかけての特徴を認める。以上により、当資料は弥生時代中期後半中相を中心として、前後に若干時期幅を認めうる資料と言える。

399 ～ 411 は 3 層以下より出土した石器である。サヌカイト剥片 1 点（8.48g）を除く、全ての石を図化している。器種組成は打製石庖丁 2 点、打製石斧 1 点、打製石剣 1 点、石核（残核）2 点、剥片（分割剥片含む）4 点、大型板状素材 2 点、石錘 1 点である。石材は打製石斧が結晶片岩、石錘が砂岩、そのほかはサヌカイトである。

399 は打製石斧である。結晶片岩の大型剥片を素材とする。表裏面に線状痕および摩滅痕が認められる。刃部再調整を行う際に折損し廃棄されたものと考えられる。通常、弥生時代中期後半には打製石斧



第 72 図 流路跡 SR01 出土遺物 (3)

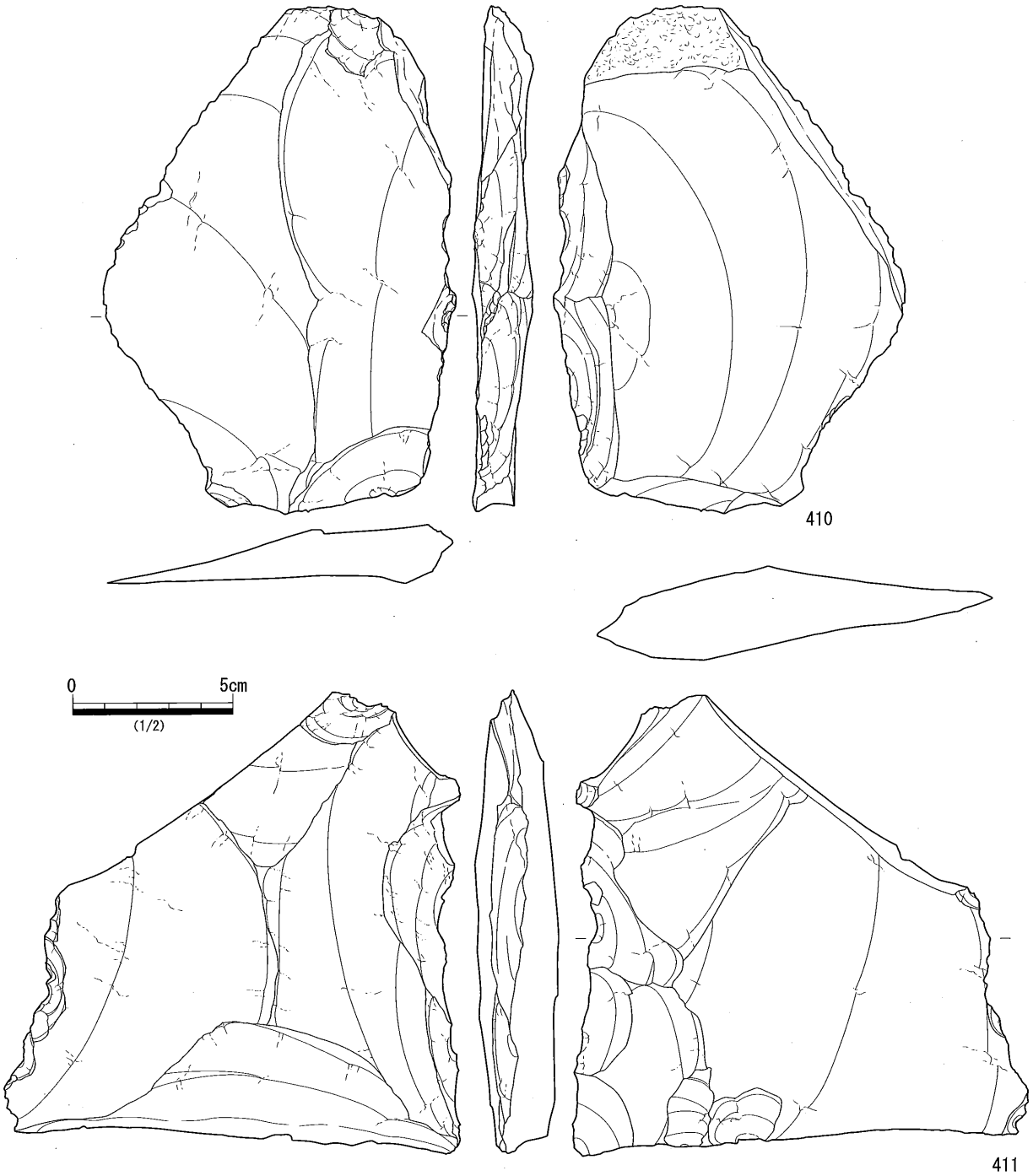
は使われておらず、縄文期もしくは中期前半以前の遺物の混入の可能性がある。

400 は復元幅約 14cm の打製石庖丁である。側縁に抉りを入れるタイプで、いわゆる金山型剥片剥離技術（森下 2002）によって生成された横長剥片を素材とする。図の右上部の平坦面は素材段階の大きな分割もしくは剥離面である。素材剥片の剥離末端を刃部に用いる。背部は、素材剥片の腹面側から横方向に連続して幅約 2.5cm の剥離を施して打瘤を除去し、丁寧に敲打を加えて直線的な背部を整形するものである。刃部は使用痕を切って再加工を行った痕跡が認められる。折損面は、背部からの打撃により生成されており、楔状石核等への器種転用途上と推定される。401 は復元幅約 12cm の打製石庖丁である。上半部および図の左側縁が折損する。上半部の折損は、折損部の稜線に微細な刃こぼれ痕や小剥離痕がみられることから、素材段階の折損の可能性もある。刃部は表裏両面に丁寧な二次加工が施され、弱い摩滅痕がみられる。素材剥片には、先行剥離面が明確に残ることから、金山型の横長剥片と言えるが、主要剥離面には同時割れの痕跡がある。

402 は不明石器である。背面に自然面をとどめる横長剥片の側縁を基部とし、基部左右に抉りを入れる。基部より上の器体左右側縁は敲打による丁寧な刃潰しを行う。上半部は折損するが、次第に器幅が減じる傾向にある。尖頭部を形成しているようであれば、打製石剣と考えることができる。一般的に当地域の弥生時代中期後半には打製石剣が多く、基部形状には個体ごとの個性もみられることから、当該資料を打製石剣としておく。406・407 は石核である。いわゆる楔形石器に分類可能だが、ここでは両極打撃による残核として位置づけた。ただ、407 は図の下端に刃部調整のような細かな剥離が認められ、406 は整形加工とも言える加工が認められることから、407 は刃器、406 は何らかの未製品とすべきかもしれない。

403 ～ 405・408 はサヌカイト剥片である。409 は砂岩製の石錘。周縁を敲打により窪ませ、最深部に擦切溝を施す。また表裏面には縦位の擦切溝がある。重量は 35.99g である。

410・411 はサヌカイトの大型剥片である。410 は側縁に自然面を残す。大型の板状素材に打面調整を施し、素材幅一杯の横幅を取り込んで剥離された大型剥片である。重量は 309.96g。411 は厚さ 2.5cm



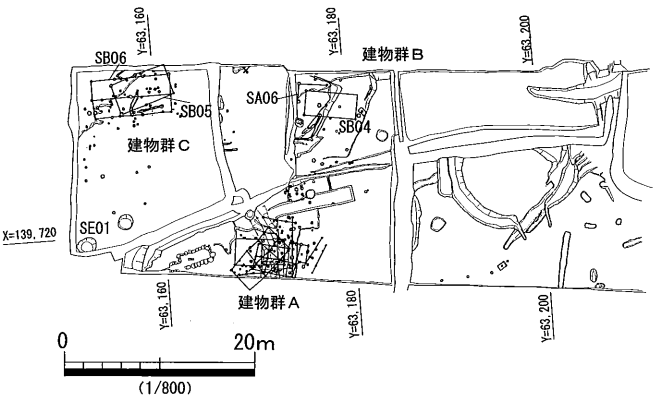
第 73 図 流路跡 SR01 出土遺物 (4)

の板状石核である。大型の板状素材から大型剥片を剥離したネガ面が表裏に残る。410・411 ともに器体周縁に多数の微細剥離痕があり、エッジの鋭さを失っている。411 のネガ面に残る剥離面は、410 のような大型剥片を剥離した痕跡とみることができるが、当資料中には打面調整剥片など大型剥片を剥離する際に生じる不定型な剥片は含まれていない。したがって、両者ともにこの状態で搬入されたものと考えられる。

第５節　中世以後

Ａ地区東丘陵中世遺構群（第 74 図）

Ａ地区東丘陵には３群の中世遺構群が分布する。建物群Ａは３棟の掘立柱建物跡、５基の柵列跡で構成する。これらは 10 × 7 ｍの範囲に著しく重複して分布しており、複数時期にまたがった遺構群である。遺構の方向性をもとに区分すると、SB01・SA01・SA02 が北から 30 ～ 45 度東偏、SB02・SA03 が北から 75 度西偏、SB02・SA04・SA05 がほぼ正方位となる。以下、各遺構ごとに報告する。



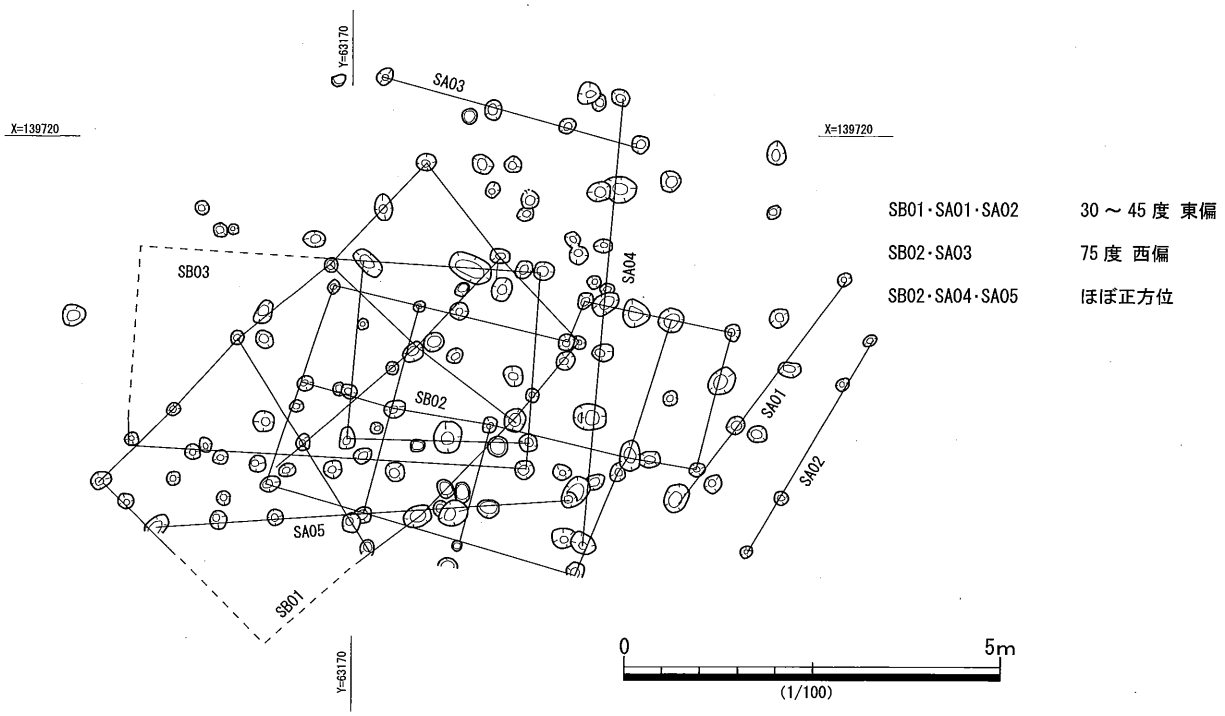
第 74 図　Ａ地区東丘陵中世遺構分布状況

掘立柱建物跡 SB01（第 76 図）

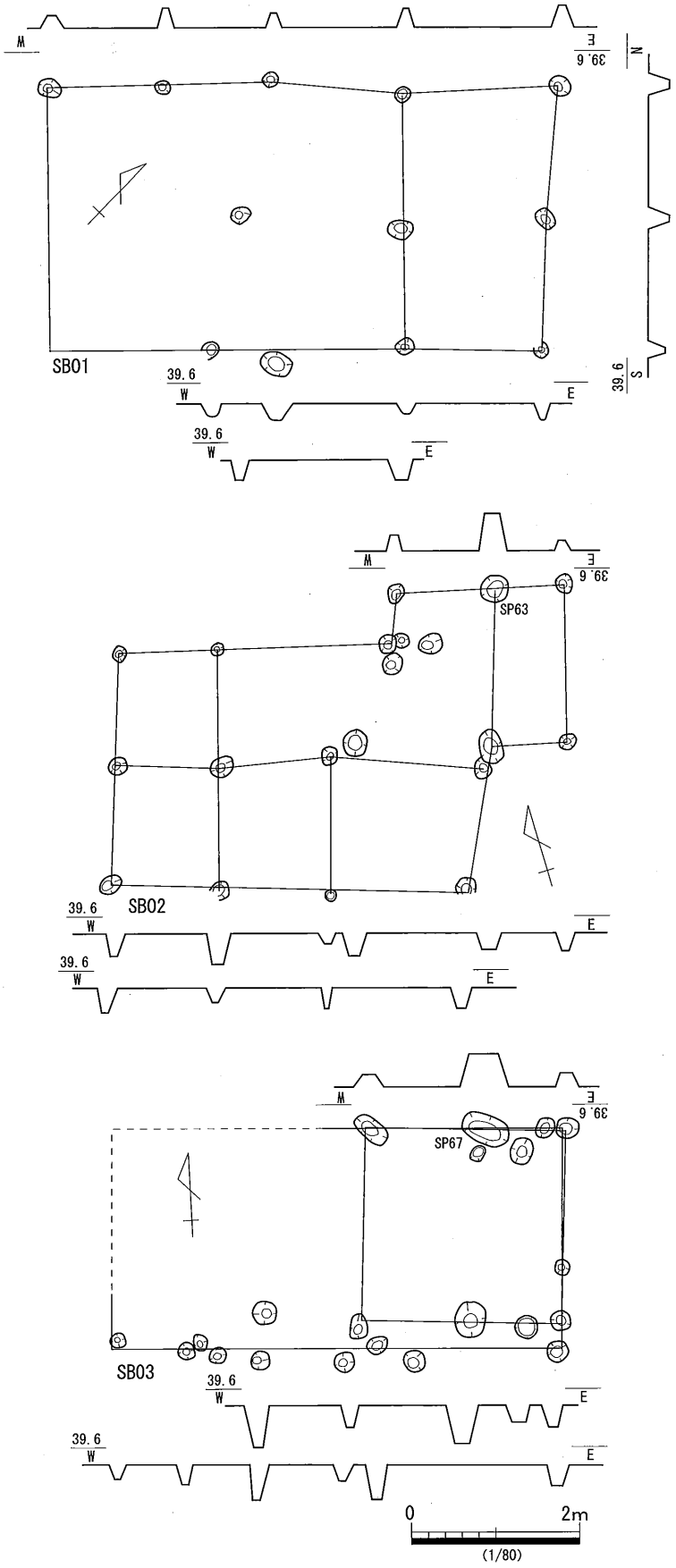
桁行 6.0 ｍ、梁間 3.1 ｍ、2 × 4 間の掘立柱建物跡である。北西側柱は柱間隔が揃うが、南東側柱は柱間隔が不均等である。束柱が認められる。柱穴の規模は小さいものが多く、直径 0.1 ～ 0.16 ｍの掘り形である。ただ、調査時に柱痕しか確認出来ていない可能性もあり、本来はもう少し掘り形の直径が大きくなる可能性が高い。深さは浅いもので 0.08 ｍ、深いもので 0.16 ｍある。上部をかなり削平されている。

掘立柱建物跡 SB02（第 76 図）

桁行 4.4 ｍ、梁間 2.72 ｍで、建物北東側に 2 ｍ× 1.9 ｍの張り出しが付属する。本体の柱構造は桁行 3 間、梁間 2 間で、束柱をもつ。付属の張り出しは柱配置が不均等である。張り出し部と本体の接合部となる柱穴は直径 0.2 ｍ以上の掘り形をもち、規模が大きいが、それ以外の柱穴は直径 0.1 ｍ内外のものが多い。深さも、0.19 ｍのものが最大で、上部は削平を被る。



第 75 図　Ａ地区建物群Ａ建物分布状況平面図



第 76 図 掘立柱建物跡 SB01・02・03 平・断面図

掘立柱建物跡 SB03（第 76 図）

桁行 5.3 m、梁間 2.6 mで、柱間隔が不均等な建物跡である。数度の建て替えが想定できるが、柱の組み合わせは明確でない。所属する柱穴の直径は、0.25 m大のものもあり、他と比べてやや大型で、深さも 0.2 mを超えるものもある。

柵列跡 SA01（第 77 図）

延長 3.7 mの柵列跡である。方向を同じくする建物跡 SB01 とは 2.4 m南東方向に離れる。4 個の柱穴で構成し、柱穴の大きさは 0.2 ～ 0.25 mと、比較的大きい。深さは約 0.2 mである。

柵列跡 SA02（第 77 図）

延長 3.4 mの柵列跡である。方向を同じくする SB01 とは 3.5 m南東方向に離れ、SA01 との間隔は 0.8 ～ 1.2 mある。4 個の柱穴で構成し、中間の柱間隔が広い。柱穴の大きさは直径約 0.15 mと小型である。深さは約 0.1 ～ 0.2 m。

柵列跡 SA03（第 77 図）

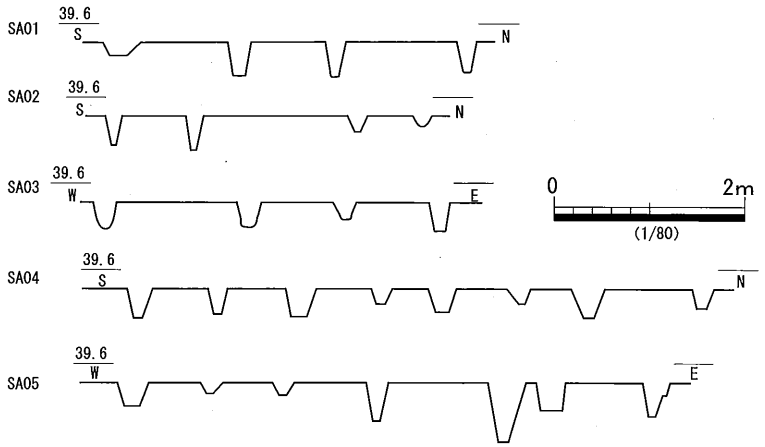
延長 3.5 mの柵列跡である。方向を同じくする SB02 とは 2 ～ 2.7 m北に離れる。4 個の柱穴で構成し、最も西の柱間隔がやや広い。

柵列跡 SA04（第 77 図）

延長 6 mの柵列跡である。方向を同じくする SB03 とは 0.8 m東に離れる。8 個の柱穴で構成し、柱穴の大きさは 0.2 ～ 0.45 mと大小ある。他の柵列跡と比較すると、柱間隔や柱筋が整う。深さは 0.15 ～ 0.18 mと浅く、上部を削平を被る。

柵列跡 SA05（第 77 図）

延長 5.5 mの柵列跡である。方向

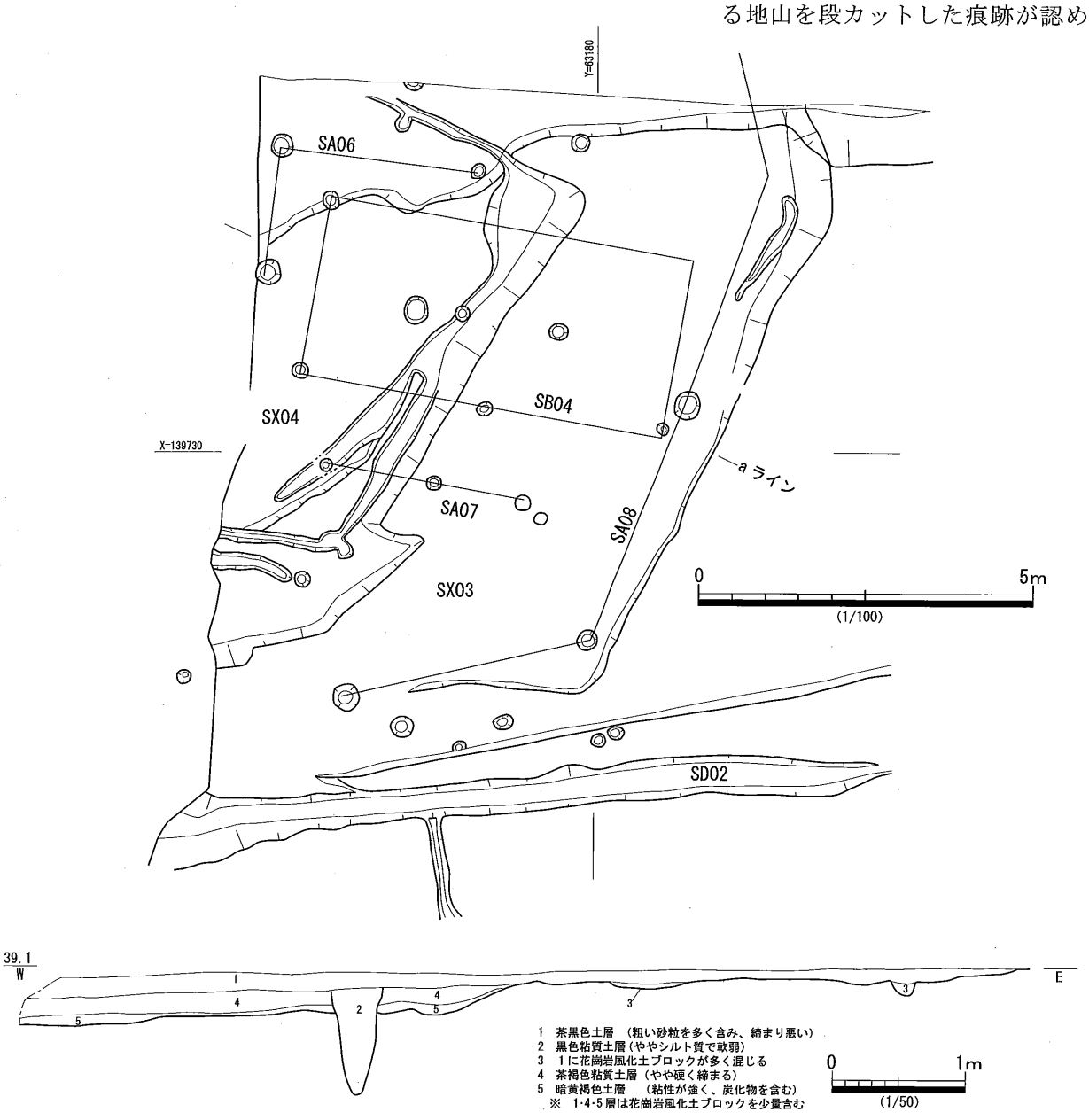


第 77図　柵列跡 SA01 ～ 05 断面図

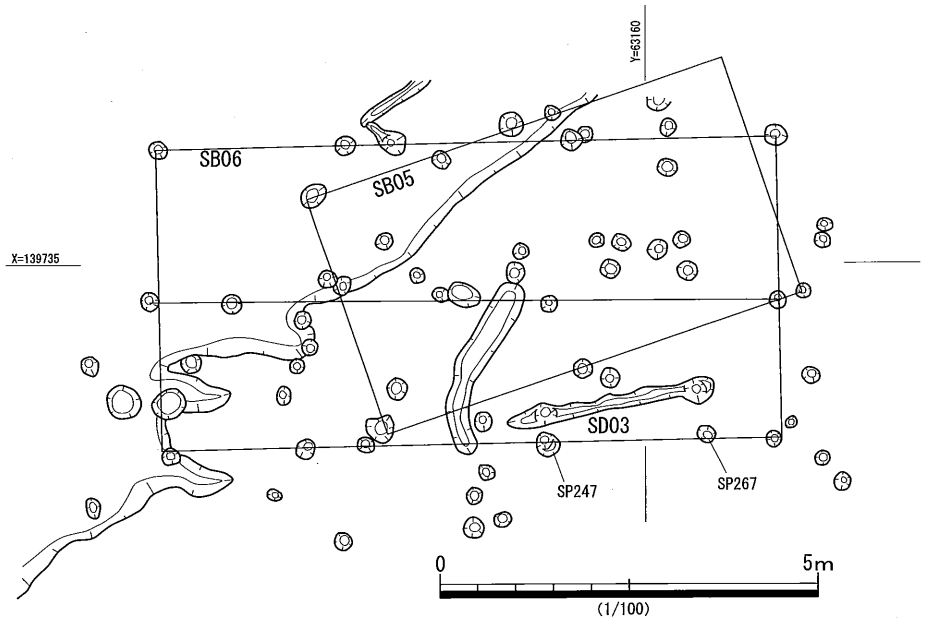
を同じくする SB03 に近く、特に東側では 0.5 ｍしか離れていない。7 個の柱穴で構成し、柱筋は概ね揃う。柱穴は深さ約 0.3 ｍである。SA04 と接する位置で柵列跡は収束する。SA04 とは角度が若干異なるが、互いに関連する遺構とみておきたい。

建物群Ｂ（第 78 図）

建物群Ａから北に 5 ｍほど離れた位置にある。建物跡の基盤となる地山を段カットした痕跡が認め



第 78 図　Ａ地区建物群Ｂ平･断面図



第79図 A地区建物群C平面図

られるSX04、SX05はその遺構である。断面図位置に該当する柱穴は、少なくともSX05埋土を切って掘り込まれており、建物跡や段カットの痕跡は複数の時期にまたがるものと推定される。復元した建物跡SB04は、北西に柵列跡SA06を、南にSA07を伴う1間×2間の掘立柱建物跡である。多くの柱穴はSX04・05埋土を除去した後に検出しており、柱穴も浅いことから、SX04・05埋没後に構築された建物跡と考えられる。柵列跡SA08はSX04に沿って設けられる。

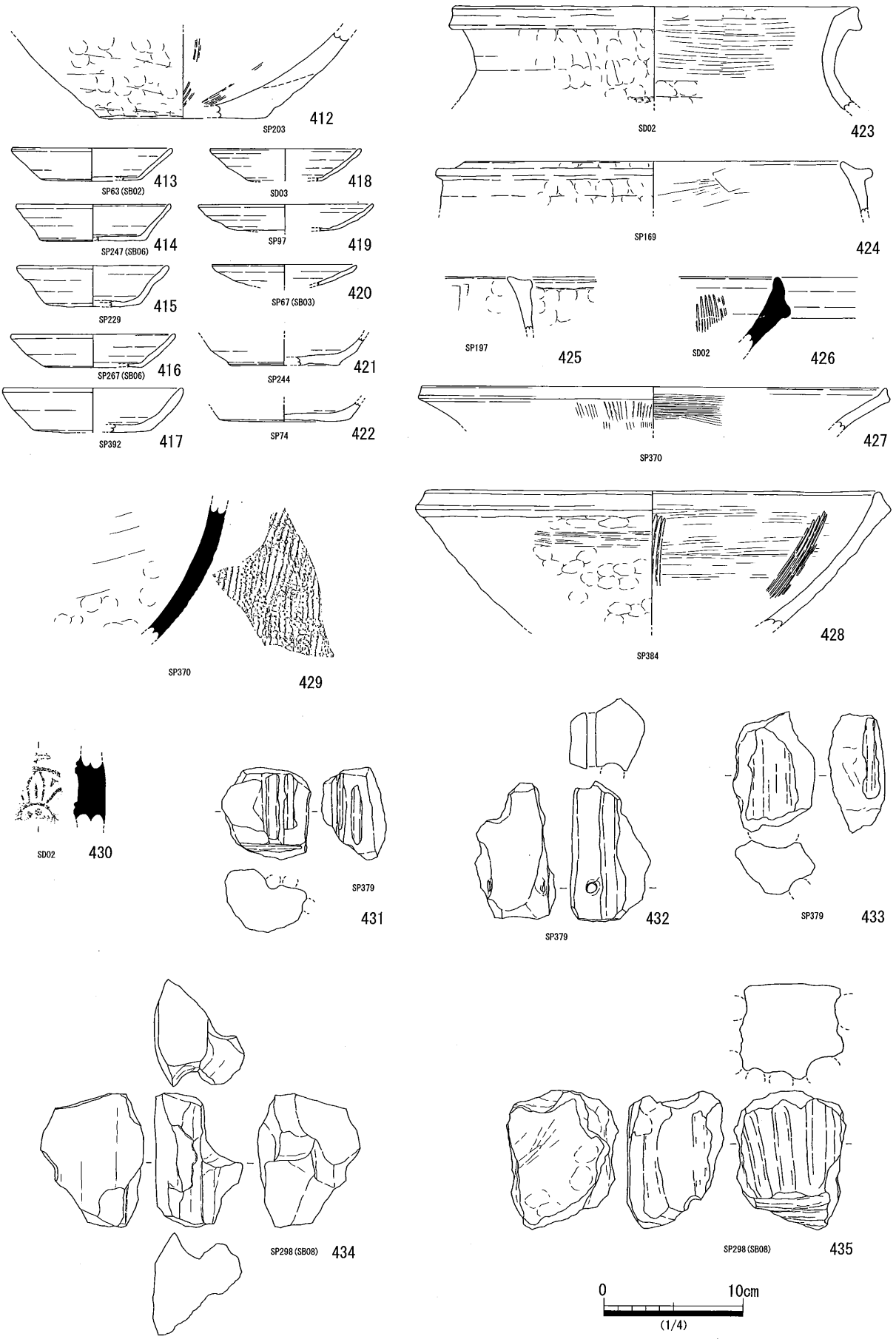
建物群C（第79図）

東丘陵西斜面に立地する。2棟の掘立柱建物跡で構成する。掘立柱建物跡SB06は桁行6m、梁間4mで、3×2間の柱構成である。南側柱は柱間が不揃いである。棟筋には束柱が部分的に設けられる。建物方位はほぼ正方位を向く。掘立柱建物跡SB05は梁間1間、桁行2間で、SB06と角度を違えて重複する。桁行5.9m、梁間3.1mをはかる。建物方位は北から15度西に偏る。

A地区東丘陵出土の遺物（第80図）

412～435はA地区東丘陵の柱穴等より出土した遺物である。412は土師器の擂鉢。413～422は土師器杯・皿。423は土師器壺、424・425は土師器羽釜、426は備前系陶器の擂鉢、427は土師器甕口縁部片、428は土師器擂鉢、429は十瓶山系須恵器胴部片である。これらの土器群は14世紀代に概ね収まる。430は面径13cmほどに復元できる軒丸瓦片である。八葉単弁蓮華文で、弁間の楔文も含めて、細線で笵出する。蓮子は3点確認できるが、各弁につき1点と予想され、中央に1点が配置されていた可能性が高い。外縁には圏線が巡り、粘土粒が僅かに残るが、文様の内容は明らかでない。平安期の瓦であろう。焼成は須恵質である。

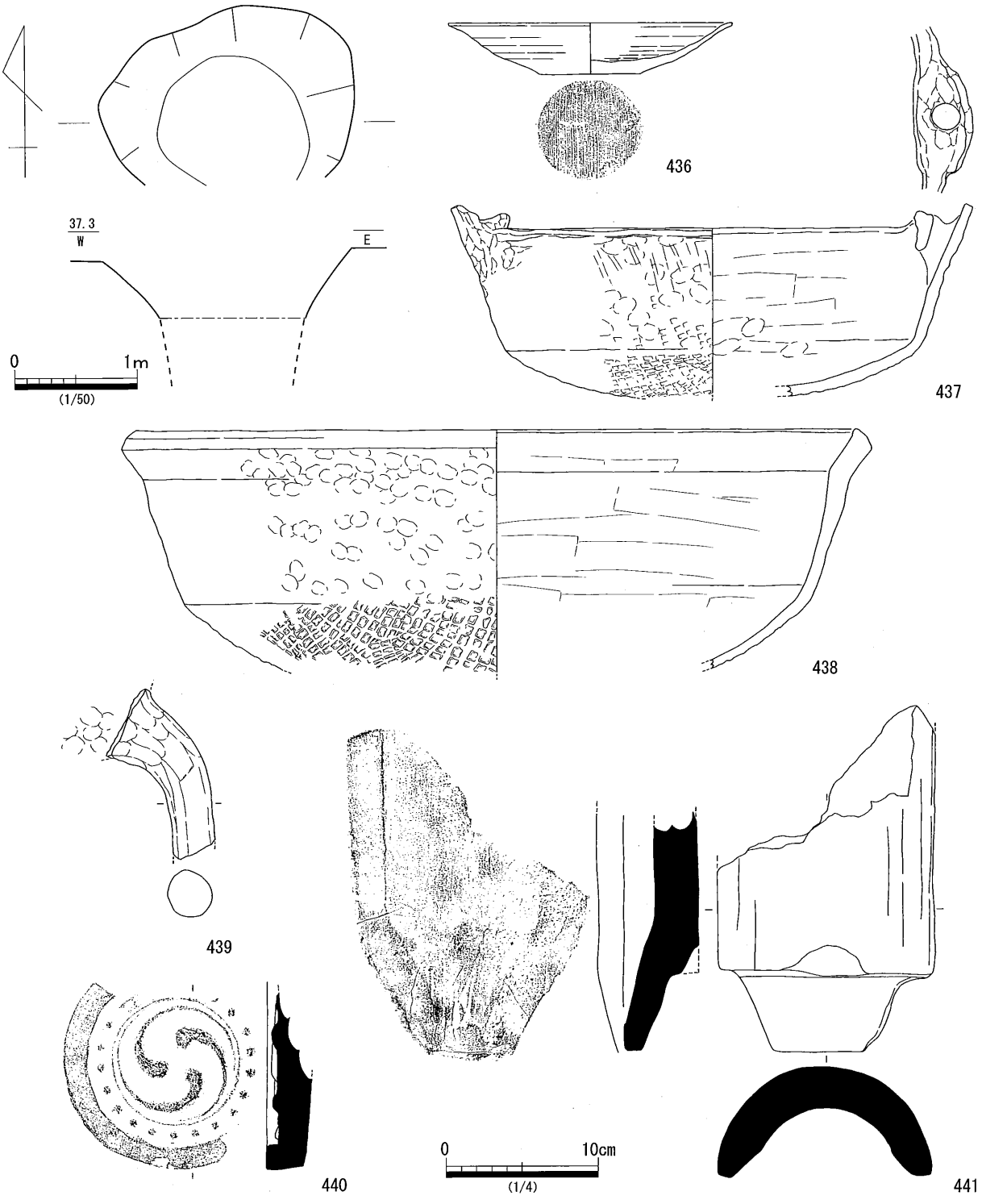
431～435は壁土片である。431は直径1cmの断面円形木材の圧痕が同一方向に認められる。432は直径1.8cmの断面円形木材とそれにほぼ接して直交する孔径0.6cmの抜穴がある。433は直径1.8cmの木材圧痕、434は一面にやや彎曲する壁面が残り、断面が不定形な面取りされた木材の圧痕2条が直交して認められる。435は直径1.8cmサイズと直径3cmサイズの2種類の木材圧痕が直交して複数認められ、6cmほどの厚さを隔てて平らな壁面が残る。これらの壁土にみられる木材圧痕は、建物を構成する建築材もしくは小舞部材の圧痕と推定できる。432は建築材の連結等に使用された釘材の痕跡かもしれない。434は建物の隅柱の外側に付属する壁土と考えられ、柱を壁土が覆う大壁構造の建物が存在した可能性が考えられる。



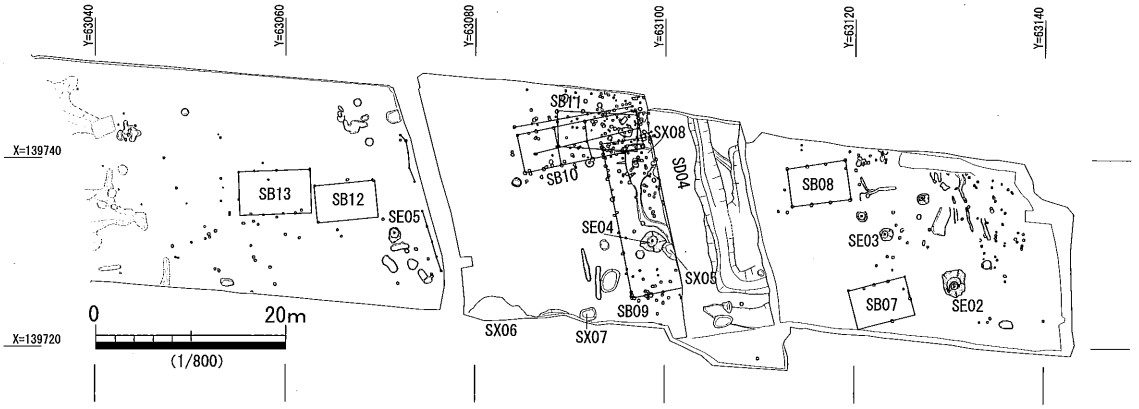
第 80 図　A地区東丘陵出土遺物

井戸跡 SE01

SE01 はＡ地区東丘陵で検出した唯一の井戸跡である。直径 2.1ｍ、深さは 0.5ｍまで記録したが、それより深い部分の記録作成を失念している。出土遺物は 436 が土師器の大型皿で、底部は静止糸切り痕が明瞭に残る。437・438 は土師質土鍋で、437 は把手が付属する。439 は土師器羽釜脚部片、440 は巴文軒丸瓦、441 は段顎の丸瓦狭端部片である。441 は厚みがあり、顎部の段が明瞭である。内面に布目圧痕が残る。出土遺物から判断すると、15 世紀後半から 16 世紀代にかけての遺構である。



第 81 図 井戸跡 SE01 平･断面図、出土遺物



第 82 図　A 地区西丘陵中世遺構分布状況

A 地区西丘陵中世遺構群（第 82 図）

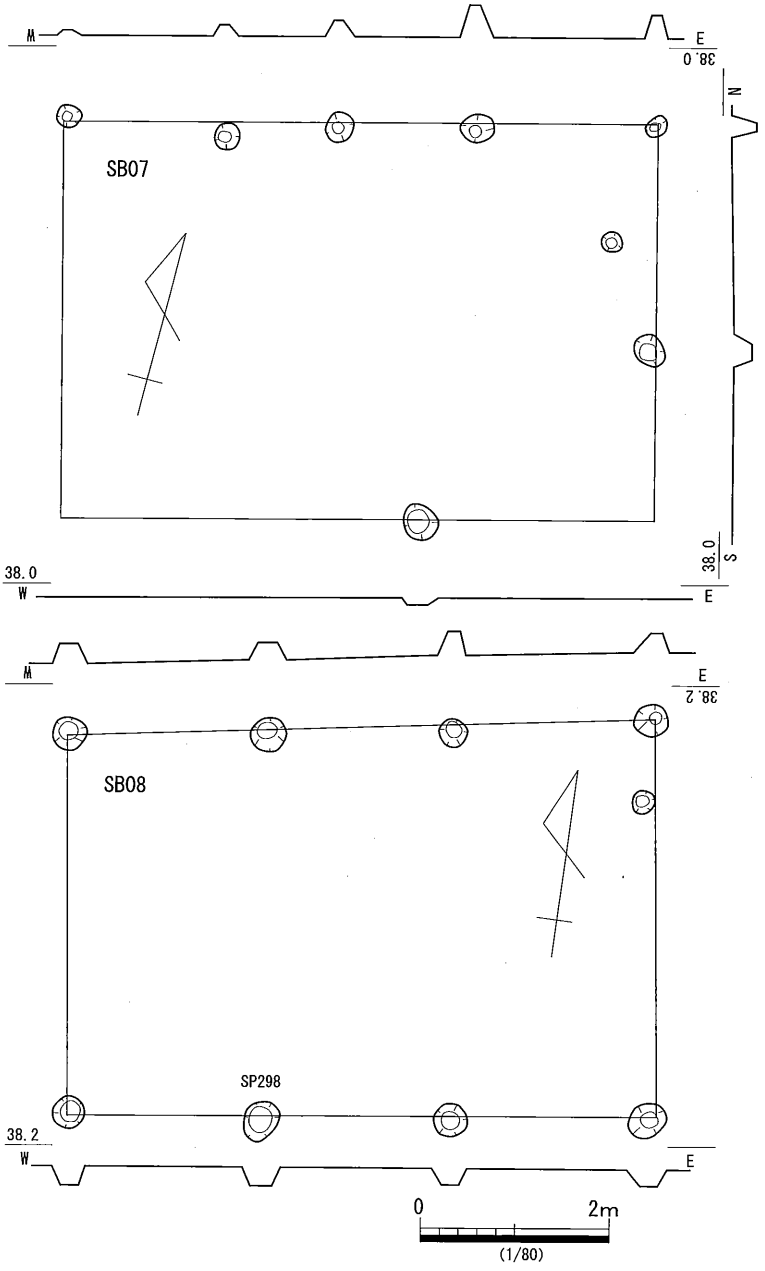
A 地区西丘陵では概ね 3 群の中世遺構群が抽出できる。建物群 A は 2 棟の掘立柱建物跡、2 基の井戸跡、その他の土坑等からなり、東斜面中段に位置する。建物群 B は大型建物跡 2 棟、掘立柱建物跡 1 棟、井戸跡 1 基、大溝跡 1 条からなり、丘陵東肩部付近に立地する。建物群 C は 2 棟の掘立柱建物跡、1 基の井戸跡、2 条の柵列跡で構成し、丘陵中央部に立地する。

掘立柱建物跡 SB07（第 83 図）

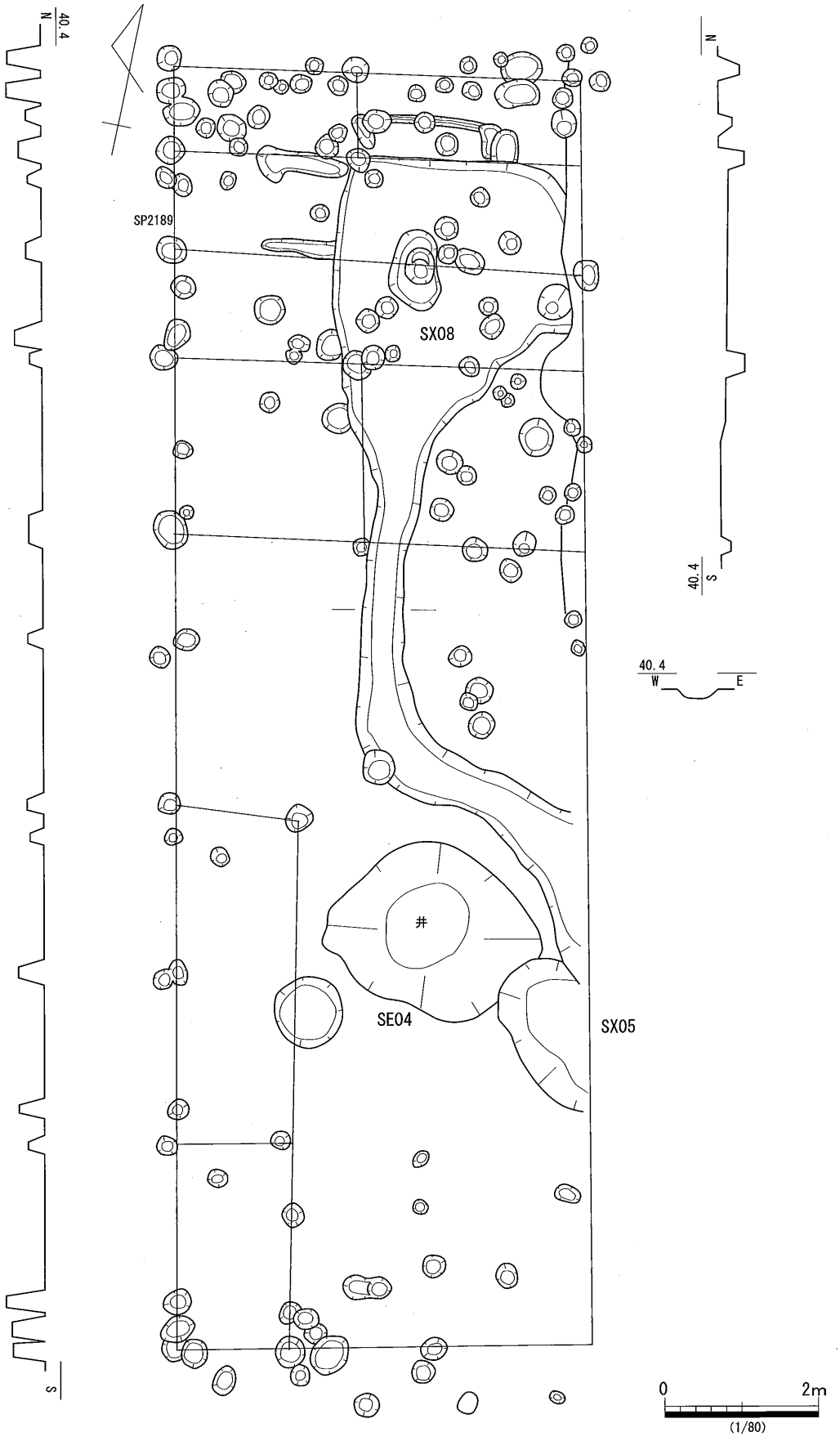
建物群 A に所属する。桁行 6.2 m、梁間 4.2 m の掘立柱建物跡である。床面積は 26 ㎡で、2 間× 4 間と推定できる。北側柱は柱間隔が揃い、約 0.2 の深さが残るが、南側柱は削平を被り、残りが悪い。建物主軸は約 15 度西偏する。

掘立柱建物跡 SB08（第 83 図）

建物群 A に所属する。桁行 6.2 m、梁間 4.2 m の掘立柱建物跡である。床面積は 26 ㎡。1 間× 3 間で柱筋が整う。柱穴の深さは 0.1 ～ 0.15 m と浅く、上部を大きく削平される。建物方位は北から約 10 度西偏する。



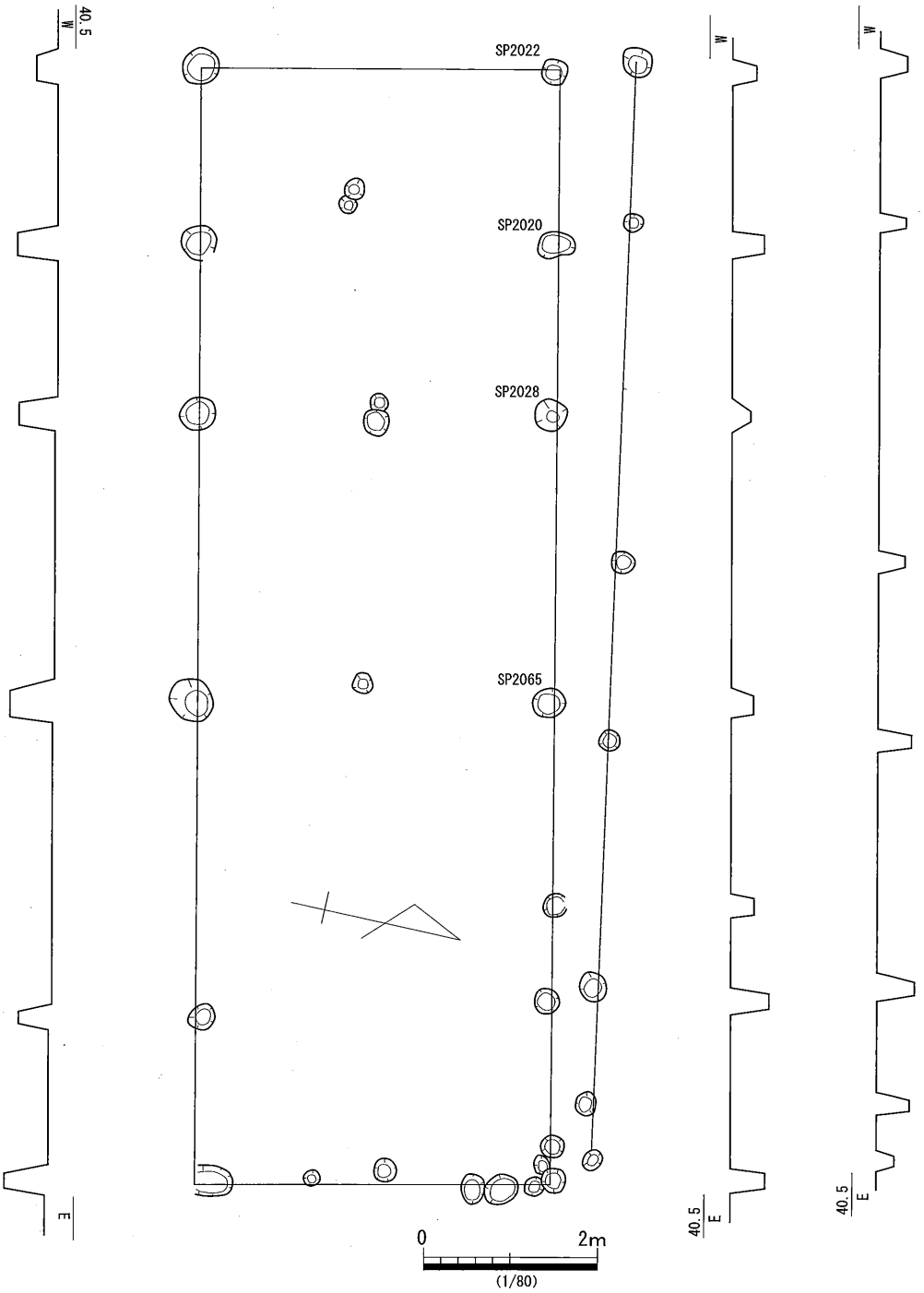
第 83 図　掘立柱建物跡 SB07・08 平・断面図



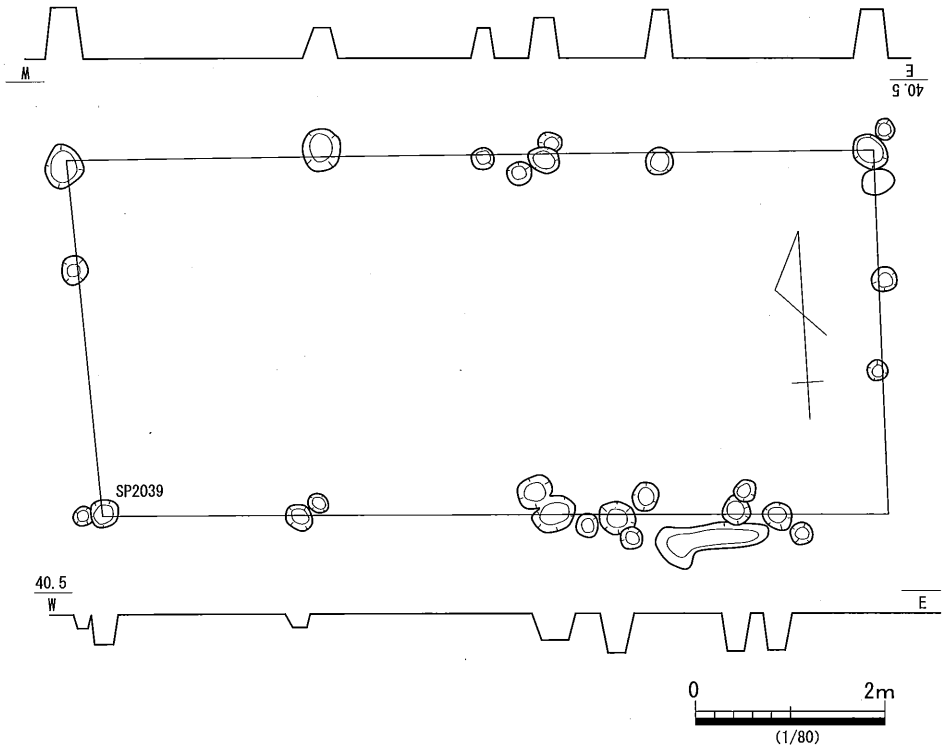
第 84 図 掘立柱建物跡 SB09 平・断面図

掘立柱建物跡 SB09（第 84 図）

建物群Ｂに所属する大型建物跡である。主軸方位をほぼ南北方向に向ける。桁行 16.6ｍ、梁間 5.2ｍで、床面積は 86.32 ㎡に達する。桁行は柱間 9 間で、梁間は北半部で束柱を伴って 2 間、南半部は 3 間と考えられる。建物内部に不定形な落ち込みと井戸跡 SE04 が付属する。両者は建物のほぼ中軸にそって設けられ、落ち込みから南に伸びる溝跡は SE04 の縁辺を迂回して南東に流下し、SE04 と重複しない。また建物の東側外部には、建物の範囲と一致するように大溝跡 SD03 が掘削されている。これらのことから、各遺構は別個の時期ではなく、互いに関連しながら同時に存在したと考える。柱穴は直径 0.2 ～ 0.4ｍのものが多く、深さは一定しない。また、東側柱は削平により多くが消失する。



第 85 図 掘立柱建物跡 SB10 平・断面図



第 86 図 掘立柱建物跡 SB11 平・断面図

掘立柱建物跡 SB10（第 85 図）

建物群Ｂに所属する大型建物跡である。SB09 と重複して東西方向に建物主軸を向ける。桁行 12.8 m、梁間 4.0 mで、床面積は 51.2 ㎡である。柱筋は整っており、桁方向に 5 間、梁間方向に 2 間の柱が配置され、束柱が部分的に認められる。だた、削平によって消失した柱穴も多い。柱穴の規模は直径 0.3 ～ 0.5 mである。建物跡北側には若干方向を違えるものの、桁行の側柱に対応して柱穴列が認められる。庇跡か柵列跡と考えられる。

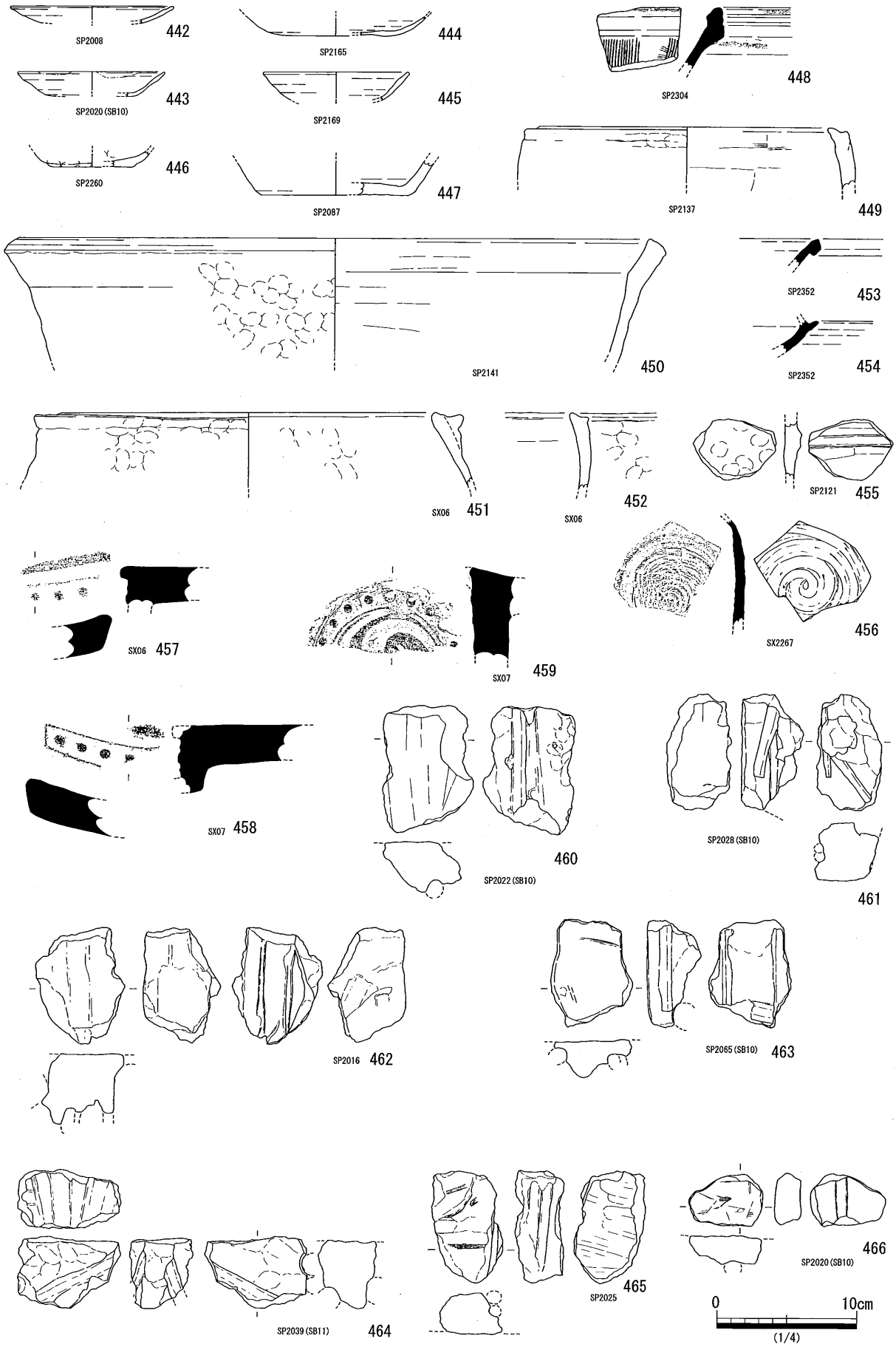
掘立柱建物跡 SB11（第 86 図）

建物群Ｂに所属する掘立柱建物跡である。SB09・10 と重複して東西方向に建物主軸を向ける。桁行 8.4 m、梁間 3.9 mで、床面積は 32.8 ㎡である。柱筋は比較的整っており、桁方向に 4 間、梁間方向に 2 ～ 3 間の柱が配置される。柱穴の規模は直径 0.25 ～ 0.4 mである。柱穴の深さはいずれも 0.4 mほどあり、他と比べて深い。これは、元来地形的にやや低い調査範囲の北側に立地するために、後世の削平をある程度免れた結果とみることができる。

Ａ地区西丘陵建物跡等出土遺物（第 87 図）

442 ～ 466 は西丘陵の柱穴等より出土した遺物である。442 ～ 446 は土師器杯・皿である。447 は土師器こね鉢の底部か。448 は備前系陶器の擂鉢、449 ～ 452 は土師器の煮沸具である。453 ～ 456 は古墳時代遺物の混在品である。455 は円筒埴輪片で、低い突帯の上下端に横方向のナデが残る。川西編年Ⅴ期に相当する。

457 ～ 459 は瓦片である。460 ～ 466 は多数出土した壁土のうち、平坦面を持つものを図化した。いずれも、建築材や小舞材の圧痕が顕著にみられる。以上の土器類は、概ね 14 世紀後半から 15 世紀前半に収まる。



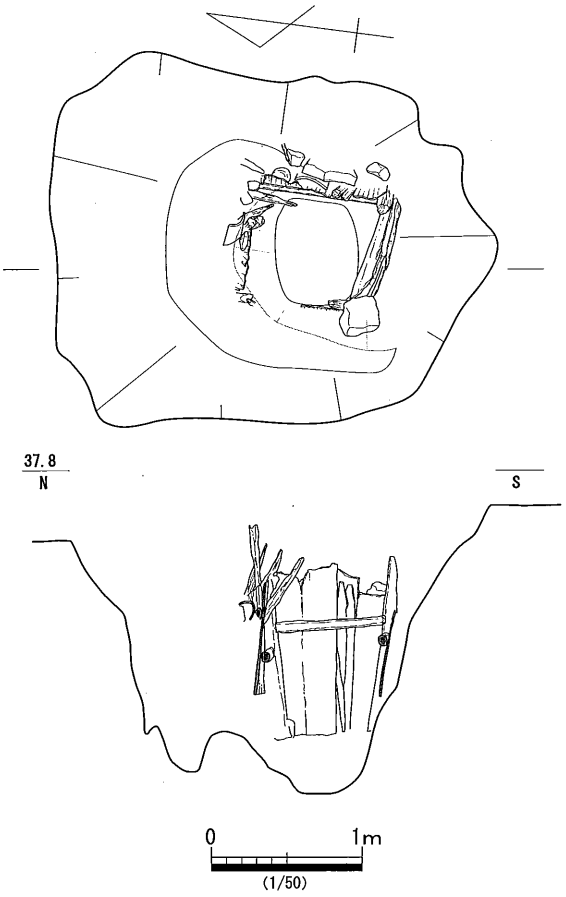
第 87 図　A 地区西丘陵出土遺物

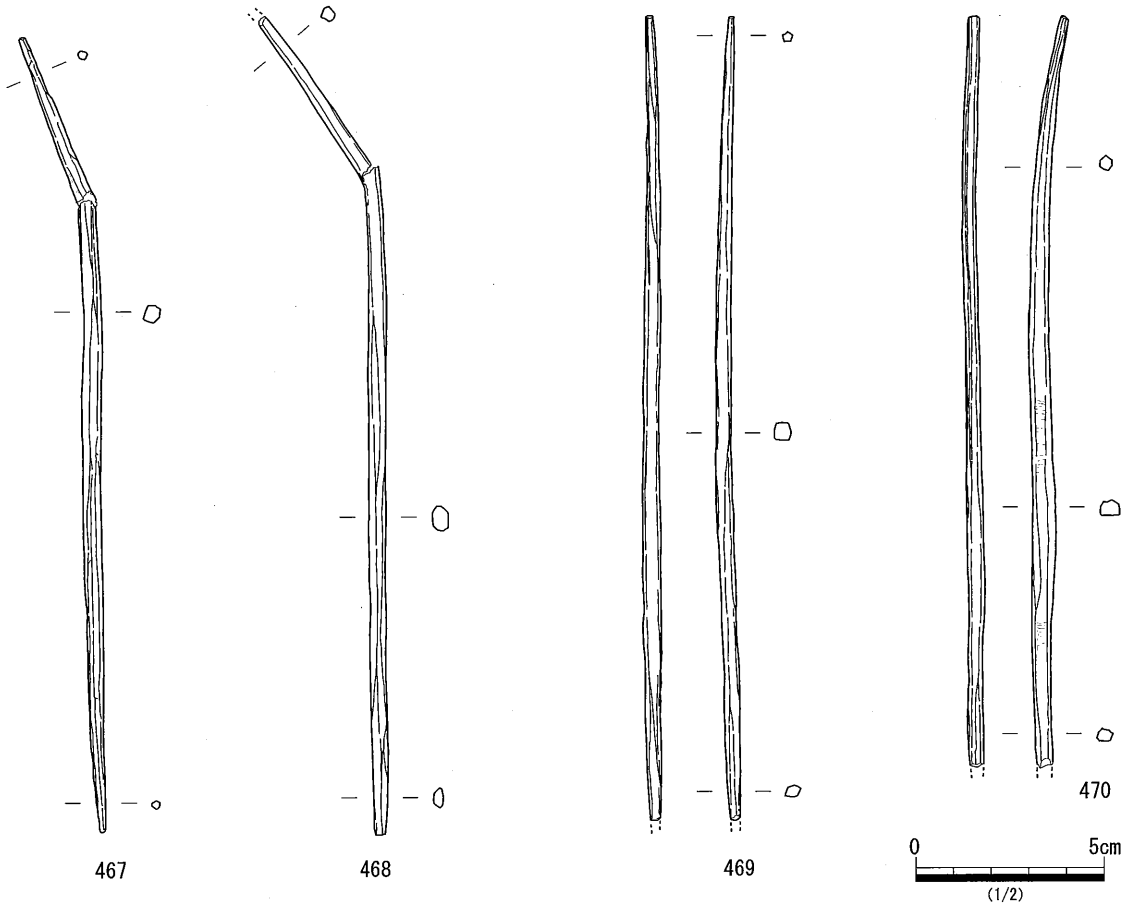
井戸跡 SE02（第 88～91 図）

建物群Ａに所属する井戸跡である。掘立柱建物跡 SB07 の東 3.8 ｍの位置にあり、平面形は方形を呈する。掘り形の規模は 3 × 2.5 ｍで、底場はやや南側に偏る。底場を基準にすると、SB07 の建物中軸線上に相当する。検出面からの深さは 1.9 ｍをはかり、底場から 35cm ほど浮いて井戸枠を設置する。幅 20 ～ 25cm、長さ約 110cm の板材を組み合わせ、直径約 6cm の棒材で各所を固定する形状である。裏込め土には礫や瓦片が混じる。井戸枠の内径は、上端で 80cm 四方、下端で 70cm 四方をはかる。

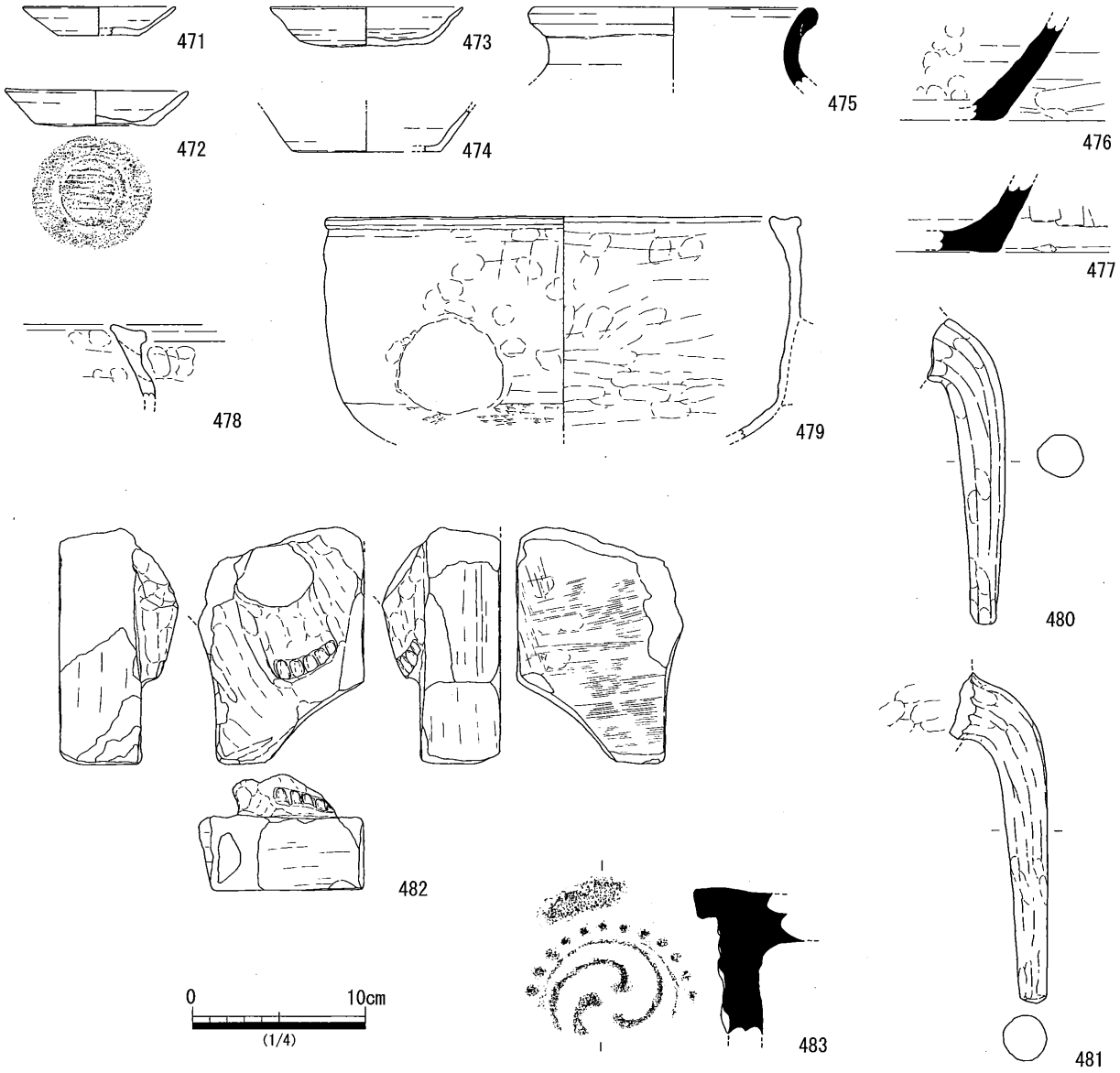
埋土から土器･瓦･木製品が出土した。

467 ～ 470 は肘木もしくは木箸である。針葉樹を木目に沿って木取りした棒材の周縁を、鋭い工具で丁寧に面取りし、上下両端を細く削り込む。端部は完全には尖らず、僅かな面をとどめる。**471 ～ 474** は土師器杯である。**471** は裏込め土より出土した杯。**472・473** は井戸枠内より出土した完形品で、底部



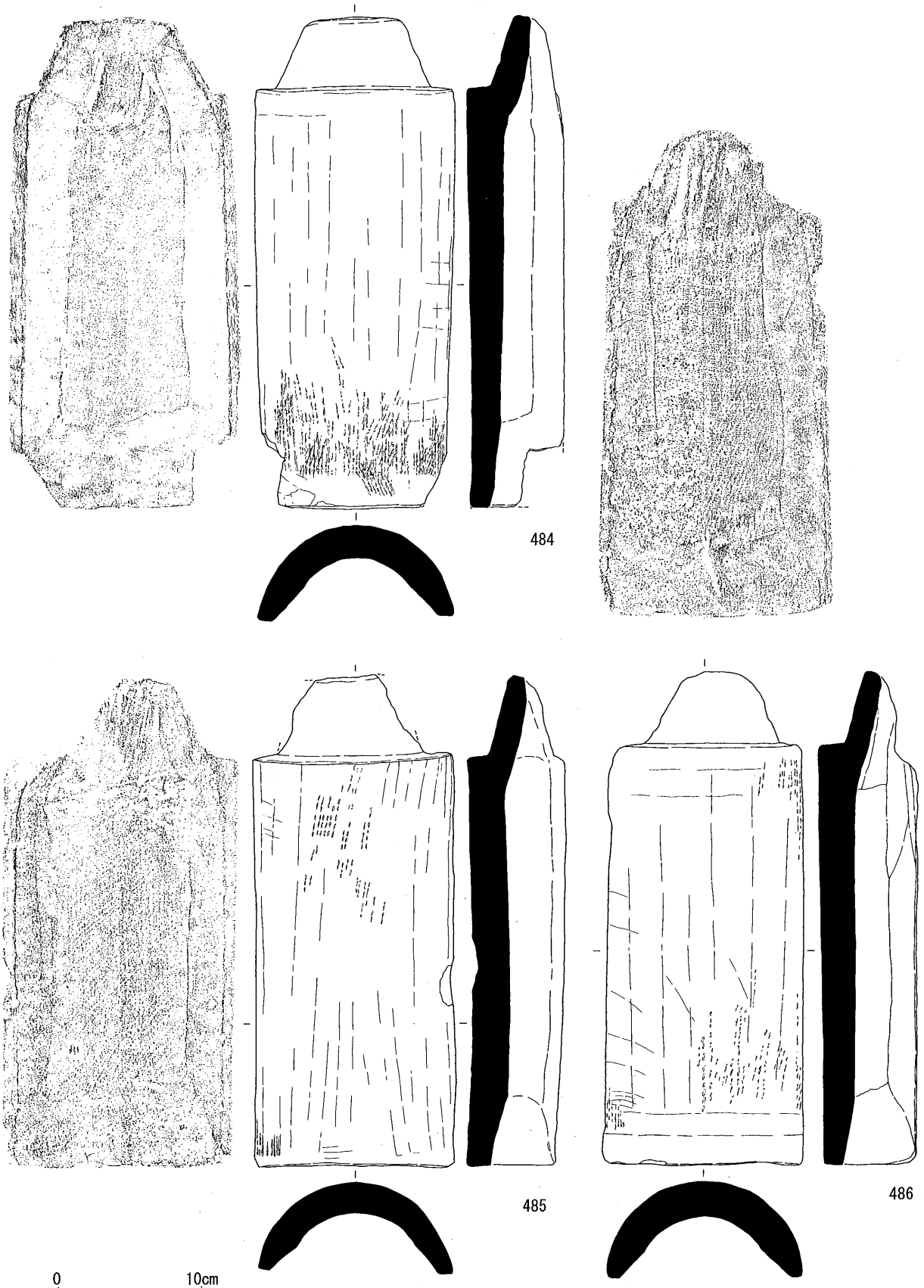


第 88図　井戸跡 SE02 平･断面図、出土遺物 (1)

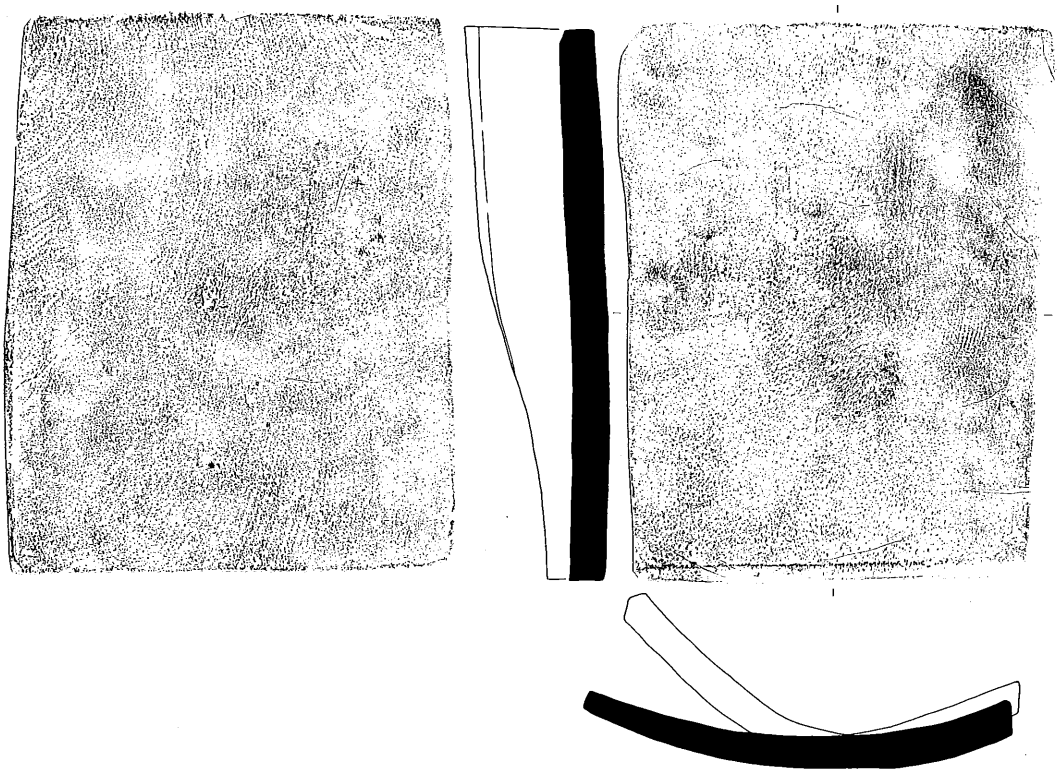


第 89 図 井戸跡 SE02 出土遺物 (2)

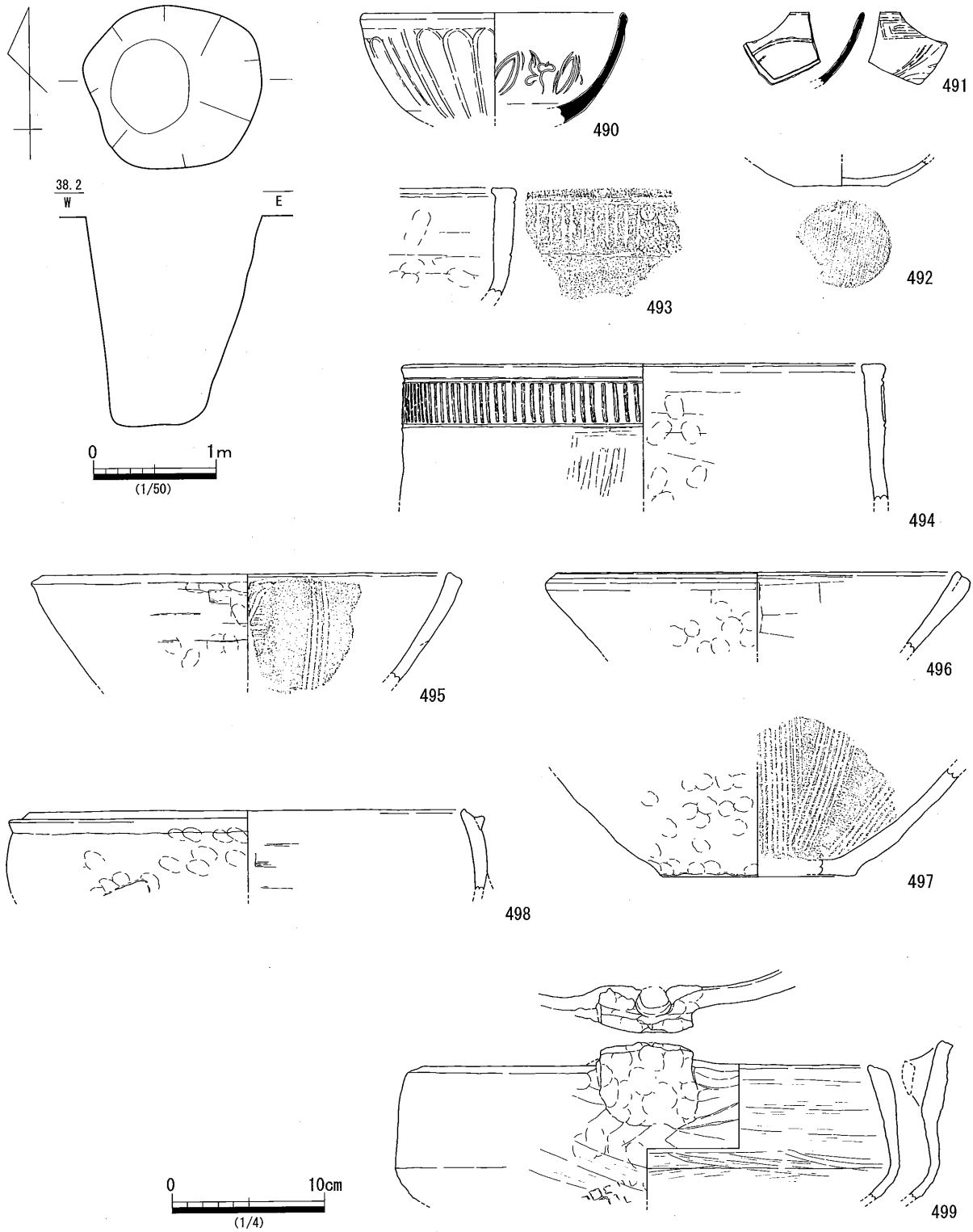
ヘラ切りを行い、口縁部が直線的に拡がる形態。472 は底面には簾状圧痕が残る。475 ～ 477 は備前系陶器で、475 は口縁部を玉縁状に折り返した壺口縁部片である。478 ～ 481 は土師器羽釜の各部材片である。482 は鬼瓦の鬼足部片である。厚さ 4.7cm の鬼板材表面に長さ 8cm 以上の足を立体的に表現したもので、足指 5 本や、内側のくるぶしの突起も残るなど、人足に忠実に作られる。上方に反り返る立体像が付属した可能性が高い。なお、鬼板裏面は静止糸切り痕が残り、焼成は黒く燻した瓦質焼成である。483 は巴文軒丸瓦である。484 ～ 486 は丸瓦の完形品。表面に縄目、裏面には布目が残る。内面の側縁 3cm の範囲と下端部 6cm の範囲に、削り調整が施され、最終的に側縁を丁寧にナデ仕上げる。487 ～ 489 は平瓦である。487 はやや薄手で、凸面側に糸切り痕が明瞭に残る。凹面側は丁寧にナデ仕上げされ、側縁の狭幅面には粗い糸切り痕、広幅面はそれを切るヘラ削り調整が観察できる。488 は厚手の平瓦である。凹面の丁寧なナデ調整が側縁の狭幅面に及んで、凹面との稜線が丸みを帯びる。489 は厚手の瓦で、カーブが円弧を描かない点と、端面に何らかの作出部が残ることから、役瓦の一部と考えられる。以上の SE02 出土遺物は、土師器杯の形態、備前系陶器壺の形態などから 14 世紀後半期に位置づ



第 90 図 井戸跡 SE02 出土遺物 (3)



第 91 図 井戸跡 SE02 出土遺物 (4)

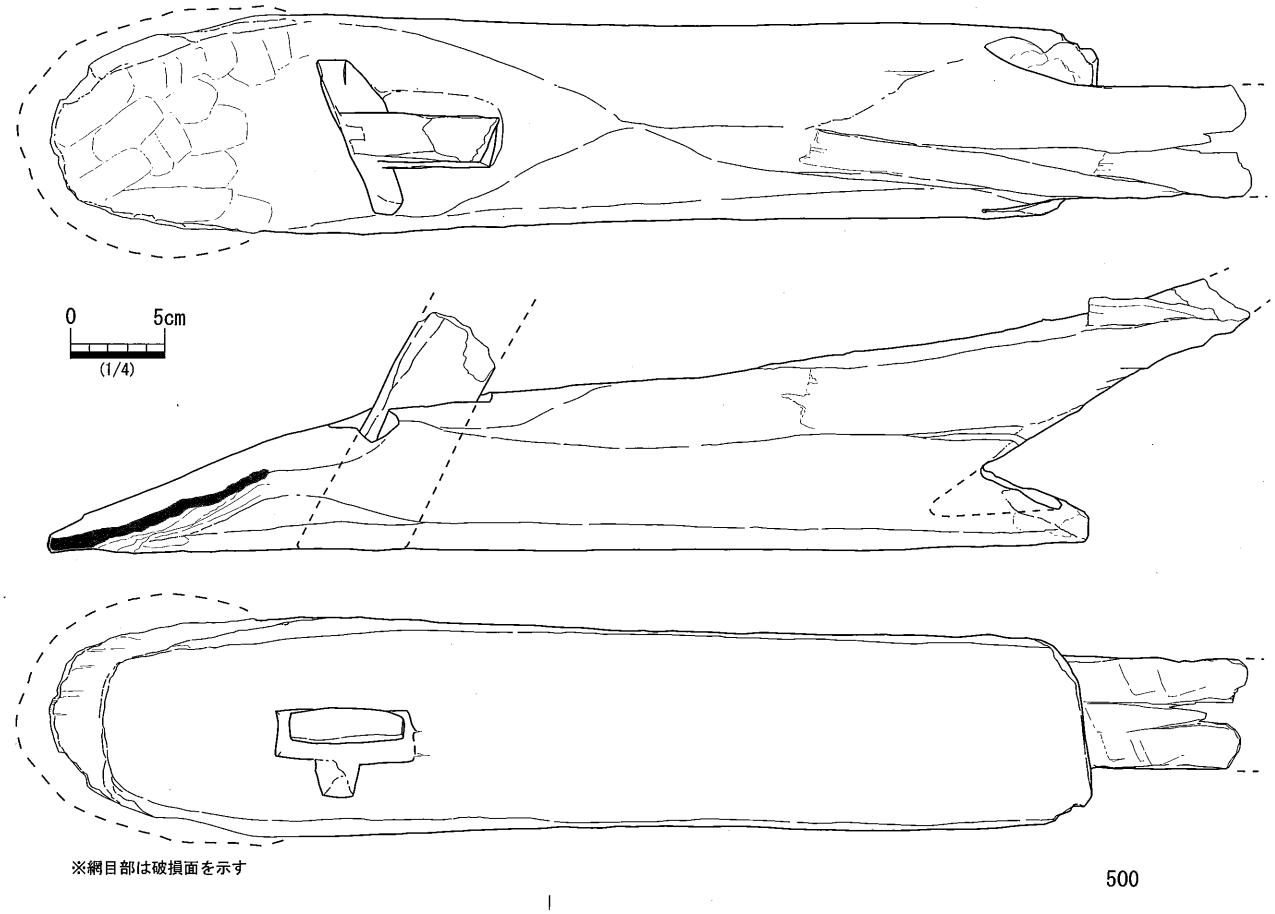


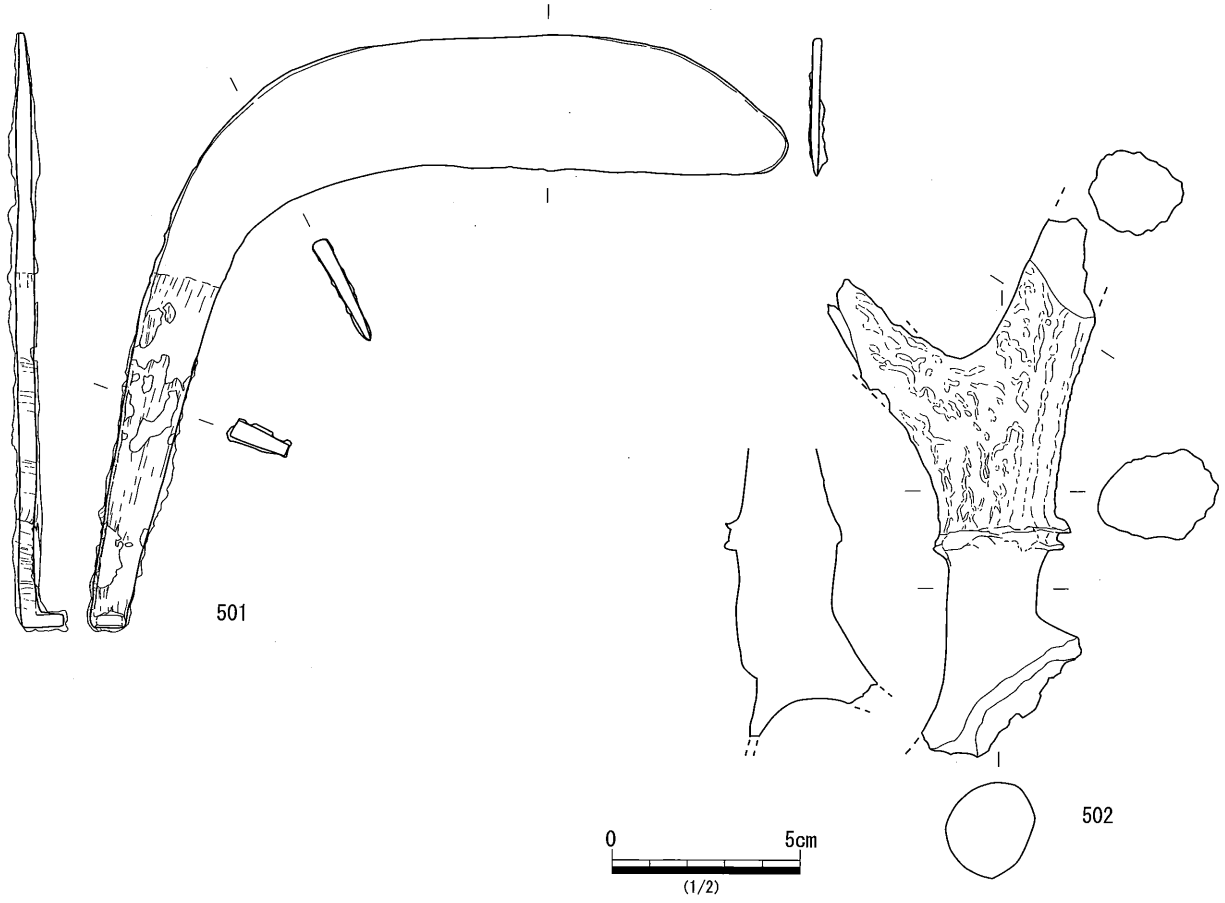
第 92 図 井戸跡 SE03 平・断面図、出土遺物 (1)

けられる。

井戸跡 SE03（第 92・93 図）

A地区西丘陵東斜面下方に立地する。掘立柱建物跡 SB08 南東部で検出した３基の井戸のうちの１つである。直径 1.4 mの円形で、検出面からの深さが 1.7 mの素掘り井戸である。SB08 から南東に 4.8 m離れる。





第 93 図 井戸跡 SE03 出土遺物 (2)

490 ～ 499 はSE03 埋土中より出土した土器類である。490・491 は青磁椀。490 は外面に簡略化された鎬蓮弁文が施され、内面に花弁文が陰刻される。薄釉で胎土は淡白灰色を呈す。491 は外面に雲雷文および円弧文が、内面に円弧文が陰刻される。薄釉で胎土は淡白灰色を呈す。492 は土師器皿底部片である。底面に静止糸切り痕が残り、体部との境界に段を有す。493・494 は土師器火鉢口縁部片である。陰刻花文および縦線文が口縁部からやや下がった位置に施される。495 ～ 497 は土師器擂鉢類、498 は土師器羽釜片、499 は土師器把手付羽釜である。

以上のSE03 出土の土器類は青磁や土師器杯の形態・技法・文様などから15 世紀後半期に位置づけられる。

そのほか、500 の組み合わせ式木犁や501 の鉄鎌、502 の鹿角などが出土している。500 の木犁は接地部長さ55cm、幅11.4cm で、先端から15cm の部位に支柱とその枘穴がある。基部には膝柄と結合する粗雑な穴があり、さらに緊縛用の突起が斜め上方に伸びる。先端は6 ～ 7mm 厚のU字形に仕上げ、鑿痕が残る。鉄製刃先が着装されたものと推定できる。501 の鉄鎌は基部端が直角に折り曲がり、柄部に木質が遺存する。502 は鹿角片で特に加工痕はみられない。

井戸跡 SE04（第94 ～ 100 図）

A地区西丘陵東肩部で検出した大型の井戸跡である。大型建物跡SB09 の建物範囲内に位置するが、同時に機能したかどうかは、明らかでない。検出面で長径2.9ｍ、短径2.3ｍの楕円形の平面形である。深さは最深部で4.3ｍをはかる。埋土を掘り下げると、検出面から3ｍの深さで直径3ｍほどの掘り方に拡がり、側壁がオーバーハングする状況がみられた。調査の都合上、大きく断ち割りを行い、主に検出面から2.8ｍ以下の土層断面の記録を行った。

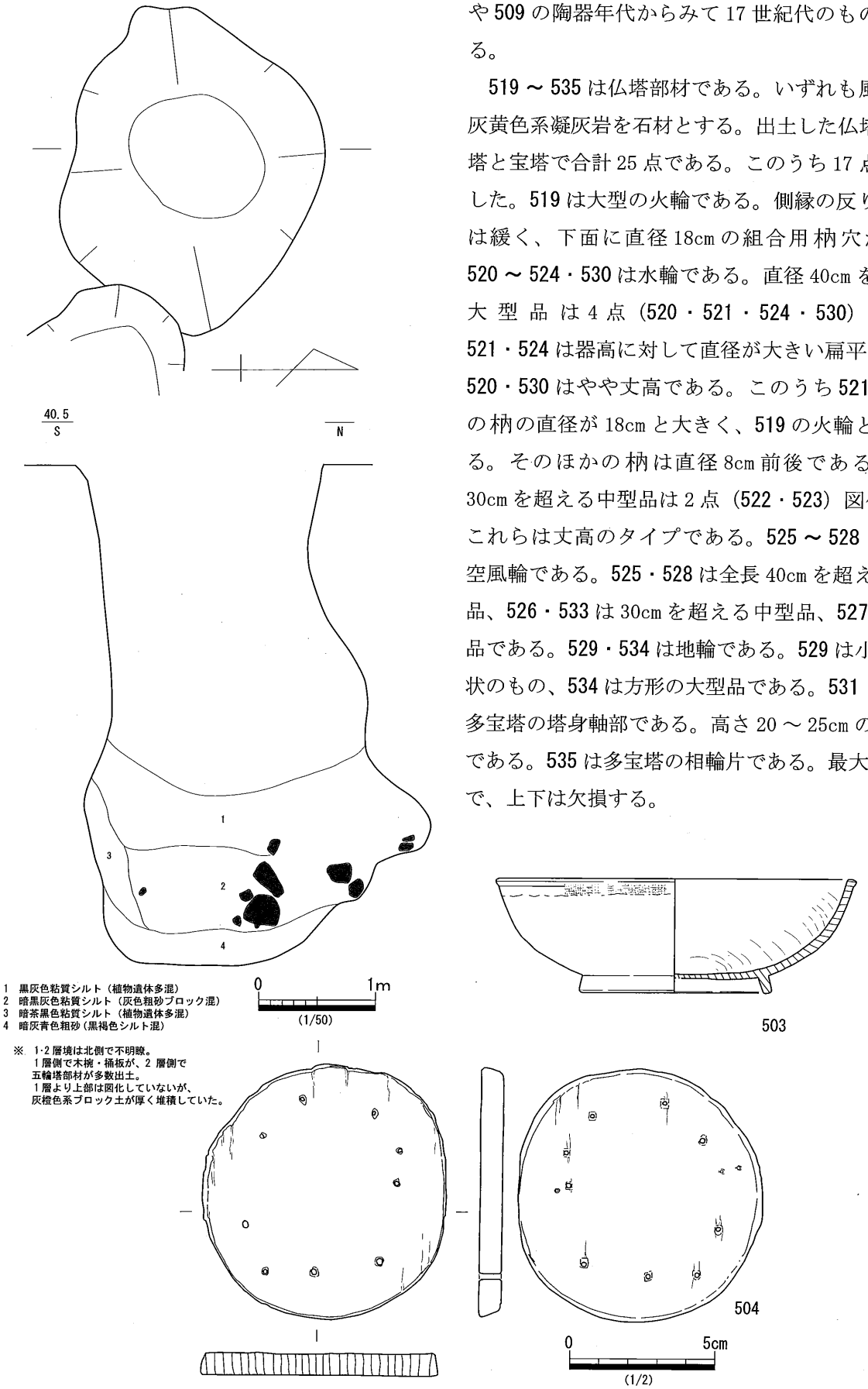
井戸跡埋土の下方は、1・2層の黒色シルトが厚く堆積し、最下層の4層はグライ化した粗砂層である。1・2層を中心に多数の五輪塔部材が出土した。これらは、図化した部分のように縦方向に組み合う箇所があり、井戸枠の石組みを形成していた可能性があるが、多くは崩落した状態であった。出土遺物は、ほぼ全て1・2層から出土している。

503 は赤漆塗の木椀である。柾目の木取りで轆轤引きし、厚さ3mm ほどの木地に仕上げる。高台内面部分の器壁は厚さ1mm と薄い。漆膜が剥落した木地表面には渋下地の黒色面が観察できる。口縁端部は若干肥厚し、その外面の漆膜下地には0.6cm 幅で布当てを行った痕跡がある。504 は木筒の底板と推定される直径8.5cm、厚さ0.75cm の円形板である。外縁から0.8 ～ 1.4cm 内側に9個の小孔がめぐる。また貫通しない小孔も3個ある。側板との接合のための釘孔と目される。505 は直径28.5cm、高さ14.0cm に復元可能な木桶の桶板4枚である。側縁の面取り、表裏面の固定具痕跡等から木桶の旧状がうかがえることから、復元状態で図化した。それぞれの板は幅5 ～ 6cm、厚さ0.9 ～ 1.2cm で、外面に上下2段の固定具痕跡が残る。内面は下端から2cm 高さで表面の色調変化があることから、底板の位置が概ね復元できる。なお、外面の上方固定具痕に接して、径約3cm の不整円形の浅い窪みがある。吊り下げ具が取り付けられた箇所かもしれない。506・507 は木製下駄である。506 は方形の高下駄、507 は草鞋形の雪駄である。いずれも板面には鑿痕が残り、506 の脚台側縁下部には鋸切痕も観察できる。また、507 の基部には摩滅面、平滑面などの使用痕が残る。

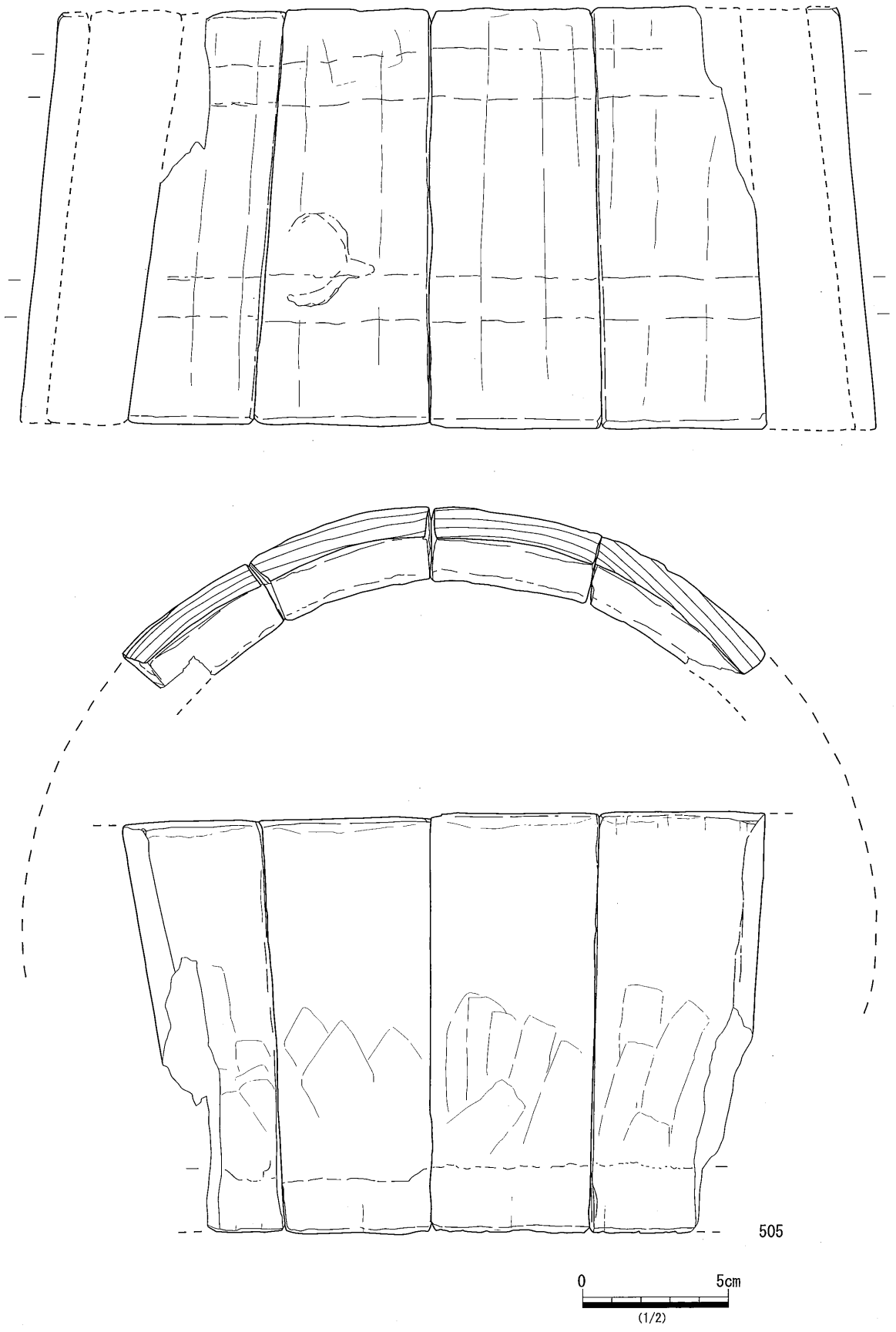
508 ～ 517 は土器類である。508 は唐津系の施釉陶器椀、509 は備前系陶器壺、510 は備前系陶器擂鉢、511 は土師器擂鉢、512 ～ 514 は土師器煮沸具である。515・516 は平瓦、517 は混在の円筒埴輪片である。518 は椀状鉄滓片で溶解炉下部の形状をとどめ、炭化材の小片が多数観察できる。以上の土器類は508

や509の陶器年代からみて17世紀代のものと言える。

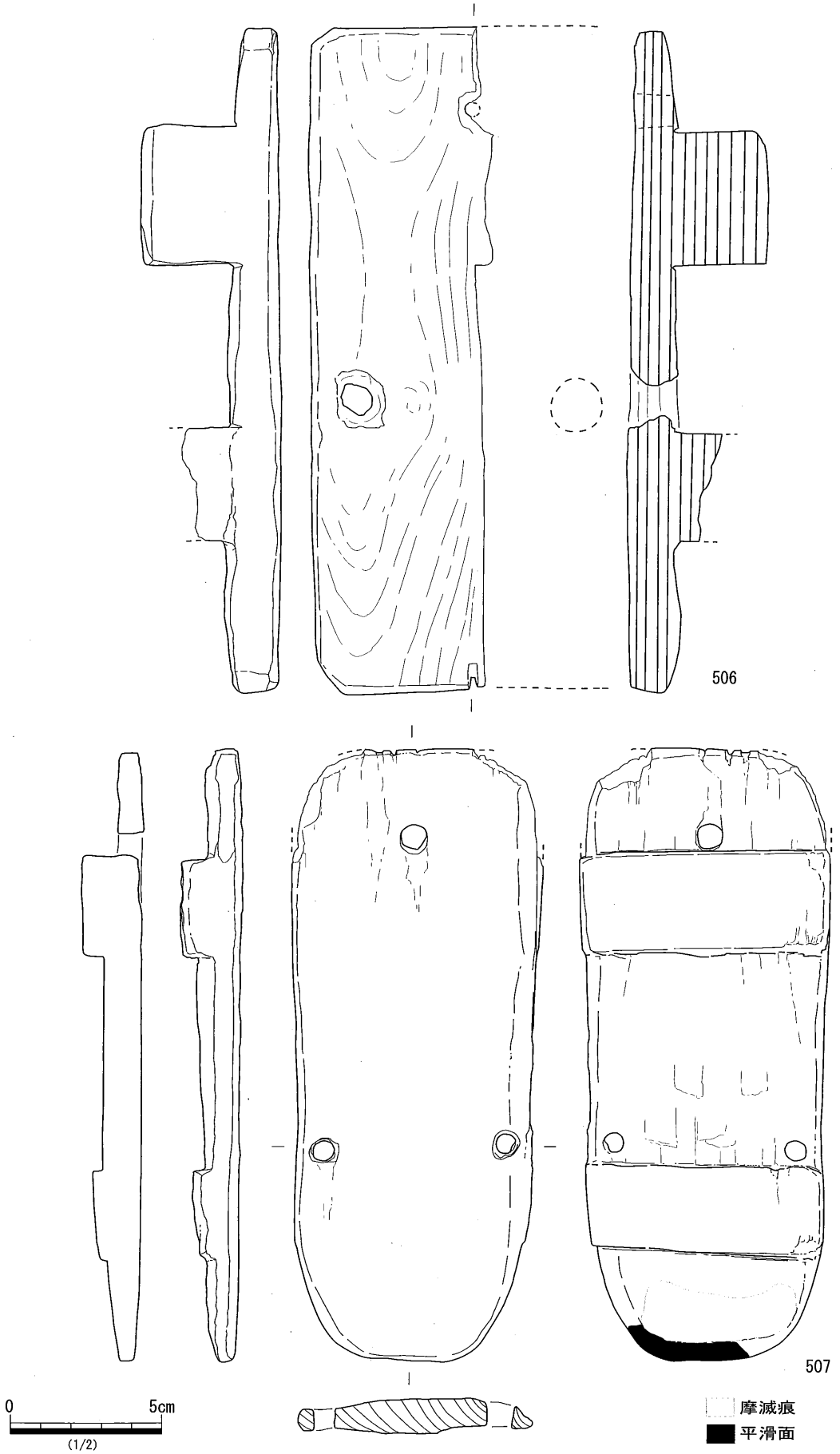
519～535は仏塔部材である。いずれも風化した灰黄色系凝灰岩を石材とする。出土した仏塔は五輪塔と宝塔で合計25点である。このうち17点を図化した。519は大型の火輪である。側縁の反り上がりは緩く、下面に直径18cmの組合用枘穴がある。520～524・530は水輪である。直径40cmを超える大型品は4点（520・521・524・530）ある。521・524は器高に対して直径が大きい扁平な形態、520・530はやや丈高である。このうち521は上部の枘の直径が18cmと大きく、519の火輪と対応する。そのほかの枘は直径8cm前後である。直径30cmを超える中型品は2点（522・523）図化した。これらは丈高のタイプである。525～528・533は空風輪である。525・528は全長40cmを超える大型品、526・533は30cmを超える中型品、527は小型品である。529・534は地輪である。529は小型の板状のもの、534は方形の大型品である。531・532は多宝塔の塔身軸部である。高さ20～25cmの小型品である。535は多宝塔の相輪片である。最大径12cmで、上下は欠損する。



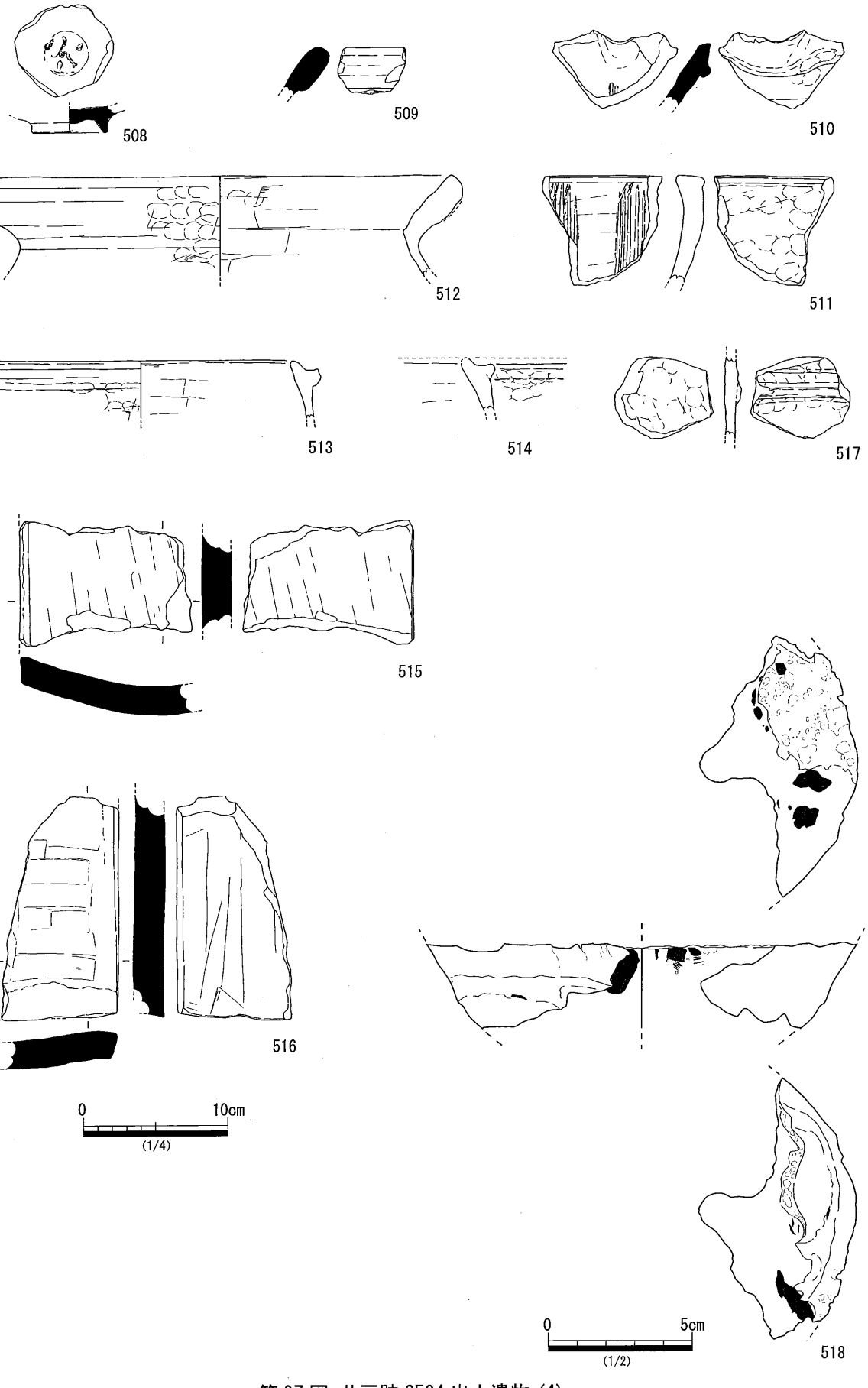
第94図 井戸跡SE04平･断面図、出土遺物（1）



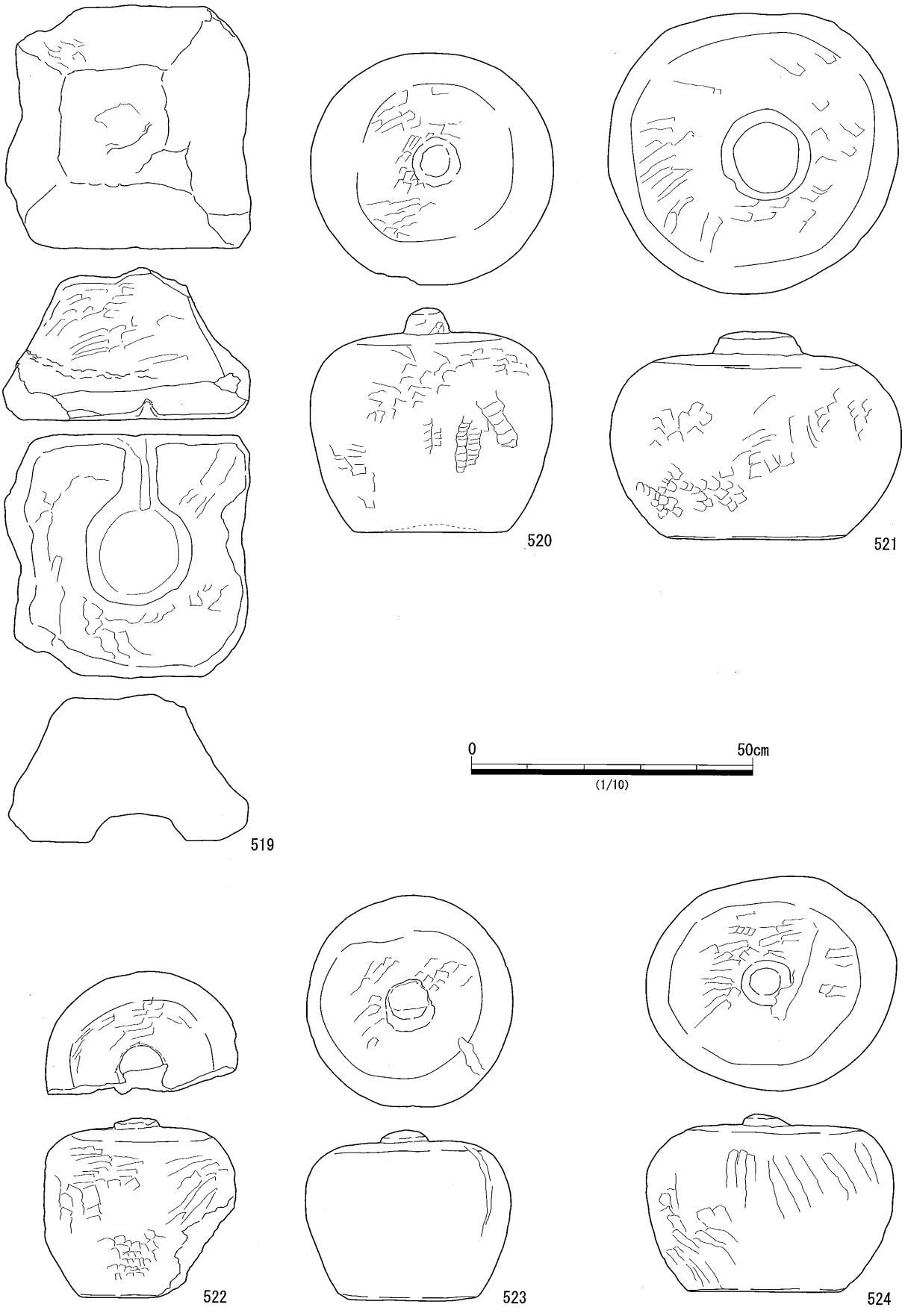
第 95 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (2)



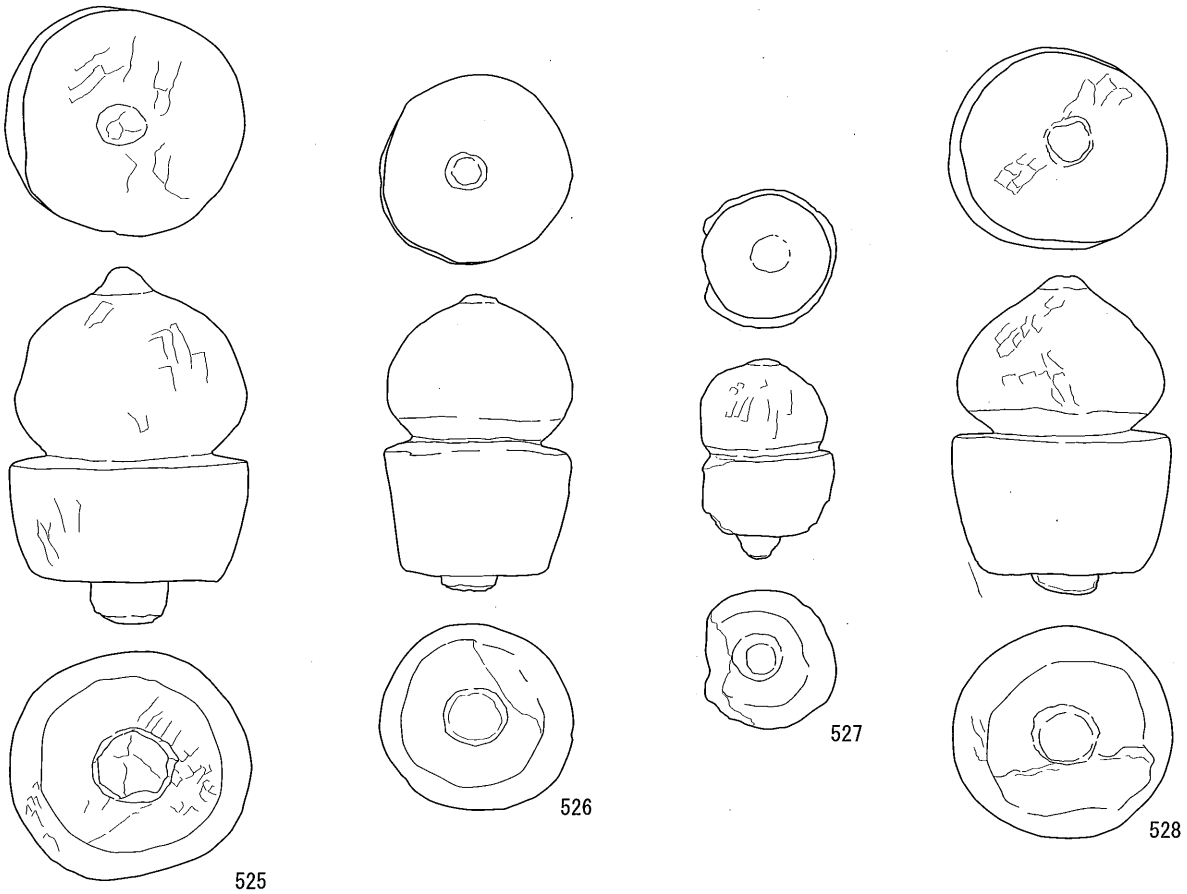
第 96 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (3)

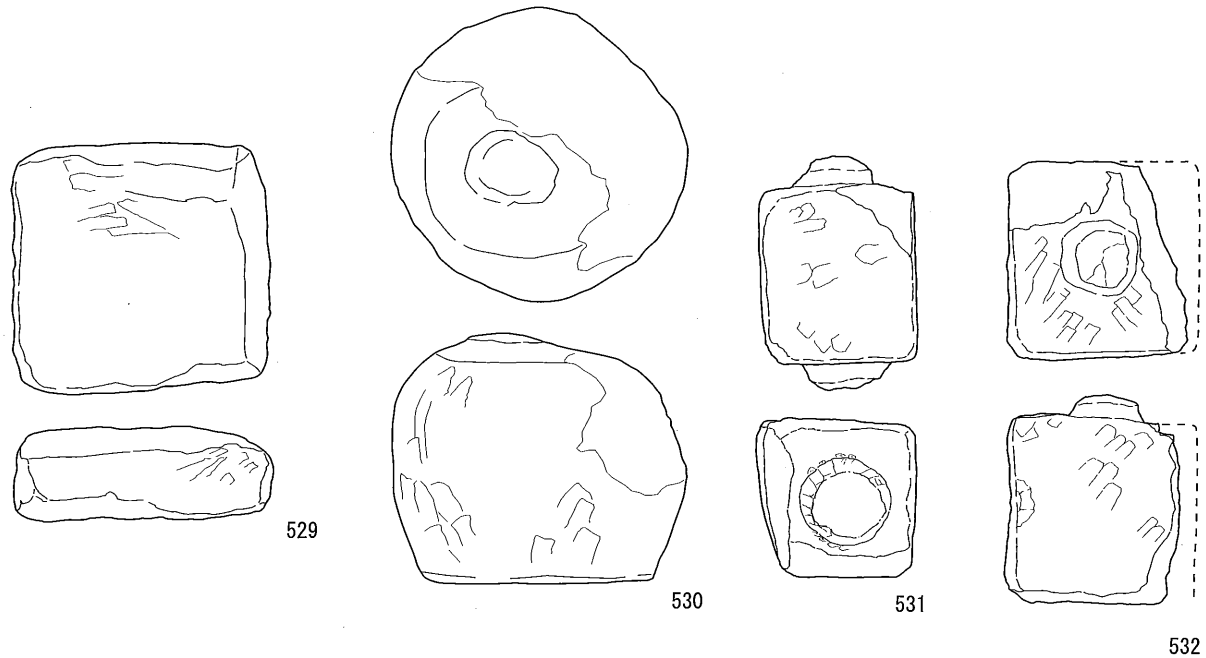


第 97 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (4)

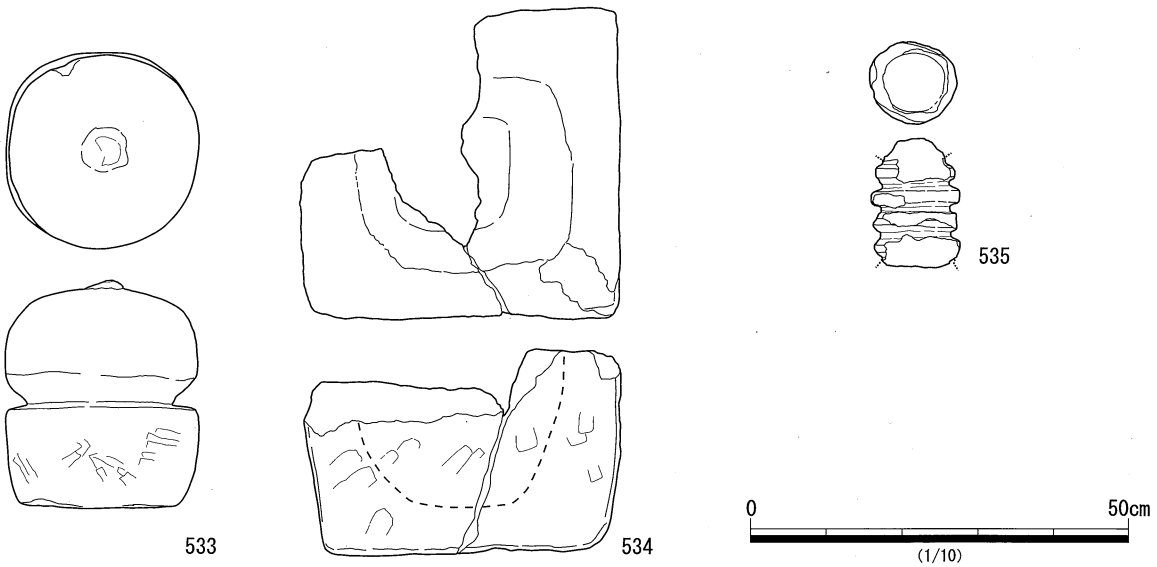


第 98 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (5)





第 99図　井戸跡 SE04 出土遺物 (6)



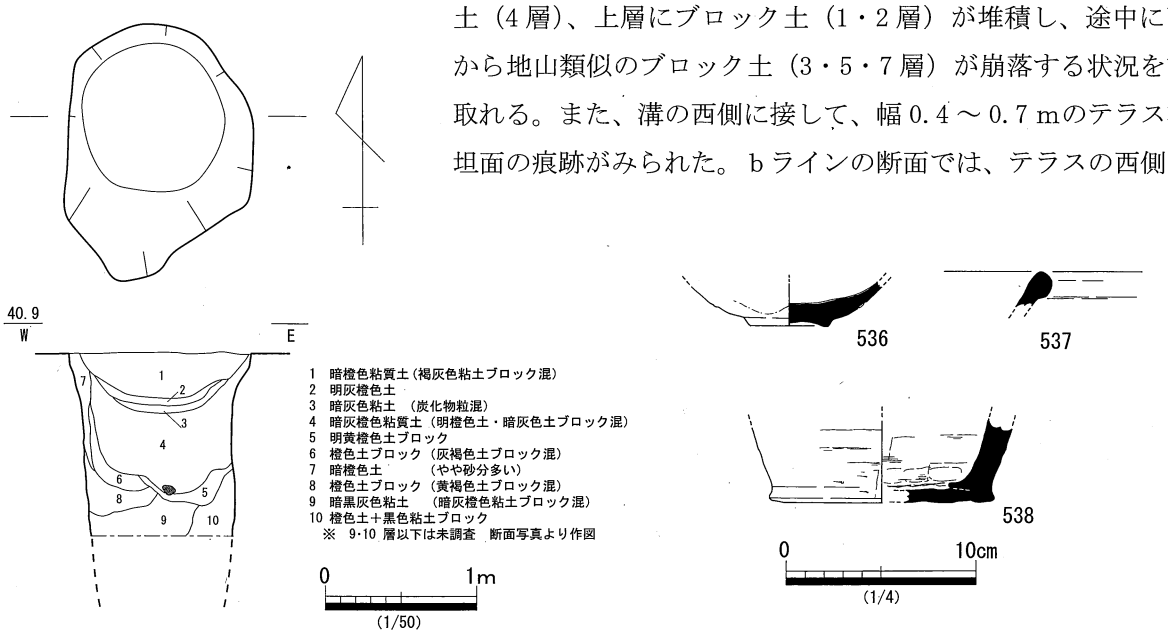
第 100 図 井戸跡 SE04 出土遺物 (7)

井戸跡 SE05（第 101 図）

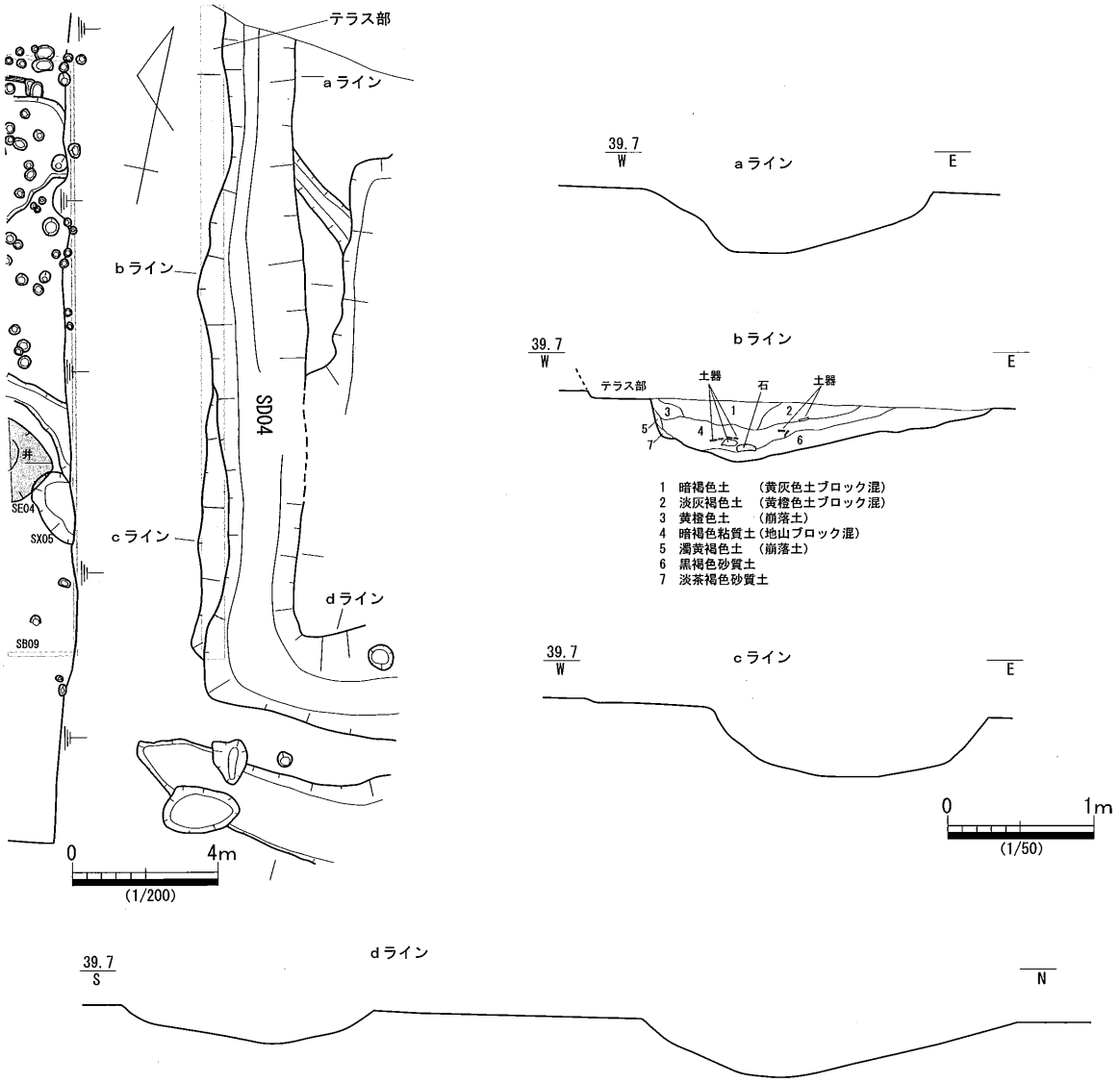
A地区西丘陵中央部に立地する井戸跡である。直径 1.2 ～ 1.5 mで、検出面から深さ 1.2 mまで調査し、その下は掘削を断念した。536 は施釉陶器の椀である。胎土は淡橙褐色で内面と外面上半部に深緑釉が掛かる。537・538 は備前系陶器である。537 は口縁部が玉縁状に肥厚する壺の口縁部片、538 は細身の壺底部片である。538 の焼成は不十分で酸化焔焼成に近い。これらの土器類から、18 世紀中葉ごろに廃絶した井戸跡と考えられる。

溝跡 SD03（第 102 ～ 110 図）

A地区西丘陵東斜面で検出した南北方向の大溝跡である。幅 2 ～ 2.5 m、深さは 0.4 ～ 0.5 mをはかる。調査範囲の南側で東方向に屈曲し、削平のために途切れる。なお、屈曲部から削平箇所までの 5 ～ 6 mは、南 1.5 mに同じ方向の溝跡が併走する。土層断面記録では、下層に黒色土（6 層）、中層に褐色土（4 層）、上層にブロック土（1・2 層）が堆積し、途中に西側から地山類似のブロック土（3・5・7 層）が崩落する状況を読み取れる。また、溝の西側に接して、幅 0.4 ～ 0.7 mのテラス状平坦面の痕跡がみられた。bラインの断面では、テラスの西側が急



第 101 図 井戸跡 SE05 平･断面図、出土遺物



第 102 図 溝跡 SD04 平･断面図

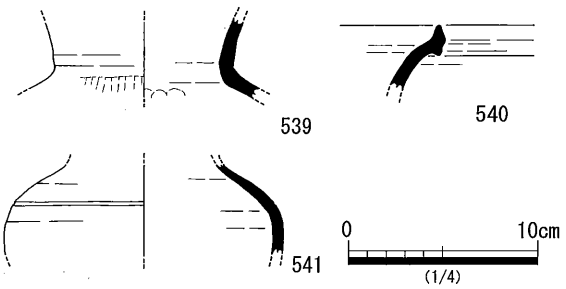
傾斜の土端に繋がっていたことを推測できる。テラス状遺構の範囲、屈曲部の位置は、隣接する大型建物跡 SB09 の建物範囲とほぼ一致する。

539 ～ 541 は重複関係にある古墳時代の溝跡 SD01 から混在したと考える須恵器の壺･瑞である。

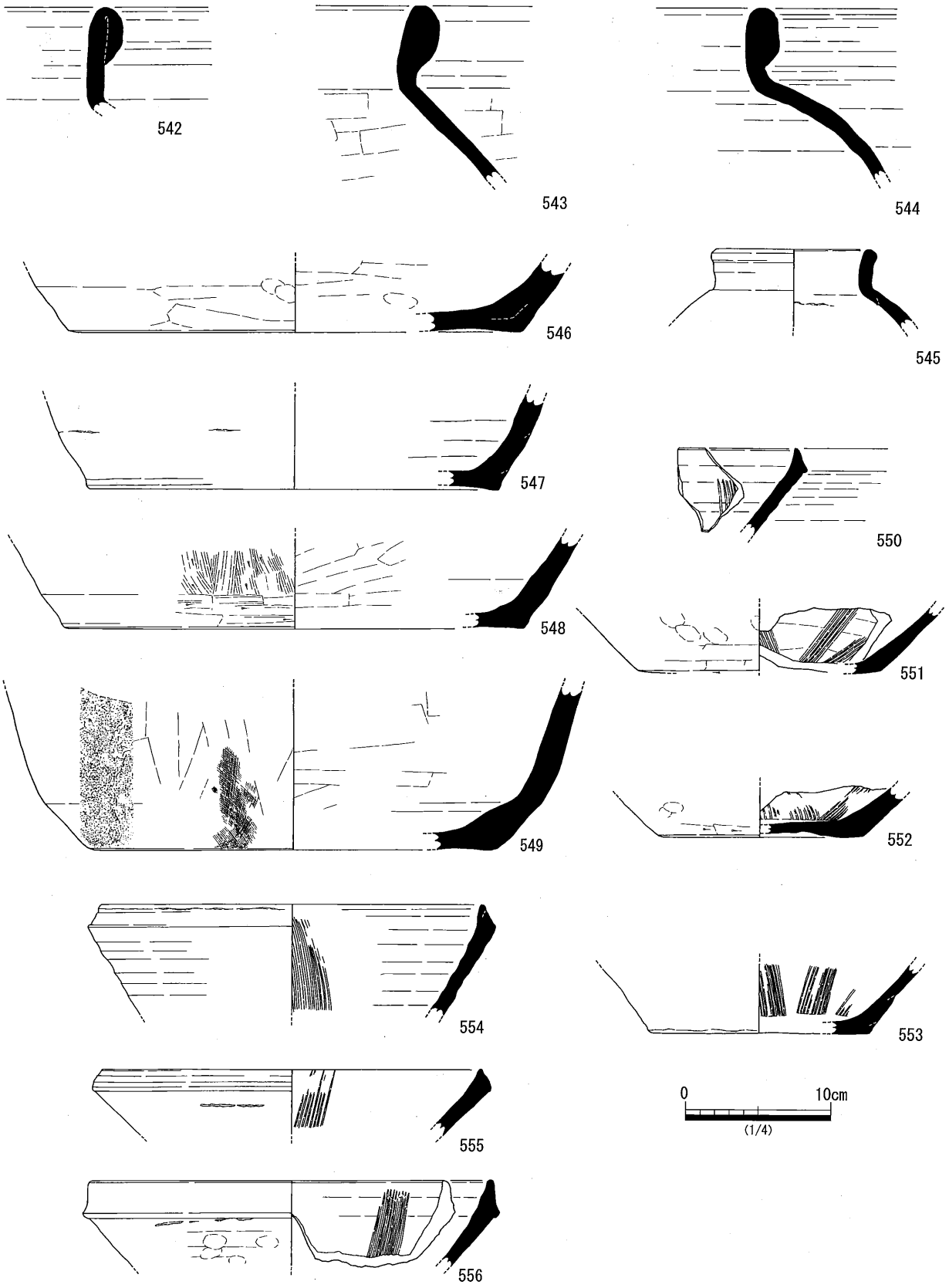
542 ～ 560 は備前系陶器である。542 ～ 544 は口縁部が蒲鉾状に肥厚する大型壺口縁部片、545 は口縁部が玉縁状に肥厚する壺である。546 ～ 549 は壺底部片と推定される。550 ～ 557 は擂鉢である。558 ～ 560 は細身の壺であろう。

561 ～ 563 は瀬戸系陶器である。561 は溝縁の大皿、562 は天目椀の体部下半部片、563 は灰釉の壺底部片である。

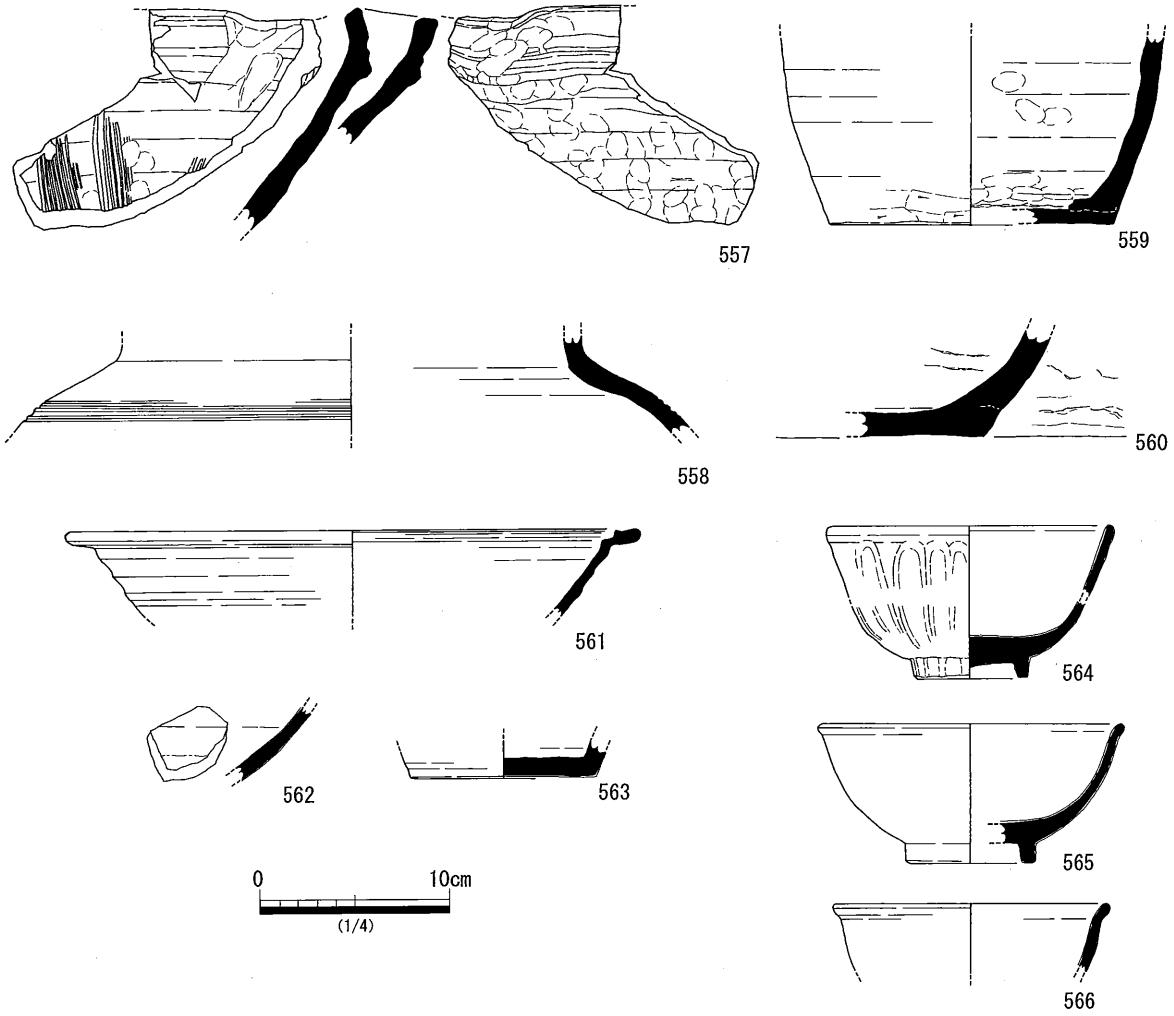
564 ～ 566 は青磁片である。564 は外面に簡素化した鏑蓮弁文を陰刻し、口縁部を玉縁状に仕上げる碗である。薄釉で高台内面の無釉部分は赤褐色を呈す。565 は無文の碗で釉は厚く、釉表面の



第 103 図 溝跡 SD04 出土遺物 (1)



第 104 図 溝跡 SD04 出土遺物 (2)



第 105 図 溝跡 SD04 出土遺物 (3)

亀裂が目立つ。566 は口縁部が外反する無文の碗である。釉が深緑色を呈し、胎土は灰色系である。

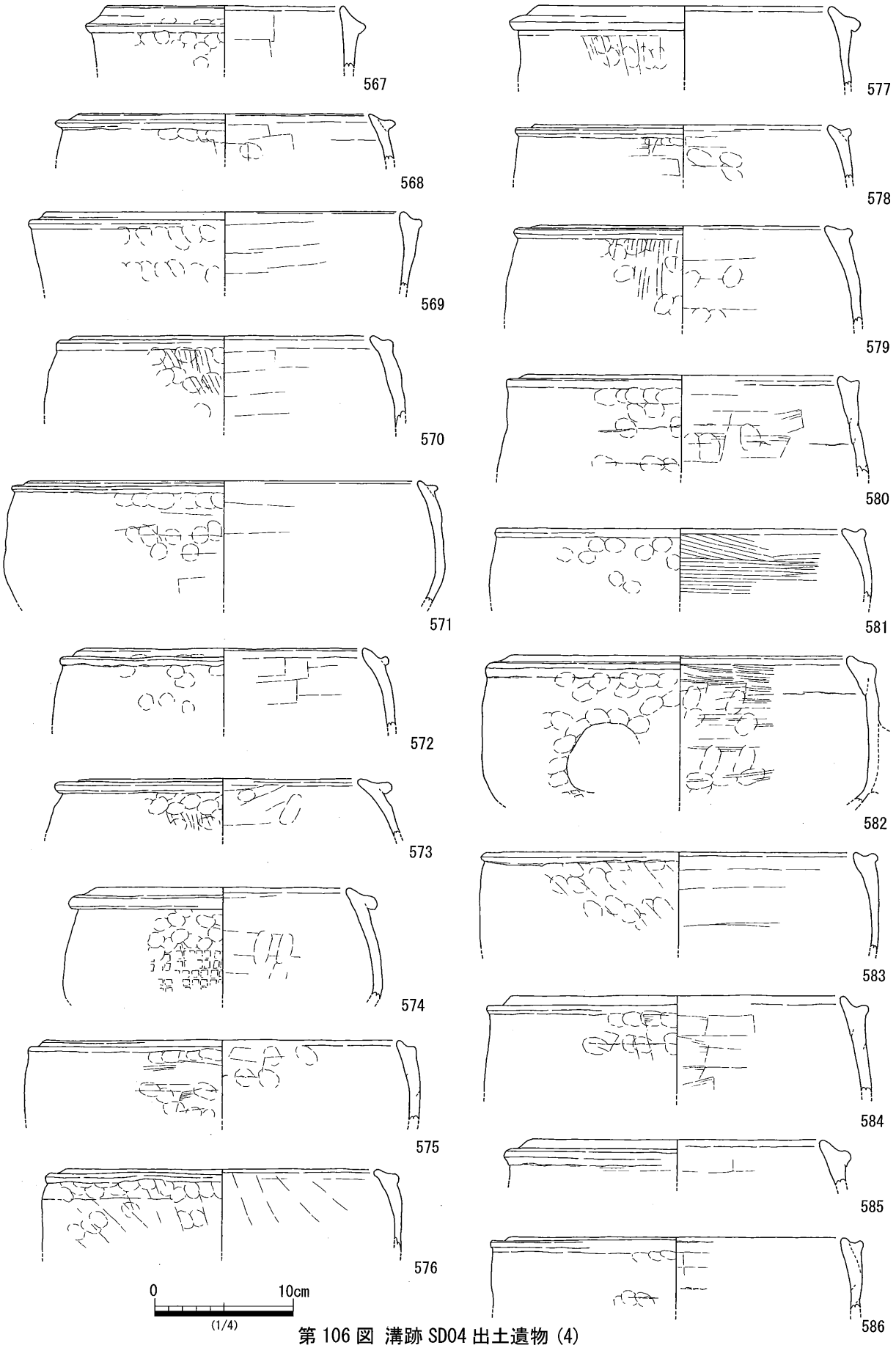
567 ～ 601 は土師器煮沸具羽釜である。口縁部の鍔が矮小化するものが多い。602 ～ 604 は土師器擂鉢である。603 は片口となる。605 ～ 614 は土師器煮沸具土鍋である。615 ～ 617 は土師器火鉢・鉢である。618・619 は土師器大壺、620 は土師器蓋である。622 は土師器の把手片で煮沸具類に付属するものであろう。623 は把手付土鍋である。

624 ～ 629 は土師器杯である。625 は底部ヘラ切りでナデ調整を行う。627・629 は底部が丁寧にナデ消され、整形技法が不明だが、底縁に明瞭な稜線をとどめており、糸切りの可能性がある。

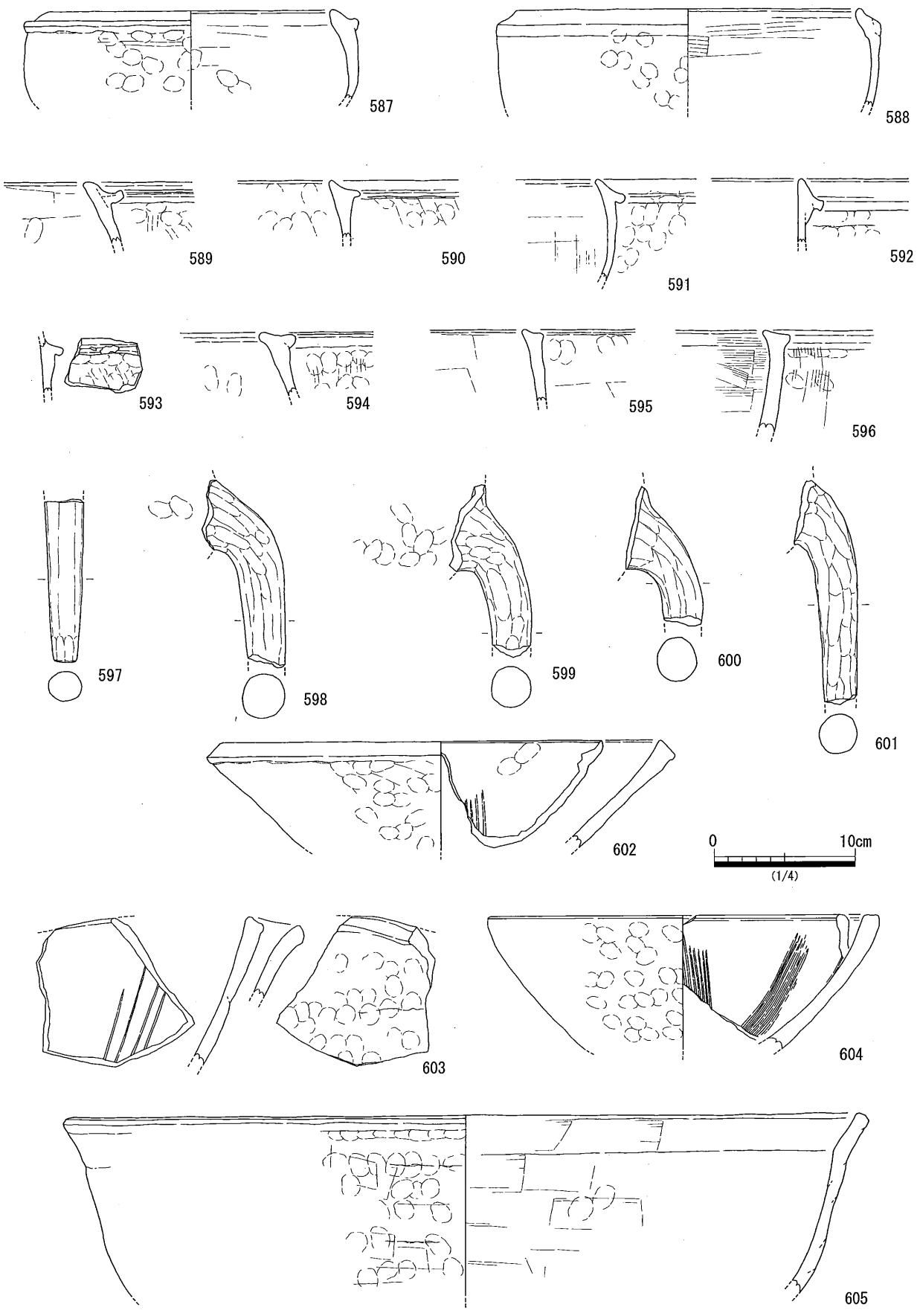
以上の土器類は、備前系陶器や青磁などから 14 世紀後半を上限として 15 世紀前半までの時期幅が考えられる。

630 ～ 634 は瓦である。630・631 は巴文軒丸瓦、632・633 は平瓦、634 は隅が鋭角となる役物瓦である。

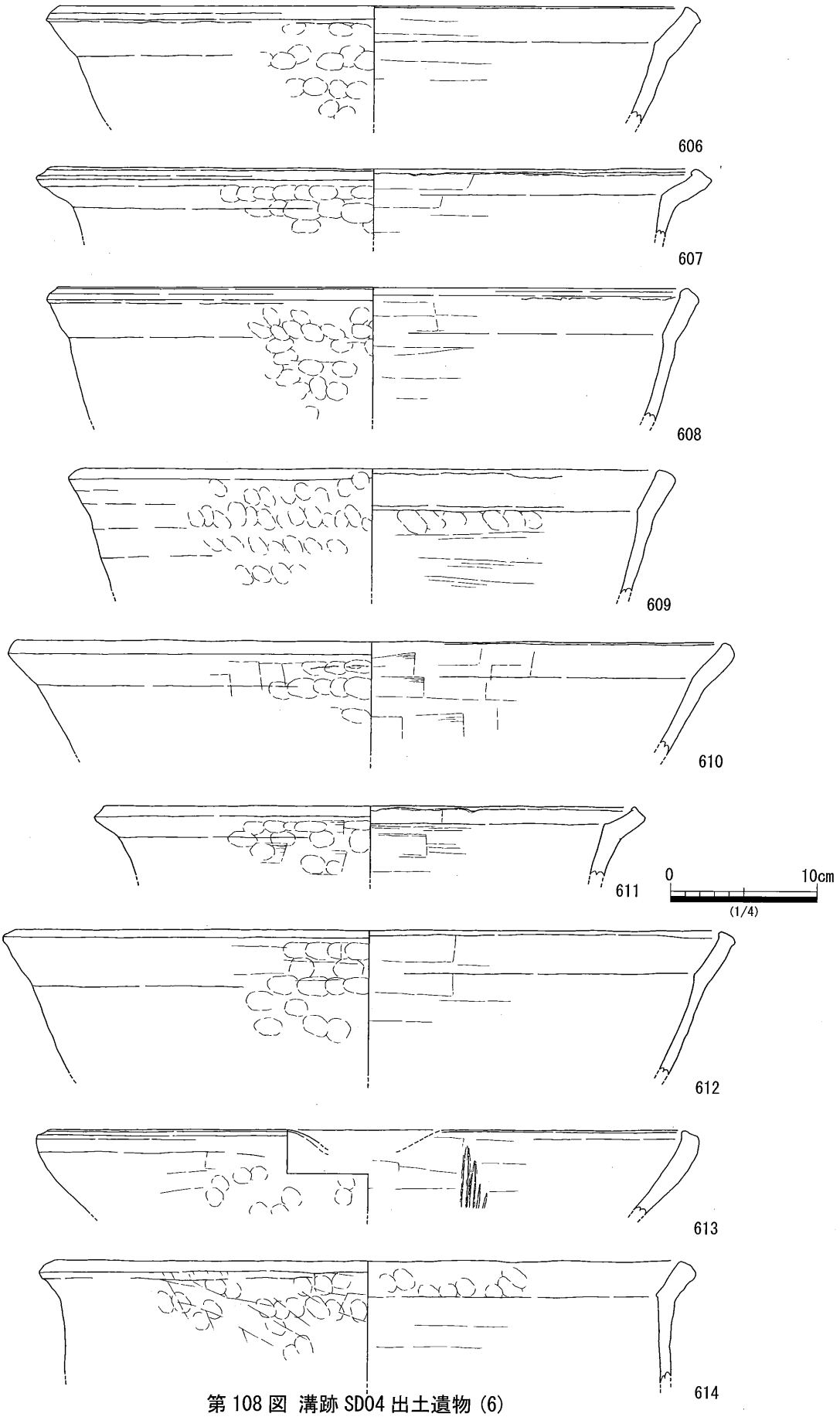
635 は壁面を有する壁土である。



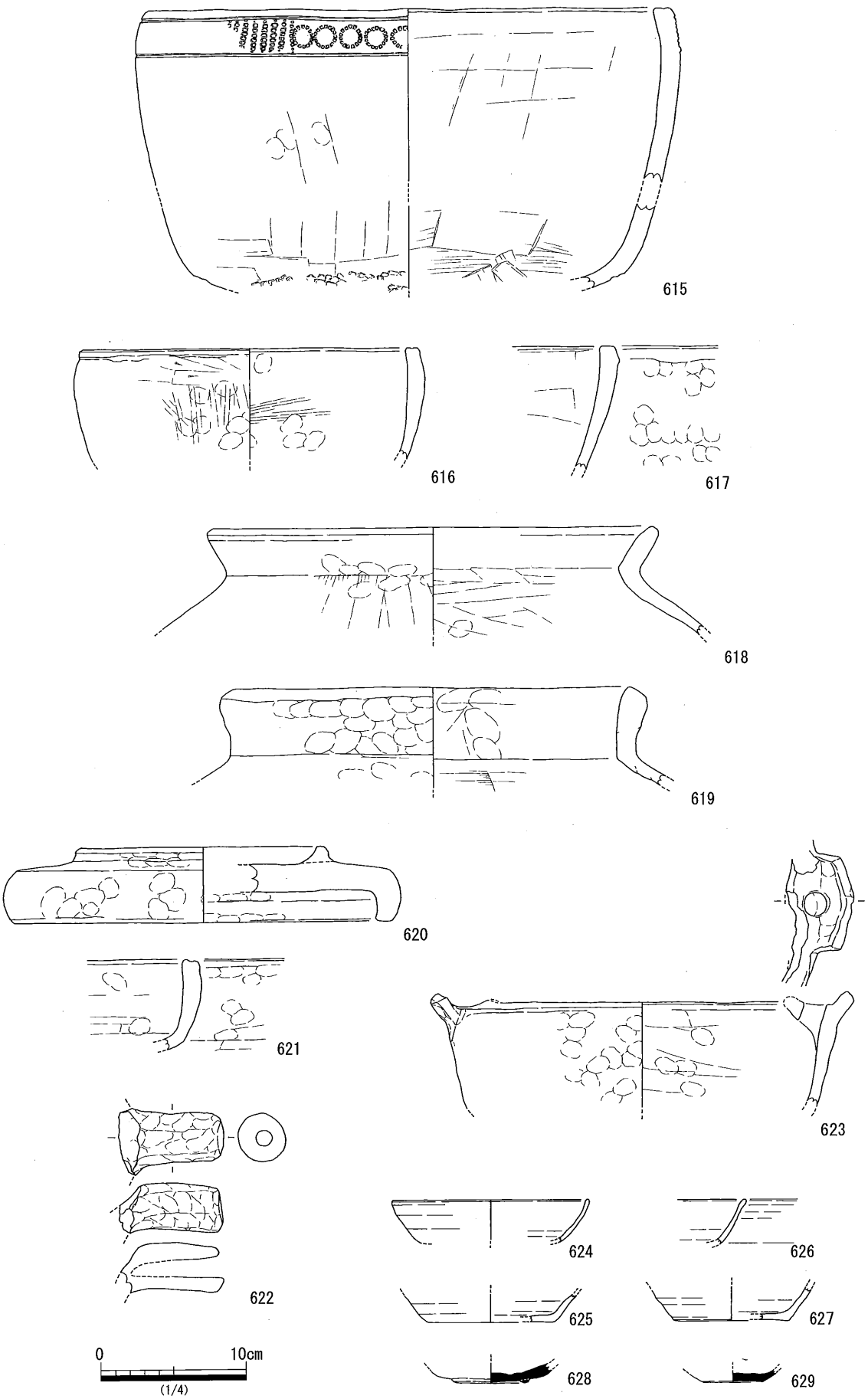
第 106 図 溝跡 SD04 出土遺物 (4)



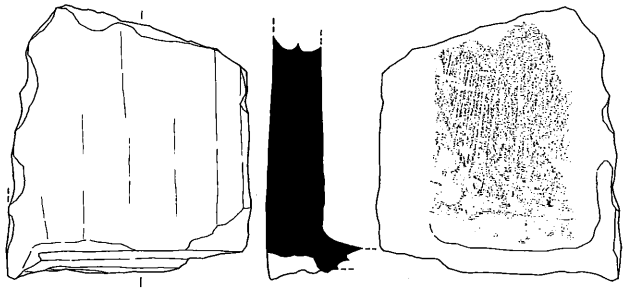
第 107 図 溝跡 SD04 出土遺物 (5)

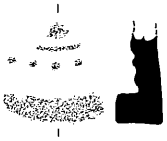


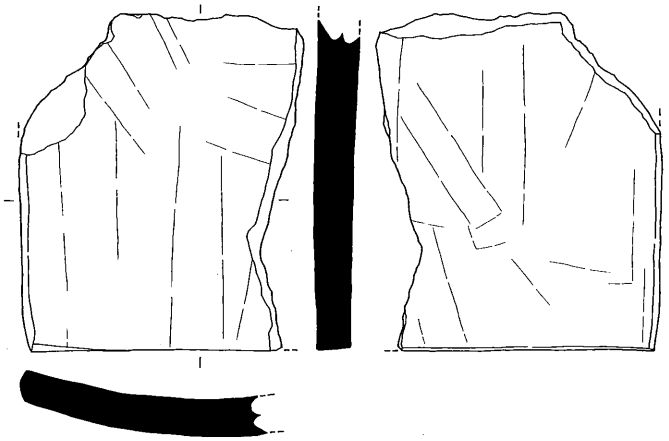
第 108 図 溝跡 SD04 出土遺物 (6)

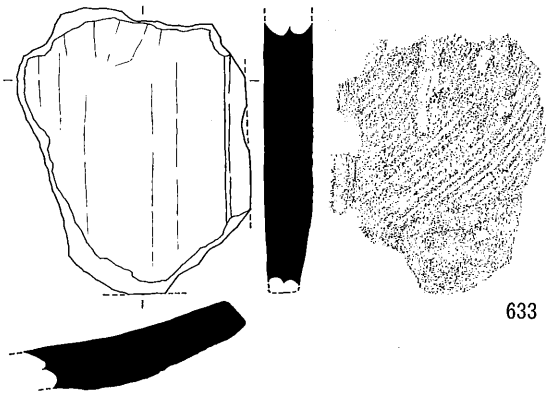


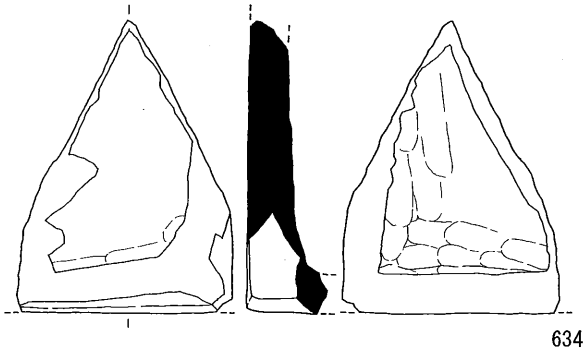
第 109 図 溝跡 SD04 出土遺物 (7)

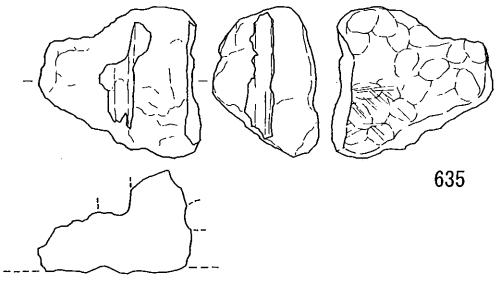

630

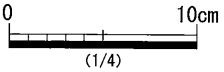

631


632

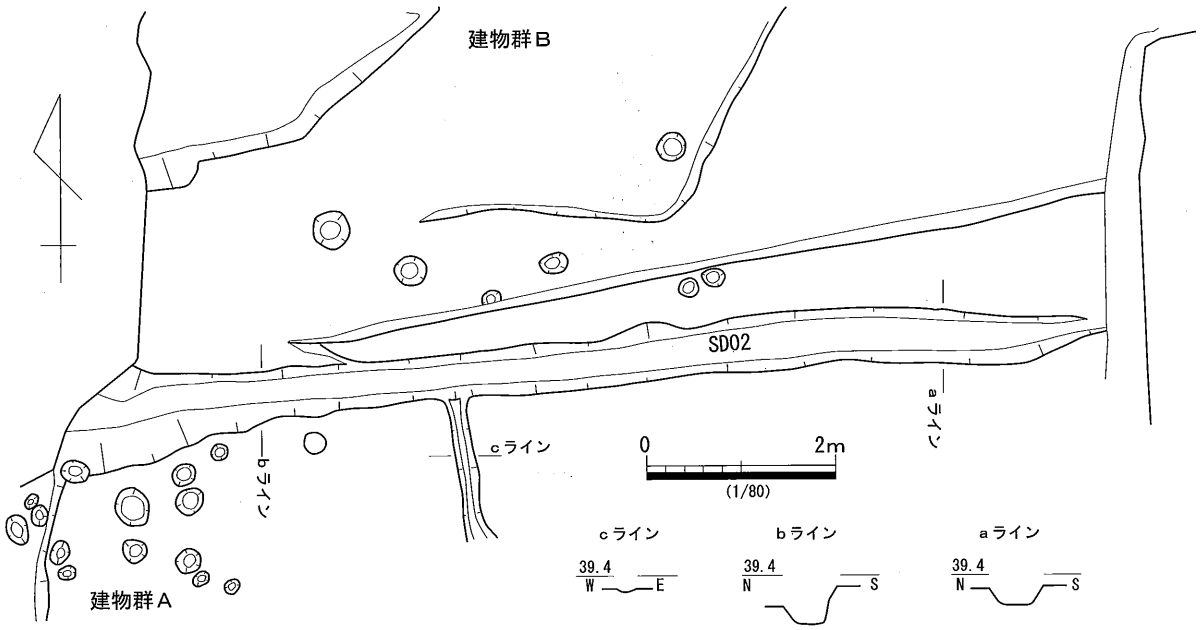

633


634


635



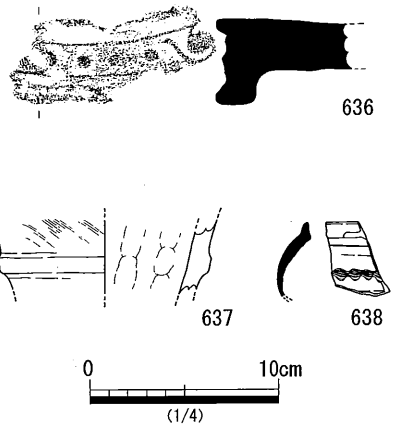
第 110 図 溝跡 SD04 出土遺物 (8)



第 111 図 溝跡 SD02 平・断面図

その他の遺構出土の遺物（第 112 図）

636 は古墳 ST03 北側の東丘陵建物群Ａ付近で出土した軒平瓦片である。637 は西丘陵で出土した円筒埴輪片、638 西丘陵東斜面の中世整地層より出土した初期須恵器の壺口縁部片である。



第 112 図 Ａ地区包含層等出土遺物 (1)

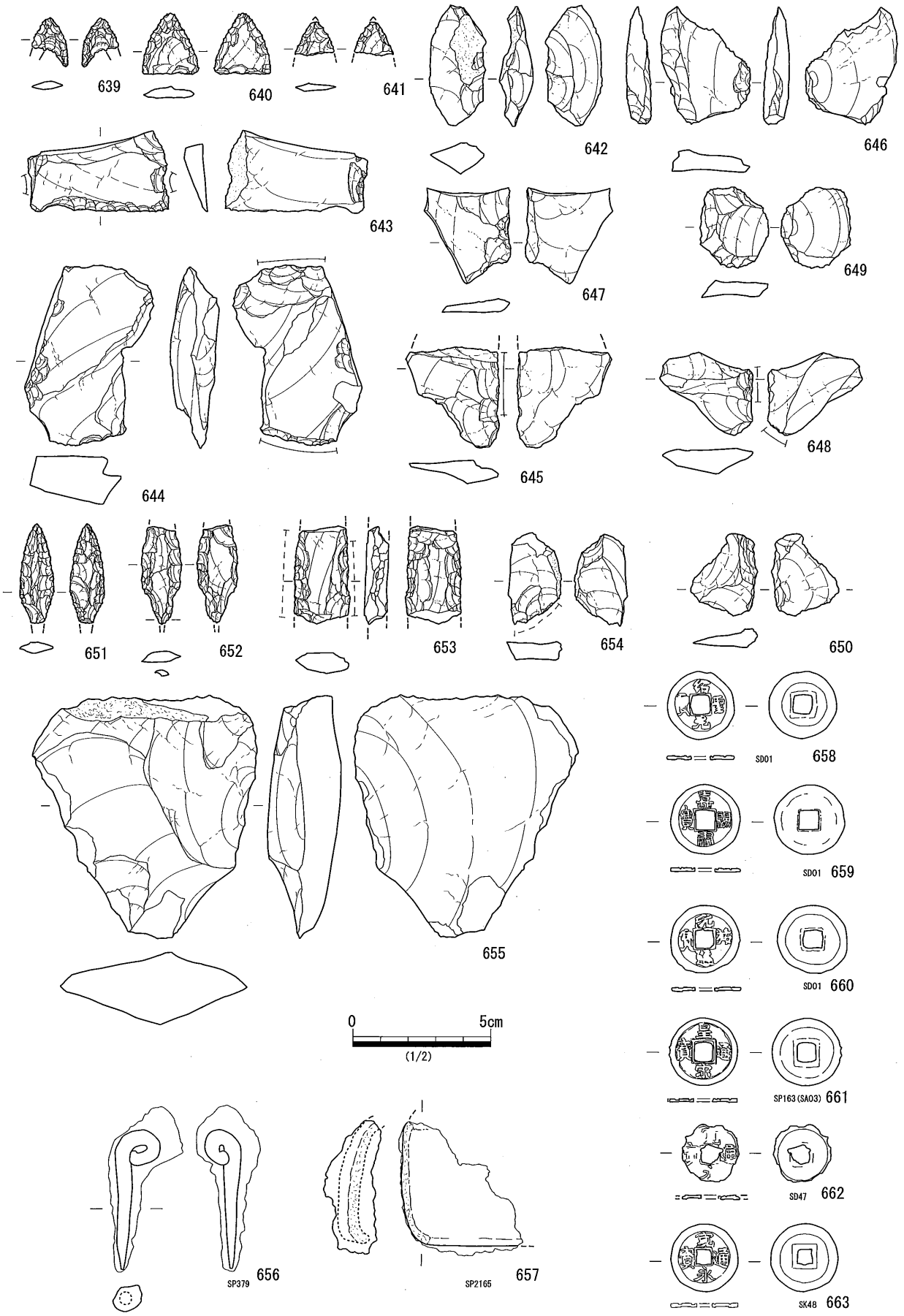
Ａ地区包含層等出土の石器・金属器（第 113 図）

639 ～ 655 は縄文～弥生期の遺構・包含層以外から出土した石器である。そのうち 639 ～ 650 は風化が進行したサヌカイト製石器で、縄文時代に所属すると考える。639 ～ 641 は凹基・平基式石鏃で 639 は基部に深い抉りをもつ。642 は打面調整を施して剥離した横長剥片で、背面に自然面を残す。643 は片面のみ刃部加工を施した削器、644 は上下に敲打痕を残す楔状石核である。645 ～ 650 はいずれも剥片で、646・649・650 は打瘤が残る剥片。それ以外は両極打撃によって剥離した打点が明瞭でない剥片である。

651 ～ 655 は弥生時代と推定したサヌカイト製石器である。651 は凸基式石鏃で、関から上の作用部の長さは 2.5cm とさほど大きくない。652 は石錐である。653 は横長剥片の上下側縁を加工した打製石剣の破片である。側縁に敲打痕がみられることから、柄部の破片と推定される。654 は楔状石核の破片である。655 は大型剥片を素材とする厚さ 2.6cm の石核である。図の右が素材剥片の主要剥離面で、剥離後に打面部を除去する剥離が１回行われている。重量は 169.89 g である。

656 はＡ地区東丘陵の柱穴より出土した長さ 5cm の鉄釘である。Ｘ線では基部が巴状に曲がる。657 は袋状鉄斧の袋部破片と推定した不明鉄器片である。

658 ～ 663 は銅銭である。658 ～ 661 はＡ地区東丘陵、662・663 は西丘陵出土である。宋銭と寛永通宝がある。



第 113 図　A地区包含層等出土遺物 (2)

第４章　Ｂ地区の調査

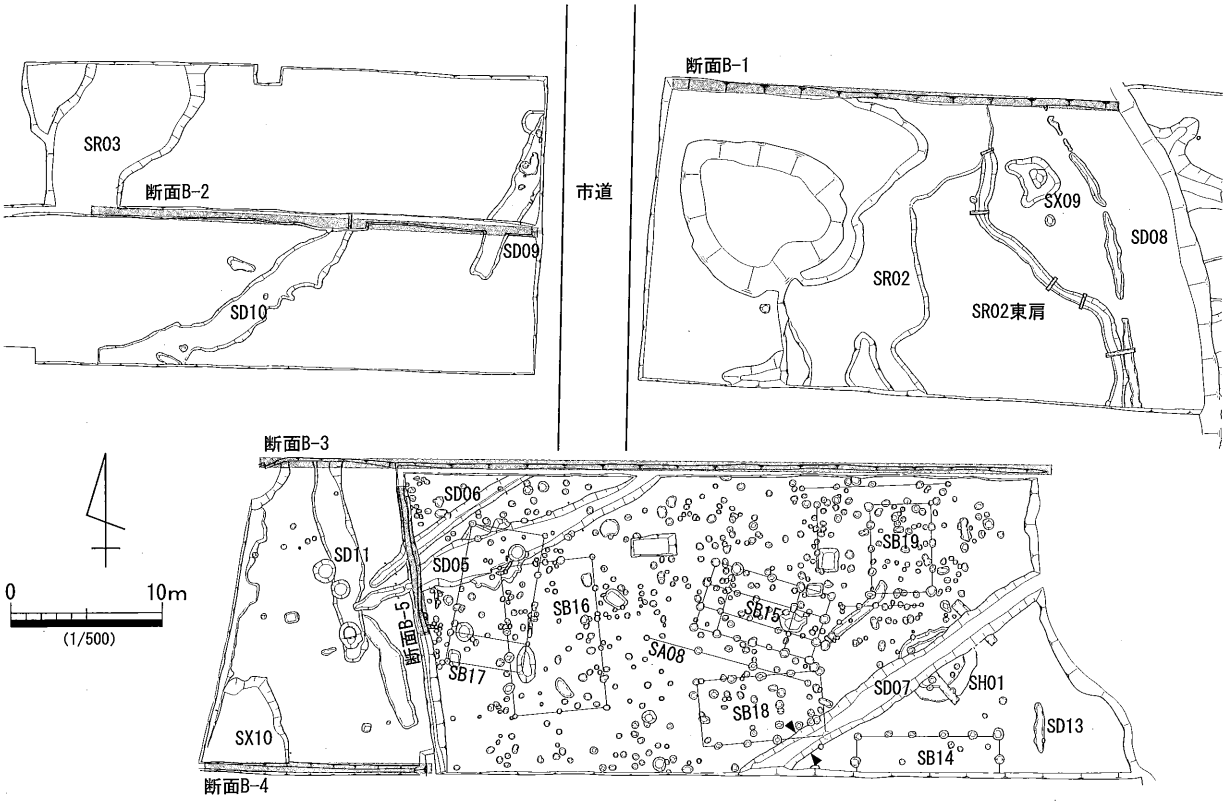
第１節　概要

尾崎西遺跡Ｂ地区は、阿讃山地から北に八手状に伸びる丘陵間の谷が幅を広げ、扇状地状地形の上部を砂層が覆って平坦化した地形面上に立地する。Ａ地区西端の上位段丘崖直下から、西へ約 300 ｍの間に、縄文期から古代までの旧河道と同時期の微高地、さらに幅広い旧河道域がある。このうち、西側の旧河道域では、前年度の試掘調査で出土遺物がなかったことから、調査対象地から外れている。以下、Ｂ地区全体の土層について報告した後、微高地の調査成果、河道部の調査成果の順で報告する。

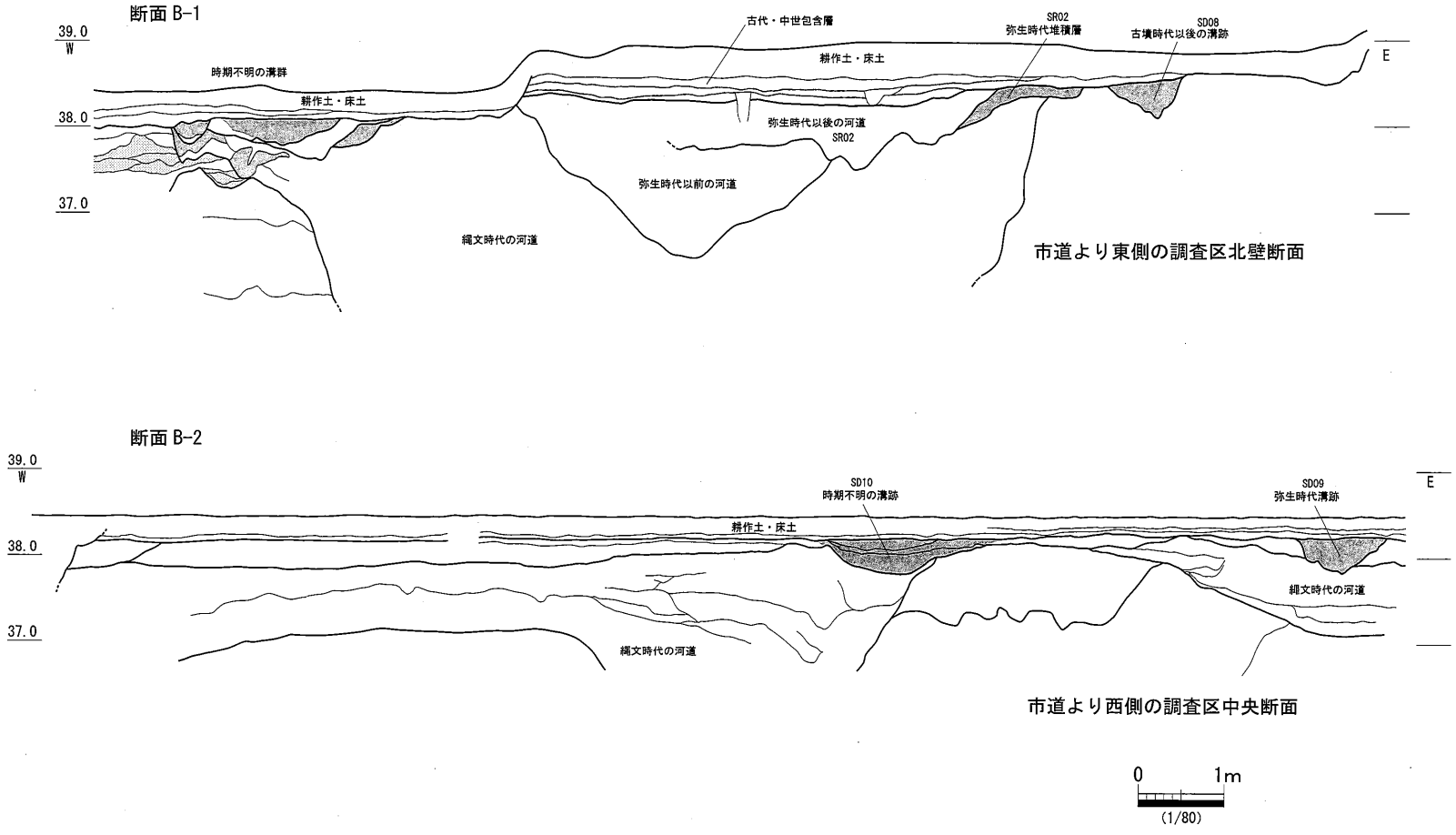
第２節　土層序

市道東側の旧河道域（第 115 図　断面 B-1）

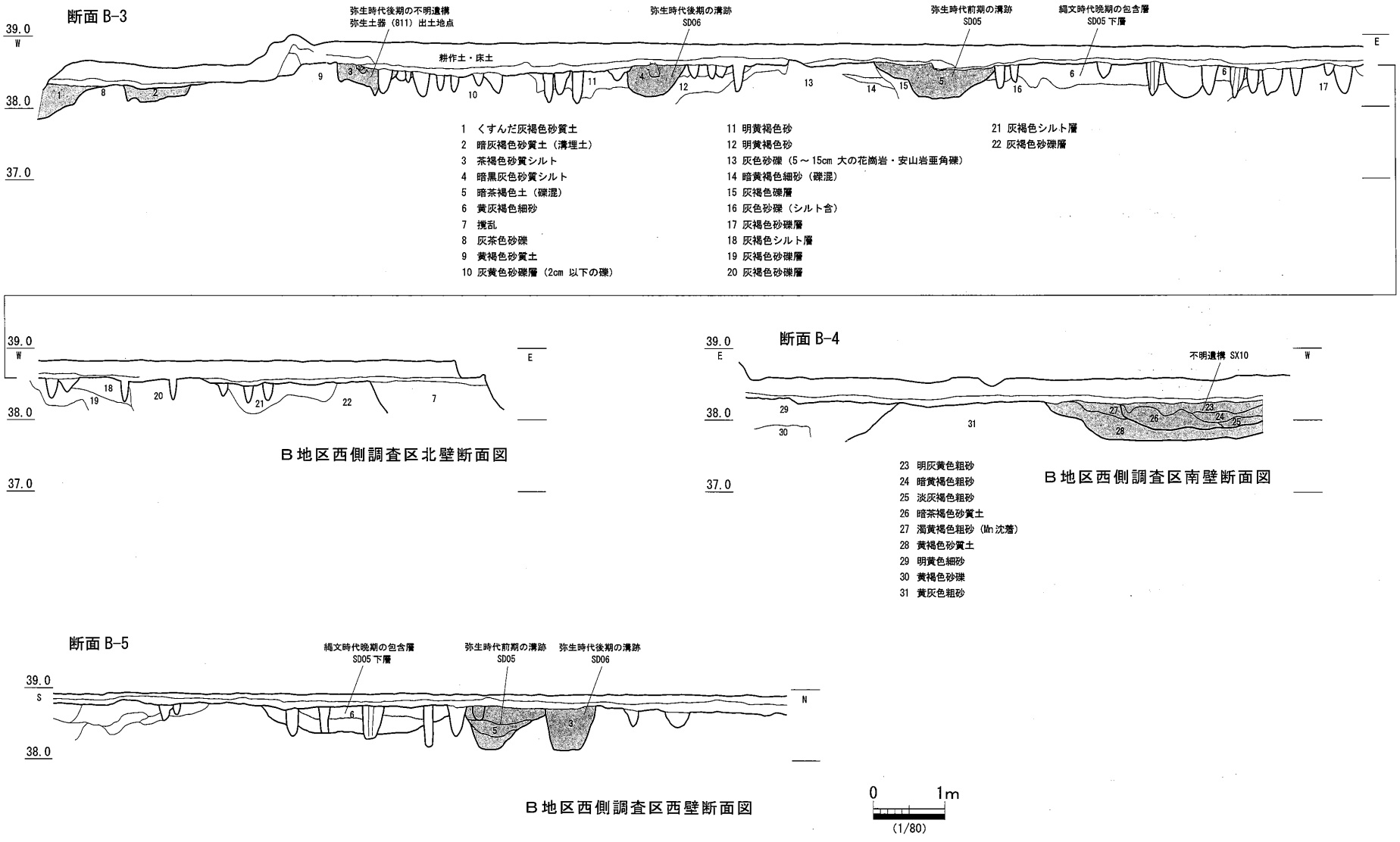
Ａ地区西端の段丘崖に接するＢ地区東側（市道より東側）の土層は、縄文時代およびそれ以後と推定されるの複数の自然河川跡堆積層を延長約 80 ｍの範囲で確認した。これらの堆積層は粗砂層、礫層が主体で、出土遺物はほとんどない。河川跡の最終埋没層と考えられる SR01 東肩部に弥生時代前期の比較的まとまった土器資料が出土しており、これを含む深さ約１ｍ、幅約 10 ｍの河川が弥生時代以後にも継続していたものと考えられる。一方、SR01 東肩部のさらに東に、幅約 0.3 ｍの溝跡がある。出土遺物は古墳時代の須恵器が中心だが、これらの須恵器はＡ地区の古墳 ST08 ～ ST10 から混入した須恵器と考えられ、溝跡の掘削は古墳時代以後に段丘縁辺に削平が及んだ中世ごろと推定される。その時期の



第 114 図　Ｂ地区全体概要図



第 115 図　B地区土層断面図 (1)



第 116 図 B地区土層断面図 (2)

遺物包含層が幅15ｍにわたって水平に堆積する。これらは、段丘縁辺の土地開発にともなう耕作層と考えられる。また、市道際で条里型地割に合致する可能性が高い溝跡を断面で確認したが、平面的な調査を行うことができなかったので、評価できない。

市道西側の旧河道域（第115図　断面B-2）

市道より西側では縄文時代と推定される河川跡が複数断面で確認できた。しかし、出土遺物がなく、詳細は不明である。堆積層は砂礫層が主体だが、西側の河川堆積層上部は黄白色系のシルト層が広い範囲にわたって堆積する。そのシルト層を切り込む溝跡SD09・SD10は、弥生後期土器片が出土していることから、弥生時代以後の溝跡である。不整方向に掘削された溝跡の方向からみて、周辺に条里地割に沿った土地開発が及ぶ前の所産と推定した。

Ｂ地区西側微高地（第116図　断面B-3～5）

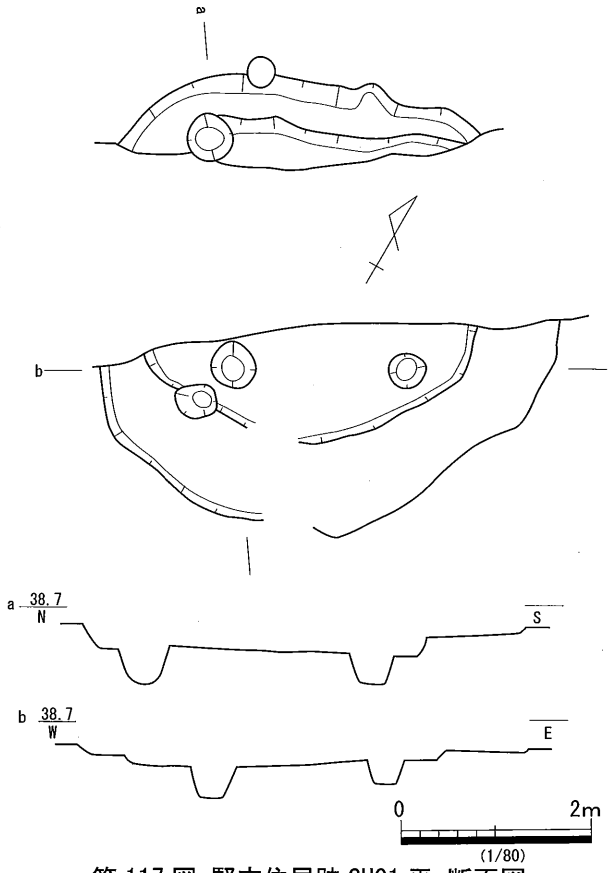
やや西に離れた微高地には弥生時代･中世の居住遺構がある。河川域と比べ、現標高は0.5ｍほど高く、耕土層直下で削平を被った遺構面を検出したことから、当時の比高差は１ｍ以上と推定される。ただ、遺構の基盤となる土層は、粗砂や中砂といった河川堆積層である。東側の河川域に先行する幅広い河川堆積によって形成された自然堤防と考えられる。各時期の遺構も、遺構を埋積する土層は砂層が中心である。明らかに黒色化したシルト層は遺構埋土の認定が容易だが、黄褐色系砂層で埋積する縄文期と推定される溝跡（SD05下層）は、調査当時に平面検出に失敗し、溝内に部分的に堆積した黒色砂質シルト層を、居住遺構と誤認して調査を進めている。これらは遺構基盤層まで含めた土層断面を検討した結果、溝跡（もしくは自然流路跡）として評価し直した。

第３節　縄文時代～弥生時代

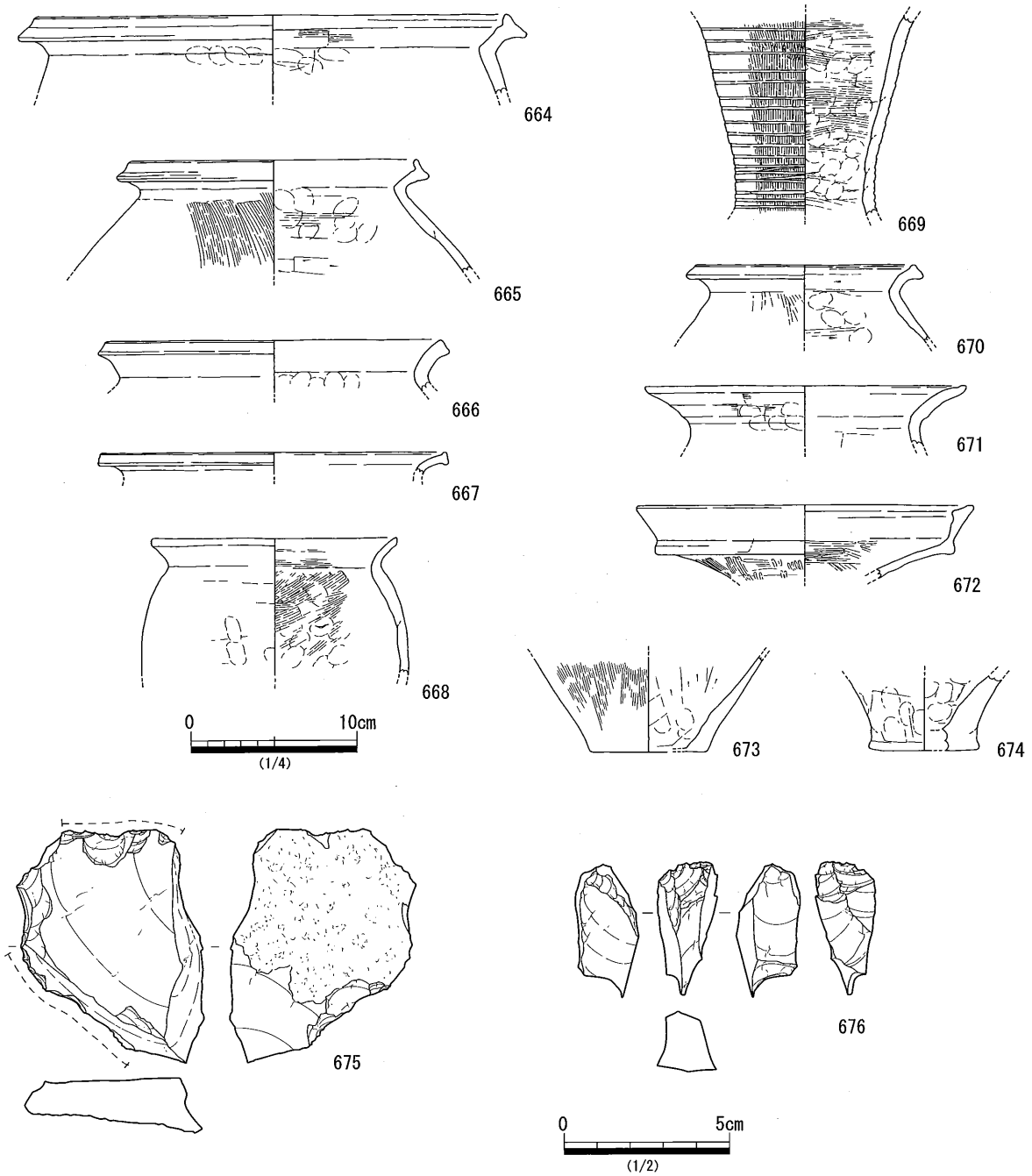
竪穴住居跡SH01（第117・118図）

直径約５ｍの竪穴住居跡である。平面形は南側で円形を呈するが、北側では隅丸方形に近い。主柱穴は４穴と考えられ、柱穴部分を境に床面に段が認められる。段部分の詳細な記録はとれていないので、貼床か削出か明確でない。また壁溝についても、検出に失敗したのか、元来壁溝を伴わないのか、明らかでない。検出面からの深さは上段で0.1ｍ、下段で0.3ｍをはかる。床面中央部は溝跡SD07によって切られ、炉跡形状などは不明である。

出土遺物は全体的に少ない。664～668は甕である。664・665は口縁部を大きく拡張し、端面および口縁部内外面にヨコナデを施すもので、いずれも内面の口縁胴部境に稜線をもつ。665の胴部上半はヘラ削りが残る。666～668は口縁部の拡張が小さく、内面の口縁胴部境に明確な稜線を



第117図 竪穴住居跡SH01 平･断面図



第 118 図 竪穴住居跡 SH01 出土遺物

とどめない。口縁端面はいずれもナデによる面取りを施す。668 の胴部内面はハケ調整である。669 ～ 671 は壺である。669 は細頸壺頸部片で、外面に縦方向のハケ調整後、細かなピッチで多条の沈線を施す。角閃石を含む淡茶褐色系の胎土で、高松平野西南部産と考える。670 は 665 の甕と同形態の土器だが、口縁下端部が斜め下方に張り出すように拡張し、壺口縁部に通有の技法をもつことから壺と判断した。ただ、胴部内面にはヘラ削り施すので、甕とすべきかもしれない。671 は弥生前期土器の混在品の可能性がある。672 は高杯である。杯部は外反しながら開き、口縁部は屈曲して立ち上がり、端部内側を拡張する。端面は強いナデ調整が施される。口縁杯部境の屈曲部は肥厚して斜め下方に突出する。673・674 は安定した平底の底部である。以上の土器は弥生時代後期前半の古相もしくは中相に位置づ

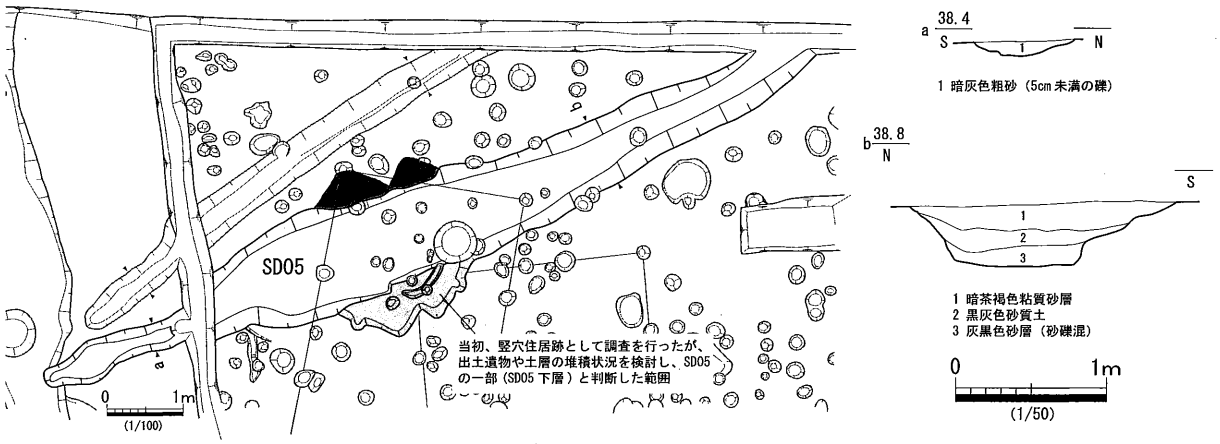
けられる。

675・676はサヌカイト製石器片である。675は背面に大きな自然面、側縁に折損面をとどめた長さ5cmを超える剥片である。上下縁に敲打痕が残ることから、石核と考える。676は方柱状に折損した楔状石核片である。上縁に階段状剥離が顕著にみられる。

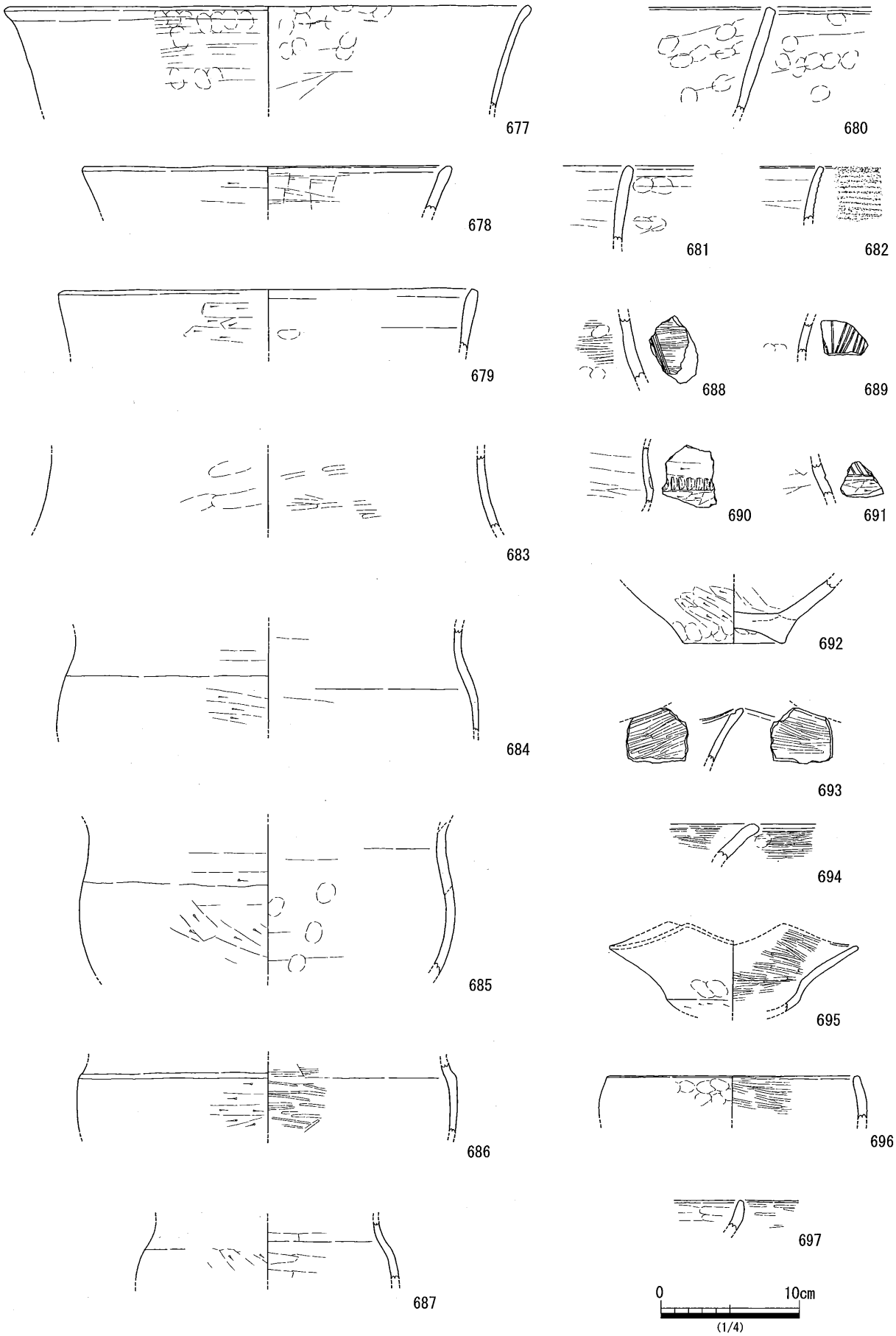
溝跡SD05（第119～123図）

B地区西側の微高地で検出した溝跡である。調査区の北西隅で南西から北東に向かってほぼ直線的に流下する。規模は幅約1m、深さ0.45mである。南西側は後世の削平の影響で途切れる。断面形は逆台形状を呈し、埋土は周辺地盤の影響で、全体的に砂分が多い。ただし、下層に礫混じりの灰黒色系砂層が堆積するのに対し、上部は次第に褐色を帯びながら粘性が混じることから、当初流水を伴う水路として機能し、その後滞水状態で堆積した状況が想定できる。なお、検出範囲の中ほどに、調査当時に竪穴住居跡として調査した部分がある。第119図に示したこの部分は、土層堆積や出土遺物を検討した結果、溝跡SD05およびそれに切られる縄文期の溝跡もしくは流路跡の部分的な変色部であったものと判断した。土層序の項で記述したとおり、SD05に切られて、黄褐色系砂層を埋土とする幅2～3mの窪みが北壁および西壁に見られる。平面的に検出できていないので、詳細は不明だが、SD05に概ね平行して存在した可能性が高い。出土遺物を点検すると、弥生時代前期の遺物に混じって、縄文時代晩期中葉ごろ（突帯文土器出現直前）の土器がみられ、両者に時期差がみられることから、縄文期の先行流路が一旦埋没し、その後再掘削された溝跡がSD05と推定できる。ここでは、先行流路をとりあえずSD05の下層として取り扱う。

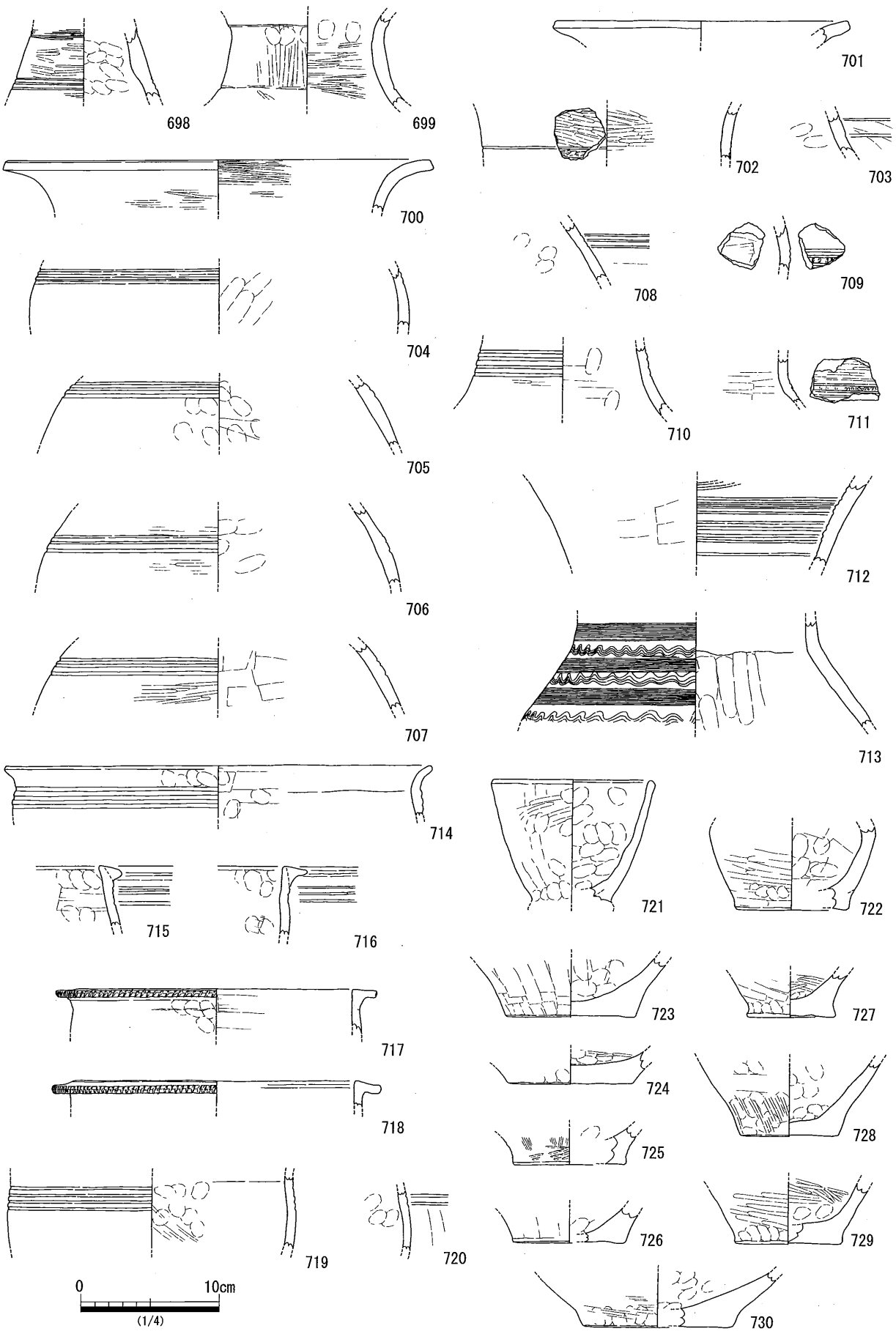
677～697は下層出土の（主に竪穴住居跡として調査した箇所で出土した）縄文土器である。677～692は深鉢で、そのうち677～686は口径が30cm前後と推定される大型品である。胴部上端に屈曲部もしくは器形変化点をもち口頸部が一旦内彎したのちに外傾する器形を呈す。胴部外面には削り調整を施し、口頸部には繊維質工具による擦過痕を認める。680～691はこれらの口縁部片である。682は外面に二枚貝条痕、690は口頸部胴部境に爪型刺突文が施される。688・689・691はヘラ描き縦線文がみられる。692の深鉢底部は上げ底で、外面に巻貝条痕が施される。687は口径20cm前後の小型深鉢である。693～697は浅鉢である。そのうち693～695は口縁部が屈曲する黒色磨研系浅鉢で、693・695は波状口縁を呈す。693は、肥厚する口縁部内面に、断面三角形の沈線を施文する。696・697は直口口縁



第119図 溝跡SD05平・断面図



第 120 図 溝跡 SD05 出土遺物 (1)



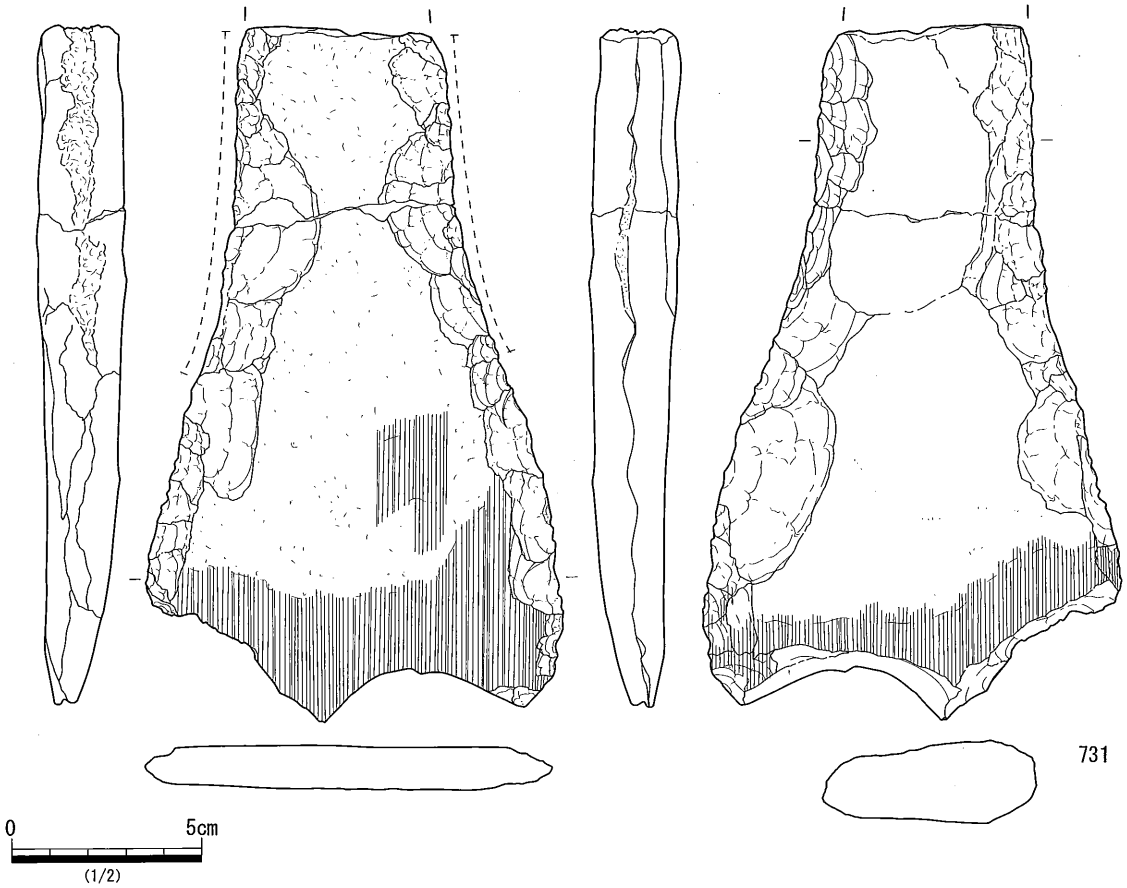
第 121 図 溝跡 SD05 出土遺物 (2)

の浅鉢である。これらの縄文土器は、口縁部に突帯を貼付しないことや、口頸部境の爪型刺突文、あるいは屈曲タイプの浅鉢の形状などが、高松市居石遺跡出土の突帯文土器出現直前の縄文晩期中葉土器群に共通する。

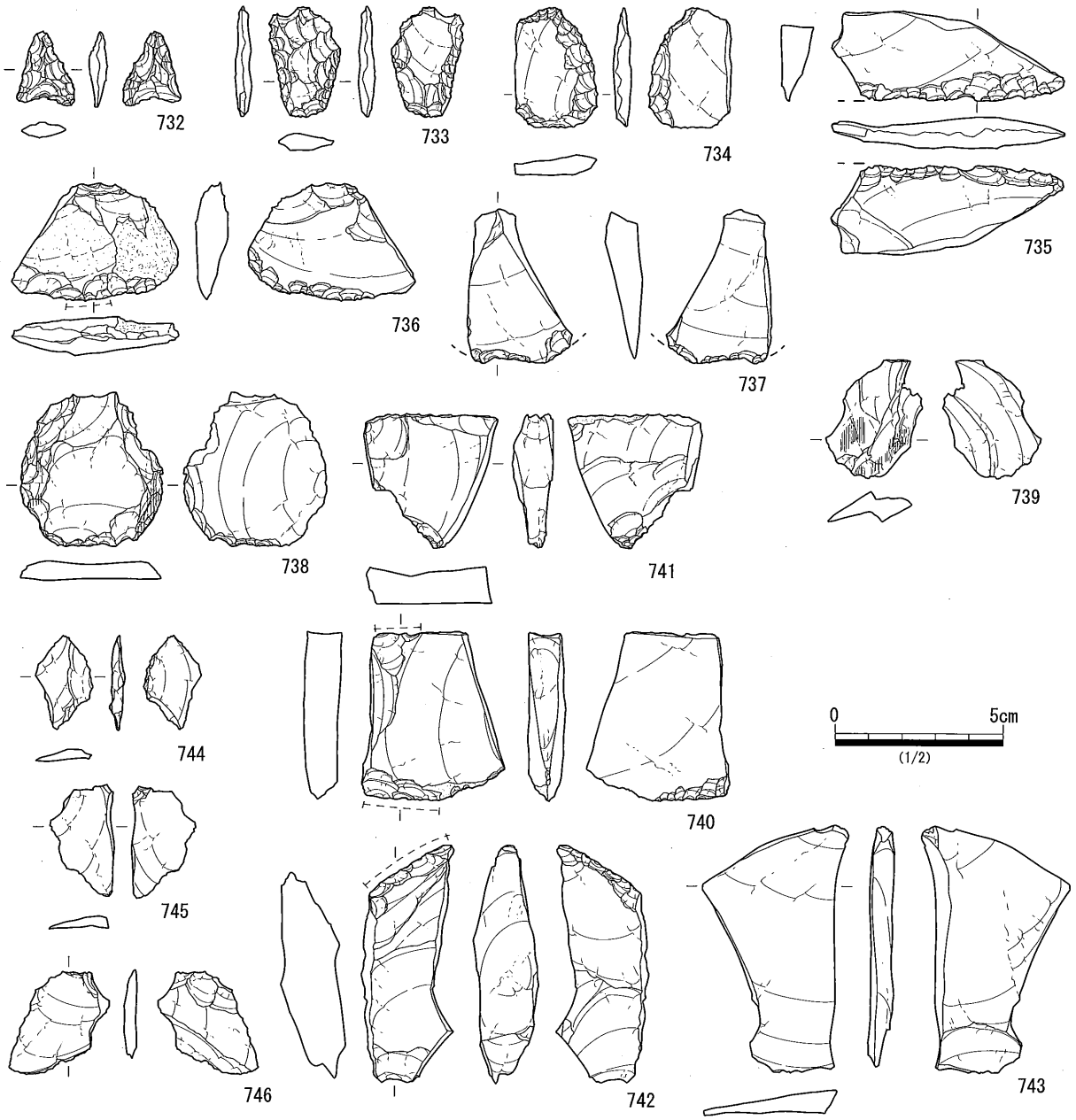
698～730は上層（主にSD05本体）出土の弥生土器である。698～713は壺である。698は口頸部から胴部に至る器形変化に乏しく、沈線で部位を区画する小型壺、699は口頸部境、頸胴部境に段を有する壺である。この2点は前期前半の所産である。700～711は器形境と沈線文様帯の施文部位が一致しないものが多く、前期後半の所産と言える。712は口縁部内面に多条の櫛描文を施文し、櫛描文の最上段が上部に彎曲するモチーフをもつ。713は胴部上半から頸部にかけて直線文と波状文の交互配置の櫛描施文を施す。この2点は中期初頭ごろに位置づける。714～720は甕である。714は如意状口縁で口縁下部に3条＋の削出突帯を施す。715～718は口縁部に粘土帯を貼付する逆L字状口縁である。719・720は口縁部形状が不明で胴部上端に沈線文を施す甕である。721は小型の直口鉢、722は小型壺の底部片である。723～730は壺もしくは甕の底部である。そのうち729・730は外面に横方向のヘラミガキを施す壺底部である。

以上の弥生土器は、前期前半期、中期初頭の土器が少量含まれ、主体は前期後半期に位置づけることができる。

731～746は上層・下層より出土した石器である。731は粗質な安山岩を石材とする打製石斧である。残存長18.5cmの大型品で、着柄部の幅5.5cmに対して刃部幅が11cmと大きく、弥生前期に東四国地域に通有の形態である。表裏の素材面は一方が自然面、反対面は剥離面だが、この剥離面は剥離方向が判別不能なほど強く風化する。したがって自然形成による剥離面の可能性が高い。厚さ2cm強の安山岩板



第122図 溝跡SD05出土遺物(3)



第 123 図 溝跡 SD05 出土遺物 (4)

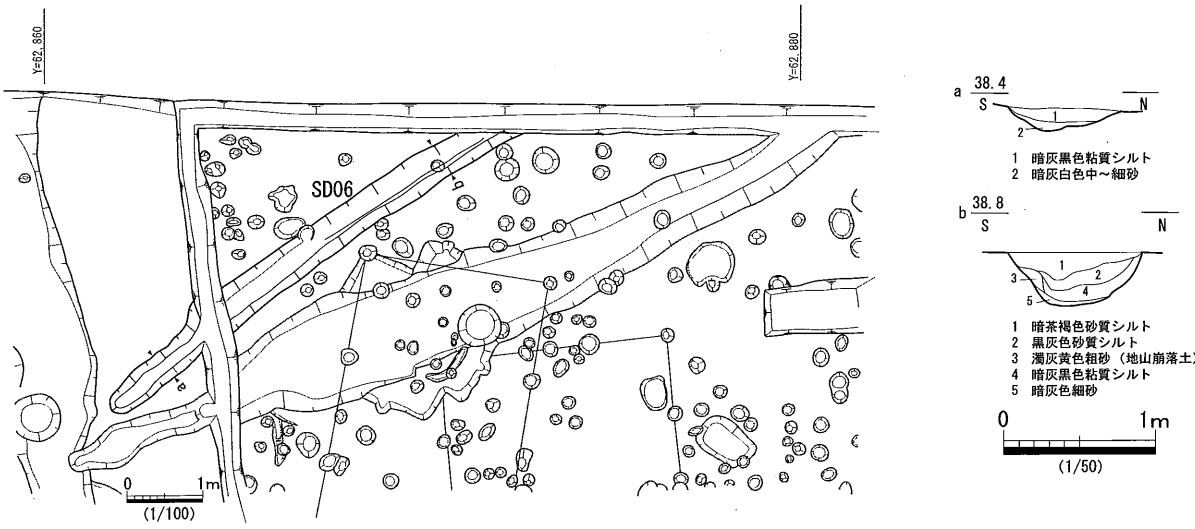
石を素材として周縁部に粗雑な剥離を施し、さらに着柄部側縁の稜線に敲打を加えて仕上げたものであろう。刃部下端は欠損するが、その上部にも器体と同一方向の線状痕を伴う摩滅痕を認める。732 はサヌカイト製凹基式打製石鏃である。基部と先端加工が不十分で未製品と考えられる。733・734 は長さ 3.5 ～ 4.0cm のサヌカイト剥片の側縁に、連続的で丁寧な調整加工を施したものである。大きさからみて、石鏃未製品の可能性が高い。735 ～ 738 はサヌカイト製削器である。直線的な刃部を丁寧に調整加工するもの（735 ～ 737）と、素材周縁のカーブに沿って丁寧な剥離を施すもの（738）の 2 者がある。なお、738 は一部に線状痕を伴う摩滅痕を認めることから、打製石斧の可能性もある。739 は平面に強度の摩滅痕および線状痕をとどめたサヌカイト製打製石斧の刃部再調整剥片である。740 ～ 743 はサヌカイト製の楔状石核である。上下縁に敲打痕をとどめ、側縁に両極打撃に伴って生じた裁断面が残る。大きさは 4 ～ 7cm 大で、厚みは薄手の 743 を除いて、1 ～ 1.5cm をはかる。石鏃等の素材剥片を剥離したもの

であろう。744 ～ 746 はサヌカイト剥片である。744 は明瞭な打点をもつ剥片で、打製石斧や削器などの大型器種の調整加工に伴うものか。745・746 は打点部がハジケた剥片である。両極打撃に伴う剥片であろう。

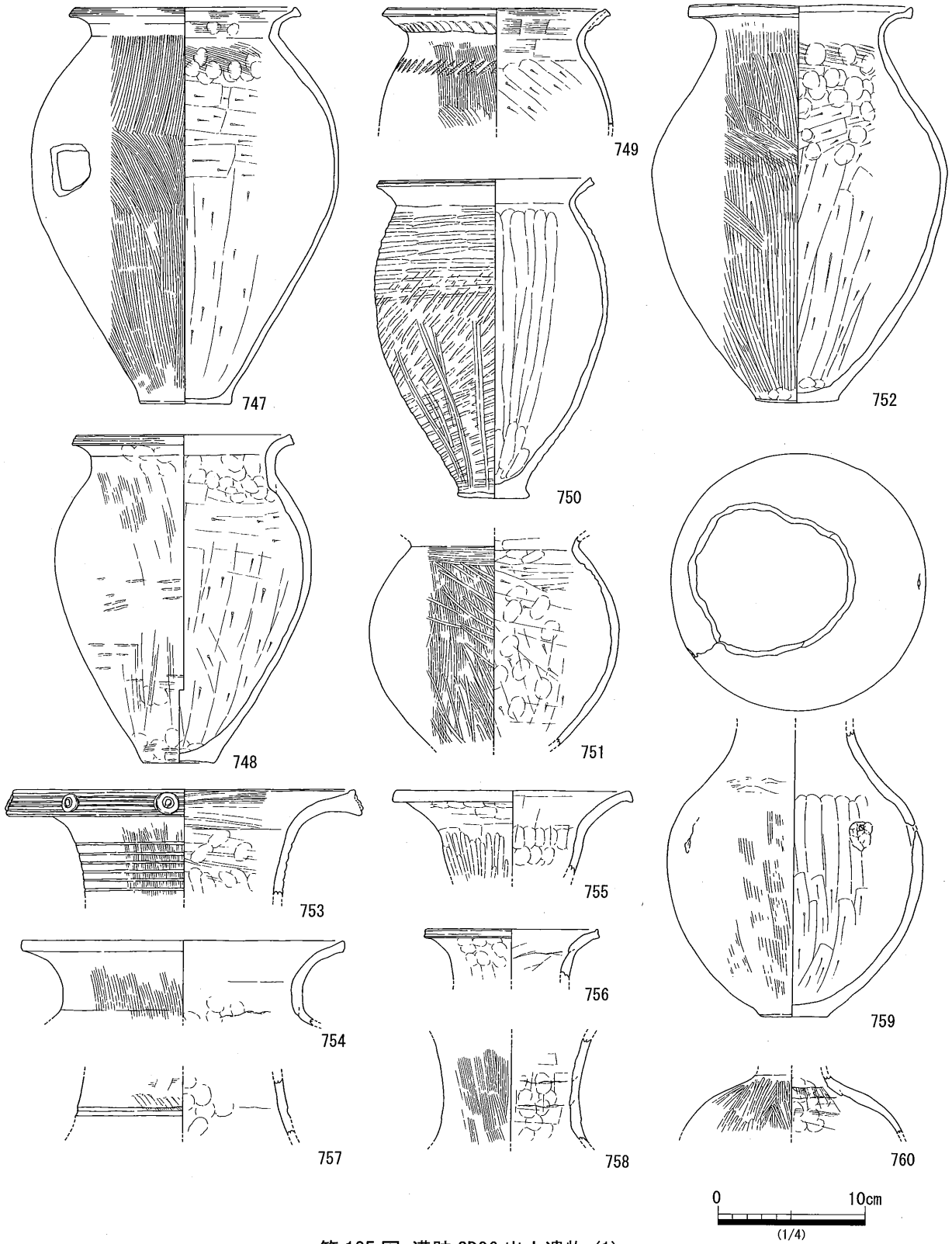
溝跡 SD06（第 124 ～ 126 図）

溝跡 SD05 の 0.5 ～ 2 m北で検出した溝である。幅は 0.5 m、深さは 0.4 m、断面形は逆台形を呈し、北西方向に直線的に流下する。延長 6 m分を検出した。埋土は、下層に暗灰色細砂層が薄く堆積し、流水した痕跡をとどめる。第 124 図 b ライン 1 ～ 4 層の黒色化した粘性土層は、流水停止後に覆った土層である。出土遺物は主に 2 層・4 層で出土した。

747 ～ 765 は弥生土器である。溝幅は狭いが、完形に復元できる土器が多い。747 は体部が倒卵形で、内面にヘラ削りを施し器壁を薄く仕上げた甕である。口縁部は斜め上方に短く立ち上がった後、屈曲して外反する。底部は底径が大きく、きわめて平坦で、胴部外面には縦方向のハケ調整を全面に施す。口縁端部は拡張し、条線をもつ工具で板ナデを行う。748 は器壁が厚い甕である。底面は若干上げ底で、胴部外面は叩き成形後、ハケもしくは板ナデにより器面調整を行う。口縁部は胴部上半の粘土接合部を介して緩やかに反転して外反する。口縁端部は面取りし、浅い条線を施す。749 は胴部最大径部から上が残存する甕である。内面にヘラ削りを施し器壁を薄く仕上げ、外面は丁寧な縦ハケを施す。口縁部は、胴部上半から緩やかに反転して外反し、外面に幅広い粘土帯を貼付してその表面を指頭で連続押捺する。肩部には胴部器面と同じハケ工具を用いて斜行刺突文を施文する。器形や口縁部粘土帯貼付の特徴から、いわゆる土佐甕と考えられ、四国西南部との関係を示唆する資料である。750 は完形の甕である。底部は安定した平底で、胴部外面は 3 分割の平行叩き成形を行う。内面は底部から胴部上端まで連続するナデ調整を施す。口縁端部を面取りし、浅い沈線を施す。751 は丸みを帯びる胴部片である。外面にヘラミガキ調整を施すことから、壺の可能性もある。内面はヘラ削り調整後のナデである。752 は頸部から口縁部に向かって大きく外反する完形土器である。ハケ調整が目立つ外面仕上げは甕に共通するが、器形は壺と言える。内面は下半部をヘラ削り、上半部は横方向のハケ調整後、指押さえを施す。753 は口縁部が大きく開く形態の壺である。頸部に多条のヘラ描き沈線文を施し、口縁端部を上限に大きく拡大し、4 条の浅い凹線文を施した後、円形浮文を貼付する。754 は口縁端部が拡張しないタイプの壺である。755・756 は口縁部が外反する長頸壺である。口縁端部は拡張して外反する。757 は茶褐色の胎土をもつ

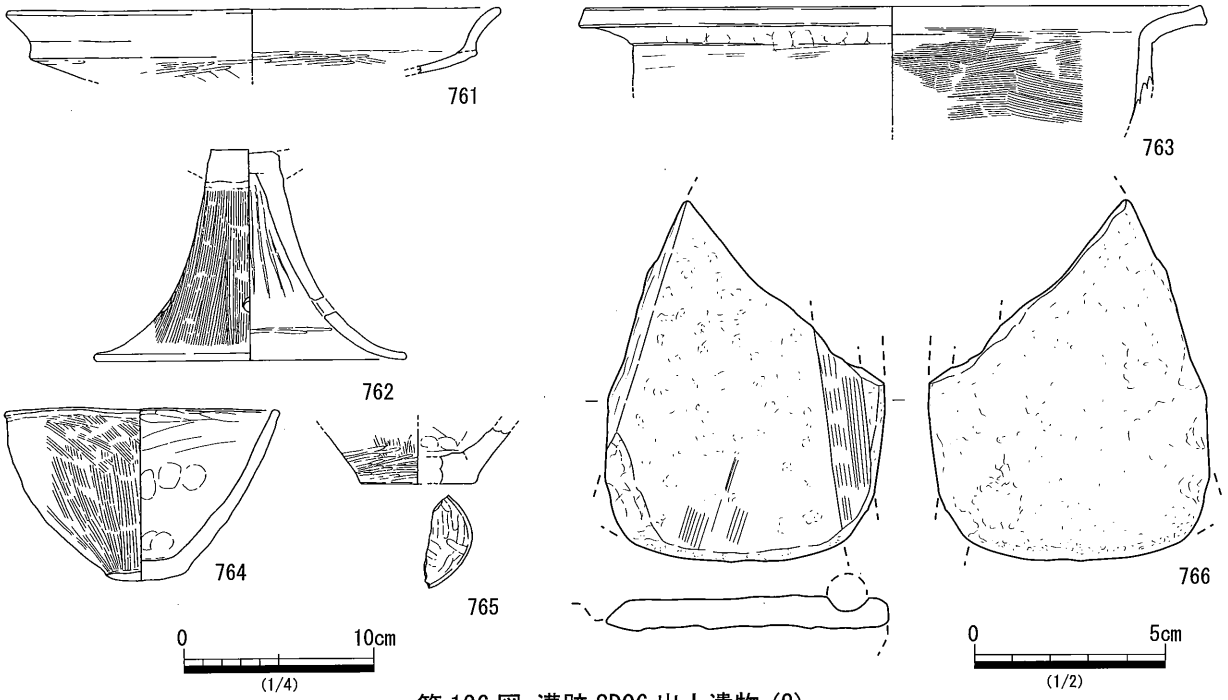


第 124 図 溝跡 SD06 平・断面図



第 125 図 溝跡 SD06 出土遺物 (1)

壺である。胎土中に角閃石を多く含む。高松平野西南部産と推定される。758 は長頸壺の頸部片と推定される。759 は胴部下半が残る長頸壺である。胴部最大径部やや上に、直径 2㎜ 大の小孔を外面から内面にかけて焼成後に施す。760 は茶褐色系胎土の細頸壺である。761 は口縁部が屈曲するタイプの高杯、



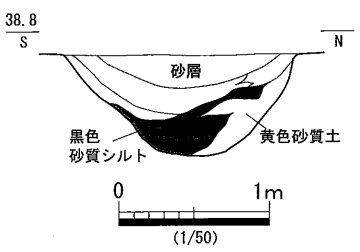
第 126 図 溝跡 SD06 出土遺物 (2)

762 は高杯脚部、763 は口縁部が外反する中型鉢、764 は底部が平坦で外面ハケ調整、内面ナデ調整の直口鉢である。765 は安定した壺底部と推定される。以上の土器群は、弥生時代後期前半ごろに位置づけられる。

766 は粗質の安山岩板石片面に、直径 1.2cm ほどの直線的な窪みを認める石製品である。窪みは図の右側に斜めに１本あり、図の左上折損部に断面半円の窪みとして１本が残る。機能は明かでない。候補としては、窪みの直径が大型の碧玉製管玉などの径に一致することから、玉砥石の可能性が一つ。また縄文草創期ごろに四国地方に広くみられる矢柄研磨器の可能性が一つ。さらに、窪みを石材切断の擦り切り痕と見た場合は、砥石あるいは砥石や磨製石器未製品の可能性もある。このうち玉砥石･矢柄研磨器は、伴出土器が弥生時代後期であることから、時期的には齟齬がある。

溝跡 SD07（第 127 図）

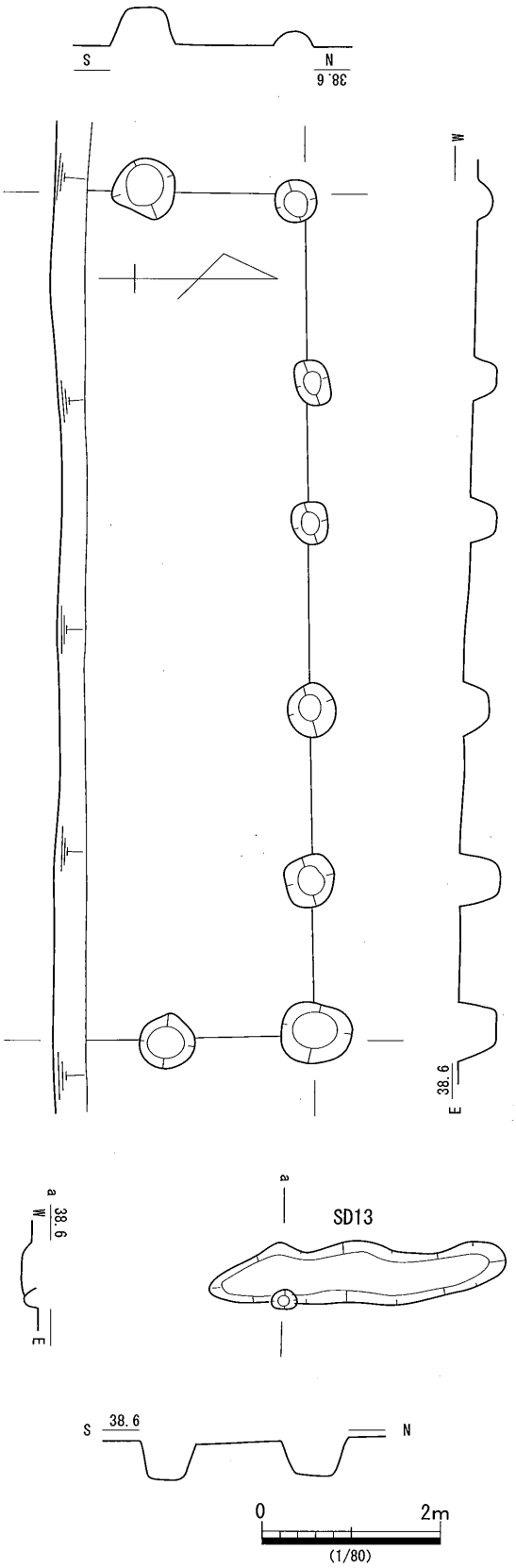
Ｂ地区西側微高地で検出した溝跡である。溝跡 SD05・06 と同様に、南西から北東方向にむかって直線的に流下する。幅 1.5 m、深さ 0.7 m、断面逆台形状のやや大型の溝である。埋土は全体的に砂層が多く、埋土下半が黒味を帯び、上半が砂礫層のレンズ堆積となる。流水痕跡と見ておきたい。弥生時代後期前半の竪穴住居跡 SH01 を切ることから、それ以後の時期だが、出土遺物がほとんどないために、詳細な時期決定ができない。周辺条里型地割の方向や後述の中世掘立柱建物等とも方向が異なることから、弥生時代後期後半から古墳時代の所産と言える。



第 127 図 溝跡 SD07 断面図

溝跡 SD11（第 114 図）

西側微高地（旧Ⅲ区）西端で検出した溝跡である。中世～近世に所属する土坑群に切られ、やや西に振って北に流下する。条里型地割の方向に近いことから、古代～中世と考えるが、溝跡の南端は不定形である。



第 128 図 掘立柱建物跡 SB14 平･断面図

第４節　古代以後

Ｂ地区では、西側微高地において合計６棟の掘立柱建物跡（SB14 ～ 19）を検出した。これらは、周辺条里型地割の方向に合致して正方位に主軸を設定するもの（SB14・16・18・19）と、北から 10° ほど東に偏る方向をもつもの（SB15・17）の二者がある。出土遺物は主に柱穴から出土しており、中世 14 ～ 15 世紀のものが多い。以下、遺構番号順に報告する。

掘立柱建物跡 SB14・SD13（第 128 図）

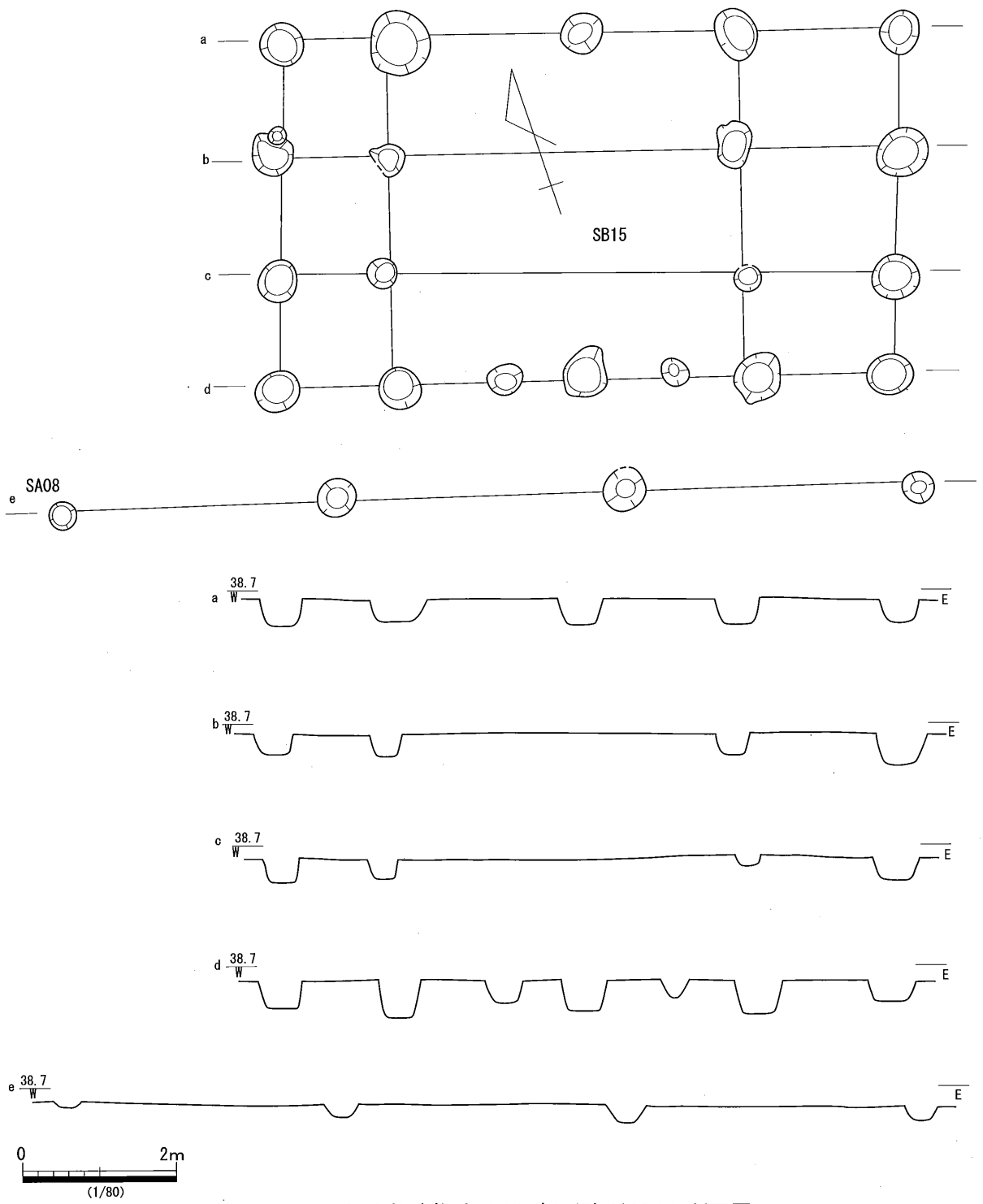
西側微高地調査区の南東端で検出した。主軸をほぼ東西に向け、桁行５間（9.5 m）、梁間２間（2.6 m）以上を確認した。桁行の柱間は 1.6 ～ 2.0 m で比較的均等に揃う。梁行柱間は 1.7 m である。柱穴の規模は直径 0.3 ～ 0.8 m と大小があるが、小規模なものは上部を削平されており、元来直径 0.8m ほどのやや大きめな柱穴であったものと推定される。深さは検出面から 0.5 m をはかる。梁間長が不明だが、調査範囲内で 24.7 ㎡の床面積があり、単純に２倍すると、約 50 ㎡の床面積となる。

建物跡東側柱筋から東に 2.3 m離れて、南北延長 3.4 m の雨落溝跡 SD13 を検出した。幅 0.6 m、深さ 0.1 m をはかる。溝跡は北側桁柱筋の延長線よりさらに 2.2 m北まで延びて収束する。妻側の屋根構造を反映する可能性が高い。出土遺物はなく、詳細な時期は明かでないが、周辺柱穴出土遺物から推測すると、中世 14 ～ 15 世紀に所属するものと考えられる。

掘立柱建物跡 SB15・柵列跡 SA08（第 129 図）

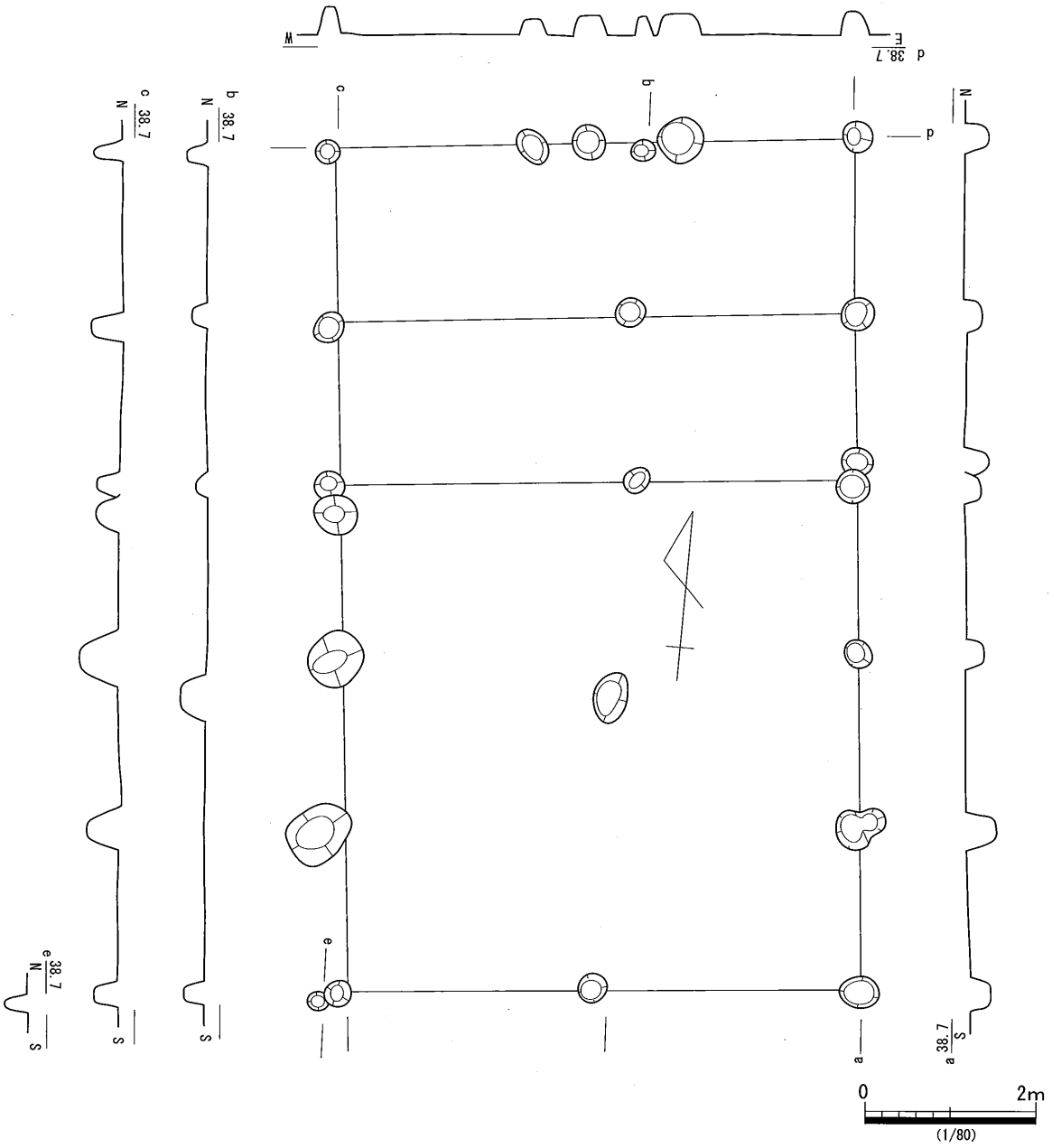
SB15 は西側微高地調査区の中央部で検出した掘立柱建物跡である。主軸が北から 10° ほど東に偏る方向と直交する東西棟の建物跡である。建物跡の南側に 2.4 m離れて、柵列跡 SA08 を検出した。

SB15 は桁行４間（8.0 m）、梁間３間（4.5 m）で床面積は 36 ㎡をはかる。東西の妻側柱から１間内側にそれぞれ２穴の束柱跡が付属する。また、南側桁行中央柱跡の東西に柱間小柱跡が備わる。



第 129 図 掘立柱建物跡 SB15・柵列跡 SA08 平・断面図

柱穴の規模は、側柱跡が直径 0.5 ～ 0.8 m、深さが検出面から 0.4 mである。束柱跡や柱間小柱跡は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さが 0.2 ～ 0.3 mと一回り小さい。柵列跡 SA08 は柱間が 3.7 ～ 3.8 mと広く、深さが 0.2 ～ 0.3 mと浅い。SB15 の南側側柱とは対応関係がないことから、庇跡とは考えにくい。一方で建物の南面に位置することから丈高の柵列跡は想定しづらい。したがって、建物跡基礎周辺の地盤整備等（たとえば犬走り状の盛土の土留めなど）に伴う可能性が高いと考える。柱穴出土遺物等より、中世 14 ～ 15 世紀に所属するものである。なお、SA08 は掘立柱建物跡 SB18 と重複する位置関係にある。

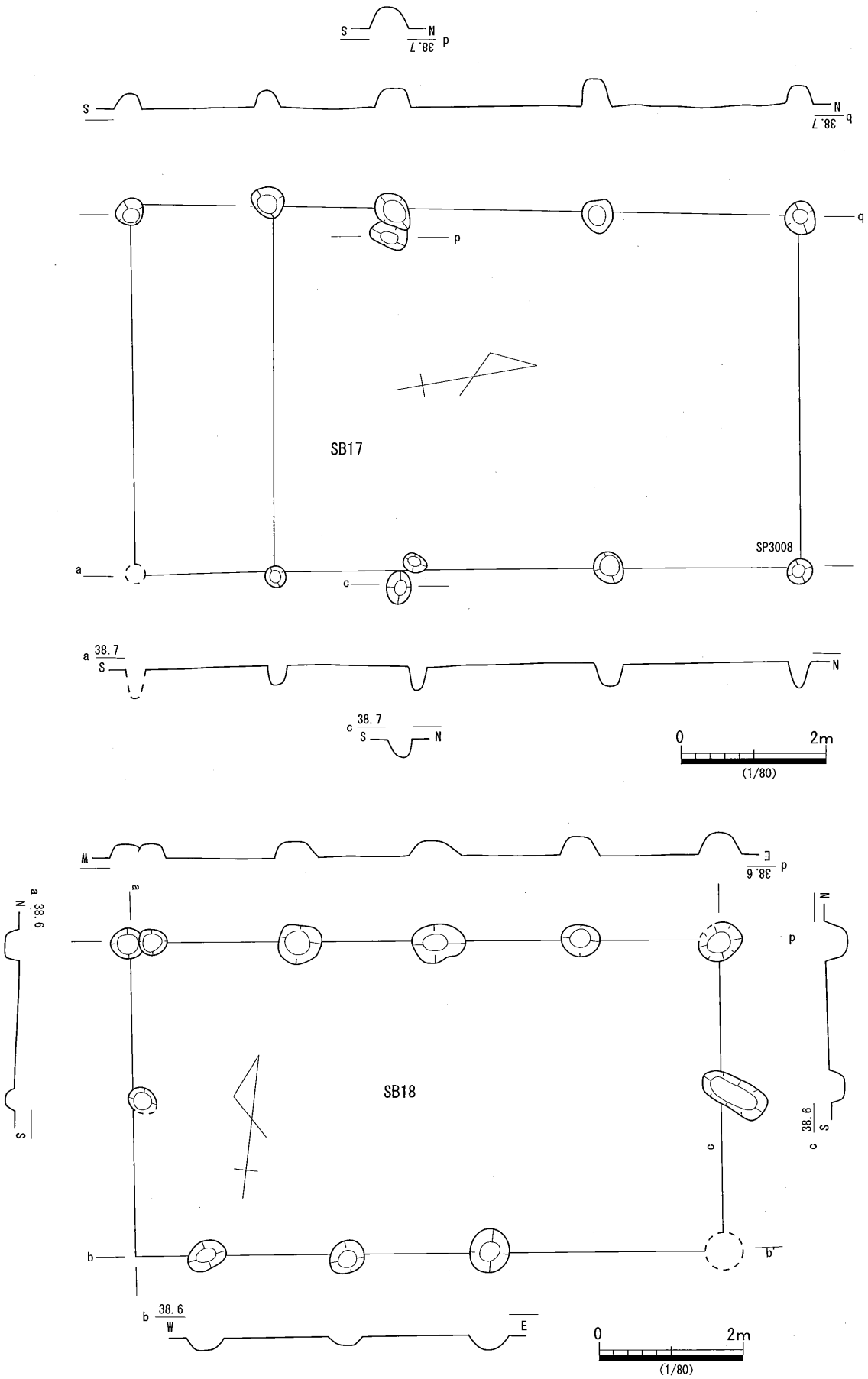


第 130 図 掘立柱建物跡 SB16 平・断面図

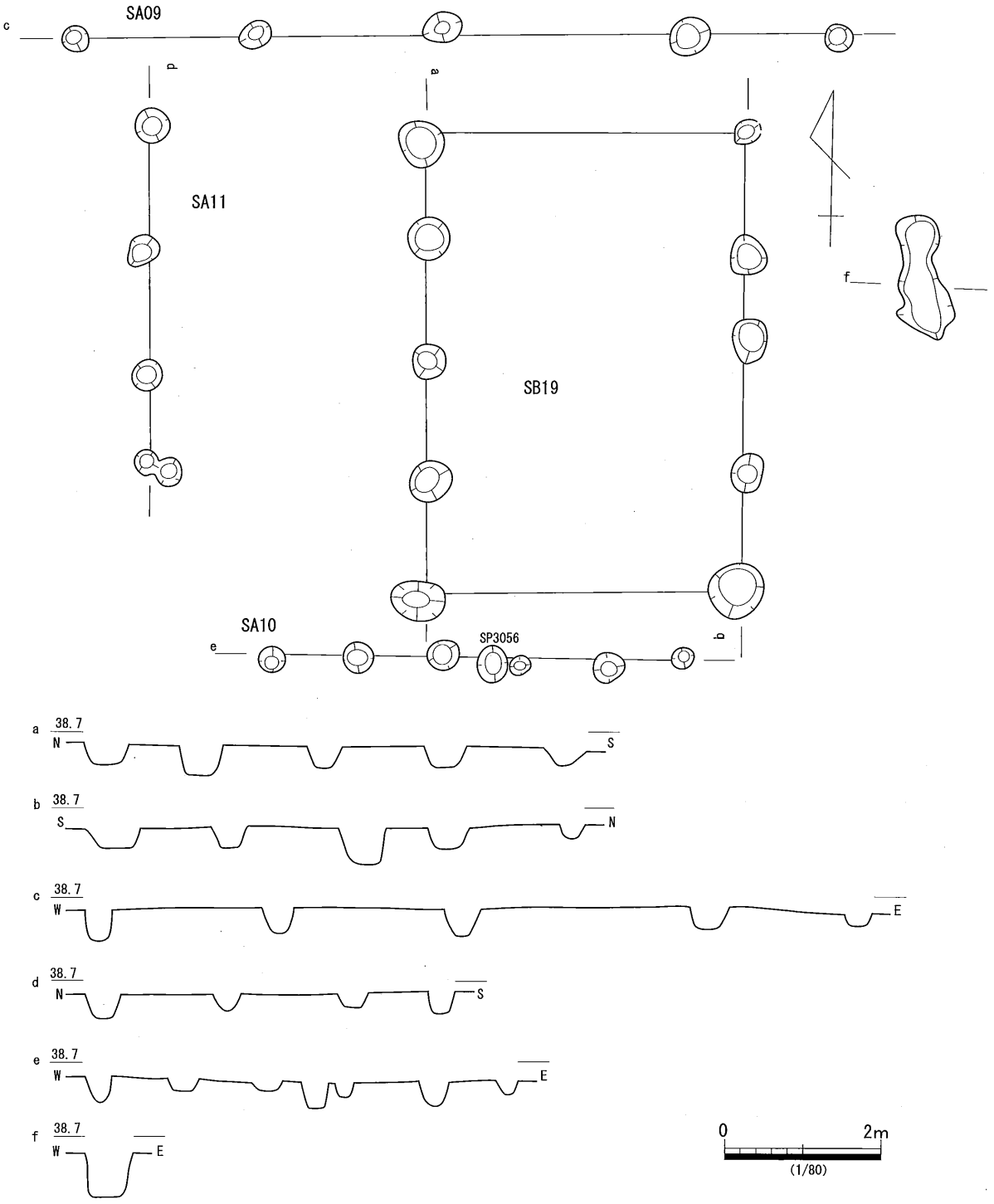
掘立柱建物跡 SB16（第 130 図）

西側微高地調査区の西側で検出した掘立柱建物跡である。主軸をほぼ南北に向ける。主軸方位は掘立柱建物跡 SB18 と合致する。桁行 5 間（9.9 m）、梁間 2 間（6 m）で約 60 ㎡の床面積をはかる大型建物跡である。側柱の柱筋は整うが、内側に散見される束柱跡は不揃いである。また、北側梁間中間柱跡は複数の柱跡があり、数回の据え直しが行われているようである。柱穴規模は大小不揃いだが、小規模なものは柱穴掘り形の検出が不完全であった可能性が高く、側柱についてはいずれも直径 0.5 ～ 0.6 mの掘り形を有した可能性が高い。

柱穴出土遺物等からみて、中世 14 ～ 15 世紀に所属するものである。



第 131 図 掘立柱建物跡 SB17・18 平・断面図



第 132 図 掘立柱建物跡 SB19・柵列跡 SA09 ～ 11平・断面図

掘立柱建物跡 SB17（第 131 図）

SB17 は西側微高地調査区の西側で検出した掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡 SB16 と重複する位置関係にある。主軸方位は北から 10° ほど東に偏る。主軸方位は掘立柱建物跡 SB15 にほぼ合致する。

桁行 4 間（9.2 m）、梁間 1 間（5.1 m）で、梁間柱間が長い。南東側隅柱は土坑 SK31 と重複し、土坑に後出するものと推定されるが、調査時に検出できていない。床面積は約 47 ㎡と大きいが、柱穴規模は直径 0.3 ～ 0.4 mと小さく、深さは 0.2 ～ 0.3 mと浅い。

出土遺物はないが、周辺建物跡と同様に中世 14 ～ 15 世紀に所属するものと考えられる。

掘立柱建物跡 SB18（第 131 図）

西側微高地調査区の中央南側で検出した掘立柱建物跡である。主軸をほぼ東西に向ける。主軸方位は掘立柱建物跡 SB16 とほぼ合致する。桁行 4 間（8.1 m）、梁間 2 間（4.3 m）で約 34.8 ㎡の床面積を有す。南東側隅柱は溝跡 SD07 と重複し、溝跡に後出するものと推定されるが、調査時には検出できていない。また南西側隅柱は調査当時には検出していない。削平を被ったものと考える。

出土遺物はないが、周辺建物跡と同様に中世 14 ～ 15 世紀に所属するものと考えられる。

掘立柱建物跡 SB19・柵列跡 SA09 ～ 11（第 132 図）

SB19 は西側微高地調査区の東側にて検出した掘立柱建物跡である。主軸をほぼ南北に向ける。主軸方位は掘立柱建物跡 SB14 と合致する。桁行 4 間（5.9 m）、梁間 1 間（4.0 m）で約 24.6 ㎡の床面積を有す。建物跡の北側に 1.2 m離れて柵列跡 SA09、南側に 0.8m 離れて柵列跡 SA10、西側に 3.5 m離れて柵列跡 SA11 が付属する。これらの付属柵列跡のうち SA10 は柱間が不揃いでピッチが短く、建物跡に近接することから、高い柵列とは考えにくく、SB15 に付属する SA08 と同様に、建物基礎に付属する土留め柱の可能性が考えられる。一方、SA09・11 は互いに柱間距離が異なるものの、柵列跡と見て矛盾はない。なお、建物跡東側には 2.2 m離れて、小規模な溝跡状の窪みが付属するが、建物跡との共存関係は明かでない。

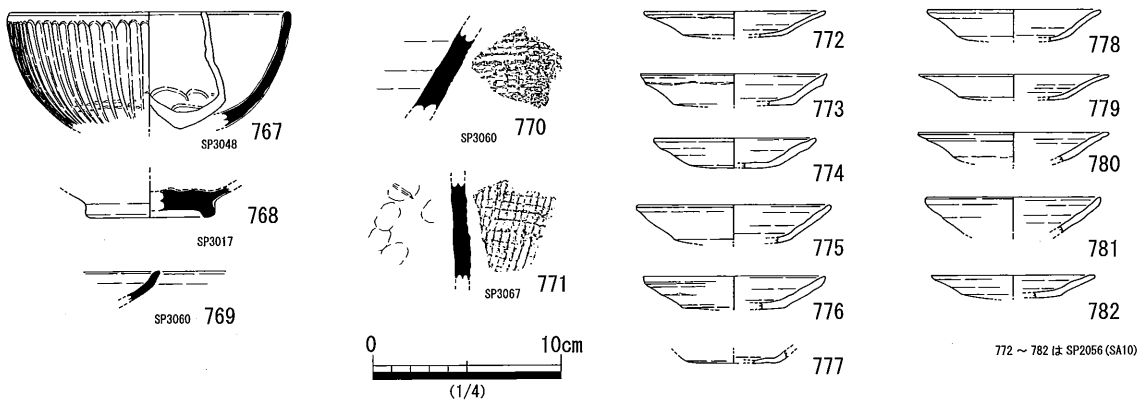
柱穴より中世 14 世紀後半の青磁片が出土しており、所属時期は 14 世紀後半から 15 世紀に位置づけられる。

柱穴跡出土の遺物（第 133 図）

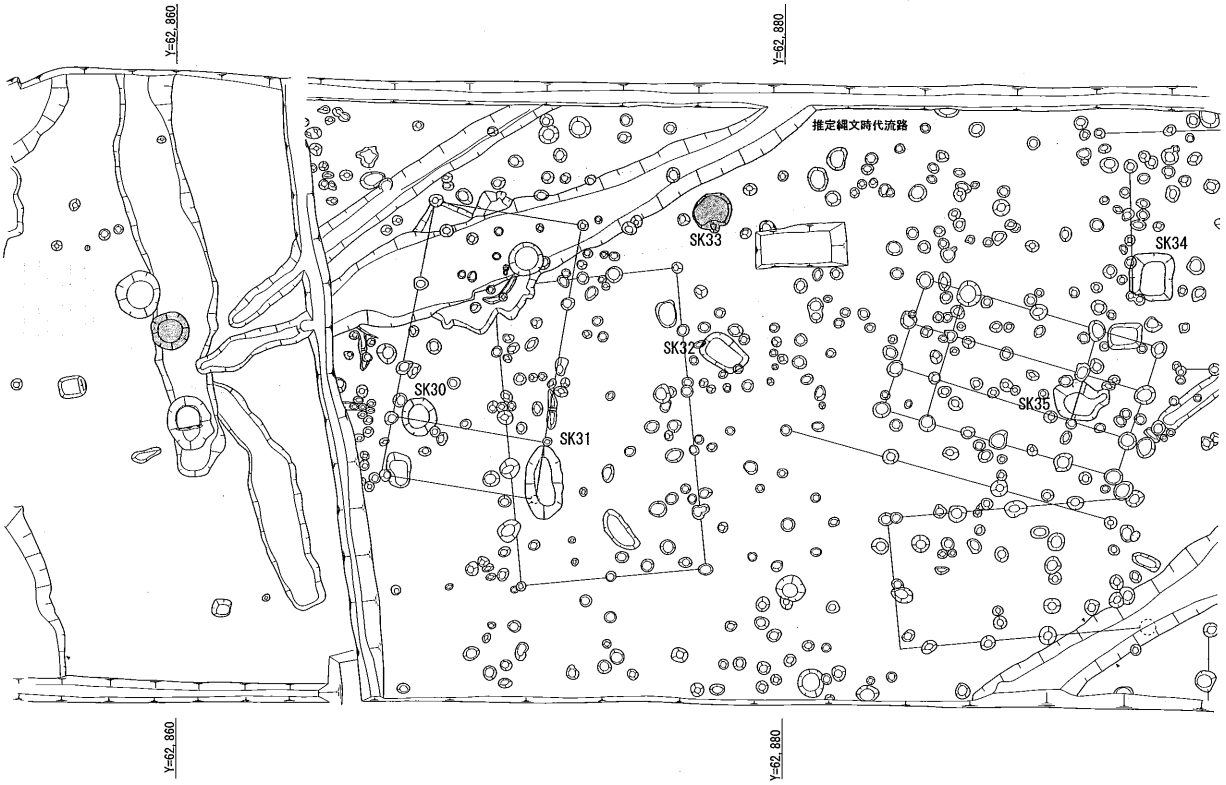
767 ～ 782 は建物や柱穴列より出土した遺物、また周辺で建物を構成しない柱穴出土の遺物を一括したものである。

767・768 は龍泉窯系青磁碗である。767 は外面に細かいピッチの蓮弁文が線刻され、内面見込みには花弁線刻を施す。768 は高台破片である。769 は須恵質の皿口縁部片である。口縁部が僅かに屈曲して内彎する形態である。770・771 は須恵質の甕もしくは壺体部片である。格子目叩きを施しており、讃岐十瓶山系須恵器と推定される。772 ～ 782 は土師器杯・小皿である。小皿は体部に強い回転ナデを施し口縁部が外反し、口縁部外端面に面取りを行うものが多い。

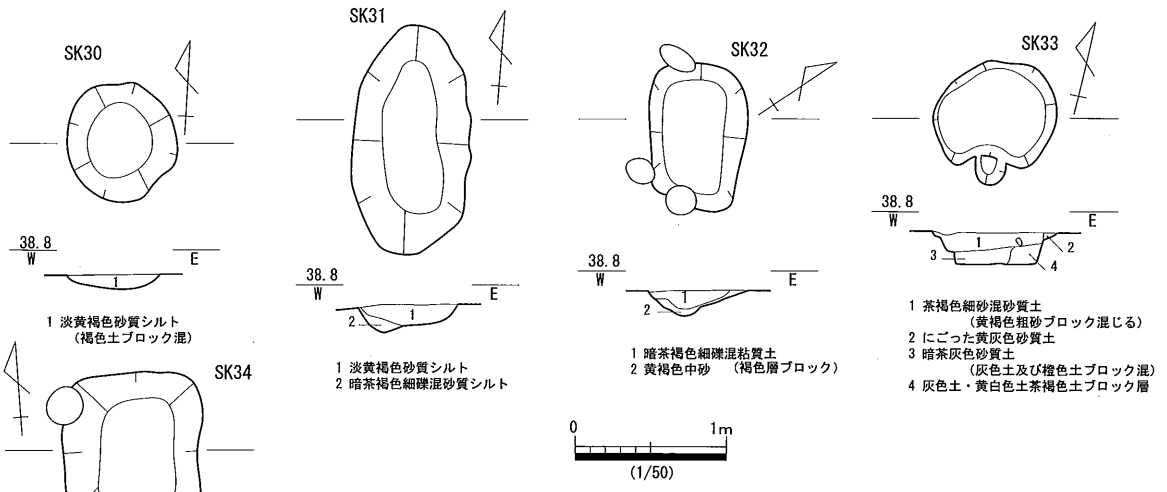
これらの出土遺物は 14 世紀後半から 15 世紀前半に所属するもので、報告した掘立柱建物跡の所属時期を示すものと考えられる。



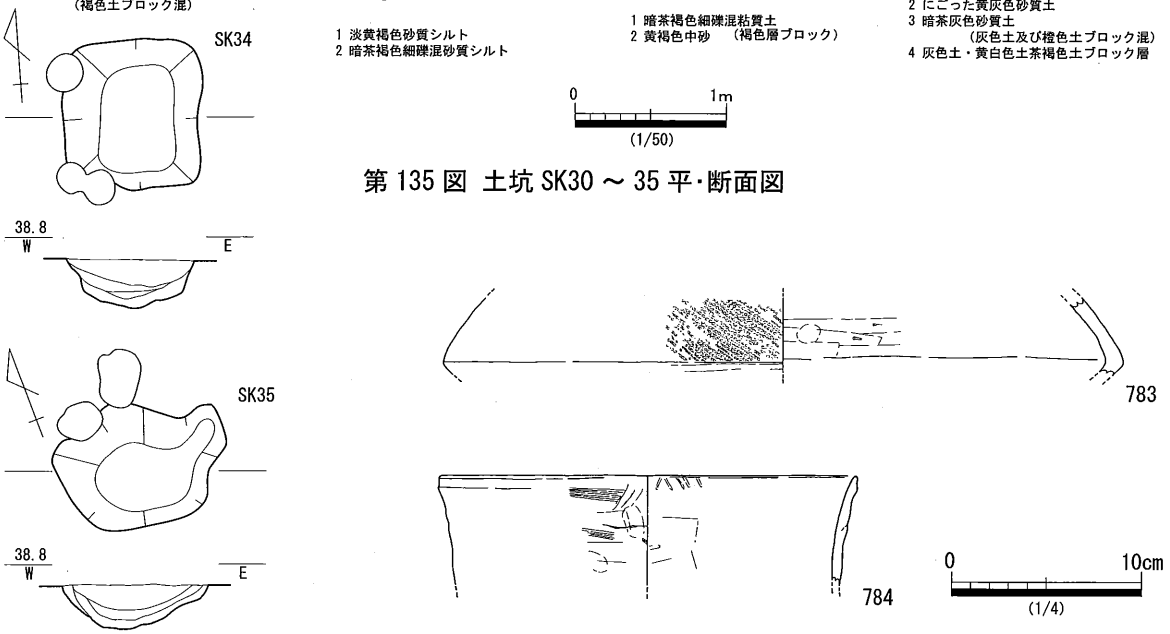
第 133 図 B 地区柱穴跡出土遺物



第 134 図　B地区土坑分布状況



第 135 図　土坑 SK30 ～ 35 平･断面図



第 136 図　土坑 SK33・36 出土遺物

土坑の分布（第134図）

B地区西側微高地上には、12基ほどの不定形土坑が不規則に分布する。これらは出土遺物がほとんどなく、所属時期が明らかでないものが多い。わずかに2基の土坑より縄文後期ごろの土器片が出土しているが、これらの土器片が出土した土坑は、図に示したように、流路跡SD05下層に想定された縄文期流路の推定域と重複して検出した遺構である。したがって、提示した出土土器は元来流路SD05下層内に存在したものが、土坑埋没時に混在した可能性が高く、土坑の所属時期を示すものではないと考える。以下、断面図を作成した6基の土坑を報告する。

土坑SK30

微高地西側で、掘立柱建物跡SB17と重複して検出した土坑である。直径1.2mの円形を呈し、深さは0.18mと浅い。断面形は皿状で、埋土は黄褐色系砂質シルトに褐色土ブロックを含む。

土坑SK31

微高地西側で、掘立柱建物跡SB16・17と重複して検出した楕円形土坑である。長さ2.4m、幅1.2m、深さ0.24mをはかる。断面形は皿状で、埋土は黄褐色系砂質シルト、部分的に茶褐色土砂質ブロックを含む。主軸は南北方位をとる。

土坑SK32

微高地西側で、掘立柱建物跡SB16の東側に隣接して検出した隅丸長方形土坑である。長さ1.0m、幅0.7mで、深さは0.16mをはかる。断面形は皿状で、埋土は茶褐色系粘質土に細礫が混じる。主軸は北西－南東の方位をとる。

土坑SK33

微高地西側で、縄文期の流路（SD05下層）と重複して検出した土坑である。直径0.82mの円形を呈し、深さは0.21m。断面形は逆台形状で、埋土は茶褐色系粘質土。中世と考えられる小柱穴と重複し、それに先行する。埋土中より縄文土器片783が出土した。

土坑SK34

微高地中央で、掘立柱建物跡SB19に付属する柵列跡SA11の南端に接して検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.0m、短辺0.9m、深さは0.32mで、断面形は半円状、埋土は茶褐色系粘質土である。主軸は正方位で、建物跡SB19に合致する。建物跡に付属する可能性も考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

土坑SK35

微高地中央で、掘立柱建物跡SB15と重複して検出した不定形の土坑である。長辺1.15m、短辺0.8m、深さは0.3mで、断面形は皿状、埋土は茶褐色系粘質土である。出土遺物がなく、詳細は不明である。

土坑SK36

微高地西側で検出した土坑である。平面形は円形で、直径1.1m。縄文期の流路（SD05下層）とも重複する。埋土中より縄文土器片784が出土したが、元来、SD05に伴う土器の混在と考えられる。

その他の土坑

不定形の土坑が多数みられたが、いずれも出土遺物がなく、時期は不明である。

B地区東側河川域の遺構（第137図）

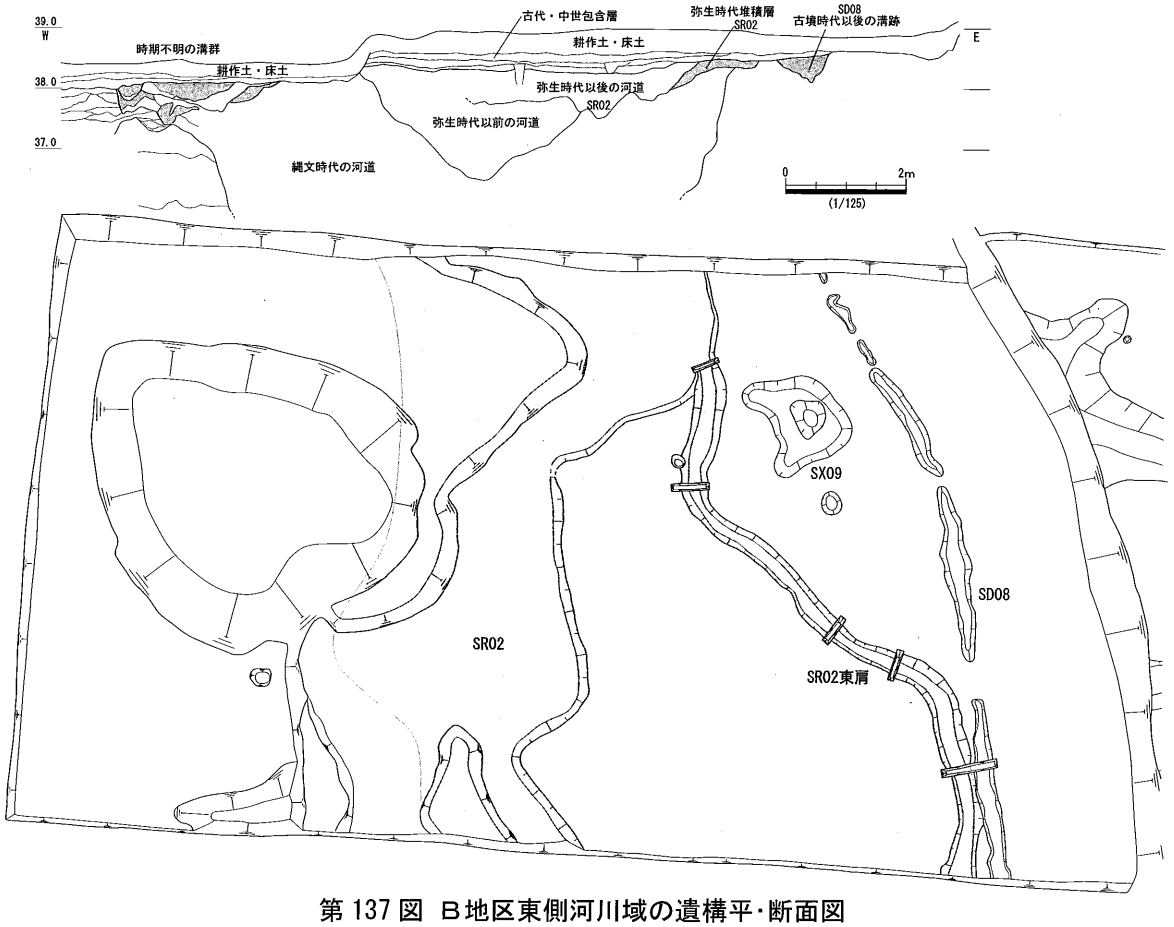
B地区東側河川域は、A地区西丘陵西肩部の古墳（ST08～10）直下に存在する縄文時代以後の河川跡SR02と、市道を挟んで西側のSR02以前の幅広い河川堆積層を基盤として不規則に分布する窪地遺構群の2カ所にわかれる。このうち、窪地遺構については、調査時に溝跡として調査を実施したが、人工的に掘削された痕跡に乏しいものであった。便宜上、ここでも溝跡として報告する。

河川跡SR02・SD08・SX09（第137・138図）

B地区東端を北流する幅約15ｍの自然河川跡である。上部から下部まで砂礫が厚く堆積しており、部分的に黒色砂質シルト層がみられる。河川東肩部の黒褐色シルト層より弥生時代前期の遺物が出土した。その層を切り込む堆積層からは、弥生時代中期～古墳時代後期の土器が出土している。これらの堆積層より下では、縄文土器と推定される小片が出土した。検出面から深さ2.5ｍまでトレンチを掘り下げたが、河床跡を確認するには至っていない。

断面観察によれば、河川跡の西側肩部に埋没の最終段階ごろの溝跡が確認できるが、平面的には検出できていない。なお、河川跡に沿って掘削された溝跡SD08より、初期須恵器を含む古墳時代中期～後期の須恵器が出土している。河川跡埋没途上に、東肩部に掘削された溝跡と考えられるが、A地区西丘陵の古墳から転落して混在した遺物も含まれる。また、溝跡SD08と河川跡SR02の間に不定形な窪みSX09がある。時期不明である。

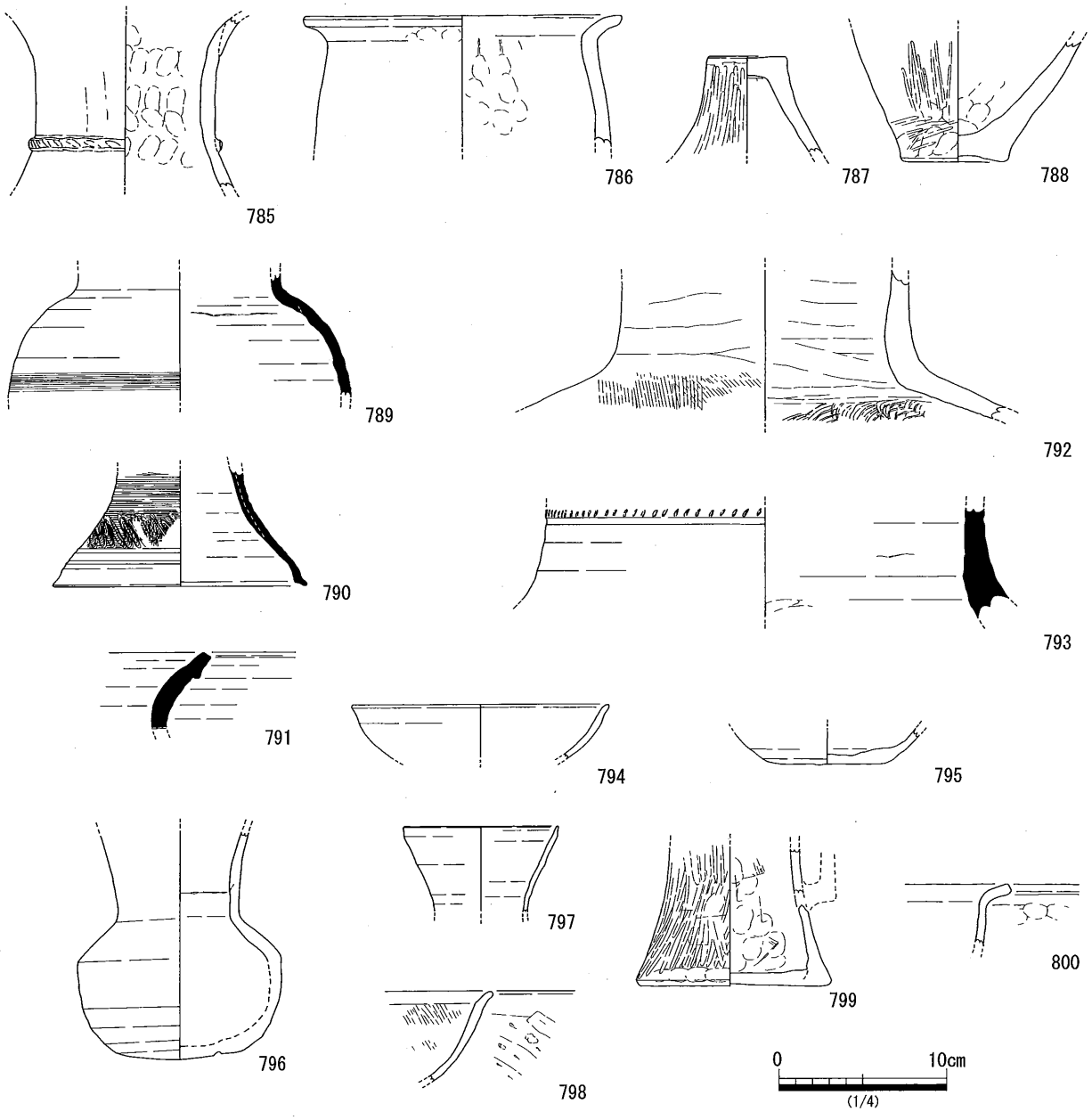
785～788は、河川跡東肩部の弥生時代前期堆積層より出土した土器である。785は頸部が長い広口壺で、頸部下端に貼付突帯文を施す。786は口縁部が如意状に外反する甕である。787は甕蓋、788は外面にヘラミガキを施す壺底部である。弥生時代前期後半に位置づけられる土器群である。



第137図 B地区東側河川域の遺構平・断面図

789～795は河川跡堆積層より出土したもので、5～7世紀の土器を含む。789は球胴部肩に櫛描直線文を1条施し、太めの頸部が直線的に立ち上がる形態の須恵器壺である。淡灰色を呈し焼成はやや甘い。肩部外面は丁寧な回転ナデを施し、内面は当て具痕をナデ消す。形態的にみて5世紀前半代の初期須恵器に該当するものと考えられる。胎土分析の結果、高松市三谷三郎池西岸窯跡産であることが推定された。790は5世紀代の須恵器器台。全体的に薄手の下半部片である。外面に精緻な櫛描波状文を施す。胎土分析の結果、和泉陶邑窯跡産であることが推定されている。791は5世紀代の須恵器壺の口縁部片である。口縁端部からやや下がって断面三角形突帯を作り出す。792・793は6世紀代の大型壺。792は肩部片で、内面に当て具痕が明瞭に残る。793は頸部片で、外面に小さな刻みを巡らせる。794は6世紀前半代の土師器鉢である。795は7世紀中葉の須恵器杯身底部片である。底面はヘラ切り後未調整。

796～800は河川跡堆積の上層より出土した遺物である。796は7世紀前半の須恵器瑞。797は須恵器細頸壺口縁部片と推定される。798・800は弥生時代中・後期の土器である。



第138図 B地区東側河川域出土遺物

河川跡 SR03・溝跡 SD09・溝跡 SD10（第 114・115 図）

市道より西側では、河川跡 SR02 に先行する幅広い河川跡の堆積層が遺構の基盤となる。基盤層は黄色シルトもあれば、軟弱な灰白色砂の場合もあり、一様ではない。基盤土層の土質に応じて、弥生期以後に形成されたとみられる窪地が溝状に散在する。

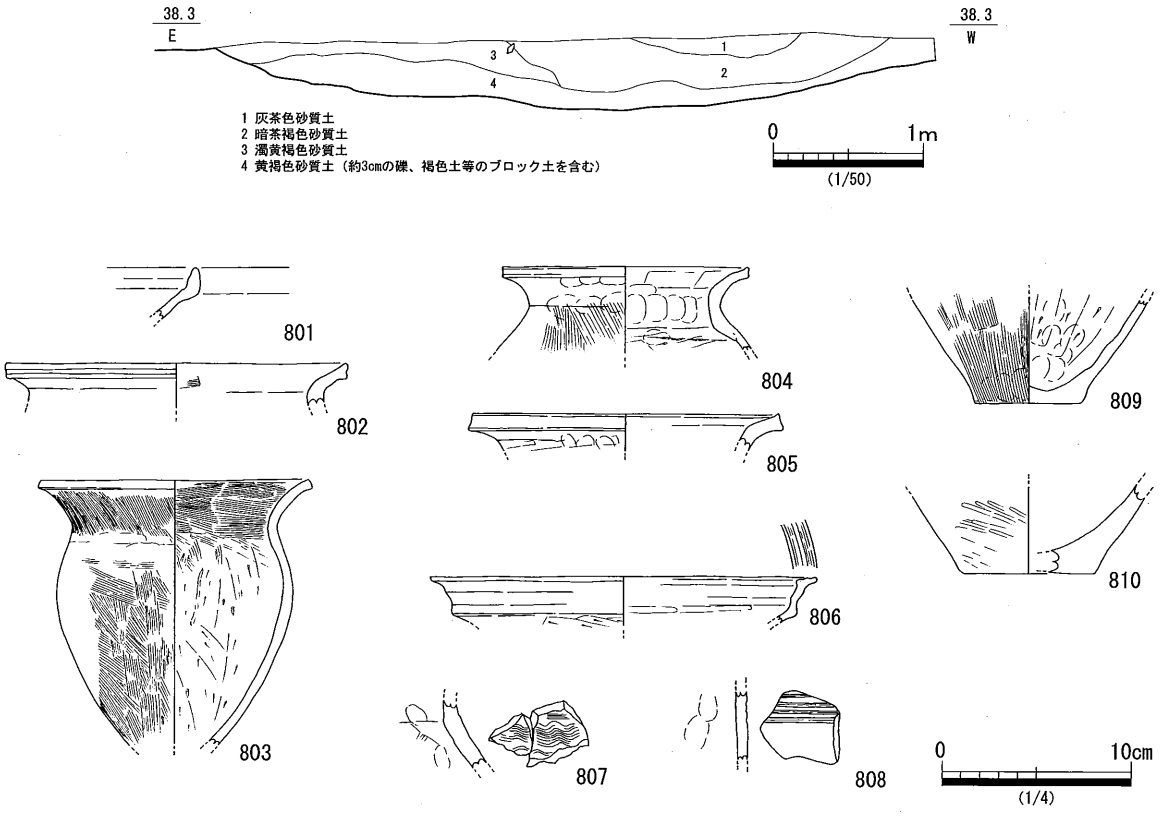
第 115 図の断面 B-2 に示した溝跡 SD09 は、褐色系の砂質シルトで埋没する窪地で、南西から北東方向に溝状に伸びる。埋土中より弥生時代後期の鉢（800）が１点出土している。

溝跡 SD09 と平行する溝跡 SD10 は出土遺物がないが、堆積状況が SD09 に類似しており、近い時期のものと推定できる。これらの溝状の窪地は、おおむね灰色砂層上に存在する。

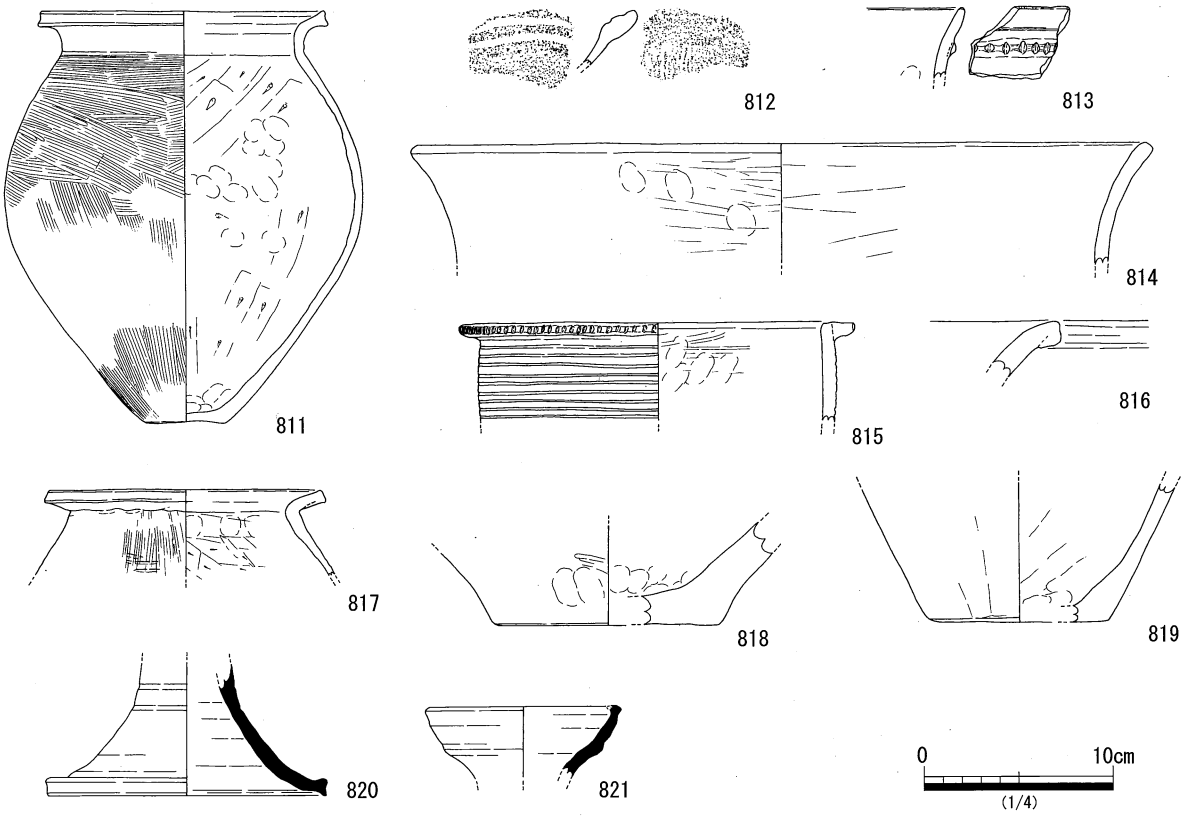
一方、当該調査区北西の窪地は、黄色シルト層を基盤とし、黒色粘質シルトが堆積する河川状窪地である。調査区北半でのみ検出しており、最大幅は８ｍ、深さは 0.7 ｍ、南に浅くなり収束する。出土遺物がなく、時期は不明である。

不明遺構 SX10（第 139 図）

Ｂ地区西側微高地の南西端で検出した不定形な落ち込み遺構である。深さ 0.5 ｍで浅い皿状の断面を呈す。基盤の砂層をブロック状に巻き込んだ黄褐色系土が堆積する。出土遺物には弥生～中世までの時期幅があり、中世以後の整地に伴う遺構とみられる。801 は東播系須恵器こね鉢口縁部片である。14 世紀末ごろの所産。802・803 は古墳時代の土師器である。804 ～ 810 は弥生土器である。807・808・810 は弥生前期～中期初頭、804 ～ 806・809 は弥生後期前半である。以上の出土遺物のうち、弥生土器は溝跡 SD05 上層と溝跡 SD06 に対応する時期の土器群である。SX10 掘削された際にこれらの弥生土器が混入したとすれば、溝跡 SD05・06 は元来 SX10 付近まで伸びていた可能性が高い。



第 139 図 不明遺構 SX10 断面図、出土遺物



第 140 図　B 地区包含層等出土遺物 (1)

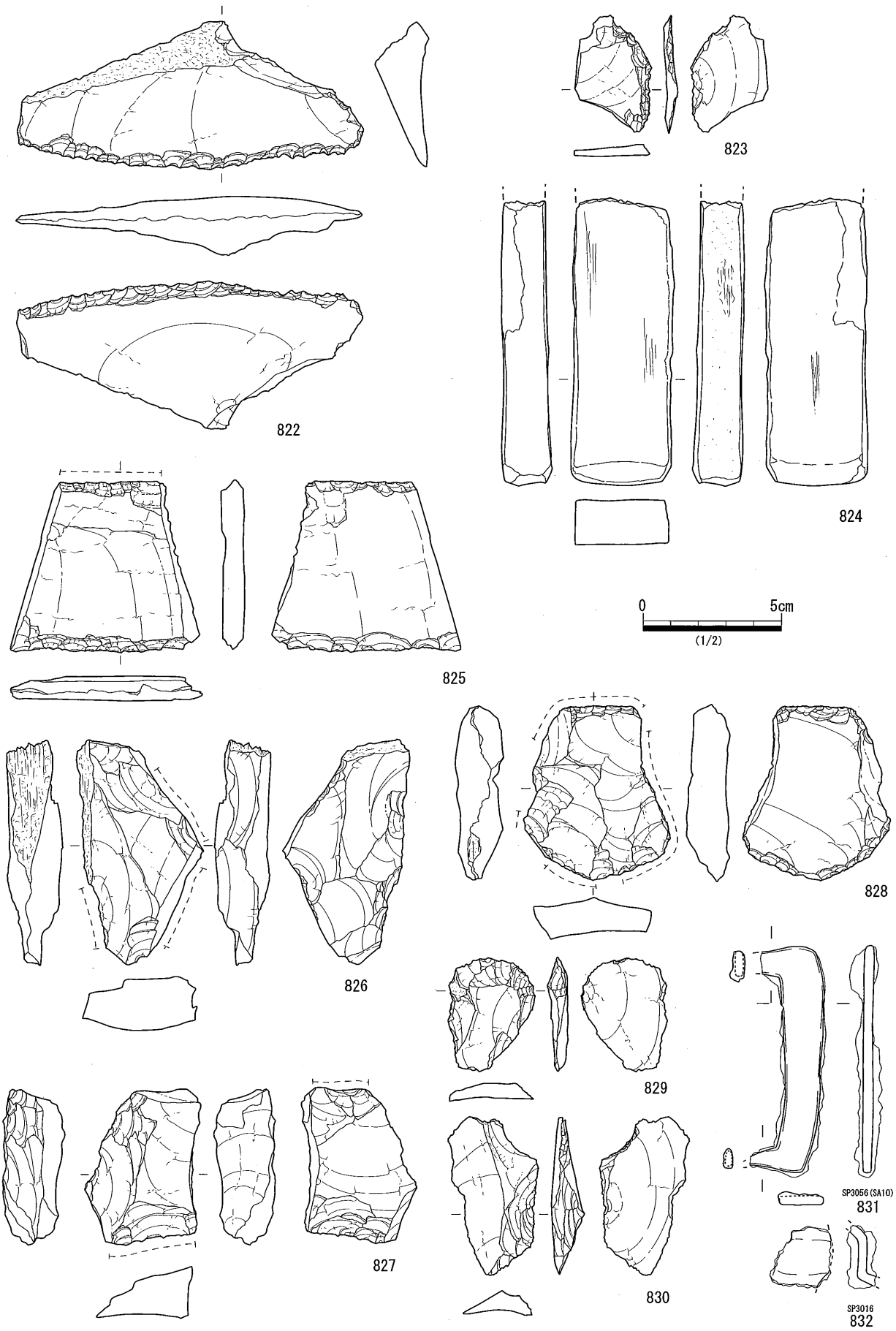
B 地区包含層出土遺物（第 140・141 図）

811 はＢ地区西側微高地北西部の調査区壁面で出土した土器である。断面観察から土坑状の遺構に伴うものと考えられるが、遺構の広がりは不明。薄手平底の甕である。胴部内面は全面ヘラ削り調整、外面は主に横方向のハケ調整を施す。溝跡 SD06 出土土器同様に後期前半に位置づけられる。

812 は縁帯文系の縄文時代後期土器（彦崎ＫⅠ式）、813 は口縁部から大きく下がって刻目突帯を貼付する突帯文系土器で、弥生時代前期前半古相に位置づけられる。814 は縄文時代後晩期の深鉢口縁部片である。815 は弥生前期の逆Ｌ字状口縁の甕、816 は弥生前期の壺口縁部片である。817 は弥生後期甕で内面ヘラ削りにより薄手に仕上げる。820・821 は 7 世紀代の須恵器である。

822 ～ 830 はＢ地区各所で出土した石器である。822 は側面に自然面を留めた横長剥片の表裏末端に丁寧な調整加工を施して直線刃を形成するサヌカイト製削器である。823 はサヌカイト剥片の側縁に細かな調整加工を施すもので、石鏃等小型器種の未製品と推定される。824 は西側微高地で出土した砥石である。気泡が多い黄白色凝灰岩を素材として、表裏面および側面に砥面を備える。825 は溝跡 SD09 で出土した結晶片岩製打製石庖丁片である。826 ～ 830 はサヌカイト製の剥片･石核類を一括した。826 ～ 828 は側縁に両極打撃に伴う敲打痕が顕著にみられる石核である。826 は二側縁に縞状風化の自然面を留め、対する側縁は分割面である。分割面と表裏面との間の稜線に顕著な敲打痕が残る。827 は楔状石核で、上下縁に敲打痕、側縁に分割面（裁断面）が残る。828 は周縁の大部分に敲打痕を留める。829・830 は剥片である。829 は点状打点で打瘤が明瞭でない。830 は平坦打面で打瘤が比較的明瞭である。このうち 829 は SR02 弥生時代前期層より出土したものである。

831・832 はＢ地区西側微高地で出土した鉄器片である。



第 141 図　B地区包含層等出土遺物 (2)

第５章　Ｃ地区の調査

第１節　概要

Ｃ地区は当遺跡西端に位置する調査区で、地形的には丘陵部に位置したＡ地区や、河川域（低地域）に属したＢ地区と異なり、自然堤防による微高地が広範に展開する土地条件を有する。当遺跡近隣に所在する陵遺跡や辛立遺跡と同様の地形条件である。

土地条件を反映して、当調査区では主に西側を中心として弥生期の竪穴住居跡や古墳時代の掘立柱建物跡などの居住遺構を検出した。また、その間を縫って走行する小河川跡からは土器等の多量の生活廃棄物が出土した。

ただし、確認した柱穴等の遺構埋土中には、ほとんど遺物が含まれていない。当時の生活面は表層の土壌化が想定できるが、土壌化層の直下は自然堤防の構成層である黄灰色系の軟弱な砂であり、壁面崩落等により、埋没する時間が早く、遺物の流入は上部に限られたものが多かったと推定できる。調査により検出した遺構は、その多くが上部を削平されており、確認できる遺構埋土は、その遺構の堆積層の下部である。したがって、遺構埋土は柱痕が不明瞭で流入遺物をほとんど含まない崩落堆積層が主体であったものと考える。これにより、調査時に遺構かどうか判断しづらいものも数多くあった。しかし、河川内に廃棄された多量の遺物からみて、至近に居住遺構等が存在する可能性が高い。このことを考慮し、建物跡や住居跡を構成しそうな遺構を最大限評価して遺構分布の復元を行った。

なお、Ｃ地区東側の調査区（調査時のⅣ区）には弥生～古墳時代の河川跡と古代～中世の溝跡群があり、西側の小河川跡と比べて出土する土器類が少ない。居住域として活用された微高地の東限に近いものと言える。また、河川跡を中心に、香川県内では出土例が少ない軟質韓式系土器がまとまって出土した。

以下、土層序、縄文時代、弥生時代前期～中期前半、弥生時代後期～古墳時代中期、古墳時代後期以後の順で住居跡・建物跡・溝跡を報告した後、河川跡の報告を行う。

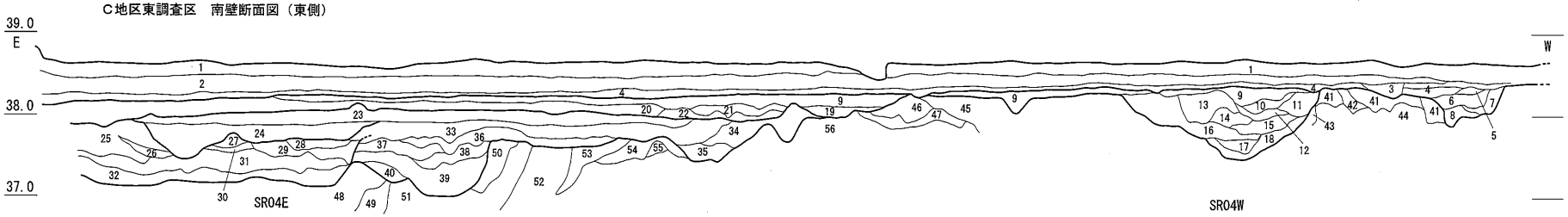
第２節　土層序

調査前の地形はＣ地区東端の標高が約 38.7 ｍ、西端が約 40.2 ｍで、1.5 ｍの高低差がみられる。最高所のＣ地区西側微高地域では竪穴住居跡や建物跡が多く、最も低いＣ地区東調査区東端には河川跡 SR04 が北に流下する。

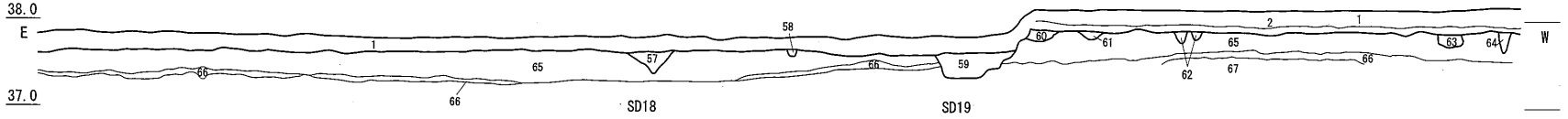
Ｃ地区東調査区（第 142 図）

当該地はＢ地区西側の幅広い河川堆積層と同様に自然堤防を構成する河川堆積層を基盤とする（41～56・65～67 層）。遺構検出面は細砂やシルト層が主体で、比較的堅い土質の堆積層の上面において河川跡等の遺構を検出した。河川跡 SR04 は検出面から約１ｍの河底まで、砂礫層とシルト層の交互堆積で、最下部に黒色粘土層（32 層）が堆積する。交互堆積層は、断面記録からみると最低２回の流路変更が想定できる。この上部にある 23・24 層は幅約 15 ｍの河川域全体を覆う堆積層で、調査時には SR04 上層として出土遺物を取り上げている。また、それらの遺物には、断面図の６～18 層に示した溝状の河川跡 SR04 Ｗ（後述）の上部を覆う 9・19～22層 出土遺物も混在している。SR04 Ｗより西側は、シルト質の黄灰白色粗砂（65 層）が遺構面となり、Ｃ地区西側調査区に続く。

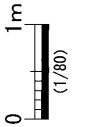
C地区東調査区　南壁断面図（東側）

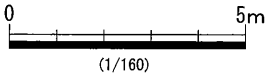


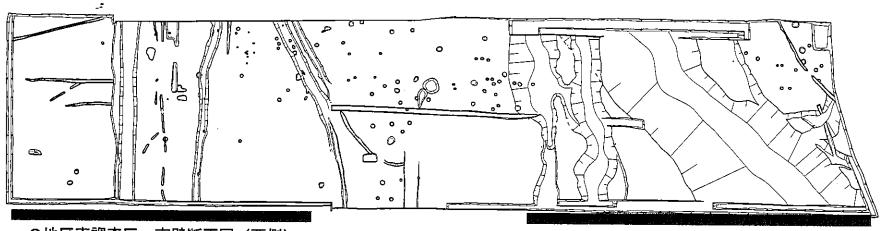
C地区東調査区　南壁断面図（西側）



1 耕作土
2 灰橙色砂質土
3 灰色砂礫
4 橙色砂質土
5 茶褐色粗砂
6 灰黄白色砂
7 灰褐色砂質土
8 暗茶灰色砂質土
9 淡灰褐色砂
10 茶褐色粗砂
11 茶黒色砂質土
12 灰白色砂（礫混）
13 淡茶灰色砂
14 淡黒灰色砂（灰白色砂混）
15 黒褐色粗砂
16 暗褐色砂
17 灰黄褐色礫層
18 紫褐色粗砂
19 暗褐色砂礫
20 淡灰褐色砂
21 淡茶褐色砂質シルト
22 乳灰黄色中砂
23 淡灰茶色砂
24 灰青色粘土
25 暗茶褐色砂
26 灰褐色砂
27 灰黄色砂
28 乳灰黄色粗砂
29 淡灰青色砂質シルト
30 濁灰青色砂質土
31 黄灰白色粗砂～砂礫
32 黒色粘土層
33 濁灰褐色砂
34 暗灰褐色中砂
35 灰褐色砂礫
36 黒灰青色砂質土
37 灰青色シルト（灰白色砂ラミナ含）
38 灰白色砂
39 明灰青色砂質シルト
40 黄橙色粗砂
41 灰色砂礫
42 暗灰色砂質土
43 暗褐色砂質土
44 黄褐色粗砂
45 黄灰白色細砂
46 濁黄灰色粗砂
47 茶褐色粗砂（礫混）
48 灰褐色砂礫
49 灰青色砂質シルト
50 黒色粗砂（シルト含）
51 濁黄褐色粗砂
52 黄灰白色砂
53 漆黒色粗砂
54 黒灰色砂
55 灰白色粗砂
56 淡黄緑色細砂
57 黒色砂質土（灰色粗砂ラミナ含む）
58 黒色粗砂（シルト含）
59 暗灰色砂質土
60 灰褐色粗砂
61 灰褐色粗砂
62 黒色粗砂（シルト含）
63 黒褐色粗砂
64 黒色粗砂（シルト含）
65 黄灰白色粗砂
66 灰白色砂質シルト
67 灰褐色粘質シルト



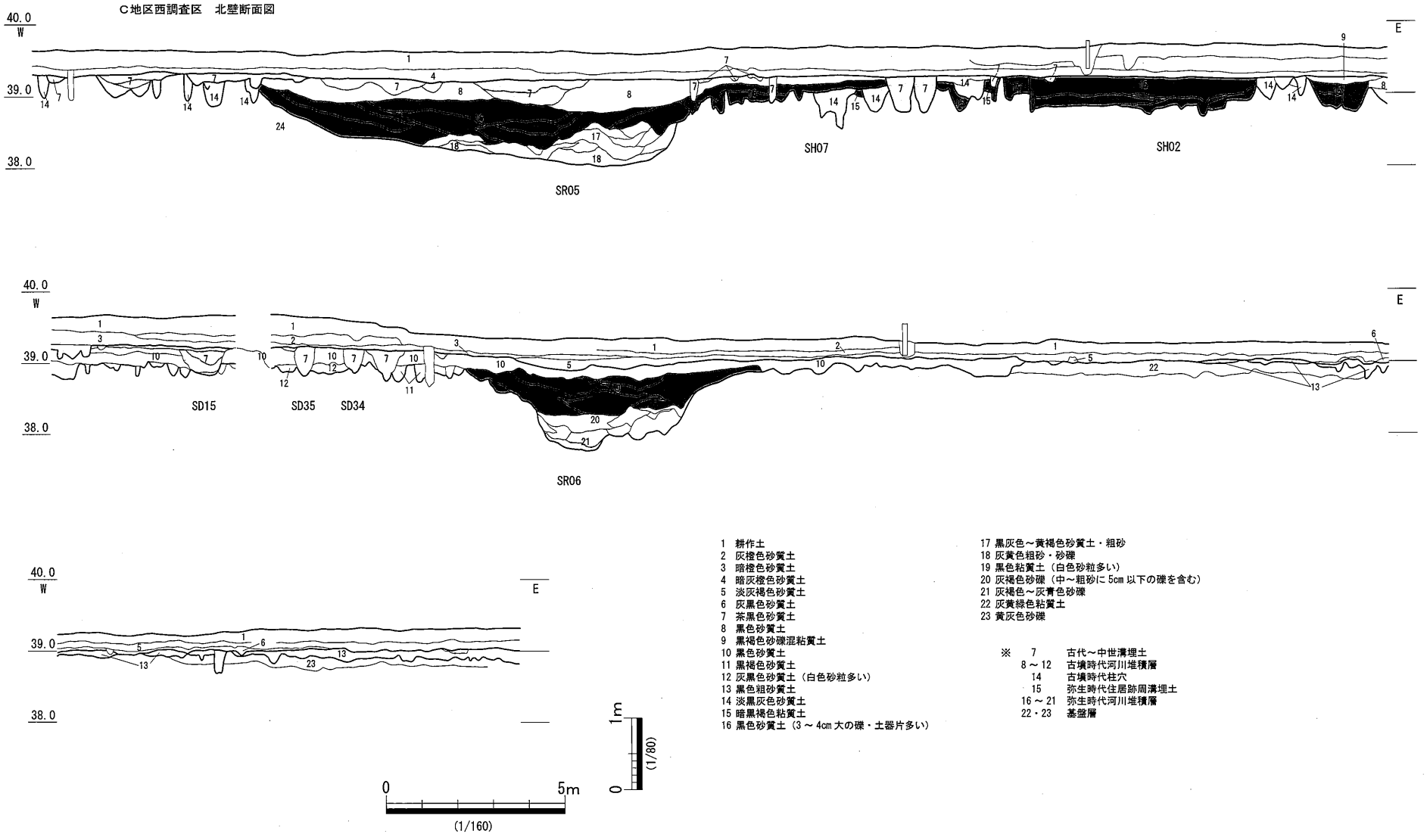




C地区東調査区　南壁断面図（西側）

C地区東調査区　南壁断面図（東側）

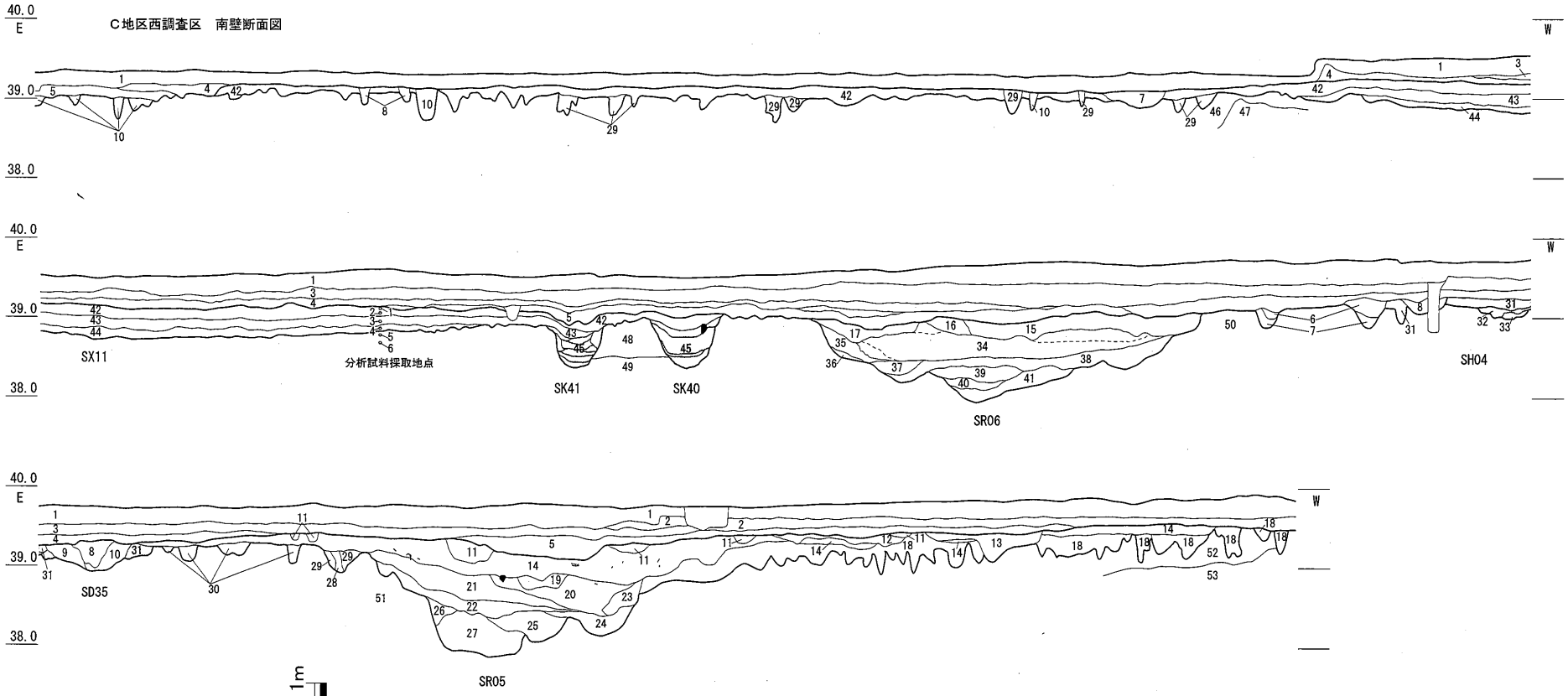
第 142 図　C地区土層断面図 (1)



1 耕作土
2 灰橙色砂質土
3 暗橙色砂質土
4 暗灰橙色砂質土
5 淡灰褐色砂質土
6 灰黒色砂質土
7 茶黒色砂質土
8 黒色砂質土
9 黒褐色砂礫混粘質土
10 黒色砂質土
11 黒褐色砂質土
12 灰黒色砂質土（白色砂粒多い）
13 黒色粗砂質土
14 淡黒灰色砂質土
15 暗黒褐色粘質土
16 黒色砂質土（3～4cm大の礫・土器片多い）
17 黒灰色～黄褐色砂質土・粗砂
18 灰黄色粗砂・砂礫
19 黒色粘質土（白色砂粒多い）
20 灰褐色砂礫（中～粗砂に5cm以下の礫を含む）
21 灰褐色～灰青色砂礫
22 灰黄緑色粘質土
23 黄灰色砂礫

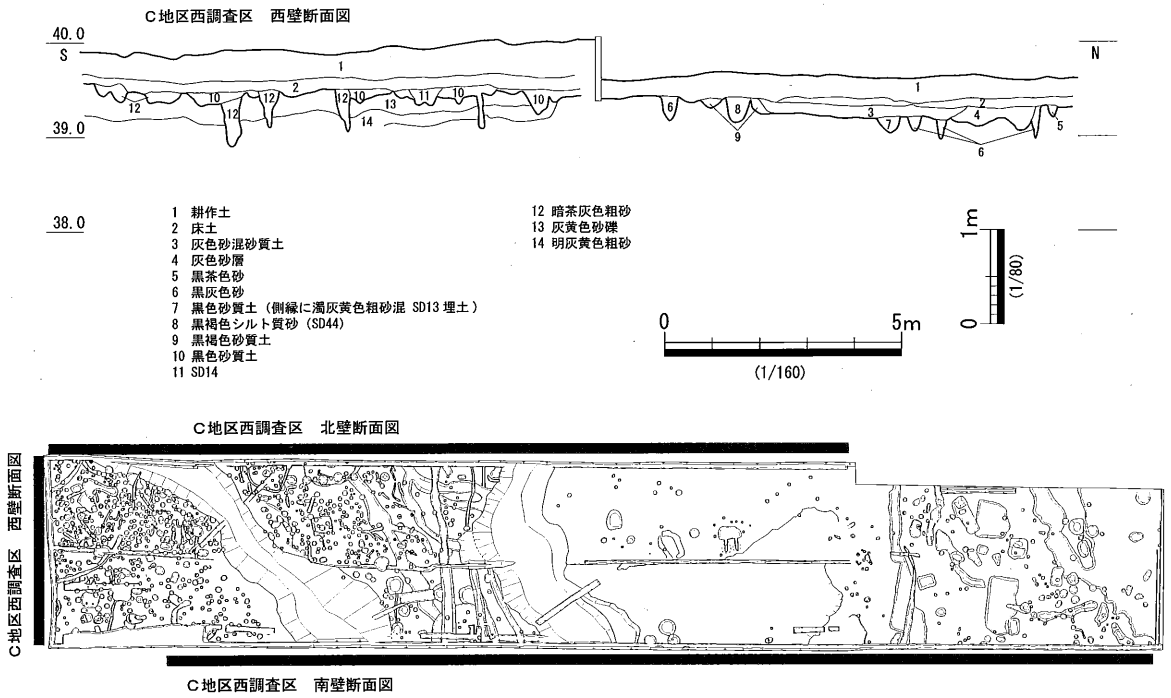
※ 7 古代～中世溝埋土
8～12 古墳時代河川堆積層
14 古墳時代柱穴
15 弥生時代住居跡周溝埋土
16～21 弥生時代河川堆積層
22・23 基盤層

第143図 C地区土層断面図 (2)



1 耕作土
2 灰橙色砂質シルト
3 橙色砂質シルト
4 橙茶色粗砂
5 暗黒褐色粗砂
6 黒色中～粗砂
7 黒色～暗灰色粗砂（灰色砂ブロック混）
8 黒～茶褐色粗砂（黒色粗砂ブロック混）
9 黒褐色粗砂（砂礫混）
10 黒褐色粗砂
11 暗灰褐色粗砂
12 灰色砂礫
13 濁茶褐色粗砂
14 黒色砂質土
15 黒灰色礫混粘質土
16 暗灰褐色砂礫
17 黒色粘土
18 暗茶灰色粗砂
19 黒灰色粗砂
20 灰色砂礫
21 黒灰色粗砂
22 黒褐色粗砂
23 黒灰色砂礫
24 黒色砂質土
25 明灰色砂礫
26 黒色粘土
27 淡黄色中砂
28 淡黒灰色砂質土
29 灰褐色粗砂
30 灰茶褐色粗砂
31 黒色砂質土
32 漆黒色粘質土（炭層）
33 灰黄白色中砂
34 黒色～茶灰色砂礫
35 暗灰緑色粘土
36 暗灰色粗砂
37 黒色粗砂
38 暗灰褐色砂礫（2cm未満の礫）
39 黒灰色砂礫
40 淡灰褐色砂礫
41 暗灰黄色砂礫
42 黒褐色砂質土
43 黒色粘土
44 暗褐色粘土
45 個別遺構図参照
46 灰黄白色粗砂
47 淡灰褐色粗～中砂
48 灰緑色粘土
49 灰緑色中砂
50 灰黄白色粗砂
51 明灰黄色砂質土
52 灰黄色砂礫
53 明黄灰色粗砂

第144図　C地区土層断面図 (3)



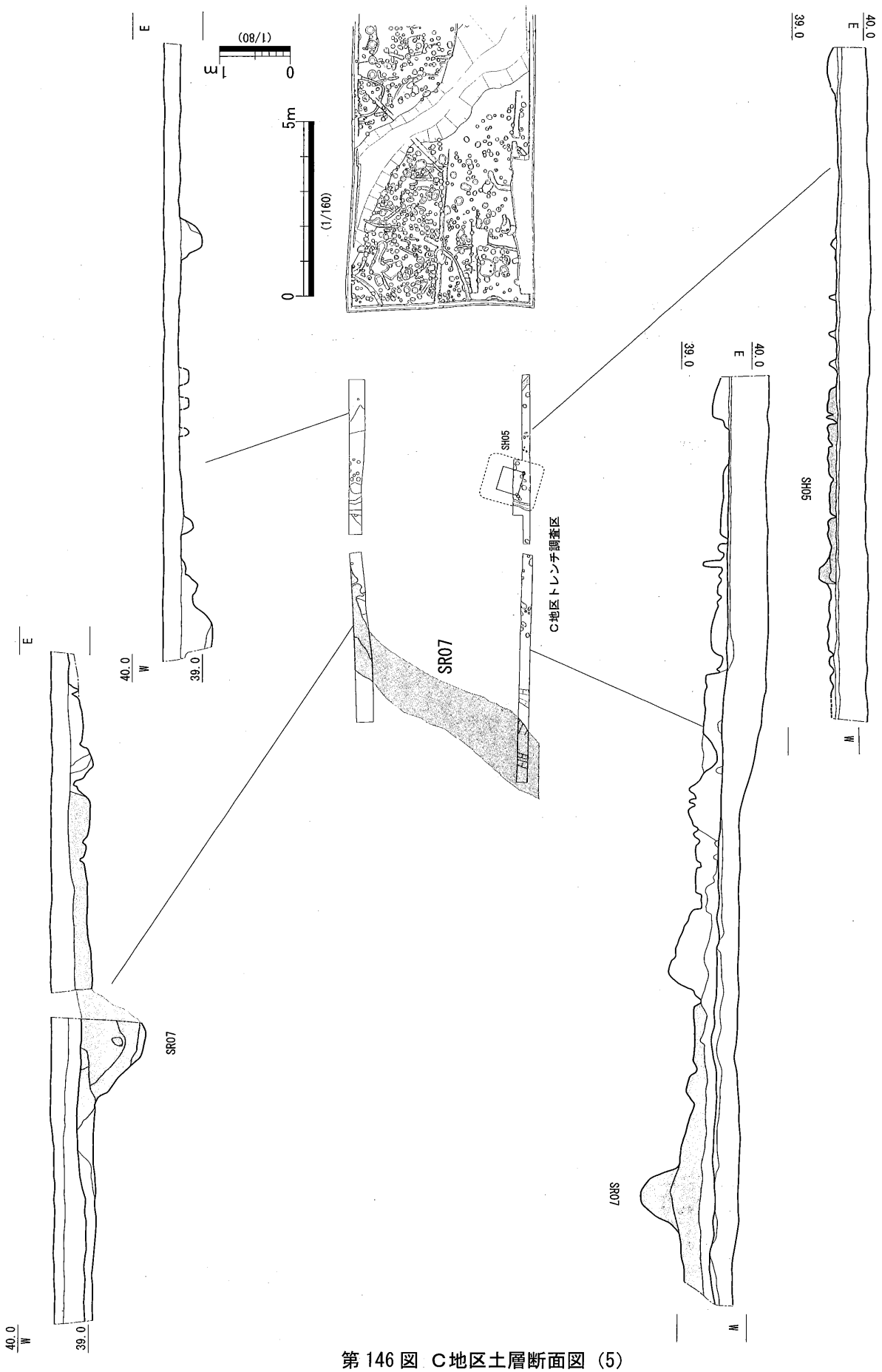
第 145 図　C地区土層断面図 (4)

C地区西側調査区（第 143 ～ 145 図）

C地区西側調査区の東側では、耕作土直下に層厚約 10cm のやや褐色を帯びた黒色砂質土が広い範囲に堆積する（南壁 42 層）。この層は西側の流路跡 SR06 付近まで続き、微高地の地形の高まりに対応して西に向かって薄くなり、消滅する。層中には細礫粒が多く含まれ、マンガンや鉄分などの塊状沈着も目立つことから、水田耕作に伴う土壌である可能性が高い。その直下の 43 層では土壌分析の結果、イネ科のＰＯが多数みられた。C地区西側調査区中央部では、この南壁 42 層の下位に、黒色粘土（南壁 43 層）、暗褐色粘土（南壁 44 層）が堆積する。黒色砂質土が分布するこの範囲は、縄文時代晩期の堅果類貯蔵穴群（SK37 ～ 41）から西約 15 ｍまでの範囲に広がる低地域で、SX11 として報告した。主に暗褐色粘土層（44 層）中より縄文時代晩期の遺物が出土した。土壌分析では南壁 44 層（分析資料番号４）以下ではＰＯ量が少なく、水田耕土の可能性は低いという結果を得ている。

C地区西側調査区西では流路跡 SR05・SR06 に近接して住居跡や建物跡などが多数みられた。河川肩部に広がる黒色砂質土（南壁 14 層・北壁 8・10 層）は古墳時代後期以後の溝の基盤層で、住居跡 SH02 など弥生時代後期の住居跡にも切られることから、それ以前の堆積層と考えられる。しかし、この黒色砂質土上面で遺構検出を行うのは現実的に困難で、実際にはその下部の黄灰色粗砂層上面で遺構を検出した。その状況は、市道を挟んで西側の調査区（調査時の６区）でも同様である。

C地区西側調査区で確認した流路跡 SR05 ～ 07 は、いずれも弥生時代前期ごろに始まり、古墳時代中期ごろに最終埋没するという同じ経過をたどる。河床レベルを比較すると、SR06 北壁（37.8 ｍ）→ SR06 南壁（37.9 ｍ）→ SR05 南壁（37.9 ｍ）→ SR05 北壁（38.0 ｍ）→ SR07 北壁（38.2 ｍ）→ SR07 南壁（38.5 ｍ）の順で上昇する。このことから、SR07 が南から北へ、SR05 が北から南へ、SR06 が南から北へそれぞれ流れていたものと考えられる。周辺地形との関係を考慮すると、強く蛇行して接続する一連の小河川である可能性が高いといえる。



第 146 図　C地区土層断面図（5）

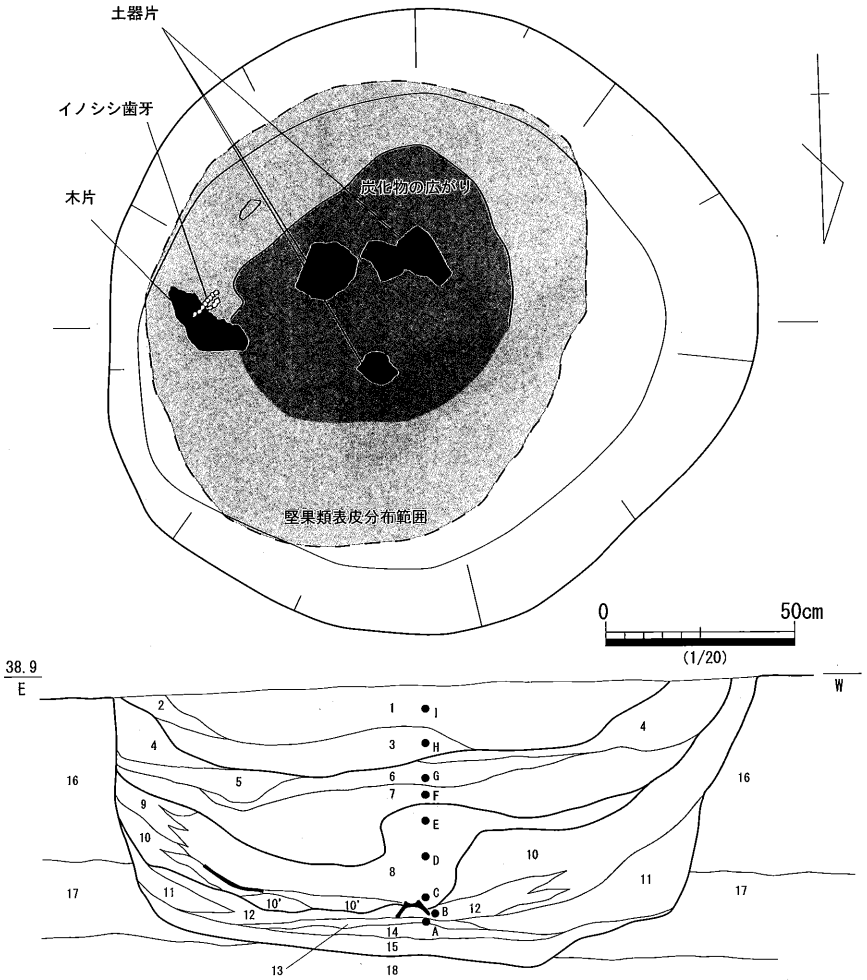
第３節　縄文時代

Ｃ地区西側調査区の中央部付近に貯蔵穴跡５基がまとまって分布し、それに近接して低地帯（SX11）が拡がる。西側調査区微高地の柱穴では縄文時代早期の土器片（838）が出土した。後者は柱穴基盤の粗砂層に含まれたものと推定され、自然堤防形成時期を示唆するものである。

貯蔵穴跡 SK37（第 147 図）

直径約 1.7m の円形土坑である。検出面からの深さは 0.7 ｍをはかり、側壁は垂直に近い角度で立ち上がる。底場はほぼ平坦で、最下層には粗砂（14・15 層）が約 10cm の厚さで堆積する。この粗砂層は基盤の粗砂層（17 層）が崩落･流入した土層と推定される。層中に種実が腐朽した堅果類表皮が多数含まれていたことから、当該遺構を堅果類貯蔵穴と認定した。堅果類表皮は遺存状態が悪く、鑑定可能な資料は僅かであったが、種実鑑定の結果、ブナ科コナラ属でアカガシ亜属とされた（第６章第３節）。

13 層は非常に軟弱で有機質に富む。表皮まで腐朽した貯蔵堅果類が土壌化した層と考えるには層厚



1　黒色砂質シルト（白色砂粒を多く含む）
2　濁黄灰白色細砂（黒灰色シルトブロック含む）
3　淡黒色粘土（非常にきめ細かく混じりが少ない）
4　濁灰緑色細砂（黒灰色シルト質ブロック含む）
5　黒色砂質シルト（やや軟弱）
6　濁灰緑色中～粗砂（黒色シルトブロック含む）
7　淡灰緑色粗砂（シルトブロック含む）
8　濁黒灰色砂質シルト（黄灰色土ブロック多く含む）
9　暗灰色粗砂
10　淡灰緑色粗砂（10' は 12 層中に混入したもの）
11　濁灰緑色シルト質中砂
12　黒灰色粘質シルト（軟弱で細かな黄白色土含む）
13　淡灰褐色粘土（非常に軟弱、堅果類等有機物の腐植土か）
14　灰黄褐色粗砂（堅果類表皮を多量に含む）
15　暗灰色中～粗砂（堅果類表皮を多量に含む）
16　暗灰色砂質シルト
17　暗灰色中～粗砂
18　灰色粗砂（湧水あり）

※　1～3は窪み流入土、4～7は封土崩落後の早期流入土、8･9は　封土の崩落土、10～12は地山および封土の漸次流入土、13は堅果類腐食土、14･15は機能時の流入土、16～18は地山
A～Ｉは土壌サンプルNo.

第 147 図 貯蔵穴跡 SK37 平･断面図

が薄い。土壌分析の結果、樹木花粉の占める割合が草本花粉より極めて高いことも判明しており、廃棄後の初期の流入堆積層と考えておく。

10～12層は周辺土壌の流入土である。特に12層は土器・石器片・微細な有機物片などを含む黒灰色粘質シルト層で、周辺の浮遊物や廃棄物を巻き込んで堆積した土層と言える。土層分析では、ニワトコ、カヤツリグサ科、イボクサ、ザクロソウの二次林性の樹木および雑草となる草本の種子が確認された。また、土壌分析では13層に比べ樹木花粉の占める割合が低くなり、草本花粉のイネ科、ヨモギ属が増加することが判明している（第6章第2節）。近接するSX11に認められた低地帯の形成に連動する花粉相の変化と考えてよい。これらに伴って、イノシシ歯牙が出土した。歯牙は左右上顎臼歯で、左右の第3後臼歯（いわゆる親知らず）が萌出する前の2歳半前後の資料である（第6章第4節）。また、薄い木片も出土したが、これらの流入物の上位に位置することから、貯蔵堅果類の蓋に使用されたものではない。10層は灰色系粗砂層で、主に西側から一度に流入している。

8・9層は黒色系粘質土層で有機物小片も少量混じるが、基盤土の黄灰色土小ブロックを多数含む。10層流入後の窪みに堆積した土層だが、すでに12層に認められた廃棄物などは認められないことから、近隣の営みが停止した後の堆積層と考えられる。次第に乾燥環境に至った可能性があり、土壌分析においてもほとんど花粉が見られなくなる。

7層は灰色系砂層で、一度に流入した可能性が高い。出土遺物もみられず、周辺の洪水環境を物語る。その上部の堆積層は窪みへの自然堆積層と推定される。3層は、C地区西側調査区南壁断面の43層に、1層は同42層に対応する。

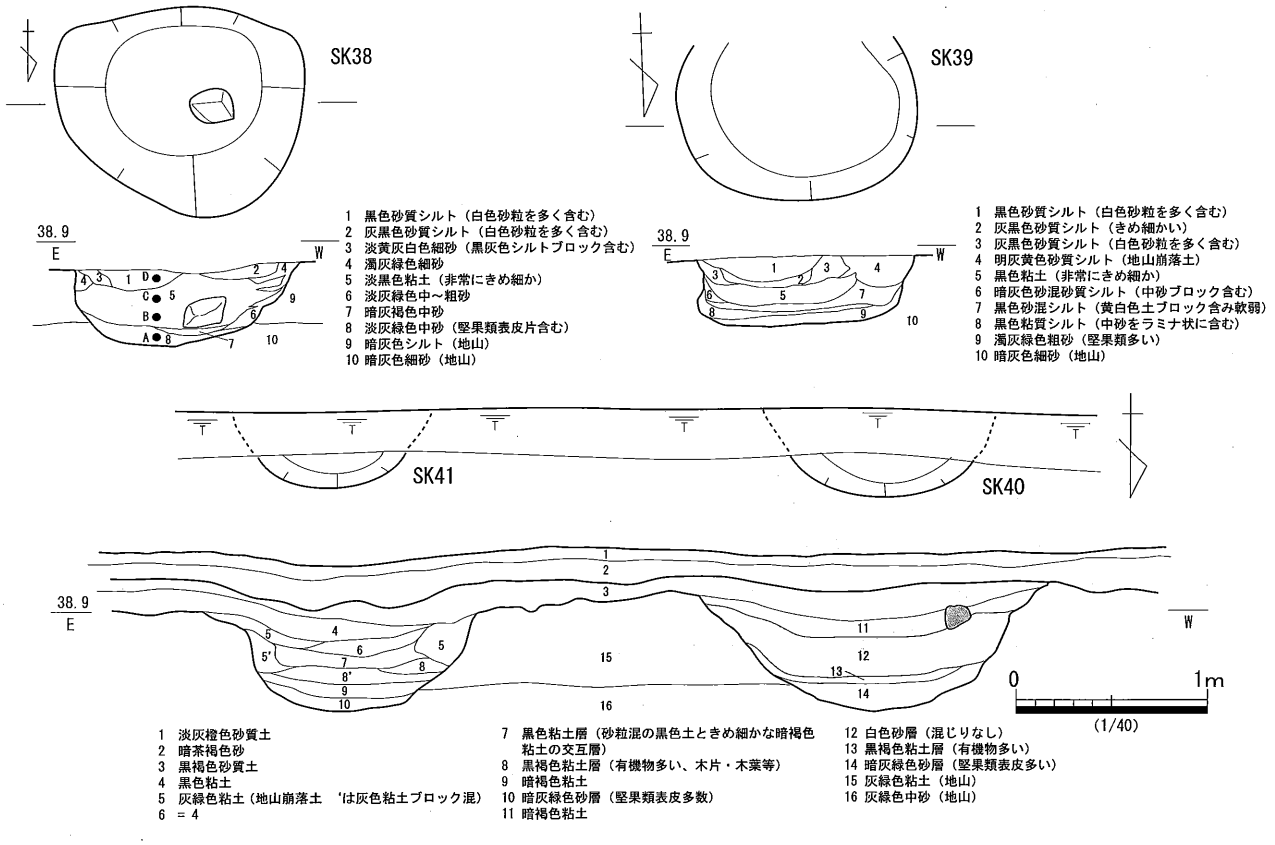
それ以外の出土遺物として、833・837の縄文土器深鉢・底部片がある。2者は同一個体と考えて矛盾はない。833は肩が張る胴部の外面を巻貝条痕で調整し、内面は丁寧にナデ仕上げし薄く焼き上げた深鉢である。胴部上端で屈曲して頸部が上方に立ち上がり、頸部外面はヨコナデで仕上げる。底部はやや厚めの上げ底で、底部径は約5cmと小さい。胴部最大径は34.5cmで、全体器高は40cm弱と推定される。大型の深鉢である。

貯蔵穴跡 SK38（第148図）

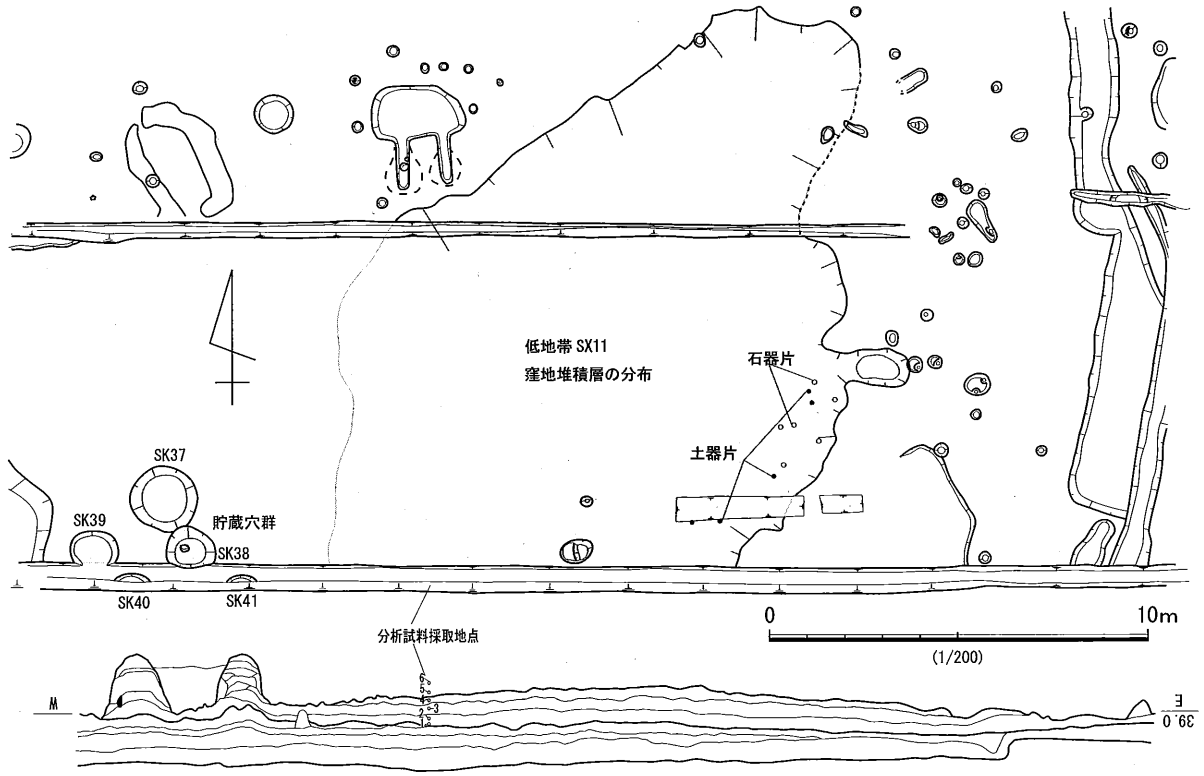
SK37と接して検出した直径1.1～1.3mの円形土坑である。最下層は灰色系砂層（8層）で、SK37と同様に堅果類表皮が遺存していた。その上部には厚さ20cmほどきめ細かい黒色粘土（5層）が堆積し、層中に23cm大の花崗岩礫が1点確認された。これは、土坑廃棄後、開放状態で堆積した土層と推定される。この土層の土壌分析では樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、周辺にカシ林（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林が比較的多く分布していたことが指摘されている（第6章第2節）。この花粉相はSK37廃棄直後の堆積層（12層）に類似する。SK37とSK38で異なる点は、SK37の7層に相当する砂層流入が見られない点である。両者は一部で接して掘削されていることから同時に存在した可能性は低い。両者の埋没過程の違いは時間差を反映している可能性が高い。埋土上部の1・2層は南壁断面42・44層に対応するものと考えられる。出土遺物はなかった。

貯蔵穴跡 SK39（第148図）

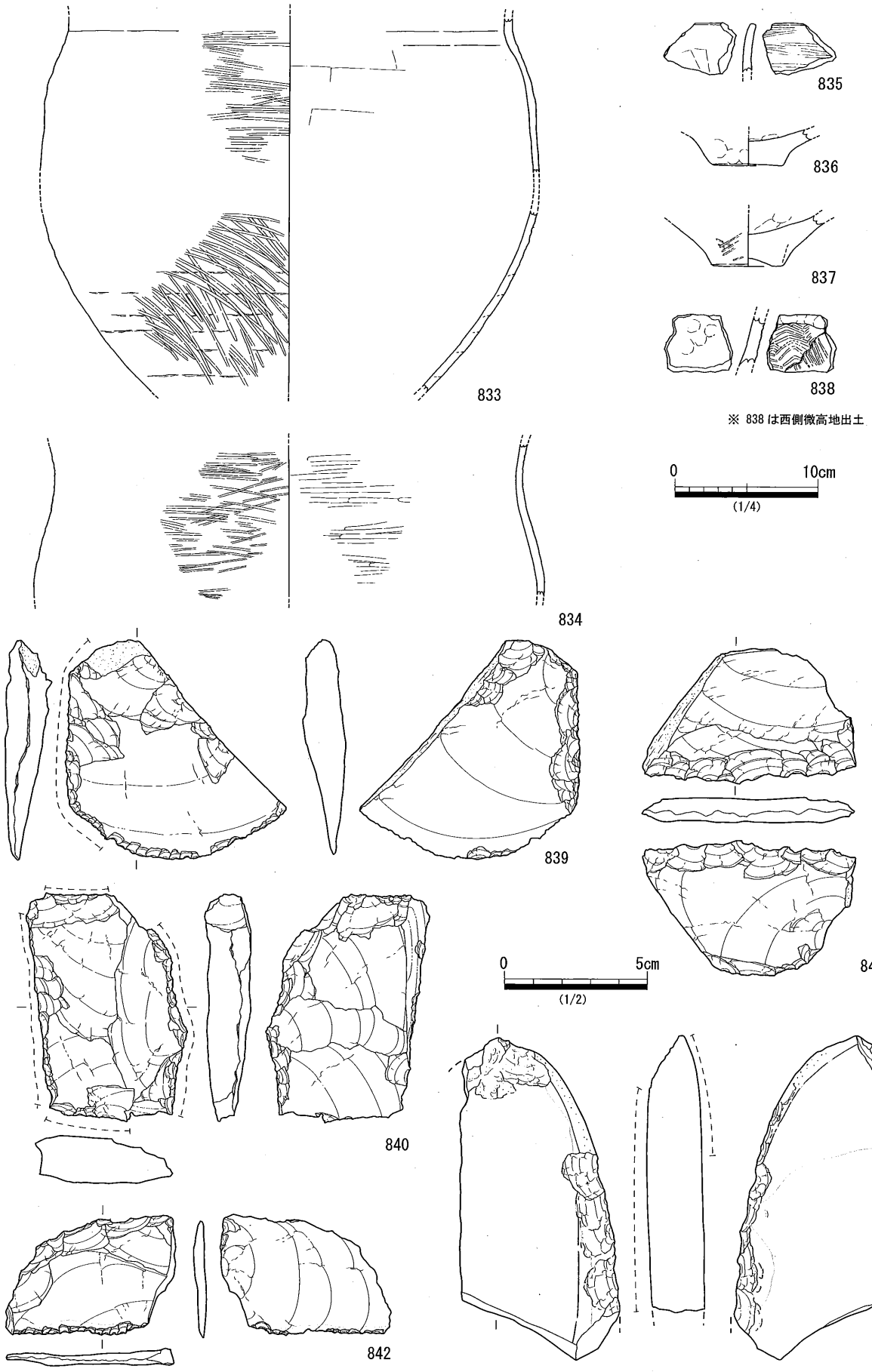
直径1.25mの円形土坑である。南側は調査時の側溝によって欠損する。壁面にて検出したSK40と極めて近接した位置にある。最下層には灰色系砂層があり、堅果類表皮が含まれていた。それより上部は黒色系シルト及び粘土層が堆積し、最上部の1～3層は南壁42～44層に対応する。砂層の流入がみられない堆積状況は、SK38に類似する。出土遺物はなかった。



第 148 図 貯蔵穴跡 SK38 ～ 41 平･断面図



第 149 図 C地区縄文貯蔵穴跡群と低地帯 SX11 分布図



第 150 図 貯蔵穴跡 SK37、低地帯 SX11 出土遺物

貯蔵穴跡 SK40（第 148 図）

南壁の壁面で確認した土坑である。直径は 1.5 ～ 1.6 mと推定され、図面では断面形が半円状にみえるが、断面傾斜を考慮すると、他例と同様に側壁の立ち上がりは垂直に近いものと推定される。堆積層は最下層に堅果類表皮を含む 14 層が厚さ 12cm でみられ、有機質の多い 13 層を介して厚さ約 20cm の灰色系砂層(12 層)が堆積する。その上部は 11 層が南壁 44 層、3 層が 42 層に対応する。砂層堆積からみて、SK37 の堆積状況に近い。出土遺物はなかった。

貯蔵穴跡 SK41（第 148 図）

南壁の壁面で確認した土坑である。直径は 1.3 mと推定される。堆積層は最下層に堅果類表皮を含む 10 層が厚さ 7cm でみられる。それより上部は黒色系シルト及び粘土層が堆積し、最上部の 4・6 層は南壁 42・44 層に対応する。砂層の流入がみられない堆積状況は、SK38 に類似する。出土遺物はなかった。

低地帯 SX11（第 149・150 図）

C地区西側調査区中央部で検出した低地帯である。幅約 13 mで、南西から北東方向に伸び、延長 17 mで収束する。平面形は不定形である。深さは約 40cm で、堆積土は 3 層に分かれる。上層は白色細礫を多く含む黒褐色砂質土層（南壁 42 層）、中層はきめ細かな黒色粘土（南壁 43 層）、下層は暗褐色粘土（南壁 44 層）である。下層より縄文時代晩期土器・石器が出土した。中層・上層の堆積時期は南壁土層断面の観察から、貯蔵穴群の埋没後と考えられるが、貯蔵穴の埋没途上の窪みに中層・上層が流入することから、埋没後あまり長い時間を経ず中層・上層が堆積したものと言える。中層・上層には出土遺物はない。なお、低地帯東肩中央部には長さ約 2 m、幅約 1 mの溝状の窪みが付属し、下層と同様の土壌で埋積する。調査区南壁部分の土壌分析では、中層（南壁 43 層）にイネ科プラントオパールの濃集がみられるが、縄文時代晩期の遺物が出土した下層では全くイネ科プラントオパールが検出されていない。

834 ～ 836 は下層出土の縄文土器である。834 は胴部外面を巻貝条痕で調整し、内面にヘラミガキを施す深鉢である。頸胴部境は屈曲部をもたず、スムーズに反転して外反し、頸部外面も巻貝条痕が施される。薄手の大型深鉢である。835 は深鉢口縁部片である。外面に巻貝条痕、内面に板ナデがみられる。836 は厚手の深鉢底部片である。底径は 4.8cm と小さい。

839 ～ 843 は SX11 出土の石器である。839 ～ 842 はサヌカイト製、843 は半深成岩製。839 は剥片末端に片面のみ刃部加工を施した削器である。素材は側縁に自然面を留めた幅 7cm 以上の剥片で、背部には打面部除去、稜線敲打を施す。840 は周縁に分割面や稜線敲打を留めた石核である。841 は剥片末端に表裏両面に粗い刃部加工を施した削器である。素材は側縁に自然面を留めた幅 7cm 以上の剥片。842 は両極打撃により剥取された薄手の剥片側縁に、細かな剥離を伴う摩滅を留めた石器。843 は川原石表裏に顕著な摩滅痕のある磨石である。側縁には粗い敲打痕がみられる。

第４節　弥生時代前期～中期前半

遺構の分布（第 151 図）

C地区西側調査区微高地上の流路跡 SR05 と流路跡 SR06 に挟まれた径 15 mほどの範囲に、当該期の土坑が 6 基分布する。これらは約 1 mの間隔を隔てて南北方向に連なる SK42 ～ 45 の 4 基の土坑群と、その列から東に 3.5 m離れて東西に隣接する SK46・47 の 2 基の土坑群の２群に分けられる。後者が径・深さともに大型である。これらの土坑は互いに切り合うことはない。隣接する流路 SR05・06 では当該

時期の土器片も多く、土坑周辺には柱穴が多数分布することから、柱穴と土坑が組み合って住居跡を構成していた可能性も考えられる。しかし、柱穴の出土遺物がほとんどないことから、その関連は不明である。第151図には、後述する弥生時代後期以後の住居跡・建物跡を構成する柱穴を除く、所属不明の柱穴を濃色で示した。

土坑 SK42（第151図）

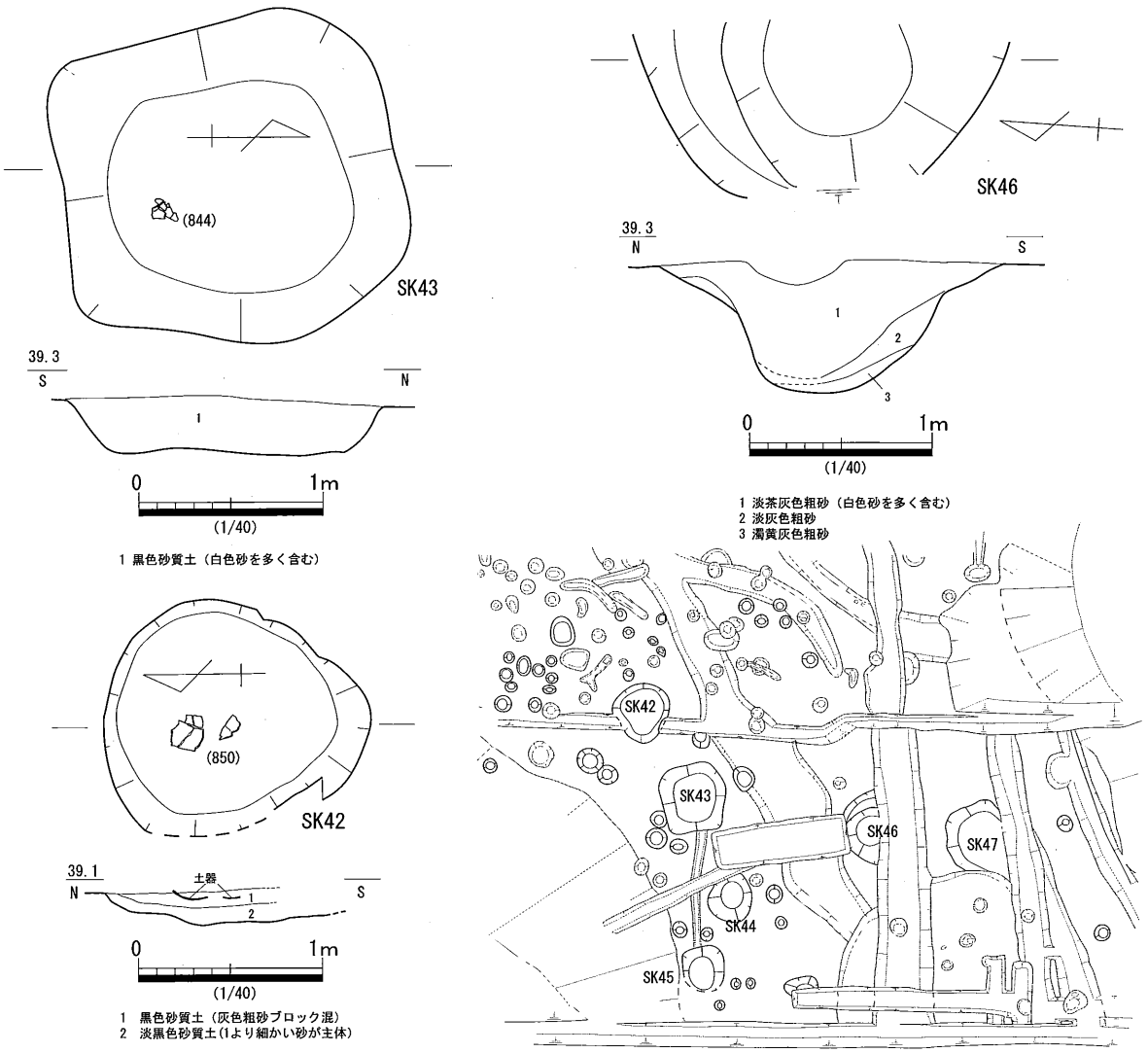
直径約1.4ｍの円形土坑である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さ0.18ｍである。下層に漆黒色を呈するきめ細かな砂質土層が堆積し、上層に粗砂ブロック混じりの砂質土が覆う。上層より中期初頭の甕（850）が出土した。850は如意状口縁で体部に櫛描文5帯＋刺突文を施すものである。口縁端部には細かいピッチの刻目をもつ。

土坑 SK43（第151図）

一辺約1.8ｍの隅丸方形土坑である。検出面からの深さは約0.3ｍ、埋土は黒色砂質土である。底場から25cmほど浮いて、前期後半の壺（844）が出土した。844は頸部から口縁部がラッパ状に大きく開く形態の壺で、口縁部内面に三角形刺突文が巡る。

土坑 SK44（第151図）

SK43の南に1.2ｍ隔てて検出した直径1.3ｍの円形土坑である。検出面からの深さは0.42ｍ、断面



第151図 土坑SK42・43・46 平・断面図

形は半円状で、埋土は下層に濁った灰黄色粗砂、上層に黒色砂質土が堆積する。出土遺物はなかった。

土坑 SK45

SK44 の南 0.8 m隔てて検出した直径 1.1 mの楕円形土坑である。検出面からの深さは 0.26 m、断面形は半円状で、埋土は下層に濁った灰黄色粗砂、上層に黒色砂質土が堆積する。出土遺物はなかった。

土坑 SK46（第 151 図）

直径約 2 mの円形土坑である。東側は後世の溝跡に切られ、上部の掘り形は遺存せず、その下部は未調査に終わったので、詳細な規模は不明。断面形はU字形で下層に灰色系粗砂、上層に茶色系粗砂が堆積する。検出面からの深さは 0.7 m。出土遺物はなかった。

土坑 SK47

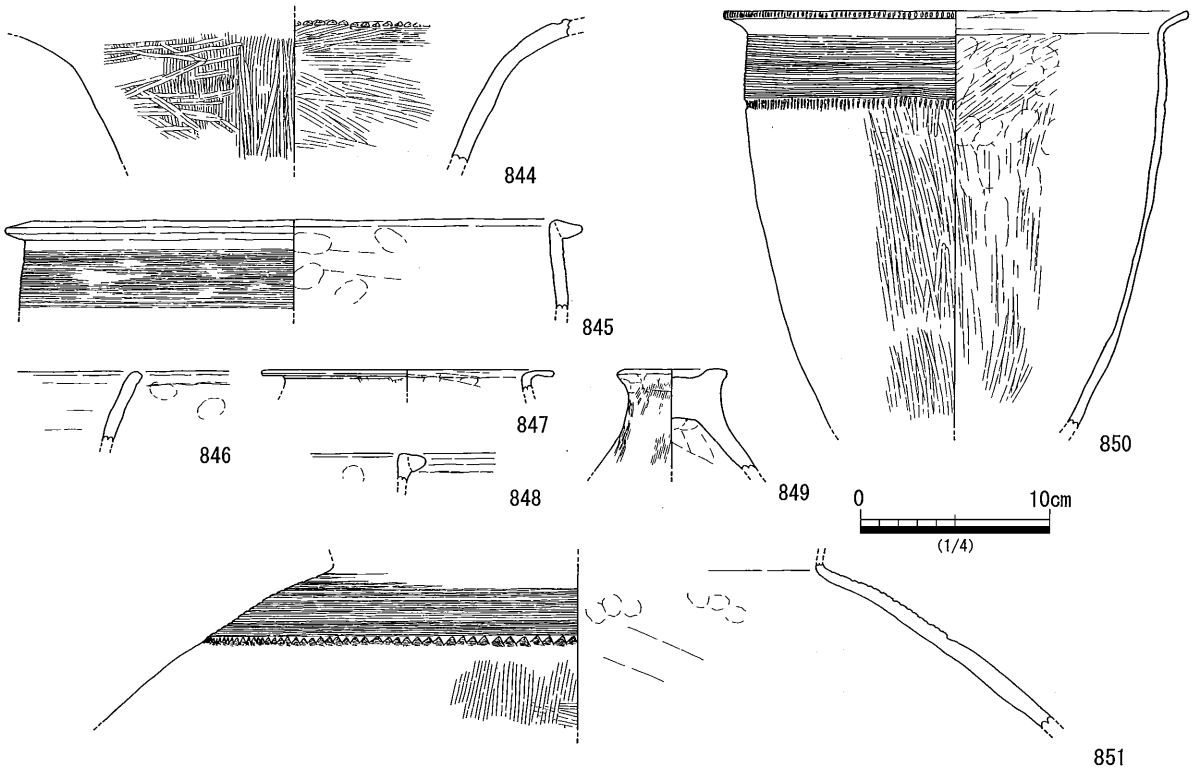
直径約 2 m。深さ 0.3 mの不定形土坑である。断面形は半円状で黒色砂質土が堆積する。出土遺物はなかった。

低地部土器溜り SX12（付図 3、第 152 図）

C地区東調査区 SR04 東岸で検出した不定形落ち込み遺構である。自然河川跡 SR04 は複数の流路が重複しており、当該遺構もその一つである可能性もあるが、必ずしも十分な記録が得られていないことから、ここでは落ち込み遺構として取り扱っている。調査区東壁断面により、暗褐色粘質シルトで埋没したことがわかる。845 ～ 849 はいずれも小破片で、846 の縄文晩期土器片から 847 の弥生中期前半甕口縁部片までの時期幅がある。845 は複帯構成の櫛描文を施す逆Ｌ字口縁甕、848 は逆Ｌ字口縁甕小片、849 は甕蓋天井部片である。

その他の土器

851 はC地区西側調査区微高地で出土した壺胴部片である。肩部に複帯構成の櫛描直線文を施し、最下段に三角形刺突文を巡らせる。



第 152 図 C地区弥生前期～中期前半遺構出土遺物

第５節　弥生時代後期以後

（１）概要（第 153・169・180・181 図）

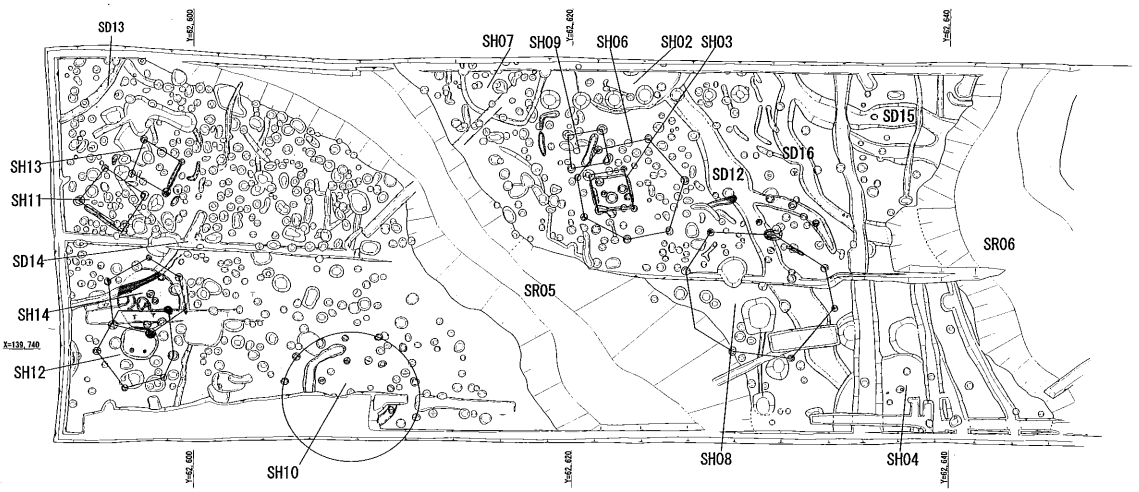
Ｃ地区西調査区（調査時の５・６区）では、流路跡 SR05・06 に面する微高地上で、多数の遺構が検出された。これらの遺構は、弥生時代後期から古墳時代中期ごろまでの住居跡･建物跡といった下層遺構と、古墳時代後期から中世の建物跡や溝跡といった上層遺構に分けられる。ただ、上下層の間層は必ずしも明確でなく、下層遺構の基盤となる黒褐色砂質土層を掘り下げ、黄色砂層上面で検出した遺構が多い。その過程で遺構掘り形が失われたものもあった。

住居跡は、土層序でも記述したように、基盤が軟弱な砂層であるため、出土遺物が極端に少なく、遺構と「染み込み」の区別も難しい。柱穴や土坑の配置から復元した住居跡は、明確に掘り形を確認できる住居跡と比べ、遺構形状の信頼度が低いといわざるを得ない。ただ、流路跡 SR05 出土遺物の分布状況やその出土量を考慮すると、相当の住居分布は想定されてよい。以上のことから、まず明確に掘り形を検出した住居跡を先に報告し、その後に前後する時期の溝跡、そして柱穴から復元できる住居跡を提示することとする。

掘立柱建物跡も主に柱配置から復元したものである。特に古墳時代中期頃と推定した建物跡は、不確実なものも含む。

流路跡 SR05・SR06 埋没後古墳時代後期以後は、条里方向の溝群と、それと斜行する溝群に分けられる。また、近世の砂糖製造竈の基部も検出した。

Ｃ地区東側調査区（調査時のⅣ区）では、SR04 西側に６世紀から７世紀にかけての溝跡がある。

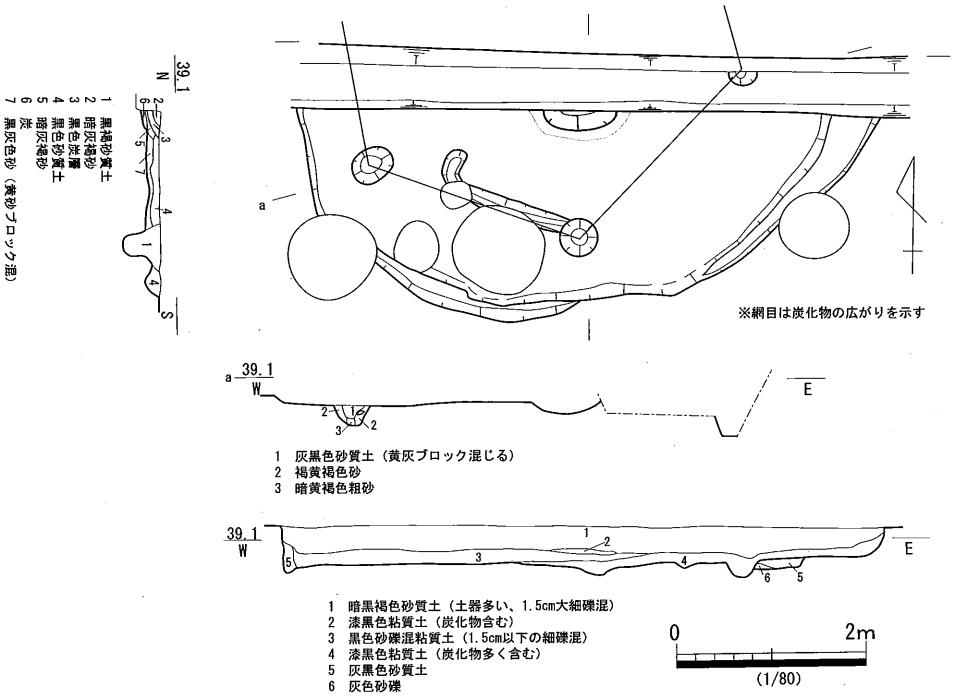


第 153 図　Ｃ地区弥生時代後期～終末期の遺構分布状況

（２）住居跡

住居跡 SH02（第 154・155 図）

微高地中央北側で検出した円形竪穴住居跡である。掘り形の南半分を検出した。直径は 6.3 ｍで、断面観察から深さは約 0.4 ｍである。中央部に長径 0.8 ｍの炉跡があり、その上面に炭化物の広がりを確認した。炉跡は断面図３層および６層に炭化物層が認められ、炭化物層が上下２層となる。住居東半は床面が２段となる部分もあり、床の貼り替えを行っている可能性が高い。主柱穴は調査区内で３基検出し、調査区外の北半に２～３穴が想定できる。５本もしくは６本の主柱穴と推定できる。



第 154 図 住居跡 SH02 平・断面図

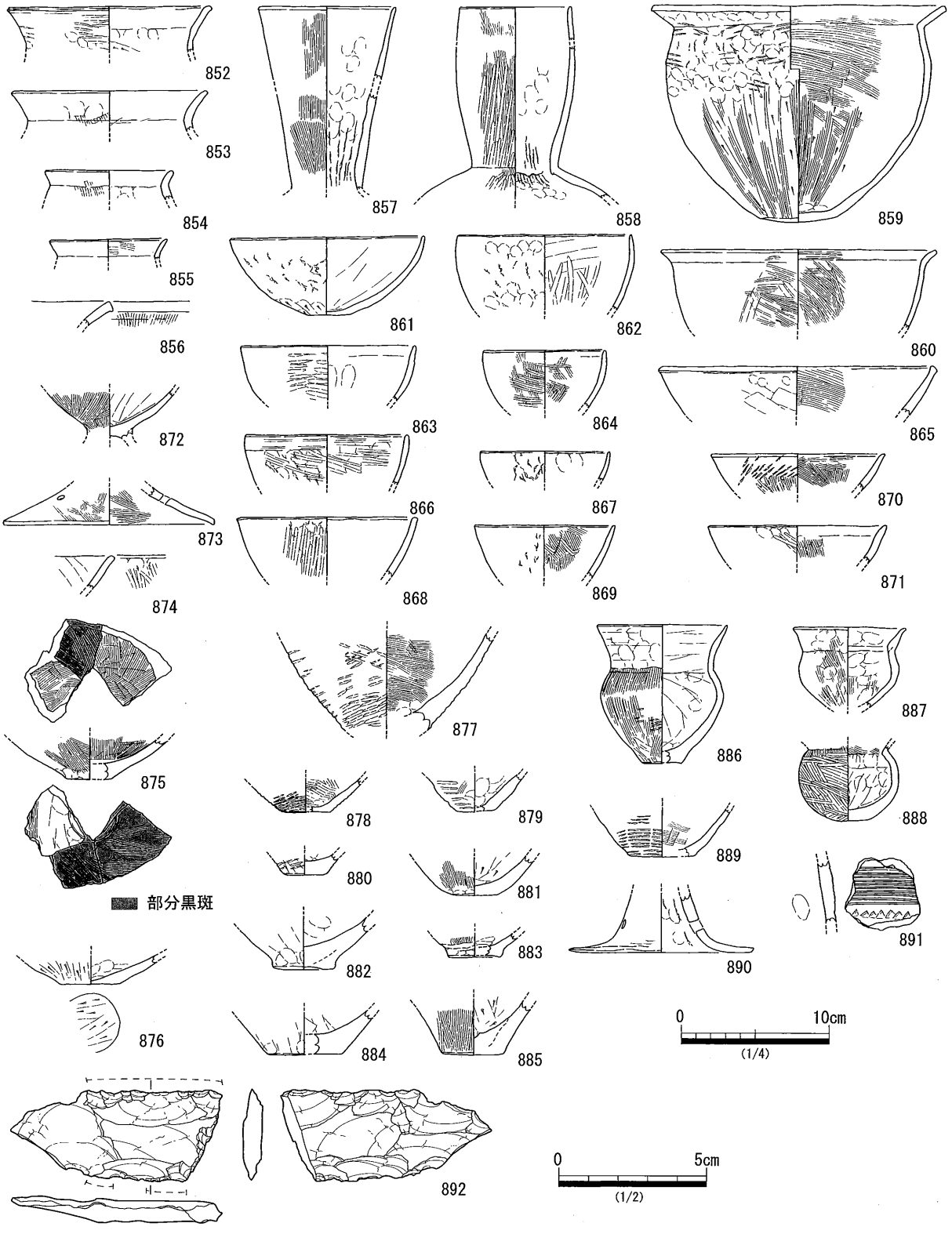
住居外端には調査時に壁溝がみられたが、記録前に主柱穴が確認できる黄色砂層上面まで掘り下げたために、記録前に消失している。北壁断面では西側の壁溝（5 層）を確認できる。

埋土中よりコンテナ 1/2 ほどの土器片が出土した。床面出土の数点を除くと、小片が多い。土器片は、住居跡の上面検出を行った際に出土したものと、遺構埋土を掘り下げる際に出土したものに分けられる。断面図を検討すると、前者は床貼り替え後の埋没層に、後者は貼り替え時の置土に含まれたものと考えられる。前者は周辺からの廃棄物を含むが、後者は床面貼り替え時を示す資料である。

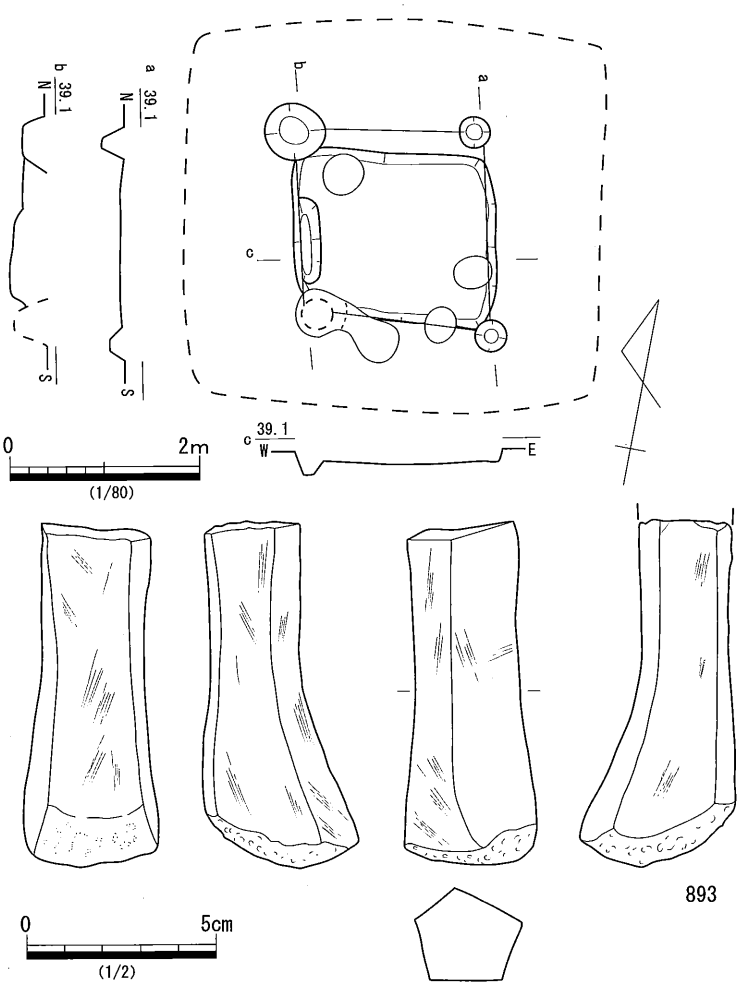
下層出土の土器は 854・855・857・858・860・862・867・868・874・877・878・880・881 ～ 883・885・889・861（床面）・863（炉跡）・879（炉跡）である。それ以外の遺物は上層出土で、853・859 は上層床面、852 は上層炉跡で出土している。

852 ～ 856 は甕口縁部片である。いずれも薄手で胴部境内面に明瞭な稜線を持たず、胴部から口縁部へ緩やかに反転して接続する。器面調整は 852 は叩き調整、それ以外はハケ調整である。857・858 は下川津Ｂ類の細頸壺である。857 は頸部が直線的に外傾、858 は内彎しながら立ち上がる形状である。859 は上層床面出土の鉢である。底部は凸面で体部はやや丸みを帯びる。口縁部は胴部から強く屈曲して外傾し、やや長い。器面調整は体部下半を表裏両面からヘラ削りし、薄く仕上げ、外面上半には叩き目が残る。内面上半は横方向のハケが顕著である。860 は口縁部が外反する鉢、861 ～ 871 は直口の鉢である。特に小型品が目立つ。872 ～ 874 は高杯である。875 は鉢底部と推定される。875 は 3 破片が接合した個体だが、表裏の黒斑の付き方が各破片とも異なる。土器焼成による破裂片に同様の痕跡がよく見られるが、住居埋没過程で二次焼成を被った際にもこのような状況が見られるので、いずれによるか不明である。877 ～ 885・889 は主に甕の底部である。叩き調整とハケ調整がある。886 ～ 888 は小型丸底壺、890 は古墳時代の高杯、891 は弥生前期甕、892 はサヌカイト製の石核である。いずれも上層出土。これらは埋没途上に他所から混入した可能性のある個体である。

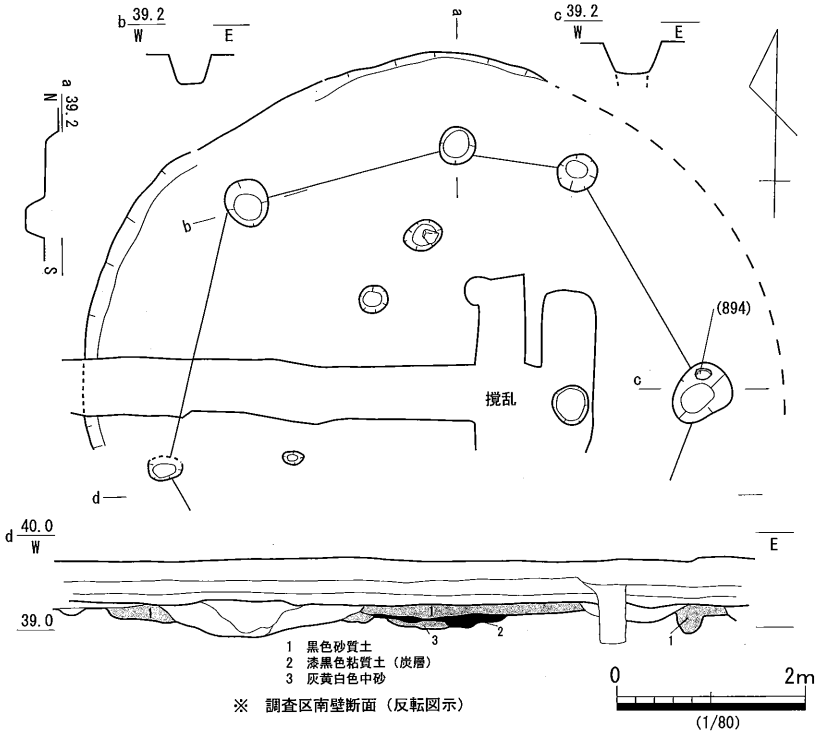
以上の出土遺物から弥生時代後期後半新相～終末期古相に所属する住居跡と考えられる。



第 155 図 住居跡 SH02 出土遺物



第 156 図 住居跡 SH03 平・断面図、出土遺物



第 157 図 住居跡 SH04 平・断面図

住居跡 SH03（第 156 図）

住居跡 SH02 から 3 m南で検出した住居跡である。２m四方の方形掘り形の四隅に柱穴を配置する。掘り形の深さは検出面から約 15cm で、西辺に壁溝状の溝跡が伴う。形状から見て、四周に段（ベッド状遺構）を有する竪穴住居跡の下段部のみを検出したものと推定される。消失した上段部は遺存部から推測すると一辺４～4.２mに復元できる。その場合の SH02 との距離は約２mとなる。なお、柱穴配置から復元した住居跡 SH06・SH09 と重複する。出土遺物はほとんどないが、流紋岩製の砥石（893）が１点出土している。方柱状で５面の砥面を有する。形状からみて鉄器用か。

住居跡 SH04（第 157 図）

微高地状の調査範囲南端で検出した円形竪穴住居跡である。南半は調査区外にはずれる。直径は約 7.５m、深さは 10cm 未満と浅い。主柱穴は６ないし７穴と推定される。調査区南壁断面（２層）から、南壁沿いに炉跡が存在することが確認できる。しかし、後世の溝等との重複が著しいことから、壁溝跡やベッド状遺構などの床構造を確認することができなかった。また、調査写真で明らかに底まで達していないと判断できる柱穴もある。主柱穴より 894 の鉢が出土している。安定した平底で、内面に顕著なヘラ削りを施すものである。弥生時代後期後半古相に属し、当該住居跡の時期を示す。

（3）住居跡等に伴う溝跡

溝跡 SD12（第 159・160 図）

流路跡 SR05・SR06 間で検出した溝跡である。幅は 1 ～ 2.4 mで、深さは 0.2 ～ 0.3 mをはかる。埋土は上層に黒色砂質土が堆積し、下位に濁った灰黄色系砂層がみられる。南で住居跡 SH04 と重複し、北で住居跡 SH02 と重複する。また柱穴列から復元できる住居跡 SH08 とも重複する関係にある。一方で、住居跡 SH06 との重複はなく、西側掘り形の平面形が SH06 に沿って彎曲する箇所がある。このことから、当該溝跡跡は住居跡 SH06 と同時併存の可能性が高いと考えられる。

出土遺物はコンテナ 1/2 ほどの土器小片と、残存状況のよい数個体の土器が出土した。このうち、図化した土器片はいずれも上記住居跡との重複がない位置で出土している。

899 ～ 906 は SD12 出土の弥生土器である。このうち **899・900・904・905** は SH02 との重複位置から 1 m南でまとまって出土したものである。これらは折り重なるように狭い範囲から出土しており、一度に廃棄された可能性が高い。**901・902・904** は、SH04 との重複位置から 1 ～ 3 m北で出土している。

899 は図面上では完形に近く復元しているが、主に胴部下半が残存しており、それに沿って同一個体の口縁部小片を組み合わせて図化したものである。胴部下半にヘラミガキ、上半に斜め方向のハケ調整、口縁部をヨコナデで仕上げ、胴部内面はヘラ削りにより薄く仕上げる。内面上半には指押えが顕著に残る。色調は茶褐色を呈し、胎土中に角閃石を含む。高松平野西南部で生産されたとされる下川津Ｂ類甕である。**900** も同様の甕で口縁部直下の胴部・口縁部間がやや直立する。

901・902 は叩き調整を施す甕である。いずれも平底で、胴部下半はハケ目調整、上半に叩き目が残る。内面下半はヘラ削りで器壁を薄く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整である。**903** は叩き目が残存しない甕である。内面はヘラ削りを施す。**904** は平底の鉢である。内外面をハケ調整で仕上げる。**905** は平底の鉢底部、**906** は平底の甕底部で叩き目が残る。

以上の土器はいずれの器種も平底を留め、口縁部のヨコナデが顕著なことから、弥生時代後期後半古相に位置づけられる。当該溝跡に伴う可能性が高い SH06 の所属時期を示すものと考えられる。

溝跡 SD13（第 158 図）

SR05 西側、調査区の北西隅で検出した溝跡である。幅 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.2 mで、西から北に向かってカーブを描き、SR05 に収束する。東に住居跡 SH11・SH13 を介して、溝跡 SD14 がほぼ平行して走行する。

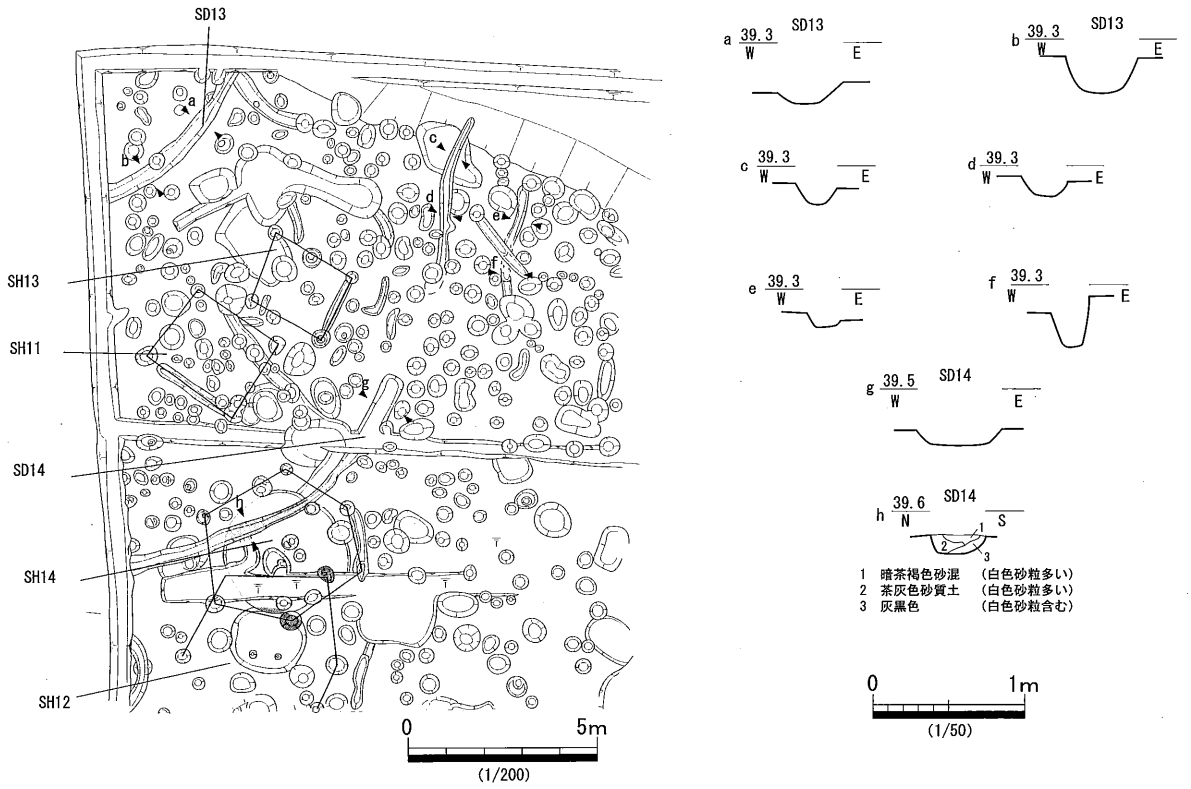
埋土は黒色砂質土で、側縁に濁灰黄色粗砂が流入する。埋土中より、底部片 **897・898** が出土した。**898** は厚めの安定した平底で底部下縁にヘラ削りを施す。**898** は小型の平底で胴部下半がやや丸みを帯びる。

溝跡 SD14（第 158 図）

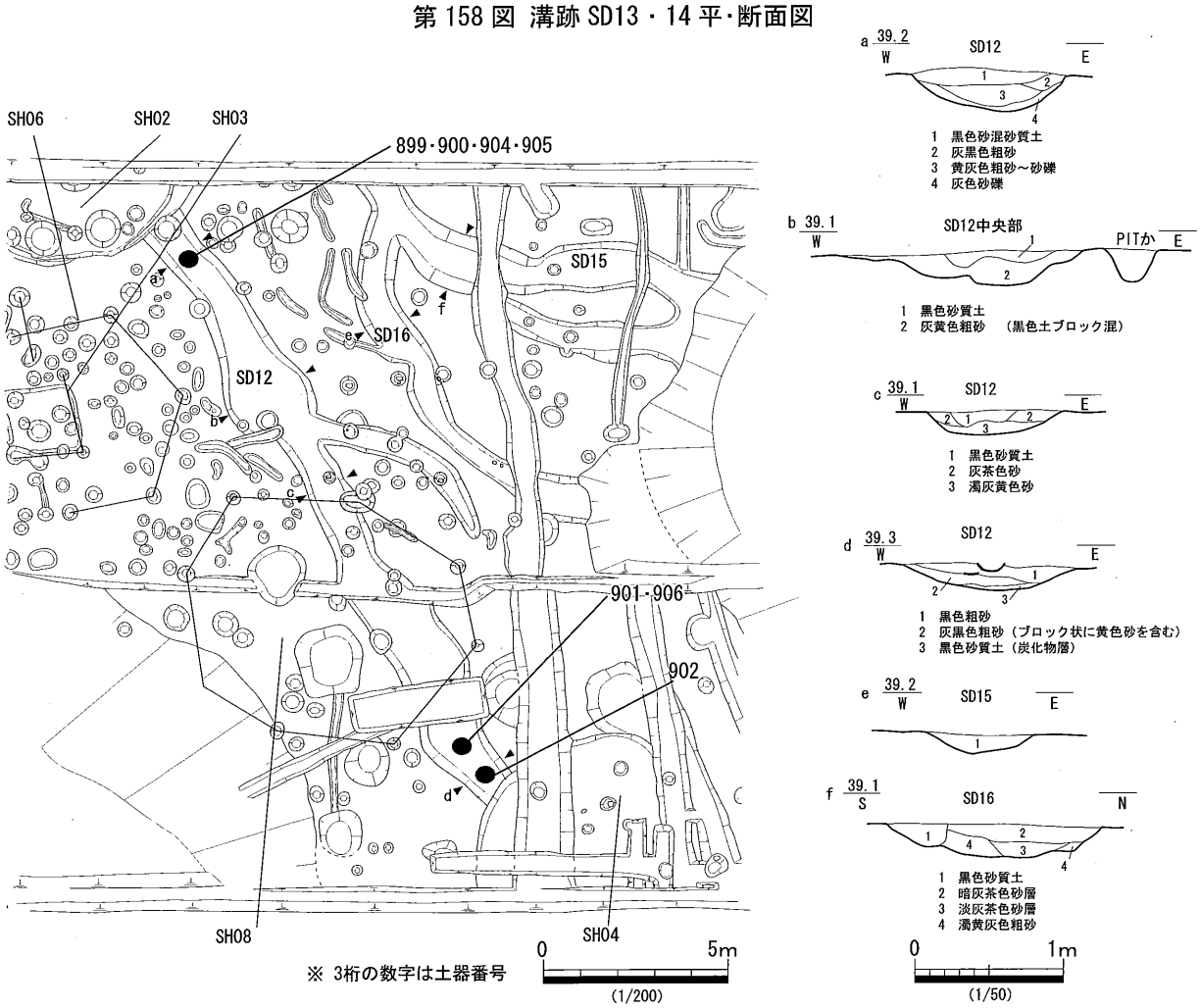
SD13 の東で、6 ～ 9 m離れてほぼ平行して走向する溝跡である。幅 0.2 ～ 0.5 m、深さは 0.1 ～ 0.2 mである。溝跡 SD13 との間には住居跡 SH11・13 があり、これらの住居跡とは重複しないが、SH13 との最接近部では、当該溝跡が約 2 m途切れることから、当該溝と住居跡 SH13 は互いに関連する遺構と考える。なお、住居跡 SH14 とは重複し、当該溝跡が SH14 の埋土を切る。出土遺物はなかった。

溝跡 SD15・16（第 159 図）

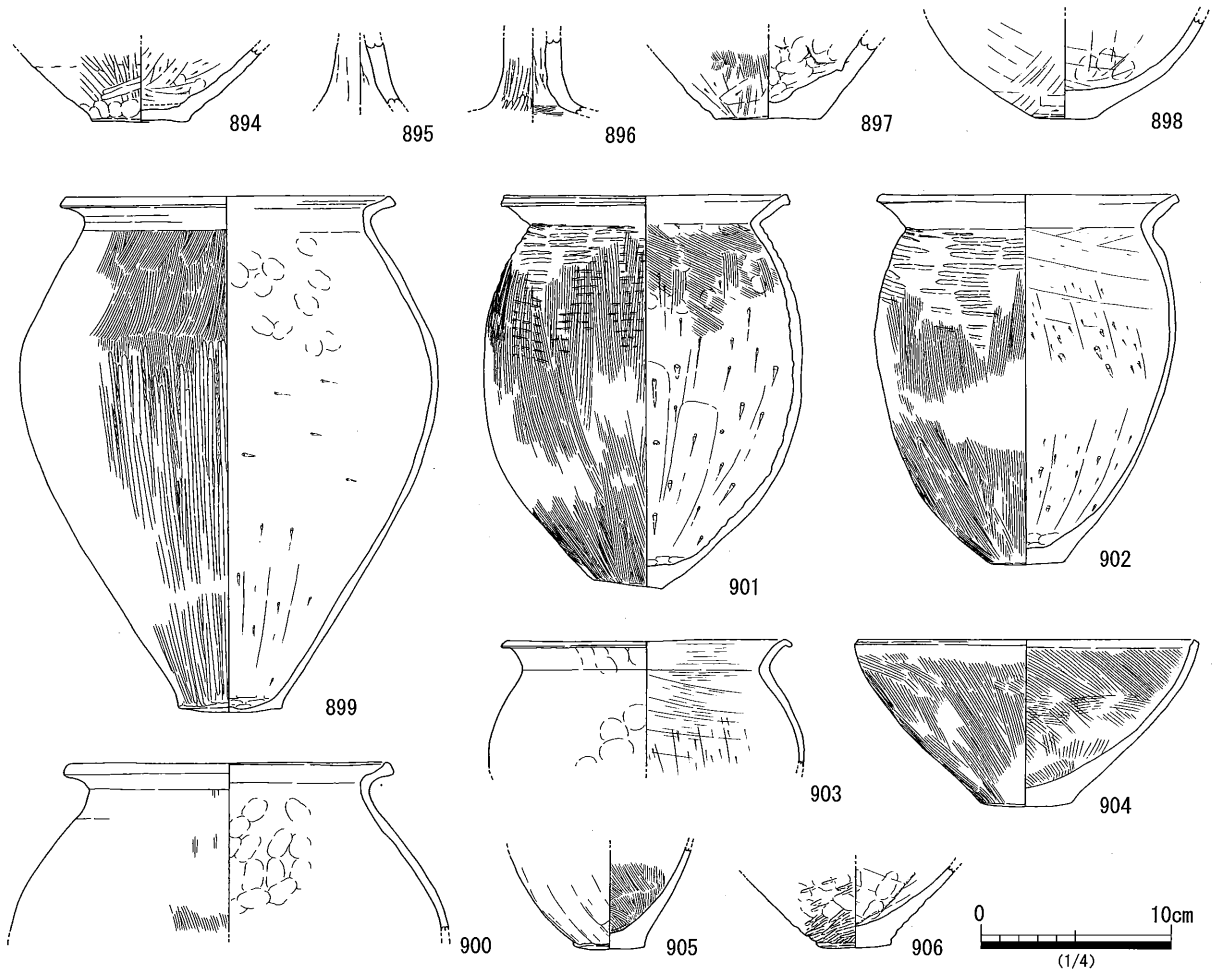
SR06 西側で蛇行しながら北に流れる 2 条の溝跡である。両溝跡は調査区北端で合流し、調査区北に伸びる。幅 0.7 ～ 1.4 mで、深さは 0.15 ～ 0.25 mである。下層に濁灰黄色粗砂、上層に黒色砂質土が堆積する。出土遺物はない。溝跡 SD12 と同じ方向に走行し、埋土の状況も類似することから、同時併



第 158 図 溝跡 SD13・14 平・断面図



第 159 図 溝跡 SD12・15・16 平・断面図



第 160 図 住居跡 SH04、溝跡 SD12・13 出土遺物

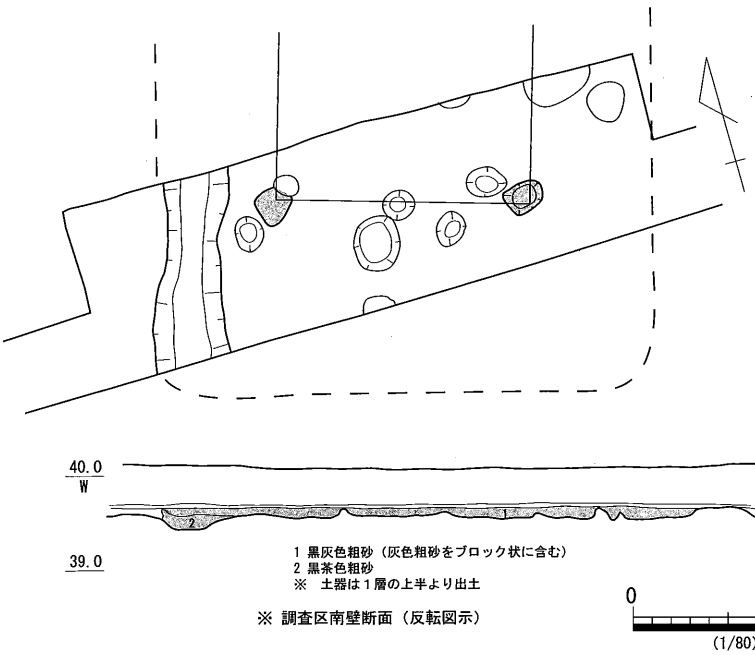
存の可能性もある。一方で、住居跡 SH08 の周溝跡とは掘り形が近すぎることから、時間的な前後関係が想定できる。

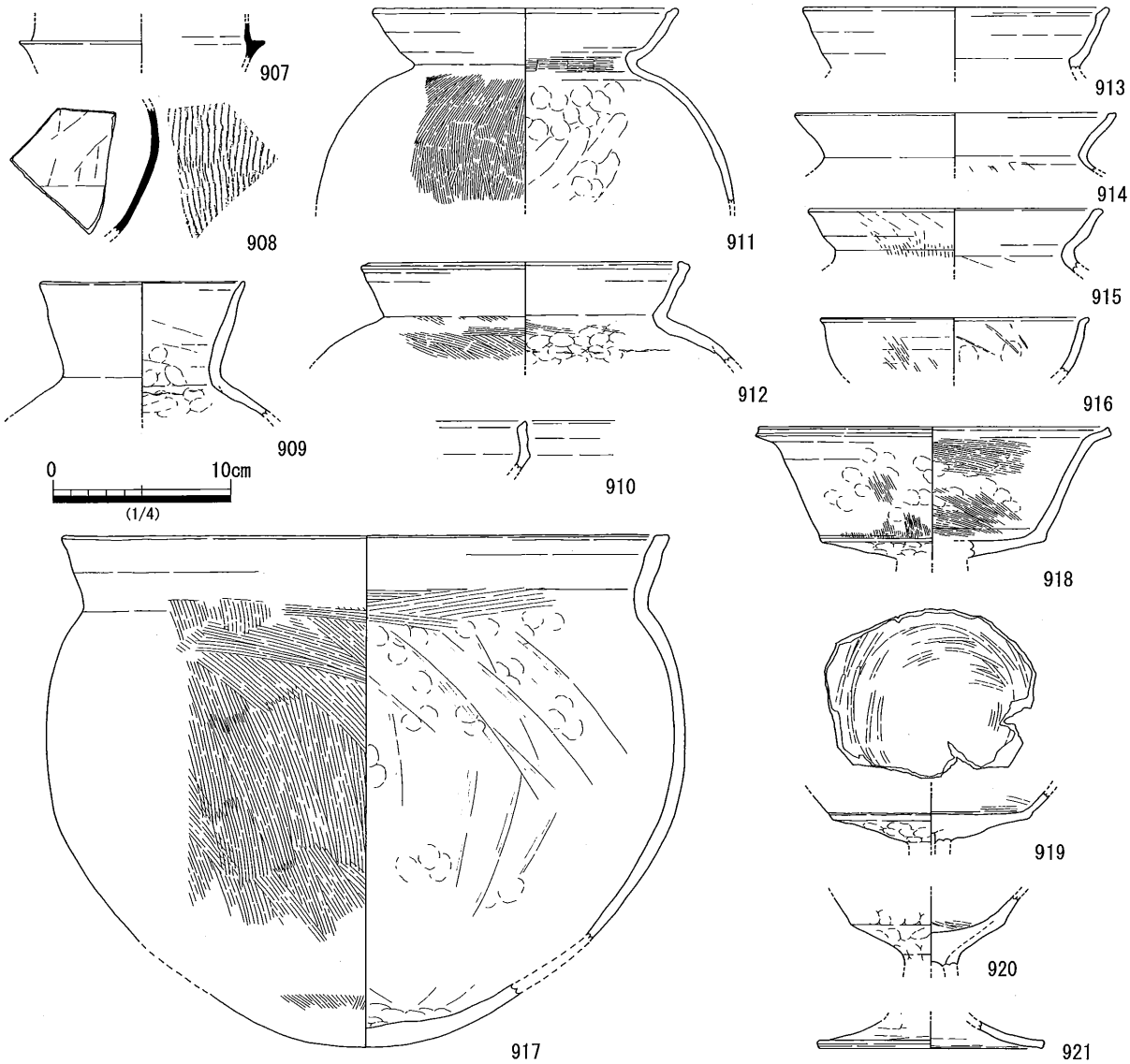
（4）西端トレンチ調査で確認した住居跡

住居跡 SH05（第 161 図）

C地区西側微高地の市道より西側のトレンチ調査で検出した住居跡である。調査範囲が狭く、十分な記録が取れていないが、一辺 5 mほどの方形竪穴住居跡を復元した。主柱穴が北に偏っており、元来２本柱の可能性もある。西辺には幅 0.6 ～ 0.7 mの溝跡が認められる。壁溝跡とみるには幅が広すぎるが、住居埋土と考えられる黒灰色砂（1 層）の西限と一致することから、住居関連遺構と見ている。ただ、溝跡の堆積層中に住居床面と同じ高さの層境が認められることから、下層遺構の可能性もある。床面中央付近には焼土面が認められたが、十分な記録が取れていない。

907 ～ 921 は 1 層上半で出土した遺物である。907・908 は須恵器で 907 の杯身の口縁部立ち上がりが垂直となることから、和泉陶邑窯跡 TK208 相当で 5 世紀中葉ごろと考えられる。908 の甕胴部内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。909 は土師器直口壺、910 は土師器複合口縁壺である。911 ～ 915 は口縁部を拡張する布留系甕、917 は布留系の大型鉢、918 ～ 921 は高杯である。土師器は 5 世紀中葉を下限とする様相を呈しており、当該住居の所属時期を示す。





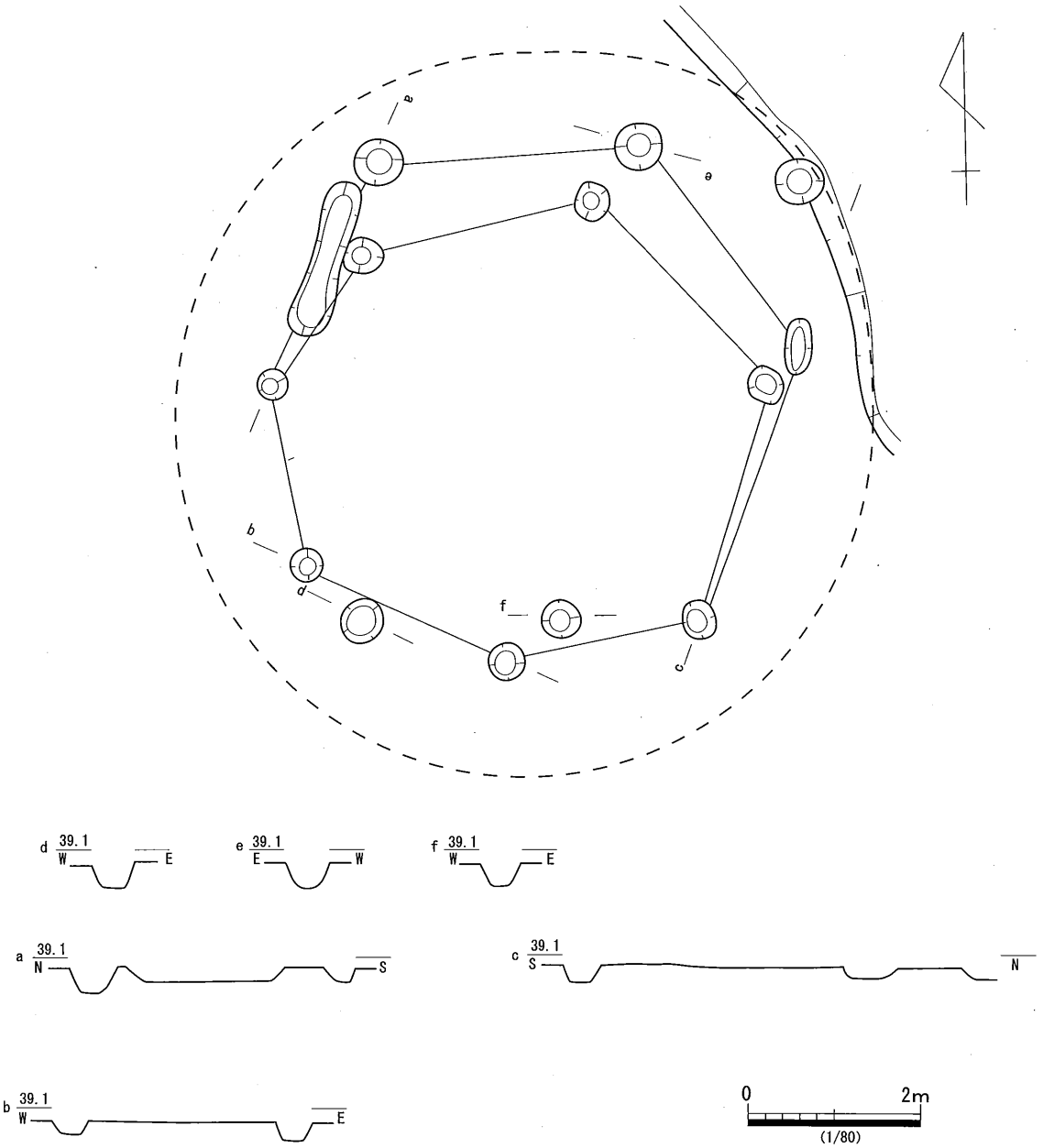
第 161 図 住居跡 SH05 平･断面図、出土遺物

（５）柱穴列から復元した住居跡

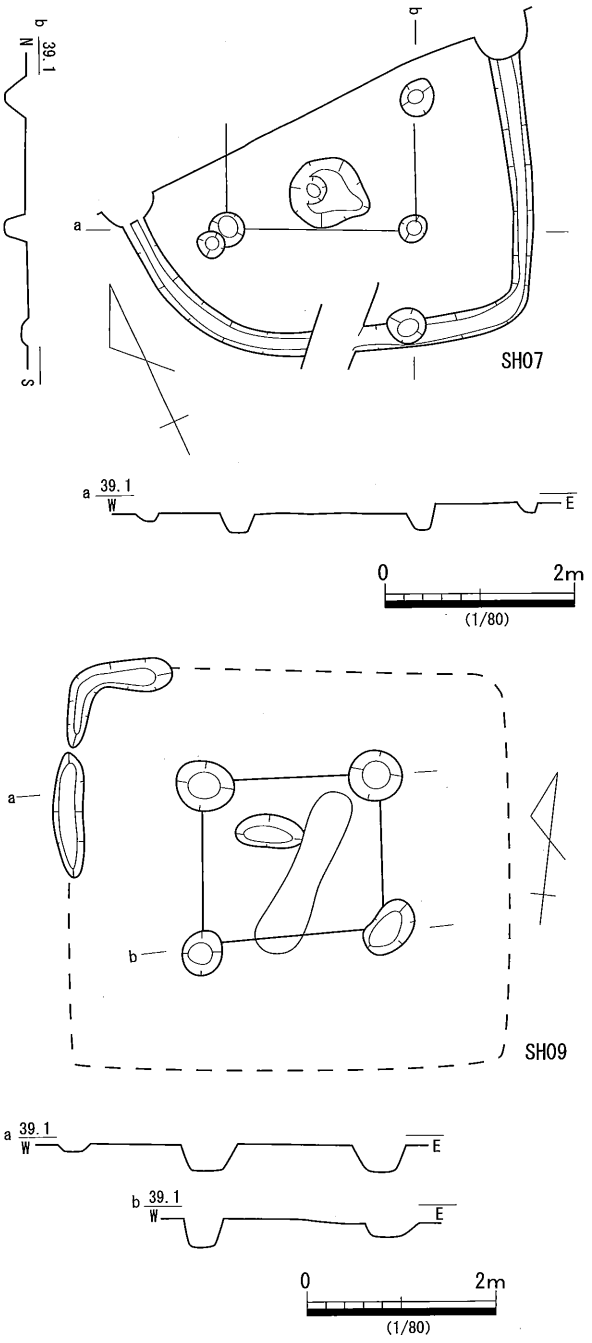
住居跡 SH06（第 162 図）

SH02 南側で検出した柱穴列から復元した住居跡である。直径約６ｍで円形に巡る７柱穴の組合せを基本として、北側に拡張柱穴列がみられる。柱穴間に小溝跡が１条伴う。炉跡や壁溝跡はみられない。SD12 の西側肩ラインが当住居の平面形に対応して彎曲することから、互いに関連するものと考える。柱穴は深さ 0.2 ～ 0.3 ｍで、やや浅いが、調査時の写真を見ると、調査時に底場まで掘りきれていないものもある。小溝跡の深さは 0.2 ｍである。なお、SH02 と約１ｍの重複がある。

柱穴や小溝跡からは出土遺物はなかったが、SD12 がこれに伴うとすれば、弥生時代後期後半古相に



第 162 図 住居跡 SH06 平・断面図



第 163 図 住居跡 SH07・09 平・断面図

位置づけられる。

住居跡 SH07（第 163 図）

SH02 西隣で検出した住居跡である。直径約 4 mの不整円形（一部直線的なラインがある）で、柱間 2 mの主柱穴を 3 穴もしくは 2 穴を検出した。また床面中央からやや南に偏って炉跡の可能性がある土坑 1 基を検出した。土坑内は特に炭化物が多いという訳ではない。

北側の柱穴は、南側柱穴との柱間が狭いことから、調査区外に本来の主柱穴が存在する可能性もある。なお、他の住居跡との重複はなく、出土遺物はなかった。

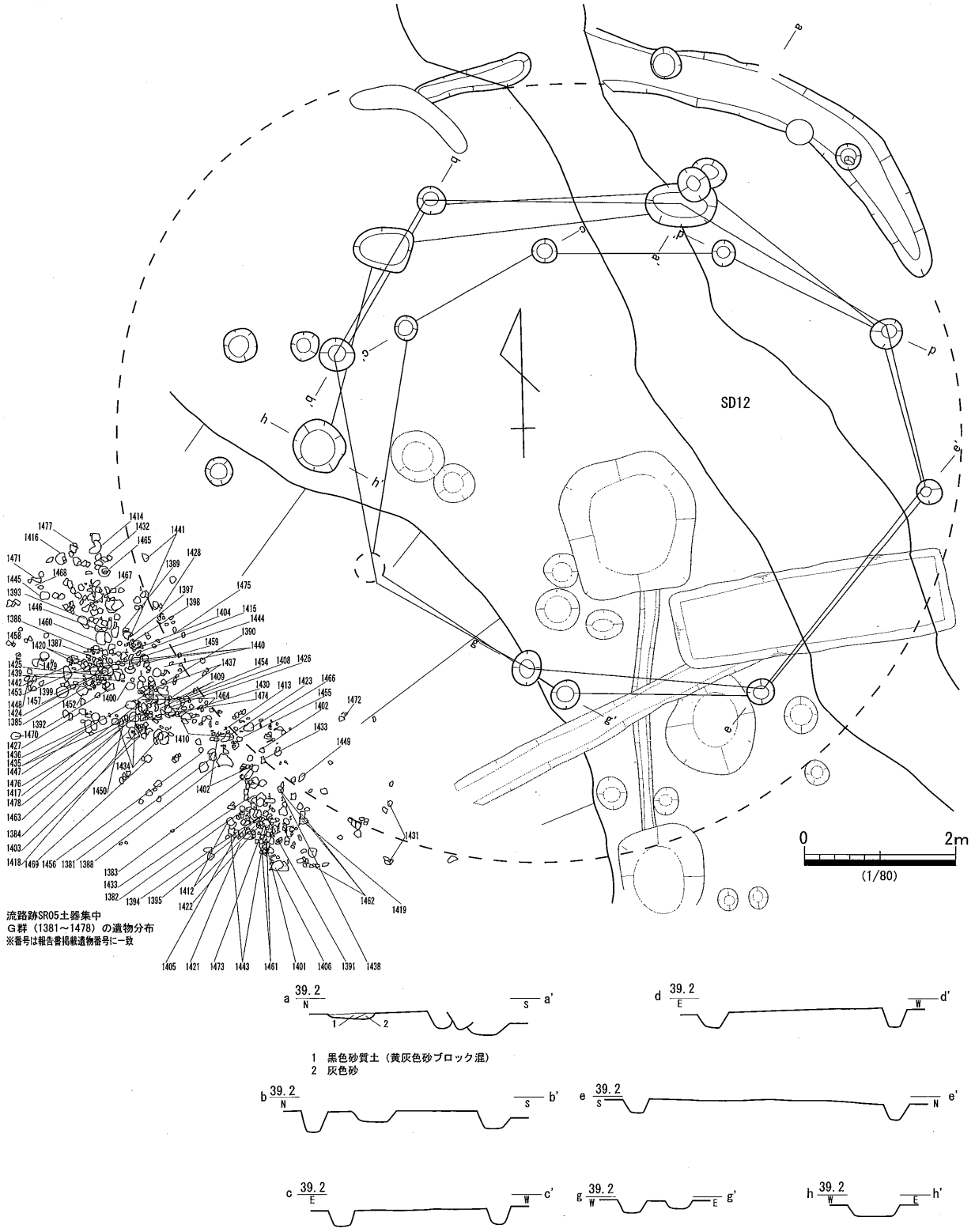
住居跡 SH08（第 164 図）

C地区西側微高地中央部、流路跡 SR05 と流路跡 SR06 の間で検出した住居跡である。8 基の柱穴が弧状に巡る。弧状柱穴列の直径は、6.5 ～ 7 m、北西側に拡張柱穴列が伴う。炉跡や壁溝跡は伴わない。柱穴列から北に 1 ～ 1.5 m離れて、幅 0.5 ～ 0.7m、深さ 0.15 mの溝跡が併走する。溝跡は北西側で一端途切れるが、この溝跡を延長した位置で、流路 SR05 土器分布G群の土器集中部が流路肩部の彎曲とは逆方向にカーブしながら分布することから、当該住居跡の北･東側は主に溝跡で画され、西～南は SR05 で画されていたものと推定した。柱穴や北西側溝跡からの出土遺物はないが、SR05 土器分布G群が伴うとすれば、弥生時代後期後半古～新相に位置づけられる。

なお、住居跡 SH06 に伴う溝跡 SD12 と完全に重複する位置にある。SD12 の土器で、残存状況の良いものは、いずれも当該住居跡想定範囲の外側で出土する。SD12 が弥生時代後期後半古相に位置づけられることから、当該住居跡は SD12 を切っていた可能性が高い。

住居跡 SH09（第 163 図）

住居跡 SH02 の南で、SH03 と大きく重複して検出した住居跡である。柱間約 2 mの 4 主柱穴と壁溝跡の一部が見つかっている。その位置関係から復元すると、一辺 4.3 ～ 4.6 mの方形竪穴住居跡が復元できる。中央やや北寄りに長さ 0.7 m、幅 0.3 mの炉跡の可能性がある小土坑を検出した。ただし、焼土や炭化物が目立つ訳ではない。

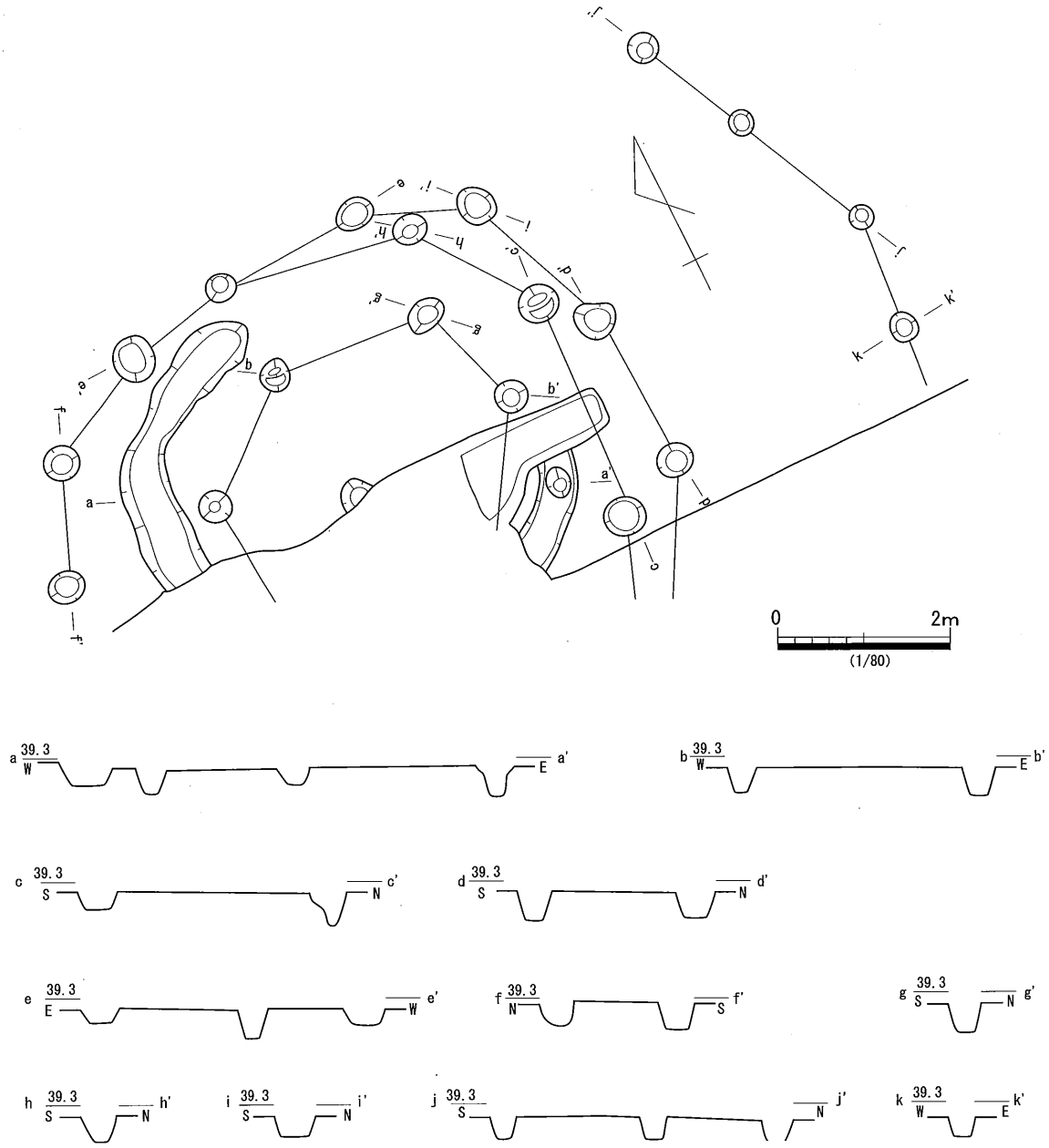


第 164 図 住居跡 SH08 平・断面図

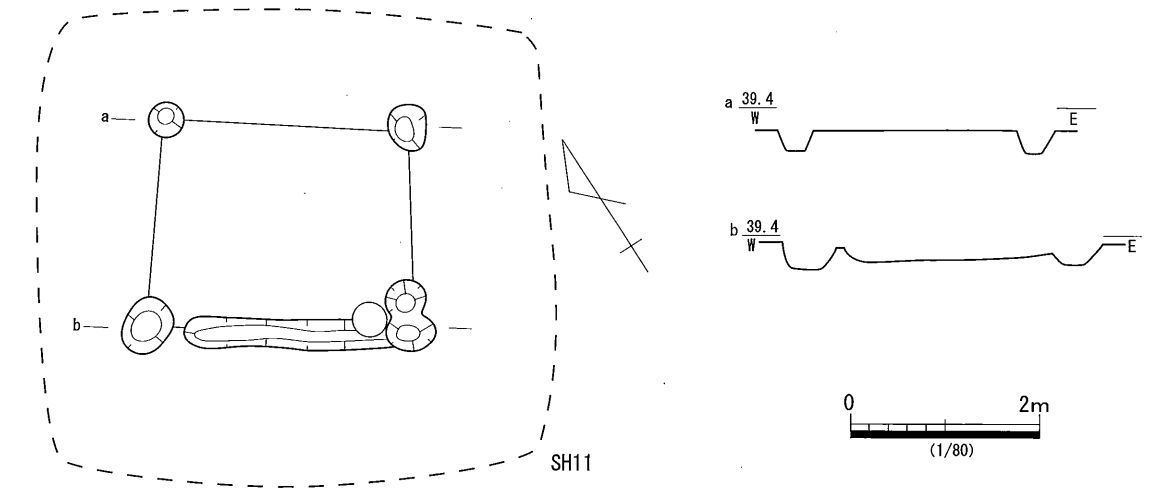
住居跡 SH10（第 165 図）

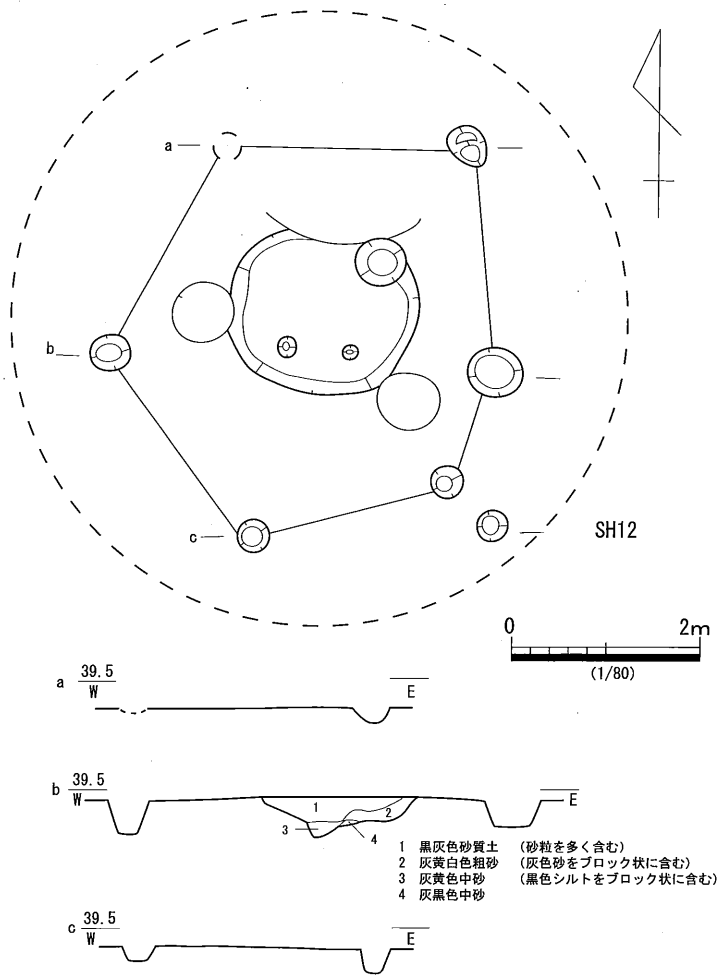
C地区西側微高地の西側、流路跡 SR05 西岸で検出した弧状に巡る柱穴列及び小溝跡である。直径 7 mの柱穴列、直径 3 ～ 3.4 mの柱穴列、その間に幅 0.3 ～ 0.6 mの小溝跡が巡る。さらに 3 mほど外に離れて、部分的に柱穴列が取り巻く。これらは、位置関係からみて互いに関連する住居跡の遺構と考えられる。また、中央には深さ 0.2 mの小土坑がある。柱穴の深さはいずれも 0.2 ～ 0.3 mである。最も内側の柱穴列は柱間距離が 1.5 ～ 1.9 m、外側の柱穴列は 1.3 ～ 2.6 mで、東側では拡張列が伴う。

内外の柱穴列は同時併存かどうか不明だが、小溝跡は貼床下部によくみられる溝跡の可能性があろう。また、最も外側の柱穴列は住居を画する柵列跡と考える。他の住居跡とは重複がない。



第 165 図 住居跡 SH10 平・断面図





第166図 住居跡SH11・12平・断面図

住居跡 SH11（第166図）

SR05西側で検出した方形に組み合う4個の柱穴である。柱間は2.2～2.7ｍで、柱穴間に小溝跡が1条伴う。小溝跡は深さ0.1ｍで、ベッド状遺構の段に設けられた土留板痕跡と考えられる。一般的な住居跡に照らして復元すると、一辺5ｍほどの方形竪穴住居と推定される。東の溝跡SD14は当該住居跡を迂回するようにカーブすることから、関連する遺構と考えられる。

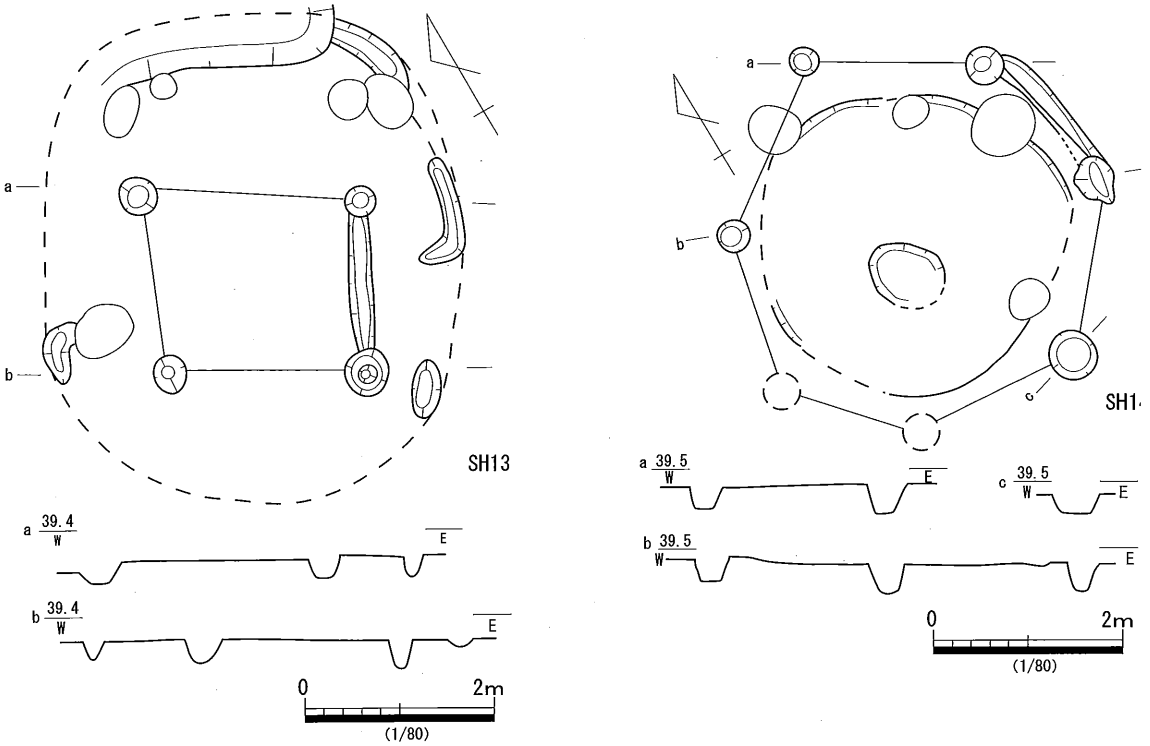
柱穴より、高杯脚部片896が出土した。直立する脚柱部は古墳時代高杯と比べ厚めで、裾部は強く開く形態である。弥生時代終末期と考えられる。なお、掘り形を考慮すると、後述するSH13と重複する位置関係にある。

住居跡 SH12（第166図）

SR05西側で検出した柱穴列および土坑である。柱穴列は5ないし6個の柱穴が直径4～4.5ｍで巡る。中央の土坑は長径2.0ｍ、短径1.7ｍの楕円形で、上層に黒灰色粘質土、下層に灰色系中砂が堆積する。炭化物等は目立たなかった。直径6.5ｍほどの住居跡と考えられる。

住居跡 SH13（第167図）

SR05西側でSH11と重複して検出した住居跡である。一辺2～2.3ｍで方形に組み合う柱穴4個と柱



第 167 図 住居跡 SH13・14 平・断面図

穴間の小溝跡１条、さらに壁溝状の溝跡を部分的に確認した。炉跡はみられない。壁溝跡の位置から全体形状を復元すると、長辺５m、短辺 4.5 mで隅角の大きい隅丸方形竪穴住居と推定できる。東約１m には小溝跡 SD14 があり、当該住居に最も近い位置で、溝跡が約２mにわたって途切れることから、互いに関連する遺構と考えられる。

住居跡 SH14（第 167 図）

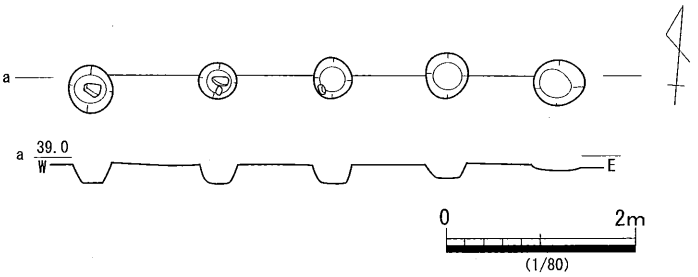
SR05 西側で、SH12 と重複して検出した住居跡である。7 個の柱穴が直径４mで円形に巡り、そのすぐ内側に直径 3.3 m、深さ 0.05 mの浅い窪みがある。さらにその中央には長径 0.82 m、短径 0.64 m、深さ 0.15 mの楕円形土坑がある。柱間の小溝跡が１条認められた。

浅い窪みは、ベッド状遺構下部に相当するものと考えられ、直径６mほどの住居跡が想定される。柱穴より、高杯脚部片 **895** が１点出土した。弥生時代終末期のものと考えられる。

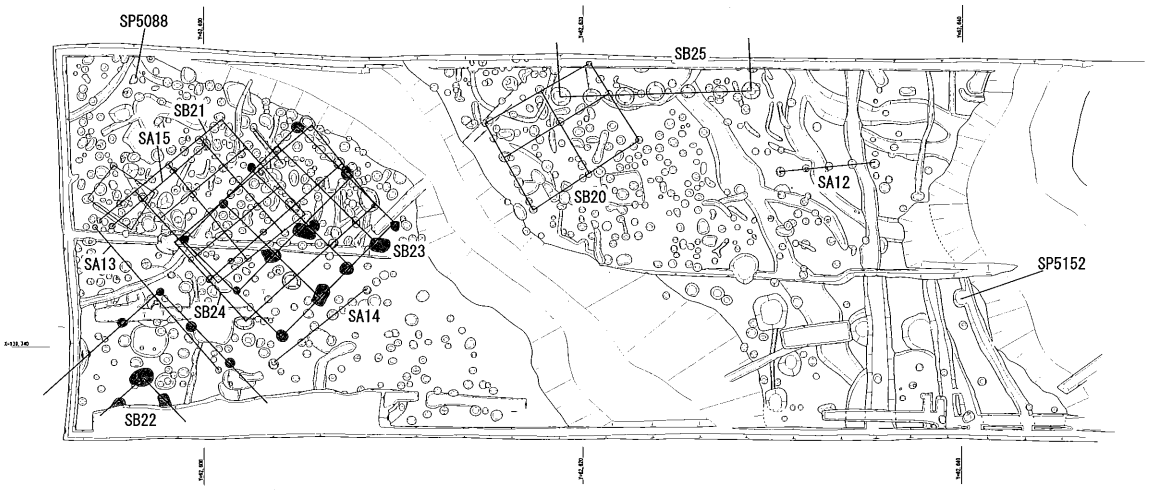
（6）掘立柱建物跡・柵列

柵列跡 SA12（第 168 図）

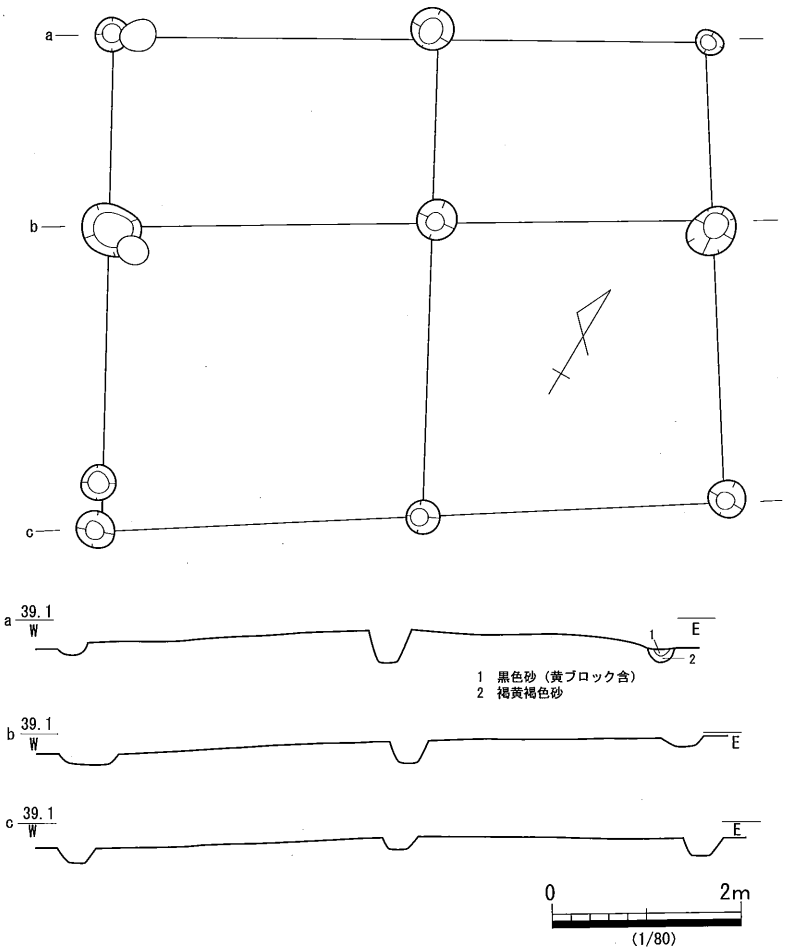
C地区西側微高地、SR06 西側で検出した柵列跡である。5 個の柱穴で構成し、延長５m、柱間１～1.2 mをはかる。主軸は N-85°-E で正方位に近い。柱穴は直径 0.4～0.5 m、深さは 0.1～0.2 mである。底に根石をもつ柱穴が２穴ある。出土遺物はなかった。切り合い関係から、SD16 より新しく、SD35 より古いことがわかる。



第 168 図 柵列跡 SA12 平・断面図



第169図　C地区掘立柱建物跡分布状況



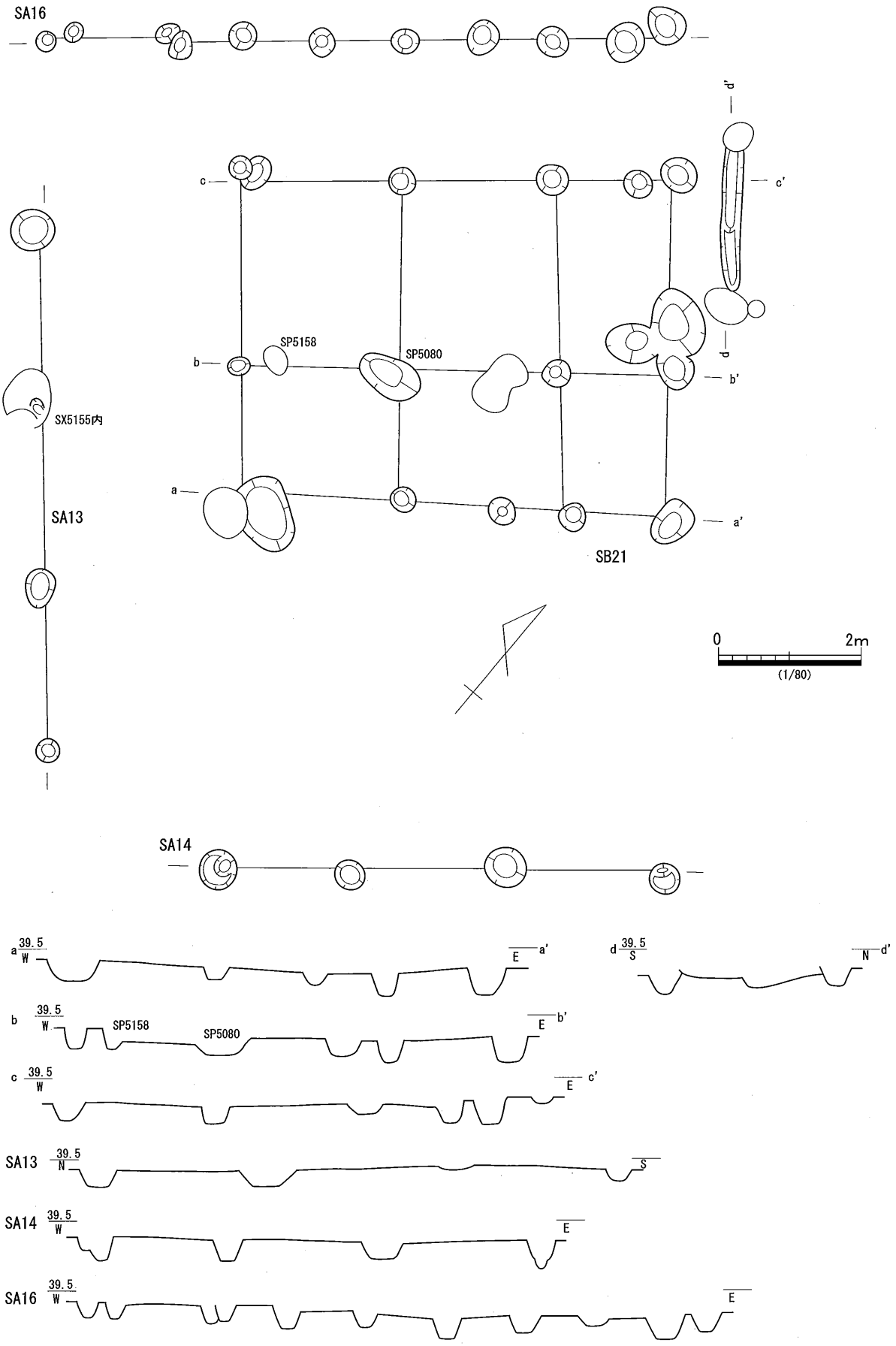
第170図　掘立柱建物跡SB20平・断面図

掘立柱建物跡SB20（第179図）

C地区西側微高地、SR05東側で検出した掘立柱建物跡である。2間×2間で復元したが、さらに北側に伸びる可能性もある。規模は5.2m×6.5mで、面積は33.8㎡となる。総柱構造だが、柱間が3m以上の部分もあり、中央の柱は束柱の可能性が高い。主軸方位はN-30°-Wで、直近のSR05に平行する。出土遺物はない。

掘立柱建物跡SB21・柵列跡SA13・SA14・SA16（第171図）

C地区西側微高地、SR05西側で検出した掘立柱建物跡・柵列跡である。SB21は梁間2間（4.7m）×桁行3間（6.0m）、面積28.2㎡で、主軸方位はN-40°-W。梁間の柱間距離が不均等で、北側の柱間距離が2.5m、南側が1.7mである。梁間側に雨落溝跡と推定される小溝跡が付属する。建物跡の北側には、約2mを隔て、柵列跡SA16がある。柱間1～1.2mのピッチで8～9基の柱穴が並び、長さは8.5mである。柱の位置関係はSB21の北側柱にほぼ対応することから、構造的に関連する可能性が高い。建物跡の西には2.8m離れて柵列跡SA13がある。柱間2.3mのピッチで4基の柱穴が並び、長さは7.5mである。建物跡の南に5m離れて柵列跡SA14がある。柱間1.8～2mのピッチで4基の柱穴が並び、長さは6.2



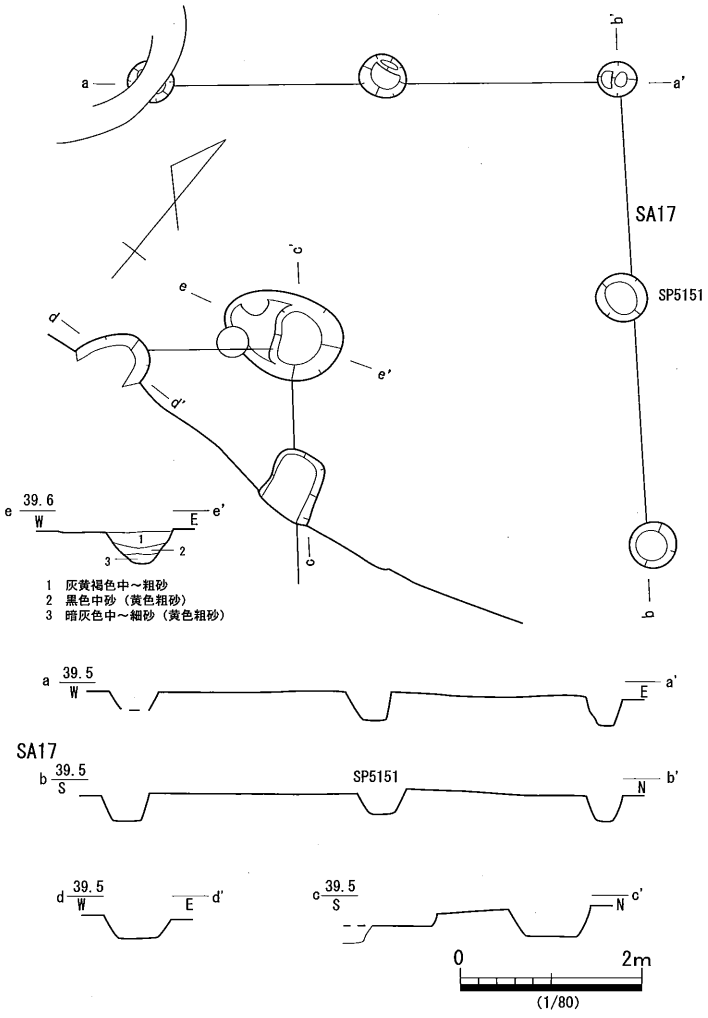
第 171 図 掘立柱建物跡 SB21・柵列跡 SA13・14・16 平・断面図

mである。

SB21の柱穴からは布留系土師器甕922、弧帯文を施文した絵画土器片925が出土した。925は弥生土器の混在であろう。柵列跡SA13からは布留系土師器甕923が出土した。いずれも古墳時代中期前半の時期が考えられる。

掘立柱建物跡SB22・柵列跡SA17（第172図）

C地区西側微高地、調査区南西隅で検出した掘立柱建物跡・柵列跡である。SB22は直径0.8～1mの大型柱穴3基が直角に配置されたものである。調査区外に延びる掘立柱建物跡のコーナー部と推定される。柱間は約1mと短めである。SA17はSB22の3m外側でそれを取り巻くように配置された柵列跡である。北側に柱間2.5mで3基(長さ5m)、東側に柱間約2.5mで3基（長さ5.4m）の柱穴がある。この柵列跡も調査区外に伸びる可能性が高い。主軸方位は建物跡・柵列跡ともN-39°-Wである。



第172図 掘立柱建物跡SB22・柵列跡SA17平・断面図

いずれの柱穴からも出土遺物はなかった。

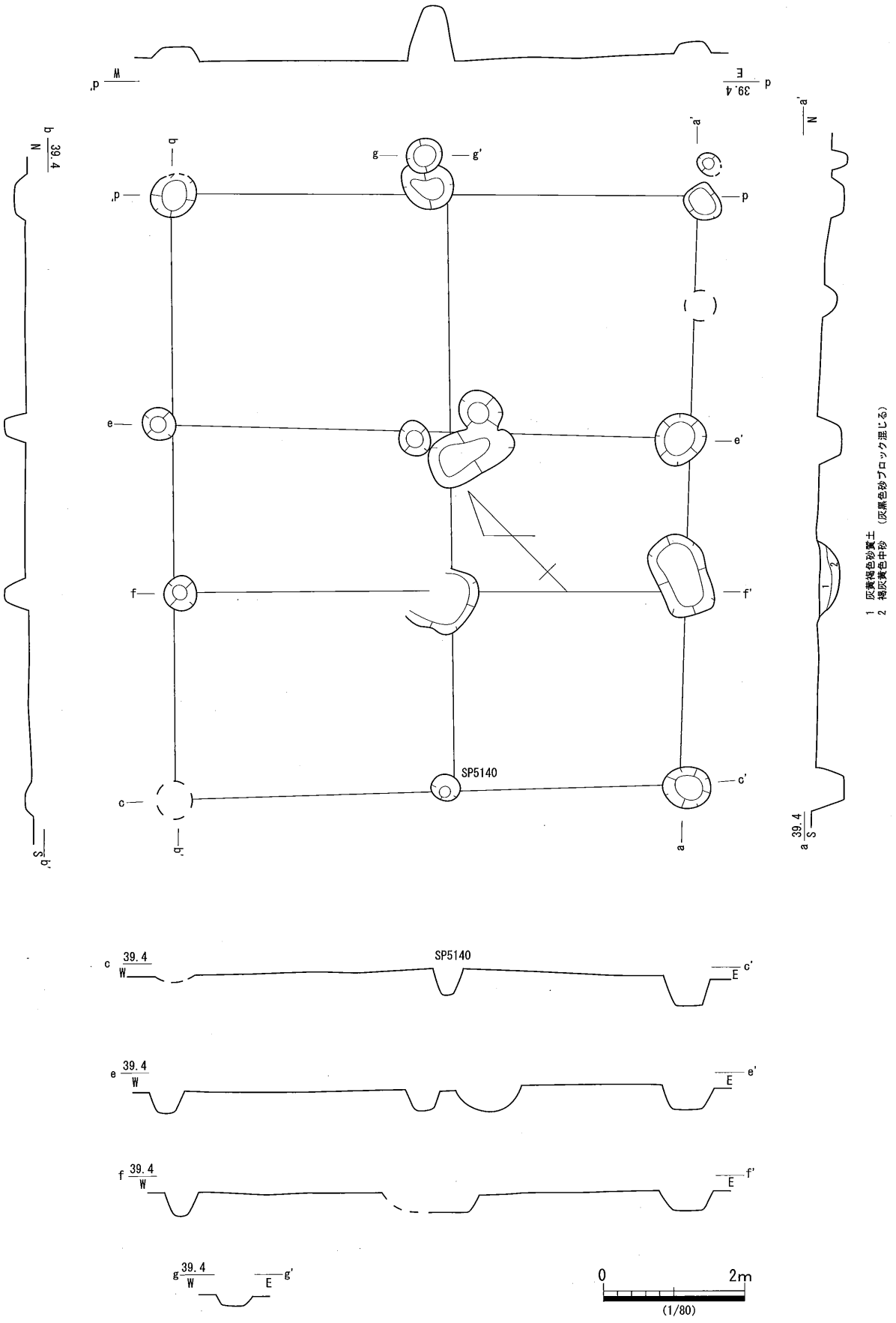
掘立柱建物跡SB23（第173図）

C地区西側微高地、SR05西側で検出した掘立柱建物跡である。梁間2間（7m）×桁行3間(8.5m)、面積59.5㎡で、主軸方位はN-44°-W。梁間の柱間距離が不均等で、北西側の柱間距離が3.8m、南東側が3.2mである。南東側のみ1間×3間の建物跡と考え、北側の柱穴を柵列跡とも解釈できる。この場合は、建物跡の面積は27.2㎡となる。柱穴は大小あり、直径0.4～0.6mの小型のものと、1mを超えるものまであり不均等である。南側に大型の柱穴が多いことから考えると、建物跡本体は南に限定すべきかもしれない。

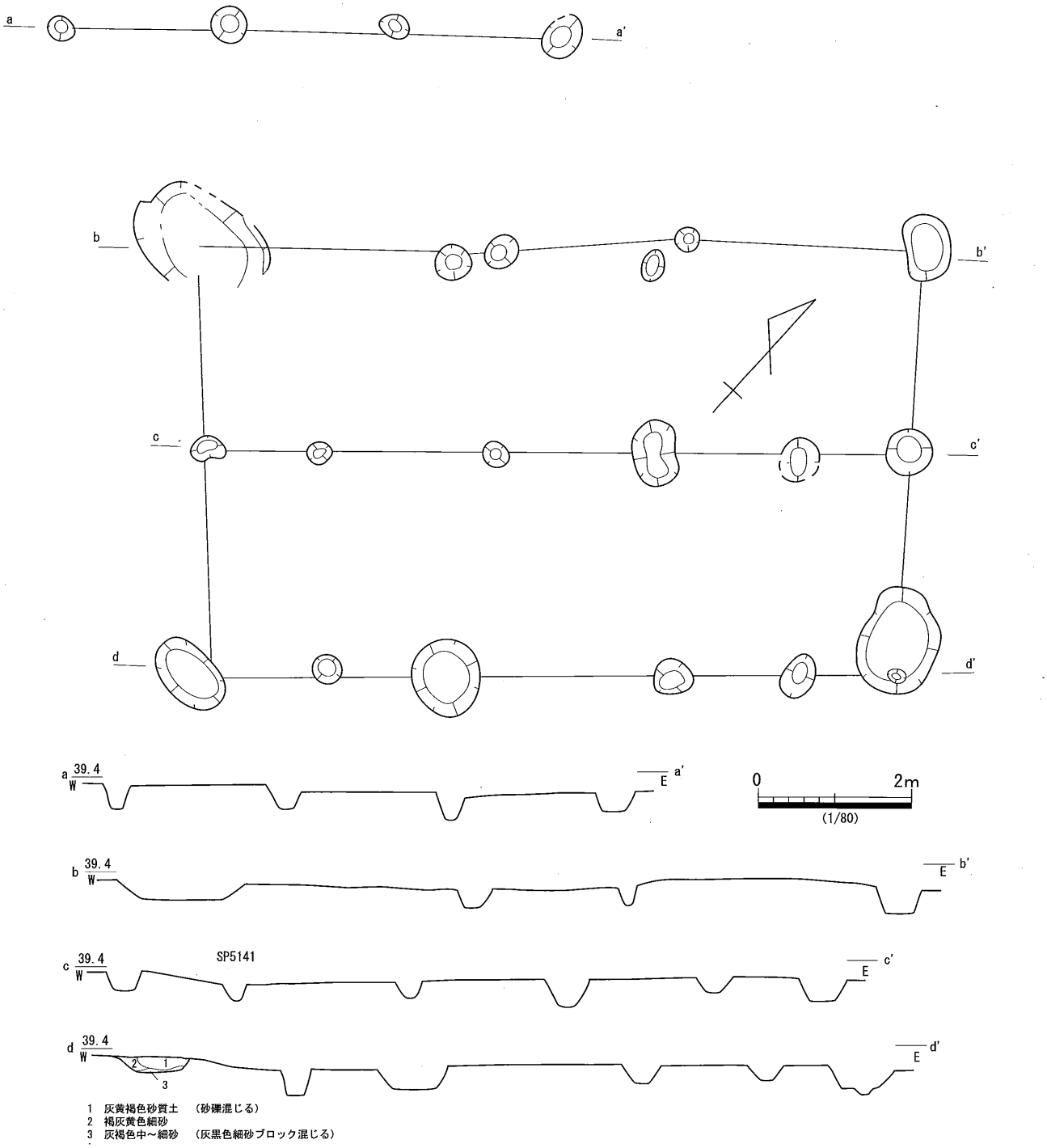
柱穴より土師器鉢口縁部片924が出土している。古墳時代中期前半の時期が考えられる。

掘立柱建物跡SB24・柵列跡SA15（第174図）

C地区西側微高地、SR05西側で検出した掘立柱建物跡である。梁間2間（5.6m）×桁行3間（9m）、面積50.4㎡で、主軸方位はN-42°-W。柱穴の規模は、隅柱や南側の側柱で長径1m超、束柱や中間柱で直径0.4mである。SB23と同様に大型建物跡である。建物跡北側の柵列跡SA15は、当該建物跡と主軸方向が一致し、柱間2～2.2m、長さ6.5mの規模である。出土遺物はなかった。



第 173 図 掘立柱建物跡 SB23 平・断面図

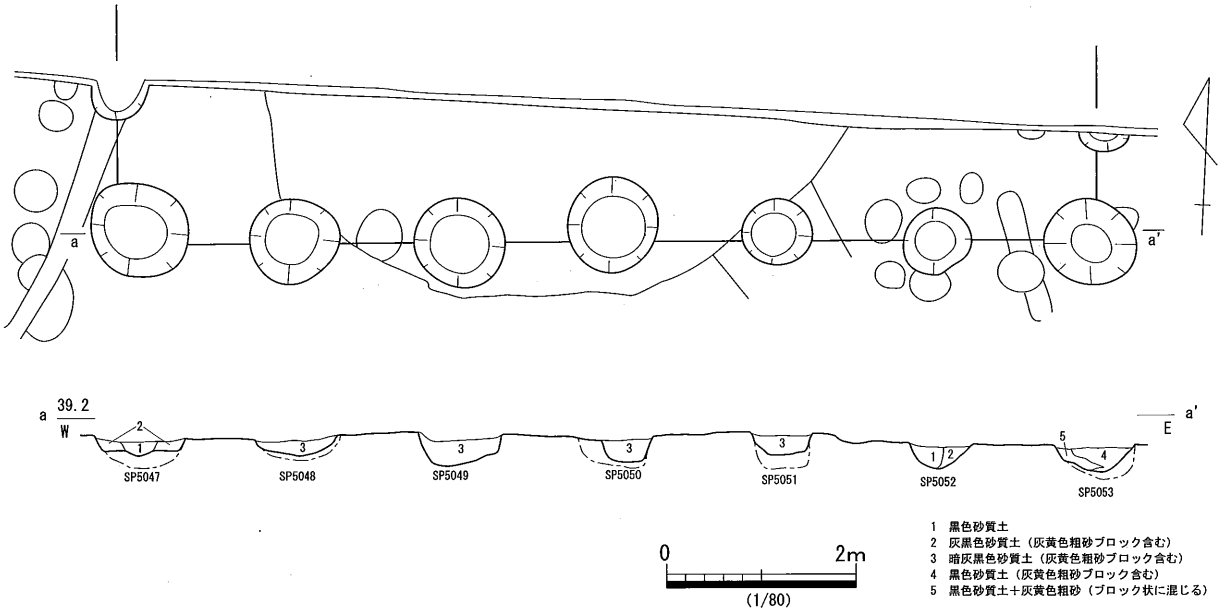


第 174 図 掘立柱建物跡 SB24・柵列跡 SA15 平・断面図

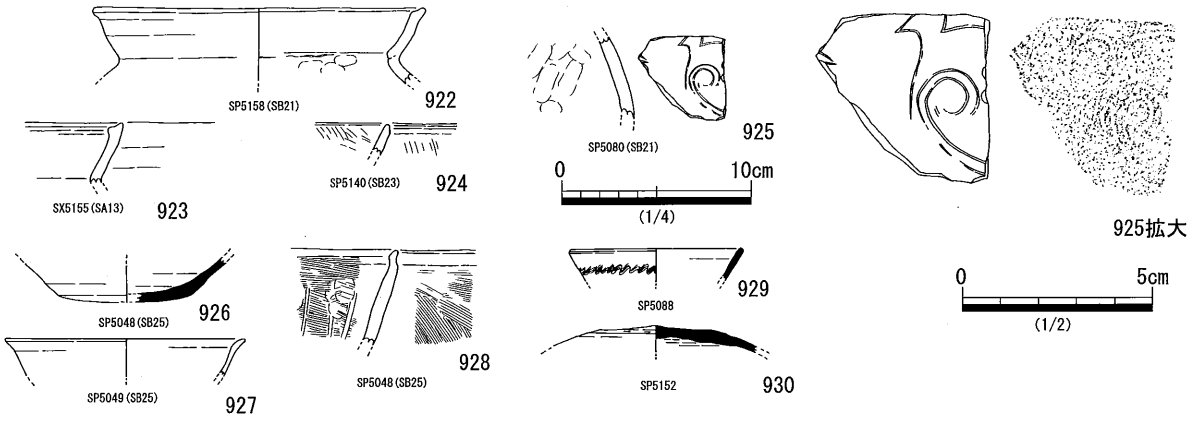
掘立柱建物跡 SB25（第 175 図）

C地区西側微高地、SR05、SR06 間で検出した掘立柱建物跡である。北側は調査区外に伸びる。全体規模は不明。桁行は 6 間で長さ 10.2 m、梁間は東西とも柱穴 1 基のみを検出したにとどまる。梁桁柱間は 1.5 mで、柱穴の規模は 0.8 ～ 0.9 mである。柱痕を一部検出しており、柱径は 0.24 m前後と考えられる。建物跡方位はほぼ正方位をとる。

柱穴より須恵器杯 926、土師器杯 927、弥生土器鉢 928 が出土している。このうち、927 は 10 世紀前半で、当該建物跡の所属時期を示すものである。



第 175 図 掘立柱建物跡 SB25 平･断面図



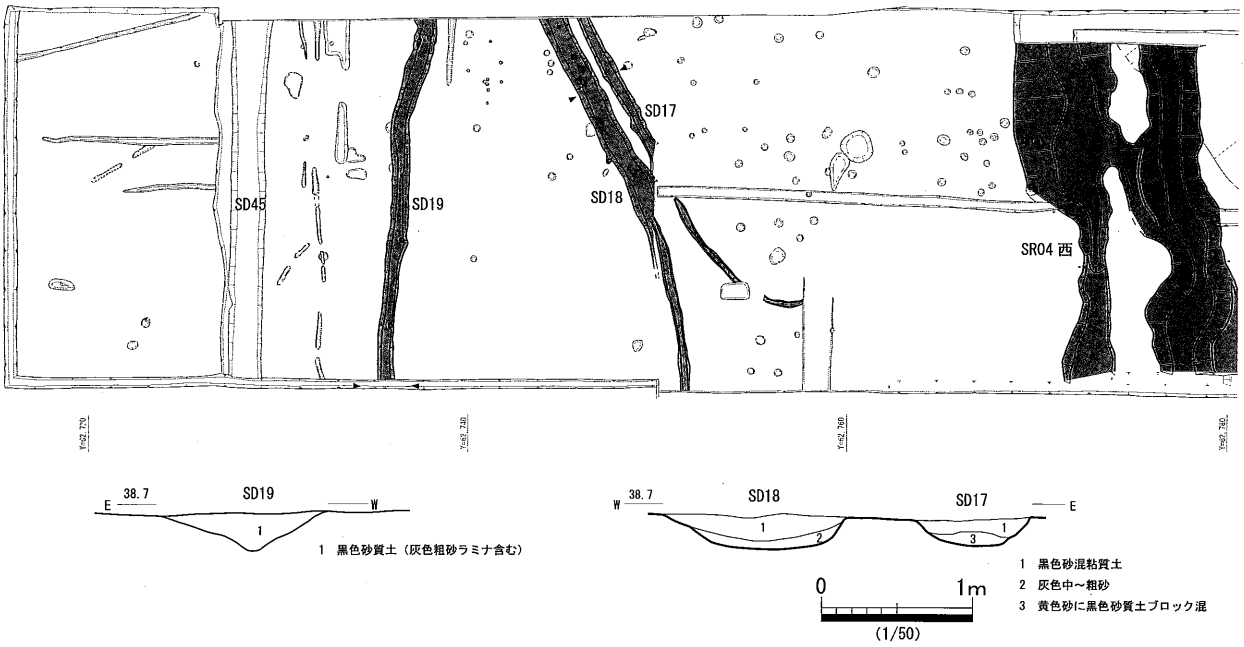
第 176 図 C地区建物跡群出土遺物

（7）溝跡

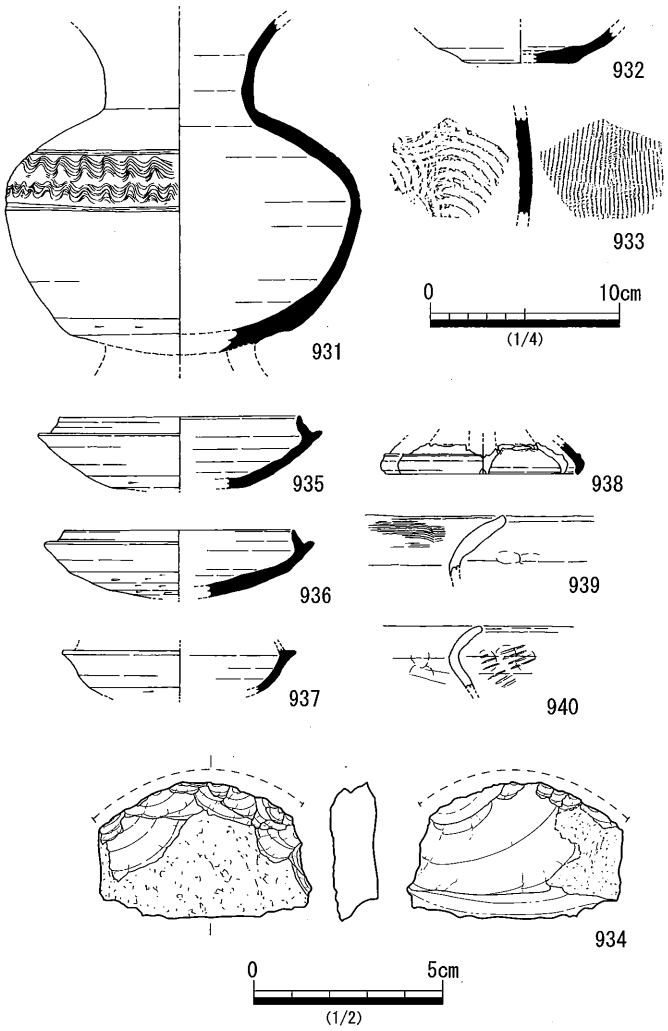
溝跡 SD17・18（第 177 図）

C地区東側調査区で検出した平行する２条の溝跡である。調査区南側では、SD17 が東から西に走行し、緩やかにカーブして北西方向に流れを変化させる。SD18 は真北から北西方向に方位を変え SD17 と平行する２条の直線な溝跡となって調査区外へ続く。

SD17 は南側では幅 0.3 m、北側で幅 0.7 mとなる。深さは 0.18 m。埋土は下層に黒色砂ブロックを含む黄色砂層で、上層に黒色粘質土が覆う。埋土中より、主に７世紀代の須恵器･土師器片が出土した。941 ～ 944 は須恵器杯蓋である。口縁部端が下方に短く屈曲するタイプで７世紀中葉ごろのものである。945 ～ 947 は須恵器杯身である。口縁かえり部が短く外側に反り返る形状。948 ～ 956 は須恵器高杯。957・958 は須恵器壺。959 は須恵器提瓶胴部片である。960・961 は須恵器直口鉢。962 ～ 969 はこれに伴う土師器である。一部 962 のような中世土師器もあるが、調査時の混在であろう。970 はサヌカイト製打製石斧の刃部片で、表面に線状痕を伴う摩滅が観察できる。



第 177 図 溝跡 SD17・18・19 平･断面図



第 178 図 溝跡 SD18 出土遺物

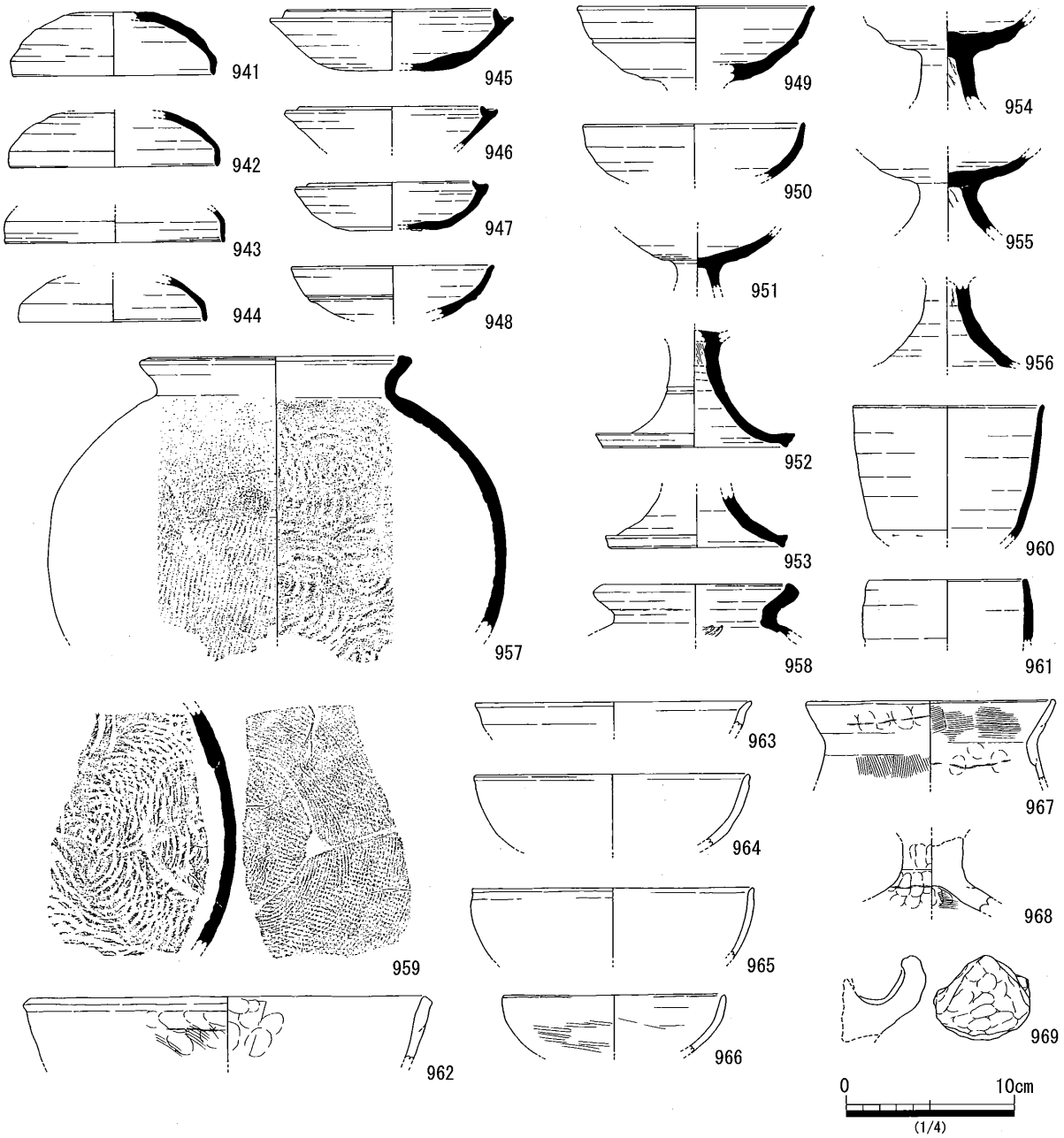
SD18 は南側で幅 0.5 m、北側では幅 1.1 mとなる。深さは 0.18 mと SD17 と同じである。埋土は下層に灰色系砂層、上層は黒色粘質土が覆う。埋土中より、須恵器片・石器片が出土した。931 は須恵器台付壺で 6 世紀後半、932 は須恵器杯身片で 7 世紀中葉ごろ、933 は 6 世紀後半ごろの須恵器甕胴部片である。934 はサヌカイト製の石核である。上縁に敲打痕が残り、下縁は欠損する。

溝跡 SD19（第 177 図）

C地区東側調査区（４区）で検出した溝跡である。真北に向かって走行し､幅１m、深さ 0.2 mをはかる。埋土中より古墳時代後期の遺物が出土しており、SD17・18 と同時期もしくは前後する時期に機能したものと考える。935 ～ 937 は須恵器杯身で 6 世紀後半代、938 は須恵器無蓋高杯脚端部片で長方形透かしの下端部が残る。939 は土師器甕、940 は弥生土器甕の混在品である。

溝跡 SD20 ～ SD33（第 180 図）

C地区西側微高地の SR05 埋没後に設け

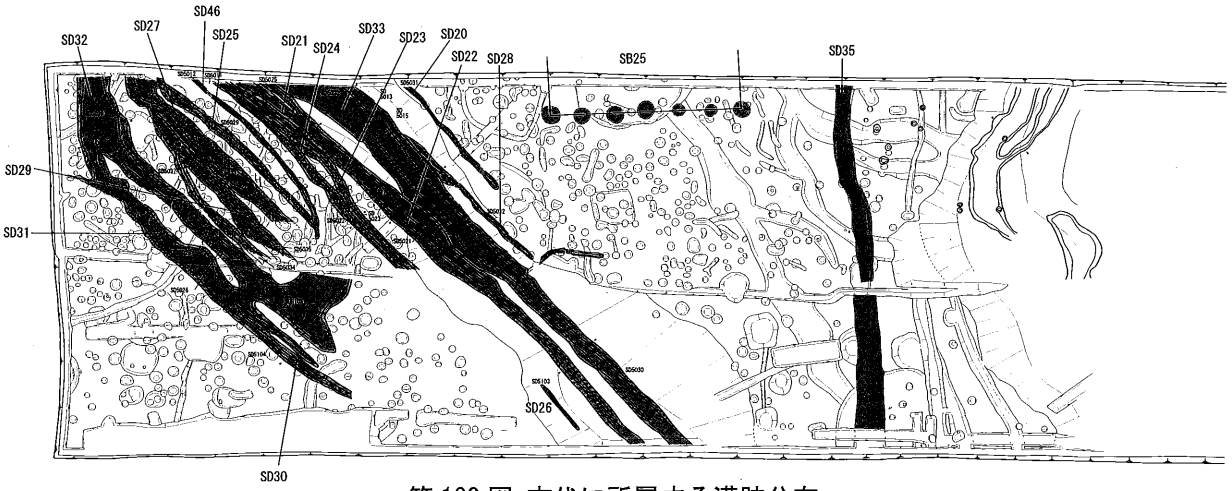


第 179 図 溝跡 SD17 出土遺物

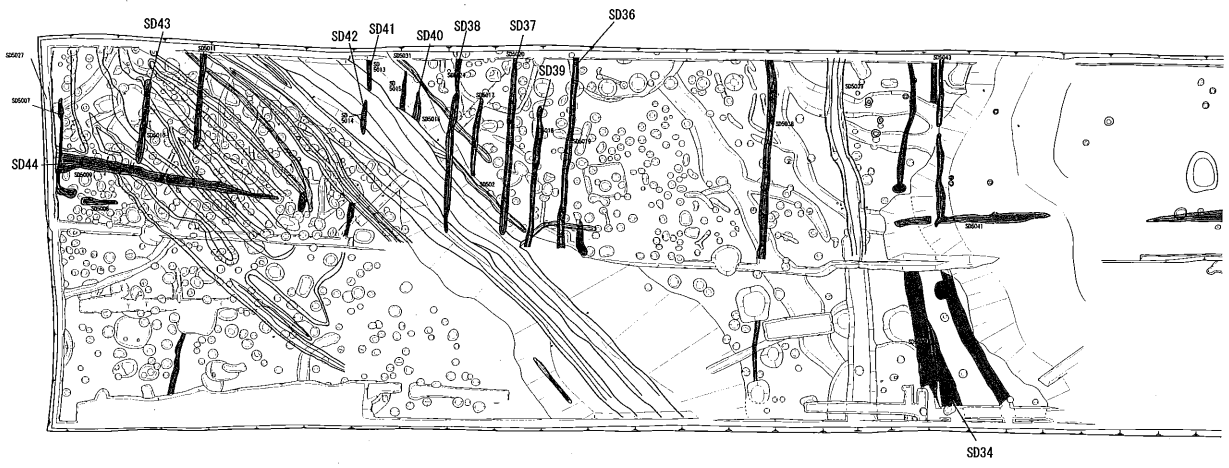
られた溝跡群である。東西 15 ｍの範囲に、いずれも約 40 ° 西に傾く方向で 13 条の溝跡が合流・分岐する。主たる溝跡は SR05 の流路中心域に相当する SD33 である。SD33 は幅約 2 ｍ、深さは 0.25 ～ 0.3 ｍで規模が大きい。SD22・31・32 も幅 1 ｍを超える規模をもつ。これらは、いずれも南東から北西に向かって溝跡底が下降する。SR05・SR06 が蛇行しながら西から東に向かって走行したとすれば、SD33 は SR05 埋没後にその下流から上流に向かって掘削されたものと考えられる。SR05 が埋没後、あるいは埋没途上において主たる河川水流が失われ、

当該地周辺の用水管理が広域化したことを示しているものと考えられる。埋土はいずれも灰褐色～灰黒色砂層で、粗砂や細礫を含むものが多く、頻繁な水流が想定できる。

出土遺物は971～1008がSD33以外の溝跡がから出土したものである。SR05やその西側の住居跡、建物跡に含まれる土器を相当巻き込んでおり、弥生土器や古墳時代中期の韓式系土器･布留系甕などが出土している。しかし、1008の黒色土器や1004の土師器杯、1007の東播系須恵器などの、古代～中世の遺物はこれらの溝跡の機能時期を示しており、長期にわたる用水機能が想定できる。

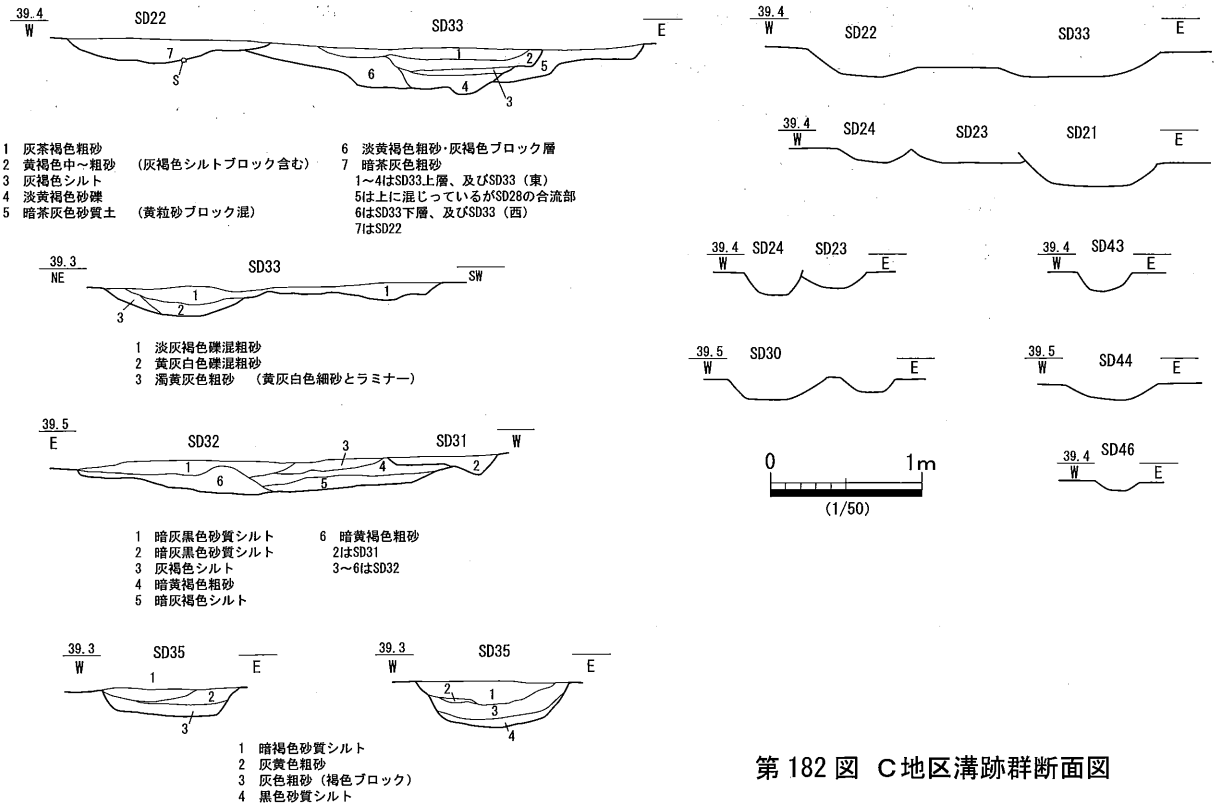


第180図 古代に所属する溝跡分布



第181図 条里方向の溝跡分布（主に中世）

1009～1055はSD33出土の遺物である。SR05出土土器の年代幅と重複し、弥生時代前期から7世紀代のものを含む。図化したものの多くは、元来SR05に含まれていたものと推定される。そのうち、1009～1018は7世紀中葉から後半の須恵器である。SR05埋没直後の時期を示しているものと考えられる。1019は初期須恵器の瑞である。口縁部および胴部上半に精緻な櫛描文波状文を施す。1020～1022・1024は軟質韓式系土器である。1020は上面に切り込みのある甑把手部、1021・1022は外面に縦方向の平行叩きを施し、内面に指押さえ痕が残る胴部片。1022は上部が内彎気味で壺肩部片かもしれない。1023は口縁端部外面須恵器甕口縁部によく似た突線が巡り、内面には強いナデによる窪みが巡る。須恵器壺の形態を摸倣した軟質の壺であろう。1025は布留系土師器甕、1026は口縁端部が内側に突出する形態の土師器甕、1027は布留系の土師器複合口縁壺、1028・1029は大型の土師器甕である。



第 182 図　C地区溝跡群断面図

1030・1031 は土師器高杯である。

1032 ～ 1047 は弥生後期土器、1049・1050 は弥生前中期土器である。このうち、1032 ～ 1034 は下川津Ｂ類に近い形態でありながら、口縁胴部境の内面に強い屈曲がみられない、胴部外面のハケ調整の方向が左上がりとなる、などの点で異なり、胎土も角閃石が少なく雲母が多いなどの特徴がある。第６章第６節の胎土分析では、これらをＢ２類系とした。以下、下川津Ｂ類とそれに近いＢ２類の区分が困難なものをＢ類系と呼ぶ。1035 は高松平野に類例が多い一般的な下川津Ｂ類甕である。また、1046 は粗製で薄手の直口鉢で製塩土器の可能性もあるが、類例がなく不明である。なお、1003・1019 の須恵器は胎土分析の結果、和泉陶邑窯産と推定される（第６章第５節参照）。

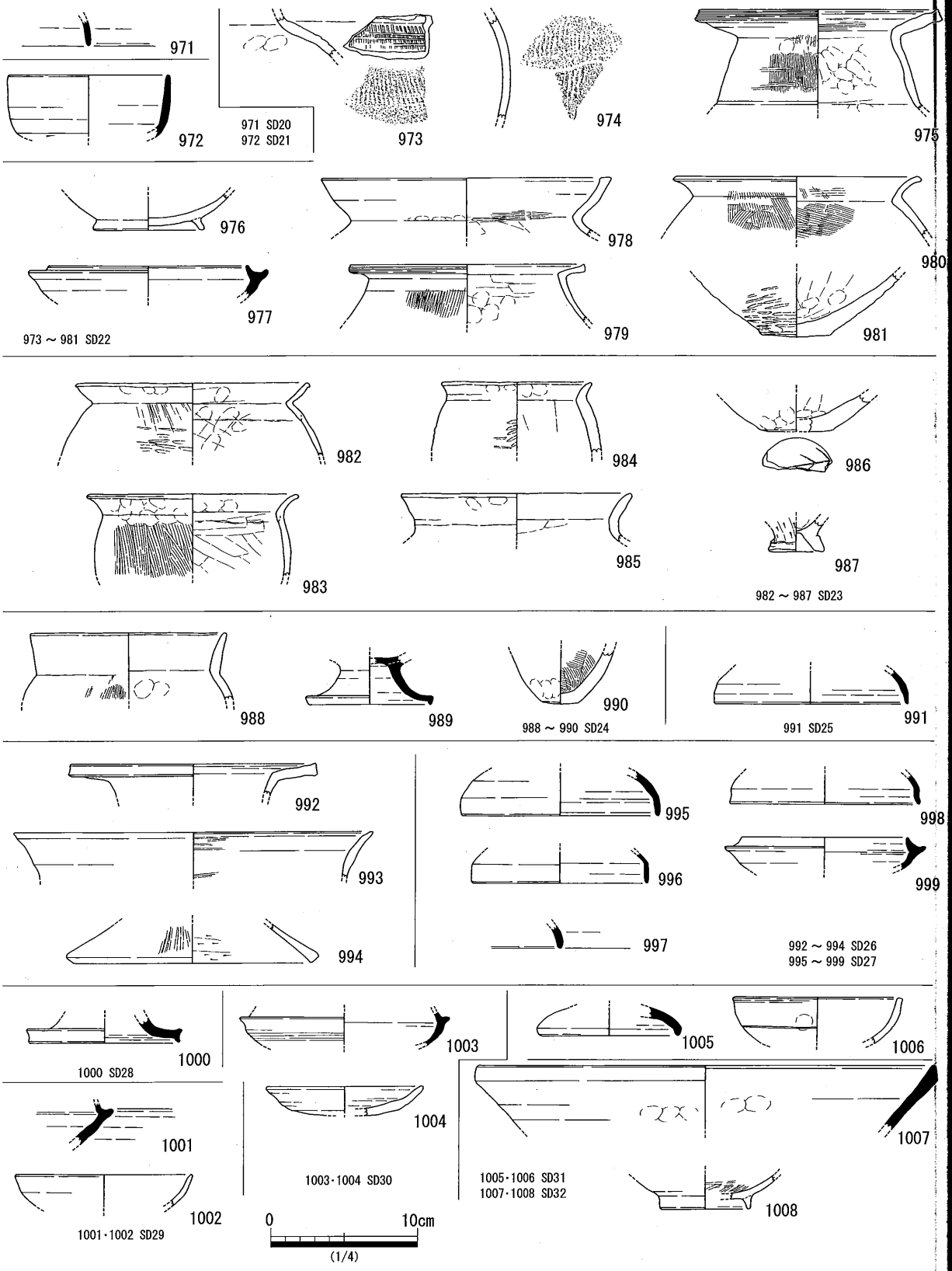
1051 ～ 1055 は当該溝跡埋土より出土した石器である。1051 は石鏃、1052 は削器としたが、周縁加工の入れ方からみて石鏃未製品の可能性がある。1053 はサヌカイト製削器、1054 は刃部に摩滅がみられる安山岩製石庖丁片である。1055 は全面強い研磨に覆われた磨石である。

溝跡 SD34・SD35（第 180・186 図）

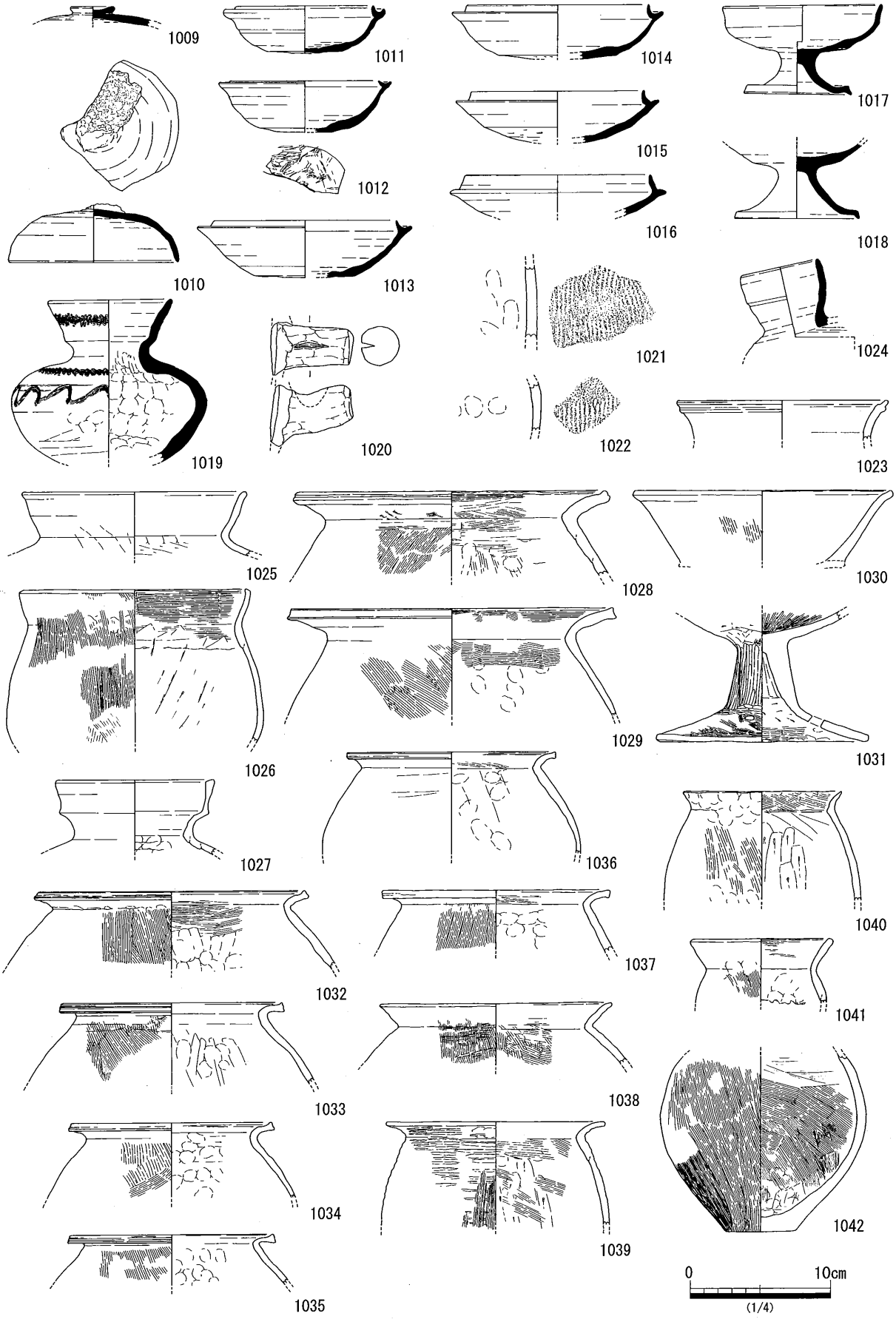
Ｃ地区西側微高地中央部の SR06 西側で検出した２条の併走する溝跡である。いずれもほぼ真北に向かって流下する。後述する小規模な溝跡とは埋土と規模が異なり、灰黒色系砂層で埋没する。SD34 出土の 1056 は須恵器甑、1057 は弥生土器甕である。いずれも混在品と考えられる。1056 は胎土分析の結果、和泉陶邑窯産と推定している。1058 ～ 1065 は SD35 出土土器である。このうち、1058 は韓式系土器の小片、1062・1063 は須恵器杯身である。この他の 1059 ～ 1065 は土師器甕・鉢である。須恵器・土師器からみて溝跡の所属時期は７世紀末ごろと推定される。

溝跡 SD36 ～ 44（第 181・187 図）

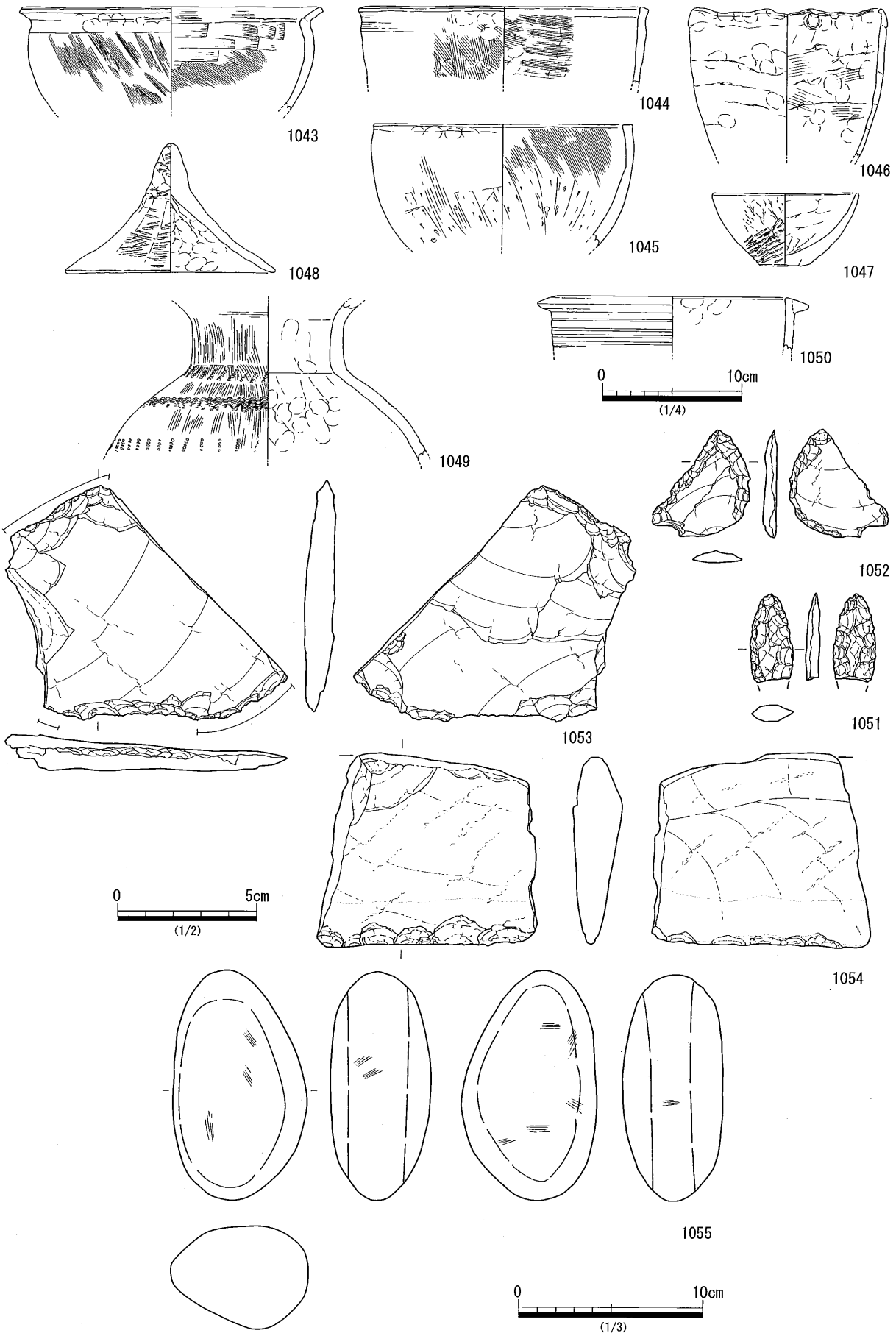
Ｃ地区西側微高地の最上層で検出した灰白色系埋土の多数の小溝跡群である。溝跡幅 0.3 ～ 0.6 ｍで、



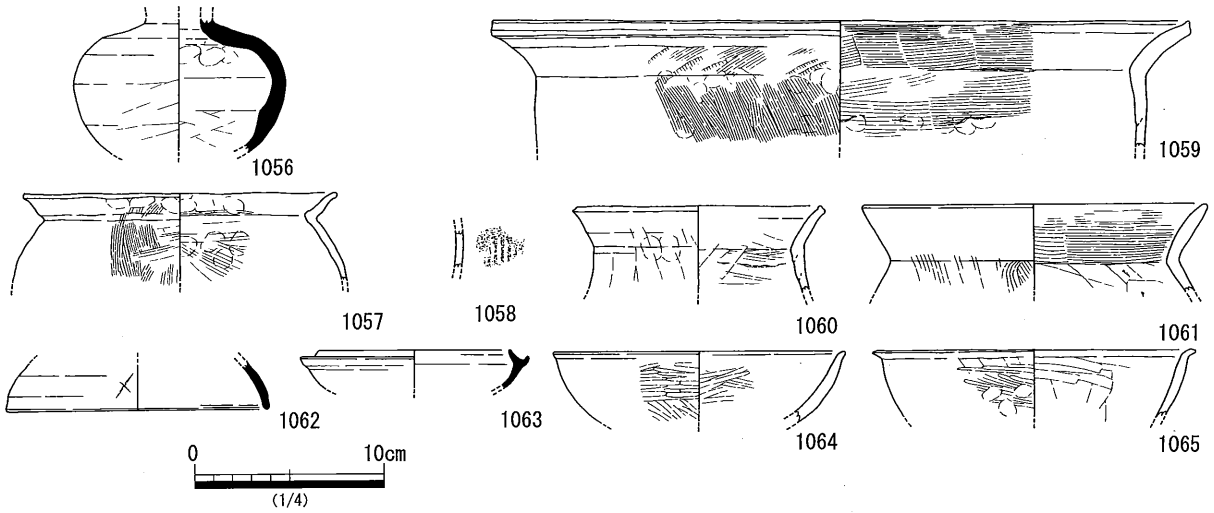
第 183 図 溝跡 SD20 ～ 32 出土遺物



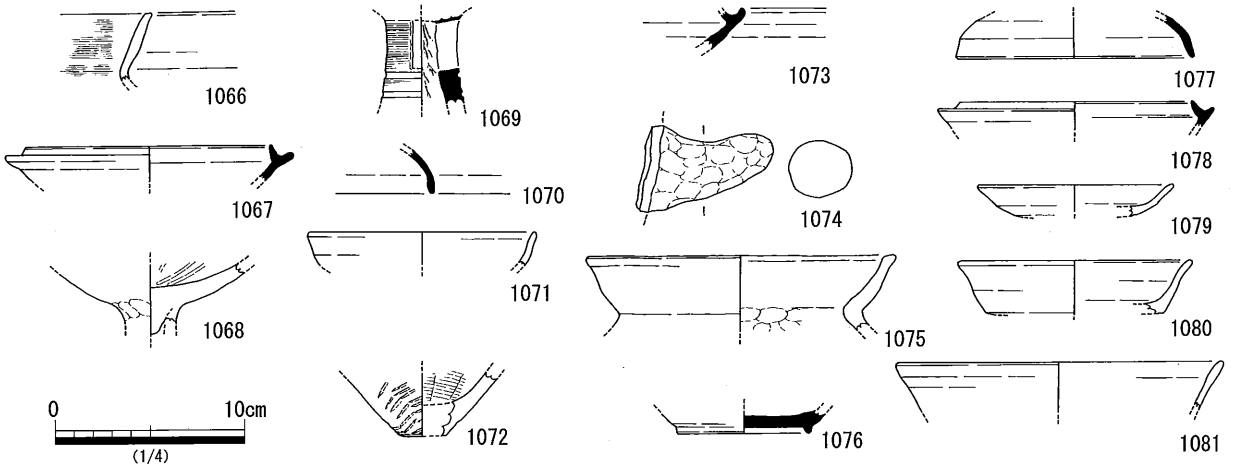
第 184 図 溝跡 SD33 出土遺物 (1)



第 185 図 溝跡 SD33 出土遺物 (2)



第 186 図 溝跡 SD34・35 出土遺物



第 187 図 溝跡 SD36 ～ 44出 土遺物

約 1 mずつ間隔を隔てて真北方向に掘削される。一方、それらに直交する SD44 は、西から東に向かって、途中途切れながら延長 63 mにわたって流下する溝跡である。これらの溝跡は、形状からみて鋤溝跡の可能性が高い。これらの溝跡から出土した土器 1066 ～ 1081 のうち、1079 ～ 1081 は 13 世紀～ 14 世紀ごろの土師器であり、溝跡群の時期を示しているものと考えられる。

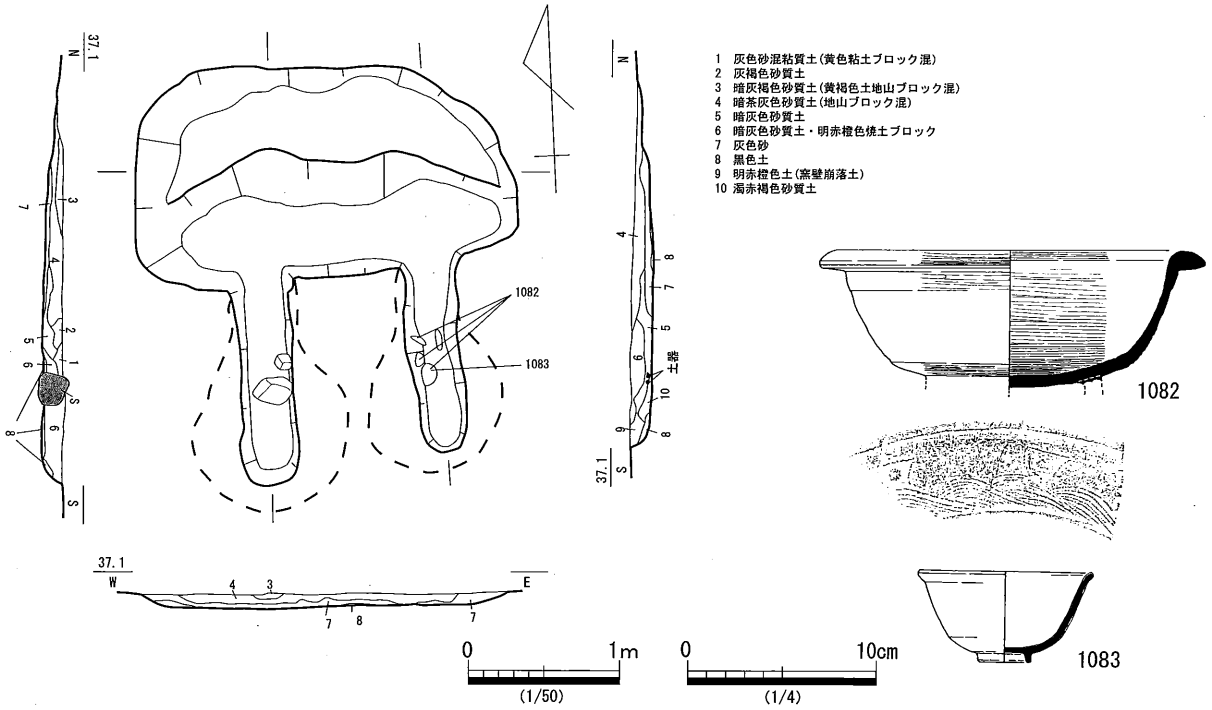
（8）近世以後の遺構

砂糖製造竈跡 SX13（第 188 図）

C地区西側微高地の中央部、SR06 より東側で検出した砂糖製造竈跡である。東西 2.5 m、南北 1.4 mの不整方形の浅い落ち込みの南側に、2 連の焼成部が付属する。焼成部は幅 0.3 m、長さ 1.4 mの細い溝跡状掘り形で、その周囲が平面無花果状に赤色化する。周辺に小穴が分布するが、規則的な分布ではない。焼成部掘り形内で 1082 の瓦質茶釜、1083 の施釉陶器が出土した。出土遺物から江戸時代末ごろのものと考えられる。

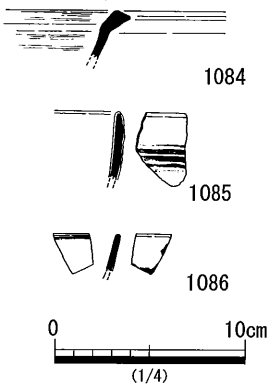
溝跡 SD45（第 189 図）

C地区東側微高地（4 区）の西側で検出した溝跡である。現況地割に沿って南北方向に掘削された直



第 188 図 砂糖製造竈跡 SX13 平・断面図、出土遺物

線溝跡である。幅 1.8 m、深さ 0.5 mで、埋土は暗灰色砂質土。埋土中より、瓦質の焙烙片 1084、施釉陶器片 1085、磁器片 1086 が出土した。江戸時代末ごろと考えられる。



第 189 図 溝跡 SD45 出土遺物

（9）その他の遺構

そのほか、C地区西側調査区東側に溝跡状遺構や不定形な遺構がある。これらは、出土遺物がまったくみられず、時期決定が困難な遺構である。SX14 とした浅い落ち込み付近には、周辺条里型地割から復元される条里坪境想定線が見込まれるが、SX14 の平面形は不定形であり、坪境を示す材料はない。調査範囲内で坪境想定線と重複するのはこの位置だけであり、条里との関係は不明といわざるを得ない。

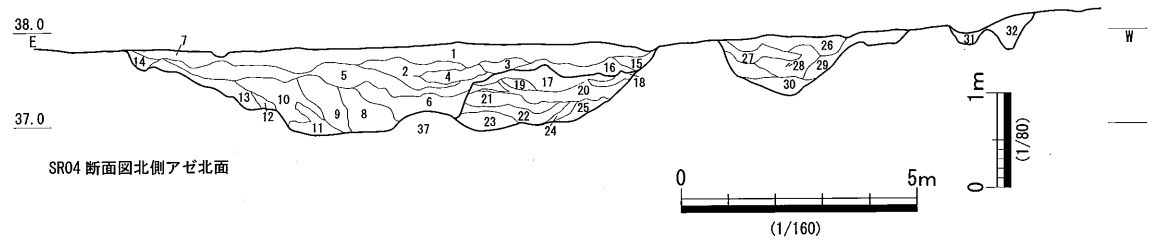
第６節　流路跡

流路跡 SR04（第 190 ～ 201 図）

Ｃ地区東端で検出した流路跡である。川幅は検出面で約 20 ｍだが、上部堆積層を掘り下げると、東側の幅 10 ｍの流路跡本体と、それを切る西側の幅３～４ｍの溝状流路跡に分かれる。前者は自然河川跡だが、後者は人工的な掘削を伴う溝状の流路跡の可能性がある。流路跡本体を SR04E、後者の溝状流路跡は SR04W と区分する。

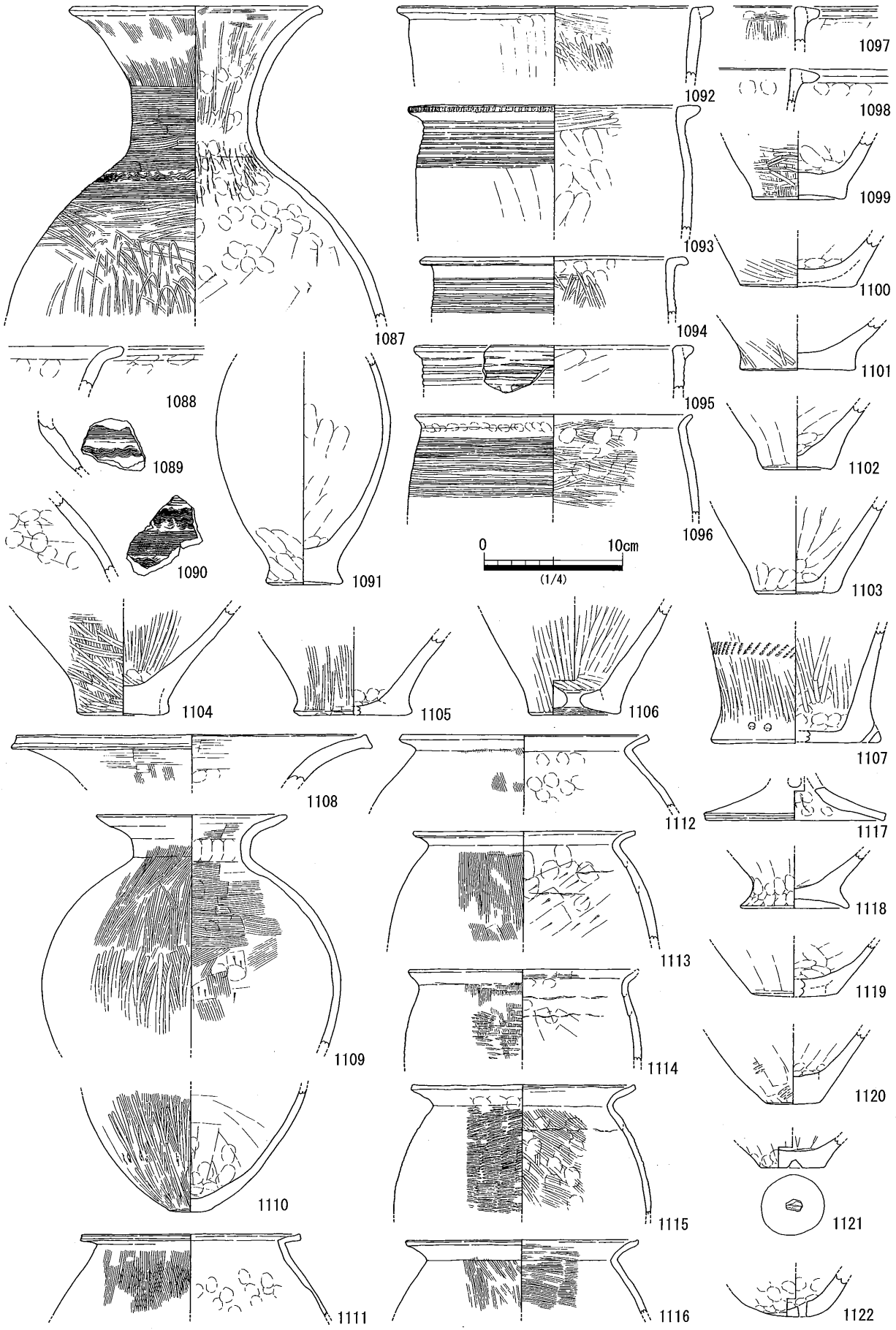
SR04E は深さ約１ｍで、下層の砂礫層中に弥生時代前期～中期の土器が含まれる。ただ、砂礫層には古墳時代中期～後期の土器も多数含まれており、流路跡自体は長期にわたって継続したものと考えられる。一方で SR04W は弥生時代後期の土器と７世紀代の土器が多数を占める。SR04E と相前後しつつ併存した流路跡と考えられる。ただ、周辺条里型地割と合致する方向性が読み取れる点では溝跡として見た方がよいかもしれない。二つの流路跡の埋没後、上部を覆う土層（上層）には８世紀以降の土器が多い。上層は水平堆積でややシルト質の砂質土層である。水田耕土の可能性もあるが確証はない。

出土遺物は流路跡ごと、あるいは各層位ごとに提示できていないために見づらいが、時期ごとに提示した上で、個別に出土位置を明示したい。1087 ～ 1103 は弥生時代前期～中期の土器である。1087 ～ 1091 は壺である。1087・1089・1090 は頸部から胴部上半にかけて複帯櫛描文を施すものである。1091 は胴部が細い形状の壺。1092 ～ 1098 は甕である。1094・1096 以外は口縁部に粘土帯を貼り付ける逆Ｌ字口縁甕である。ヘラ描き沈線多条もしくは櫛描文を施すものが目立つ。最下段への刺突文ばどの施文はみられない。1099 ～ 1105 は底部片である。外面にヘラミガキを施すものは壺底部、板ナデ調整の 1102・1103 は甕底部と考えられる。1106 は底面に焼成後の穿孔を施す甑である。1107 は直口鉢底部で底縁に２個一対の紐掛孔をもち、胴部に櫛原体による刺突を巡らせる。以上の土器のうち、1087 ～ 1090・1093・1097・1105・1107 は SR04E で出土、1094・1098・1102 は SR04W 出土、その他の

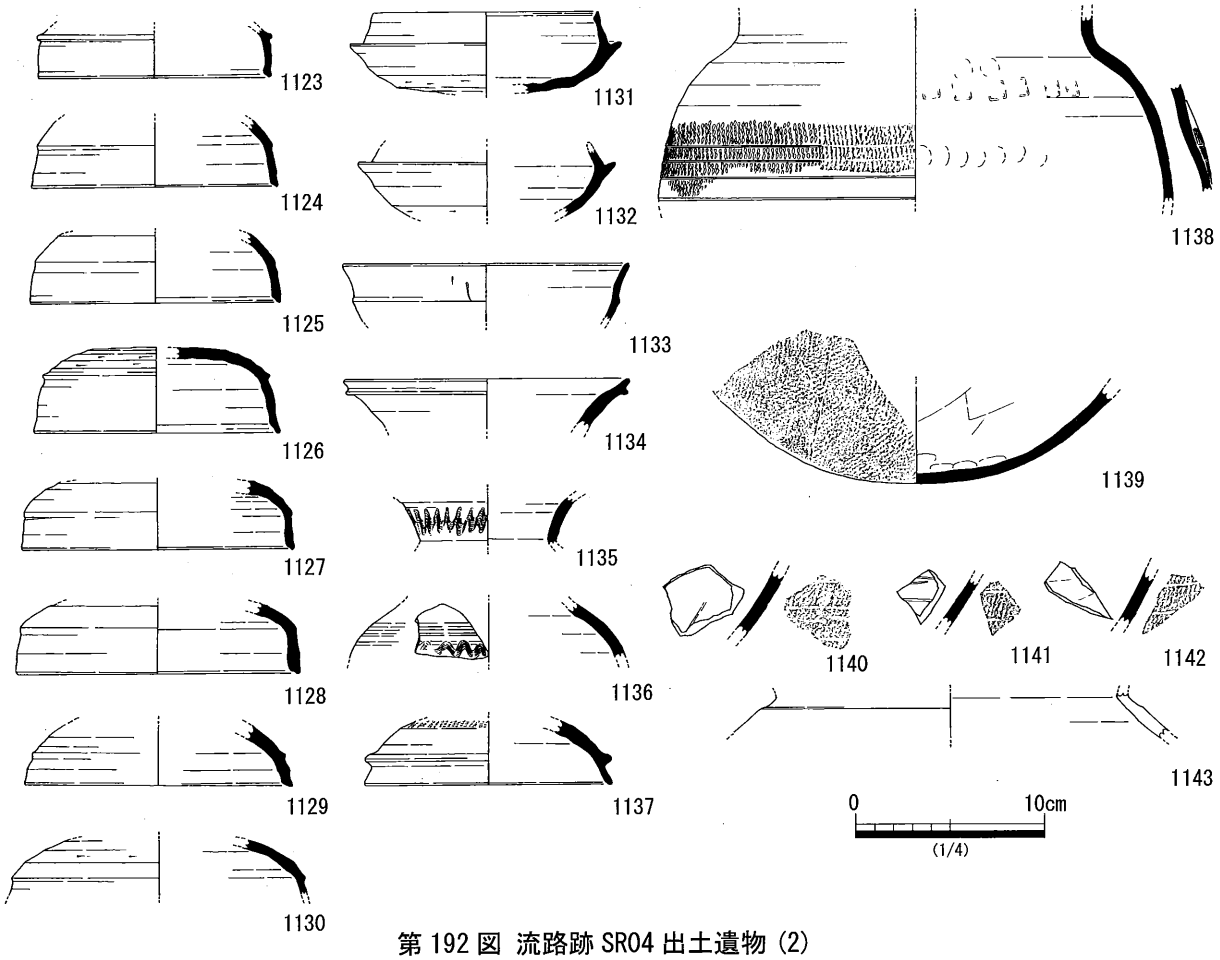


1 淡灰色砂質土（中層上位）
2 濁黄灰色粗砂（明黄灰・灰褐シルトをラミナ状に含む）
3 淡灰黒色粗砂
4 灰褐色粗砂（シルト質混）
5 淡灰黄色中～粗砂（乳灰白色細砂をラミナ状に含む　中層中位）
6 濁黄灰色粗砂（乳灰色細砂をラミナ状に含む）
7 黒灰色粗砂（シルト質混）
8 乳灰白色粗砂
9 濁乳灰白色粗砂
10 黒灰色細砂（黄灰色粗砂ラミナ含む ややシルト質）
11 淡灰黄色粗砂
12 暗灰黄色粗砂
13 淡灰黄色砂礫（中礫及び粗砂）
14 黒褐色砂質シルト
15 黄灰褐色砂質土（基盤土崩落土）
16 灰褐色砂質土（黒灰色シルトラミナ含む）
17 黒灰色砂質土
18 暗灰色砂質土
19 黄灰白色粗砂
20 灰黒色砂質シルト（黄灰砂ラミナ含）
21 乳灰白色粗砂
22 灰黄色粗砂
23 灰褐色粗砂（シルト質混）
24 濁黄灰色粗砂
25 黒色シルト
26 黒灰色砂質土（灰黄色砂ラミナ含）
27 黒灰褐色粗砂
28 灰黄色砂礫（1 ～ 2㎜ 礫）
29 黒色砂質土
30 濁灰黄色細砂
31 黒褐色砂質土
32 灰黄褐色砂質土
33 淡灰褐色砂質土（上層）
34 黒灰色砂質土（灰黄色砂ラミナ含む
35 明黄灰色砂層
36 褐灰色砂礫（細礫多い）
37 暗黄灰色粗砂（基盤層）
38 灰色～黒色砂礫（中礫多い 基盤層）

第 190 図 流路跡 SR04 平・断面図



第 191 図 流路跡 SR04 出土遺物 (1)



第 192 図 流路跡 SR04 出土遺物 (2)

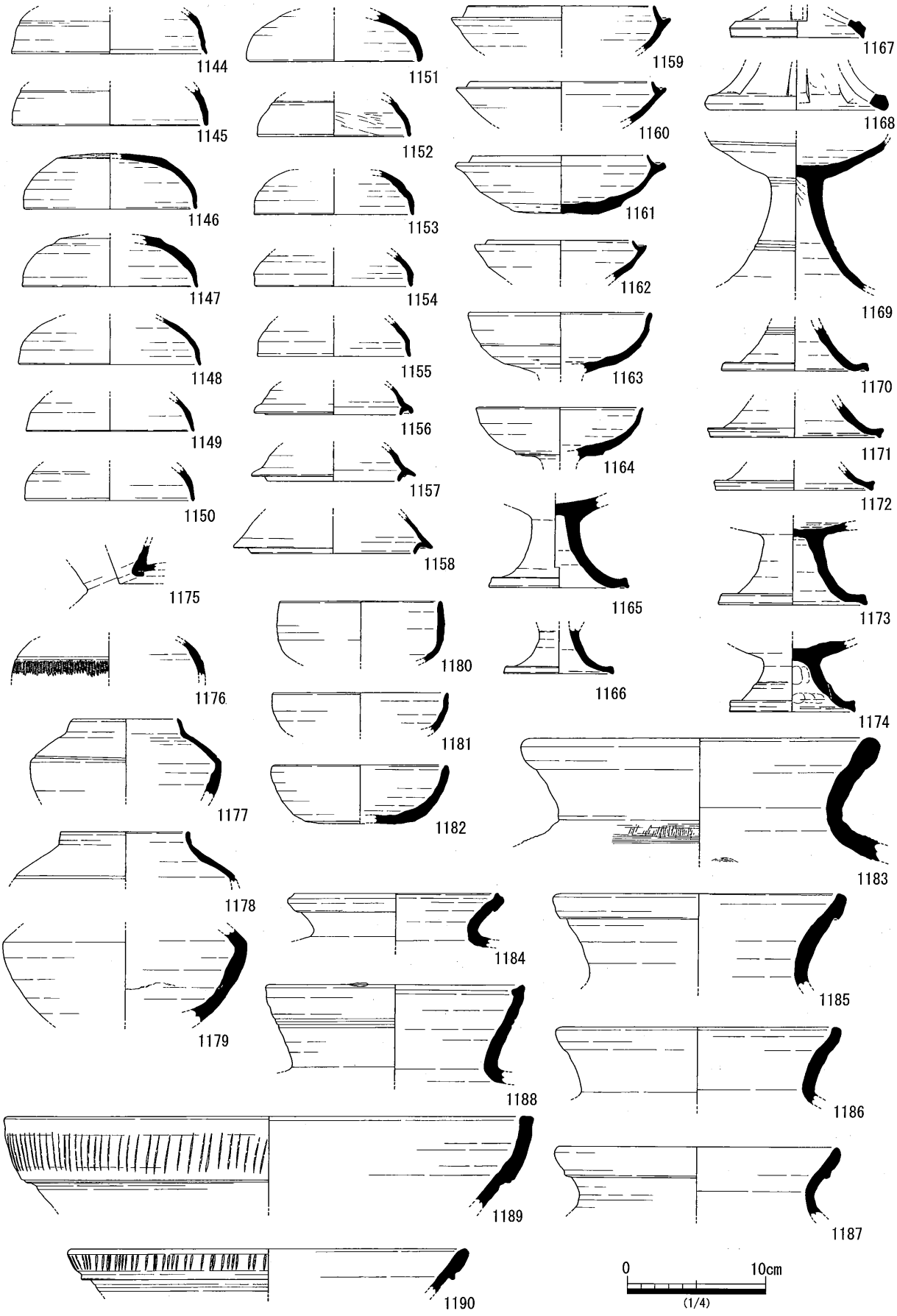
土器は中層上位・上層出土である。

1108 ～ 1122 は弥生時代後期～終末期の土器である。1108・1109・1110 は壺である。1108 は茶褐色を呈するＢ類系土器。1111 ～ 1116 は甕である。1111・1112 は胎土中に角閃石を含むＢ類系土器である。1113・1116 はハケ調整の甕、1114・1115 は叩き調整の甕である。1117 は高杯脚部片。1118 は台付鉢の脚台部片である。1119 ～ 1121 は平底の底部片。1122 は穿孔のある丸底底部である。

1123 ～ 1143 は主に古墳時代の土器である。1123 ～ 1130 は須恵器杯蓋。そのうち 1123 ～ 1126 は口径約 13cm で天井部との境に明瞭な段を有し、5 世紀末ごろに所属する。1127 ～ 1130 は口径が 14 ～ 15cm で天井部との境の段が緩やかで、6 世紀前半代に所属する。1131・1132 は須恵器杯身。かえり部の直径が 14cm で 1123 ～ 1126 の蓋に対応する。

1133 は器壁が薄い須恵器無蓋高杯口縁部片である。1134 は口縁端部外面に細い突線をもつ須恵器壺口縁部片である。1135・1136 は櫛描波状文を施す須恵器甕。1137 は口縁部天井部境が大きく外側に突出し、口縁部が短く斜め下方に延び、口縁端部を面取りする形態の須恵器杯蓋である。丸みを帯びる天井部には櫛原体刺突を巡らせる。和泉陶邑窯 TG232 窯段階の初期須恵器である。

1138 ～ 1142 は赤褐色に焼かれた韓半島系陶質土器である。接合はしないが同一個体と考えられる。1138 は頸部から胴部上半の破片で、丸みを帯びた肩部から直立する頸部への器形変化は緩やかで、肩部に僅かな稜線を認める。胴部上半から頸部へは丁寧なナデ調整を行い、胴部外面には縄蓆文叩きおよび沈線文を施す。胴部内面は叩き調整の当て具痕とみられる指押さえ状の窪みが細かいピッチで巡る。



第 193 図 流路跡 SR04 出土遺物 (3)

同一個体と考えられる破片には、胴部の一部に部分的な窪みが認められる。1139は1138の底部付近の破片と考えられる。完全な丸底で、外面の縄蓆文叩きが不整方向に施され、沈線はみられない。1140～1142は縄蓆文叩き及び沈線文が施された胴部片である。以上の土器は、器形や器面調整の特徴から、韓半島全羅南道地域からの搬入土器と考えられる。

1143は軟質韓式系土器の壺肩部片である。叩き目の痕跡はみられないが、器形や胎土等からSR05・06出土の同系土器に類似する。内傾する肩部の上端に強い窪みを巡らせ、頸部が屈曲して直立する形態である。

胎土分析の結果、須恵器・陶質土器については和泉陶邑窯産あるいはその可能性があるものとされたが、韓半島系陶質土器の1138～1142は典型的な陶邑の領域から若干外れており、「陶邑?」とされている。したがって陶邑以外の生産品と考えても矛盾はないものと言える。

以上の古墳時代の土器群は5世紀初頭(1137・1138～1143)、5世紀末(1123～1126・1131・1132)、6世紀前半(1127～1130)の3群が認められる。各遺物の出土位置は、1123・1124・1127・1130・1131・1133・1136・1138・1139・1142はSR04E、1126・1137はSR04W、その他は上層出土である。

1144～1190は主に7世紀段階の須恵器である。和泉陶邑窯TK209・TK217・TK46併行期に位置づけられよう。産地分析は行っていないが、当遺跡周辺では木田郡三木町の末窯跡群などの地方窯が出現しており、在地産須恵器が含まれている可能性が高い。

出土位置は、1144・1151・1160・1167・1168・1170～1172・1175・1177・1182・1184・1188・1190がSR04E、1145～1149・1152～1158・1162～1166・1174・1176・1181・1189がSR04W、その他が上層出土である。

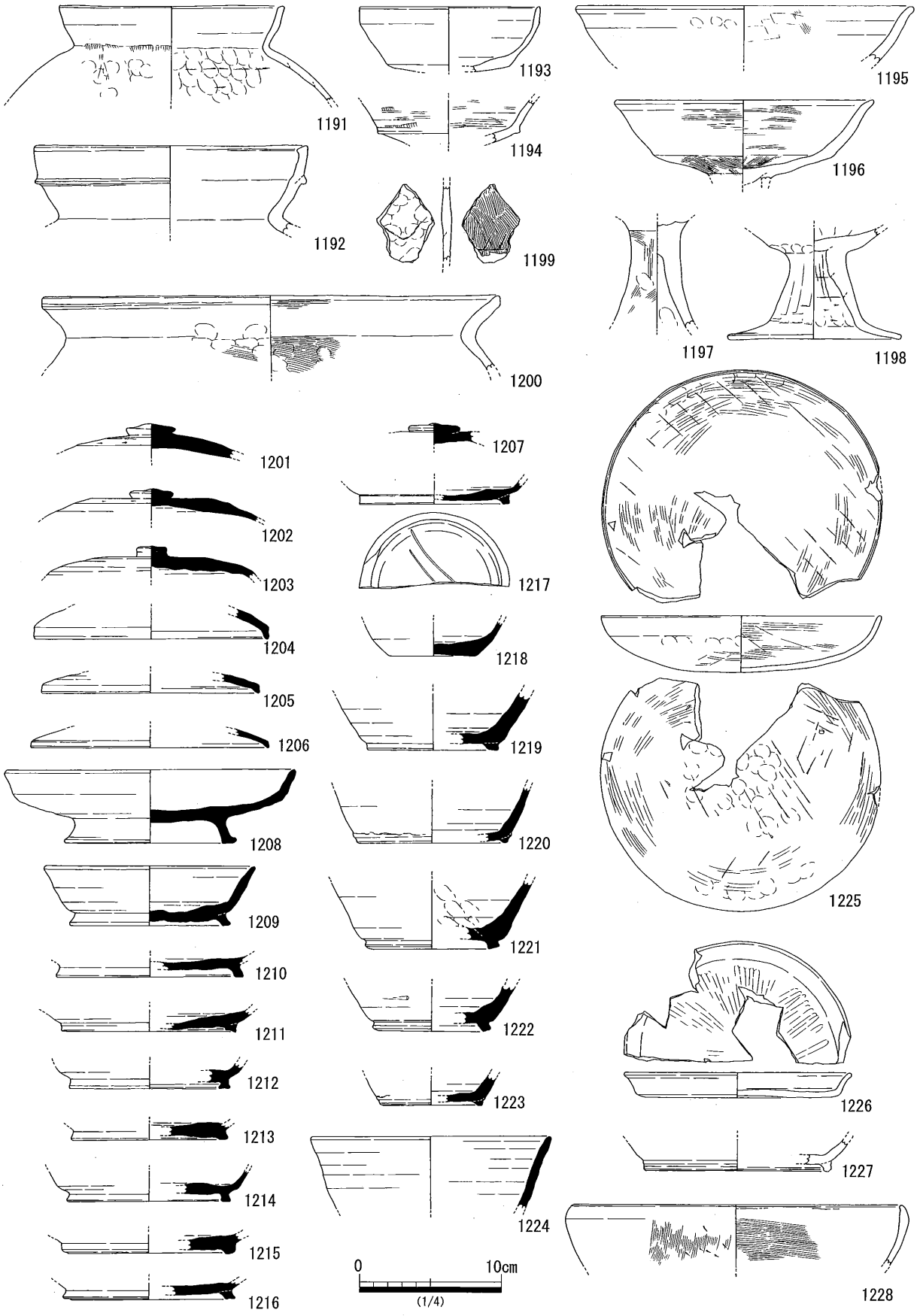
1191～1198は古墳時代の土師器である。5～6世紀代のものを含む。1191・1192は布留系土師器の甕・壺、1194～1198は高杯である。1199は外面にヘラ記号様の沈線がみられる甕胴部片、1200は大型甕である。出土位置は1192・1194・がSR04E、1191・1193・1199・1197がSR04W、その他は上層出土である。

1201～1224・1229～1233は7世紀末から8世紀の須恵器である。1201～1207は杯蓋、1208は高台付皿、1209～1218は高台付杯身、1219～1223は高台付壺底部、1224は直口鉢である。1229・1231は大型壺、1230・1232は大型の耳付壺、1233は大型の牛角把手をもつ甕である。出土位置は1201・1203・1212・1216・1207がSR04E、1202・1208～1210・1217・1229・1231・1233がSR04W、それ以外は上層出土である。SR04Wに7世紀末～8世紀初頭のものが多く、8世紀後半のものは上層に多い。

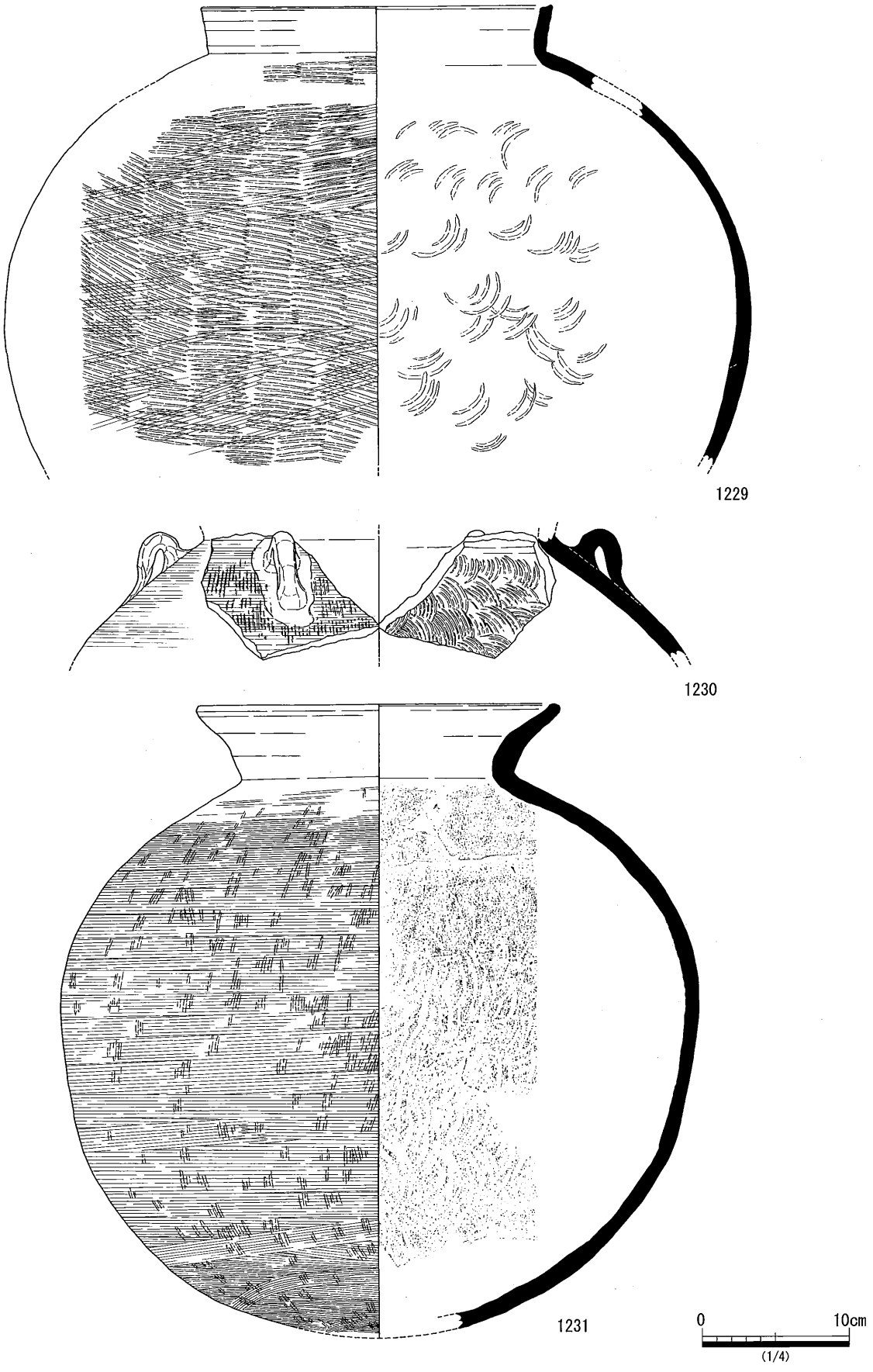
1225～1228・1234～1253は7世紀末から8世紀の土師器である。1225は7世紀末ごろの皿、1226は8世紀の皿、1227は杯身高台部片、1228は7世紀末の大型椀である。1234～1239は大型甕の牛角把手片、1240～1247・1250～1252は甕口縁部片。1248・1249は大型鉢である。1253は移動式竈の焚き口鍔から胴部にかけての破片である。以上の出土位置は、1237・1246がSR04E、1225・1228・1235・1236・1238・1245・1249・1250・1251がSR04W、それ以外は上層出土である。須恵器と同様に7世紀末～8世紀初頭頃のものがSR04Wに目立つ。

1254～1264は9世紀以降の土器である。いずれも上層出土である。1254・1255は京都洛西産の緑釉陶器。1254は口唇部に間隔をおいた小押捺を巡らせる。1256～1258は黒色土器A類の椀である。1259・1260は須恵器、1261～1264は土師器の椀・杯である。

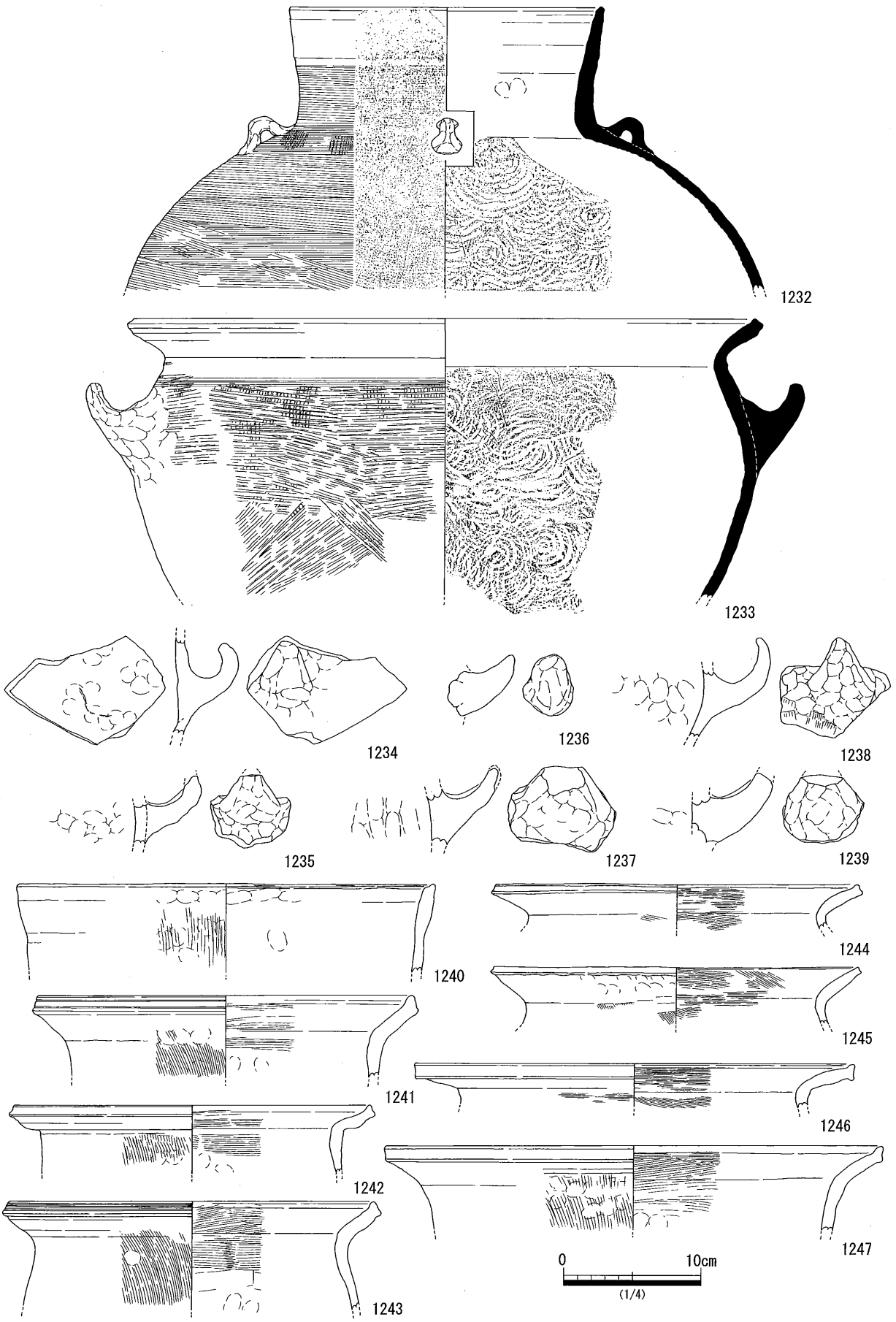
1265～1268は土製品類である。1265は土師質の土馬である。体部は中空で、頸部に鋲留の革紐を



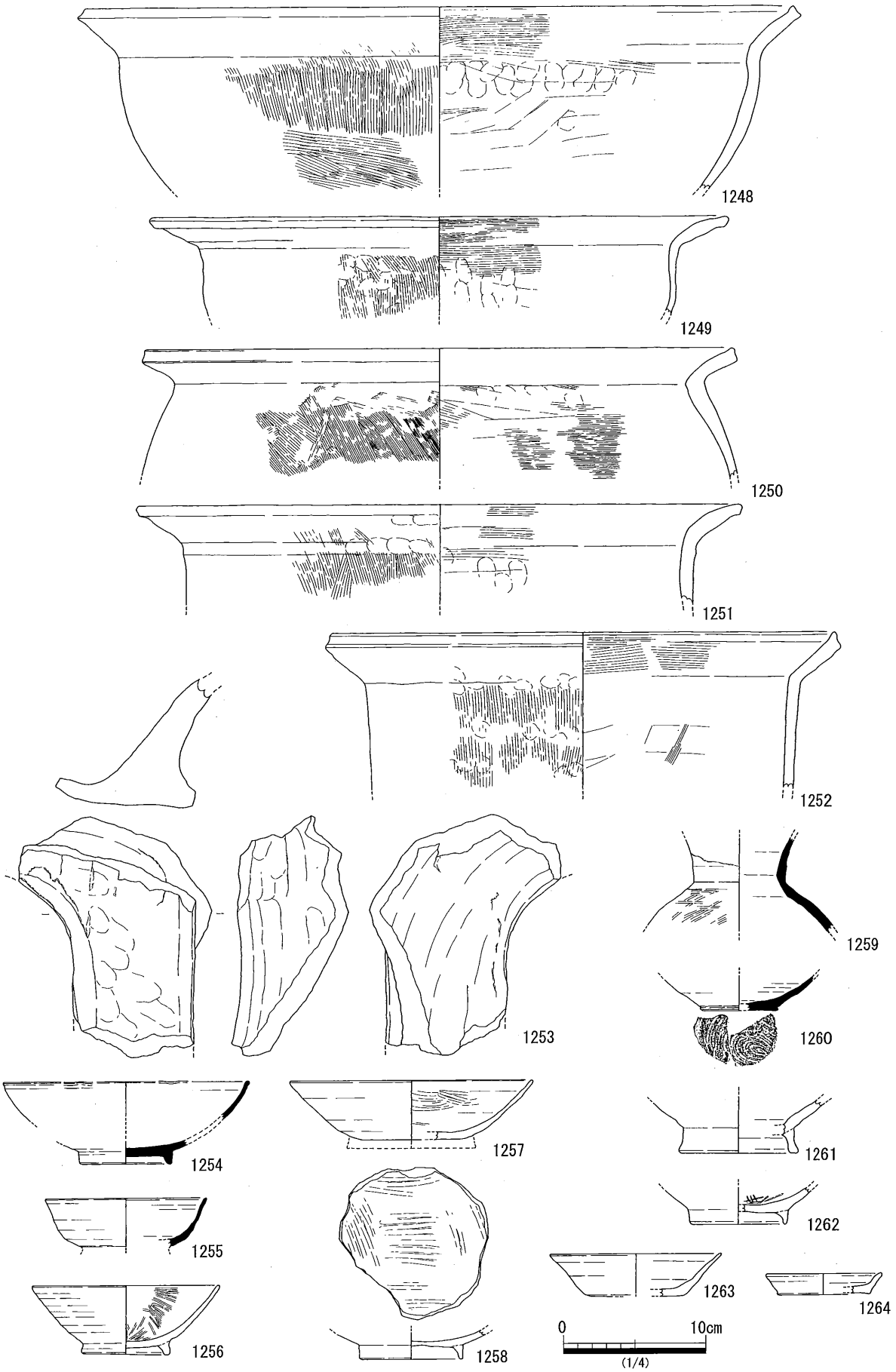
第 194 図 流路跡 SR04 出土遺物 (4)



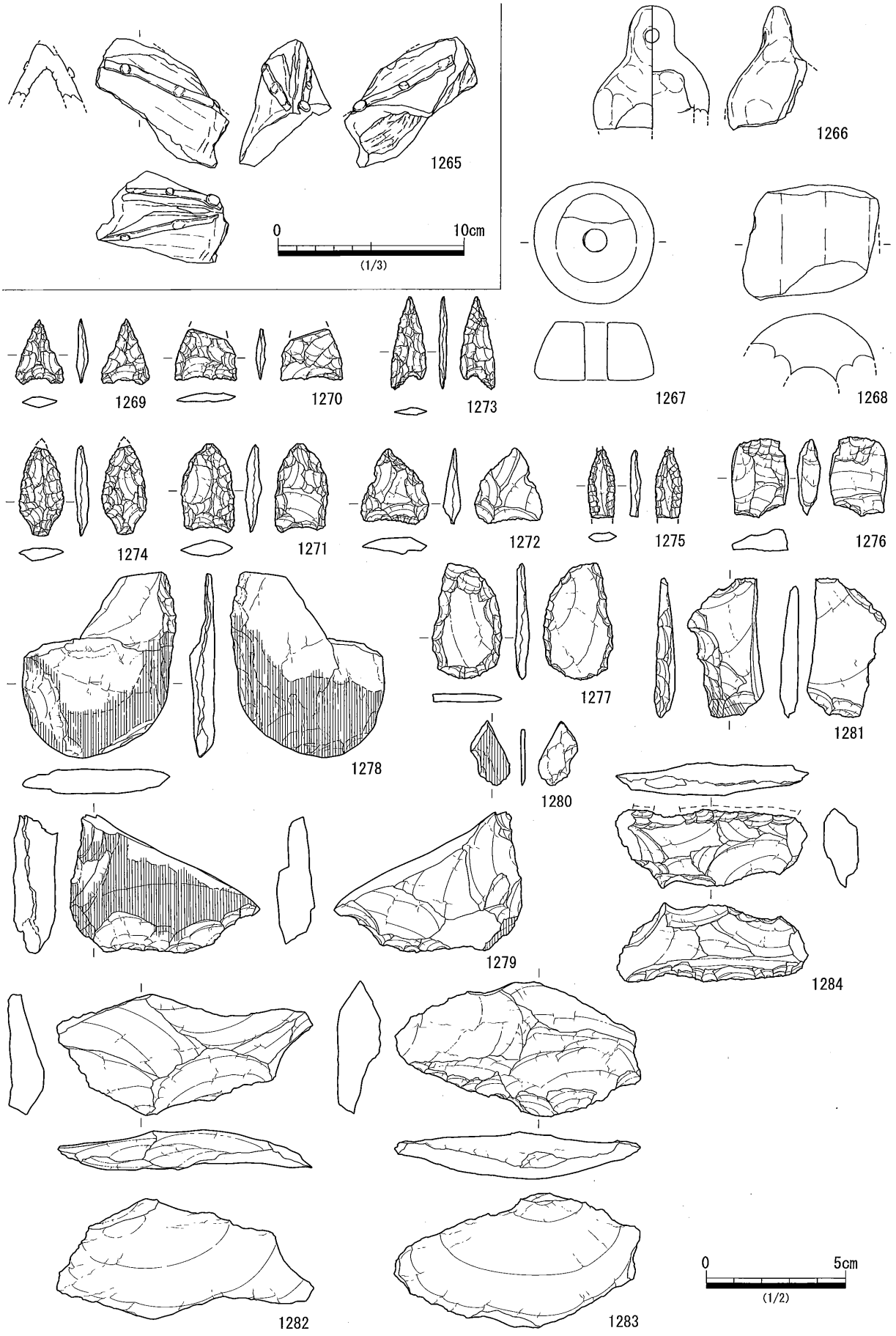
第 195 図 流路跡 SR04 出土遺物 (5)



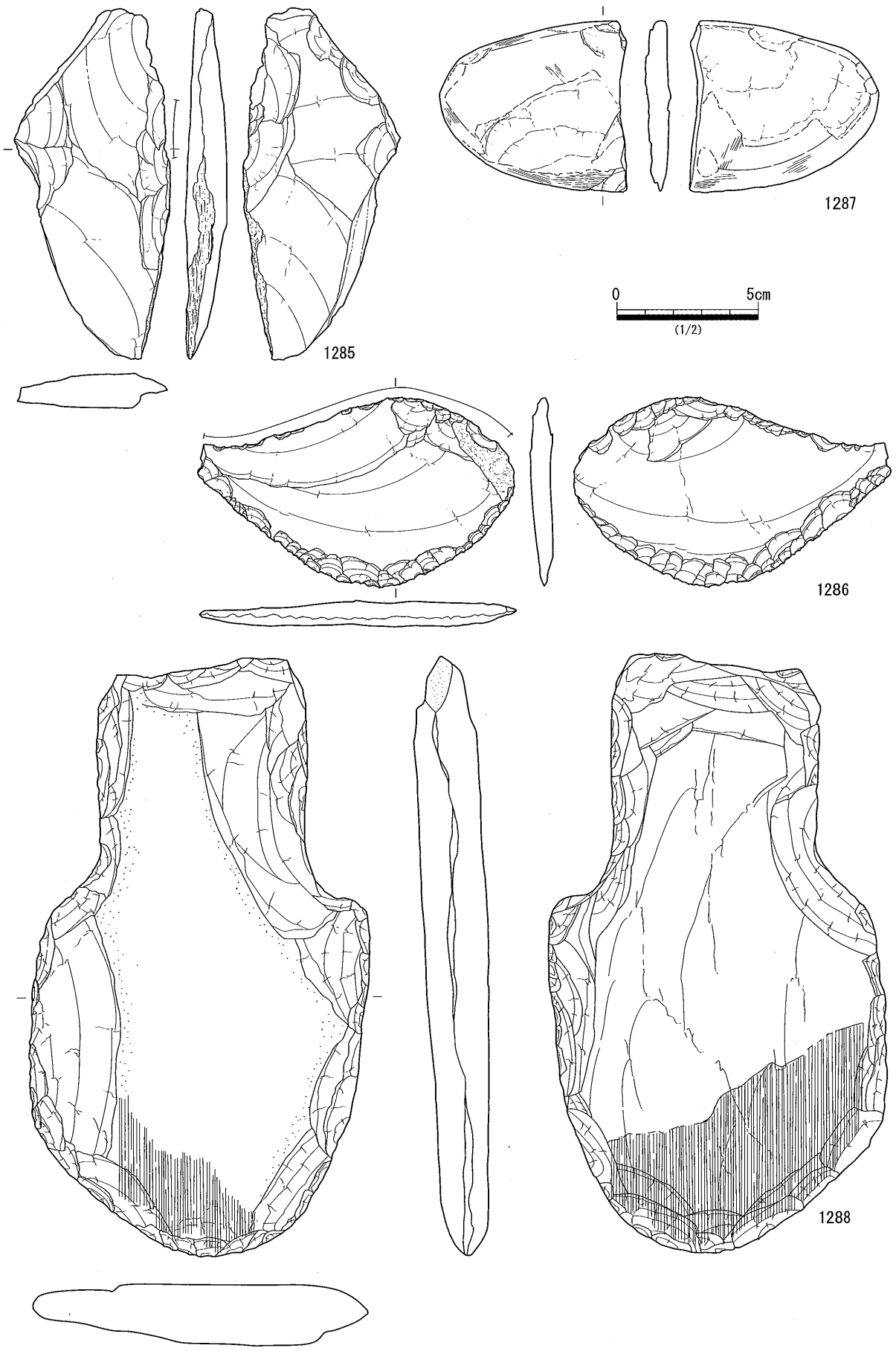
第 196 図 流路跡 SR04 出土遺物 (6)



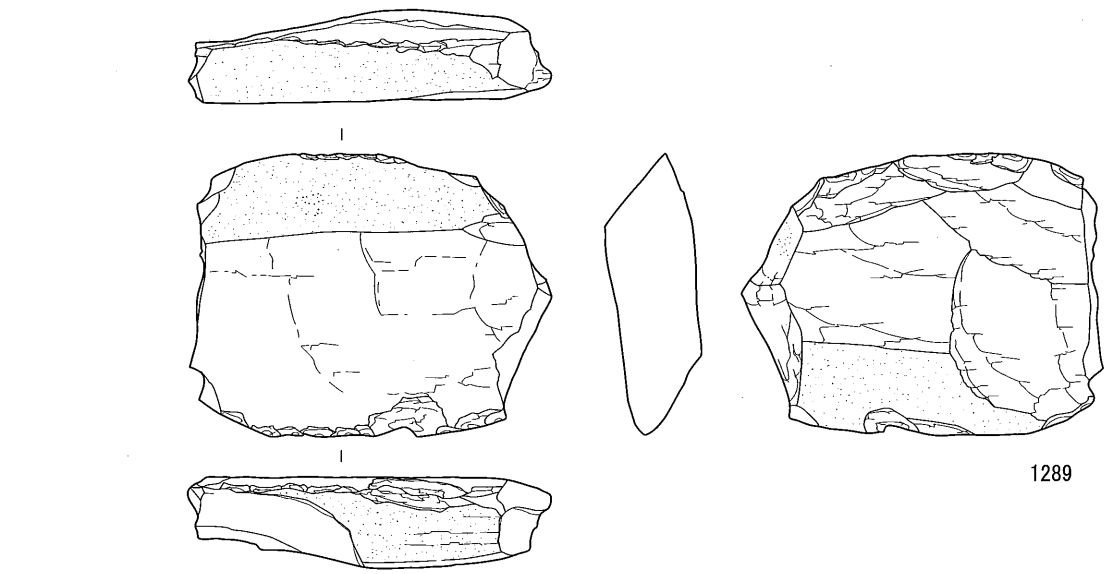
第 197 図 流路跡 SR04 出土遺物 (7)

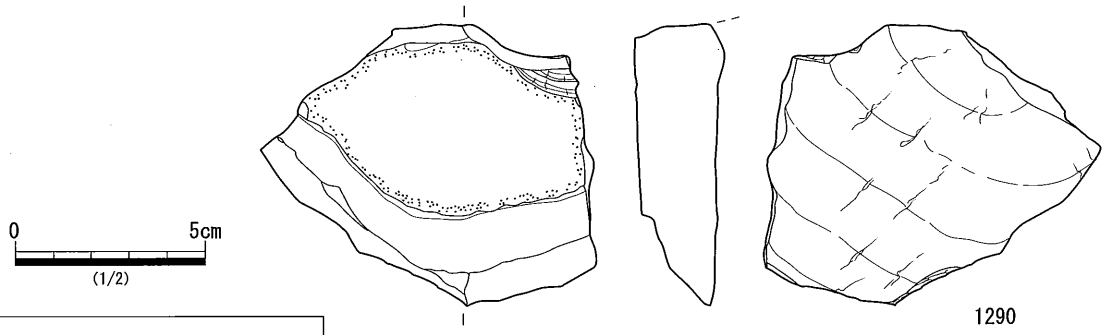


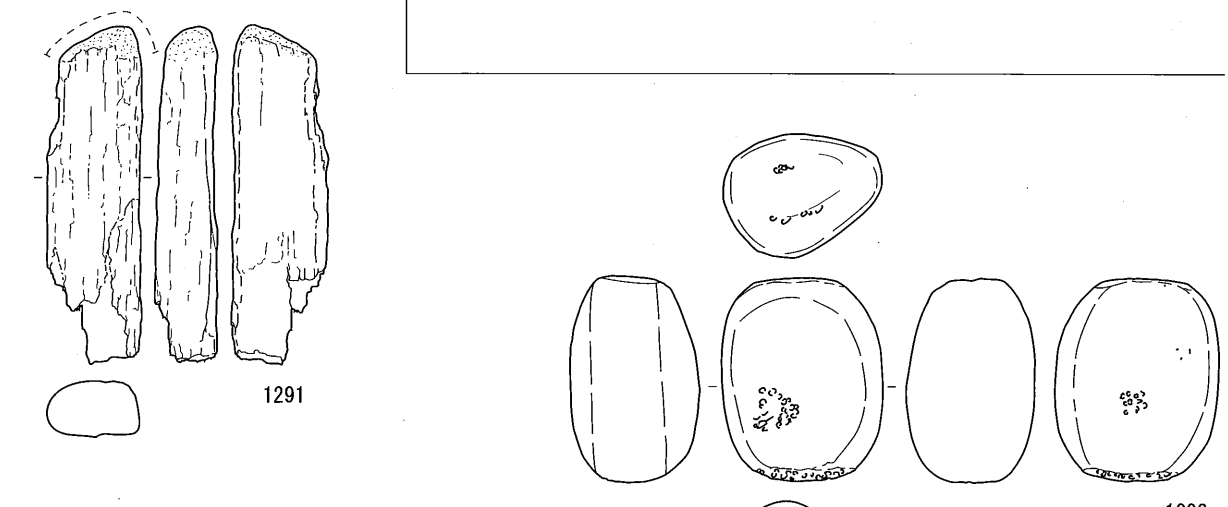
第 198 図 流路跡 SR04 出土遺物 (8)

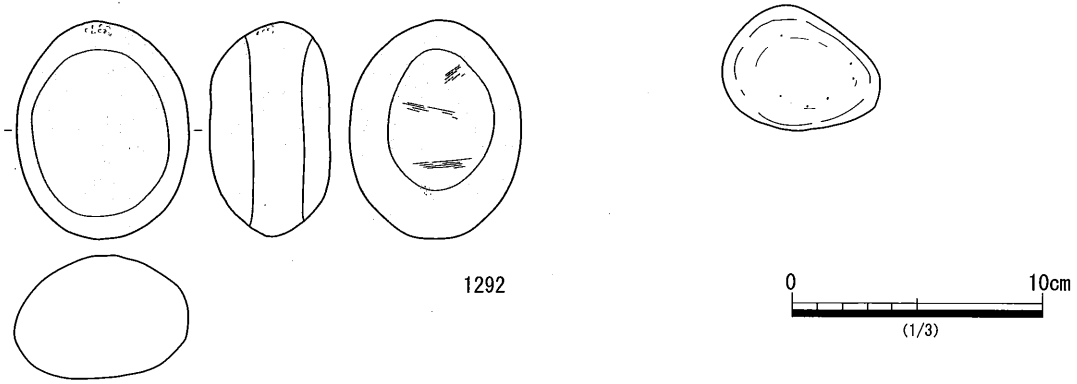


第 199 図 流路跡 SR04 出土遺物 (9)

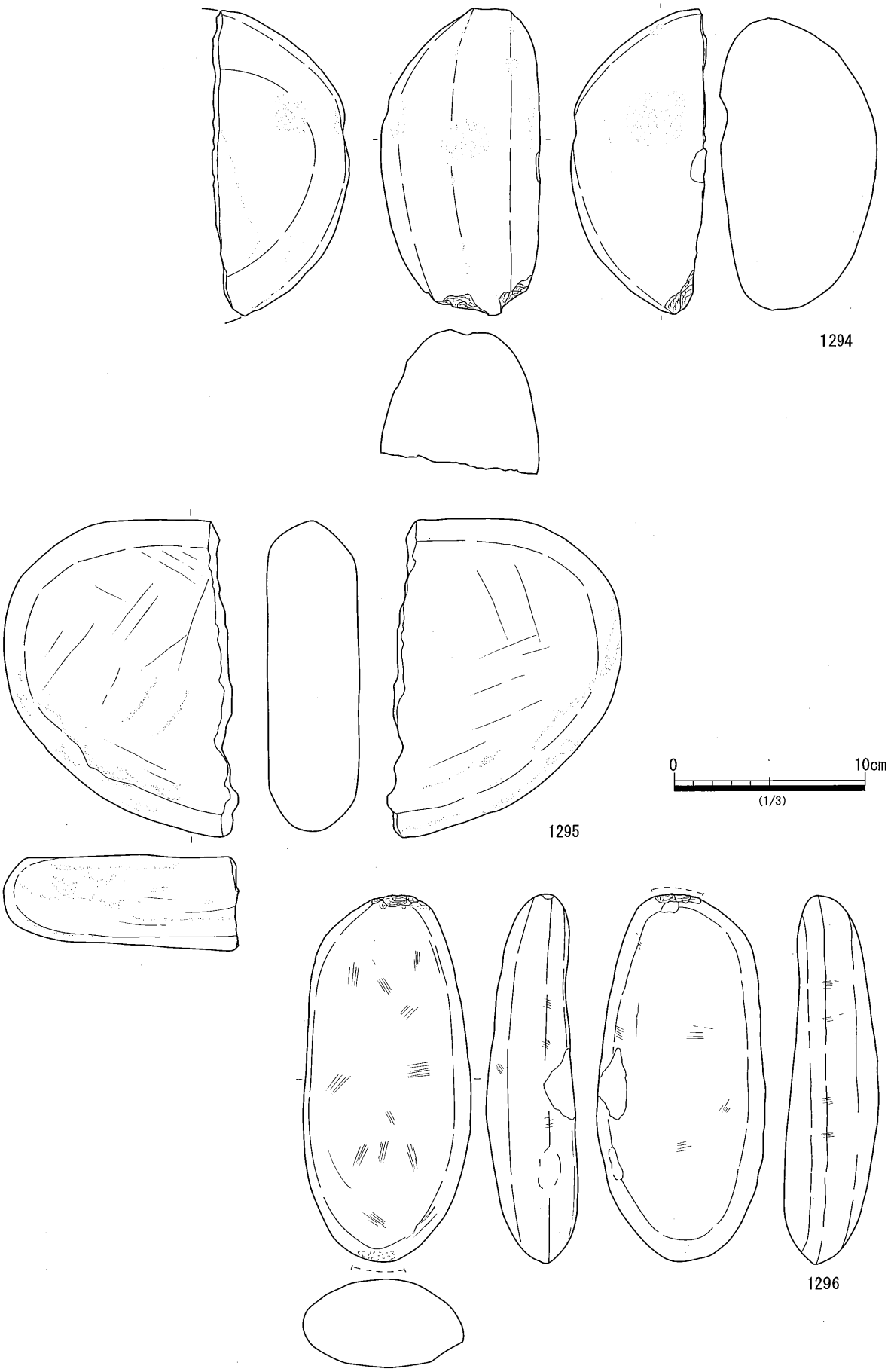








第 200 図 流路跡 SR04 出土遺物 (10)



第 201 図 流路跡 SR04 出土遺物 (11)

貼付表現する。精良な胎土で焼成が堅緻。SR04W で出土しており、7 世紀代に所属する可能性が高い。1266 は土師質の土鈴、1267 は土師質の紡錘車である。これらは上層出土である。1268 は鞴羽口片である。SR04W で出土した。

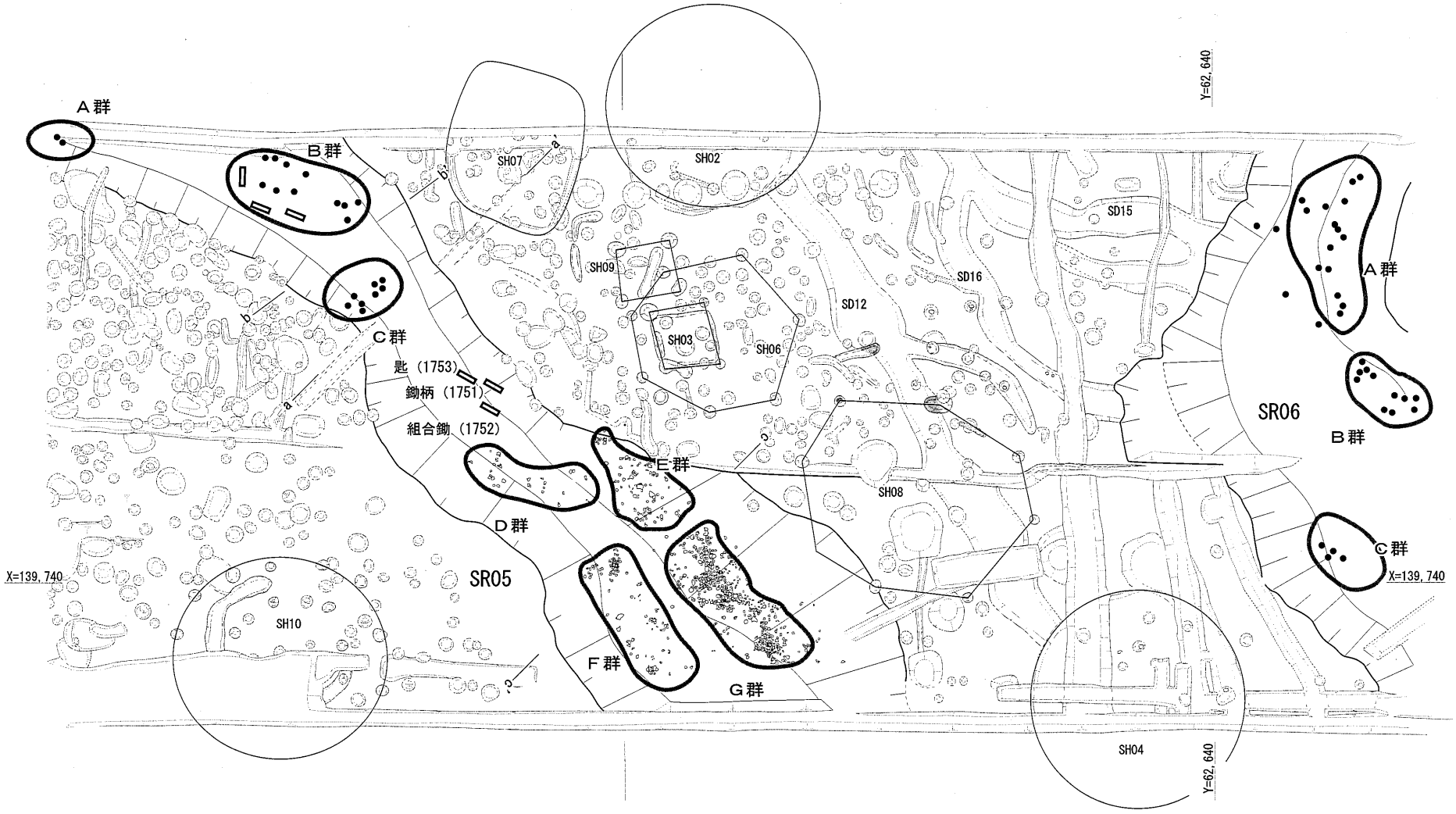
1269 ～ 1296 は SR04 出土の石器である。1269 ～ 1275 は未製品を含むサヌカイト製打製石鏃である。1274 は凸基式で、他は凹基式である。1276 は小型の楔状石核、1277 は周縁に加工痕のある剥片で、石鏃製作過程を示すものであろう。1278・1279 は打製石斧である。1278 は結晶片岩製、1279 はサヌカイト製である。表裏に線状痕を伴う摩滅がみられる。1280・1281 は打製石斧刃部調整剥片である。1280 は結晶片岩、1281 はサヌカイト製である。いずれも背面に線状痕を伴う摩滅がみられる。1282・1283 は平坦打面の横長剥片である。いずれも幅 5cm を超える大型の剥片である。1284・1285 は上下両側縁に敲打痕が残る両極打撃による楔状石核である。1285 は側縁に自然面が残る。1286 は刃部が弧状となる削器である。背部を敲打し、刃部は表裏両面から加工を施す。1287 は流紋岩製の磨製石庖丁である。表裏に研磨以前の粗割剥離面を留め、研磨が全面には及ばない。残存部で穿孔はみられない。1288 は結晶片岩製の打製石斧である。大型有肩タイプで片面に自然面を大きく残す。刃部には摩滅痕が顕著にみられる。1289 は結晶片岩製の石核素材である。粗割された厚い剥片の下縁部に敲打痕がみられる。1290 は安山岩製の粗割剥片である。背面は自然面が残る。1291 は結晶片岩の棒状素材である。頭部に敲打痕がみられるので、叩き石とみている。1292 ～ 1296 は磨石・叩き石類である。周辺の川原で採取可能な脈岩（半深成岩）・花崗岩・砂岩・流紋岩などを石材とする。

流路跡 SR05（第 202 ～ 228 図）

C 地区西側微高地を北西から南東に向かって流下する流路跡である。土層序の節で述べたように、河床レベルを比較すると、SR07 から当該流路跡につながり、その後蛇行して SR06 に至る可能性が高いことがわかる。川幅は約 5 m で、深さは約 1.1 m、SH08 に近い部分では川幅が 10 m と大きく広がるが、その部分はテラス状部分であり、流路跡本体の川幅はさほど大きく広がるわけではない。

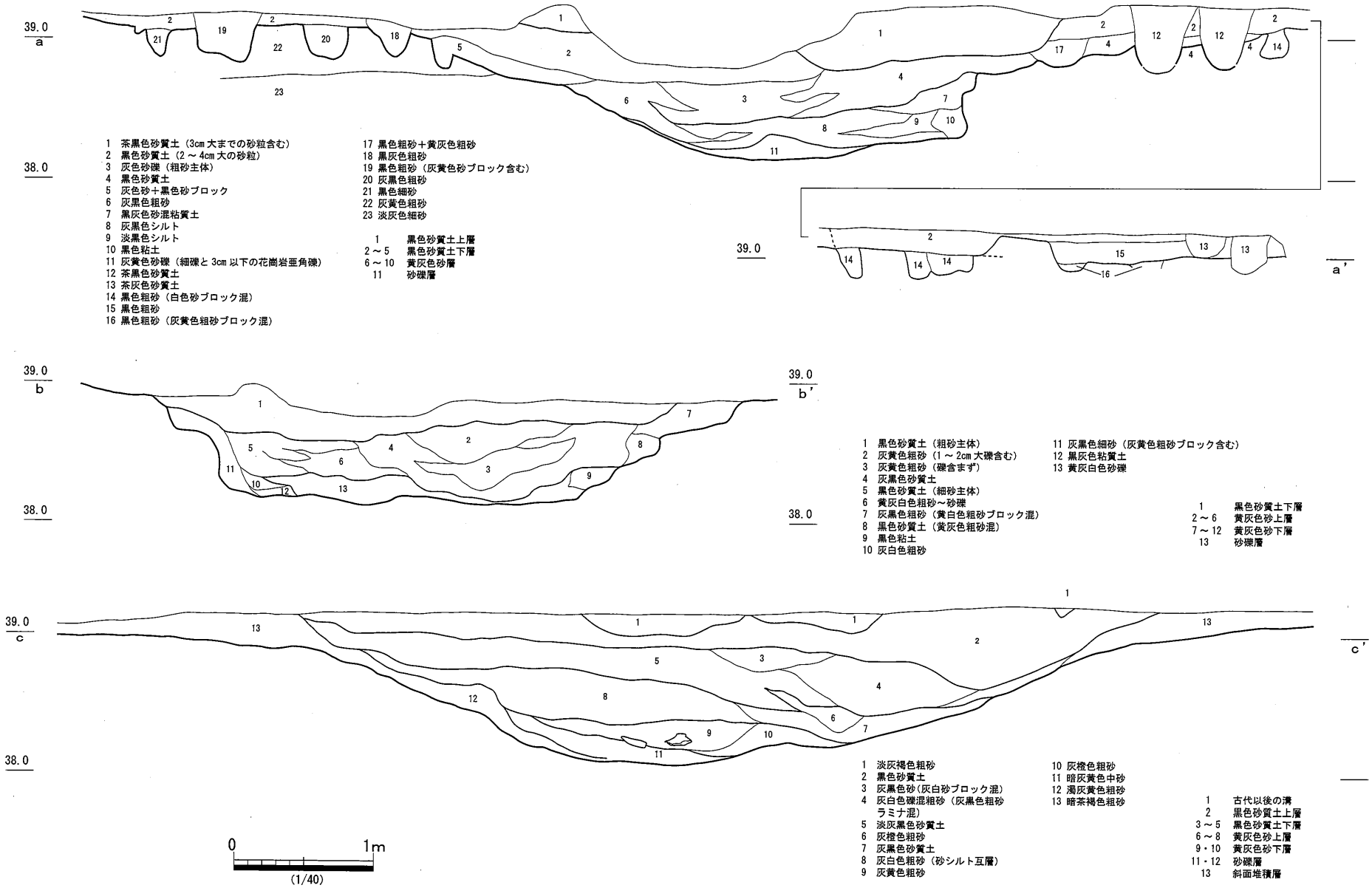
埋土は砂層が主体で部分的な変化が大きいために、明確に層位区分できたわけではないが、おおむね上層に黒色砂質土、中層に黄灰色砂層、下層に灰色砂礫層が堆積する。調査時には、あらかじめトレンチを掘削し、上記の層位区分を確認した上で調査を進めた。しかし、下層の砂礫層には主に弥生時代前期～中期土器が多く含まれ、比較的純粋な資料を得ることができたが、弥生時代後期と推定していた中層には、本来上層に留まるべき古墳時代の土器が大量に含まれていた。一方で上層として取り上げた土器群には、混在とは考えられないほど遺存状態が良い弥生土器が数多く含まれる。このように、明らかに調査時の層位区分に齟齬があった。これは、上層の黒色砂質土を細かく区分できなかったことに起因するものと考えられる。幸い、黒色砂質土の東西両岸には部分的に弥生土器の大量廃棄が認められ、その出土状況を記録したことにより、微高地上の住居跡等との関係がある程度追跡できる材料が得られた。また、調査時に北側の調査と南側の調査を分けて行ったことで、ある程度（10 m レベルで）出土位置の範囲が特定できる。今後の周辺地の調査を考慮し、両者を区分して掲載することとした。

報告順は、まず北側で出土した弥生時代前期～中期の土器（砂礫層を主体として一部上位層の土器を含む）(1297 ～ 1316)、南側で出土した同時期の土器 (1317 ～ 1335) を掲載した。その後、出土位置を記録した土器群を、その分布によりA～G群に区分し、各群ごとに掲載した（A群 1336・B群 1337 ～ 1346・C群 1347 ～ 1349・D群 1350 ～ 1354・E群 1355 ～ 1364・F群 1365 ～ 1380・G群 1381 ～ 1478)。その後、南側の黄色砂層出土土器 (1479 ～ 1482・1485 ～ 1489・1493・1494)、北側の同層出土土器



※ SR05A～C群およびSR06A～C群の●は、土器の出土ポイントを示す。
SR05D～G群は、土器出土状況平面図を掲載した。
▭ は、木製品および加工木の出土ポイントを示す。

第 202 図 流路跡 SR05・SR06 遺物出土位置



1 茶黒色砂質土（3cm 大までの砂粒含む）
2 黒色砂質土（2 ～ 4cm 大の砂粒）
3 灰色砂礫（粗砂主体）
4 黒色砂質土
5 灰色砂＋黒色砂ブロック
6 灰黒色粗砂
7 黒灰色砂混粘質土
8 灰黒色シルト
9 淡黒色シルト
10 黒色粘土
11 灰黄色砂礫（細礫と 3cm 以下の花崗岩亜角礫）
12 茶黒色砂質土
13 茶灰色砂質土
14 黒色粗砂（白色砂ブロック混）
15 黒色粗砂
16 黒色粗砂（灰黄色粗砂ブロック混）
17 黒色粗砂＋黄灰色粗砂
18 黒灰色粗砂
19 黒色粗砂（灰黄色砂ブロック含む）
20 灰黒色粗砂
21 黒色細砂
22 灰黄色粗砂
23 淡灰色細砂

1 黒色砂質土上層
2 ～ 5 黒色砂質土下層
6 ～ 10 黄灰色砂層
11 砂礫層

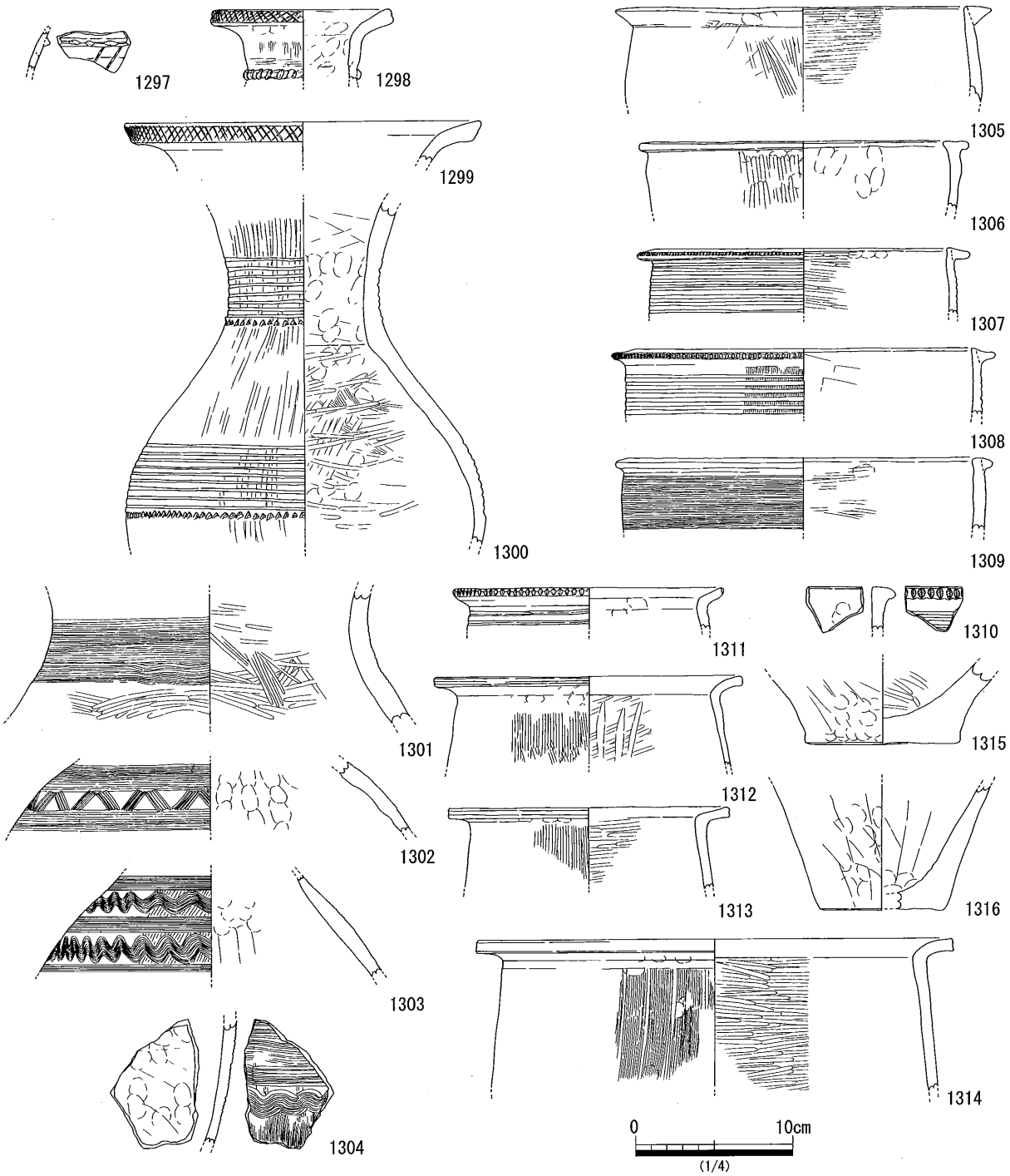
1 黒色砂質土（粗砂主体）
2 灰黄色粗砂（1 ～ 2cm 大礫含む）
3 灰黄色粗砂（礫含まず）
4 灰黒色砂質土
5 黒色砂質土（細砂主体）
6 黄灰白色粗砂～砂礫
7 灰黒色粗砂（黄白色粗砂ブロック混）
8 黒色砂質土（黄灰色粗砂混）
9 黒色粘土
10 灰白色粗砂
11 灰黒色細砂（灰黄色粗砂ブロック含む）
12 黒灰色粘質土
13 黄灰白色砂礫

1 黒色砂質土下層
2 ～ 6 黄灰色砂上層
7 ～ 12 黄灰色砂下層
13 砂礫層

1 淡灰褐色粗砂
2 黒色砂質土
3 灰黒色砂（灰白砂ブロック混）
4 灰白色礫混粗砂（灰黒色粗砂ラミナ混）
5 淡灰黒色砂質土
6 灰橙色粗砂
7 灰黒色砂質土
8 灰白色粗砂（砂シルト互層）
9 灰黄色粗砂
10 灰橙色粗砂
11 暗灰黄色中砂
12 濁灰黄色粗砂
13 暗茶褐色粗砂

1 古代以後の溝
2 黒色砂質土上層
3 ～ 5 黒色砂質土下層
6 ～ 8 黄灰色砂上層
9・10 黄灰色砂下層
11・12 砂礫層
13 斜面堆積層

第 203 図 流路跡 SR05 断面図

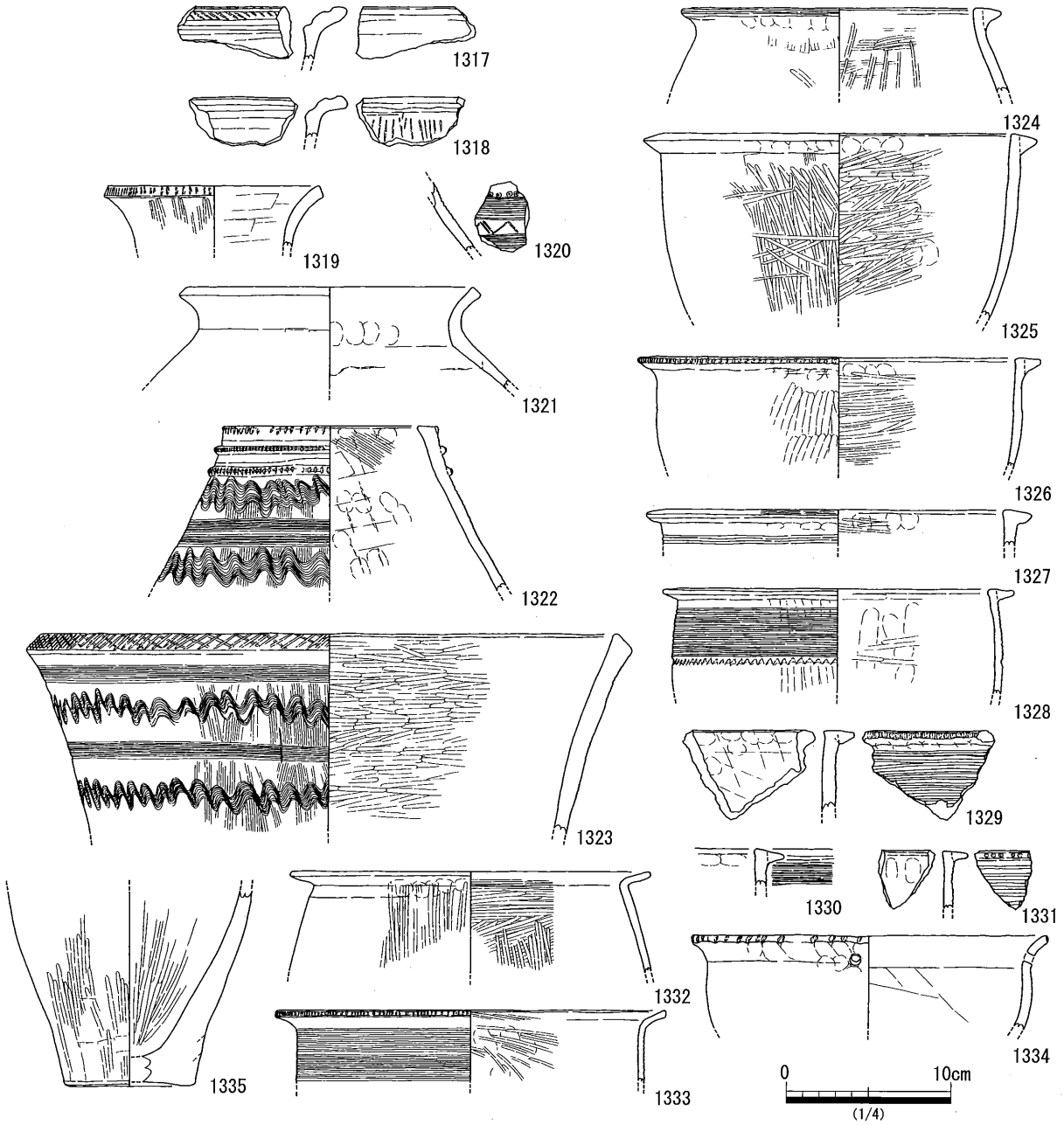


第 204 図 流路跡 SR05 出土遺物 (1)

(1483・1484・1490 ～ 1492・1495 ～ 1506)、北側の黒色砂質土下層出土土器 (1507 ～ 1519)、南側の同層出土土器 (1520 ～ 1577)、北側の黒色砂質土上層の土器 (1578 ～ 1615)、南側の同層出土土器 (1616 ～ 1650)、最後に古墳時代の土器 (1655 ～ 1719) を掲載した。なお、その後に石器・木器を掲載している。以下、単位ごとに出土遺物の概要を述べる。

〈北側出土の弥生前期～中期土器〉

1297 は突帯文系深鉢口縁部片である。口縁端部からやや下がって、断面三角形の細い突帯を貼付し、浅く幅広の刻目を施す。口頸部に縦方向のヘラ描沈線 2 条が施文される。胎土は黄灰色で焼成良好。他



第 205 図 流路跡 SR05 出土遺物 (2)

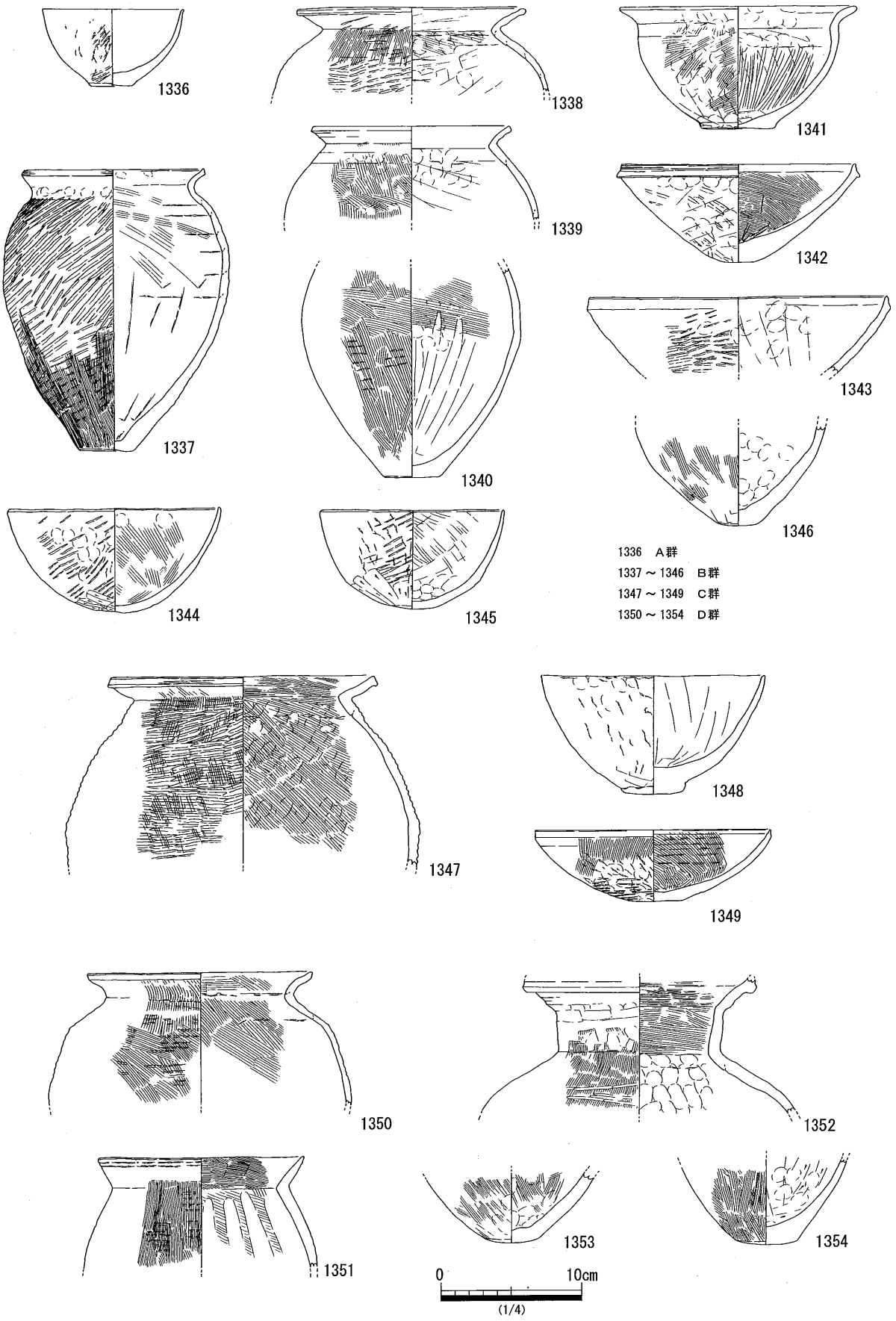
の弥生土器と胎土の上では区分できない。口縁部形状から弥生前期初頭に位置づけられる。

1298 ～ 1304 は壺である。1298 は口縁端面に斜格子文を施し頸部下端に押捺突帯を貼付する。1300 は頸部と胴部にヘラ描き沈線＋刺突文をそれぞれ施す。1301 ～ 1304 は胴部に櫛描文を施すものである。1305 ～ 1310 は逆Ｌ字状口縁甕、1311 ～ 1314 は如意状口縁甕である。

以上の土器は弥生前期前半から中期前葉までの時期幅をもつ。

〈南側出土の弥生前期～中期土器〉

1317・1318 は縄文時代後期の彦崎 KI 式深鉢である。1319 ～ 1321 は弥生土器壺、1322 は無頸壺である。1322 は口縁部下に２条の刻目突帯を貼付し、その下を櫛描文で飾る。1323 は大型直口鉢で口縁部に斜格子文、体部に櫛描文を施す。1324 ～ 1331 は逆Ｌ字状口縁甕である。1327・1328 は半裁竹管による沈線文で最下段に三角形刺突文を施す。1329 は複帯櫛描文を施文する。1332・1333 は如意状口縁甕



第 206 図 流路跡 SR05 出土遺物 (3)　A～D群

で1333は複帯櫛描文を施文する。1334は如意状口縁の鉢である。口縁胴部境に小孔を穿つ。これら南側出土の土器は、主に前期末から中期中葉に所属する。

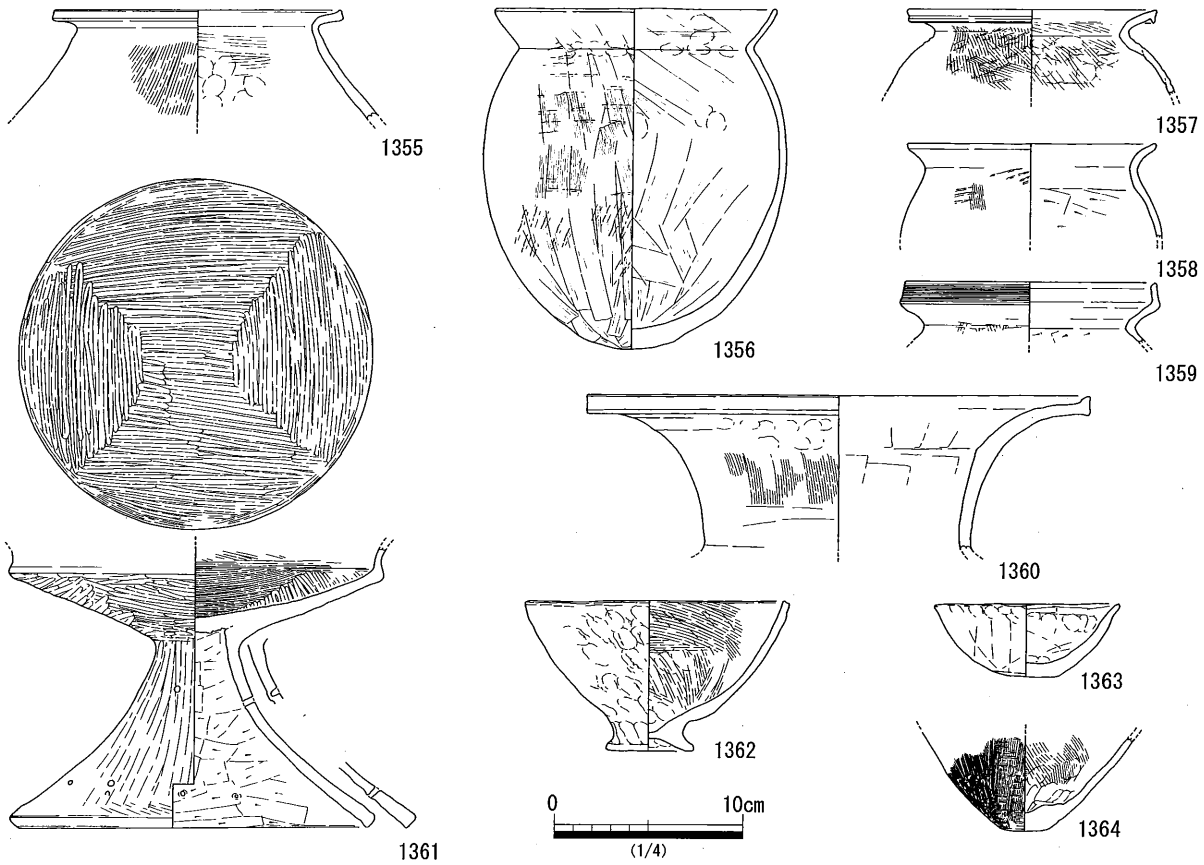
〈SR05 土器群A～E群〉

1336はSR05北端の西岸で見られた土器集中部A群で出土した完形の鉢である。底部は安定した平底で、外面に成形時のクラックがみられる。弥生後期後半古相に属す。

1337～1346はSR05北端の東岸で見られた土器集中部B群で出土した土器群である。1337は完形の甕である。安定した平底から胴部下半が直線的に上方に開き、やや肩が張る胴部上半から緩やかに反転して口縁部に至る。口縁部は端部を僅かに上方に摘み上げ、端部を面取りする。外面調整は右上がりの目の粗い叩き調整で、下半部は縦ハケにより叩き目を消す。内面にヘラ削りはみられない。1338は外面に横方向の叩き調整を施す甕で、口縁端部が丸く肥厚する。1339は外面がハケ調整の甕で、口縁基部の屈曲が顕著である。1341は口縁部が外反する鉢である。底部は平底で径が大きい。1342～1345は直口口縁の鉢である。いずれも底部は丸底を呈するが、底部直上は斜め上方に直線的に開く器形である。1342の口縁は上下に、1343の口縁は上方に大きく拡張し、端面を有すのに対して、1344・1345は口縁部を拡張せず丸く収め、底はヘラ削りや叩きにより丸く仕上げる。

以上のB群の土器は器形や調整手法から見て後期後半古相に属すものと思われる。

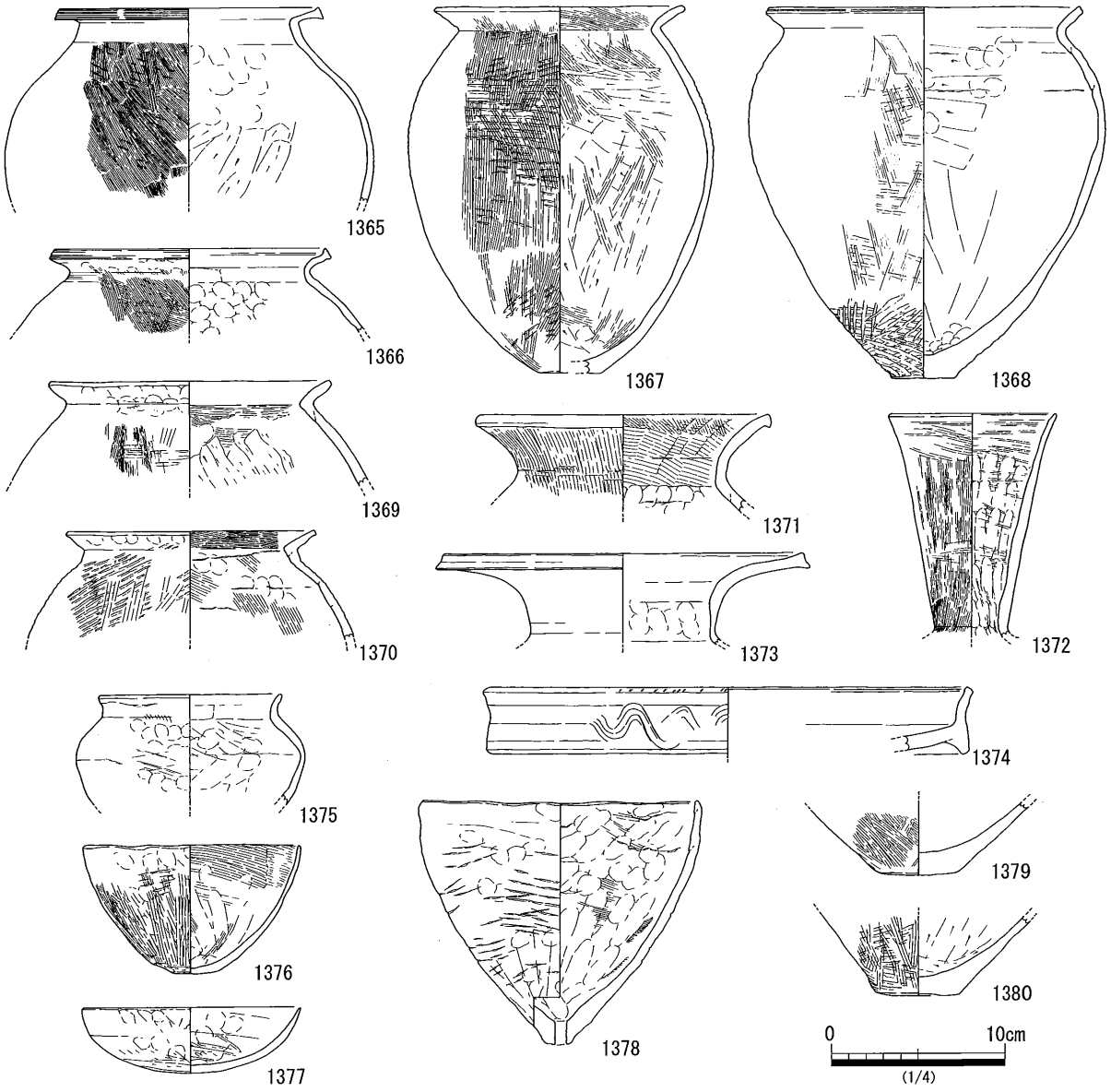
1347～1349は北側西岸で見られた土器集中部C群である。1347は外面に横方向の深い叩き調整を行う甕。1348は厚い平底の直口鉢、1349は叩きで底面を作り出す平底の鉢である。これらも器形や調整手法から見て後期後半古相に属す。



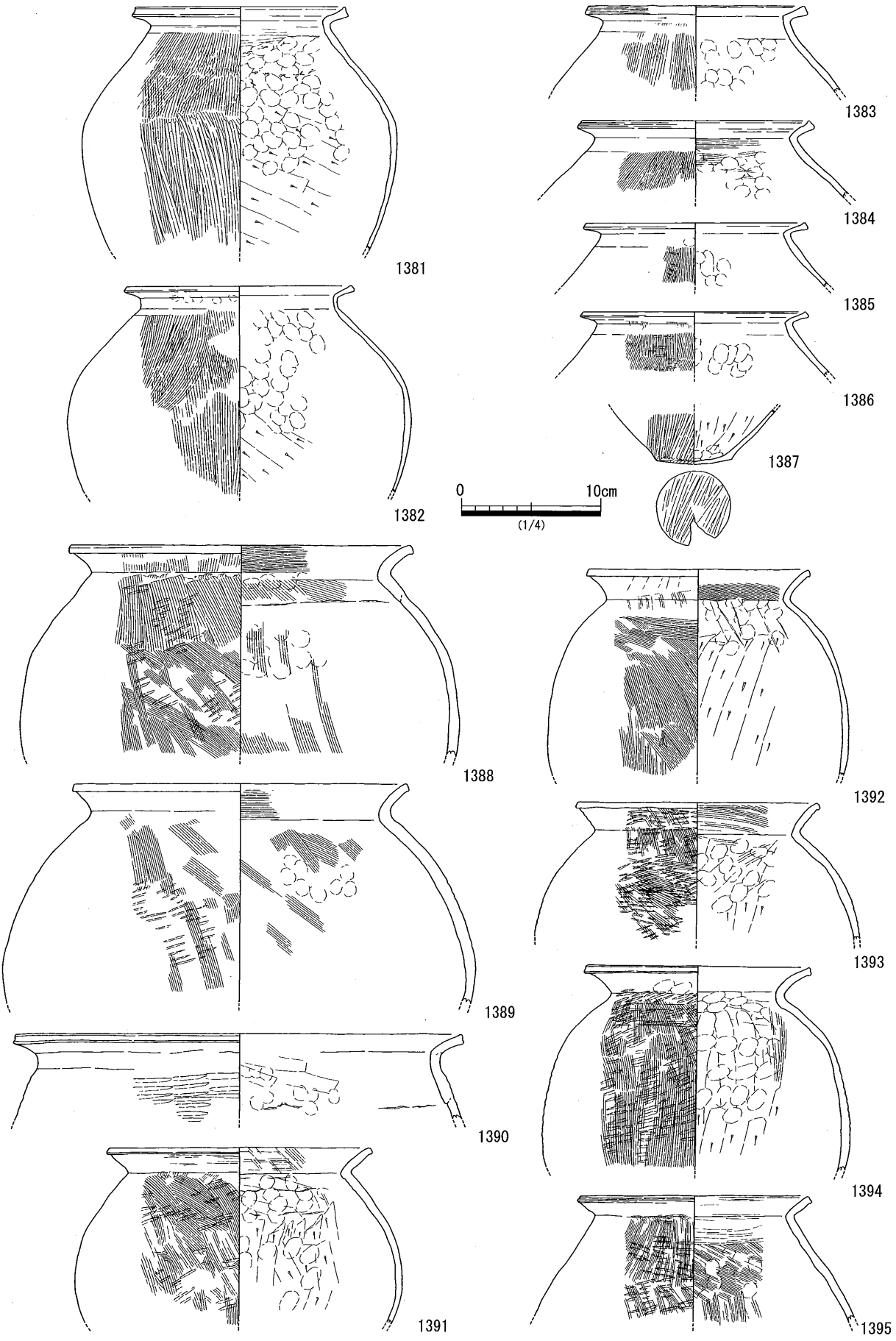
第207図 流路跡SR05出土遺物(4)　E群

1350 ～ 1354 は南側西岸で見られた土器集中部Ｄ群である。1350 は肩部が段状に張る甕である。口縁部のヨコナデは弱く、内外面ともハケ調整を残す。1351 は口縁部がくの字状に折り返す甕で、口縁部は端部を尖り気味に収めるものである。1352 は複合口縁の壺上半部で、肩部内面には顕著な指押さえが残る。1353 は丸底気味（凸面底）の底部片である。これらの土器は器形や調整手法から見て後期後半新相に属す。

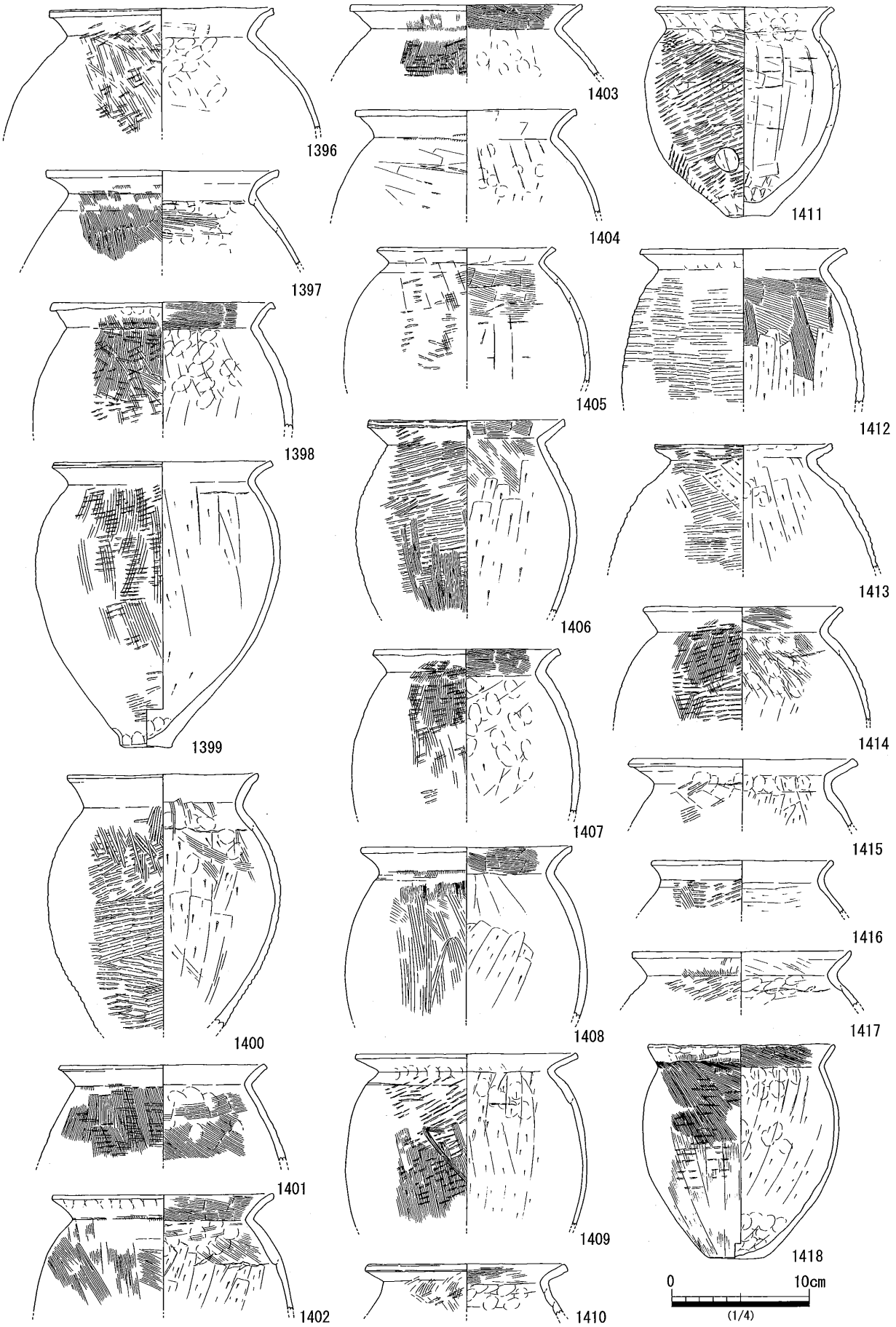
1355 ～ 1364 は南側東岸で見られた土器集中部Ｅ群である。1355・1361 は高松平野産のＢ類系甕・高杯。1356 ～ 1358 は叩き調整の甕である。1359 は吉備系甕口縁部片である。吉備地方の古墳時代初頭の亀川上層式に相当するものと考える。1360 は広口壺である。形態から終末期～古墳時代初頭に属する。1362 は台付鉢である。体部下半は丸みを帯びておらず、口縁部は面取りすることから後期後半古相に属する。1363 は小型の鉢である。体部下半が丸みを帯びる。これらの土器は、Ｂ類系を含めて後期後半古相のものと、終末期（古墳時代初頭を含む）のものがある。



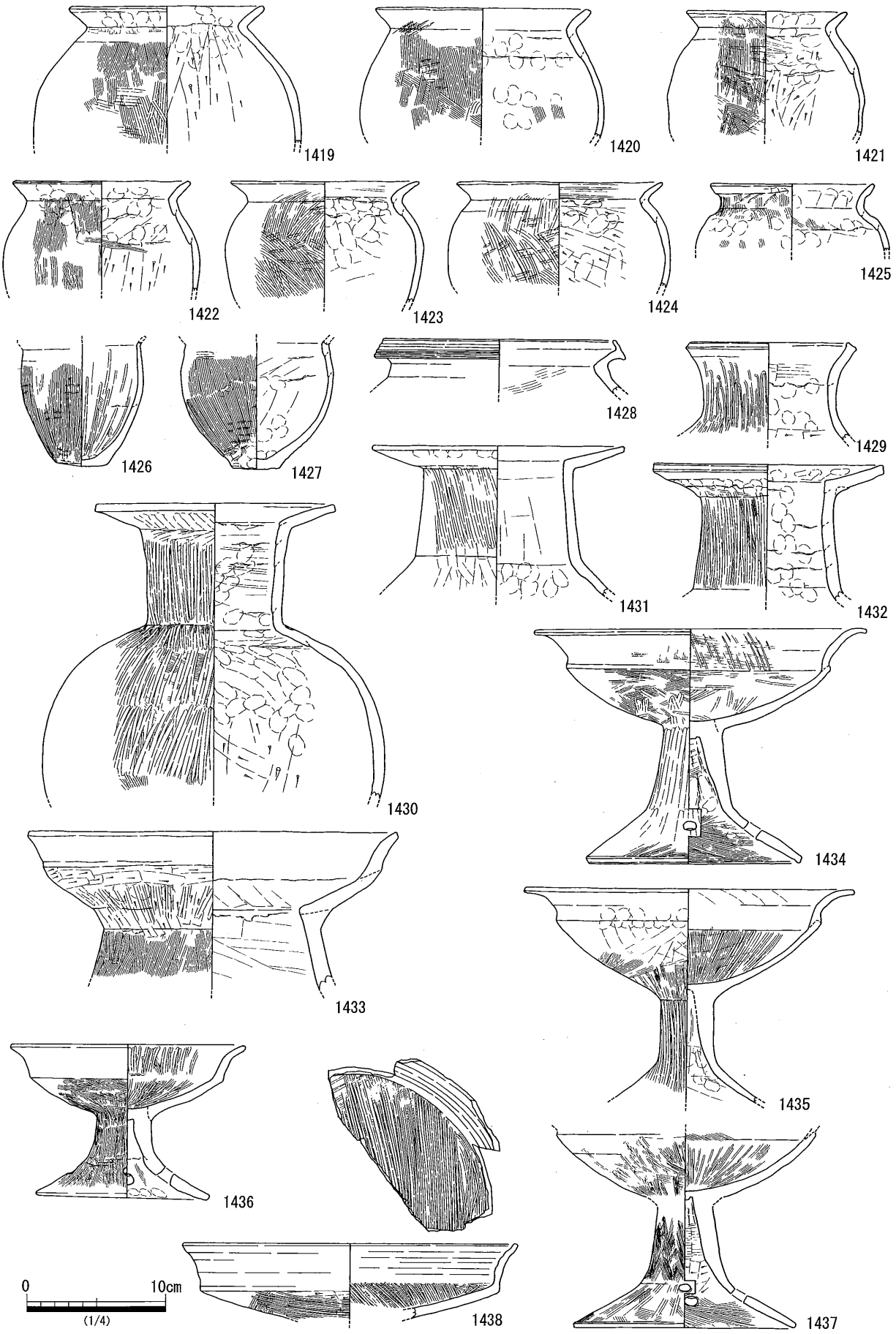
第 208 図 流路跡 SR05 出土遺物 (5)　Ｆ群



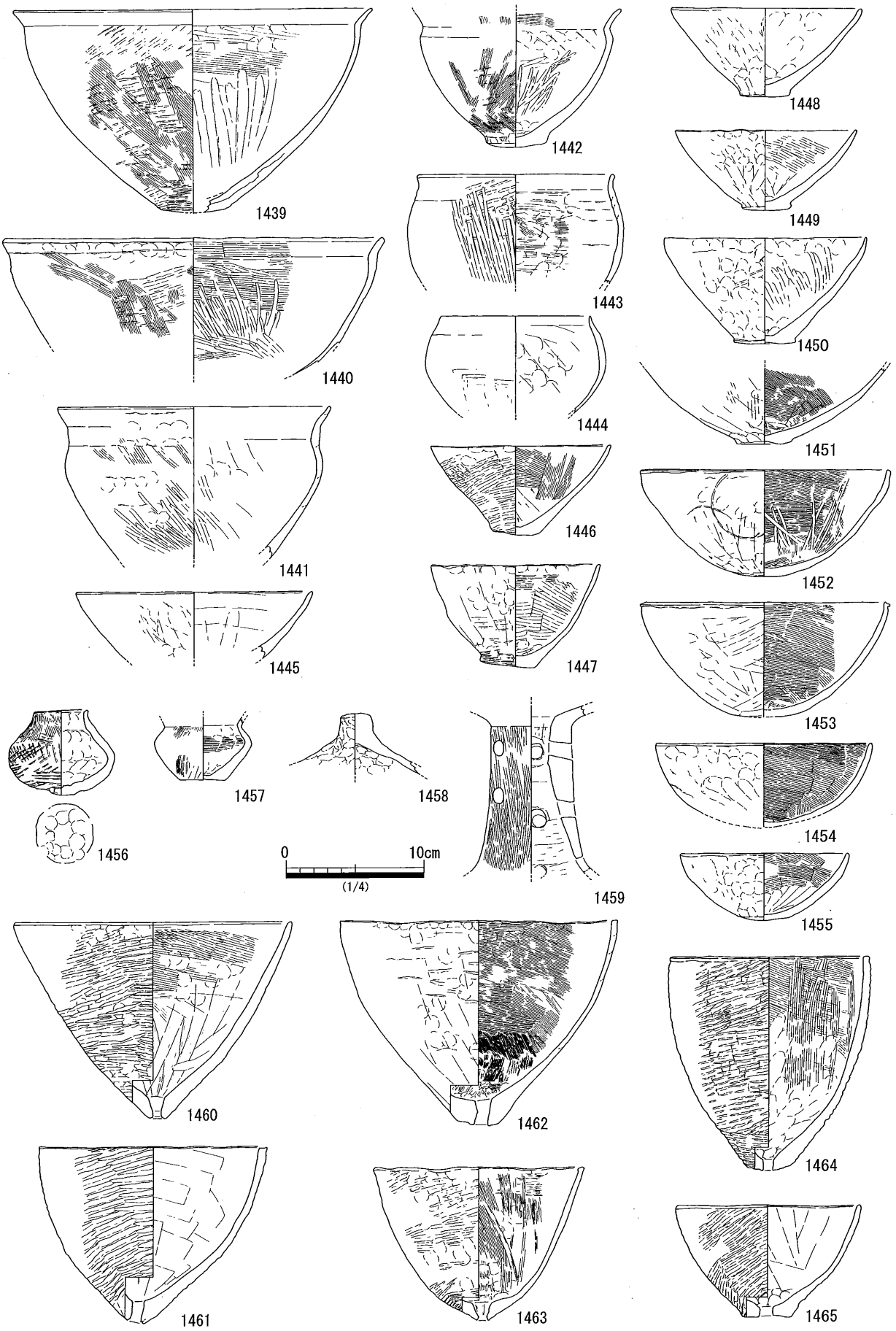
第 209 図 流路跡 SR05 出土遺物 (6)　G群 1



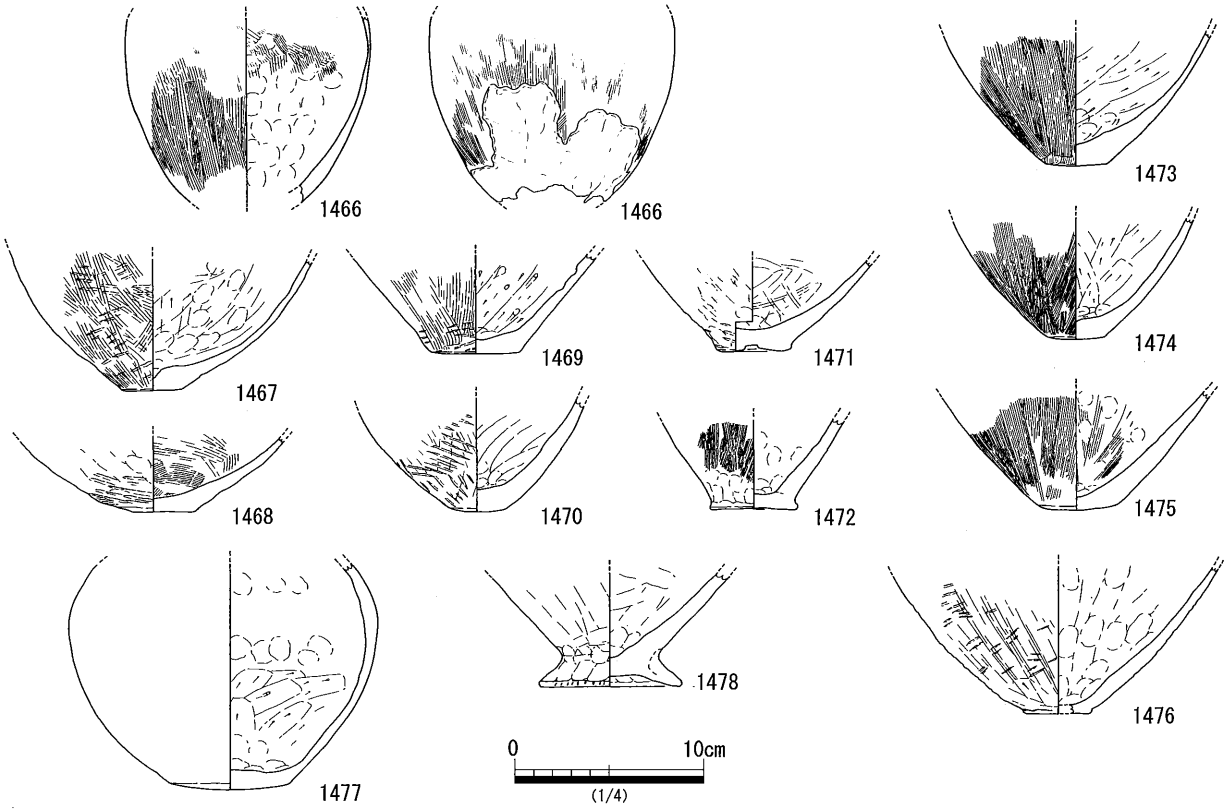
第 210 図 流路跡 SR05 出土遺物 (7)　G群 2



第 211 図 流路跡 SR05 出土遺物 (8)　G群 3



第 212 図 流路跡 SR05 出土遺物 (9)　G群 4



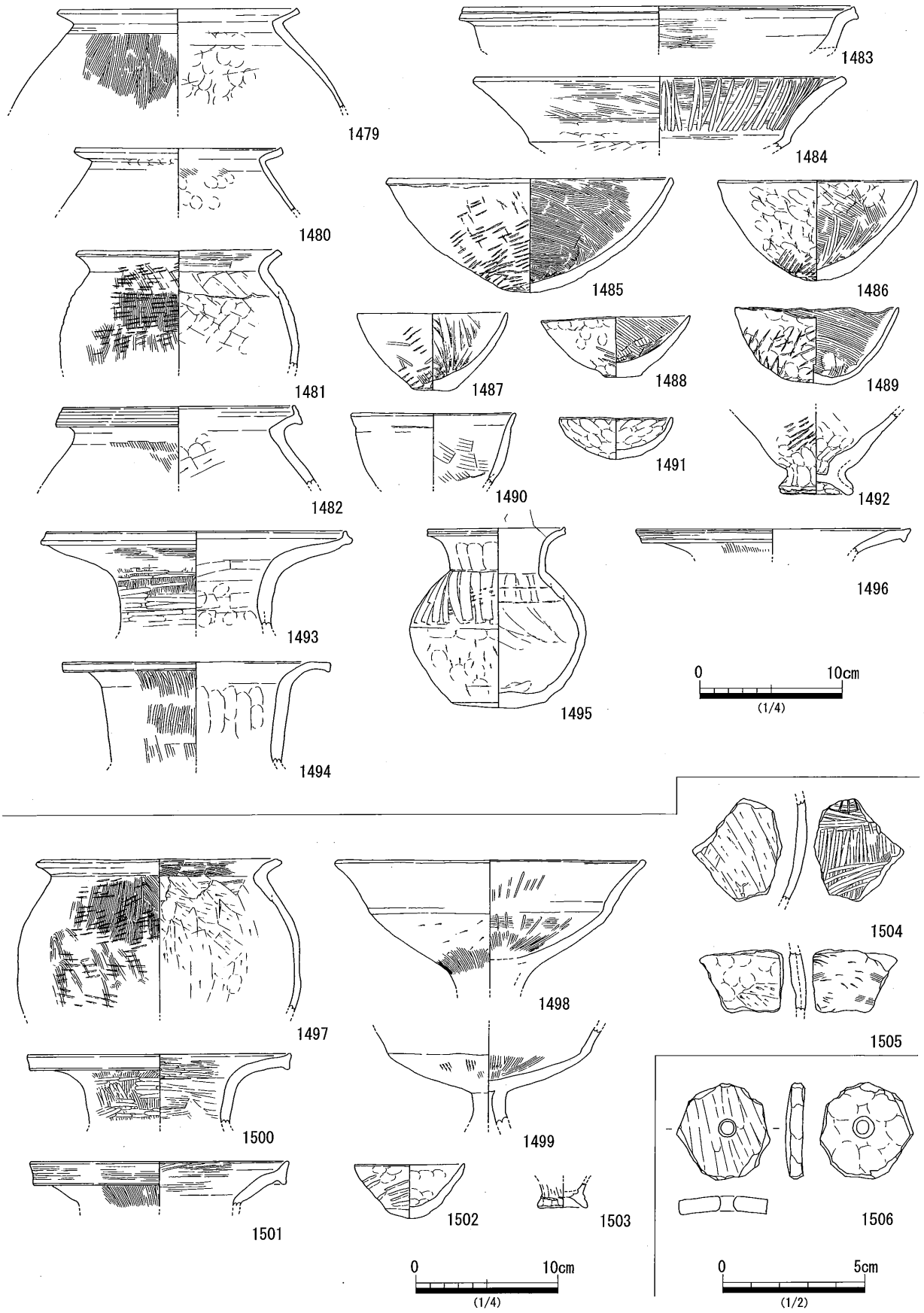
第 213 図 流路跡 SR05 出土遺物 (10) G群 5

〈SR05 土器群Ｆ群〉(第 208 図)

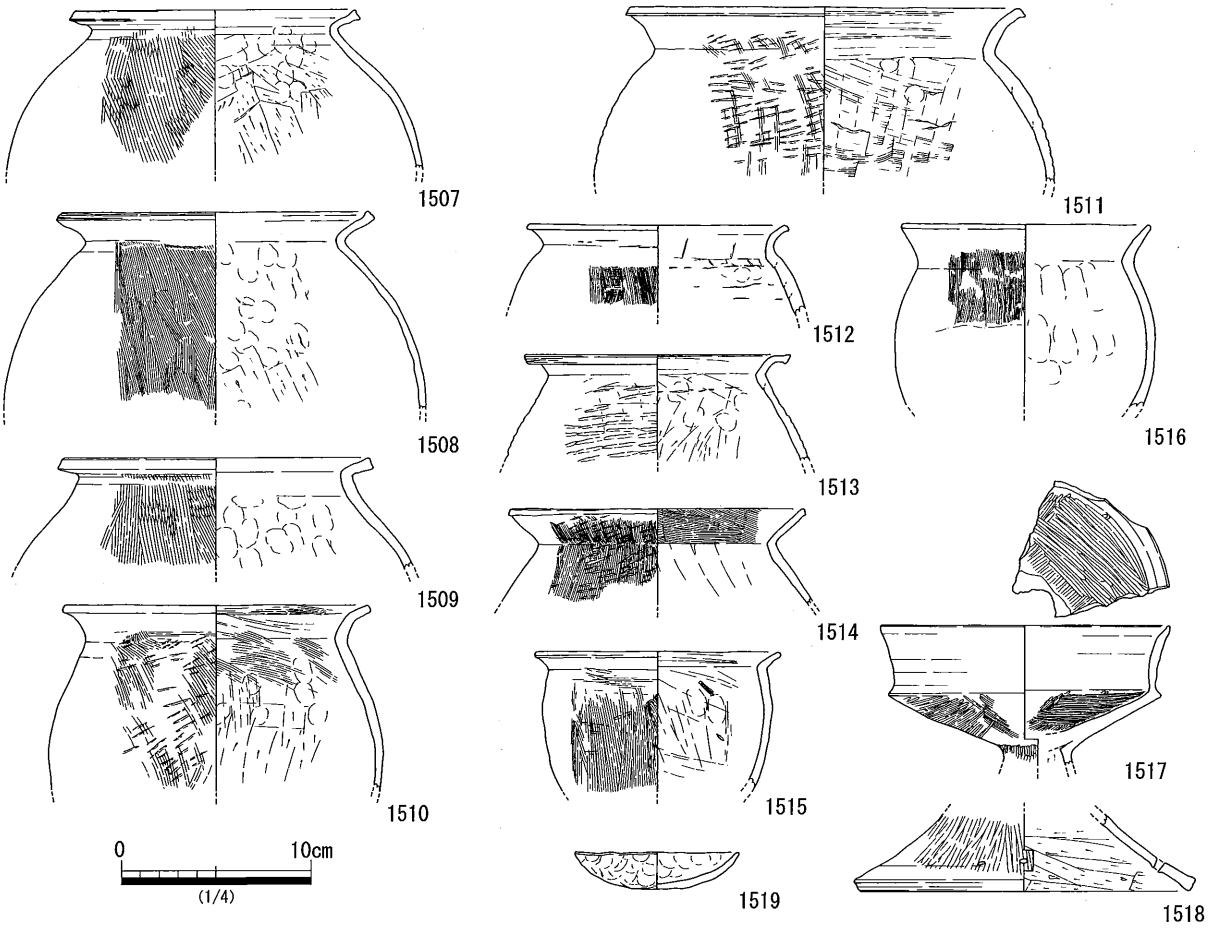
1365 ～ 1380 は南側西岸で見られた土器集中部Ｆ群出土の土器である。1365 は高松平野産のＢ類系甕である。1366 はそれに類似するＢ２類系土器。1367 ～ 1370 は叩き調整が残る甕である。1371・1372 は壺で 1373 は古墳時代初頭に下る。1372 は頸部が直線的に開くＢ類系の細頸壺である。1374 は複合口縁壺で口縁部に部分的な波状文を施す。1375 は短頸壺、1376・1377 は器壁の薄い丸底の鉢である。1378 は底部が尖り気味の甑である。以上の土器群は後期後半から古墳時代初頭の土器を含んでおり、後期後半新相が主体となるものと考える。

〈SR05 土器群Ｇ群〉(第 209 ～ 213 図)

1381 ～ 1478 は南側東岸で見られた土器集中部Ｇ群出土の土器である。1381 ～ 1387 は高松平野産のＢ類系甕である。1388 ～ 1390 は胴部径が 30cm を超える大型の甕である。1388 は器面に土器焼成時に生じた可能性がある剥離痕がみられる。1391 ～ 1425 は叩き調整もしくはハケ調整の甕である。底部まで遺存するものはいずれも平底で、胴部下半は直線的に立ち上がる形状を共有する。内面調整はヘラ削りを行うものが多い。また、1408・1423・1424 には器面に土器焼成時に生じた可能性がある剥離痕がみられる。1426・1427 は平底の小型甕である。1427 は同様の剥離痕がみられる。1428 は口縁部拡張の甕である。後期前半に属する。1429 は直口壺口縁部である。口縁部が内外面に僅かに拡張する。これも後期前半に属するものであろう。1430 ～ 1432 は直立する頸部から口縁部が屈曲して大きく開く形態の長頸壺である。口縁頸部境の仕上げは、屈曲部に粘土紐を貼付し、粗い指押さえで接着するものの、ナデ調整をかなり省略しており、粘土接合痕や指押痕が明瞭に残る。頸部外面は下地のハケ目を部分的に残しながらヘラミガキを縦方向に施し、同様の調整を胴部上半まで継続する。3 者とも同一の形態・



第 214 図 流路跡 SR05 出土遺物 (11)　南側・北側黄色砂層



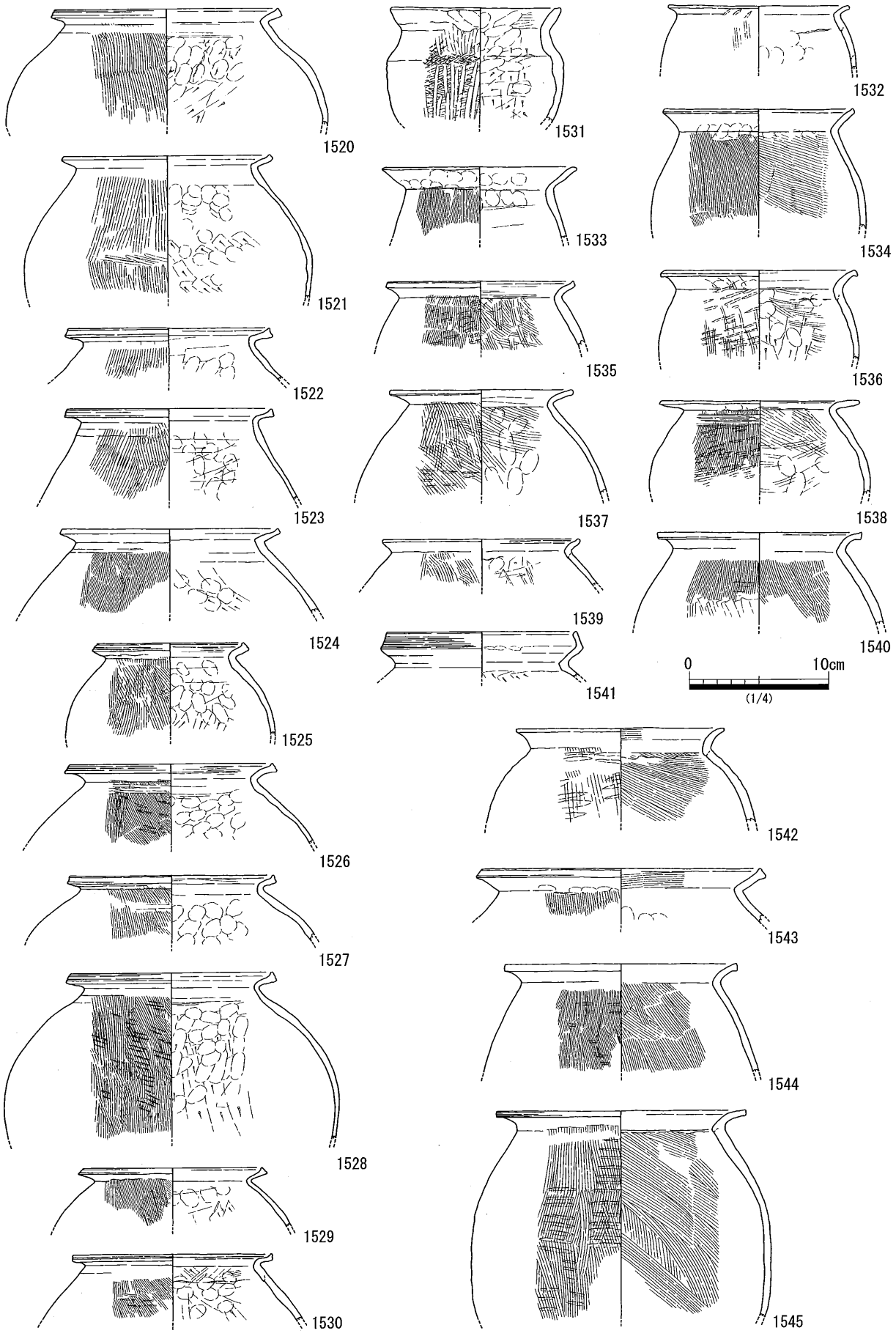
第 215 図 流路跡 SR05 出土遺物 (12)　北側黒色砂質土下層

法量・手法を呈し、いずれも剥離痕がみられる。1433 は複合口縁壺である。内傾する頸部から口縁部が強く屈曲して外側に開き、次に緩やかに上方に屈曲して外開きの複合口縁部に至る形態である。複合口縁への屈曲部の外面には粗い削り調整が残るなど、仕上げ調整が不十分な壺である。1434 ～ 1438 は高杯である。そのうち 1438 は高松平野産のＢ類系である。それ以外の高杯は杯部から口縁部に至る屈曲形状が類似する。このうち 1434・1436・1437 には剥離痕もしくは脚柱部との接続部分での剥落がみられる。1439 ～ 1444 は口縁部が外反もしくは短く直立する鉢である。1439・1442 の底部は底径が大きい凸面底である。このうち 1439・1440 には剥離痕がみられる。

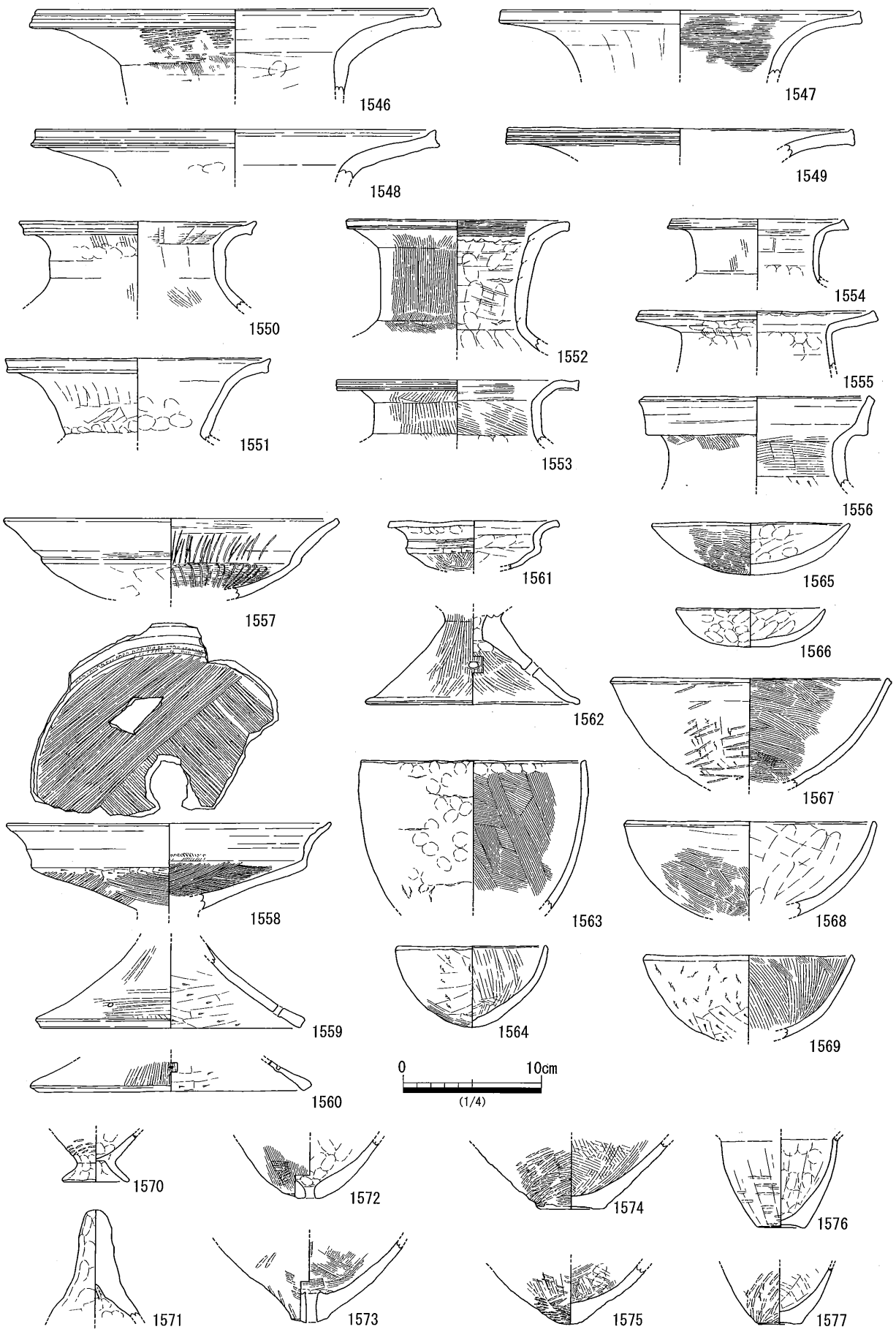
1446 ～ 1455 は直口鉢である。このうち 1446 ～ 1451 は平底、1452 ～ 1455 は丸底である。このうち 1452 ～ 1454 には剥離痕がみられる。1456・1457 は小型壺である。1456 は仕上げが粗いが、1457 は安定した平底で器面調整も丁寧である。1458 は蓋、1459 は器台で脚柱部に円形透かしが施され、一部に剥離痕がみられる。

1460 ～ 1465 は底部に焼成前穿孔をもつ甑である。1465 は平底鉢の形状を呈し、その他は尖底である。1466 は小型甕もしくは直口鉢の胴部片である。器表面に顕著な剥離痕がみられる。1467 ～ 1476 は底部片である。平底・凸面底がある。1477 は径の大きな凸面底を有する壺である。1478 は台付鉢の底部片である。

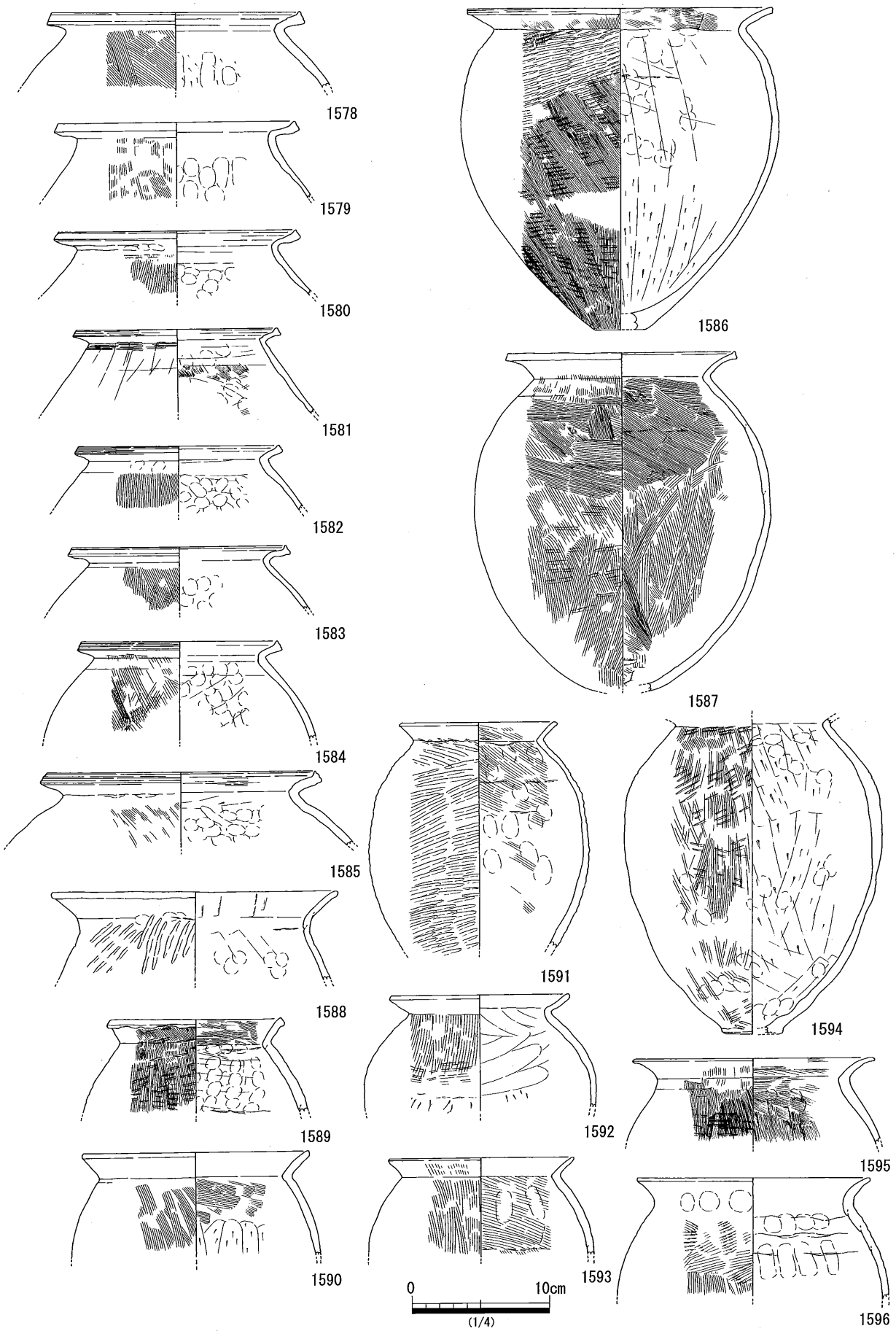
以上のＧ群土器は、丸底の鉢や凸面底の底部などやや新しい傾向もあるが、鉢の小型化が不十分であることや、胴部下半に丸みを帯びる鉢や甕が見られない点などから、後期後半古相のやや新しい一群と



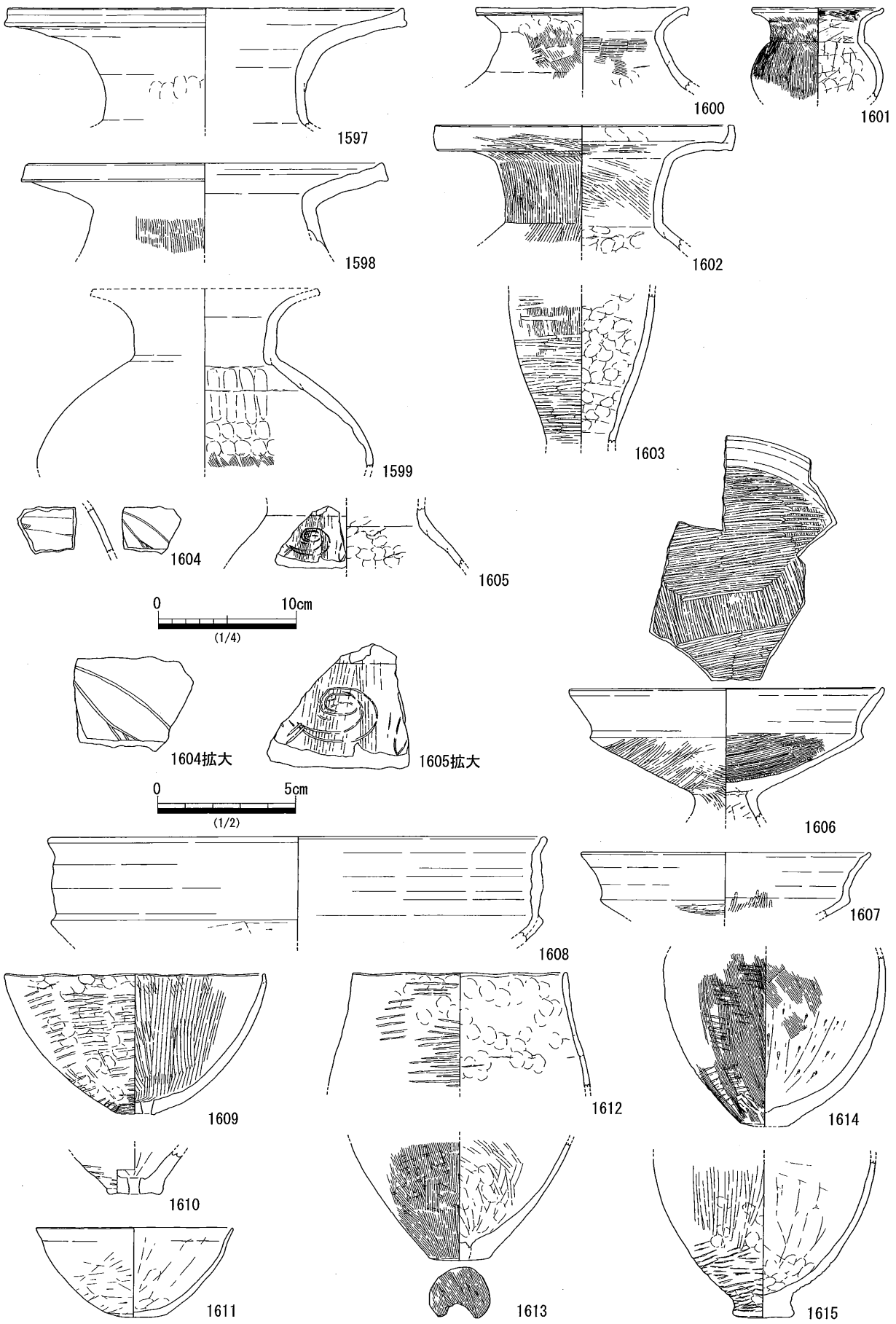
第 216 図 流路跡 SR05 出土遺物 (13)　南側黒色砂質土下層 1



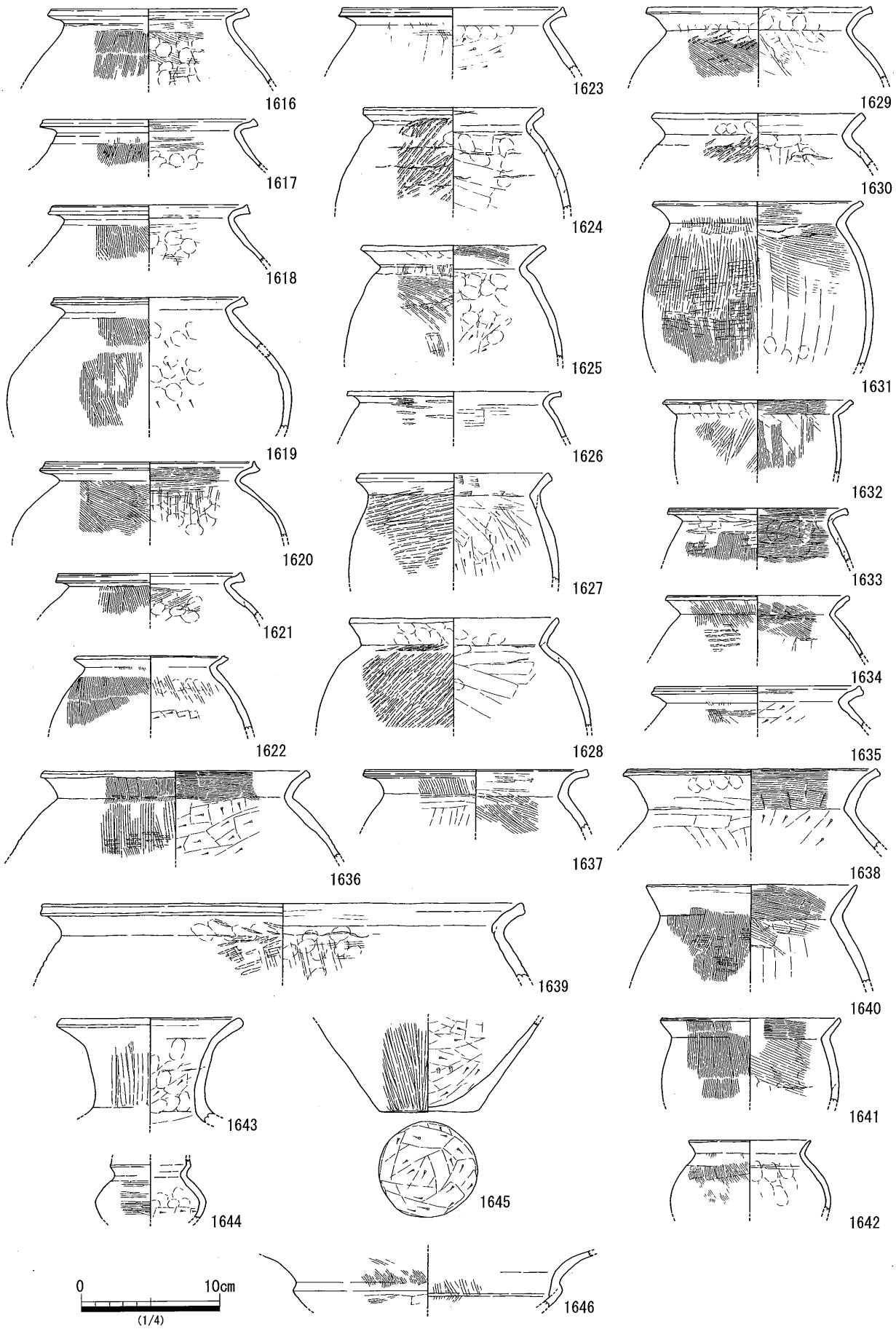
第 217 図 流路跡 SR05 出土遺物 (14)　南側黒色砂質土下層 2



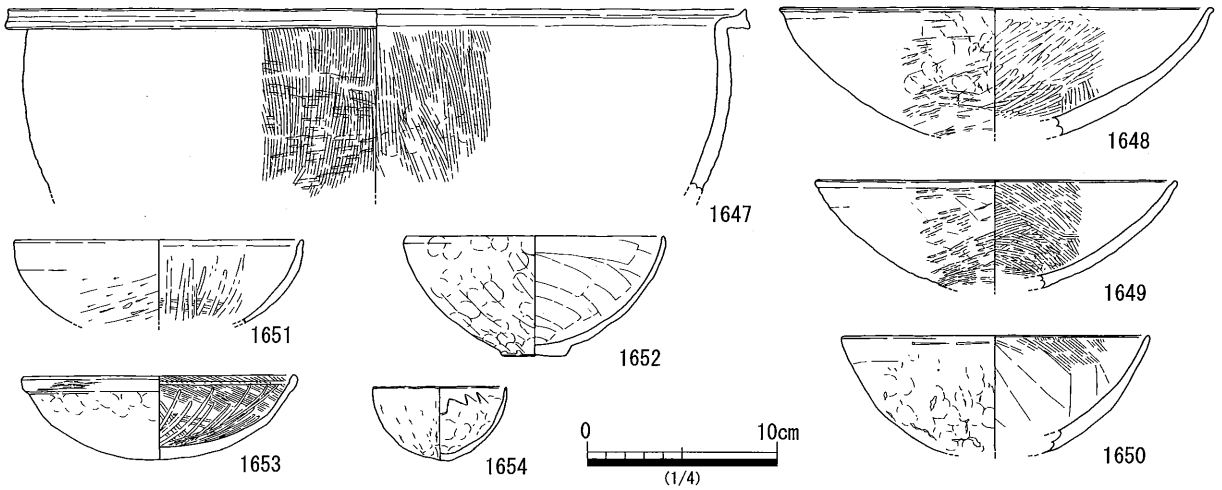
第 218 図 流路跡 SR05 出土遺物 (15)　北側黒色砂質土上層 1



第 219 図 流路跡 SR05 出土遺物 (16)　北側黒色砂質土上層 2



第 220 図 流路跡 SR05 出土遺物 (17)　南側黒色砂質土上層 1



第 221 図 流路跡 SR05 出土遺物 (18)　南側黒色砂質土上層 2

見ることができる。資料中に、焼成時に生じた可能性がある剥離痕が多数見られたことや、形態や手法を共有する壺や高杯の存在など、至近で土器を焼成した際に投棄された資料を含むものと言える。

<SR05 層位別資料 1- 南側黄色砂層 > (第 214 図)

1479 ～ 1506 は南側黄色砂層出土の弥生土器である。1479・1480・1493 は高松平野産のＢ類系土器、1481 は叩き成形の甕である。1482 は口縁部拡張の甕で胎土中に結晶片岩を含むことから徳島の吉野川流域産の土器である。後期前半に属する。1494 は頸部が直線的に立ち上がる広口壺である。1485 ～ 1489 は直口鉢で、平底のもの (1487・1488) と丸底で粗製のもの (1489) が含まれる。

<SR05 層位別資料 2- 北側黄色砂層 > (第 214 図)

1497 は叩き成形の甕である。1495・1496・1500・1501 は広口壺口縁部片である。口縁上端を外上方に摘み上げて拡張するものが目立つ。また 1495 は凸面底を有する小型壺完形品で剥離痕を有する。1498・1499 は高杯で杯部が小型化し口縁部が長い。小型の鉢 1491・1502 などは終末期に属するものであろう。1503 はＢ類系の製塩土器脚部片である。1504 は壺胴部片で、図化した破片の上端に弧帯文の可能性が高い線刻が観察できる。一方、1505 は爪で引っ掻いたような痕跡が器壁外面にみられる破片である。文様構成とは考えられないので、器面調整時の工具の当たりと推定される。1506 は土器片利用の紡錘車である。器面調整は顕著なヘラミガキがみられ、ここに掲載したものの弥生中期ごろの可能性が高い。

<SR05 層位別資料 3- 北側黒色砂質土下層 > (第 215 図)

1507 ～ 1518 は北側の黒色砂質土下層出土の弥生土器である。1507 はＢ類系甕に類似するが、肩部の膨らみの形状や口縁部内面屈曲の甘さ、外面ハケ目の方向の相違などにおいて高松平野産のＢ類系の甕と異なり、胎土中に多量の雲母片を含むＢ２類系である。1508 は胎土中に角閃石を含むものの、胴部が球形化し口縁部が長く間延びし、口縁端部の拡張が主に上方に偏るなど、Ｂ類系から逸脱した形態を有する。この形態は古墳時代初頭の高松平野の土器に類似するものといえる。1509 は形態的にはＢ類系の甕だが、胎土は雲母を多量に含むものである。ハケ目の方向が異なることからＢ２類系としておく。1510 ～ 1514 は叩き成形の甕である。1515・1516 は小型甕、1517 はＢ類系の高杯である。1519 は古墳時代初頭に属する小型鉢である。

〈SR05 層位別資料 4- 南側黒色砂質土下層 〉（第 216・217 図）

1520 ～ 1577 は南側黒色砂質土下層出土の弥生土器である。1520 ～ 1524 はＢ類系甕、1525 ～ 1530 はＢ２類系甕である。1528 の肩部はＢ類系甕と異なり球形に張り、徳島の東阿波型土器の形状に類似する。Ｂ２類系の胎土は雲母が目立つ。1531 ～ 1540・1542 ～ 1545 は叩き成形もしくはハケ調整の甕である。1541 は古墳時代初頭の吉備系甕で岡山の亀川上層式に対応する。1546 ～ 1555 は広口壺である。このうち 1546 ～ 1549 は口縁部が大きく開くタイプで、1548・1549 はＢ類系である。1549 は口縁端部に浅い沈線が巡る。1550・1551 は拡張した口縁端部上端を外上方に摘み上げる特徴を共有する。頸部形状は 1550 が直立、1551 が外開きで異なるが胎土や色調は類似する。1552 は頸部が長い形態である。口縁外反部内面に粘土接合時の段が明瞭に残る。1554・1555 はＢ類系壺である。1554 は口縁部が直立した後外反するタイプ、1555 は頸部が内傾するタイプである。1556 は複合口縁の壺である。胴部から頸部への器形変化はスムーズに移行する形態である。1557 ～ 1562 は高杯である。そのうち 1558 ～ 1560 はＢ類系で杯部内面は井桁状の丁寧なヘラミガキが施される。

1563 ～ 1569 は直口鉢である。1563 は器形が高いタイプで器形が薄い。1570 は製塩土器脚部片である。脚部は裾広がりで、体部下半は直線的に開く形態。外面は横方向の叩き目が観察できる。1571 は把手部が長く上方に突出する蓋である。1572・1573 は焼成前穿孔の甑である。

〈SR05 層位別資料 5- 北側黒色砂質土上層 〉（第 218・219 図）

1578 ～ 1615 は北側黒色砂質土上層出土の弥生土器である。1578 ～ 1585 は口縁部が短く屈曲し口縁部を上方に拡張する甕である。このうち 1579 ～ 1582 はＢ類系甕で胎土中に角閃石を含む。1578・1583 ～ 1585 は胎土中に雲母を多く含むＢ２類系甕で、口縁外反部内面は明確な稜線をもたず、緩やかに反転する形態である。1586 ～ 1596 は叩き成形もしくはハケ調整の甕である。肩が張る胴部の下半が直線的に窄まり、安定した平底に接続する形態の 1586 や、胴部中ほどに最大径部をもち底部が丸みを帯びる 1587 がある。口縁部形態も胴部から緩やかに反転する 1588・1595・1596 や、鋭い稜線を介し「く」字状を呈する 1591 ～ 1593 などがある。なお、1594 は器表面に剥離痕がみられる。

1597 ～ 1601 は広口壺である。1597 は口縁部が大きく開く形態で、器面には剥離痕がみられる。1598 は頸部が内傾するタイプのＢ類系壺である。1602 は複合口縁壺である。口縁部の立ち上がりは短い。1603 は頸部が内彎しつつ立ち上がる細頸壺である。頸部下半は横方向の丁寧なヘラミガキが施される。

1604・1605 は外面にヘラ描きの線刻を施した絵画土器である。1604 は紡錘状に描かれた２条の沈線の一部から２本の近接した沈線が派生するもので、鳥の表現である可能性がある。1605 は２本の沈線による巴形の線刻で、弧帯文の一部である可能性が高い。1606・1607 はＢ類系高杯、1608 はＢ類系大型鉢である。1609・1610 は焼成前穿孔の甑。1611 は口縁部がわずかに外反する鉢である。1612 は薄手で外面に横方向の叩き目を施す製塩土器類似の鉢である。法量からみて製塩土器とは考えにくい。

〈SR05 層位別資料 6- 南側黒色砂質土上層 〉（第 220・221 図）

1616 ～ 1654 は南側黒色砂質土上層出土の弥生土器である。1616 ～ 1619 はＢ類系甕、1620 ～ 1622 は胎土中に雲母を多く含むＢ２類系甕である。1623 ～ 1642 は叩き成形、ハケ調整の甕である。口縁部形態や調整手法は多様である。1643 は頸部が直立する壺、1644 は口縁部が複合口縁となる吉備系小壺である。1646 は外反口縁の高杯である。口縁部が一旦短く内傾したのち大きく開く形態。1647 は口縁部が外反して端部を拡張するタイプの大型鉢である。外面に叩き目が残り縦ハケ調整を施す。1648 から 1654 は直口鉢である。1652 は平底、1653 は丸底を呈する。

<SR05 古墳時代土器>（第 222 ～ 223 図）

1655 ～ 1719 は SR05 出土の古墳時代土器である。布留系土器・韓式系土器といった 5 世紀代を中心とした土器に少量の 6 世紀代の須恵器を含む。これ以外にも布留系ではなく在地伝統の土師器類（特に甕）が伴う可能性もあるが、これまでに報告した弥生土器との峻別が困難で、十分に吟味できていない。また、出土層位は黒色砂質土上層のものが多いが、なかには黒色砂質土下層のものも含む。以下では、黒色砂質土下層として取り上げているものは、その旨記述する。

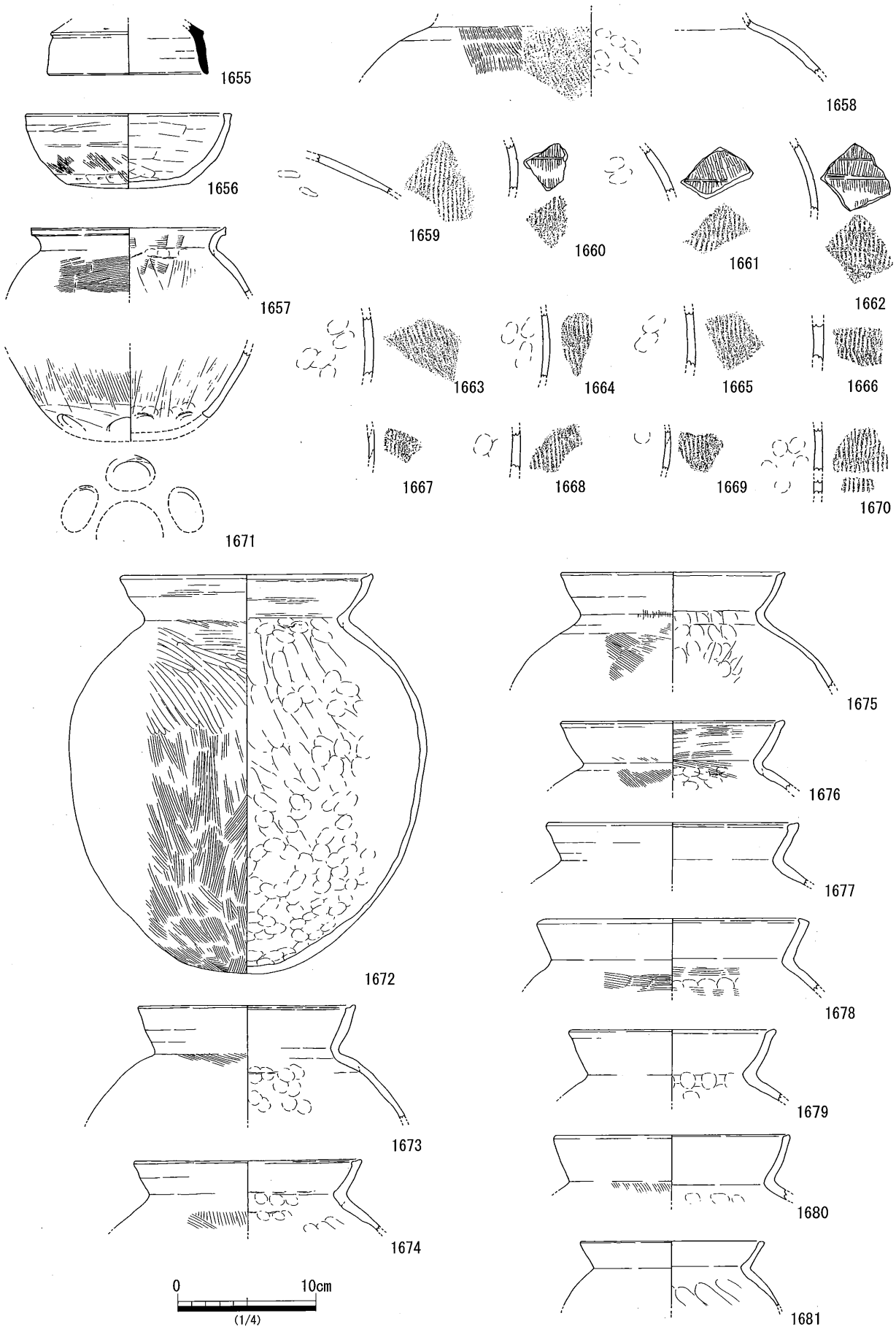
1655 は唯一の須恵器である。杯蓋で口径が 11.3cm と小さい。口縁端部は丸く収め面取りは行わない。黒色砂質土下層より出土しているが、時期的には 6 世紀前半に下るものである。1656 は韓式系土器の直口平底鉢である。径の大きい平底から体部が内彎気味に立ち上がる形態で、口縁端部は面取りを行う。体部外面には斜め方向の平行叩きが残り、底部直上を横方向にヘラ削りする。ほかの韓式系土器と同様の明黄灰色系胎土で、器表面に赤褐色のスリップがみられる。1657 は韓式系土器の甕である。やや肩が張る胴部上半に短く反転する口縁部が付属する。胴部外面は横方向のハケ調整を施し、布留系土師器甕と共通するが、口縁端部の細い突帯や口縁内面のナデによる窪みなど、初期須恵器の甕に類似する属性を有す。黒色砂質土下層出土である。1658 ～ 1662 は胴部が球形を呈し、直立する頸部が付属する韓式系土器壺の胴部片である。外面に縦～斜め方向の平行叩きを施し、1660 ～ 1662 は間隔をあけて横方向の沈線を施す。内面には指押え痕が残る。胎土は明黄灰色系である。1663 ～ 1670 は縦方向の平行叩きが残る韓式系土器片である。平底鉢などの胴部片と推定される。胎土は明黄灰色系。1671 は底部に多孔の蒸気孔をもつ土師器の甑である。底部側縁は丸みを帯び、3 個の蒸気孔がみられる。器形との関係から大型の蒸気孔の周縁に小型の蒸気孔が巡る形態と推定できる。外面はハケ調整で、胎土は布留系土師器と共通する。

1672 ～ 1689 は布留系土師器甕である。胴部外面に斜め～横方向の刷毛目を施すものが多い。口縁部形態は複数に分かれる。1672 ～ 1677 は口縁端部を内側に拡張し、内傾する面をもつ形態、1678 は口縁端部を内側に拡張し、外傾する面をもつ形態。1679 は口縁部を外側に拡張し、内傾する面をもつ形態。1680 ～ 1684 は口縁部の拡張が目立たない一群である。1685 ～ 1689 は口縁部小片である。このうち、1683 は弥生土器の可能性もあるが、胴部外面に横方向の刷毛目が施されることから土師器と分類した。なお、1676・1682 は黒色砂質土下層出土である。

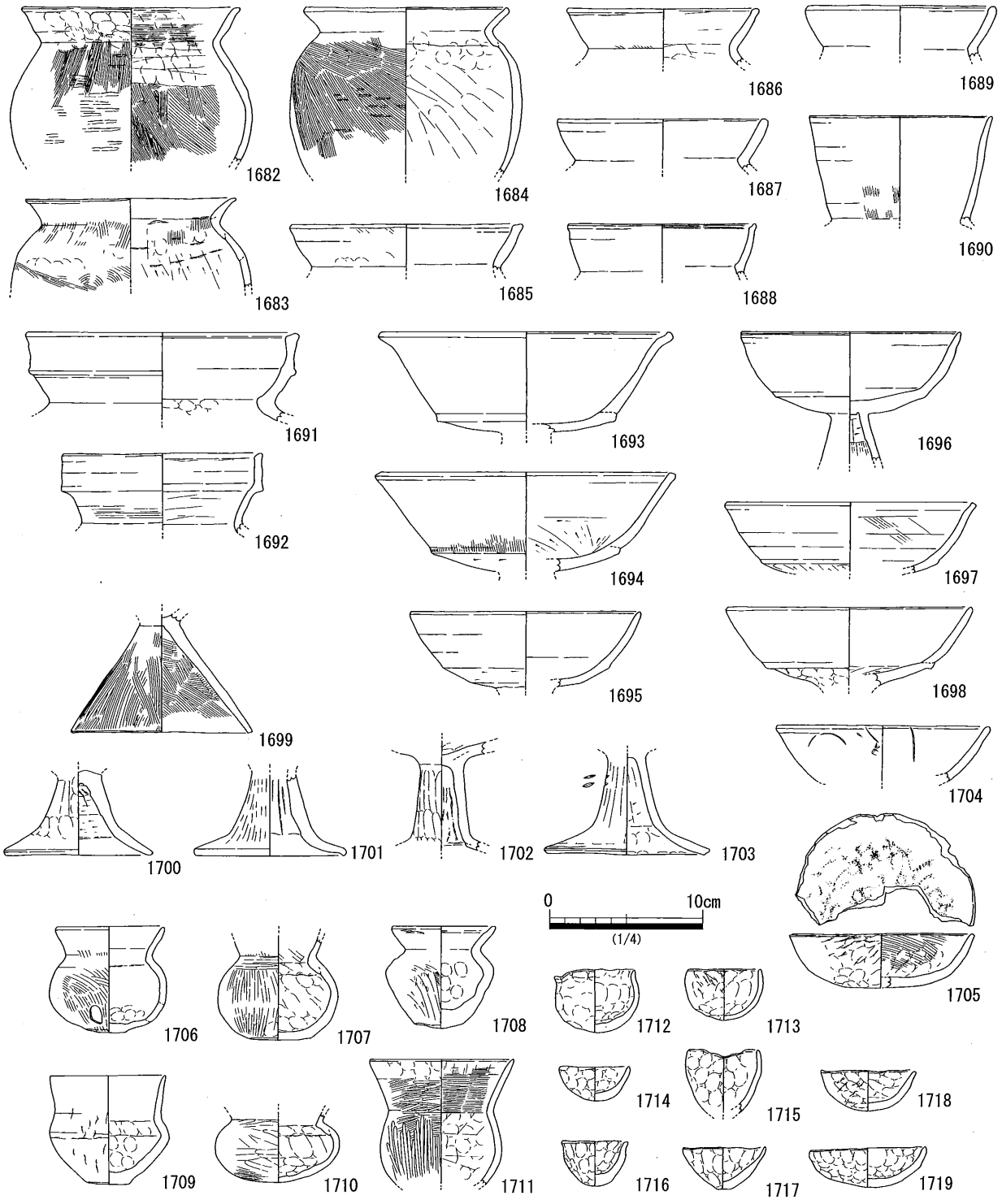
1690 は土師器直口壺。1691・1692 は土師器複合口縁壺である。1692 は黒色砂質土下層出土である。1693 ～ 1704 は土師器高杯である。1693 は平坦な杯から口縁部が斜め上方に開き、端部付近で屈曲して短く外反し、端部を面取りして内面に強いナデによる窪みを巡らせる。1694 ～ 1698 は端部付近の屈曲がないタイプで、杯部と口縁部の境の稜線が不明瞭なものが多い。1699 ～ 1703 は高杯脚部片である。1699 は裾が直線的に開く形態で、それ以外は脚柱部下端で屈曲して裾が開く形態である。1699 は黒色砂質土下層出土である。1705 は鉢である。内面に黒色付着物が観察できる。黒茶褐色で生漆の可能性がある。黒色砂質土下層出土。1706 ～ 1711 は小型壺である。これらの中には弥生土器と区分できないものも含まれる。1712 ～ 1719 は手捏ね成形のミニチュア土器である。古墳時代中期の祭祀遺跡で出土するものに類似する。1712 ～ 1714・1718 は黒色砂質土下層出土である。

<SR05 出土の石器・石製品>（第 224 ～ 227 図）

1720 は滑石製有孔円盤である。表裏面、側面に研磨痕が残る。図の左面に素材剥離面の稜線が残ることから、右面が素材の主要剥離面と考えられる。厚みが図の上下で異なることから、素材の厚みを大



第 222 図 流路跡 SR05 出土遺物 (19)　古墳時代 1



第 223 図 流路跡 SR05 出土遺物 (20)　古墳時代 2

きく変形したものとは考えられない。側縁には整形段階の剥離面稜線の痕跡がみられる。穿孔は図の左面から施される。北側の黒色砂質土上層で出土した。

1721 ～ 1728 サヌカイト製打製石鏃である。1721・1723 ～ 1727 は凹基平茎式、1728 は凸基無茎式である。1722 は石鏃未製品であろう。1729 はサヌカイト製打製石剣である。柄部両側縁を敲打調整し、僅かな突起を介して刃部にいたる。図の左刃部表面には研磨痕が残る。研磨痕は部分的に方向が異なり、

打製石斧や打製石庖丁の摩滅・線状痕とは考えられない。したがって、近畿地方に多い局部研磨のサヌカイト製石剣と考える。石材は、基部に残る自然面の状態や剥離面の細かく白く風化するフィッシャーなどの特徴から、金山産サヌカイトと考えられる。素材剥片の形状は図の左に先行剥離面、図の右は一枚の大きな剥離面がみられることから、図の右が主要剥離面と推定する。基部は素材剥片の側縁にあたり、石理の強い自然面が残る。技法的にみて弥生時代中期に盛行する金山型剥片剥離技術に伴う横長剥片を素材とするものとみてよい。

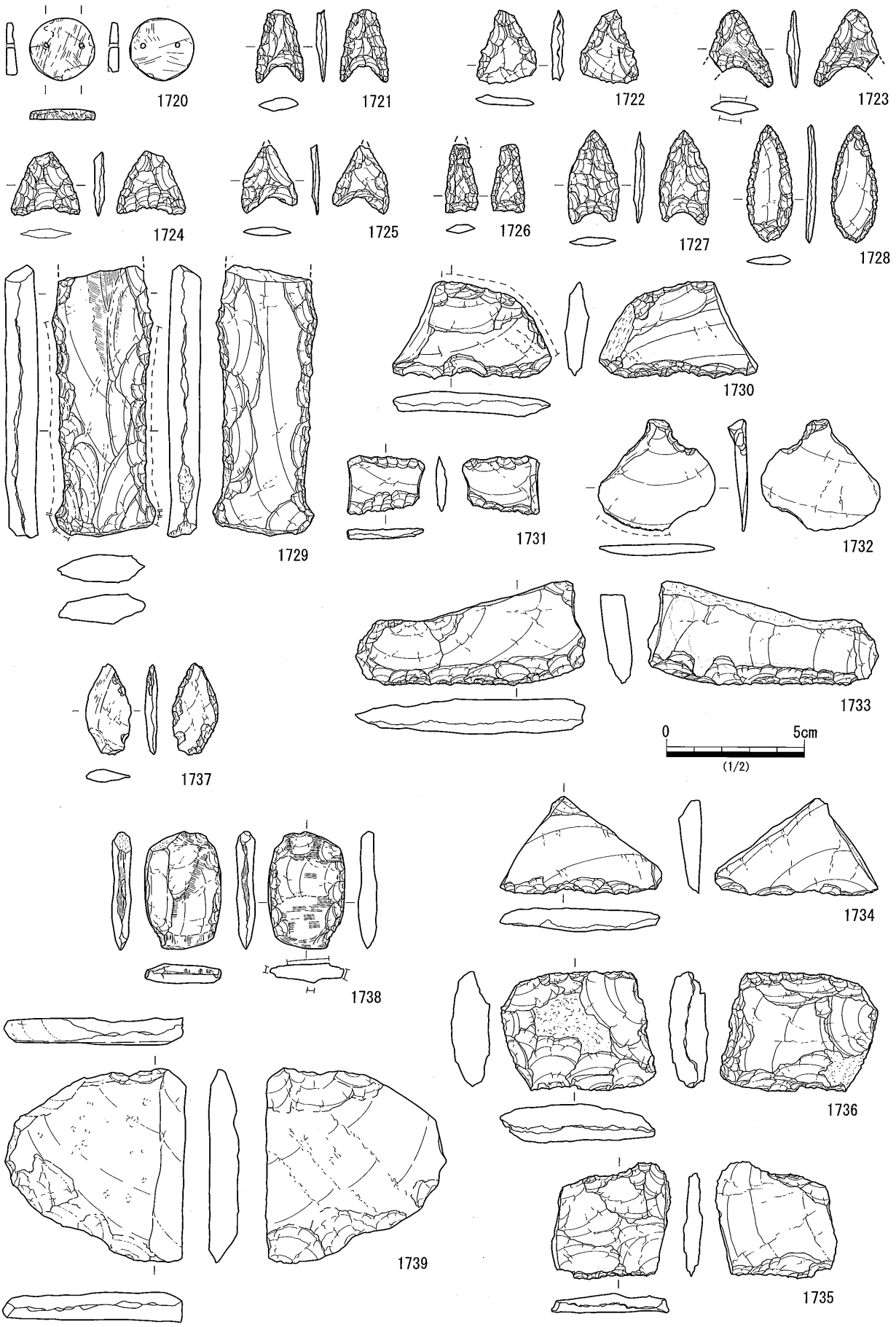
1730は側縁に抉りを施さないサヌカイト製打製石庖丁である。側縁に自然面を残す横幅10cm以上の横長剥片を素材とし、背部に敲打調整を加える。刃部は大きく再加工を施す。素材剥片の表裏両面に顕著な摩滅痕を認める。図の左側が素材剥片の主要剥離面で、図の右側の背面には、当該剥片と剥離方向が共通する先行剥離面、剥離方向が180度異なる底面の2面が認められる。

1731は上下両端に押圧剥離による細部加工を施したサヌカイト剥片である。大きさから見て石鏃製作途上品の可能性が高い。1732は扇状剥片の末端に微細剥離痕が観察できるサヌカイト剥片である。上端左右にツマミ状の加工が施され、石匙状を呈する。

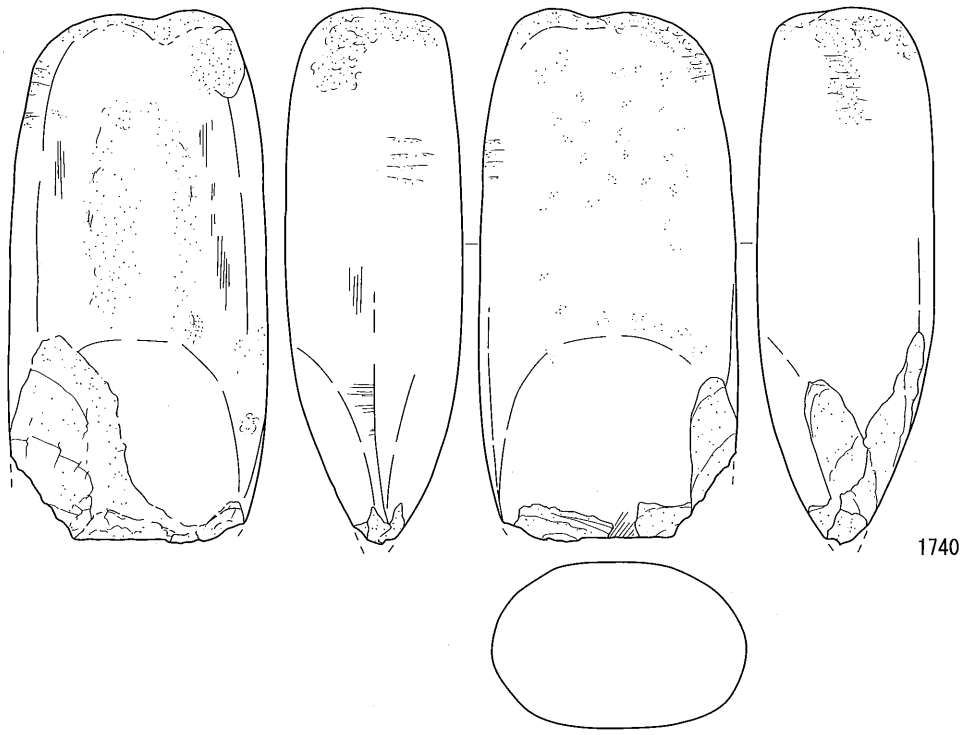
1733は上側縁に自然面を残す厚い剥片を素材とし、下縁に刃部加工を施したサヌカイト製石器である。表裏に摩滅痕が残ることから、打製石庖丁の再加工品と考える。1734は折損して三角形を呈するサヌカイト製剥片の下縁に不規則な刃部加工を施す薄手の削器である。背部の一側縁に自然面を残す。1735は薄手のサヌカイト剥片の一部に弱い摩滅痕が残るものである。下縁に敲打痕が残り、図の右側の主要剥離面が平坦なことから、両極打撃により生成された剥片と考えられる。石核に転用された打製石庖丁から剥離した剥片であろう。1736は全側縁に敲打痕を残すサヌカイト製石核である。各所に階段状剥離が認められ、両極打撃が頻繁に行われている。

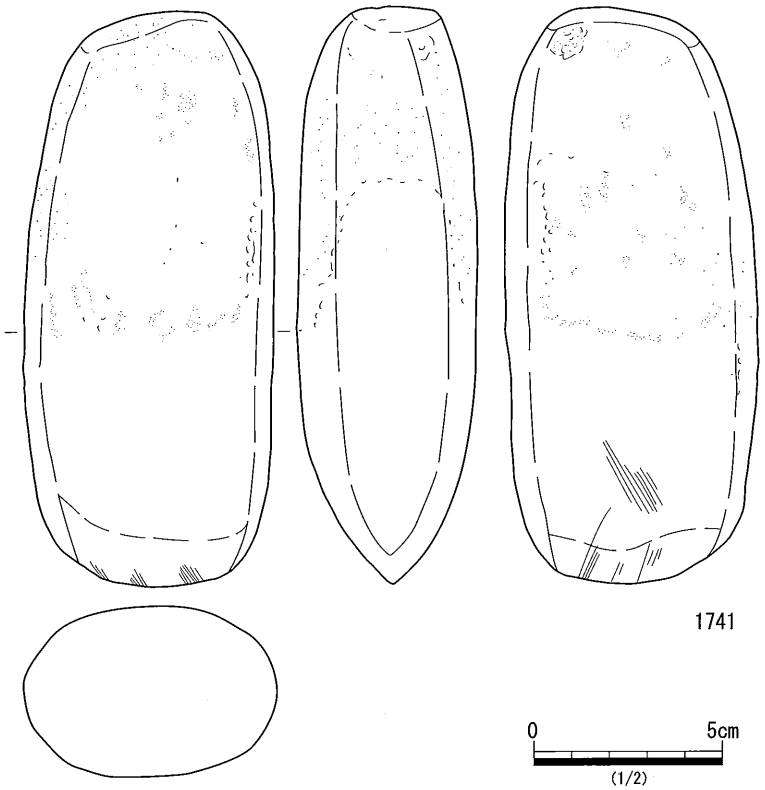
1737は結晶片岩剥片の側縁に押圧剥離による細部加工を施すものである。素材剥片の背面である図の左側には研磨による線状痕がみられることから、扁平片刃石斧か磨製石庖丁を転用したものと考える。大きさと細部加工の位置からみて石鏃の製作途上品である可能性がある。1738はサヌカイト製小型扁平片刃石斧である。側縁に自然面を残す横長剥片を素材とし、側縁を敲打調整して形状を整え、表裏・側面に強い研磨を施して細部整形を行うものである。特に刃部付近は縦横に研磨痕が残り、硬い石材を懸命に研磨した状況が読み取れる。サヌカイトを磨製石器素材として利用した事例は稀である。1739は安山岩剥片の側縁に若干の剥離を施した半折素材である。磨製石庖丁を目的とした可能性が高い。

1740～1743は伐採用の太形蛤刃石斧である。1740は身幅に対する厚みの割合が0.66、で、表裏面に平坦面を僅かに残す断面形状を呈す。刃部研磨は現下端から5.5cm付近から始まり、刃部の縦断面は比較的直線的に窄まる。基部は素材の凹凸を残す。石材は灰緑色を呈し、肉眼では斑晶が目立たず、変成も目立たない。半深成岩系の火成岩と考えられるが、比重を計測すると2.64で、付近の鴨部川で採集される半深成岩礫の平均比重2.5と比較すると重い。なお、側面に線状の敲打痕があり、打製石器製作時に行われる両極打撃の叩き石に転用されたことがわかる。1741は身幅に対する厚みの割合が0.7で、表裏面に平坦面をほとんど残さない断面形状を呈す。刃部研磨は現下端から4.5cm付近から始まり、刃部の縦断面は内彎しながら窄まる。基部から9cmまでの着柄部は研磨が不十分で細かな凹凸がみられる。叩き石に転用された痕跡もない。着柄状態もしくは脱柄直後に廃棄された可能性が高い。石材は濃緑色を呈し、白色の斑晶が目立つ。変成は目立たないが、比重は2.87と重く、かろうじて鴨部川採集の脈岩・花崗岩の比重上限値（2.87）にかかるが、肉眼的には鴨部川採集品とは石質や色調が異なる。1742

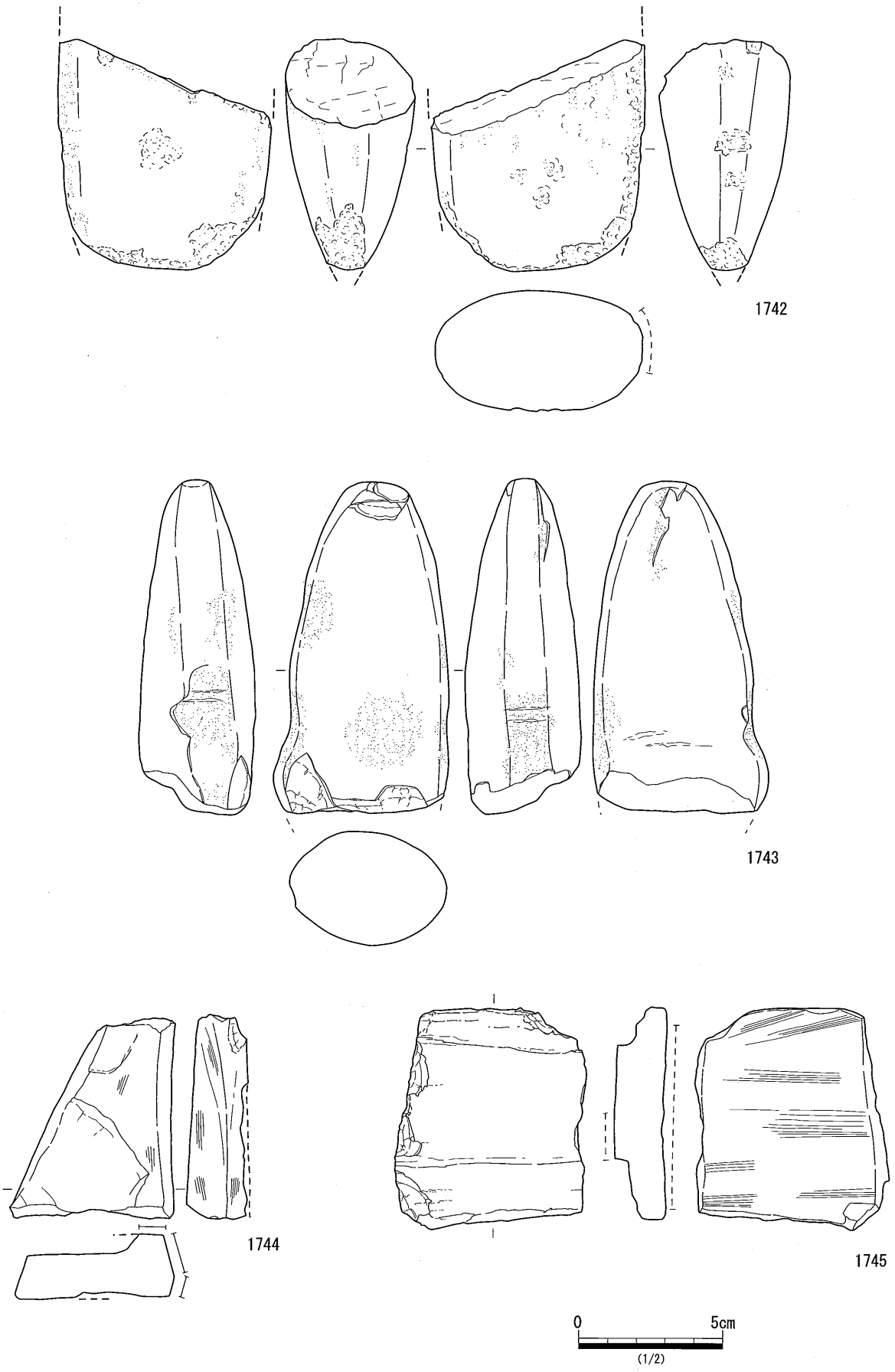


第 224 図 流路跡 SR05 出土遺物 (21)　石器・石製品 1

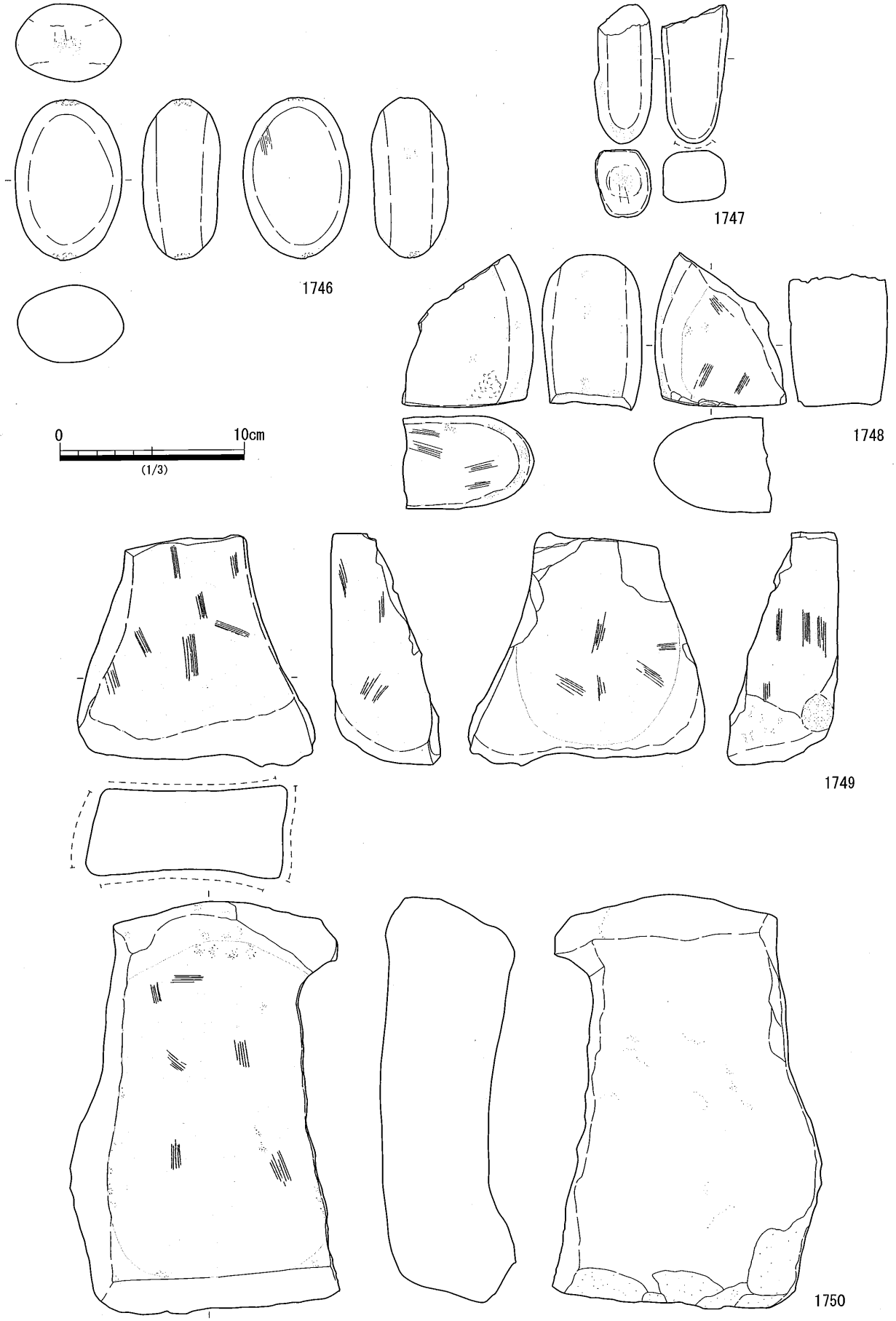




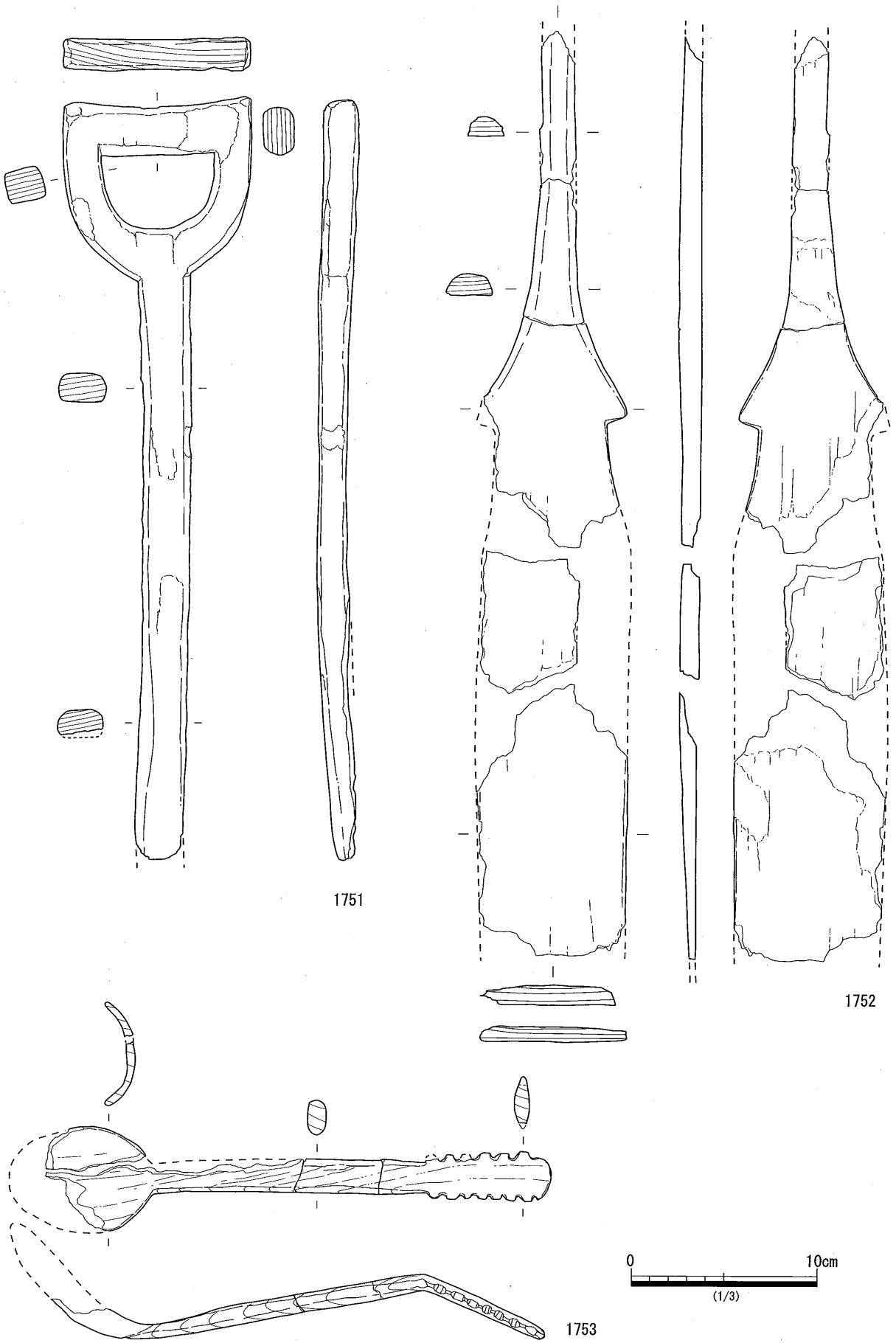
第 225 図 流路跡 SR05 出土遺物 (22)　石器・石製品 2



第 226 図 流路跡 SR05 出土遺物 (23)　石器・石製品 3



第 227 図 流路跡 SR05 出土遺物 (24)　石器・石製品 4



第 228 図 流路跡 SR05 出土遺物 (25)　木器

は身幅に対する厚みの割合が 0.58 で、扁平率が高く、表裏面に平坦面を残す。刃部研磨は現下端から5cm付近から始まり、刃部の縦断面は直線的に窄まる。折損後の転用痕跡が著しい。石材は濃緑色を呈し、白色の斑晶、変成が目立つ。比重は 3.08 と重く、鴨部川採集の脈岩・花崗岩の比重上限値（2.87）を大きく超える。中央構造線付近の変成地帯で生成された岩石（みかぶ緑色岩）と推定される。1743 は基部が窄まる形態の縄文系蛤刃石斧である。身幅に対する厚みの割合が 0.66 と肉厚で、残存部では表裏面に平坦面をほとんど残さない断面形状を呈す。折損後の転用痕跡が著しい。石材は淡灰緑色を呈し、変成が目立つ。比重は 3.2 と重く、鴨部川採集の脈岩・花崗岩の比重上限値（2.87）を大きく超えることから、中央構造線付近の変成地帯で生成された岩石（みかぶ緑色岩）と推定される。以上の太形蛤刃石斧の石材は、従来脈岩（半深成岩）と鑑定され、在地石材と推定されてきた経緯がある。今回報告したように、地元鴨部川川原石との比較を行うと、色調が緑色を帯びることや、比重分布が鴨部川より概して重いことが分かる。比重を個体別にみると、鴨部川川原石の数値内に収まるものもあるが、みかぶ緑色岩のバリエーションに位置づけることも可能かもしれない。今後の検討課題として提示した。

1744・1745 は砥石である。1744 は凝灰岩製で側縁にシャープな稜線が残る。1745 は流紋岩製で、砥面はさほど使い込まれていない。石器素材の可能性もある。1746 は全体を研磨した円礫で上下小口部に敲打痕が残る。砂岩製。1747 は棒状の安山岩製叩き石である。下端小口部に顕著な敲打痕が残る。1748 は安山岩製の大型の磨石である。特に図の下面の平滑度が高い。研磨面を細かく観察したが、顔料等は見出せない。1749 は砂岩製砥石である。平面形は中央が括れる分銅形を呈し、表裏側面に砥面が展開する。1750 は砂岩製の砥石である。長さ 22.4cm と大型で、砥面は片面に固定される。

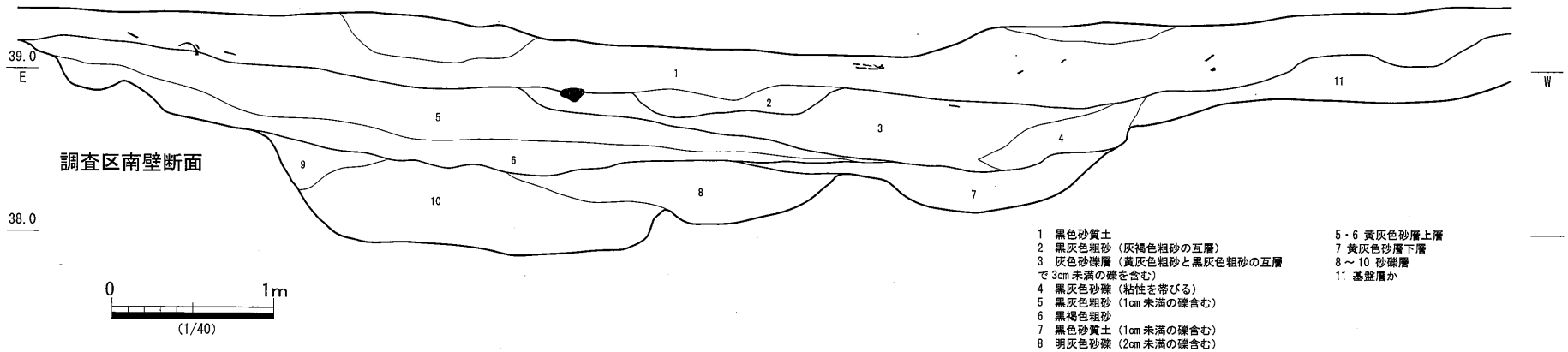
〈SR05 出土の木器〉（第 228 図）

1751 は鋤柄である。握部は半円状の刳り込みを持つ形状で、内外縁ともに丁寧にカーブを作り出す。持ち手部の上縁は左右両端がやや上方に反る。柄部は断面楕円形で、図の下部がやや外反する。木取りは柾目で 7 ～ 8 本の年輪が残る。樹種は不明だが、木理から広葉樹と考えられる。1752 は組み合わせ鋤の刃部である。基部から刃部に向かって薄くなり、残存部下端で厚さは 3mm となる。着柄部上部は断面蒲鉾型で裏面は木目に沿って平坦に仕上げ、下部は大きく裾を広げ、刃部との境に 1.3cm の段を設ける。木取りは柾目で、5 ～ 6 本の年輪が残る。樹種は不明だが、木理から広葉樹と考えられる。1753 は丁寧に仕上げられた木匙である。把手部は「へ」字状に屈曲し左右側縁に細かな刻みを施す。匙身は薄手でやや浅い。器面は平滑で研磨仕上げを行っているものと考えられる。また、表面には黒色塗膜が施される。木取りは斜め方向の板目で、表裏面に木目が見える。年輪は残存箇所で 11 本以上が残る。

流路跡 SR06（第 229 ～ 241 図）

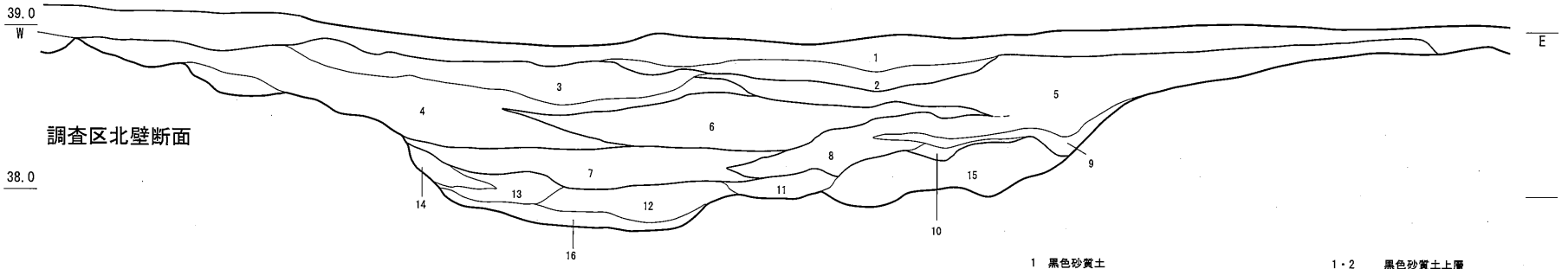
C地区西側調査区中央部を南から北に向かって流下する流路跡である。土層序の節で述べたように、河床レベルを比較すると、SR07 から SR05 につながり、その後蛇行して当該流路跡に至る可能性が高い。流路幅は 5 ～ 6 mで、深さは約 1.2 mである。

埋土は砂層が主体で SR05 に類似する。ただし、調査区北壁沿いでは黒色砂質土の下層に粘質～シルト質の黒色層が見られ、若干様相を違える。いずれにしても、部分的な層種の変化が大きいために、明確に層位区分できたわけではない。おおむね上層に黒色砂質土、中層に黄灰色砂層、下層に灰色砂礫層が堆積する。調査時には SR05 に準じて、黒色砂質土上層下層、灰黄色砂上層下層、砂礫層という層位区分を行い、遺物を取り上げたが、層位資料を検討すると、SR05 以上に調査時の層位区分の齟齬が認められた。報告にあたっては、SR05 に準じて冒頭に弥生前期・中期土器、次に部分的に出土状況を記録



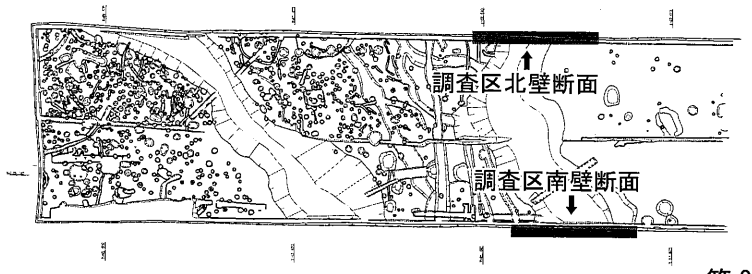
1 黒色砂質土
2 黒灰色粗砂（灰褐色粗砂の互層）
3 灰色砂礫層（黄灰色粗砂と黒灰色粗砂の互層で3cm未満の礫を含む）
4 黒灰色砂礫（粘性を帯びる）
5 黒灰色粗砂（1cm未満の礫含む）
6 黒褐色粗砂
7 黒色砂質土（1cm未満の礫含む）
8 明灰色砂礫（2cm未満の礫含む）
9 黒色粘土
10 淡灰黄色中砂
11 暗茶褐色粗砂

1・2 黒色砂質土上層
3・4 黒色砂質土下層
5・6 黄灰色砂層上層
7 黄灰色砂層下層
8～10 砂礫層
11 基盤層か



1 黒色砂質土
2 黒褐色砂質土
3 灰黒色砂質土（白色砂粒多い）
4 黒色粘質土（白色砂粒多い）
5 =4
6 灰褐色砂礫（中砂を基調に5cm大の礫を含む）
7 灰褐色砂礫（粗砂を基調に細礫を多く含む）
8 黒色粘質シルト（灰褐色砂礫ラミナを含む）
9 灰黒色細砂（茶褐色細砂をラミナ状に含む）
10 黒灰色砂礫（細礫基調）
11 灰黄褐色砂礫（細礫基調）
12 濁灰青色細砂（褐色粗砂ブロック混じる）
13 黒灰色シルト
14 濁灰青色シルト
15 灰褐色砂礫（中砂基調で細砂含む）
16 濁灰青色砂礫（細砂基調で細礫混じる）

1・2 黒色砂質土上層
4・5 黒色砂質土下層
6 灰黄色砂上層
7～10 灰黄色砂下層
11～16 砂礫層



第229図 流路跡 SR06 土層断面図

した土器群を報告する。黒色砂質土層と灰黄色砂層は出土位置によって北側と南側に分け、層位ごとの報告は断念した。最後に古墳時代の土器・石器を報告する。

〈SR06 出土の弥生前期～中期土器〉（第 230 図）

1754・1755 は如意状口縁の甕である。いずれも口唇部に刻目を施す。1755 は半裁竹管工具で刻目を施す。1756 ～ 1764 は逆Ｌ字口縁甕である。1756 ～ 1758 はヘラ描き沈線文、1759 ～ 1764 は複帯櫛描文を施す。1759・1763 は下端に三角形刺突を巡らせる。1765 は無文の逆Ｌ字甕である。以上は前期後半～中期初頭に所属する。1766 ～ 1768 は口縁部が外反する中期前葉の甕である。口縁端部を大きく拡張するものはない。

1769 ～ 1773 は壺である。1769 は頸部にヘラ描き沈線文、1770 は口縁部が直線的に外に開く直口壺、1771 は外面を縦ハケ調整し、肩部に刺突文を巡らせる。1772・1773 は胴部上半に櫛描直線文・櫛描波状文を施文する。

1774・1775 は逆Ｌ字口縁の大型の鉢である。甕と比べて口縁部が厚い。1776 は外面に櫛描波状文を施す直口鉢である。口縁部が若干肥厚する。1777 は口縁部を外面に折り返す鉢である。

〈SR06 土器集中Ａ群出土の弥生土器〉（第 231 図）

1781 ～ 1788 は SR06 北側東岸で検出した土器集中Ａ群出土の弥生土器である。1781 は胎土中に雲母を多く含むＢ２類系土器である。1782・1783 は叩き成形の甕である。1782 は胴部下半に剥離による穴がある。焼成時の剥離である可能性がある。1783 は胴部下半が膨らむ形態である。底面は平底でヘラミガキを施す。口縁部は間延びして外反する。1784 は底部穿孔の甑である。底部は丸底で、口縁端部は僅かに外反する。1785 ～ 1787 は大小の直口鉢である。いずれも胴部下半が丸みを帯びる。

以上の土器は弥生時代終末期新相に属する。

〈SR06 土器集中Ｂ群出土の弥生土器〉（第 231 図）

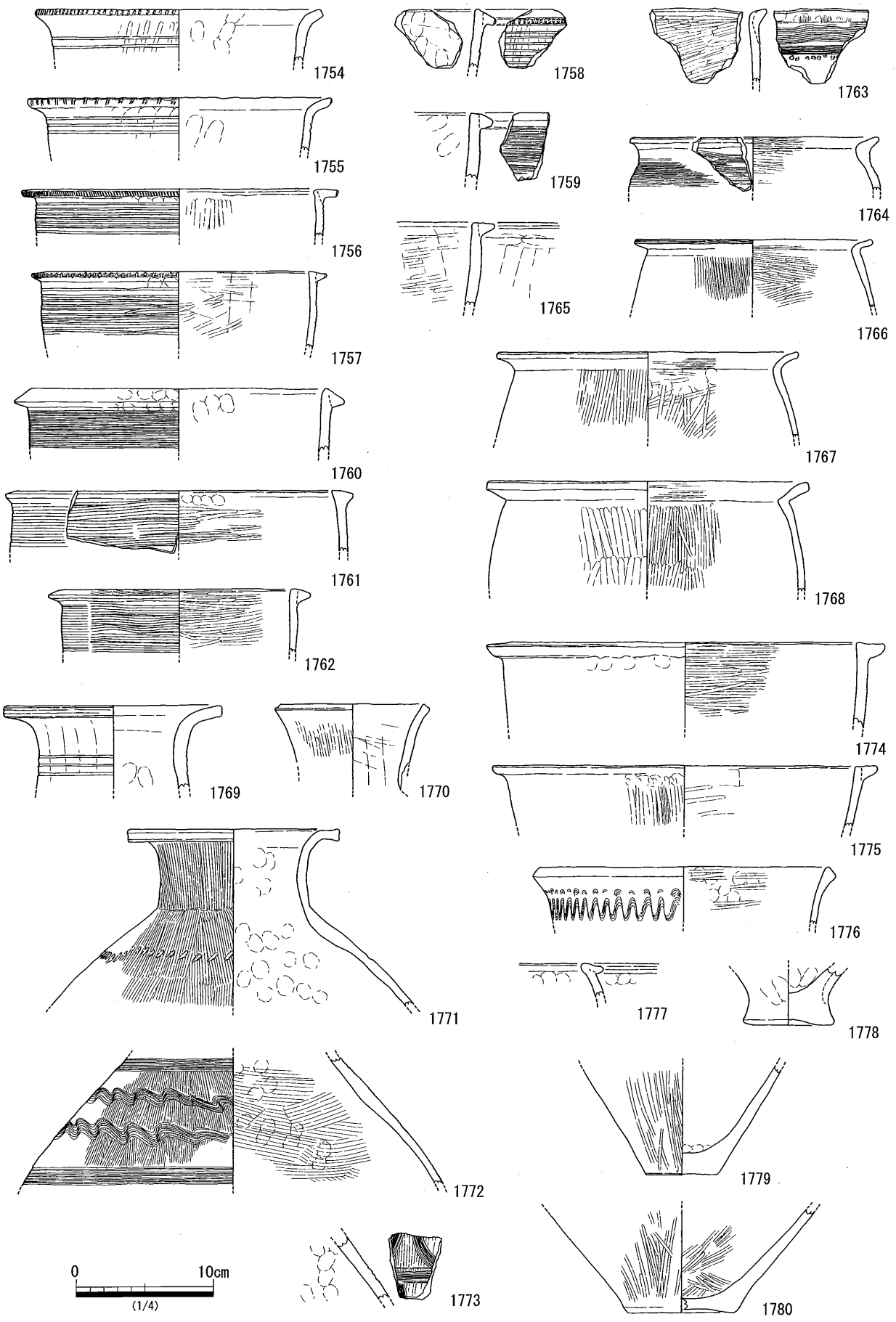
1789 ～ 1795 は SR06 中央東岸で検出した土器集中Ｂ群出土の弥生土器である。1789・1790 は甕である。1789 は叩き成形、ハケ調整で口縁部は胴部から緩やかに反転して外反する。1790 は口縁部に注ぎ口をもつ甕である。内外面はナデ調整で仕上げており、他の甕とは様相を違える。1791 は口縁部が大きく開く壺である。口縁端部を上下に拡張し、端面の一部にのみ浅い刻目を施す。また蓋用穿孔を施す。1792 は大型の皿状直口鉢である。底面はヘラ削りで丸底とする。1793 は尖底の甑で、細い蒸気孔を 3 個備える。1794 は小型壺である。口縁端部を短く上方に摘み上げる。1795 は小型丸底壺である。矮小の体部に内彎して立ち上がる口縁部が取り付く。胎土は赤茶色を呈す。

以上の土器は弥生時代終末期に属する。

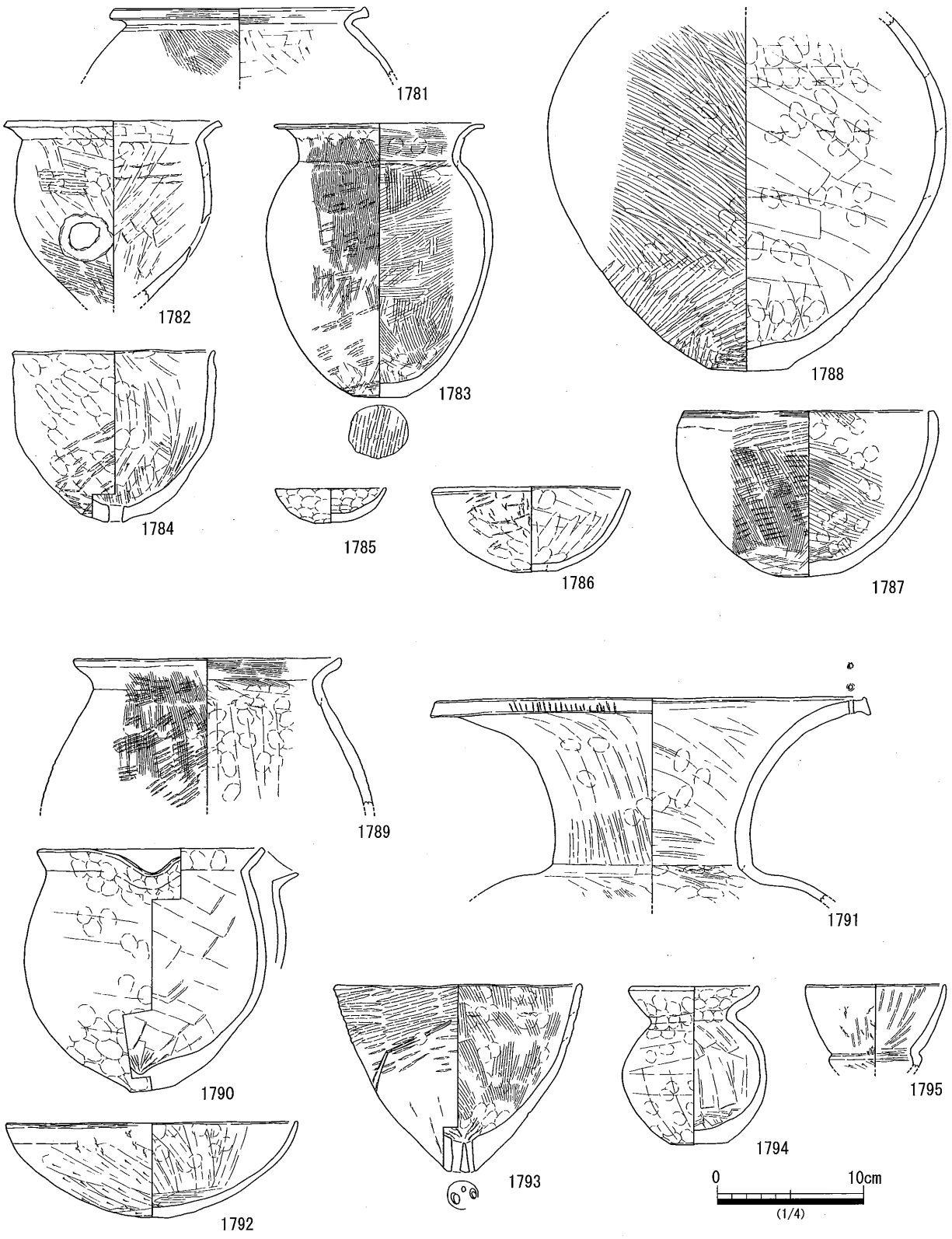
〈SR06 土器集中Ｃ群出土の弥生土器〉（第 232 図）

1796 ～ 1801 は SR06 南側西岸で検出した土器集中Ｃ群出土の弥生土器である。完形品を含み、遺存状態が良好なものが多い。1796 は叩き成形・ハケ調整の甕である。底部は安定した平底で、体部下半は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部を拡張してヨコナデを施す。1797・1798 は平底のハケ調整甕である。胴部下半は底部に向かって突出気味に窄まる。1801 は平底の大型鉢である。底面はやや凸面気味だが胴部下半は直線的に開く。口縁部は面取りする。

以上の土器は口縁部の仕上げや底部形状などからみて、弥生時代後期後半古相に属する。



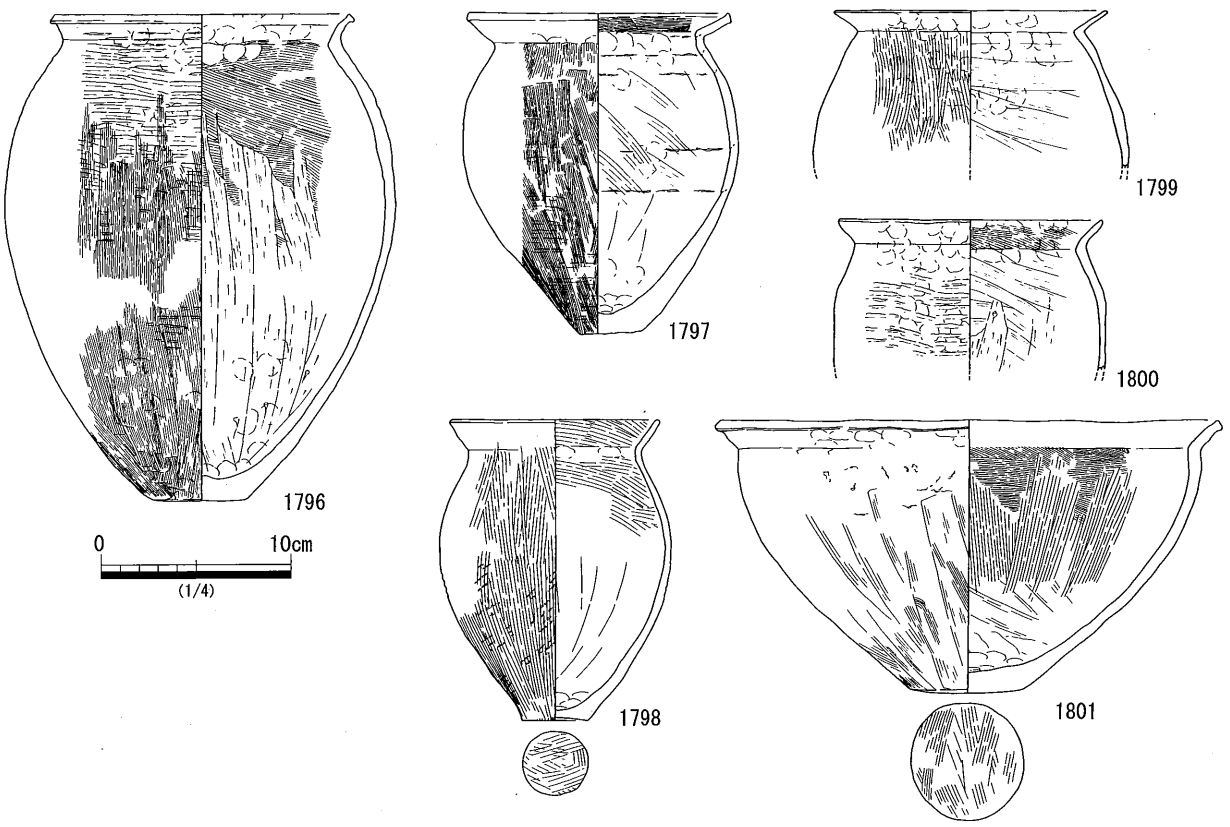
第 230 図 流路跡 SR06 出土遺物 (1)　弥生前期～中期土器



第 231 図 流路跡 SR06 出土遺物 (2)　A群・B群

〈SR06 北側　黒色砂質土･黄灰色砂出土の弥生土器〉（第 233 ～ 235 図）

1802 ～ 1810 は胎土に雲母を含むＢ２類系甕である。1811 ～ 1823 はそれ以外の甕である。叩き成形でハケ調整により叩き目を消し去るものが多い。底部まで遺存するものが少ないが、胴部が全体的に縦



第 232 図 流路跡 SR06 出土遺物 (3)　C群

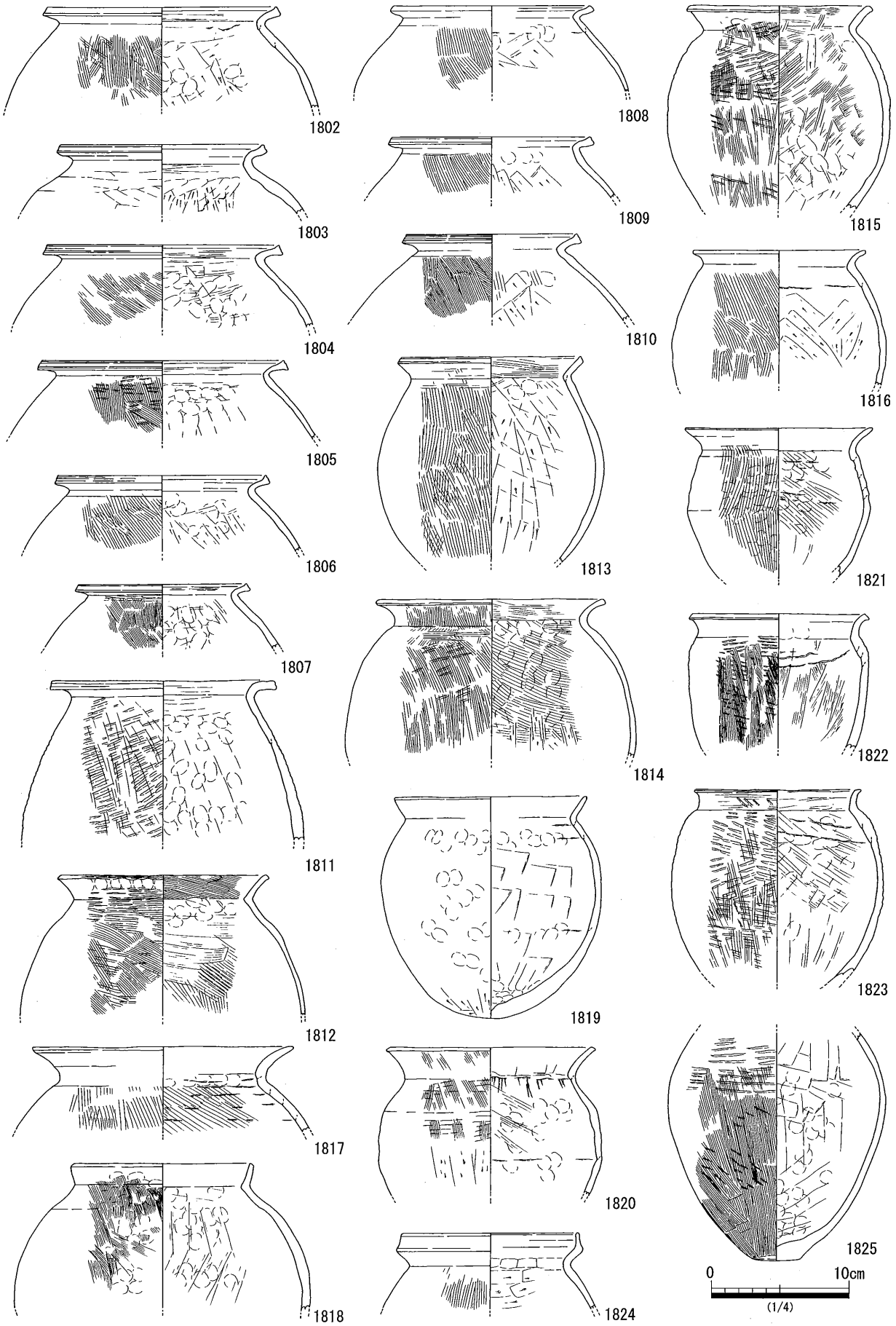
方向に間延びするものが多く、SR05 と比較して新しい段階のものが多いようである。1819 は内外面ナデ調整で仕上げており、他の甕とは異なる。1824 は吉備系の甕で岡山の弥生終末期下田所式に対応するものであろう。

1826 から 1829 は口縁部が大きく外反する壺である。そのうち 1826・1827 は胎土中に角閃石を含むＢ類である。1826 の口縁部外面には細い沈線を施す。1828 は口縁端部に不規則な刻目を施し、蓋用穿孔を備える。1829 は口縁部拡張のないタイプである。

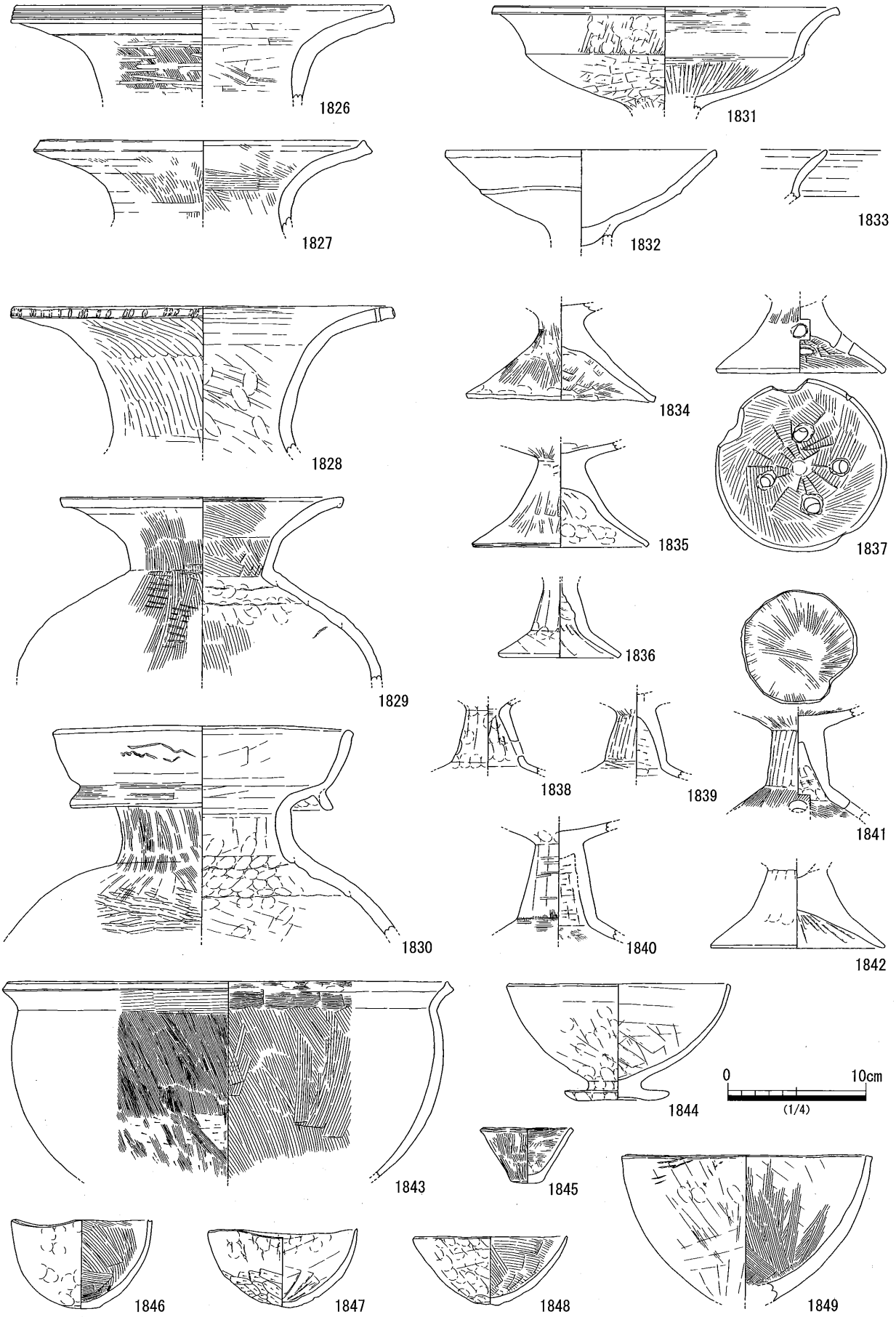
1830 は複合口縁の壺である。口縁部は他にあまり例を見ない形状で、短く立ち上がる頸部から一旦開いた後、緩やかに屈曲して口縁部が斜め上方に立ち上がり、屈曲部外面に下垂する幅広の粘土帯を貼り付けるものである。通常の複合口縁壺が複合部下端にて一旦整形を行い、その後複合部粘土帯を貼付するが、当個体は逆に下垂粘土帯を貼付して複合部を強調する技法である。下垂粘土帯の内面側は貼り付けた際の強い押捺が未調整で残される。また、複合口縁部外面には、浅く不安定な筆圧で波状文状のヘラ線刻が部分的に施される。このように明らかに複合口縁壺を外面的にのみ模倣した壺であるといえる。なお、胴部外面には粗い叩き目、内面には押捺未調整の粘土紐接合痕が残る。

1831 ～ 1842 は高杯である。1831 は杯部外面に横方向のヘラ削りが残る。1832 は杯部から口縁部にかけての屈曲部が段として残る形態。脚柱との接合は円盤充填である。1833 は高松平野産のＢ類系高杯口縁部である。1834 ～ 1835・1842 は中実系の脚部である。1837 のように裾部内面にクモの巣状のハケ調整が施されるものが多い。

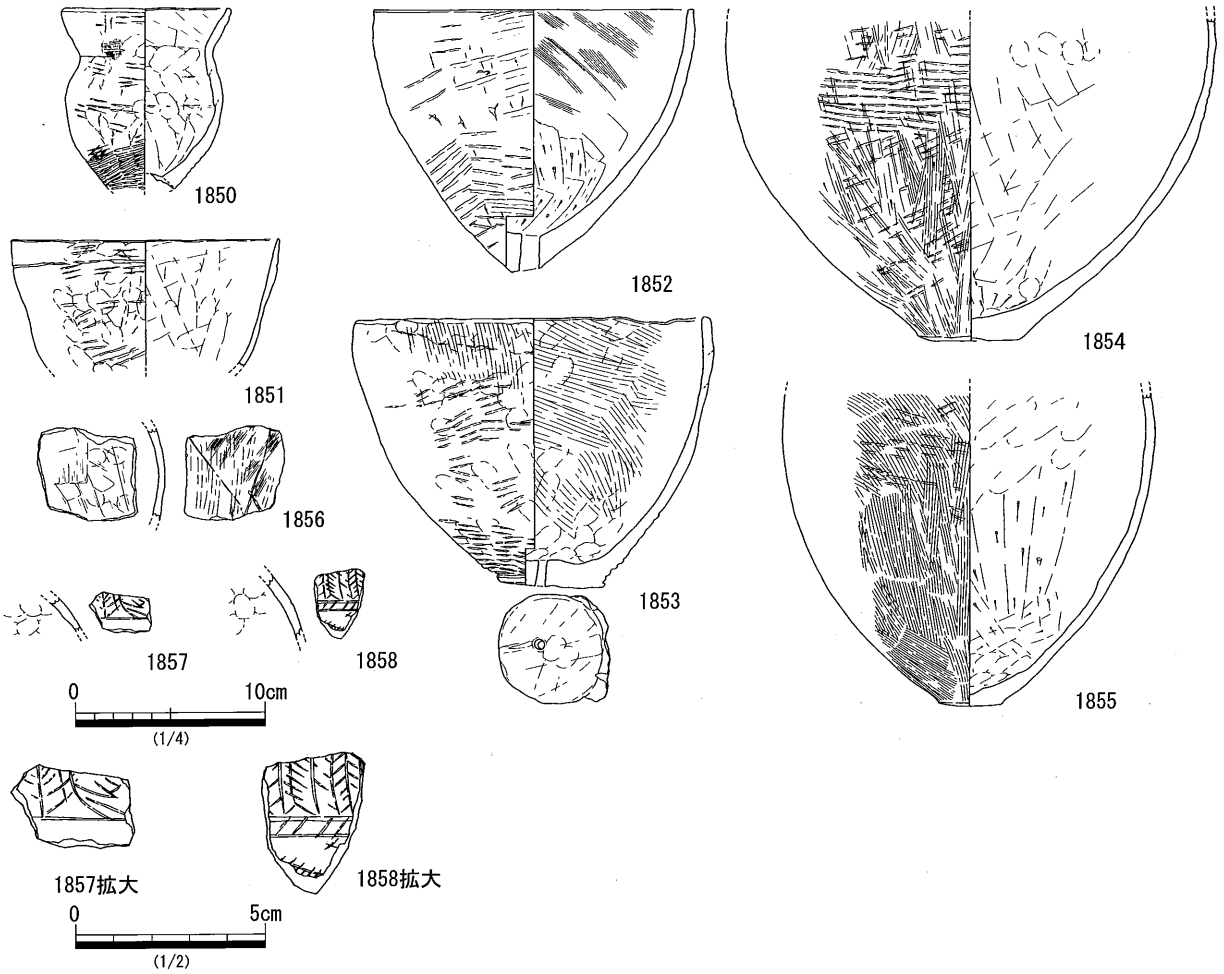
1843 は球胴化した大型鉢である。胎土は角閃石を多く含むＢ類系に共通するが、高松平野産のＢ類土器組成に含まれない形態である。内外全面をハケ調整する。1844 は扁平に開く脚台をもつ台付鉢で



第 233 図 流路跡 SR06 出土遺物 (4)　北側黒色砂質土・黄灰色砂質土 1



第 234 図 流路跡 SR06 出土遺物 (5)　北側黒色砂質土・黄灰色砂質土 2



第 235 図 流路跡 SR06 出土遺物 (6)　北側黒色砂質土・黄灰色砂質土 3

ある。1845 ～ 1849 は直口鉢である。

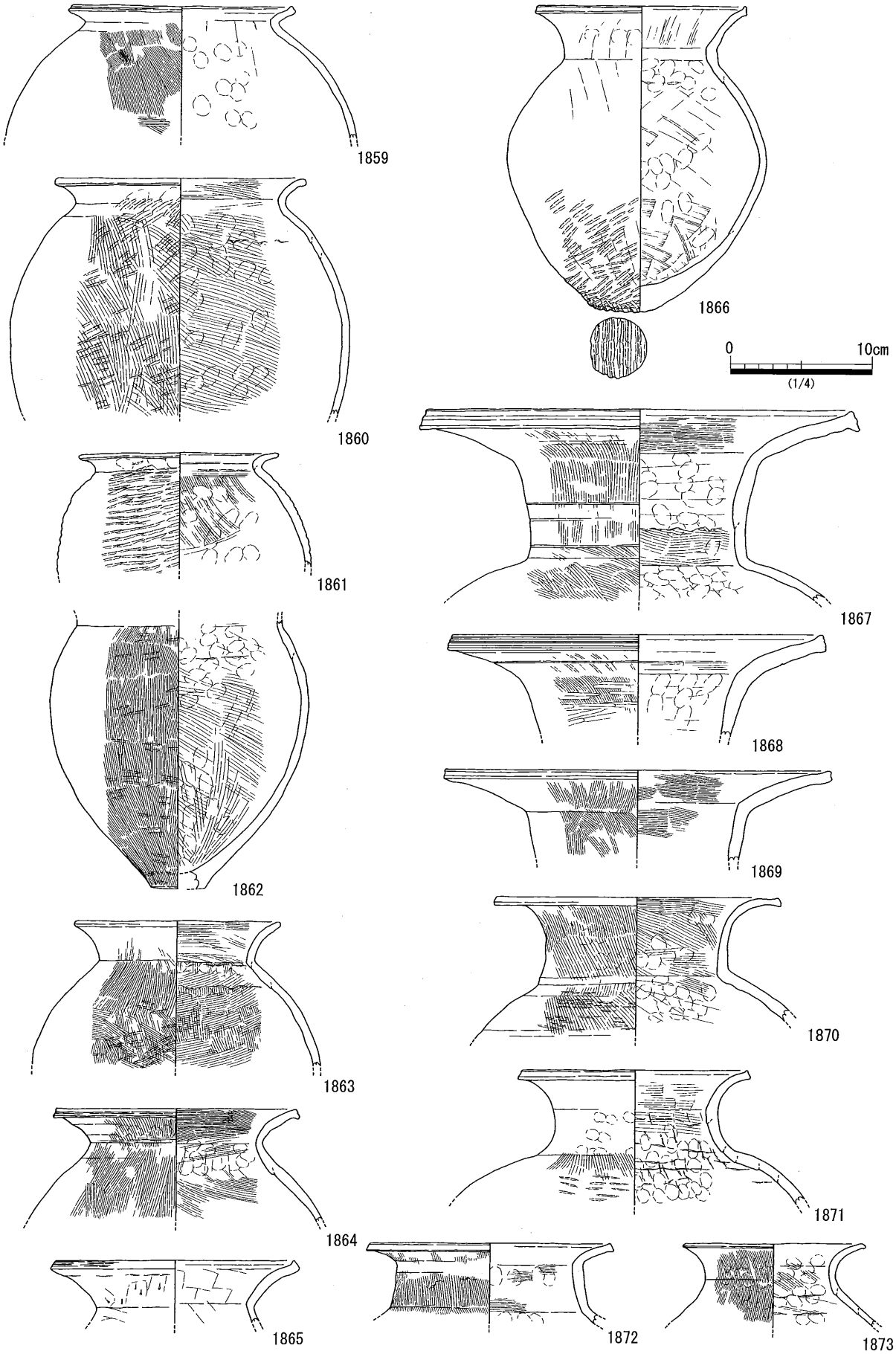
1850 は小型甕である。外面に叩き目が残る。1851 は薄手の直口鉢である。外面に叩き目を留め、製塩土器にも類似する。1852・1853 は底部に焼成前穿孔をもつ甑である。1852 は尖底で、1853 は平底である。

1856 ～ 1858 は外面にヘラ線刻のある絵画土器である。1856 はＶ字状線刻の下方に平行しない２条の線が取り付く。意匠は不明である。1857 は図の左に綾杉状の線刻が施され、その右に接して円弧状の線刻が施される。1888 と同じく弧帯文と綾杉文の組み合わせと見ることができる。1858 は綾杉文の下端を複条沈線で区画し、下位に斜行する綾杉文？を施文する。いずれも壺胴部の上半部破片と考えられる。

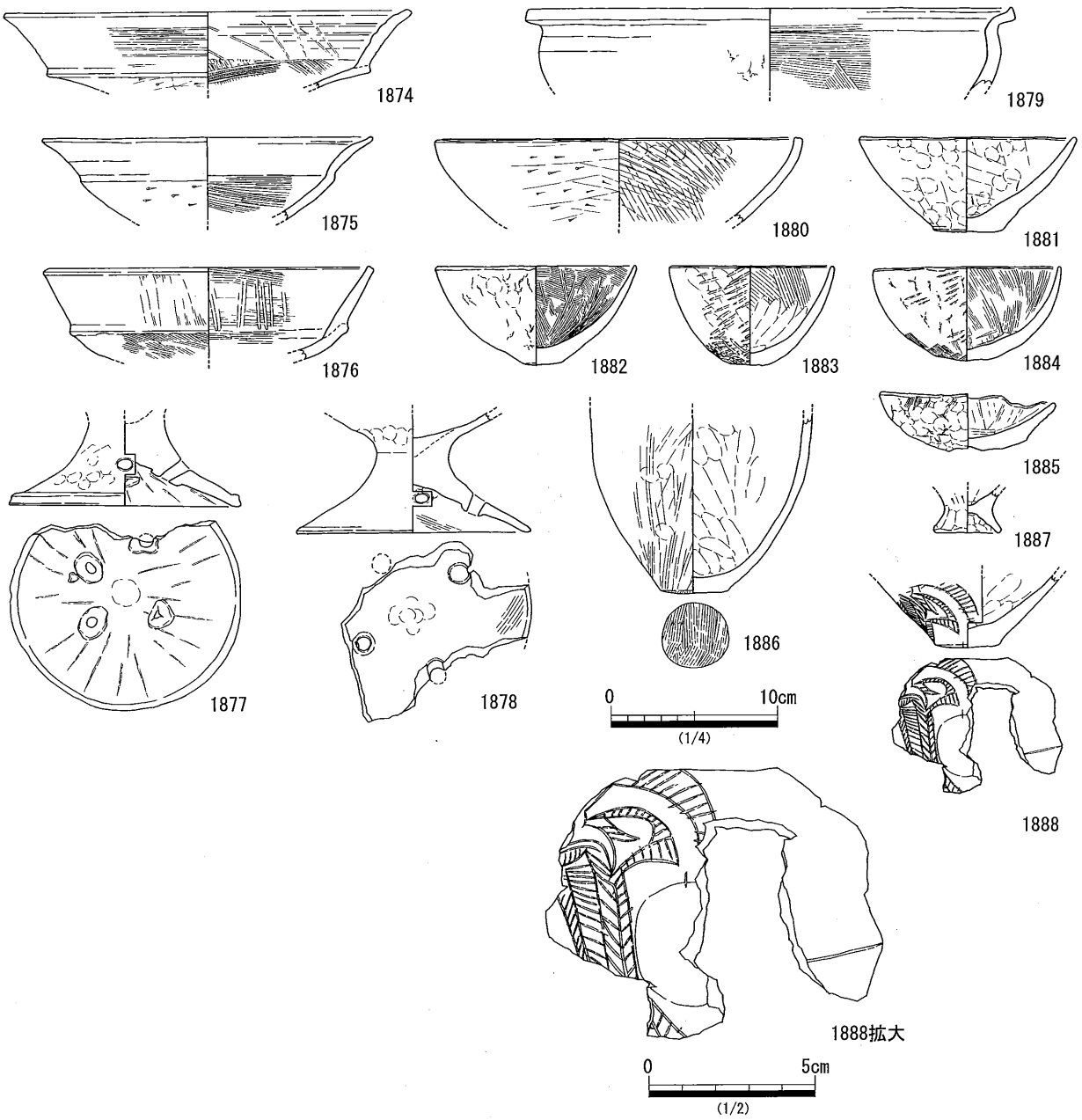
〈SR06 南側　黒色砂質土･黄灰色砂出土の弥生土器〉（第 236・237 図）

1859 ～ 1864 は甕である。1859 は胎土中に雲母を含むＢ２類系甕である。1860・1861 は叩き成形の甕である。1862 は外面に丁寧な縦ハケ調整を施す甕である。胴部下半が突出し、安定した平底を呈す。1863・1864 は口縁部が間延びする甕で、口縁下端部の径が細く窄まることから、1866 と同様の壺である可能性がある。なお、1861 は胎土中にサヌカイト小剥片を含む。素材の粘土、混和剤の砂粒、土器製作の作業場のいずれかに剥片が混入することがあり得たことを示す。

1865・1866 は甕との区分が困難な壺である。1866 の底面は叩き成形後未調整である。1867 ～ 1869



第 236 図 流路跡 SR06 出土遺物 (7)　南側黒色砂質土・黄灰色砂質土 1



第 237 図 流路跡 SR06 出土遺物 (8)　南側黒色砂質土・黄灰色砂質土 2

は口縁部が大きく開く広口壺である。1867・1868 は胎土中に雲母片を多く含むＢ２類系である。特に 1868 は赤みを帯びた茶褐色を呈し、角閃石も含む胎土で、口縁端部に沈線文を配し、頸部外面に横方向の間隔をあけたヘラミガキを施すなど、当遺跡に近い古墳時代初頭の丸井古墳出土の広口壺に類似する。1869 は口縁部中ほどで強く屈曲して直線的に開く口縁形態。1870 ～ 1873 は胴部に比べて口縁部の開きが少ない広口壺である。1873 は胴部との器形境が不明瞭で口縁部へ緩やかに反転して外反する。

1874 ～ 1876 は口縁部が屈曲して外反する高杯である。1874 は高松平野産のＢ類系である。1877・1878 は中実系高杯の脚部片である。1879 は口縁部が外反する鉢、1880 ～ 1884 は直口鉢である。1885 は皿状で手捏ねの鉢、1887 は製塩土器脚部片である。

1888 は底部が平底で、体部下半が直線的に斜め上方に開く土器である。上半部の形状が不明だが、1881 のような鉢が想定できる。体部外面に図示した線刻絵画が施される。横方向に対向綾杉文を配し、

向かって右端に弧帯文を施す。弧帯文部はバチ形文系文様である。器種は不明であるが、安定した底部形状からみて、弥生時代後期後半を下限とするものといえる。弧帯文は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて瀬戸内東部を中心として発達した施文パターンだが、綾杉文との組み合わせは類例が少ない。

〈SR06　古墳時代の土器〉（第238・239図）

1889～1958はSR06出土の古墳時代土器である。布留系土器・韓式系土器といった5世紀代を中心とした土器に、少量の6・7世紀代の須恵器を含む。SR05同様に、布留系ではない在地伝統の土師器類（特に甕）が伴う可能性もあるが、これまでに報告した弥生土器との峻別が困難で、十分に吟味できていない。また、出土層位は黒色砂質土上層・下層・黄灰色砂層として取り上げており、須恵器は上層に、韓式系土器は上層・下層に、布留系土師器は下層・黄灰色砂層に、それぞれ多い。

1889～1899は須恵器である。1889～1892は杯身で、いずれも口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収める。底部は下から1/2ほどの範囲に回転ヘラ削りを施す。1893は小型の杯蓋である。口縁天井部境の段はシャープさにかける。これらは6世紀前半に位置づけられる。1894・1895は薄手の瑞である。特に口縁部付近の器壁が薄い。1897は無蓋高杯口縁部片である。口縁部下端付近に沈線2条を施す。1896は器種不明の須恵器片で、瑞口縁部か。1898・1899は内面を当て具痕をナデ消す須恵器甕胴部片である。1898は縦方向の平行叩き、1899は疑格子叩きが残る。1893・1895が黒色砂質土下層出土、1890・1894が黄灰色砂層出土で、その他は黒色砂質土上層出土である。

1900～1931は軟質の韓式系土器である。1900は縦方向の平行叩きが僅かに残る胴部上端から、ナデによる浅い段を介して緩やかなカーブを描いて外反する口縁部につながる形態の壺である。口縁端部は細い突帯を伴い、内面に強いナデによる窪みを巡らせる。須恵器壺の摸倣形態と推定される。胎土は黄白色系である。1901は直口鉢である。口縁部に強いナデによる段が3段分施され、端部を面取りする。胎土や下半部の器面調整は土師器に類似するが、弥生土器や土師器にみられないようなシャープな段を持つことから、須恵器把手付椀摸倣の可能性を考えた。1902は肩が強く張る胴部に内傾する短い口縁部が取り付く壺である。外面が黒色、内面が暗茶褐色を呈し比較的堅く焼き締まる。外面はナデ調整で仕上げる。これも須恵器の壺もしくは有蓋脚付壺の摸倣と考えた。1903は器形全体の様相が復元できる平底鉢である。平坦で大きな平底から屈曲して斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部を強く折り曲げて端部を上下に拡張する。底部内外面は整形時の指押さえおよびヘラ削りが顕著にみられ、胴部下半は2段のヘラ削りが施される。胴部上半は縦方向の平行叩きが残る。胴部内面は叩きの当て具痕はみられず、指による押捺痕がみられることから、当て具を使用しない整形が想定される。口縁部は端部を上下に拡張し内外面を強くナデで仕上げる。特に内面側には強いナデによる窪みが巡る。胎土は灰黄色系だが、破片ごとに黄褐色、橙褐色を呈するなど器表面の色調が異なる。これは埋没環境の違いが影響したものと考えるが、土器焼成時の破損である可能性も全く否定できる訳ではない。平底鉢は土師器や弥生土器の組成には含まれず、各部位の成形・調整技法も異なっており、韓半島の主に百済南部地域（全羅南道）に類例が多い。したがって、搬入品か渡来系の土器製作者による製品とみてよいであろう。1904は1903と比べ丈高で胴部が中膨みとなる平底鉢である。底部形状や口縁部形状は1903と同じである。胴部外面の平行叩きはおおむね4段が確認でき、底部縁辺のヘラ削りは2段である。口縁部の屈曲が1903よりやや甘く、内面に稜線は認められないが、口縁端部内面の強いナデによる窪みは同様に巡る。口縁端面には浅い沈線が1条巡る。1905も平底鉢の口縁部片と考えられる。口縁部の屈曲がさらに甘く、内面の窪みも認められない。口縁端面にはやや深い沈線が1条巡る。1906は薄手の平底

鉢底部片である。底面および底部縁辺にヘラ削りがみられる。底縁から胴部への屈曲はやや甘い。1907は甑の肩部片である。口縁部は緩やかに外反する形態で、口縁から約4cm下がった位置に把手を貼付した痕跡が残る。外面は縦方向の平行叩きが残り、口縁から約3cm下がった位置に沈線を1条施す。内面は指押さえが顕著で当て具痕はみられない。1908・1909は甑把手片である。いずれも上面に縦方向の切り込みが認められる。切り込みの深さは1909が深い。1908は直線的に横に延び末端を面取りする。1909は上向きにカーブして末端を牛角状に仕上げる。胎土は黄灰色系で焼成は甘い。1910は甕である。胴部下半の形状は不明だが、類例から考えて長胴甕と推定する。口縁部は胴部上端から口縁部にかけては、強いナデによる段を介して、緩やかにカーブしながら反転して短く外反する。内面に明瞭な稜線は形成されない。胴部外面は目の細かい縄蓆文叩きが縦～斜位に施され、内面には指押さえ痕が顕著である。口縁部内外面はナデ仕上げで、端面には浅い沈線が1条巡る。胎土は明黄灰色で焼成は甘い。1911は1910と同様の甕胴部片である。接合しないので別に掲載したが、同一個体の可能性も高い。外面に細かい目の縄蓆文叩きが残る。1912～1915は肩が張る胴部から頸部が屈曲して直立する形態の壺である。いずれも胴部から頸部にかけての破片である。同一個体の可能性もあるが、少なくとも1914は他の3点と比べて頸部への屈曲部の形状が異なり、別個体と考えられる。胴部外面に縦方向の平行叩きが施され、その上から沈線を施す。1914は数条の浅い沈線が重複して施されるが、沈線最上段のみ現象と考えられる。2cmほどの間隔を空けながら胴部全面に沈線が施されるものと推定される。頸部から上の形状は不明である。胎土はいずれも黄灰色系で焼成は甘い。1916は縦方向の平行叩きと沈線が施される土器片である。図の下端に斜位の叩き目がみられることから、底部に近い部位と推定した。器種は壺もしくは甑が考えられる。1917・1918も胴部下半の土器片である。外面に方向が揃わない平行叩きがみられる。1919～1931は部位・器種が不明であるが縦方向の平行叩きが認められる胴部片である。ただ、1927・1929・1931は不整方向の叩きがみられるが、叩き目の形状と胎土からみて、韓式系土器と判断したものである。いずれも内面には顕著な指押さえが見られ、当て具痕はみられない。

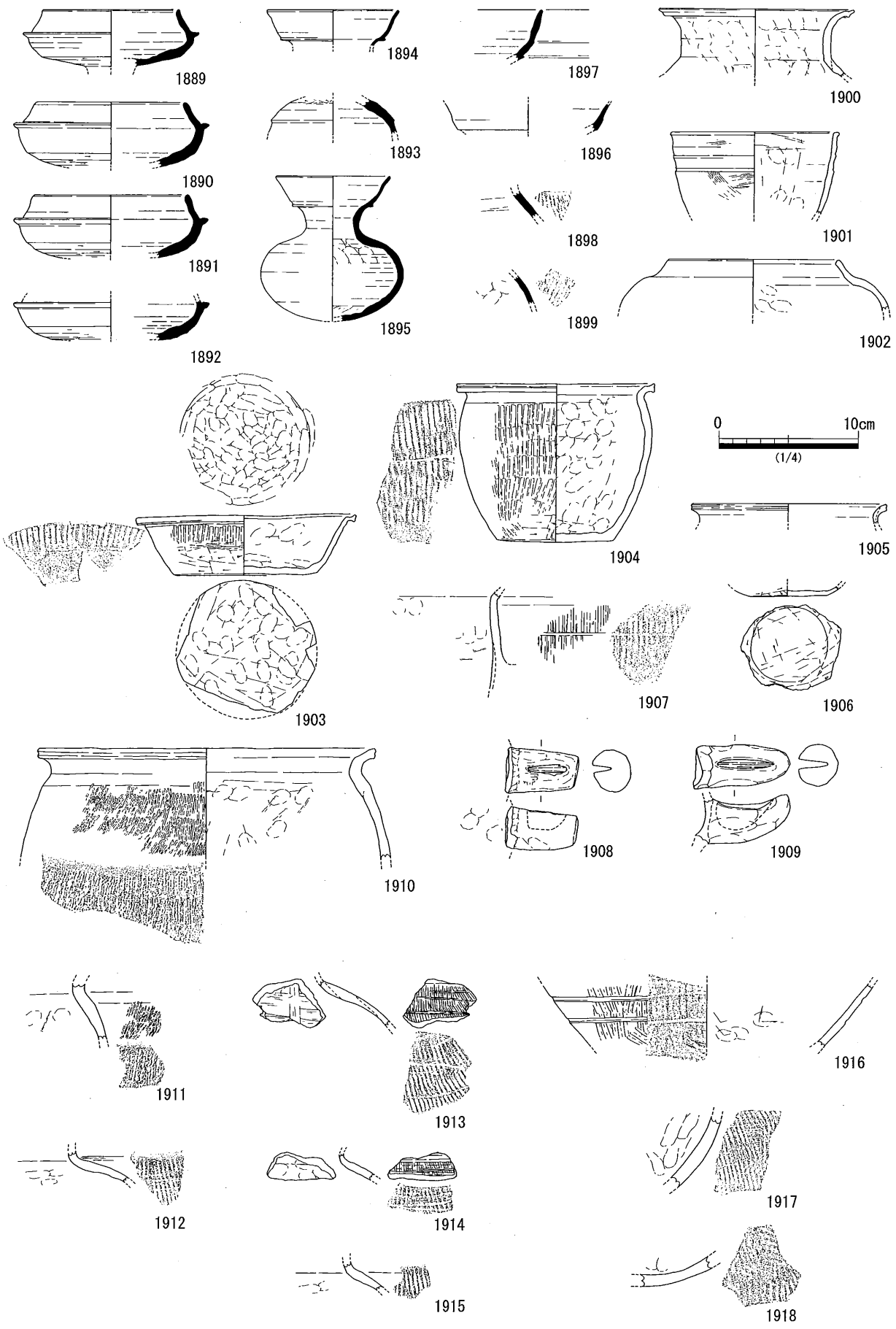
以上の軟質韓式系土器の出土層位は、1903が黒色砂質土上下層に黄灰色砂層の破片が接合する。1904は黒色砂質土上層と下層（取り上げ時は中層としているが、整理段階で下層と判断）が接合、1900・1901・1912・1913・1916・1924が黒色砂質土下層、1906・1910・1911・1921・1922・1927が黄灰色砂層で、それ以外は上層出土である。

1932～1953は布留系土師器である。1932～1941は甕で、口縁部を拡張するものはいずれも内傾面をもつ。1942～1949は高杯である。1942～1947は杯部と口縁部の境に段を有し、口縁端部が短く屈曲して外反するもの（1942・1944・1945・1947）と直口のものがある。1948は椀状の杯部を呈す。1949は柱状の脚柱部である。1951は小型丸底壺、1952は口縁部が帯状に肥厚する壺である。胎土中に結晶片岩を含むことから、吉野川流域からの搬入品と考えられる。1953は複合口縁壺の口縁部片でヘラ描きによる波状文と円形文が施される。以上の布留系土師器は1934・1953が黒色砂質土上層、1937・1938・1944・1947・1950が黄灰色砂層、それ以外は黒色砂質土下層である。

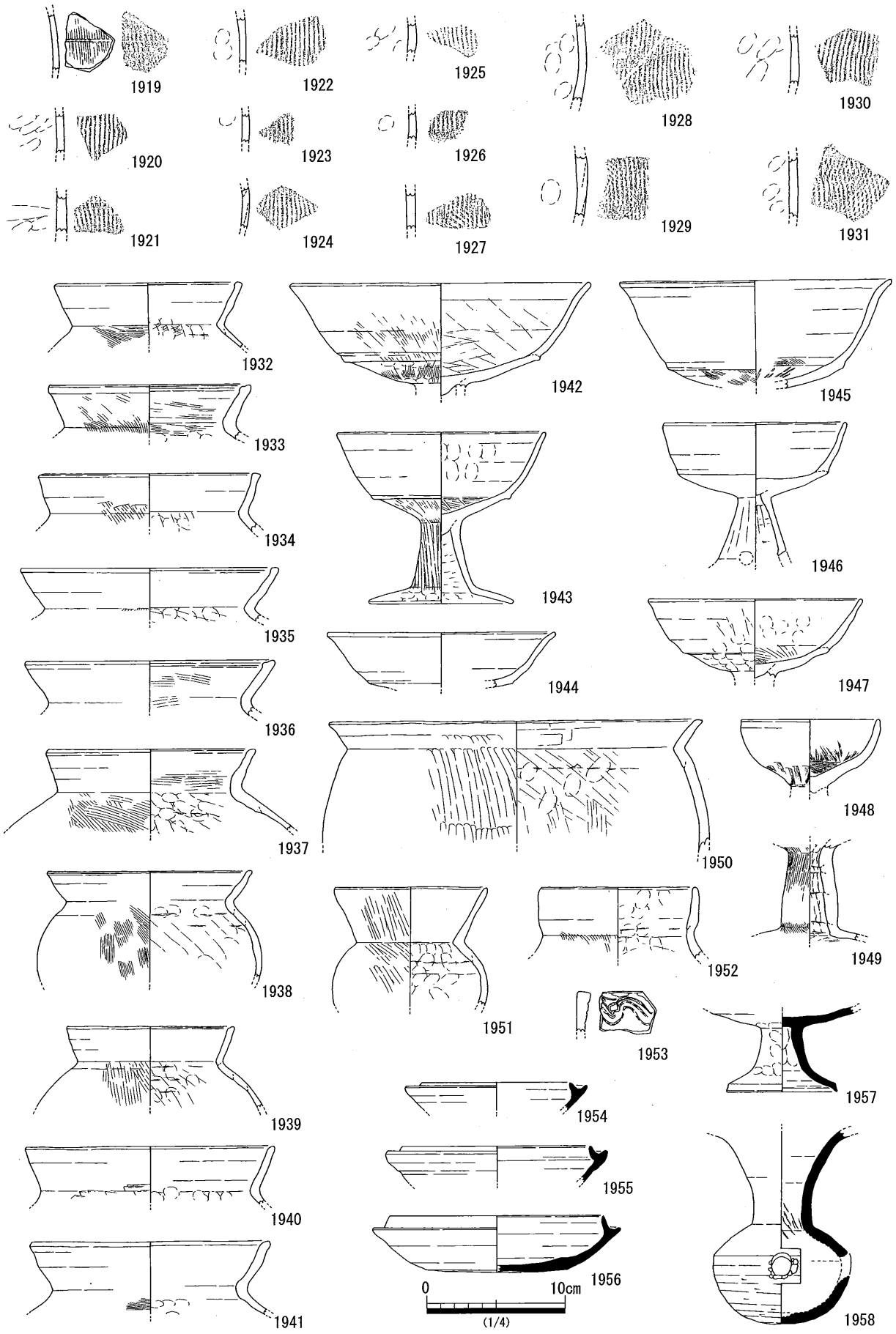
1954～1958は7世紀代の須恵器である。埋没後の窪みに流入したものと考えられる。

〈SR06出土の石器〉（第240・241図）

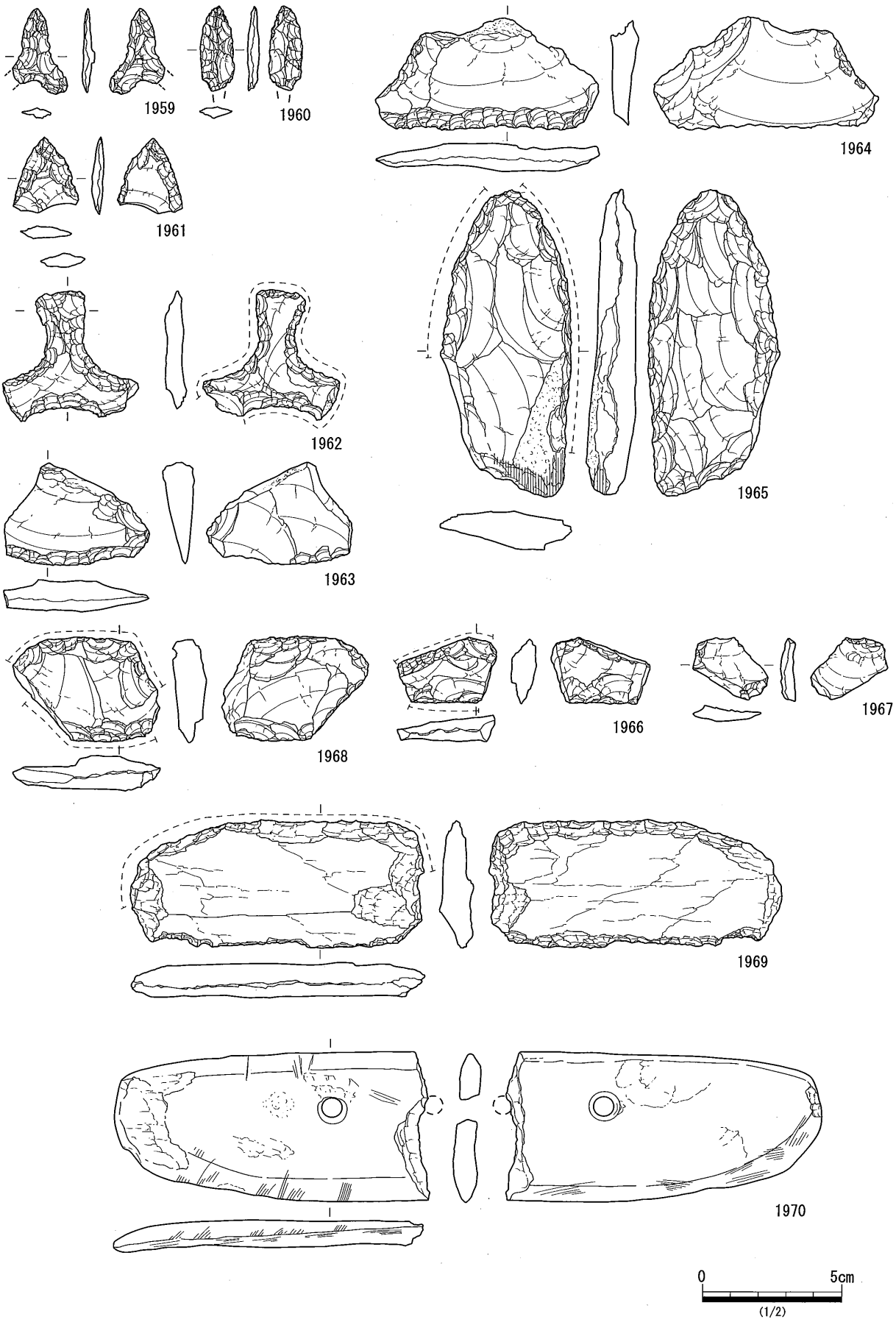
SR06出土の石器を一括した。1959・1960はサヌカイト製石鏃である。1959は凹基式石鏃でかえり部が突出し末端が丸いことから、縄文時代後期ごろの石鏃と考える。1960凸基有茎式石鏃である。先端部の形状が左右非対称で、側縁の細部加工も不十分であることから、未製品と考えられる。1961は先



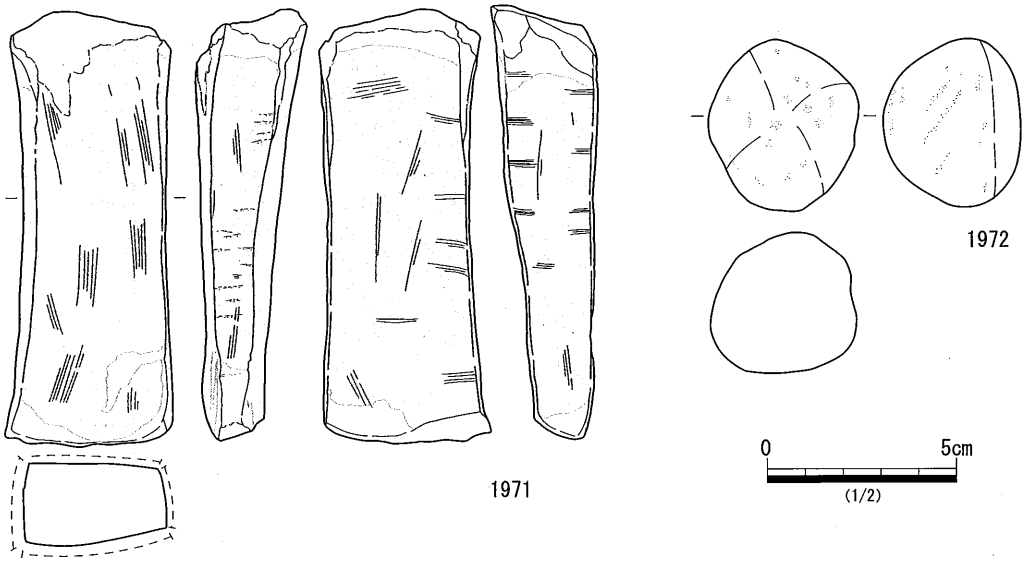
第 238 図 流路跡 SR06 出土遺物 (9)　古墳時代 1



第 239 図 流路跡 SR06 出土遺物 (10) 古墳時代 2



第 240 図 流路跡 SR06 出土遺物 (11) 石器 1

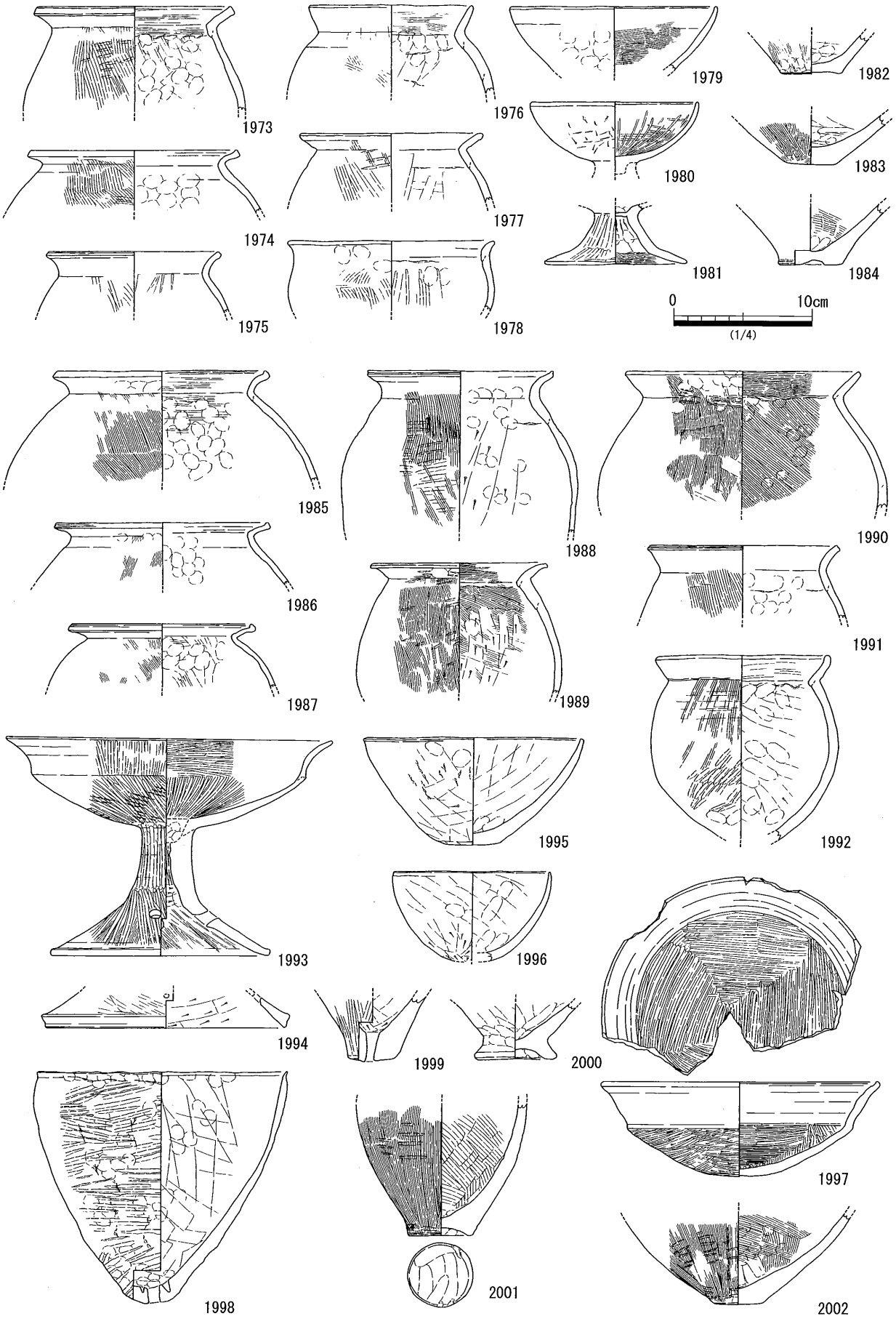


第 241 図 流路跡 SR06 出土遺物 (12) 石器 2

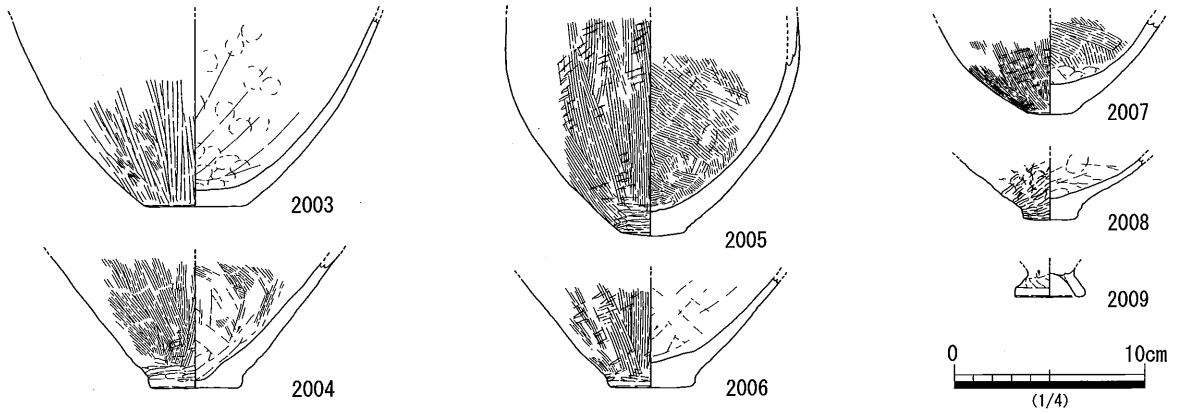
端加工を施したサヌカイト製石器でる。器体が薄いことから、石鏃の未製品と考える。1962 は三方につまみ部を作出した石器である。側縁全面に敲打調整を施す。石材はサヌカイトに類似するが、金山産のサヌカイトとは異なり細かなフィッシャーは目立たない。他地域のサヌカイトもしくは安山岩の可能性もある。風化度や形状から見て、縄文時代の石器であろう。1963・1964 はサヌカイト製削器である。1964 は片面のみ角度が急な加工が施される。いずれも背部に自然面を留める。1965 はサヌカイト製打製石斧である。刃部は再加工等により左右が非対称となる。刃部に線状痕を伴う摩滅がみられる。1966・1968 はサヌカイト製の楔状石核である。1967 は調整打面を打撃して剥離されたサヌカイト製剥片である。縦断面は内彎し、打面の調整痕が横方向に均質に展開することから、石鏃等の細部調整に伴う剥片の可能性が高い。1969 は結晶片岩製の打製石庖丁である。背部は敲打調整、刃部は再加工が行われる。刃縁に摩滅面がみられることから、再加工後に使用されたものである。側縁の一方のみ抉りを認める。1970 は結晶片岩もしくはエクロジャイト製の磨製石庖丁で、濃紺色を呈する。背部は直線的で、刃部も背部とほぼ平行するが、左右縁辺では刃部が丸みを帯びて収束する。素材剥片はややねじれ、研磨においてもその形状を修正できていない。背部断面は丸みを帯び、平坦面はほとんど認められない。穿孔は 2 孔で、表裏両面から施される。図左面に穿孔のための敲打痕が認められる。これは折損後の再加工と考えられ、再加工途上に廃棄されたものと考えることができよう。刃部の光沢はあまり顕著でない。1971 は流紋岩製の砥石である。中央部がやや窪み気味となるが、おおむね長方形状を呈す。四面とも砥面がみられる。1972 は安山岩製の円礫である。自然礫の可能性もあるが、大きさが投弾に類似することから、報告することとした。ただし、同様な礫が多数みられる訳ではなく、これ 1 点のみである。

流路跡 SR07（第 242・243 図）

C 地区西側微高地の西端、市道を挟んで西側のトレンチ調査で検出した流路跡である。南西から北東方向に向かって流下する。トレンチ調査のために平面形状の把握が十分できていないが、川幅はおおむね 5 m、深さが 1.1 m と SR05・06 に共通する。川底のレベルを検討した結果、これらは同一の流路跡と考えている。堆積状況も他の 2 流路跡と共通し、上層に黒色砂質土、下位に灰黄色砂層、最下層に灰色砂礫層がみられるが、古墳時代の遺物は他の 2 流路跡と比べて少ない。



第 242 図 流路跡 SR07 出土遺物 (1)



第 243 図 流路跡 SR07 出土遺物 (2)

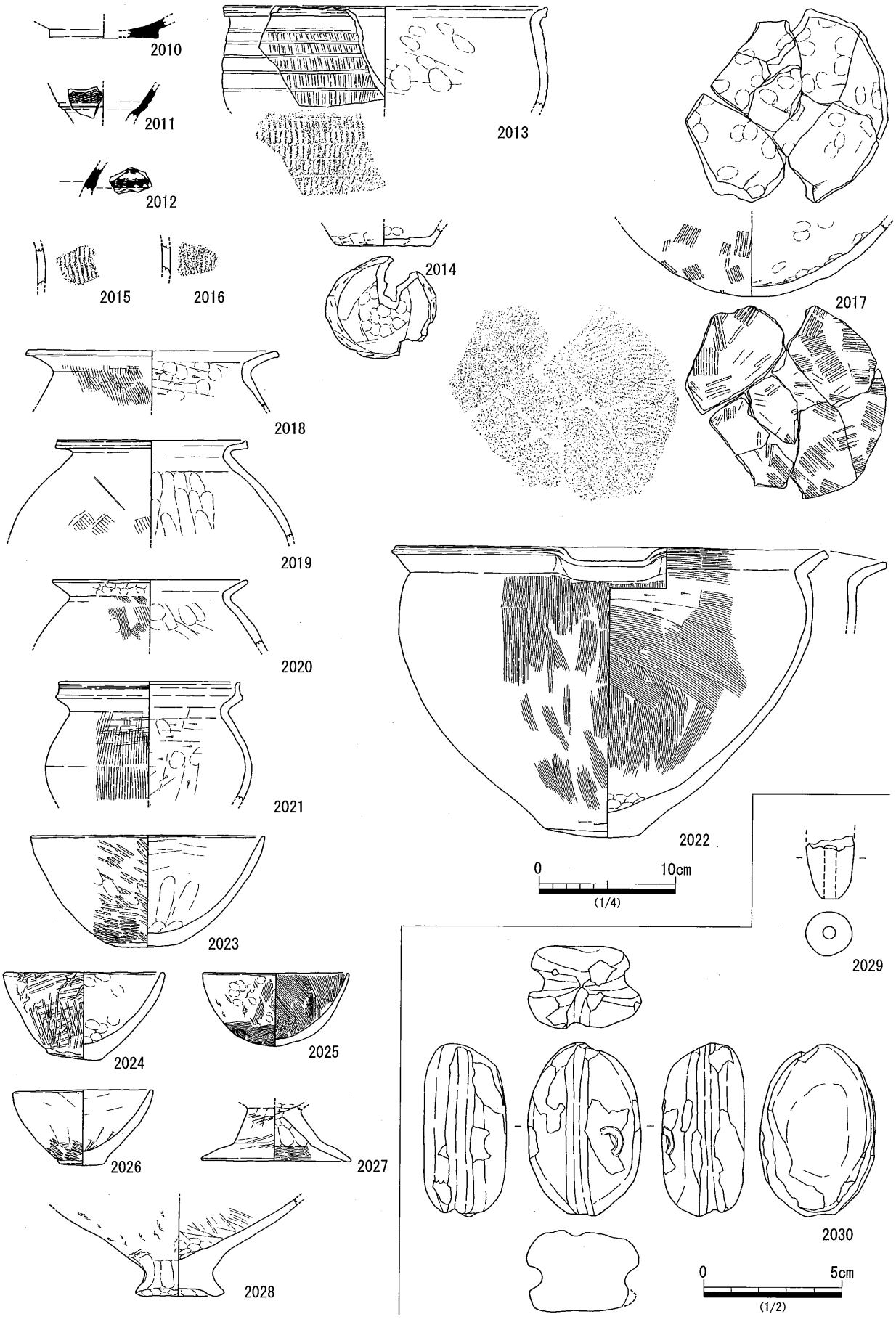
出土遺物は上層と下層で区分して提示した。1973 ～ 1984 は上層出土の土器である。1973 ～ 1977 は甕である。1974 はＢ２類系甕で胎土中に雲母を多く含む。1976 は土師器の可能性があろう。1978 は口縁部外反の鉢である。内外面にヘラミガキがみられる。1979 は直口鉢、1980 は直口高杯の杯部、1981 は高杯脚部片である。1980 は胎土中に結晶片岩を含む搬入品である。

1985 ～ 2009 は下層出土の土器である。1985 ～ 1987 はＢ２類系甕で、うち 1987 は胎土中に結晶片岩を含む搬入品である。形態から見て徳島県吉野川流域からの搬入品であろう。1988 ～ 1992 は叩き成形、ハケ調整の甕である。1992 は口縁部が内彎する形態である。1993・1994 は高杯である。うち 1994 はＢ類系高杯。1993 は口縁部屈曲タイプの高杯で、全体器形が判明する。杯部から口縁部にかけては器壁が薄い。1995・1996 は直口鉢である。1995 は平底、1996 はヘラ削りによる丸底である。1997 はＢ類系高杯の杯部形態を摸倣した鉢である。底部は僅かな面をもつ。胎土は黄白色系である。1998・1999 は甑である。1998 は底部がやや丸みを帯び、上面からの蒸気孔が１本貫通し、２本が未貫通である。2009 はＢ類系土器の胎土をもつ製塩土器の脚部小片である。その他、底部片は安定した平底のものが多い。

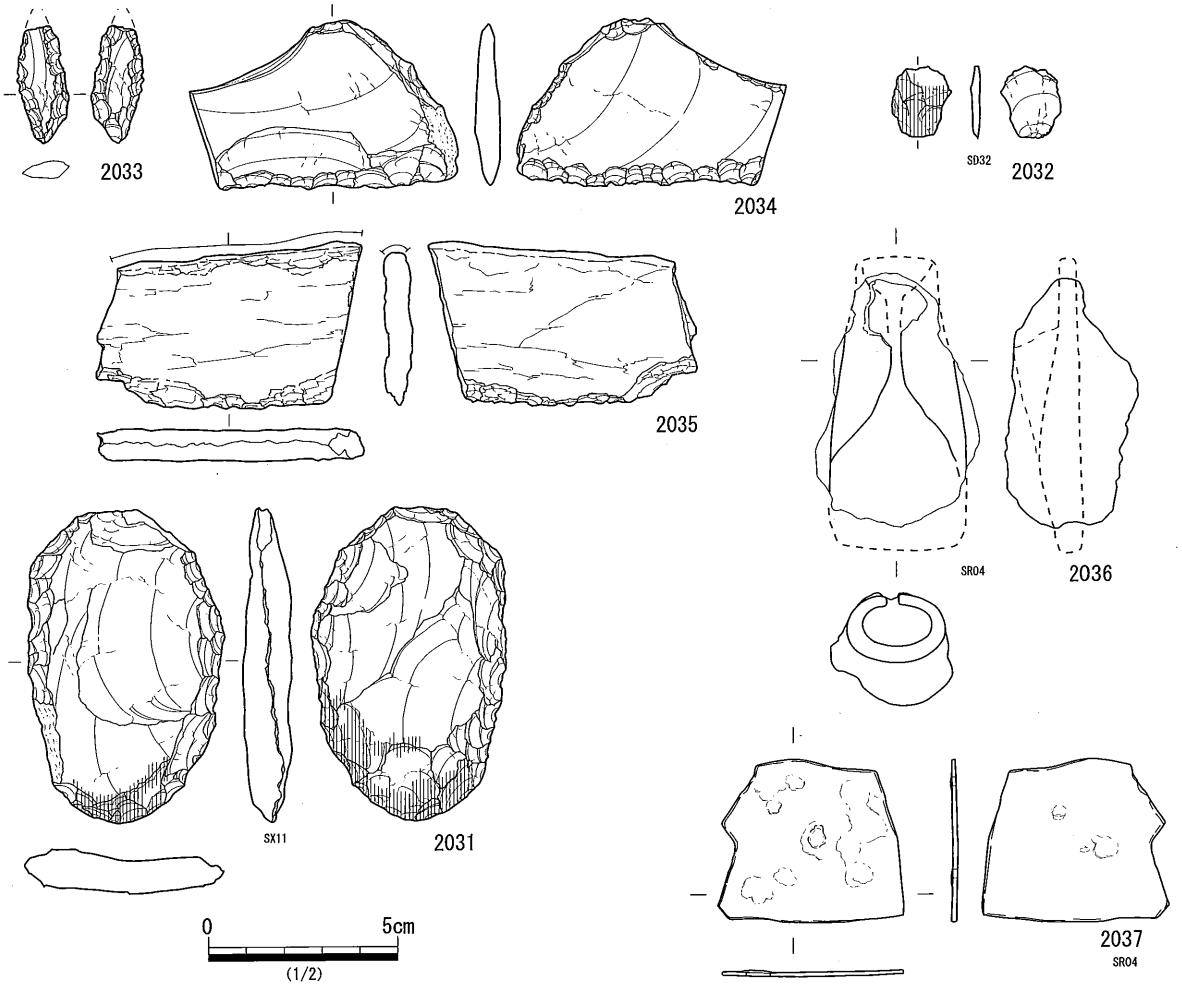
包含層出土の遺物（第 244 図）

Ｃ地区出土品で、遺構に伴わないか、あるいは出土位置が明確でない遺物を一括して掲載した。2010 は緑釉陶器の椀である。2011 は須恵器瑯の口縁部片で、櫛描波状文が施される。2012 も瑯の口縁部片と考える。同様に櫛描波状文が施される。2013 ～ 2017 は軟質の韓式系土器である。2013 は胴部が膨らむ形態の鉢である。平底が付属するものと考える。胴部外面は縦方向の平行叩きを施し、約 1cm 間隔で平行沈線文を巡らせる。口縁部は短く屈曲し端部を主に上方に摘み上げて拡張する。端部内面には窪みが巡る。2014 は平底鉢底部である。底面は指押さえを行い、周縁にヘラ削りを施す。胴部最下端に横方向のヘラ削りを施す。2015・2016 は平行叩きを有する胴部片、2017 は不整方向の平行叩きがみられる壷底部片である。

2018・2020 はハケ調整の甕、2019 はＢ２類系の甕、2021 は吉備系甕である。2022 は大型鉢の完形品で、口縁部に台形状の注ぎ口が備わる。2023 ～ 2026 は直口鉢である。2025 は丸底で、他は平底である。2027 は高杯脚部片、2028 は台付鉢か。2029 は管状土錘である。2030 は瓦質の有溝土錘である。



第 244 図　C地区包含層出土遺物



第 245 図 追加報告遺物 (SD32・SX11・SR04)

2033 はサヌカイト製石鏃の未製品であろう。2034 はサヌカイト製削器、2035 は結晶片岩製の打製石庖丁である。背部は研磨がみられ断面形が丸みを帯びる。

追加報告遺物

本報告書編集作業終了後に、掲載を必要とした遺物を報告する。

〈低地帯 SX11 出土の石器〉

2031・2032 はC地区低地帯 SX11 で出土した縄文時代晩期の石器である。2031 はサヌカイト製打製石斧。刃部に線状痕を伴う摩滅がみられる。

2032 はサヌカイト製打製石斧の刃部調整剥片で、背面に顕著な摩滅痕が残る。

〈流路跡 SR04 出土の金属器〉

2036 はC地区 SR04 中層出土の袋状鉄斧である。錆化顕著で、図の形状はX線写真からの復元である。裾広がりの平面形を呈す。2037 は SR04 上層出土の青銅器片である。薄い銅板で、部分的に補鋳の痕跡がみられる。側縁全周が折損しており、全体形状は不明である。

第６章　自然科学的調査

第１節　プラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO ２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

ここでは、尾崎西遺跡における稲作の可能性について、プラント・オパール分析から検討を行う。

２．試料

分析試料は、Ｃ地区（旧Ｖ区⑱）南壁断面において上位より、黒褐色砂質土（弥生時代後期、試料１、２）、黒色粘土（弥生時代前～中期、試料３）、暗褐色粘土（縄文晩期、試料４）、暗褐色粘土（試料５、６）より採取された６点の堆積物である。試料はいずれも遺跡の調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

３．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに直径約 40 μｍのガラスビーズを約 0.02g 添加
（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
５）沈底法による 20 μｍ以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10 －５ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）

検出密度（単位：× 100 個 /g）

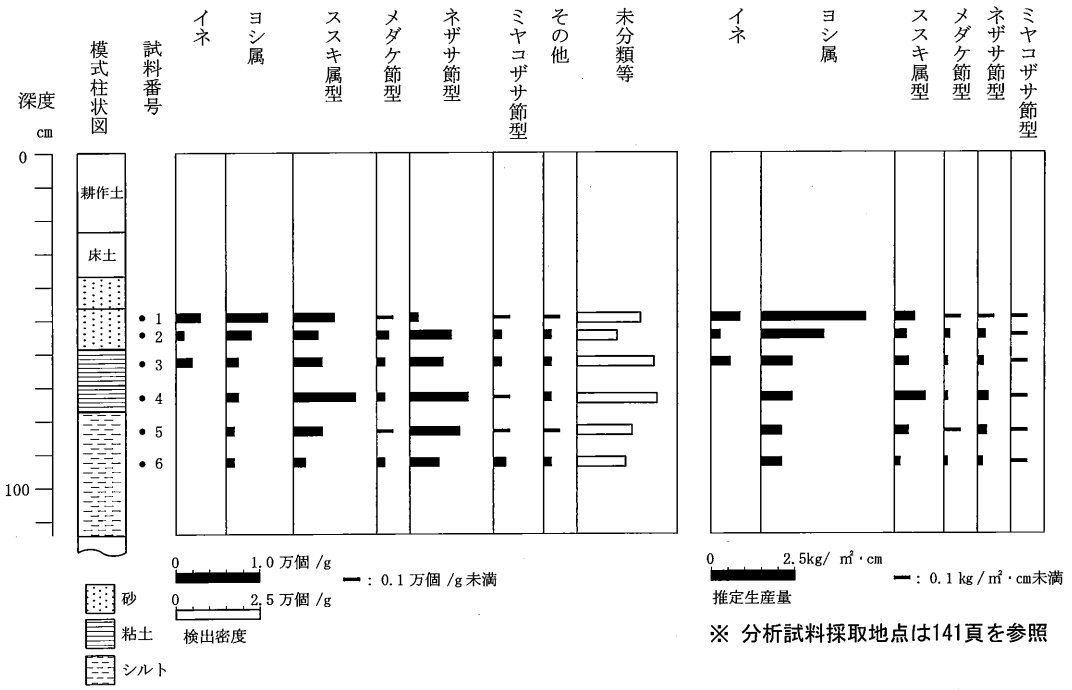
分類群（和名・学名）＼試料		C地区（旧Ⅴ区⑱）南壁 1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	Oryza sativa	30	10	20			
ヨシ属	Phragmites	50	30	15	15	10	10
ススキ属型	Miscanthus type	50	30	35	75	35	15
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	5	15	10	10	5	10
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	10	50	40	70	60	35
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	5	10	10	5	5	15
その他	Others	5	10	10	10	5	10
未分類等	Others	190	120	231	240	165	146
プラント・オパール総数	Toal	345	275	371	425	285	241

おもな分類群の推定生産量（単位：kg / ㎡·cm）

イネ	Oryza sativa	0.88	0.29	0.59			
ヨシ属	Phragmites	3.16	1.90	0.95	0.95	0.63	0.64
ススキ属型	Miscanthus type	0.62	0.37	0.44	0.93	0.43	0.19
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.06	0.17	0.12	0.12	0.06	0.12
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.05	0.24	0.19	0.34	0.29	0.17
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.03	0.03	0.02	0.01	0.05

※試料の仮比重は 1.0 と仮定

第 3 表　香川県、尾崎西遺跡におけるプラント・オパール分析結果



※ 分析試料採取地点は141頁を参照

第 246 図 尾崎西遺跡のプラント・オパール分析結果

は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

4．結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第3表、第246図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

イネは、試料1、試料2および試料3より検出されている。試料6では比較的高い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型およびミヤコザサ節型はすべての試料より検出されている。ヨシ属は試料1で高い密度であり、試料2では比較的高い密度である。ススキ属型は試料1と試料4で高い密度であり、試料2、試料3および試料5では比較的高い密度である。ネザサ節型は試料2～5で比較的高い密度である。メダケ節型とミヤコザサ節型は全体に低い密度である。

5．考察

イネのプラント・オパールが検出されたのは、弥生時代後期とされる試料1と試料2、その下位で弥生時代前～中期とされる試料3の3試料である。プラント・オパール密度は、それぞれ3,000個/g、1,000個/g、2,000個/gといずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる5,000個/gには達していない。ただし、試料3では直上の試料2に比べ高い値でありピークが認められ、上層からの混入の危険性は考えにくい。こうしたことから、試料1・2ならびに試料3の層準では調査地もしくは近傍において稲作が行われていた可能性が考えられる。仮に、調査地で稲作が営まれていたとしたならば、プラント・オパール密度が低いことの要因として次のようなことが考えられる。すなわち、1）稲作の行われた期間が短かった、2）稲藁の多くが耕作地から持ち出されていた、3）イネの生産性が低かった、4）土層の堆積速度が速かった、などである。なお、試料4、試料5・6の層準については、イネのプラント・オパールがまったく検出されておらず、同時に行った花粉分析においてもイネ属型が産出しないことから、稲作が行われていた可能性は認められない。

イネ以外の分類群では、ヨシ属が試料1、試料2で高い密度であり、試料3でも比較的高い密度である。また、ススキ属型もほぼ同様の傾向を示す。おもな分類群の推定生産量をみると、試料1・2の層準ではヨシ属が卓越しており、試料3の層準でも優勢である。このことから、試料1・2の層準および試料3の層準の時期の調査地ないし周辺は、ヨシ属が多く生育する湿地の環境であり、畔畦や部分的に乾いたところなどにススキ属が生育していたと推定される。なお、ヨシ属については休閑期間中に繁茂していたことや、施肥などの目的で水田内に持ち込まれた可能性も想定される。

6．まとめ

尾崎西遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、弥生時代前～中期の層準と弥生時代後期の層準において調査地もしくは近傍で水田稲作が営まれていた可能性が認められた。なお、縄文晩期ないしそれ以前の層準については、稲作が行われた可能性は認められなかった。

弥生時代前～中期と弥生時代後期の調査地あるいは周辺は、ヨシ属などが生育する湿地の環境であったと推定された。なお、ヨシ属は休閑期間中に繁茂していたり、施肥として水田に持ち込まれた可能性

も想定された。

文献
杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社、p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学、9、p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学、17、p.73-85.

第２節　花粉分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は、Ｃ地区（旧⑱）南壁より採取された堆積物６点、Ｃ地区（旧Ｖ区⑲）貯蔵穴跡 SK37 より採取された堆積物４点、同 SK38 より採取された堆積物２点の計 12 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行う。

１）0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
２）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
３）25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）
５）再び氷酢酸を加えて水洗処理
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比

して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

4．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉16、シダ植物胞子2形態の計51である。これらの学名と和名および粒数を表4に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを作成し第247～249図に示す。主要な分類群は写真に示す。なお、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、クサギ属、トネリコ属、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1）C地区（旧Ⅴ区⑱）南壁（試料1～試料6）

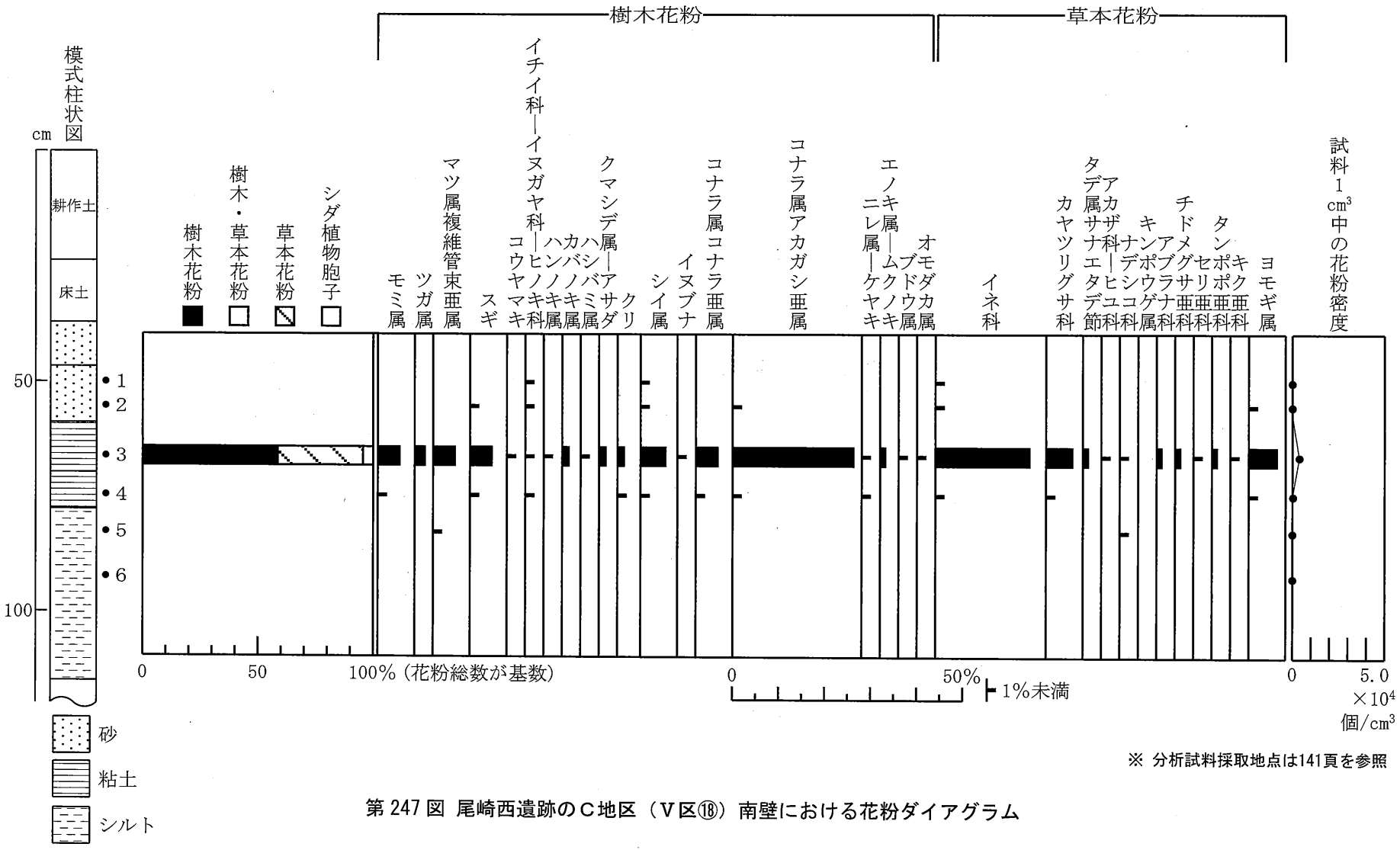
試料4～6では花粉はほとんど検出されない。試料3では樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、他より花粉密度がわずかに高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属を主に、モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属が出現する。草本花粉では、イネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われ、アブラナ科、チドメグサ亜科、アカザ科－ヒユ科、オモダカ属などが出現する。試料1、試料2は花粉密度が極めて低く、花粉がほとんど検出されない。

2）C地区（旧Ⅴ区⑲）SK37（試料A～試料D）

試料A（13層）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より極めて高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が卓越し、シイ属、エノキ属－ムクノキ、クリ、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。試料B（12層）では、下位に比べ樹木花粉の占める割合が低くなる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属が下位より半減する。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が増加する。試料Cでは、樹木花粉の占める割合が試料Bより高く、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属が増加する。試料D（8層）では、花粉密度が極めて低くなり、花粉はほとんど検出されなくなる。

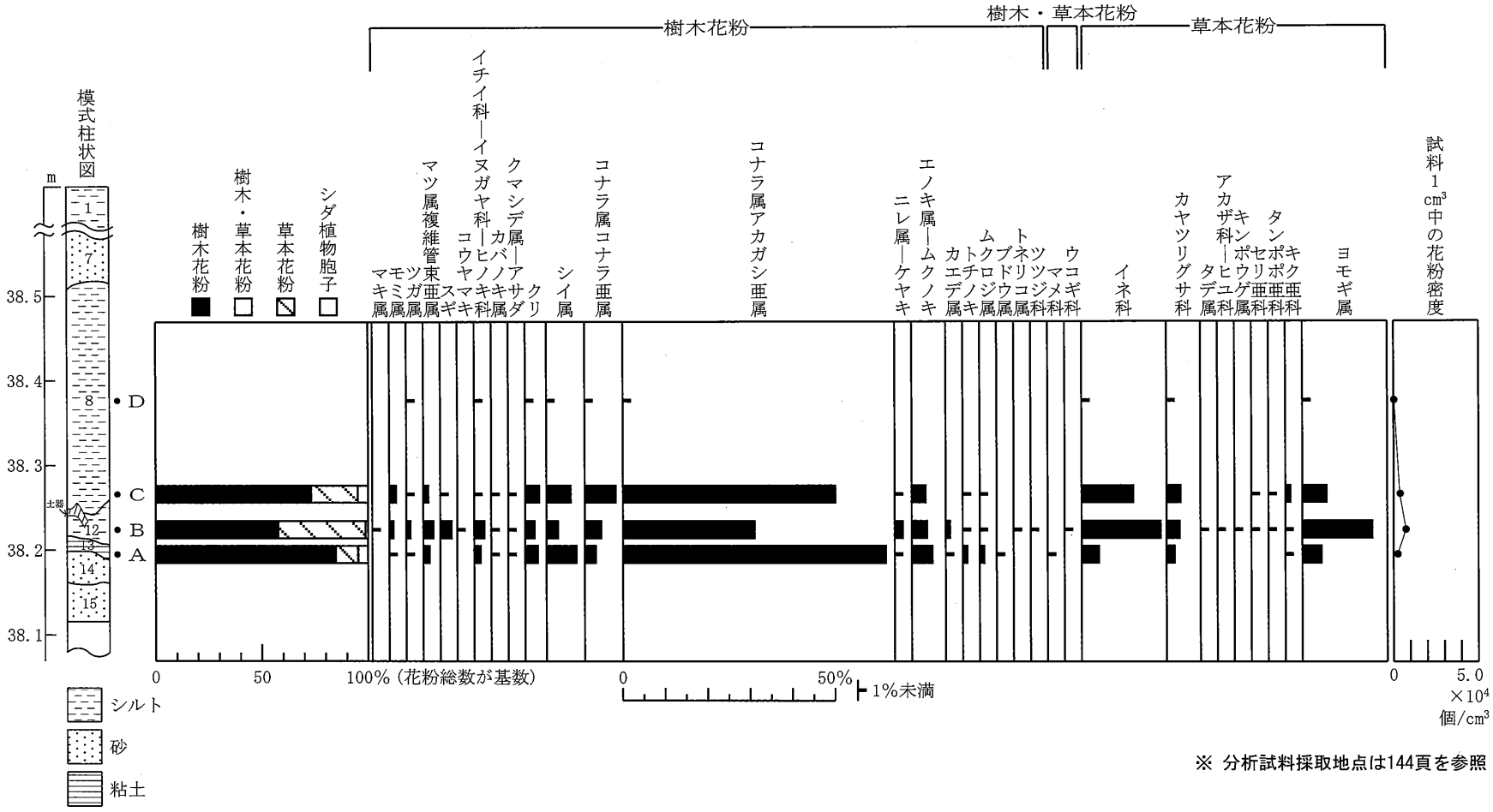
分類群		C地区（旧Ⅴ区⑱）						C地区（旧Ⅴ区⑲）					
		南壁						SK37				SK38	
学名	和名	1	2	3	4	5	6	D	C	B	A	C	B
Arboreal pollen	樹木花粉												
Podocarpus	マキ属									1			
Abies	モミ属			13	2				4	4	2	3	1
Tsuga	ツガ属			6				1	2	4	2	1	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属			13		1			3	10	4	3	5
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属												1
Cryptomeria japonica	スギ		1	13	2				1	11		4	12
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			1						1		3	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	1	2	2			1	1	10	4	3	24
Juglans	クルミ属												2
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ												1
Alnus	ハンノキ属			1								1	
Betula	カバノキ属			4					1	1	2		4
Corylus	ハシバミ属			1									1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ			4					2	2	1	5	8
Castanea crenata	クリ			4	1			1	8	9	8	15	10
Castanopsis	シイ属	1	1	15	3			1	14	11	19	29	31
Fagus	ブナ属											1	2
Fagus japonica	イヌブナ			2								1	2
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属			13	2			2	18	16	7	16	6
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		2	73	23			6	123	128	166	177	147
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ			2	1				2	8	2	3	3
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ			3					8	15	13	24	43
Ilex	モチノキ属											1	
Acer	カエデ属									4	1	2	1
Aesculus turbinata	トチノキ								1	2	3	2	4
Sapindus	ムクロジ属								1	1	3		5
Vitis	ブドウ属			1							1		1
Clerodendrum	クサギ属												1
Fraxinus	トネリコ属									1			
Ericaceae	ツツジ科									2			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科												2
Leguminosae	マメ科										1	1	2
Araliaceae	ウコギ科									1		3	
Nonarboreal pollen	草本花粉												
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属											10	
Sagittaria	オモダカ属			1									
Gramineae	イネ科	1	1	57	2			8	30	77	11	45	42
Cyperaceae	カヤツリグサ科			16	2			1	8	13	5	10	12
Polygonum	タデ属									1			1
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節			3								1	
Rumex	ギシギシ属												20
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科			1						2			
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1		1							
Ranunculus	キンポウゲ属									3			2
Cruciferae	アブラナ科			3									
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			3									
Apioideae	セリ亜科			2					1	3			
Lactucoideae	タンポポ亜科			3					1	1			
Asteroideae	キク亜科			1					3	3	1	3	3
Artemisia	ヨモギ属		1	17	2			6	14	68	12	23	17
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolate type spore	単条溝胞子	2	1	10	6				11	4	9	3	4
Trilate type spore	三条溝胞子			3				3	1	1	4	1	4
Arboreal pollen	樹木花粉	2	5	171	36	1	0	12	189	241	238	294	316
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	4	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	2	108	6	1	0	15	57	171	29	92	97
Total pollen	花粉総数	3	7	279	42	2	0	27	246	413	268	390	417
Pollen frequencies of 1cm3	試料1cm3中の花粉密度	2.1	4.9	3.8	3.2	1.4	0.0	2.6	3.9	7.3	2.5	1.8	4.6
		×10	×10	$\times 10^3$	$\times 10^2$	×10		$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	11	3	0	0	2	15	9	6	7	4
Fern spore	シダ植物胞子	2	1	13	6	0	0	3	12	5	13	4	8
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(+)	(+)	(+)	(−)	(++)	(++)

第4表　尾崎西遺跡における花粉分析結果



※ 分析試料採取地点は141頁を参照

第247図 尾崎西遺跡のC地区（V区⑱）南壁における花粉ダイアグラム



※ 分析試料採取地点は144頁を参照

第248図 尾崎西遺跡のC地区（V区⑲）SK37（SK5110）における花粉ダイアグラム

3）C地区（旧Ⅴ区⑲）SK38（試料B、試料C）

試料B、試料C（5層）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優占し、エノキ属－ムクノキ、シイ属などが出現する。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が出現する。試料Bでは、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ギシギシ属が比較的多く、試料Cでは、ガマ属－ミクリ属が出現する。

5．花粉分析から推定される植生と環境

1）C地区（旧Ⅴ区⑱）南壁（第247図）

花粉が比較的多く検出された試料3では、コナラ属アカガシ亜属を主に樹木花粉の占める割合が高い。このことから、調査地周辺にはカシ林（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林が比較的多く分布していたと推定される。コナラ属コナラ亜属や照葉樹林要素であるシイ属は比較的乾燥したところに分布していたとみられる。やや低率のモミ属、マツ属複維管束亜属、スギの針葉樹については花粉の飛来が考えられ、やや遠方での分布が推定される。周囲はイネ科を主にカヤツリグサ科、ヨモギ属が多く、アブラナ科、チドメグサ亜科、アカザ科－ヒユ科、オモダカ属が生育分布する。アブラナ科、チドメグサ亜科、アカザ科－ヒユ科は人里植物から畑地雑草の性格をもち、オモダカ属は水生植物で水田雑草の性格をもつ。こうしたことから、堆積地は森林に近接した比較的狭い湿地で、近傍には相対的に乾燥した人為地の分布が推定される。前後の試料1～試料2、試料4～試料6の層準は花粉が少なく、堆積速度が速かったか分解の著しい乾燥ないし乾湿の繰り返される環境が推定される。

2）C地区（旧Ⅴ区⑲）SK37（第248図）

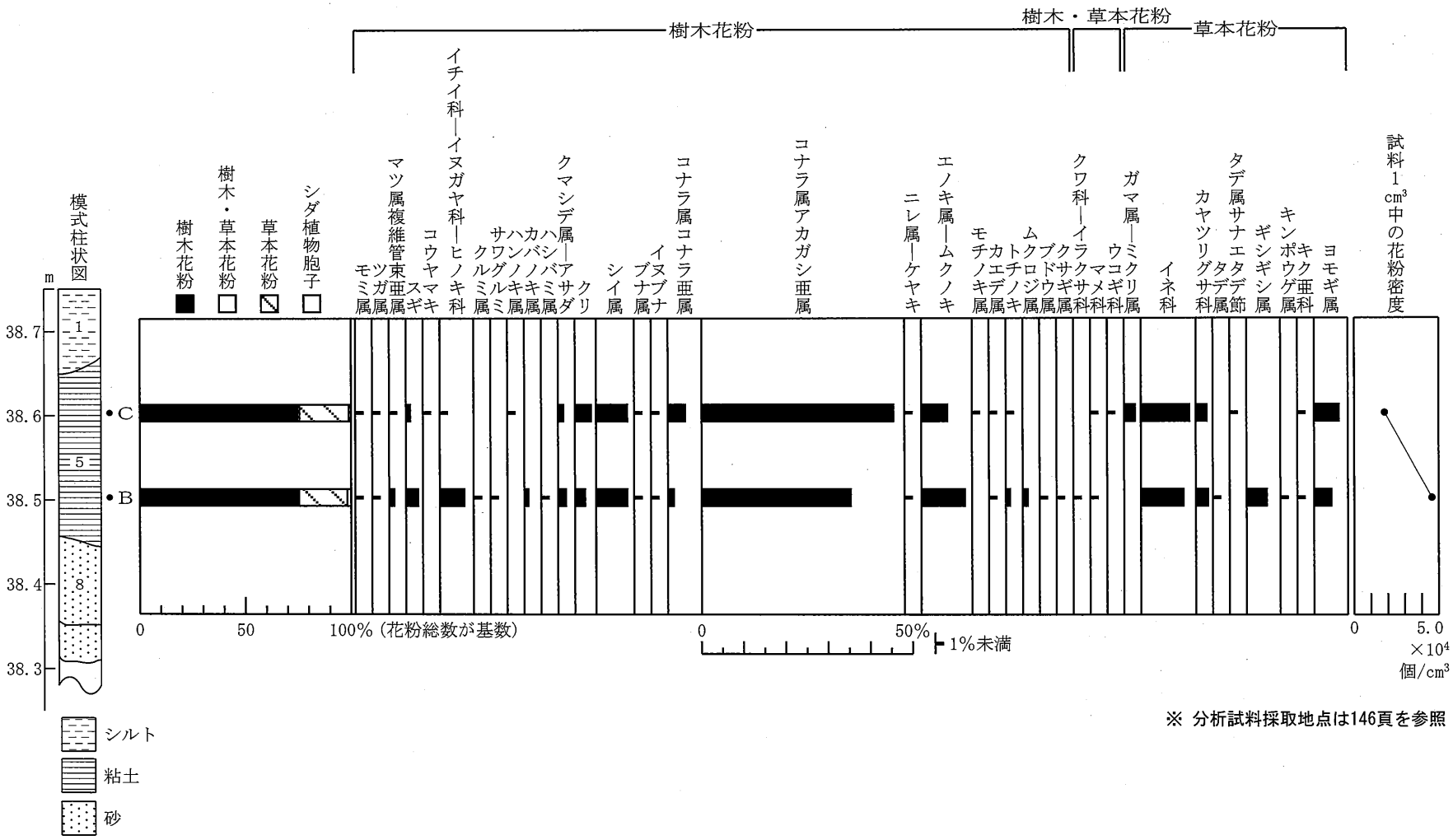
試料A（13層）、試料B（12層）、試料C（8層）は、Ⅴ区⑱南壁の試料3の層準と同様に、周辺にカシ林（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林が比較的多く分布していた。試料B（12層）は草本花粉がやや多いが、イネ科、ヨモギ属を主にカヤツリグサ科などの水生から乾燥の環境に生育する草本が分布していたとみられる。Ⅴ区⑱南壁試料3の層準と同様に、森林に近接する狭い湿地で、近傍に相対的な乾燥地の分布が推定される。

3）C地区（旧Ⅴ区⑲）SK38（第249図）

試料B、試料C（5層）の層準では、周辺にカシ林（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林が比較的多く分布していた。なお、より湿潤地を好むエノキ属－ムクノキがやや多く、周辺はより低湿な環境であったと推定される。草本ではイネ科を主にヨモギ属、カヤツリグサ科が周囲に生育するが、下位の試料Bでは湿地に生育するギシギシ属、上位の試料Cでは水生植物のガマ属－ミクリ属が生育しており、いずれも低湿な環境が示唆される。これらのことから、SK38の周囲は森林内あるいは森林に近接する低湿地であったと推定される。

6．まとめ

C地区南壁、SK37、SK38はいずれも類似した植生と環境が示唆された。すなわち、周辺にはカシ林（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林が分布し、人為環境にも生育する草本の分布する比較的狭い湿地ないし乾燥地が推定された。



※ 分析試料採取地点は146頁を参照

第249図 尾崎西遺跡のC地区（V区⑲）SK38（SK5111）における花粉ダイアグラム

参考文献
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集、60p.
中村純（1973）花粉分析．古今書院、p.82-110.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13,p.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学、第10号、p.21-30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.

第３節　種実同定

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

２．試料

試料は、Ｃ地区（旧Ｖ区⑱）SK37（縄文時代の貯蔵穴）より採取された水洗選別済みの試料６ケースと、堆積物１点である。試料を整理するため、便宜上ケースに①～③の番号をつけた。

３．方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。
１）試料300cm3（全量）に水を加え放置し、泥化を行う。
２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
３）残渣及び水洗選別済み試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定計数を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

４．結果

（１）分類群

樹木２、草本３の計５分類群が同定される。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

コナラ属　Quercus　堅果片　ブナ科　長さ×幅・15.50mm × 9.25mm、15.75mm × 11.50mm

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し破片である為、属レベルの同定までである。

分類群		部位	C地区（旧Ⅴ区⑱）SK37						
			①	②	③	12層		15層	堆積物
学名	和名						K0061		300cc
Arbor	樹木								
Quercus	コナラ属	堅果片	6	(++)	(+)				
Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana Hara	ニワトコ	核							1
Herb	草本								
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実					10		2
Aneilema keisak Hassk.	イボクサ	種子					2		
Mollugo pentaphylla L.	ザクロソウ	種子							3
Total	合計		6	(++)	(+)	0	12	0	6

第5表　尾崎西遺跡における種実同定結果

ニワトコ　Sambucus　sieboldiana　Blume　ex　graedn　種子　スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

〔草本〕

カヤツリグサ科　Cyperaseae　果実　長さ×幅・1.39mm × 0.67mm、2.25mm × 1.91mm

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平のタイプと、黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形のタイプがある。

イボクサ　Aneilema　Keisak　Hassk.　種子　ツユクサ科　長さ×幅・2.77mm × 1.68mm

黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

ザクロソウ　Mollugo　pentaphylla　L.　種子　ザクロソウ科　長さ×幅・0.49mm × 0.53mm

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

（2）種実群集の特徴

1）C地区（旧Ⅴ区⑱）SK37・水洗選別済み

コナラ属6、カヤツリグサ科10、イボクサ2が同定された。

2）C地区（旧Ⅴ区⑱）SK37・堆積物

ニワトコ1、カヤツリグサ科2、ザクロソウ3が検出された。

5．考察とまとめ

尾崎西遺跡C地区（旧Ⅴ区⑱）SK37における種実同定の結果、コナラ属、ニワトコ、カヤツリグサ科、イボクサ、ザクロソウが検出・同定された。コナラ属は破片であるため、詳細な同定はできなかったが、アカガシ亜属の可能性がある。ニワトコは二次林性の低木である。カヤツリグサ科、イボクサは水生植物ないし水田雑草であり、ザクロソウは人里植物ないし畑地雑草である。こうしたことから、尾崎西遺跡C地区（旧Ⅴ区⑱）SK37の種実類は、食用となるコナラ属を除けば、ニワトコ、カヤツリグサ科、イボクサ、ザクロソウの二次林性の樹木および雑草となる草本で、C地区（旧Ⅴ区⑱）SK37周囲に集落等の人為改変地の分布が示唆される。

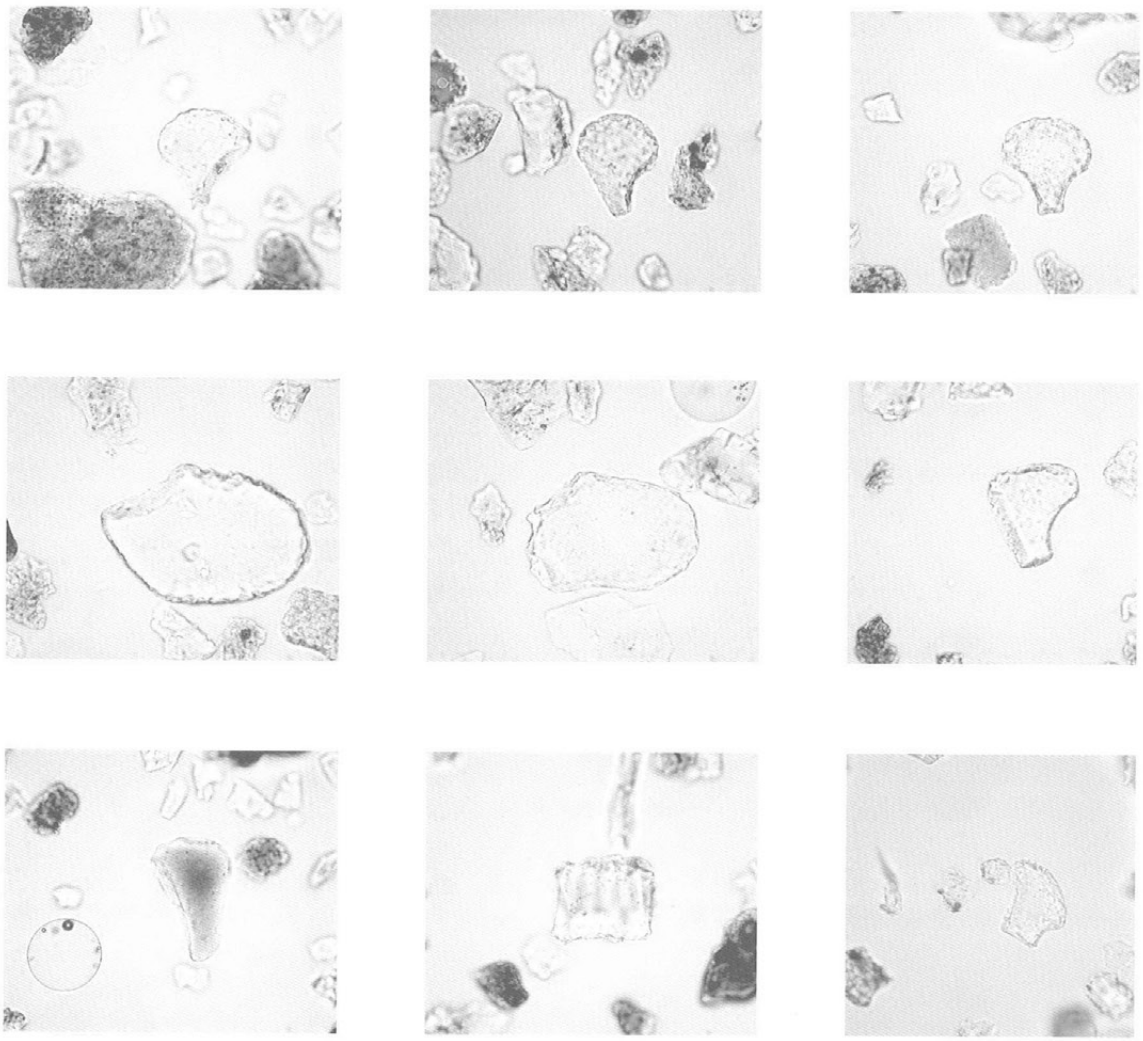
参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p.

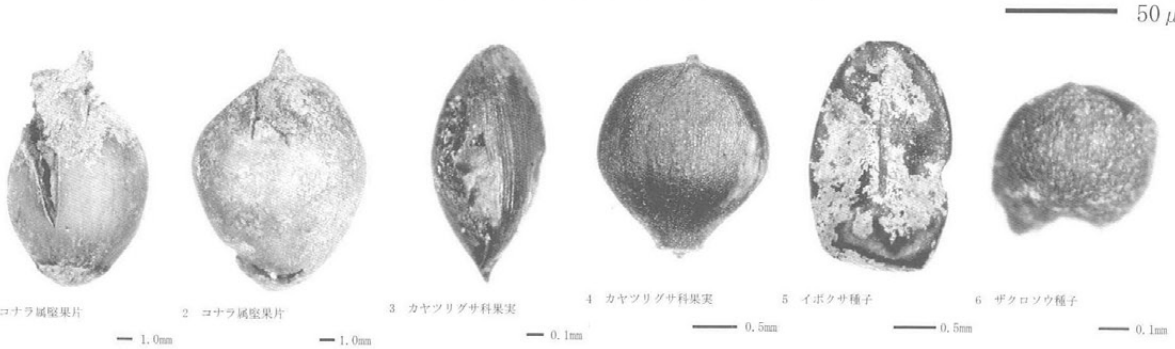
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業、雄山閣　出版、p. 131-139.

南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナル No. 355、ニューサイエンス社、p. 18-22.

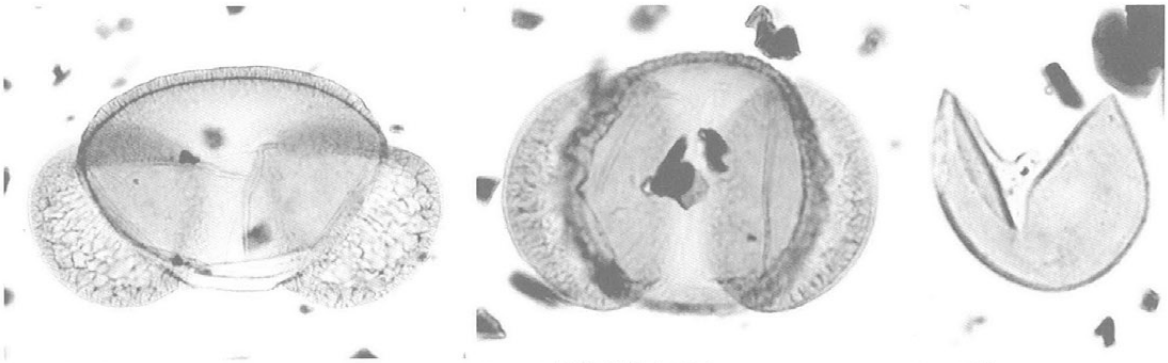
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣、187p.



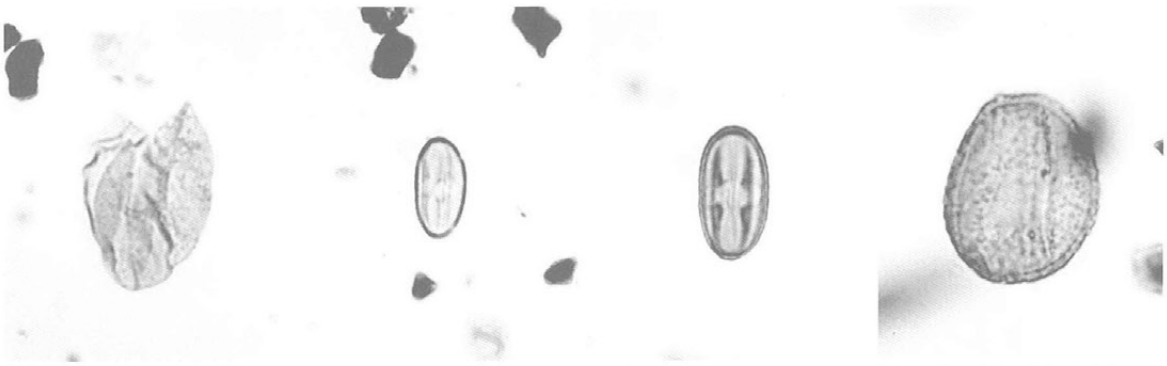
第 250 図　尾崎西遺跡のＰＯ



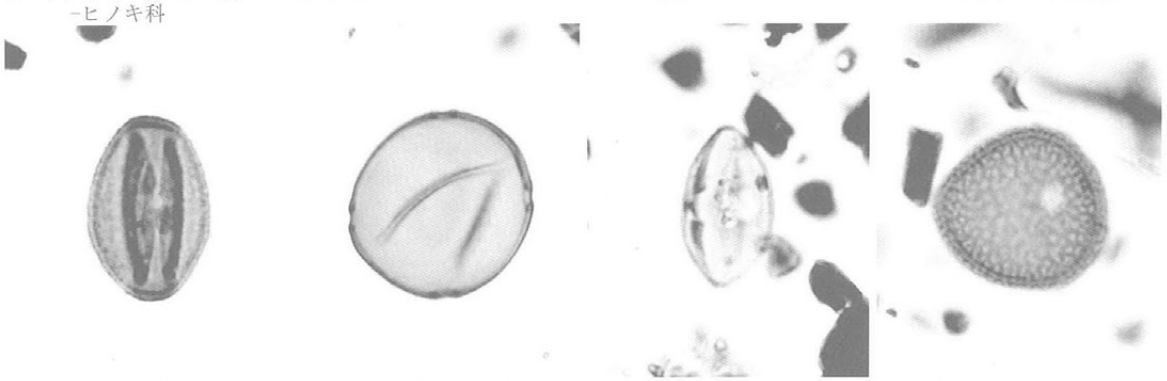
第 251 図　尾崎西遺跡の種実



1　モミ属　　2　マツ属複維管束亜属　　3　スギ



4　イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科　　5　クリ　　6　シイ属　　7　コナラ属コナラ亜属



8　コナラ属アカガシ亜属　　9　エノキ属-ムクノキ　　10　トチノキ　　11　ガマ属-ミクリ属

12　イネ科　　13　カヤツリグサ科　　14　ヨモギ属　　15　シダ植物単条溝胞子

1　―　10μm
2-15　―　10μm

第 252 図　尾崎西遺跡の花粉・胞子

第４節　動物遺存体

奈良国立文化財研究所（現 奈良文化財研究所）　松井章

取り上げられた資料は、イノシシの左右上顎臼歯である。

資料は、左上顎前臼歯（第3、4）、後臼歯（第1、2、3）および、右上顎後臼歯（第2、3）のエナメル質部分がある。元来は、頭蓋骨が存在したはずであるが、土中で消失し、臼歯が歯槽に植割った状態でならんでいる。左右の臼歯列間は元来の幅をとどめず、右側が上になっているため、土圧か上顎骨そのものの腐朽により、左臼歯列に重なるように接近している。本来の位置からずれたときに、右側の前臼歯が消失したのであろう。

左側の第1、第2前臼歯は失われている。第1後臼歯はエナメル質の破損が著しいが、第2後臼歯はほぼ完存する。第3後臼歯は、まだ、歯槽内で成長中の段階である。

乳歯がすべて永久歯に生え変わり、かつ第3後臼歯が萌出していないことから、年齢は2.5才前後と判断できる。また、この段階では、雌雄については判断できない。

対象資料　尾崎西遺跡Ｃ地区 SK37 出土の獣骨（縄文時代晩期）

第 253 図 尾崎西遺跡Ｃ地区 SK37 出土の動物遺体

第５節　尾崎西遺跡出土陶質土器・初期須恵器の蛍光Ｘ線分析

大阪大谷大学　三辻利一

１）はじめに

長年にわたって全国各地の窯跡出土須恵器を大量に分析した結果、K－Ca、Rb－Srの両分布図が須恵器の地域差を有効に表示する分布図であることが実証された。この結果を踏まえて、これら４因子を中核とした２群間判別分析法が須恵器産地推定法として定着している。

本報告では三谷三郎池西岸窯跡出土須恵器の化学特性を求めるとともに、尾崎西遺跡から出土した陶質土器・須恵器の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

２）分析法

土器片からごく少量の破片を取り出し、タングステンカーバイド製乳鉢の中で、100 メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、10トンの高圧をかけてプレスし、内径20㎜、厚さ5㎜の錠剤試料を作成し、蛍光Ｘ線分析用の試料とした。

蛍光Ｘ線分析における定量分析では標準試料も含めて、全試料は一定形状にするのが原則である。また、標準試料も実試料とほぼ同じ材質であることが必要である。筆者が標準試料として使用している岩石標準試料、JG－１はマトリックスが土器材料の粘土とほぼ同じである。また、同時に測定されるKとCa、RbとSrの蛍光Ｘ線強度はそれぞれ、ほぼ同じであり、これら４元素を同時に定量分析する上に、絶好の標準試料となる。JG－１以外にこの好条件を備えた岩石標準試料はない。これがJG－１を標準試料として採用した理由である。

土器の産地問題の研究ではその生産地や消費地遺跡の数が多いため、土器試料を大量に分析する必要があることが予想された。したがって、大量の試料処理に適した分析装置と分析法を開発しておかなければならない。分析装置としては完全自動式の装置が不可欠である。また、定量分析法としては検量線法を簡易化したJG－１による標準化法が最適である。そのために、実試料の測定に先だって必ず、JG－１の各元素の蛍光Ｘ線強度を測定し、各元素の蛍光Ｘ線強度の恒常性をチェックしている。どの測定元素についても、年間のバラツキは変動係数にして数％以下である。これに対して、１基の窯または一つの窯群の試料のバラツキは10～20%程度あり、装置自身による変動は十分小さいことが確認されている。

筆者は通常、主成分元素K、Ca、Fe、Naと、微量元素RbとSrを測定している。RbとSrは微量元素であるにも関わらず、短時間の測定で十分な蛍光Ｘ線強度が得られることが確認されたからである。通常、これら６元素を定量分析している。

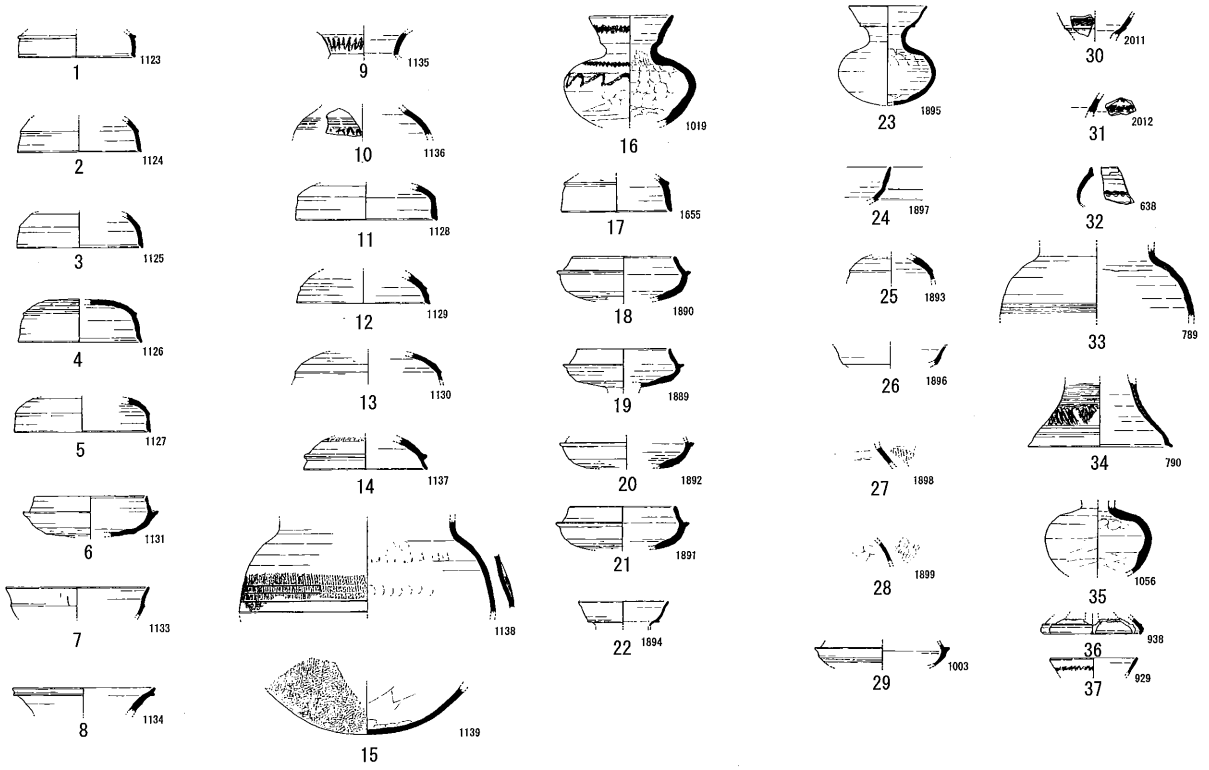
分析値の表示法として、岩石学研究では主成分元素については酸化物形で％表示をまた、微量元素については元素形でppm表示をしている。しかし、岩石学研究とは異なり、土器の地域差を求める研究である土器の産地問題の研究では必ずしも、岩石学研究における分析値の表示法を踏襲する必要性はない。地域差を効果的に表示する方法であれば、そのほうが便利である。各地の土器の地域差は微妙な差である。％やppm表示よりも、JG－１による蛍光Ｘ線強度の標準化法のほうが種々の点ではるかに便利であることが実証されている。K－Ca、Rb－Srの両分布図上での地域差の比較や、微量元素を主成分元素と同等に取り扱い、統計計算する上にはJG－１による標準化値のほうがはるかに取り扱いは便利である。筆者はこの研究を開始して以来30年間、ずっとこの方法を使用し続けてきた。

筆者が使用している装置は理学電機製RIX2100（波長分散型）である。この装置にはTAP（Na用）、

試料番号	大谷通し番号	報告番号	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(三郎池)	D^2(宮山)	推定産地
1	18-1722	1123	須恵器	杯蓋	0.321	0.022	2.76	0.462	0.231	0.041	8.8	58.9	89.2	陶邑
2	18-1723	1124	須恵器	杯蓋	0.304	0.029	2.67	0.407	0.233	0.065	10.0	67.8	80.1	陶邑
3	18-1724	1125	須恵器	杯蓋	0.362	0.052	2.82	0.501	0.327	0.109	11.0	92.5	54.2	陶邑？
4	18-1725	1126	須恵器	杯蓋	0.452	0.070	2.60	0.538	0.277	0.247	1.1	64.0	242.0	陶邑
5	18-1726	1127	須恵器	杯蓋	0.501	0.080	2.34	0.743	0.299	0.117	4.2	36.4	287.0	陶邑
6	18-1727	1131	須恵器	杯身	0.454	0.119	2.31	0.767	0.317	0.109	6.2	38.4	176.0	陶邑
7	18-1728	1133	須恵器	高杯	0.491	0.142	2.66	0.598	0.360	0.172	0.4	72.5	180.0	陶邑
8	18-1729	1134	須恵器	壺	0.491	0.126	2.36	0.610	0.393	0.264	0.8	93.4	145.0	陶邑
9	18-1730	1135	須恵器	甕	0.431	0.059	2.79	0.586	0.248	0.148	1.2	34.0	225.0	陶邑
10	18-1731	1136	須恵器	甕	0.552	0.167	2.84	0.586	0.495	0.291	4.1	351.0	159.0	陶邑？
11	18-1732	1128	須恵器	杯蓋	0.427	0.030	2.62	0.493	0.201	0.072	3.3	110.0	332.0	陶邑
12	18-1733	1129	須恵器	杯蓋	0.350	0.040	1.50	0.611	0.247	0.076	7.8	30.4	98.5	陶邑
13	18-1734	1130	須恵器	杯蓋	0.316	0.029	2.73	0.436	0.220	0.063	7.5	50.0	98.0	陶邑
14	18-1735	1137	須恵器	杯蓋	0.376	0.075	2.26	0.564	0.316	0.113	5.6	23.3	64.7	陶邑
15	18-1736	1138	陶質土器	壺	0.435	0.186	2.06	0.490	0.461	0.185	6.3	399.0	38.3	陶邑？
16	18-1737	1019	須恵器	甕	0.482	0.104	3.16	0.542	0.358	0.291	1.4	127.0	191.0	陶邑
17	18-1738	1655	須恵器	杯蓋	0.362	0.063	2.42	0.491	0.285	0.202	4.9	45.3	82.2	陶邑
18	18-1739	1890	須恵器	杯身	0.343	0.088	2.04	0.511	0.266	0.113	4.4	9.2	67.5	陶邑又は三郎池
19	18-1740	1889	須恵器	杯身	0.444	0.081	2.35	0.613	0.373	0.247	5.8	69.0	101.0	陶邑
20	18-1741	1892	須恵器	杯身	0.283	0.049	2.06	0.481	0.218	0.100	9.5	2.9	54.0	三郎池
21	18-1742	1891	須恵器	杯身	0.277	0.060	1.85	0.477	0.211	0.098	9.6	0.58	53.4	三郎池
22	18-1743	1894	須恵器	甕	0.636	0.139	1.83	0.691	0.380	0.319	10.1	103.0	524.0	陶邑
23	18-1744	1895	須恵器	甕	0.536	0.145	1.88	0.635	0.420	0.368	1.1	126.0	192.0	陶邑
24	18-1745	1897	須恵器	高杯	0.527	0.239	2.42	0.686	0.401	0.176	14.0	252.0	167.0	不明
25	18-1746	1893	須恵器	杯蓋	0.426	0.090	2.16	0.605	0.323	0.237	1.8	19.0	116.0	陶邑
26	18-1747	1896	須恵器	甕	0.278	0.049	1.93	0.474	0.224	0.113	10.5	3.4	46.9	三郎池
27	18-1748	1898	須恵器	甕	0.382	0.428	4.67	0.543	0.410	0.367	118.0	2000.0	16.1	不明
28	18-1749	1899	須恵器	甕	0.465	0.068	1.81	0.649	0.346	0.174	5.0	55.7	160.0	陶邑
29	18-1750	1003	須恵器	杯身	0.459	0.093	1.59	0.735	0.347	0.192	5.2	11.0	151.0	陶邑
30	18-1751	2011	須恵器	甕	0.503	0.098	3.25	0.648	0.272	0.222	2.7	20.1	339.0	陶邑
31	18-1752	2012	須恵器	甕	0.333	0.045	2.25	0.518	0.337	0.060	17.8	78.8	29.9	不明
32	18-1753	638	須恵器	壺	0.297	0.065	2.54	0.552	0.461	0.089	49.6	187.0	78.3	不明
33	18-1754	789	須恵器	壺	0.342	0.074	2.77	0.540	0.262	0.067	5.0	1.8	69.5	三郎池
34	18-1755	790	須恵器	器台	0.401	0.070	2.11	0.598	0.344	0.178	7.3	40.2	73.5	陶邑
35	18-1756	1056	須恵器	甕	0.513	0.125	3.18	0.586	0.310	0.308	2.4	49.4	314.0	陶邑
36	18-1757	938	須恵器	高杯	0.549	0.077	2.32	0.726	0.405	0.145	9.4	107.0	251.0	陶邑
37	18-1758	929	須恵器	甕	0.473	0.097	2.61	0.596	0.388	0.112	3.5	105.0	130.0	陶邑

第6表　尾崎西遺跡出土陶質土器・初期須恵器の蛍光X線分析

Ge(K、Ca用)、LiF(Fe、Rb、Sr用)の3枚の分光結晶が装填されている。また、蛍光X線の検出にはガスフロー比例計数管(Na、K、Ca用)とシンチレーションカウンター(Fe、Rb、Sr用)が装填されている。X線管球にはRh管球を使用している。管球の使用条件は50kV、50mAである。この印加電圧でRb、Sr、Y、Zrの蛍光X線を十分励起できる。また、使用電流を変えると、得られる蛍光X線強度は変動する。電流を下げれば、蛍光X線強度は下がる。50mAの電流で土器中の、上記の微量元素は十分な蛍光X線強度がえられることが確認されている。したがって、通常の出力は2.5kWである。Rh管球の



第 254 図 尾崎西遺跡胎土分析資料（初期須恵器・陶質土器）

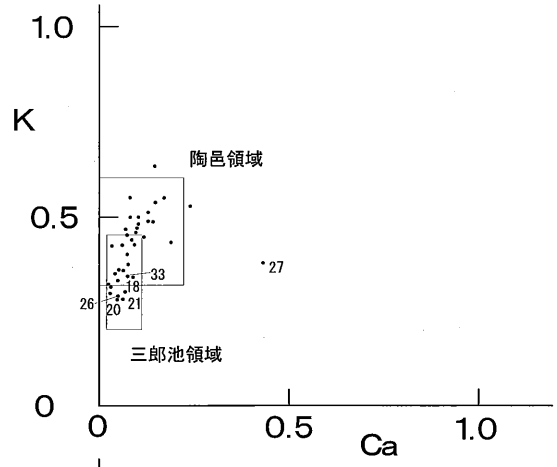
出力は 3.0kW である。当然、それ以下の出力で管球は使用されなければならない。

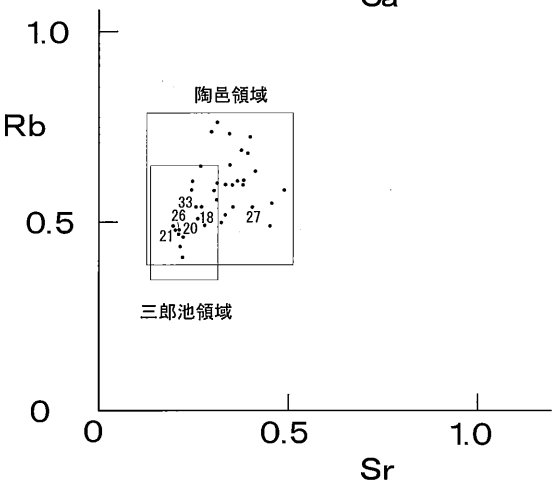
3）分析結果

はじめに、地元、香川県内の初期須恵器の窯跡である三谷三郎池西岸窯跡出土須恵器の化学特性について述べる。第 255 図上の両分布図に示されるように、Ca 量が比較的少ない須恵器である。さらに、Na 量も少ないこともその特徴の一つである。第 255 図上では比較のために、陶邑領域と三郎池領域を描いてある。描き易いため、長方形で領域を描いてあるが、その領界は定性的である。それでも、これらの領域は陶邑窯群と三郎池窯群の須恵器の化学特性を比較する上には便利である。正確に領界を示すためには、判別分析をすることが必要である。

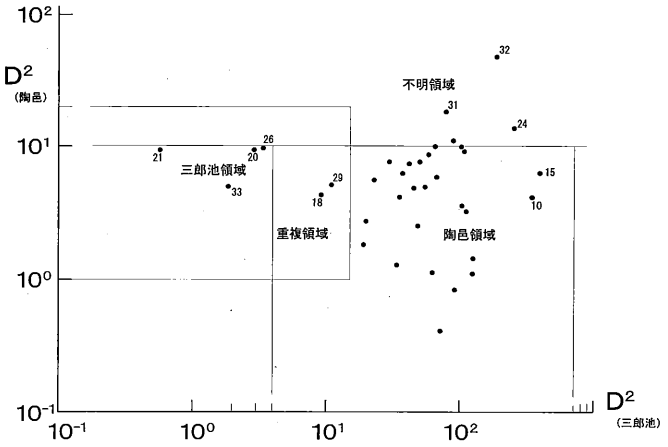
今回分析した尾崎西遺跡出土陶質土器・初期須恵器の両分布図を第 255 図下に示す。両分布図で殆どの試料は陶邑領域に分布するが、K-Ca 分布図で数点、三郎池領域に分布するものがあることが分かる。No.27 は Ca に異常値をもつ。そのため、陶邑領域からも三郎池領域からも大きくずれて分布した。Fe 量も異常に多い。何分にも採取試料は小片であったため、Ca、Fe に富む汚物の汚染を受けた可能性も十分考えられる。

第 255 図下の結果を正確に理解しようとすると、陶邑群と三郎池群間の 2 群間判別分析が必要である。K、Ca、Rb、Sr の 4 因子を使って、陶邑群と三郎池群間の判別分析を行った結果を第 259 図に示す。帰属の必要条件を求めるために、全試料は 5% 危険率をかけたホテリングの T^2 検定にかけられた。この結果、陶邑領域は D^2（陶邑）＜ 10、D^2（三郎池）＝ 4 ～ 700 であり、三郎池領域は D^2（三郎池）＜ 10、D^2（陶邑）＝ 1 ～ 20 であることが決定した。両領域の間に重複領域があるものの、両群の試料の大部分は分離しており、両者の相互識別は十分可能であることが分かる。この判別図を使うと、もし、尾崎西遺跡から出上した陶質土器・初期須恵器の中に、陶邑産の須恵器があれば、陶邑領域に分布

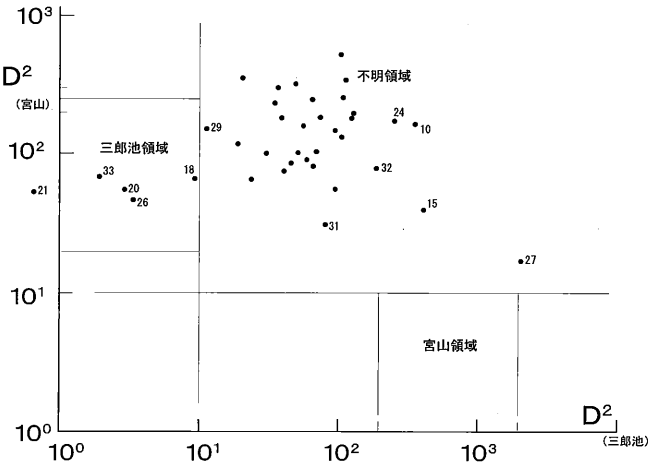




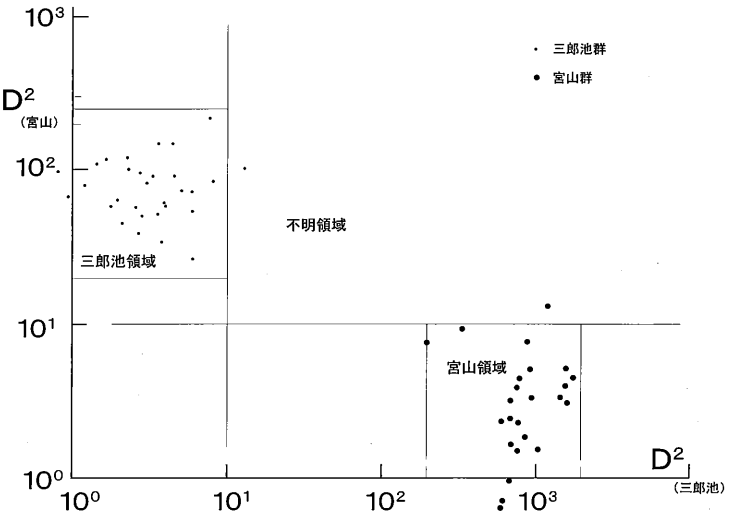
第 255 図 尾崎西遺跡出土初期須恵器・陶質土器の両分布



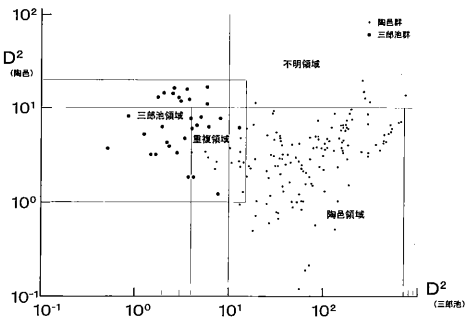
第 256 図 尾崎西遺跡出土初期須恵器・陶質土器の産地推定（１） K, Ca, Rb, Sr



第 257 図 尾崎西遺跡出土初期須恵器・陶質土器の産地推定（２） K, Ca, Rb, Sr



第 258 図 宮山群と三郎池群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr)



第 259 図 陶邑群と三郎池群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr)

するはずであるし、また、地元、三郎池産の須恵器が混ざっておれば、三郎池領域に分布するはずである。第259図の判別図上に、今回分析した尾崎西遺跡出土の陶質土器・初期須恵器をプロットした結果は第256図に示されている。第255図からも予想されるように、大部分の試料は陶邑領域に分布することがわかる。しかし、No.20、21、26、33の3点の試料は三郎池領域に分布しており、陶邑産ではなく、三郎池産の須恵器であることを示している。No.18、29の2点は重複領域に分布するが、このうち、No.18は三郎池産の可能性があり、逆に、No.29は陶邑産の須恵器である可能性が高い。No.24、31、32の3点の試料は不明領域に分布しており、産地不明としておく。

つぎに、香川県内のもう一つの初期須恵器の窯である宮山窯跡から出土した須恵器と三郎池窯出土須恵器の判別分析の結果を第257図に示す。両者は完全に分離しており、その相互識別は可能であることを示している。この判別図を使用すると、今回分析した試料中にある陶邑産の須恵器は不明領域に分布するはずであるし、三郎池産の須恵器が混ざっておれば、三郎池領域に分布するはずである。この判別図上に、今回分析した尾崎西遺跡出土陶質土器・初期須恵器をプロットした結果は第258図に示されている。第257図からも予想されるように、No.20、21、26、33の4点の試料は三郎池領域に分布することが分かる。他の殆どの試料は予想通り、不明領域に分布した。No.18、29の2点は第257図では陶邑領域と三郎池領域の重複領域に分布したが、第259図でも微妙な領域に分布する。

以上の結果は分析値とともに第6表にまとめている。一般的に、50個程度の母集団試料を使って、5%危険率をかけたホテリングのT^2検定に合格する条件はD^2（X）＜10であるから、陶邑群へ帰属するための必要条件はD 2（陶邑）＜10である。この帰属条件を満足した試料はすべて、陶邑産と判定した。No.3はD^2（陶邑）＝11.0で、陶邑への帰属条件をわずかに満たさなかったが、三郎池群にも宮山群にも帰属しない。陶邑産の可能性が最も高いと考えられるので、陶邑産？としておいた。No.10とNo.15は陶邑への帰属条件を満足するが、第257図で陶邑産と推定される他の試料群から少し離れて分布しているので、陶邑？としておいた。No.24、27、31、32の4点の試料は陶邑への帰属条件を満たさなかったので、産地不明とした。このうち、No.31、32はK、Ca量が少なく、朝鮮半島産の陶質土器である可能性は全くない。むしろ、陶邑か三郎池的な化学特性をもっているが、両母集団への帰属条件を満足しなかったので、産地不明とした。この2点の試料は全因子で類似しており、同じ生産地の製品と推定される。No.27はFe量が異常に多く、また、Ca量も多い。このような化学特性をもった須恵器の窯跡は見つかっていない。産地不明としておいたが、もしかしたら、採取試料の量が少なかったので、Fe、Ca量に富む汚物による汚染も考えられる。

以上の結果、尾崎西遺跡出土の37点の陶質土器・初期須恵器の中から、4点の三郎池産と推定される須恵器と三郎池産の可能性がある須恵器が1点検出された。産地不明となったのは4点である。残る28点の須恵器は陶邑産かその可能性が高い須恵器と判断された。

第６節　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光Ｘ線分析

大阪大谷大学　三辻利一

１）はじめに

軟質土器の素材となる粘土は須恵器とは違って比較的手に入り易く、何処ででも作られた土器であると考えられている。しかし、その焼成遺構はほとんど発見されておらず、したがって、蛍光Ｘ線分析法による産地問題の研究は産地を特定しないままで続けられてきた。また、肉眼や顕微鏡観察による土器胎土中の鉱物、とくに、雲母、角閃石などに着目してその産地についての手掛かりを求める研究も行われている。

最近、蛍光Ｘ線分析法によって、窯跡群内の個々の窯跡から出土する須恵器や中世陶器の化学特性にも小地域差があることが各地で発見された。窯跡群内の須恵器粘土は一色ではなく、微妙な地域差をもつということは粘土化のプロセスが数メートルとか数十メートルといった小さなルツボ内で進行したことを意味する。ルツボごとに岩石が溶解してできた溶液の濃度に微妙な差があったと考えられる。この溶液から粘土鉱物が結晶して粘土が生成した訳である。自然界のできごとであるから、当然、考えられることである。この結果、場合によっては、窯跡群内の個々の窯間でも相互識別が可能であることもわかった。例えば、陶邑窯跡群内のTGグループとONグループの相互識別が可能であることが示されている。

このように、粘土化のプロセスは一般的に、小さなルツボごとに進行したものとすれば、そして、各遺跡ごとに、周辺の粘土を素材として軟質土器を作っていたとすれば、軟質土器の胎土にも遺跡ごとに微妙な地域差があることになる。このような考え方を実証しようとして、各地で遺跡出土の弥生土器や土師器の蛍光Ｘ線分析を開始した。今回は高松平野東端にある尾崎西遺跡から出土した軟質土器の分析結果について報告する。

２）分析法とデータ解析法

蛍光Ｘ線分析法は須恵器の場合と同様である。土器片の表面を研磨して付着物を除去したのち、100メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は10トンの圧力をかけてプレスし、一定形状の錠剤試料を作成して蛍光Ｘ線分析をした。分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1による標準化値で表示した。

窯跡が残っていないので、何を基準として考えるかが問題となる。筆者自身はかねがね、土器の産地問題の研究には蛍光Ｘ線分析のデータ（材質論によるデータ）のみならず、従来から行われてきた考古学的な土器の形式論の情報との照合が必要であると考えてきた。この過程を踏まない限り、蛍光Ｘ線分析のデータは考古学側に受け入れられないのではないかと考えてきたからである。現在、須恵器の産地問題の研究でも、同じような考え方で共同研究を推進している。蛍光Ｘ線分析のデータを考古学側の形式論による分類と重ねあわせる作業から始めた。同じところで作られた土器は素材粘土も同じであれば、土器形式も同じであると考えられるからである。このような考え方で出されたデータを集積することによって、軟質土器の胎土研究を発展させることができる。

３）分析結果

今回分析した土器試料の形式分類と分析データは第7表にまとめた。まず、第260図には考古学的に韓式系土器と分類された土器の両分布図を示す。No.43、45の２点を除いて、よくまとまって分布する

ことがわかる。両分布図でよくまとまるということはこれらの土器の胎土が同じであるということ、すなわち、同じ粘土を素材として作った土器であることを意味する。通常、同じ所では同じ粘土を素材として土器を作るから、同じところで作られた土器と考えられる。形式的にも同じ形式の土器が作られて当然である。これらをすべて包含するようにして、定性的な韓式系領域を描いてみた。No.43、45は明らかに韓式系領域をずれることから、異なる胎土をもつ土器と考えられる。第260図の結果は蛍光X線分析の結果が考古学的な形式分類の結果とよく一致することを示している。

第261図には考古学的に布留系と分類された土器の両分布図を示す。大部分の試料はよくまとまって分布しており、同じ胎土をもつ土器であることを示している。そして、布留系も考古学的分類と蛍光X線分析の結果はよく一致することを示している。これらのすべての試料を包含するようにして布留系領域を描いた。第260図と比較すると、韓式系土器の胎土と布留系の胎土は全く異なることは明白である。別場所で作られた土器であることは明らかである。なお、No.70、73、83の3点の試料は布留系領域には分布せず、布留系ではないことを示している。No.83はその両分布図における分布からみて、韓式系土器であるか、在地産の土器であることを示している。韓式系土器が在地産と推定されていることはあとで述べる。

以上の結果をみると、考古学的分類と分析データが80～90%程度で一致しており、非常によく合致していることを示している。両者のデータが100%一致するということはまず、考えられないので、このデータは考古学者にとっても、分析化学者にとっても十分信頼できるデータであると考えられよう。このことは今後、考古学者と分析化学者が共同で軟質土器の胎土問題の研究を推進していく上に、非常に重要なことである。

第262図には考古学的にA-1群と分類された弥生土器の両分布図を示す。大部分の試料はよくまとまって分布することがわかる。このことは形式分類から予想されたように、これらの土器は同じところで作られた土器であることを示している。No.88、176、180の3点の試料はA-1領域から多少ずれるが、同じA-1群の土器である可能性は十分ある。しかし、No.89、184、187の3点の試料はA-1領域を大きくずれており、A-1群の土器とは別胎土の土器である。別場所で作られた土器と推定される。

第263図にはA-2群と形式的に分類された弥生土器の両分布図を示す。大部分の試料は両分布図でA-1領域にほぼ重なって分布しており、A-2群の土器はA-1群の土器とほぼ同じ胎土をもつ土器と考えられる。A-1領域から大きくずれるNo.212、219、221、222の4点の試料の胎土は異なる。別場所で作られた土器と推定される。A-1群とA-2群の土器の胎土が類似することは第262図と第263図の比較からわかるが、韓式系土器の胎土が類似することも第260図との比較から理解される。このことは韓式系土器、A-1群、A-2群の三者の土器の胎土は類似しており、同じ地域で作られた別形式の土器であることを示している。これらの土器は尾崎西遺跡にとって主成分土器である考えられることから、常識的にはこれらの土器が在地産の土器と考えることができよう。ただ、韓式系土器、A-1群土器、A-2群土器の分布が微妙にずれることから、それぞれ、尾崎西遺跡の周辺の別場所で作られた土器である可能性が高い。したがって、土器を作った人々も別であり、当然、土器形式も異なることになったのであろう。

第264図にはどの形式にも分類されなかった土器の両分布図を示す。No.62、77の2点は韓式系領域に分布しており、韓式系土器か、在地産の土器である可能性が高い。他方、No.41は布留系領域に分布しており、もしかしたら、布留系である可能性がある。No.80はどの領域にも対応せず、胎土は別であると考えられる。尾崎西遺跡にとっては外部から搬入された土器である可能性が高い。

最後に、B-1類、B-2類と分類された弥生土器の分析結果について説明する。B類土器はFe量が異常に高いという特徴をもつが、Ca、Sr量が他の土器に比べて異常に高く、そのため、第260図～第264図の分布図に比べて、Ca軸、Sr軸の縮尺を1/2に縮小し、標準化値の3まで入るように図を作成した。

第265図には、K-Ca分布図を示す。この分布図では比較のために、第260図～第262図で描いた韓式系領域と布留系領域を示してある。ほとんどすべての土器は韓式系領域にも、布留系領域にも対応しないことがわかる。他方、B類系土器と類似した化学特性をも生駒山西麓産土器との比較のため、鬼虎川領域を描いてある。まず、B-1類土器をみると、鬼虎川領域に分布するものと、鬼虎川領域の左側にずれて分布する二つのグループがあることがわかる。前者をⅠ群、後者をⅡ群とした。他方、B-2類土器はすべて、鬼虎川領域には対応せず、B-1類のⅡ群と同じ領域に重複して分布することがわかる。このことはB-1類のⅡ群とB-2類は同じ胎土である可能性があることを示唆している。なお、No.130、144、145、150、153の5点の土器の胎土はB類系の胎土とは異なる可能性がある。表1よりこれらの土器のFe量は少なく、Fe量が異常に多いB類系の土器の胎土ではないことは明らかである。

第265図にはB類系土器のRb-Sr分布図を示す。B-1類Ⅱ群とB-2類の土器が重複して分布することがわかる。試料集団の右下方にまとまって鬼虎川領域に分布する試料集団が第265図でB-1類Ⅰ群と分類された試料群である。Rb-Sr分布図でもB-1類は二つの集団に別れることになる。そして、B-1類Ⅱ群に分類された試料群にB-2類と分類された試料集団が重複して分布する。さらに、K-Ca分布図での分布と同様、B-1類Ⅰ群の試料集団は鬼虎川領域の右端の部分に分布し、B-1類Ⅱ群とB-2類の試料集団が鬼虎川領域の右側にずれて分布する。

第265・266図の分布から、B-1類Ⅱ群とB-2類の土器の胎土は同じであると推察される。これに対して、B-1類Ⅰ群の土器は生駒山西麓産の土器と類似する分布を示す。このように、鬼虎川領域を仮の基準としてみると、B類系土器の胎土は2つのグループに区分できることがわかる。第265図でB類系土器の胎土ではないと判断されたNo.130、144、145、150、153の5点の土器は第266図のRb-Sr分布図でも、他のB類系土器とはずれて分布しており、B類系以外の土器と判断される。再度、土器形式の検討が必要である。

今回は試験的に考古学的な土器分類に蛍光X線分析の結果を重ねてデータ解析を行った。その結果、興味深い情報が引き出された。とくに、考古学的形式分類と蛍光X線分析の結果がよく対応するという重要な結果が得られたことの意義は大きい。このようなデータ解析の方法が弥生土器や土師器のような生産地である窯跡が残っていない土器の胎土研究の方法として定着できるかどうか、今後の研究の発展に待ちたい。

編者註：第267～270図は、第3～5章の各実測図から編者が作成したものである。

試料番号	大谷大通し番号	報告番号	種別	器種	分類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
38	18-1760	1143	韓式系土器	壺	韓式系土器	0.511	0.296	1.600	0.596	0.441	0.164
39	18-1761	1023	韓式系土器	壺	韓式系土器	0.546	0.320	1.690	0.621	0.469	0.153
40	18-1762	1657	韓式系土器	甕	韓式系土器	0.529	0.316	1.290	0.622	0.420	0.085
41	18-1763	1671	土師器	甑	土師器	0.547	0.677	3.130	0.564	0.717	0.316
42	18-1764	1656	韓式系土器	平底鉢	韓式系土器	0.532	0.317	1.300	0.563	0.457	0.153
43	18-1765	1020	韓式系土器	甑	韓式系土器	0.540	0.481	1.460	0.553	0.899	0.125
44	18-1766	973	韓式系土器	壺	韓式系土器	0.541	0.286	1.670	0.587	0.482	0.154
45	18-1767	1658	韓式系土器	壺	韓式系土器	0.528	0.518	3.330	0.575	0.645	0.470
46	18-1768	1900	韓式系土器	壺	韓式系土器	0.520	0.307	1.440	0.654	0.455	0.197
47	18-1769	1908	韓式系土器	甑	韓式系土器	0.523	0.319	1.320	0.667	0.561	0.178
48	18-1770	1903	韓式系土器	平底鉢	韓式系土器	0.509	0.237	0.943	0.675	0.492	0.159
49	18-1771	1909	韓式系土器	甑	韓式系土器	0.573	0.218	1.000	0.483	0.557	0.200
50	18-1772	1902	韓式系土器	無頸壺	韓式系土器	0.590	0.319	1.300	0.567	0.557	0.243
51	18-1773	1907	韓式系土器	甑	韓式系土器	0.557	0.316	0.932	0.534	0.567	0.185
52	18-1774	1901	韓式系土器	鉢	韓式系土器	0.577	0.289	1.100	0.535	0.593	0.225
53	18-1775	1916	韓式系土器	壺	韓式系土器	0.550	0.347	1.670	0.578	0.509	0.237
54	18-1776	1910	韓式系土器	甕	韓式系土器	0.537	0.215	0.788	0.469	0.455	0.148
55	18-1777	1905	韓式系土器	平底鉢	韓式系土器	0.647	0.428	1.590	0.688	0.585	0.321
56	18-1778	1906	韓式系土器	平底鉢	韓式系土器	0.626	0.230	0.852	0.662	0.384	0.114
57	18-1779	1904	韓式系土器	平底鉢	韓式系土器	0.612	0.310	2.050	0.536	0.514	0.210
58	18-1780	2013	韓式系土器	鉢	韓式系土器	0.648	0.312	1.150	0.594	0.574	0.215
59	18-1781	2017	韓式系土器	壺	韓式系土器	0.527	0.235	1.020	0.438	0.513	0.122
60	18-1782	2014	韓式系土器	平底鉢	韓式系土器	0.619	0.338	1.380	0.607	0.586	0.224
61	18-1783	1672	土師器	甕	布留系	0.535	0.864	2.980	0.432	0.828	0.424
62	18-1784	1716	土師器	ミニチュア土器	土師器	0.572	0.334	1.010	0.526	0.428	0.193
63	18-1785	1692	土師器	壺	布留系	0.568	0.767	2.110	0.491	0.688	0.369
64	18-1786	1673	土師器	甕	布留系	0.476	0.975	3.190	0.331	0.776	0.431
65	18-1787	1675	土師器	甕	布留系	0.540	0.810	2.130	0.496	0.866	0.491
66	18-1788	1688	土師器	甕	布留系	0.591	0.776	2.210	0.460	0.726	0.412
67	18-1789	1686	土師器	甕	布留系	0.562	0.789	2.250	0.466	0.799	0.486
68	18-1790	1689	土師器	甕	布留系	0.559	0.787	2.120	0.536	0.840	0.445
69	18-1791	1695	土師器	高杯	布留系	0.563	0.726	1.750	0.457	0.814	0.484
70	18-1792	1700	土師器	高杯	布留系	0.410	0.196	3.280	0.354	0.349	0.099
71	18-1793	1702	土師器	高杯	布留系	0.600	0.867	3.190	0.442	0.634	0.475
72	18-1794	1868	弥生土器	壺	B-1	0.259	1.020	3.620	0.179	0.621	0.258
73	18-1795	1933	土師器	甕	布留系	0.769	0.383	0.702	0.676	0.619	0.415
74	18-1796	1943	土師器	高杯	布留系	0.486	0.727	1.990	0.457	0.892	0.567
75	18-1797	1945	土師器	高杯	布留系	0.622	0.631	1.990	0.582	0.816	0.618
76	18-1798	1934	土師器	甕	布留系	0.507	0.647	3.300	0.463	0.691	0.444
77	18-1799	1719	土師器	ミニチュア土器	土師器	0.594	0.306	1.750	0.514	0.496	0.416
78	18-1800	1519	弥生土器	鉢	布留系	0.539	0.996	2.160	0.393	0.681	0.434
79	18-1801	1707	土師器	小型壺	布留系	0.631	0.781	3.380	0.444	0.587	0.480
80	18-1802	1714	土師器	ミニチュア土器	土師器	0.430	0.777	2.950	0.286	0.614	0.292
81	18-1803	1373	弥生土器	壺	阿波産	0.269	1.240	4.080	0.229	0.294	0.260
82	18-1804	1345	弥生土器	鉢	A-1	0.460	0.359	1.030	0.456	0.304	0.074
83	18-1805	1951	土師器	壺	布留系	0.628	0.371	0.958	0.646	0.536	0.359
84	18-1806	1821	弥生土器	甕	A-1	0.664	0.309	1.070	0.561	0.427	0.213
85	18-1807	1939	土師器	甕	布留系	0.556	0.689	1.670	0.496	0.854	0.473
86	18-1808	1946	土師器	高杯	布留系	0.526	0.663	1.630	0.479	0.752	0.441
87	18-1809	1942	土師器	高杯	布留系	0.551	0.652	1.750	0.463	0.794	0.492
88	18-1810	1839	土師器	高杯	布留系	0.615	0.338	0.703	0.697	0.566	0.386
89	18-1811	1838	土師器	高杯	布留系	0.554	0.811	1.330	0.481	1.050	0.603
90	18-1812	1937	土師器	甕	布留系	0.514	0.679	2.070	0.484	0.866	0.528
91	18-1813	1947	土師器	高杯	布留系	0.534	0.635	1.150	0.436	0.809	0.447
92	18-1814	1944	土師器	高杯	布留系	0.560	0.599	2.250	0.497	0.624	0.501
93	18-1815	917	土師器	鉢	布留系	0.533	0.738	3.680	0.399	0.636	0.375
94	18-1816	979	弥生土器	甕	B-1	0.223	2.510	3.480	0.195	0.664	0.318
95	18-1817	993	弥生土器	高杯	B-1	0.221	1.830	4.740	0.180	0.471	0.245
96	18-1818	900	弥生土器	甕	B-1	0.183	1.600	4.640	0.094	0.604	0.335
97	18-1819	1617	弥生土器	甕	B-1	0.182	1.760	4.370	0.161	0.414	0.232
98	18-1820	1616	弥生土器	甕	B-1	0.406	1.060	2.970	0.342	0.750	0.399
99	18-1821	1618	弥生土器	甕	B-1	0.473	1.030	4.660	0.298	0.554	0.274
100	18-1822	1559	弥生土器	高杯	B-1	0.375	1.160	2.990	0.299	0.707	0.354
101	18-1823	2019	弥生土器	甕	B-1	0.255	0.992	4.740	0.155	0.329	0.151
102	18-1824	1438	弥生土器	高杯	B-1	0.372	1.160	3.110	0.274	0.740	0.337
103	18-1825	1372	弥生土器	細頸壺	B-1	0.202	1.790	4.520	0.130	0.683	0.291

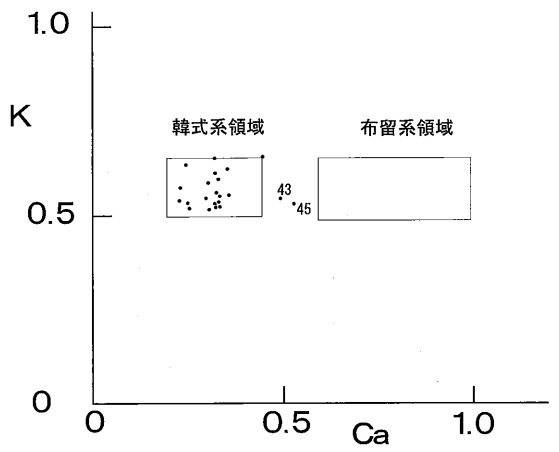
第7表　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光X線分析（1）

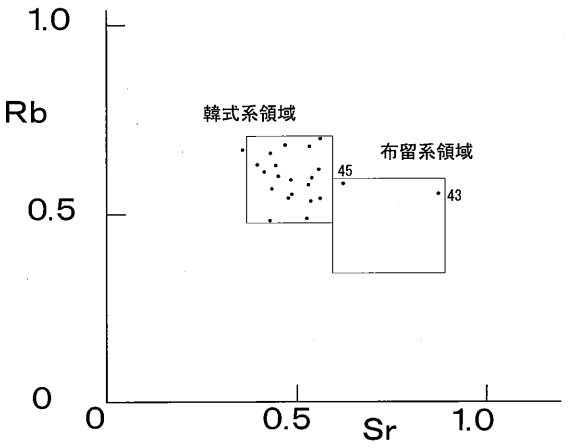
試料番号	大谷大通し番号	報告番号	種別	器種	分類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
104	18-1826	1549	弥生土器	壺	B-1	0.453	0.739	4.530	0.294	0.460	0.271
105	18-1827	1032	弥生土器	甕	B-1	0.404	1.110	3.510	0.297	0.500	0.185
106	18-1828	1548	弥生土器	壺	B-1	0.337	1.160	3.990	0.190	0.607	0.234
107	18-1829	1543	弥生土器	甕	B-1	0.344	1.120	4.050	0.265	0.465	0.136
108	18-1830	1524	弥生土器	甕	B-1	0.303	1.420	4.390	0.174	0.541	0.198
109	18-1831	1521	弥生土器	甕	B-1	0.236	2.120	3.430	0.174	0.733	0.277
110	18-1832	899	弥生土器	甕	B-1	0.215	1.520	4.730	0.166	0.633	0.284
111	18-1833	1381	弥生土器	甕	B-1	0.201	1.780	3.870	0.133	0.777	0.283
112	18-1834	1493	弥生土器	壺	B-1	0.252	1.980	3.120	0.150	0.840	0.282
113	18-1835	1583	弥生土器	甕		0.421	1.270	3.060	0.323	0.664	0.212
114	18-1836	1603	弥生土器	細頸壺	B-1	0.235	2.010	4.140	0.176	0.554	0.204
115	18-1837	1479	弥生土器	甕	B-1	0.303	1.400	4.300	0.190	0.518	0.181
116	18-1838	1554	弥生土器	壺	B-1	0.377	1.260	4.270	0.267	0.466	0.171
117	18-1839	1580	弥生土器	甕	B-1	0.219	1.820	3.850	0.138	0.763	0.264
118	18-1840	1522	弥生土器	甕	B-1	0.186	1.770	4.100	0.142	0.722	0.270
119	18-1841	1480	弥生土器	甕	B-1	0.195	2.360	4.030	0.145	0.748	0.306
120	18-1842	1518	弥生土器	高杯	B-1	0.204	2.090	3.860	0.106	0.749	0.331
121	18-1843	975	弥生土器	壺	B-1	0.235	2.300	3.820	0.176	0.644	0.321
122	18-1844	1607	弥生土器	高杯	B-1	0.218	2.320	3.650	0.166	0.751	0.318
123	18-1845	1582	弥生土器	甕	B-1	0.171	2.470	4.390	0.142	0.477	0.201
124	18-1846	1517	弥生土器	高杯	B-1	0.195	1.830	3.820	0.103	0.537	0.237
125	18-1847	1581	弥生土器	甕	B-1	0.221	2.010	4.270	0.122	0.506	0.213
126	18-1848	1608	弥生土器	鉢	B-1	0.214	2.060	3.830	0.133	0.539	0.231
127	18-1849	1520	弥生土器	甕	B-1	0.375	1.340	3.940	0.254	0.760	0.322
128	18-1850	1994	弥生土器	高杯	B-1	0.281	1.520	3.120	0.265	0.688	0.324
129	18-1851	1598	弥生土器	壺	B-1	0.243	1.250	4.740	0.120	0.653	0.210
130	18-1852	1874	弥生土器	高杯	B-1	0.544	0.832	2.300	0.524	1.020	0.514
131	18-1853	2009	製塩土器		B-1	0.262	1.750	2.720	0.359	0.578	0.282
132	18-1854	1558	弥生土器	高杯	B-1	0.379	1.100	3.020	0.274	0.779	0.334
133	18-1855	1606	弥生土器	高杯	B-1	0.210	2.200	3.770	0.093	0.816	0.319
134	18-1856	1386	弥生土器	甕	B-1	0.277	1.610	3.390	0.223	0.812	0.376
135	18-1857	1387	弥生土器	甕	B-1	0.297	1.550	4.110	0.221	0.741	0.375
136	18-1858	1974	弥生土器	甕	B-2	0.477	1.230	2.960	0.360	0.582	0.207
137	18-1859	1986	弥生土器	甕	B-1	0.218	2.100	4.170	0.143	0.731	0.325
138	18-1860	1833	弥生土器	高杯	B-1	0.197	2.170	3.370	0.112	0.828	0.307
139	18-1861	1523	弥生土器	甕	B-1	0.195	1.760	4.180	0.155	0.711	0.295
140	18-1862	1808	弥生土器	甕	B-1	0.313	0.892	3.570	0.224	0.471	0.164
141	18-1863	1804	弥生土器	甕	B-2	0.379	1.010	4.040	0.270	0.487	0.175
142	18-1864	1366	弥生土器	甕	B-2	0.290	1.330	5.990	0.168	0.414	0.237
143	18-1865	1526	弥生土器	甕	B-2	0.345	1.010	4.240	0.224	0.406	0.222
144	18-1866	1859	弥生土器	甕	B-2	0.470	0.590	3.020	0.383	0.489	0.194
145	18-1867	1987	弥生土器	甕	阿波産	0.595	0.607	1.510	0.635	0.662	0.513
146	18-1868	1525	弥生土器	甕	B-2	0.404	1.240	3.740	0.289	0.705	0.167
147	18-1869	1382	弥生土器	甕	B-1	0.216	1.780	3.570	0.131	0.499	0.231
148	18-1870	1997	弥生土器	鉢	B模倣	0.587	0.634	0.827	0.508	0.760	0.269
149	18-1871	1507	弥生土器	甕	B-2	0.329	1.080	4.040	0.231	0.333	0.111
150	18-1872	1530	弥生土器	甕	B模倣	0.498	0.276	1.240	0.443	0.370	0.165
151	18-1873	1584	弥生土器	甕	B-2	0.419	1.340	3.550	0.250	0.508	0.227
152	18-1874	1529	弥生土器	甕	B-2	0.383	1.180	3.610	0.268	0.449	0.164
153	18-1875	1508	弥生土器	甕	B-2	0.586	1.030	2.150	0.418	0.738	0.349
154	18-1876	1585	弥生土器	甕	B-2	0.492	1.090	3.350	0.369	0.618	0.290
155	18-1877	1527	弥生土器	甕	B-2	0.345	1.200	2.790	0.276	0.784	0.267
156	18-1878	1806	弥生土器	甕	B-2	0.441	0.829	3.240	0.333	0.538	0.185
157	18-1879	1807	弥生土器	甕	B-2	0.347	1.060	4.570	0.231	0.401	0.163
158	18-1880	1802	弥生土器	甕	B-2	0.529	1.090	2.270	0.385	0.622	0.233
159	18-1881	1805	弥生土器	甕	B-2	0.347	0.996	2.680	0.248	0.559	0.211
160	18-1882	1867	弥生土器	壺	B-1	0.316	1.170	4.390	0.221	0.380	0.137
161	18-1883	1880	弥生土器	鉢	B-2	0.270	0.837	3.340	0.267	0.332	0.078
162	18-1884	1803	弥生土器	甕	B-2	0.289	1.190	4.150	0.178	0.385	0.162
163	18-1885	1843	弥生土器	鉢	B-2	0.377	1.110	3.030	0.267	0.576	0.240
164	18-1886	1676	土師器	甕	布留系	0.615	0.869	2.570	0.469	0.809	0.448
165	18-1887	1980	土師器	高杯	阿波産	0.273	2.010	3.460	0.175	0.434	0.370
166	18-1888	1567	弥生土器	鉢	A-1	0.620	0.203	2.360	0.589	0.360	0.241
167	19-207	1388	弥生土器	甕	A-1	0.484	0.186	2.740	0.429	0.285	0.126
168	19-208	1408	弥生土器	甕	A-1	0.562	0.387	2.340	0.515	0.506	0.348
169	19-209	1423	弥生土器	甕	A-1	0.453	0.288	2.370	0.501	0.332	0.162

第8表　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光X線分析（2）

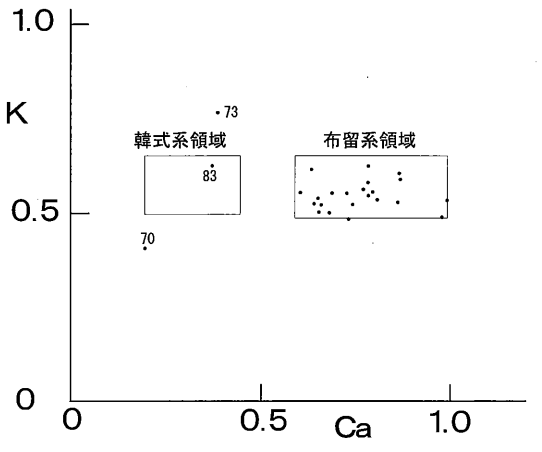
試料番号	大谷大通し番号	報告番号	種別	器種	分類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
170	19-210	1424	弥生土器	甕	A-1	0.457	0.327	1.780	0.558	0.365	0.176
171	19-211	1427	弥生土器	小型鉢	A-1	0.541	0.345	2.150	0.482	0.363	0.188
172	19-212	1430	弥生土器	壺	A-1	0.529	0.333	1.910	0.447	0.471	0.225
173	19-213	1431	弥生土器	壺	A-1	0.585	0.334	1.470	0.431	0.540	0.235
174	19-214	1432	弥生土器	壺	A-1	0.562	0.346	1.510	0.422	0.583	0.232
175	19-215	1434	弥生土器	高杯	A-1	0.496	0.377	1.240	0.609	0.462	0.250
176	19-216	1436	弥生土器	高杯	A-1	0.616	0.510	1.430	0.665	0.632	0.410
177	19-217	1437	弥生土器	高杯	A-1	0.479	0.174	1.830	0.488	0.340	0.163
178	19-218	1439	弥生土器	鉢	A-1	0.531	0.383	3.440	0.447	0.380	0.226
179	19-219	1440	弥生土器	鉢	A-1	0.513	0.342	3.380	0.442	0.342	0.225
180	19-220	1452	弥生土器	鉢	A-1	0.496	0.459	1.180	0.557	0.507	0.294
181	19-221	1453	弥生土器	鉢	A-1	0.530	0.340	1.000	0.581	0.521	0.254
182	19-222	1454	弥生土器	鉢	A-1	0.477	0.373	2.460	0.460	0.424	0.222
183	19-223	1459	弥生土器	器台	A-1	0.495	0.251	2.890	0.471	0.314	0.119
184	19-224	1466	弥生土器	鉢	A-1	0.452	0.623	3.900	0.472	0.662	0.344
185	19-225	1495	弥生土器	壺	A-1	0.470	0.276	1.050	0.601	0.428	0.122
186	19-226	1594	弥生土器	甕	A-1	0.485	0.346	1.800	0.498	0.354	0.106
187	19-227	1597	弥生土器	壺	B-2	0.519	1.100	2.810	0.363	0.813	0.317
188	19-228	1782	弥生土器	甕	A-1	0.632	0.265	0.837	0.623	0.557	0.303
189	19-229	1823	弥生土器	甕	A-1	0.583	0.227	1.320	0.570	0.403	0.218
190	19-230	1830	弥生土器	壺	A-1	0.602	0.181	0.751	0.569	0.454	0.259
191	19-231	1831	弥生土器	高杯	A-1	0.550	0.341	1.330	0.579	0.431	0.206
192	19-232	2026	弥生土器	鉢	A-1	0.572	0.124	1.730	0.469	0.332	0.212
193	19-233	747	弥生土器	甕	A-2	0.675	0.258	2.670	0.450	0.355	0.194
194	19-234	748	弥生土器	甕	A-2	0.633	0.363	2.470	0.436	0.421	0.154
195	19-235	749	弥生土器	甕	西南四国系	0.341	0.250	2.460	0.345	0.284	0.051
196	19-236	750	弥生土器	甕	A-2	0.613	0.262	2.540	0.441	0.347	0.102
197	19-237	751	弥生土器	甕	A-2	0.571	0.449	2.410	0.440	0.442	0.221
198	19-238	752	弥生土器	壺	A-2	0.563	0.504	3.180	0.483	0.398	0.236
199	19-239	753	弥生土器	壺	A-2	0.598	0.312	2.720	0.569	0.367	0.168
200	19-240	754	弥生土器	壺	A-2	0.486	0.351	3.000	0.399	0.300	0.102
201	19-241	755	弥生土器	壺	A-2	0.557	0.320	2.400	0.464	0.428	0.213
202	19-242	756	弥生土器	壺	A-2	0.607	0.380	3.060	0.457	0.420	0.229
203	19-243	757	弥生土器	壺	B-1	0.198	1.920	5.190	0.153	0.382	0.164
204	19-244	758	弥生土器	壺	A-2	0.653	0.240	2.660	0.483	0.360	0.257
205	19-245	759	弥生土器	壺	A-2	0.561	0.289	2.550	0.419	0.389	0.146
206	19-246	760	弥生土器	壺	A-2	0.439	0.325	2.340	0.473	0.268	0.106
207	19-247	761	弥生土器	高杯	A-2	0.502	0.400	2.310	0.369	0.455	0.138
208	19-248	762	弥生土器	高杯	A-2	0.334	0.225	2.820	0.305	0.198	0.030
209	19-249	763	弥生土器	鉢	A-2	0.588	0.532	2.490	0.585	0.563	0.408
210	19-250	764	弥生土器	鉢	A-2	0.571	0.448	2.600	0.452	0.397	0.201
211	19-251	6	弥生土器	壺	阿波産	0.166	2.540	3.460	0.128	0.578	0.328
212	19-252	7	弥生土器	壺	A-2	0.439	0.183	4.630	0.300	0.236	0.067
213	19-253	8	弥生土器	壺	B-2	0.257	1.400	4.850	0.169	0.497	0.205
214	19-254	9	弥生土器	甕	A-2	0.443	0.436	4.880	0.376	0.399	0.172
215	19-255	10	弥生土器	底部	A-2	0.523	0.500	4.730	0.408	0.309	0.197
216	19-256	11	弥生土器	底部	A-2	0.719	0.231	1.610	0.591	0.352	0.307
217	19-257	12	弥生土器	底部	A-2	0.688	0.323	3.080	0.491	0.368	0.196
218	19-258	13	弥生土器	底部	阿波産	0.183	2.220	2.920	0.095	0.466	0.356
219	19-259	14	弥生土器	底部	A-2	0.522	0.662	2.950	0.363	0.549	0.396
220	19-260	15	弥生土器	底部	A-2	0.612	0.249	1.930	0.532	0.352	0.220
221	19-261	16	弥生土器	底部	A-2	0.521	0.047	1.160	0.496	0.376	0.059
222	19-262	17	弥生土器	底部	B-2	0.165	1.720	3.620	0.164	0.476	0.159

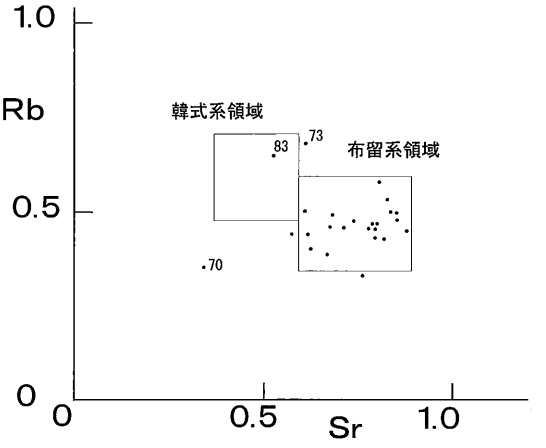
第9表　尾崎西遺跡軟質土器の蛍光X線分析（2）



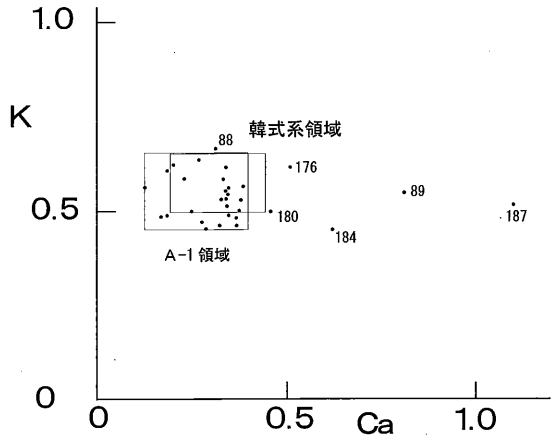


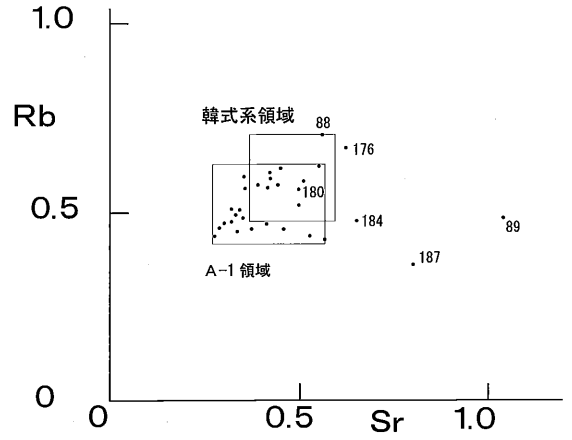
第 260 図 韓式系土器の両分布図



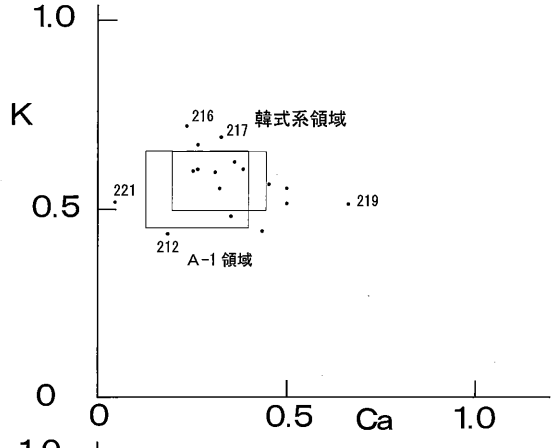


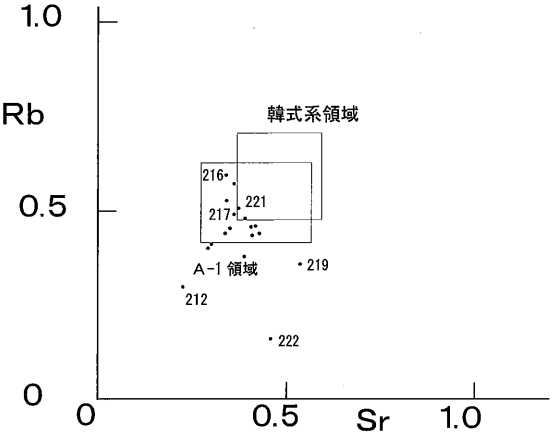
第 261 図 布留系土師器の両分布図



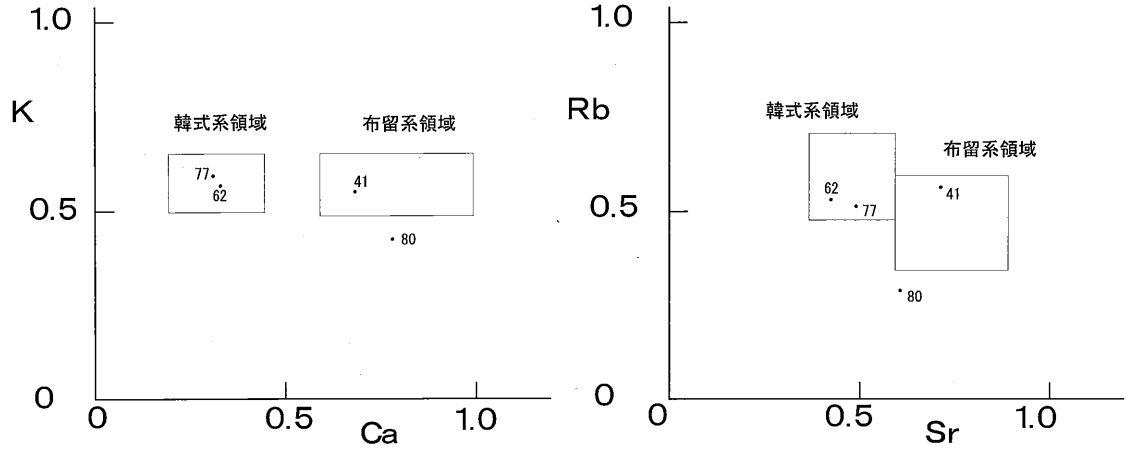


第 262 図 A-1 と分類された土器の両分布図

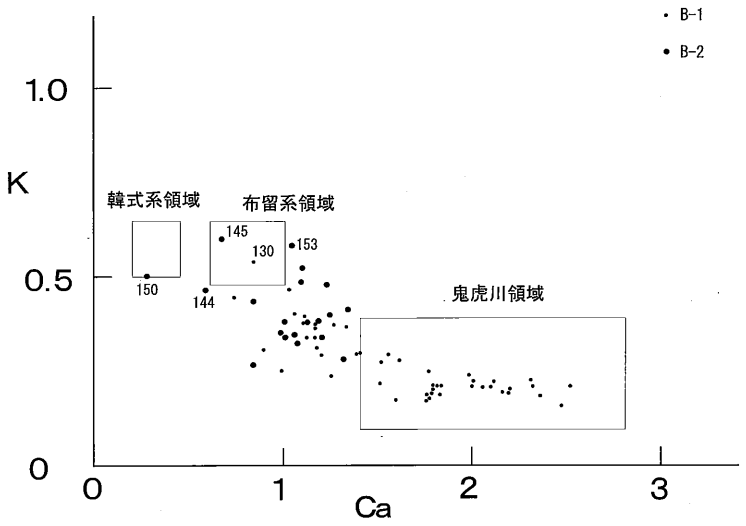




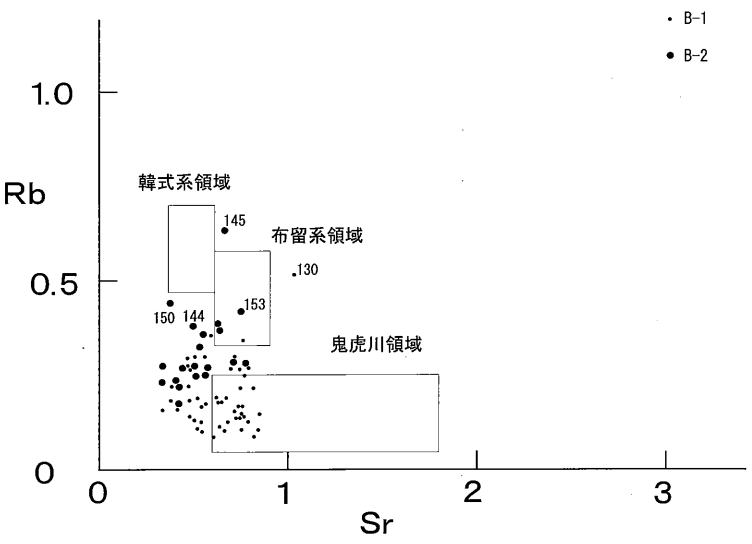
第 263 図 A-2 と分類された土器の両分布図



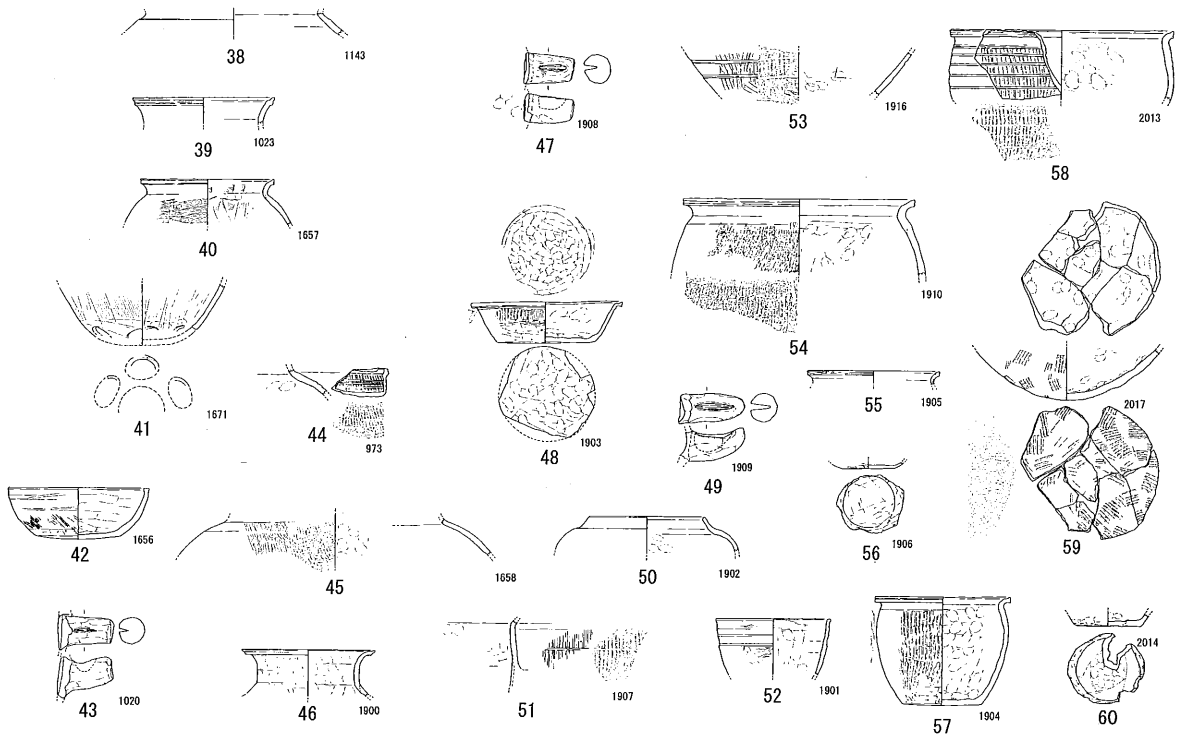
第 264 図 土師器の両分布図



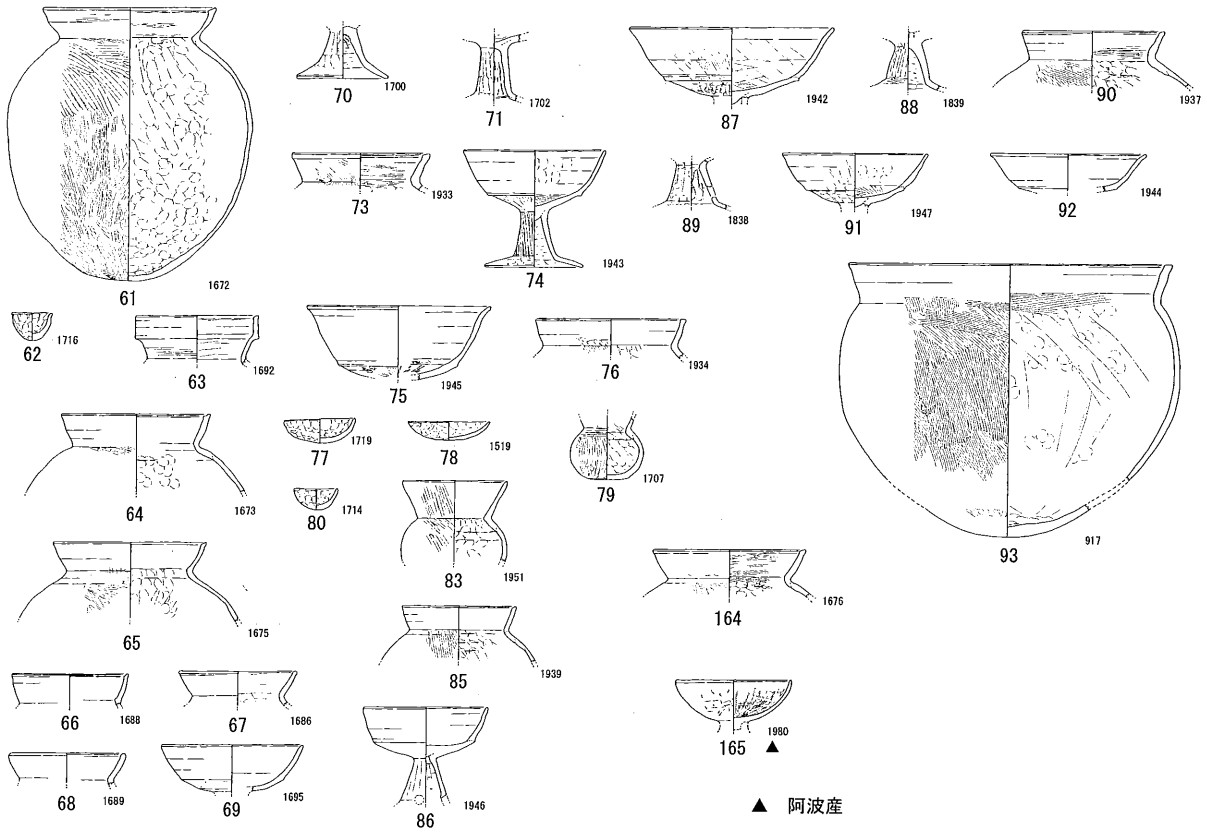
第 265 図　B-1、B-2 と分類された弥生土器の K-Ca 分布図



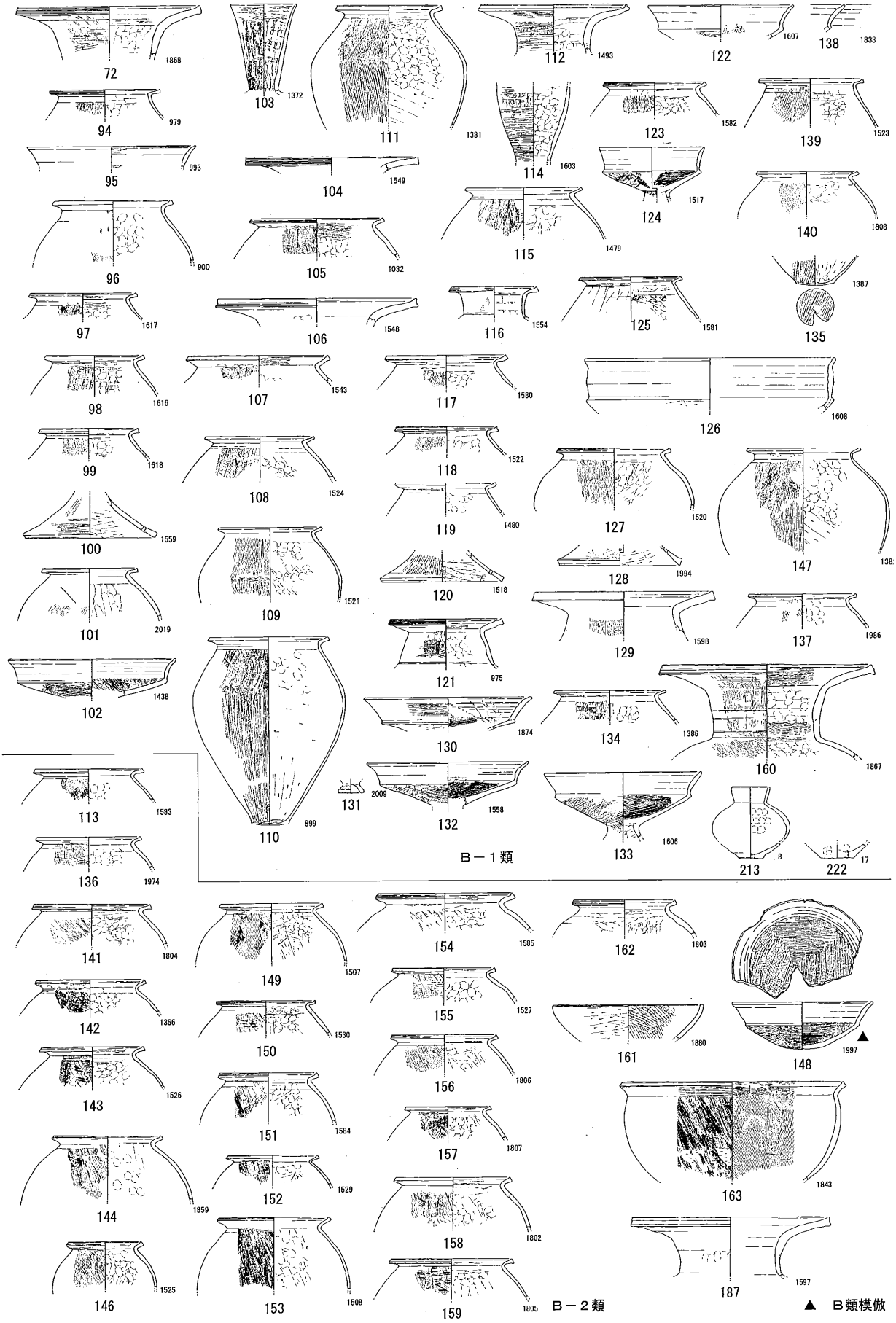
第 266 図　B-1、B-2 と分類された弥生土器の Rb-Sr 分布図



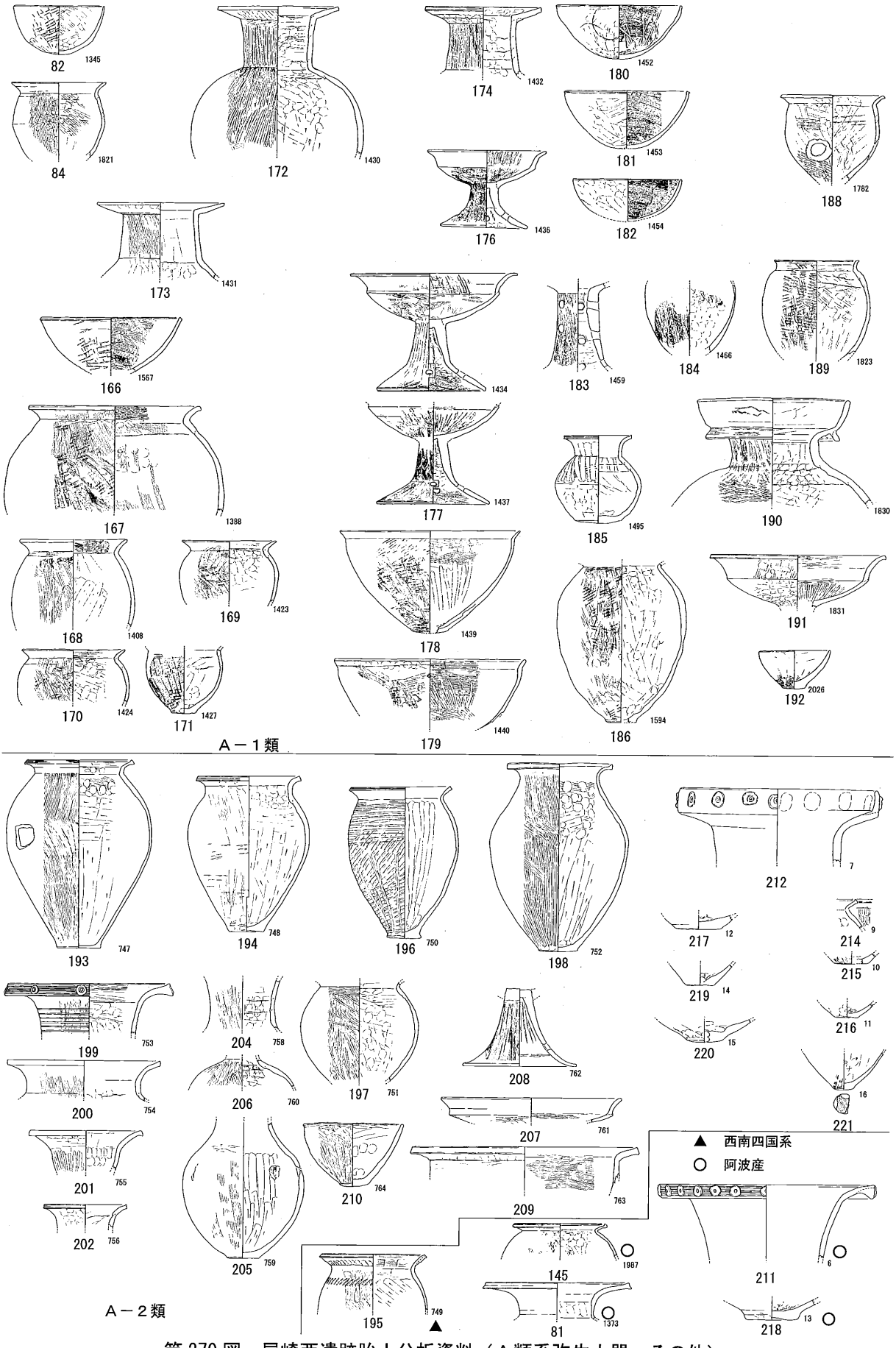
第 267 図　尾崎西遺跡胎土分析資料（軟質韓式系土器）



第 268 図　尾崎西遺跡胎土分析資料（土師器）



第 269 図　尾崎西遺跡胎土分析資料（B類系弥生土器）



第 270 図　尾崎西遺跡胎土分析資料（Ａ類系弥生土器・その他）

第７章　まとめ

今回報告する尾崎西遺跡は、長尾地域の中心部となる平野から上位段丘の丘陵部にかけて、旧河道部を介しながら東西約 700 m、幅 20 ～ 24 mという広範囲に及ぶ発掘調査を実施したものである。調査対象地内は、平野部の微高地や旧河道、南から伸びる丘陵部など、地形的な変化が大きい。それに伴い、それぞれの地形ごとに、縄文時代から近世に及ぶ様々な遺構・遺物が出土した。第３章では、Ａ～Ｃ地区に区分して遺構･遺物を報告した。ここでは、調査範囲全体の遺構変遷と、注目すべき成果を抽出する。

＜縄文時代＞

縄文時代の資料は、Ｃ地区微高地の基盤を形成する黄色系砂質土より出土した押型文土器（838）が最も古い。山形文を施す深鉢胴部片で、表裏面ともに摩滅を被るが、文様が消えるほどの摩滅ではない。近隣に集落遺構が埋没している可能性が高い。

Ｃ地区の流路跡 SR06 東肩付近では、縄文時代晩期の堅果類貯蔵穴跡と考えられる土坑（SK37 ～ 41）を検出した。4 mほどの範囲に 5 基が集中して営まれており、コナラ属アカガシ亜属の堅果を貯蔵した痕跡を確認した。低地縁辺の堅果類貯蔵は、三豊市須田・中尾瀬遺跡（蓮本・西岡 2000）や高松市本郷遺跡（北山 2005）に類例がある。

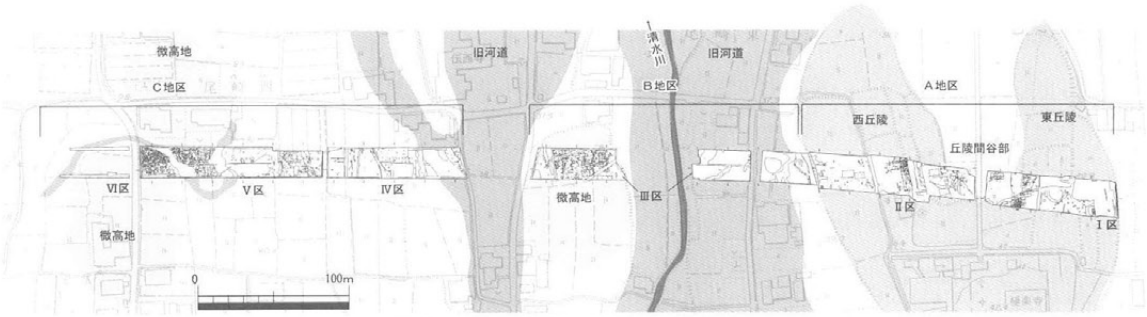
Ａ地区丘陵部では、落し穴と推定できる土坑（SK01 ～ 24）を検出した。これらは 8 ～ 10 m間隔で、規則的に配置した様子がうかがえ、比較的限定された時期の所産と推定できる。出土した土器は少ないが、SK04 では晩期後半古相の突帯文土器が出土した。上記のＣ地区貯蔵穴跡とは若干の時期差があるが、いずれもＢ地区 SD05 下層の流路跡で出土した土器群の時間幅に収まることから、縄文時代晩期を通して調査地近辺が居住域として利用された可能性が高い。県内の落し穴遺構は、高松市小山･南谷遺跡（片桐編 2006）、同市西浦谷遺跡（山元編 2006）、三木町尾端遺跡（真鍋編 2001）に類例がある。いずれも縄文時代後期～晩期に属し、平野部を望む低丘陵上に立地する。居住域縁辺における狩猟活動の痕跡と位置づけることができよう。

＜弥生時代前期～中期前半＞

縄文早期の土器が出土したＣ地区の幅広い河川跡は、分厚い砂層で埋没し、堅果類貯蔵穴跡が営まれた縄文晩期までには周辺に自然堤防を形成する。古墳時代まで継続する流路跡 SR05 ～ 07 は、そのような河川の最終的な窪地（小流路跡）といえる。最下層の黄灰色系砂礫層では弥生時代前期の土器が出土しており、この時期から流路域が固定されたものと推定できる。自然堤防が形成した微高地は、流路跡の北側と南側に認められ、弥生前期の遺構は主に北側微高地の南端、流路が大きくカーブを描いて蛇行する箇所にあり、合計 6 基の土坑（SK42 ～ 47）を検出した。これらは直径 1.2 ～ 2 mの円形土坑で、縄文晩期の堅果類貯蔵穴跡の分布や形状に類似するが、堅果類やその他の有機物等は出土していない。このほか、Ｃ地区東端の河川跡 SR04 では、主にその下層で当該期の遺物が出土した。また、Ｂ地区では縄文晩期に埋没した溝跡 SD05 が再掘削され、弥生前期～中期前半の土器が出土した。

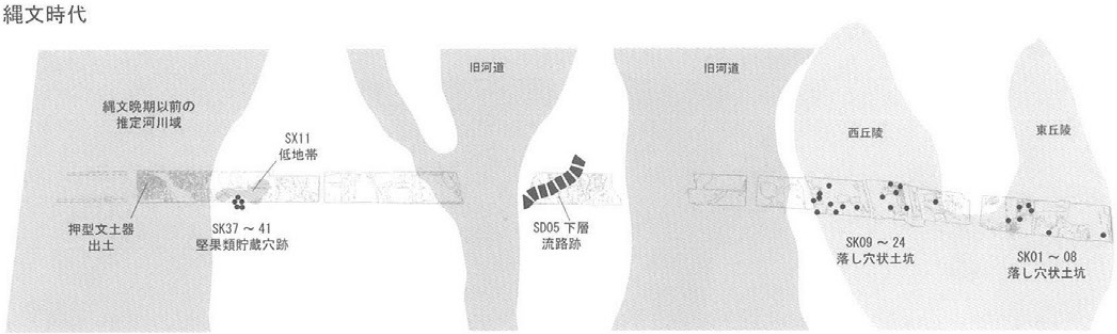
＜弥生時代中期後半＞

遺構の分布　当該時期の遺構・遺物は全調査区を通じて少ないが、Ａ地区の東西丘陵間谷部 SR01 では

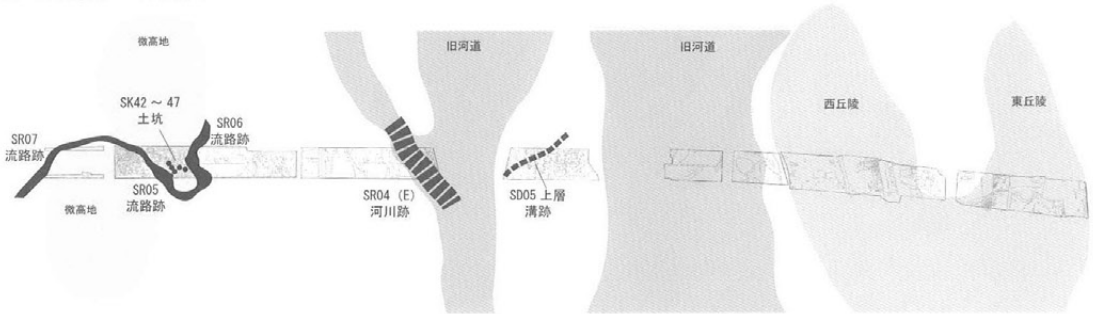


尾崎西遺跡の全体遺構図と推定微地形

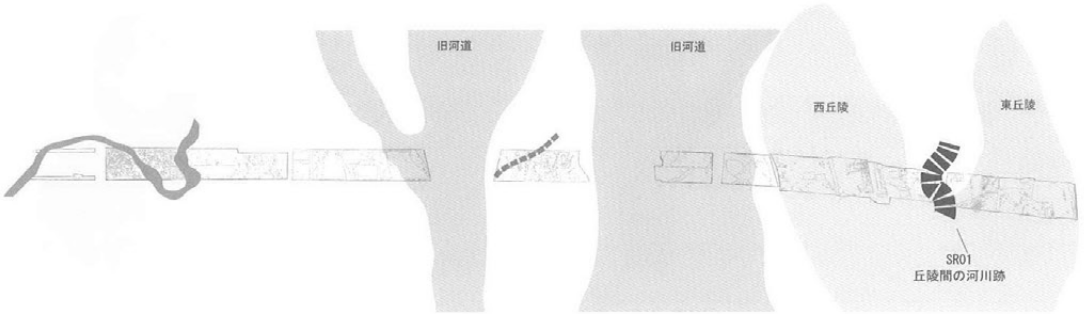
縄文時代



弥生時代前期～中期前半

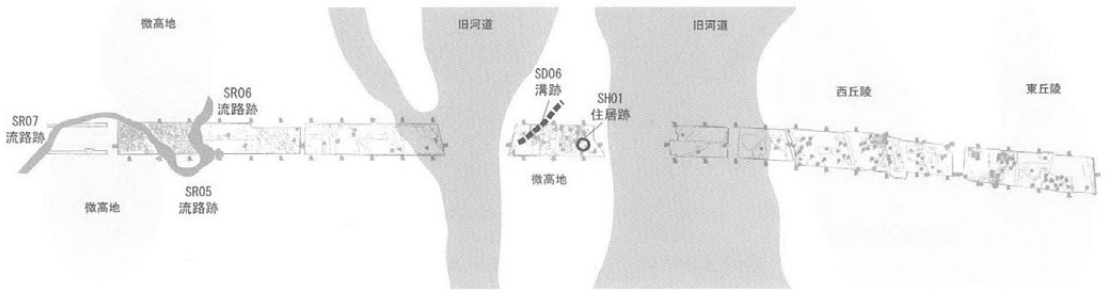


弥生時代中期後半

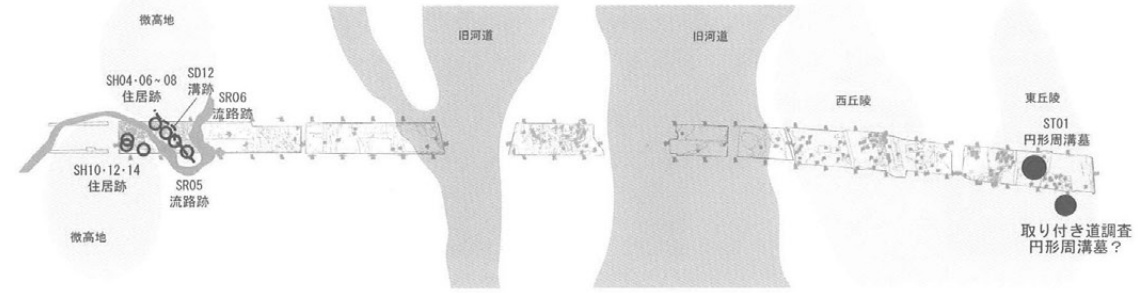


第 271 図　尾崎西遺跡遺構変遷図 1

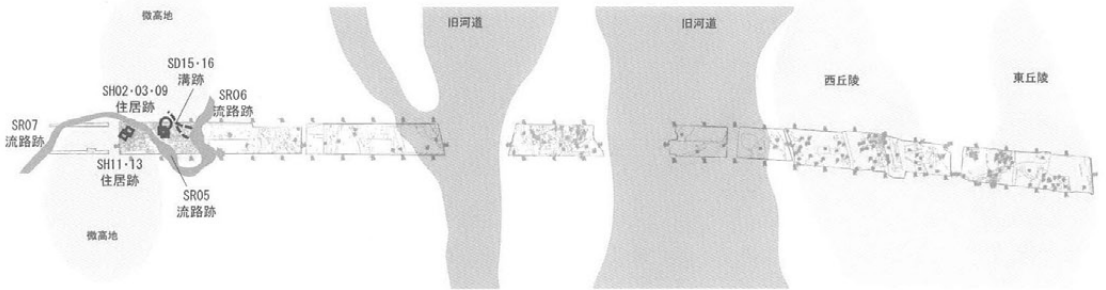
弥生時代後期前半



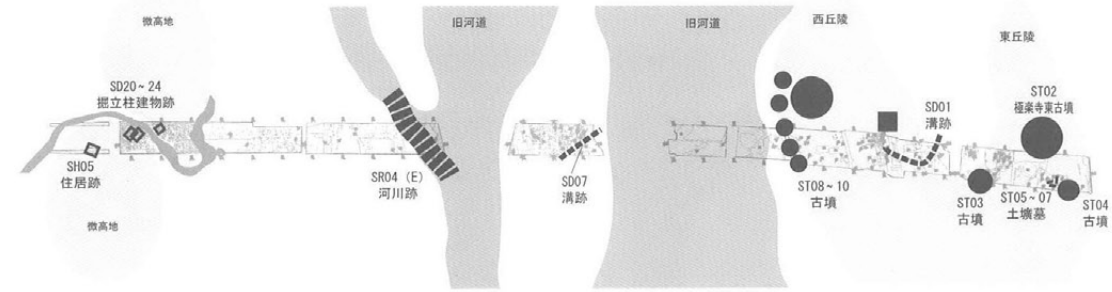
弥生時代後期後半



弥生時代終末期～古墳時代初頭

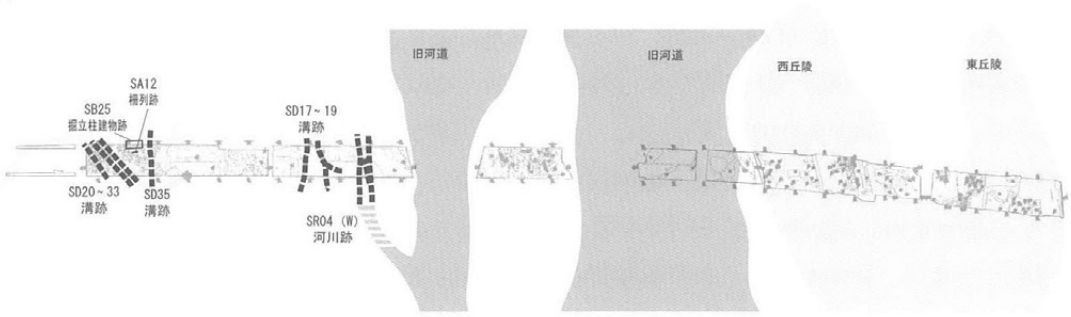


古墳時代中期～後期

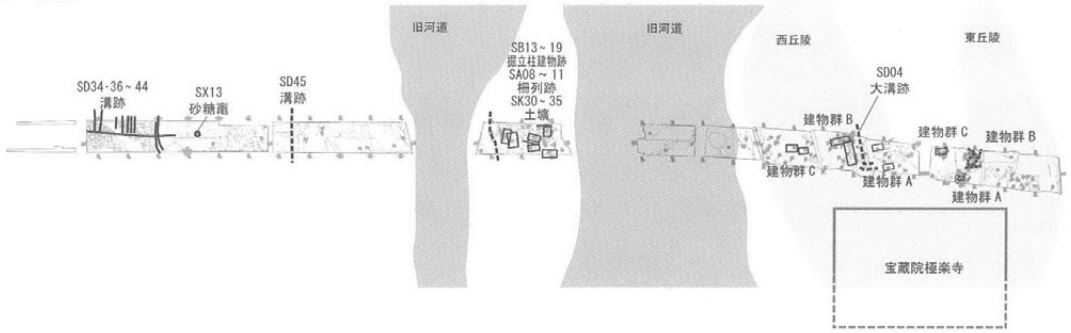


第 272 図　尾崎西遺跡遺構変遷図 2

古代



中世・近世



第 273 図　尾崎西遺跡遺構変遷図３

比較的まとまった資料が出土した。この時期は、一般的に低地の集落跡で営みが停止し、丘陵裾部や丘陵上に集落跡が立地することが多い。当遺跡においても低地のＣ地区で中期後半の遺物が出土せず、丘陵地帯のＡ地区において当該時期の遺物が出土することから、Ａ地区近辺に集落が営まれた可能性が高い。

土器　Ａ地区 SR01 より凹線文出現後の土器群が出土した。甕口縁端部（372・373）の凹線文はいずれも細く、口縁部の拡張は上方のみに止まる。壺は口縁部外反の壺（375・376）の口縁端部は凹線文の上に刻目や円形浮文を施す。直口壺（380）は口縁部が上方に間延びせず、頸部に押捺突帯を貼付する。高杯（381 ～ 383）は口縁部の拡張があまり大きくない。これらの特徴から、凹線文出現時期を中期後半古相とするならば、中期後半中相ごろに位置づけることができる。

石器　SR01 出土の 400 ～ 411 は、人工品かどうか疑わしい安山岩小剥片１点を除く、すべての石器・剥片類を図化している。砂岩製石錘を除くと、残るはすべてサヌカイト製打製石器である。このほか、この時期と推定される石鏃・石錐・打製石剣などがＡ地区包含層より出土している。それを含め合計 16 点、サヌカイト製石器の総重量は 1,314 ｇである。流通素材と考えられる大型剥片２点（410・411）も含まれており、時期を限定できる良好な資料となる。

＜弥生時代後期前半＞

遺構の分布　調査地中央部のＢ地区微高地上で住居跡 SH01、溝跡 SD06 を確認した。Ｃ地区の流路跡 SR05 ～ 07 にはこの時期の土器は含まない。Ｂ地区 SD06 は、縄文晩期の SD05 下層、弥生前期の SD05 上層に続き、同一方向に走行する溝跡である。SD06 には完形に近い土器が廃棄されていることから、

溝跡の廃絶に伴って投棄された土器が多いと考えられる。

土器　住居跡 SH01 出土土器（**664 ～ 676**）は、甕口縁部や高杯口縁部が拡張する形態をとどめる後期前半古相の土器群である。**669** は角閃石を含む茶褐色系胎土で製作された細頸壺である。頸部外面に細い沈線を巡らせ、内面に細かな指押さえが残る。高松平野西南部の土器である。

溝跡 SD06 出土土器（**747 ～ 765**）は、後期初頭から中葉にかけての土器群で、他地域系の土器が目立つ。**749** は口縁部外面に押捺粘土帯を貼付する南四国系甕である。南四国系土器は高知県西部及び愛媛県南部地域の土器で、高知県南国市田村遺跡群では、後期初頭ごろまで継続することが指摘されている（坂本 2006）。**750** は分割整形の甕である。当地域には少なく、近畿地方に多い技法である。**747** は胴部から口縁部にかけて、外開きとなる短い頸部が備わる甕である。瀬戸内北岸に多い形態である。**757** は角閃石を含む茶褐色系胎土で高松平野西南部の土器である。

＜弥生時代後期後半から古墳時代前期＞

居住遺構　C地区西側微高地では、合計 12 棟の住居跡を確認した。これらは、第 159・202 図に示したように流路跡（SR05・06）や溝跡（SD12）より出土した土器の分布状況と、住居跡の平面プランを関連づけると、住居跡の所属時期を推定することができる。対応関係を提示すると、次の通りとなる。

SH06 ＝ SD12　→　SH04　＝　SR06 C群
　　→　SH08　＝　SR05 G群

SH07 ＝ SR05 B群

これらは、いずれも出土土器からみて後期後半古相に所属する。これらと重複し、主柱穴が４個で方形住居と想定される SH03・09・11・13 は終末期と考えられる。いずれにも該当せず、柱穴列が多角形状に復元できる SH02・07・10・12 は、後期後半新相と考えるのが妥当である。このようにC地区微高地では継続して住居跡が営まれている。

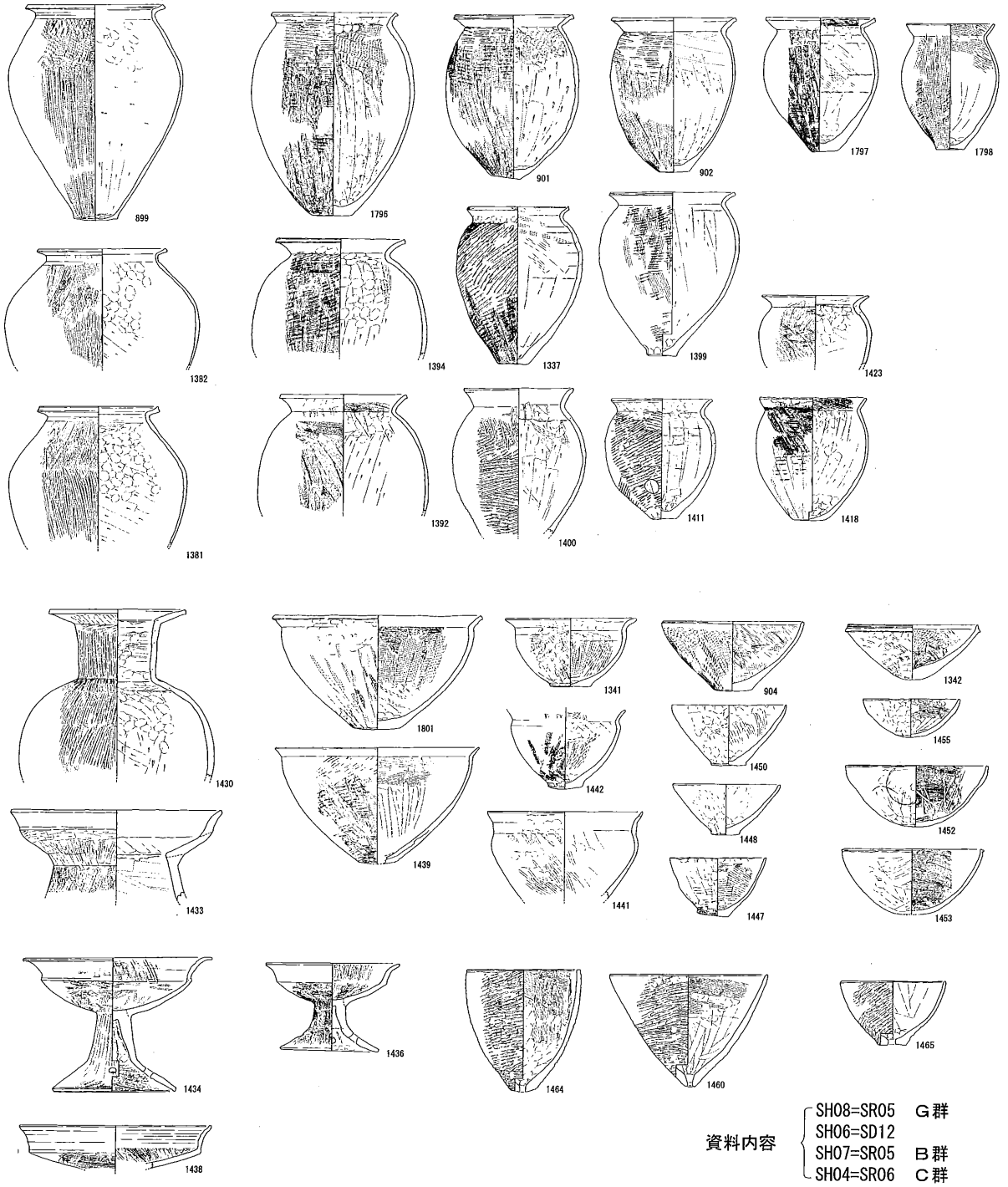
一方、C地区東側の河川跡 SR04 ではこの時期の出土品が少ない。そして SR05 ～ 07 の流路跡との間には低地帯を挟むことから、SR06 付近が居住域の東限とみてよい。

墳墓　A地区では円形周溝墓 ST01 を検出した。当該調査後、県教育委員会が隣接地の立会調査を行った当遺跡取り付き道路調査区では、ほぼ同じ時期と推定される浅い溝跡がみつかっており、周溝墓である可能性が指摘されている（國木 1993b）。さぬき市寒川町の森広遺跡円形周溝墓 ST301・ST302（山本ほか 1997）や、空港跡地遺跡 ST01 ～ 05（木下編 2002）などでは複数の周溝墓からなる群墓が確認されており、今回報告した ST01 は丘陵上の単独墓ではなく、集落域に近接する群墓の一つである可能性もある。

ST01 は直径 12.5 mの円丘部に長さ 2.8 mの突出部が付属する平面形で、埋葬主体部は後世の削平により消失していた。周溝跡の深さは 0.48 mとやや深めで、遺構検出面から本来墳丘までの高さを一定程度想定する必要があるが、深さ１mを越えるような深く大きな墓壙を有していたとは考えにくい。近隣の陵遺跡で出土した掘り形の浅い木棺墓（阿河編 1999）などが想定される。

周濠内には多量の礫が転落していた。礫の大きさから復元すると、本文中で記したように高さ 45cm ほどの腰巻状の貼石が想定できる。陵遺跡では当遺跡 ST01 の礫を上回る多量の礫が出土し、一部段状に組まれた部分が見つかっている。一方、三木町西土居 16 号墓（松田編 2003）では、方形墳丘墓の周

縁に小型礫を１石のみ並べた状態、極楽寺墳丘墓（片桐節 1998）では大型の塊石を立てて墳丘隅に配置するものもある。そのほか、空港跡地遺跡では既知の周溝墓に近接して礫及び土器を多く含み弧状に巡る溝跡 SDk06（山元編 2003）が検出されており、貼石をもつ周溝墓である可能性が考えられる。稲木遺跡（善通寺市･香川県教育委員会 1987・西岡編 1989）の突出部付方形周溝墓も多量の礫を伴う。一方で、直径 20 ｍを越える大型の円形周溝墓森広遺跡 ST301（山本ほか 1997）では、部分的に周溝跡内で礫が出土しているが、墳丘全体に貼石が巡らされたものではない。当該期の周溝墓・墳丘墓には貼石をもつものと、もたないものが規模の大小に関わらずに混在する。



第 274 図　尾崎西遺跡弥生時代後期後半古相の資料

なお、ST01 とＣ地区居住域は直線で約 600 m離れている。Ｃ地区居住域はむしろ陵遺跡の円形周溝墓のほうが、地理的には近い位置にある。Ａ地区 ST01 周辺でも、Ｃ地区と同時期の集落域が今後確認されれば、近接して併存する弥生後期後半期集落のそれぞれの墳墓として位置づけることができるかもしれない。

土器資料　流路 SR05 ～ 07 に投棄された多量の土器のうち、SH08 縁辺に廃棄された土器群である SR05 Ｇ群は土器量も器種もよくまとまる。中には焼成時の破損に類似する器表面の剥離痕をもつものも含まれ、SH08 廃絶後に小規模な土器焼成が行われた可能性を示唆する。Ｇ群すべてが土器焼成に関わる土器ではないが、在地生産土器の一つの基準資料になりうる。これを含めて後期後半古相の資料を 274 図にまとめた。

在地土器の胎土　剥離痕をもつ土器は、粗い石英・長石を混ぜた黄褐色系胎土の土器で、Ｃ地区全般で多数を占める胎土である。胎土分析を実施したが、その際、この胎土の土器群をＡ類とした。細かくみると、上記の特徴を備える A-1 類と、それに赤色粒が混じる A-2 類がある。A-1 類はＣ地区に多く、A-2 類はＢ地区に多い。

周辺地からの搬入土器　一方で、いわゆる下川津Ｂ類とされる搬入土器が全体の約１割ある。下川津Ｂ類は、丸亀平野に位置する坂出市下川津遺跡の調査報告において問題提起・用語定義された土器様式である。器形や胎土に斉一性があり、多様な在地土器群と比較した時、著しく際立った土器として抽出できる後期後半から終末期にかけての搬入土器とされる（大久保 1990）。さらにこの種の土器は、高松平野西南部丘陵の閃緑岩風化粘土を使用したものであることが指摘（奥田 1995）され、事実、その丘陵に近い上天神遺跡や太田下須川遺跡で出土した弥生時代後期初頭の土器群は、その多くが下川津Ｂ類と同じ粘土を使用していた。つまり、高松平野西南部で後期初頭ごろから使用された胎土を用いて生産された土器が、後期後半に至って丸亀平野をはじめ、讃岐平野各地へ、あるいはさらに遠方へと搬出された状況が理解される。

当遺跡にあっても同様で、先のＡ類を仮に在地系土器群とするならば、それに該当しない際立った土器群をＢ類系として抽出することができる。当遺跡におけるＢ類系は、茶褐色系の胎土で、角閃石・少量の雲母を含み、器種は主に甕・壺・高杯で、いずれも薄作りの精製土器である。甕は口縁部の拡張・摘上げ、胴部上半のハケ調整、下半部のヘラミガキなど、形態的な斉一性を有し、壺・高杯も同様に斉一で特徴的な土器製作技法をもつ。下川津遺跡で注目され、高松平野西南部で生産されたと推定された下川津Ｂ類と同様である。

掲載区分	種別	壺	甕	高坏	鉢	製塩	蓋	器台	甑	合計	備考
図掲載	Ｂ類系	12	57	12	3	1				85	うち 33 点が B-2 類
	在地系	51	148	29	87		2	1	17	335	
	搬入品	3	5							8	
図非掲載	Ｂ類系	29	231	39	1					300	
	在地系	160	2456	309	472					3397	
	合計	255	2897	389	563	1	2	1	17	4125	

※ SR05・SR06 出土の弥生後期～終末期土器を対象として集計した。なお、図非掲載分は B-1 類と B-2 類の細分ができていない。

第 10 表　尾崎西遺跡弥生土器の器種別胎土分類集計表

遠隔地からの搬入土器　これに加えて、吉備、阿波からの搬入土器が少量みられた。

搬入土器　　吉備　（1359・1541・1644・1824・2021）

　　阿波　（6・13・1091・1373・1952・1980・1987）

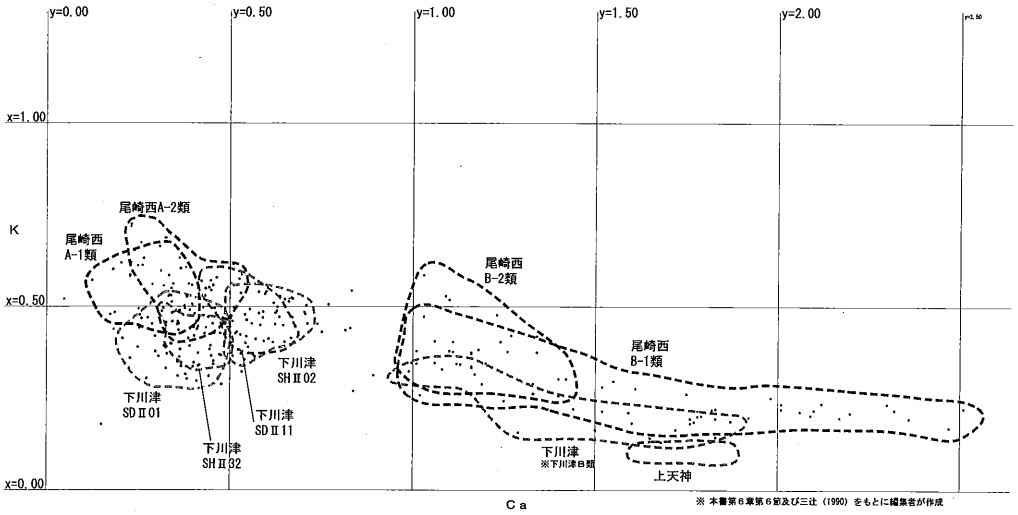
Ｂ類系土器の多様性　Ｂ類系土器を細かく点検すると、上記の下川津Ｂ類土器の特徴を厳密に備えるも

のもあれば、胎土に多量の雲母を含み、甕では下半部のヘラミガキがハケ目に置き換えられたり、胴部上半のハケ目が一般的な下川津B類と異なる方向に行われたり、また胴部上半の肩部が丸く仕上げられ、加えて口縁部内面の胴部境の稜線が弛緩するなど、部分的に異なる属性をもつ個体がある。また、一般的な下川津B類にみられない鉢や小型壺にもこの胎土で製作されたものがある。つまりこれらは、下川津B類とは異なる系統の土器群である可能性が高い。胎土分析では、一般的な下川津B類をB-1類、後者の雲母を含み別系統と認められるものをB-2類とした（第269図）。このB-2類も量的に見ると非在地生産品であることは間違いない。

同様の胎土を有する土器は、当遺跡から4km西に所在する三木町鹿伏・中所遺跡などで多く見られる。そこでは焼成破損品も含むなど、この系統の土器生産を示唆する資料がある。また、高松市牟礼町原中村遺跡では、当遺跡のB-2類とは異なる胎土で、B-1類と区別可能な別系統の土器群がある。胎土は赤色粒や大粒雲母が含まれ、形態的にはB-1類とよく似ているものの、胴部内面最上部までヘラ削りが及ぶものや、角閃石を全く含まない白黄色系胎土で製作されたものなどがある。

このように、高松平野西南部を生産地として、極めて広範囲に流通した可能性が高いB-1類に対して、高松平野東部では、B-1類を摸倣しつつ、変容を加えながら、複数の小地域がそれぞれの小流通圏をもつ亜種様式を成立させていた可能性が考えられる。また、B-2類の胎土は下川津B類（B-1類）とは異なるとはいえ、色調や角閃石の含有量などでバラツキがあり、下川津B類（B-1類）との区別が難しいものもある。その中には本来下川津B類(B-1類)に含まれない器形もある(1484・1557・1642・1879・1880など)。つまり、亜種が成立する背景に、粘土や混和剤の砂粒などの、素材の流通が関係している可能性も考慮する必要が生じる。播磨や阿波など下川津B類の摸倣土器群を理解する上でも、今後重要な視点となりうる。

胎土分析の結果　蛍光X線分析を依頼し、在地系土器（A類）の胎土成分のまとまり方、あるいは搬入系土器（B類）のバラツキなどを検証した（第6章第6節）。A類は概ね一定範囲に収まり、その中でA-1とA-2は大部分が重複しながら、Ca量の多寡で僅かに分かれる。一方で、B類土器はA類に比べてK量が少なく、Ca量が多い点で明確に区分することができる。第275図は、下川津遺跡のほぼ同時期の土器の胎土分析値（三辻1990）を統合してK/Caグラフを作成したものである。下川津遺跡の分析データは約20年前のものだが、いずれも岩石標準資料JG-1による標準化値で提示されており、直接比較することが可能とされている。比較すると、下川津遺跡における下川津B類以外の土器（ここでは下川津



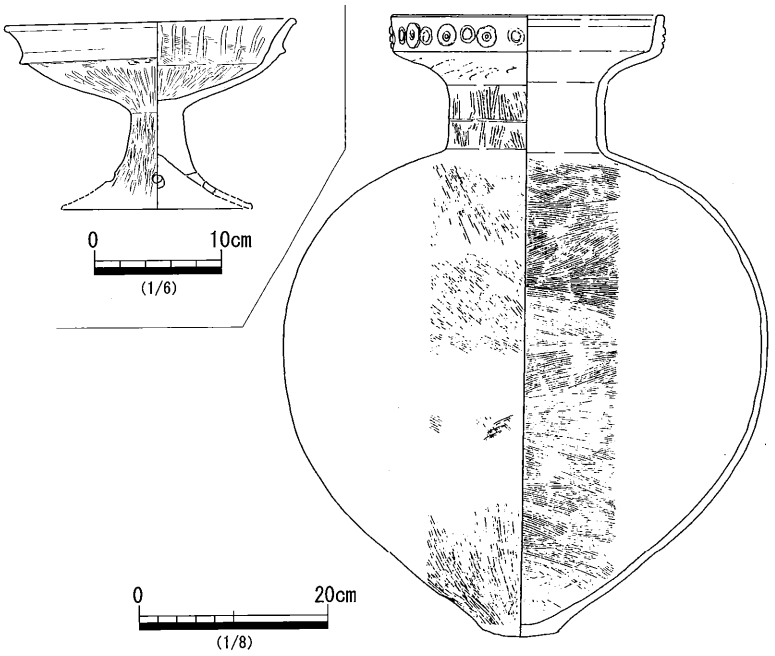
第275図　弥生土器胎土蛍光X線分析データ解析グラフ

遺跡の在地系土器とする）は、尾崎西Ａ類よりＫが少なく、ややCaが多い傾向があるものの、その約４割は尾崎西Ａ類の分布域と重複する。同じく、Ｂ類系については、当遺跡のＢ類系と、下川津遺跡の下川津Ｂ類に相当する一群が若干ずれるものの、Ca量が多く、在地系土器と明確に区分できる点で共通する。

この分析により、肉眼や顕微鏡観察により認定できる在地系（Ａ類）とＢ類系が、分析数値上でも明確に区分できることが確認できた。また、Ｂ類系については、B-2類がCa量が少ない範囲にまとまっており、今後分析量を増やせば、B-1類と区分できるかもしれない。しかし、留意すべき点として、在地系土器を見た場合、下川津遺跡と尾崎西遺跡という30km以上離れた二つの遺跡で、それぞれ在地系と考えられる土器の数値が大きく重複することから、分析数値を基にしてすべての産地を同定できるような分析標本ではないことを、考察の前提として認識する必要もある。

円形周溝墓ST01供献土器の評価　Ａ地区の円形周溝墓ST01は、甕（9・10）口縁部の端部面取りや上下の拡張、安定した平底形状等からみて、終末期に下らない時期の所産といえる。この底部形状のみから判断すると、後期後半の古相と見ても差し支えない。しかし、大型壺7の底部と考えられる15の底縁部の稜線がやや甘くなることや、鉢と考えられる16の底部が矮小化することなど、後期後半古相以後と推定される属性も垣間見ることができる。

第276図に示したさぬき市寒川町大末古墳群出土壺棺の棺体土器は、当周溝墓の複合口縁壺7に酷似しており、当墳墓と同時期と考えられる。これに伴う高杯は、口縁部下の段が明瞭で、脚部もあまり矮小化がみられないことから古相に写るが、細かく見ると、口縁部下の段は器形の屈曲点と位置がずれて上方に遊離し、突帯状を呈すること、脚部は中実を呈することなど、後期後半古相に一般的な属性から逸脱していることが指摘できる。段が突帯状となる高杯は、終末期の土器を含む当遺跡Ｃ地区SR06の1832の高杯に見られ、一方で後期後半古相と考えられるSR05 G群の高杯には全くみられない。1832は口縁部の屈曲も退化する傾向にあるので、より新しいと見ることができる。したがって、大末古墳群出土壺棺の高杯は、後期後半新相から終末期の間と考えられる。これらを総合すると、ST01の供献土器群は終末期に下らない後期後半新相に位置づけるのが妥当と言える。



第276図　さぬき市大末遺跡出土の土器棺資料

供献土器の組合せは、底部のみの個体も計上して大型壺３点（うち１点は阿波もしくは紀伊産）、小型壺３点（うち、B-1類１点、B-2類１点）、鉢１点、甕１点となる。大型壺は、全形を復元すると、高さ50cmを越えるものと推定できる。同サイズの供献土器は、高松市林坊城遺跡１号墓（信里2004）や、森広遺

跡 ST301 などで認められ、口縁部破片のみであれば多くの弥生墓で出土している。しかし、それぞれの土器形態は斉一ではない。一方、小型壺 (8) は、口縁部が短く上方に立ち上がり、体部は扁平気味となる。これらは林坊城遺跡 1 号墓、奥 10 号墓など後期後半古相の弥生墓によく見られる形態である。甕・鉢の供献も大小の弥生墓に一般的である。一方で、後期後半古相に位置づけられる林坊城 1 号墓や奥 11 号墓で出土する器台が本例では認められない。器台は同時期の吉備地方に発達する供献土器で、区画墓築造の契機が吉備の大型墳丘墓と関係している可能性を示すものだが、讃岐地域では後期後半新相以後の墳墓で欠落する器種である。本周溝墓も他例に漏れず、器台が欠落している。

＜古墳時代中期～後期＞

居住域　C地区では、古墳時代中～後期とみられる住居跡 SH05、掘立柱建物跡 SB20 ～ 24 が分布する。流路跡 SR05 ～ 07 では、上層を中心に韓式系土器を含む当該期の土器や 7 世紀の土器が出土する。この流路跡に沿って微高地の西側に住居跡 SH05、東側に掘立柱建物跡が分布する。SH05 は布留系土師器に初期須恵器が伴う。一方、SB20 ～ 24 の掘立柱建物跡は、柱穴出土遺物もほとんどなく、詳細な所属時期は困難である。

北西から南東へ蛇行する流路跡 SR05 の上部で検出した溝跡 SD33 の流下方向は、SR05 とは逆に、南東から北西へと変換する。隣接する大小の同一方向の溝跡も連動すると推定される。これらの大小の溝跡は、上記建物跡の柱穴と重複関係があり、建物跡に後出するのは明かである。流路跡 SR05 上部の SD33 には 7 世紀中葉までの土器が含まれており（1009 ～ 1018）、下位の SR05 では 5 世紀代までの土器群が主体である。つまり、7 世紀中葉頃を境にして、SD33 等の溝跡群が設置されたものといえる。これは周辺の径水路網の広範囲な変更を反映する可能性がある。C地区西側の河川跡 SR04 の東流路(SR04E) が一端埋没し、条里方向に沿った西流路（SR04W）が新たに掘削された時期も、出土遺物からみて同時期である。

以上から、建物群の所属時期は 7 世紀中葉より前と考えられるが、SR05 ～ 07 出土の古墳時代遺物を点検すると、5 世紀代が主体を占め、それ以後は少ない。現段階では建物群を 5 世紀代と考えて良いものと思われる。

県内ではこれまで 5 世紀代の集落跡の調査例は多くない。丸亀市佐古川窪田遺跡（山元 2006）では東西 2 群の古墳時代建物群が検出されており、そのうち西群は造付竈出現以前の竪穴住居跡を含む建物群である。それらは弥生期に掘削された大規模基幹水路に沿って営まれ、当遺跡の建物と同じく、多くが束柱を伴う。建物跡床面積はすべて 20 ㎡未満の小型建物跡で構成されており、当遺跡の建物跡床面積（30 ～ 60 ㎡）と比べ格段に小規模である。高松市空港跡地遺跡西端の古墳時代集落（木下 2002）では、竪穴住居跡 6 棟、時期不明の掘立柱建物跡 2 棟を確認している。建物跡は佐古川窪田例と同様に小規模である。東かがわ市原間遺跡（山元 2005）では、当該時期の竪穴住居跡があり、時期不明の掘立柱建物跡が複数検出されている。中には布掘形式の建物で床面積が 30 ㎡前後と推定されるものもあるが、7 世紀代の同一方向の竪穴住居跡も近くにあり、当該時期に所属するものか明かでない。以上の類例と当遺跡の建物群を比較すると、当遺跡の建物跡は一様に規模が大きいと言える。

墳墓域　A地区では東丘陵に 3 基の古墳、B地区では 3 基の古墳を検出した。A地区は周知の極楽寺東古墳（ST02）周濠より須恵器が出土しており、6 世紀後半（TK43）と判明した。ST03・04 は小規模な横穴式石室墳である。ST03 は右片袖の玄室で袖部基底石が平積みされる形式、ST04 は無袖の玄室で、や

や胴張りの平面形を呈す。いずれも玄門部に仕切石を設置する。このほかA地区ST04に隣接して土壙墓群を検出した。そのうちST05では、円礫による棺台、碧玉製管玉、ガラス玉などの多数の玉類及び土師器小壺の副葬を確認した。7世紀前半～中葉、TK209～TK217併行期の遺物が伴う。

一方、西丘陵では中世遺構などから円筒埴輪が出土しており、隣接する町教育委員会調査地で確認されている6世紀前半期古墳に伴うか、あるいは今回の調査では材料が得られなかった極楽寺西古墳に伴うものか、いずれかと思われる。そのほか、TK43を下限とする須恵器が出土した古墳周濠（ST08～10）がみられ、隣接調査区でもその時期の古墳が複数確認されていることから、東丘陵より古い段階から開始した小規模群集墳と言える。

東西丘陵ではそれぞれ規模の大きな盟主墳とそれを取り巻く小規模墳、さらに土壙墓が付属するといった階層的な古墳の分布状況が読み取れる。その中にあって、東丘陵ではST03で金銅装馬具が出土したり、墳丘を持たない土壙墓から多数の玉類が出土するなど、小規模の割に副葬品が豊富な点は注目できる。

土器資料　C地区微高地では、流路SR05・06を中心として、第277図の韓式系土器・陶質土器が出土した。本県での韓式系土器の出土例は観音寺市村黒遺跡（松本1987）、高松市六条・上所遺跡（北山1995）、木田郡三木町砂入遺跡（西岡2007）などで確認されているが、これだけ集落域でまとまって出土する事例は今のところ県内では他にない。

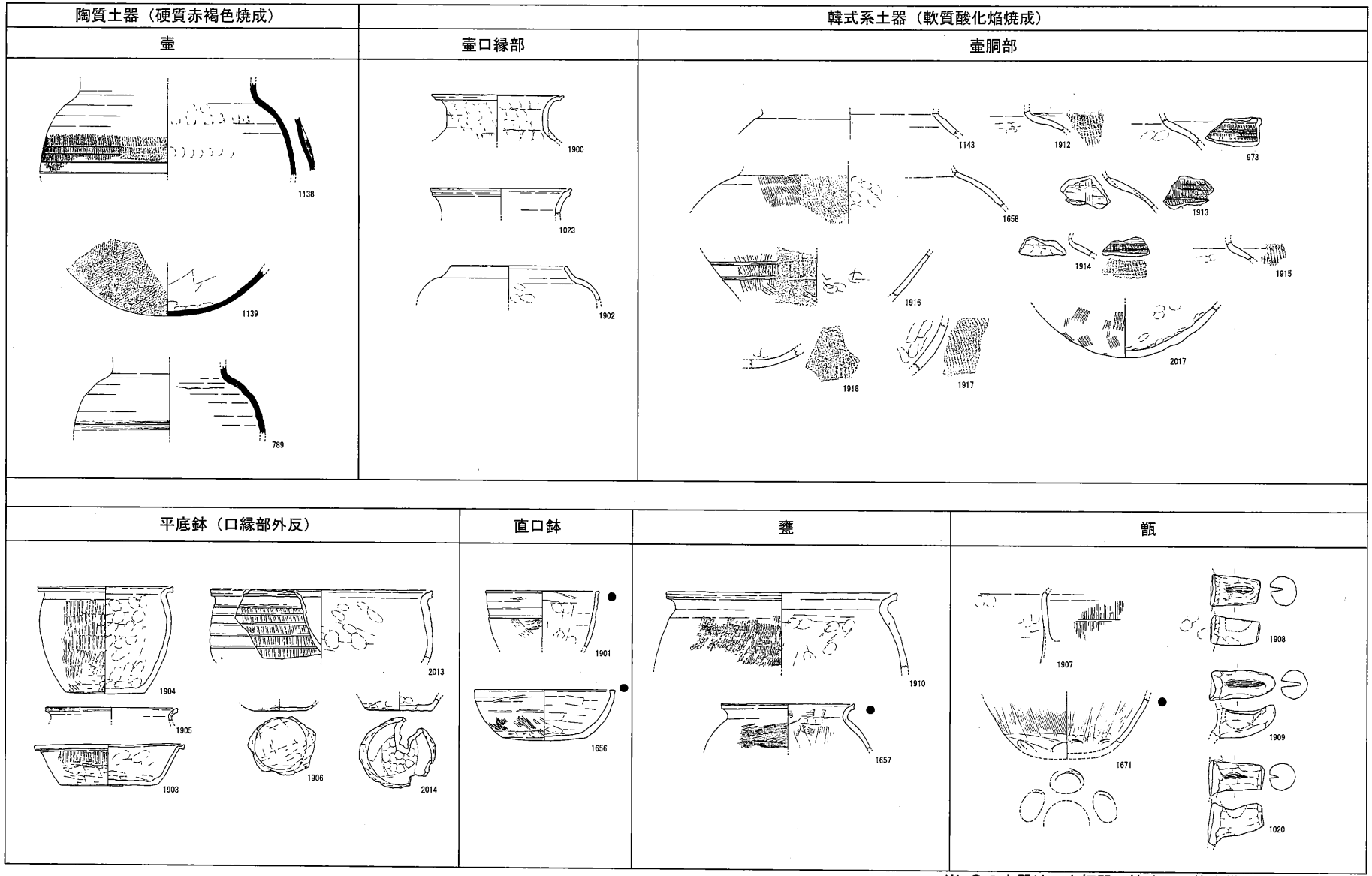
陶質土器　硬質還元焔焼成の陶質土器は、肩部が丸く頸部が直立する形態の壺が大小2点出土している。そのうち大型で同一個体の**1138・1139**は、胴部に縄蓆文叩きを施し、間隔をあけた沈線文を施す赤褐色系土器である。焼成歪みか意図的か明かではないが、胴部の一部が窪む破片が伴う。これとよく似た器形の小型品**789**は、B地区河川跡SR02出土品で、焼成は灰白色系、胴部中程に櫛描文が施される。これらの壺は、県内では仲多度郡多度津町南鴨遺跡出土の須恵器壺（松本1980の図版1の3）の器形に類似する。畿内では陶邑・大庭寺遺跡TG232号窯出土資料（岡戸編1995の749など）によく似た事例がある。

韓式系土器　軟質酸化焔焼成の韓式系土器には多くの器種がある。いずれも黄白色系の胎土で、若干素地目が粗く、クッキー状に焼き上げられた比較的均質な胎土である。整理作業では、多量の弥生土器や土師器の破片中にあって、小破片でもある程度抽出できる共通性がある。以下、器種毎に類例等を検討する。

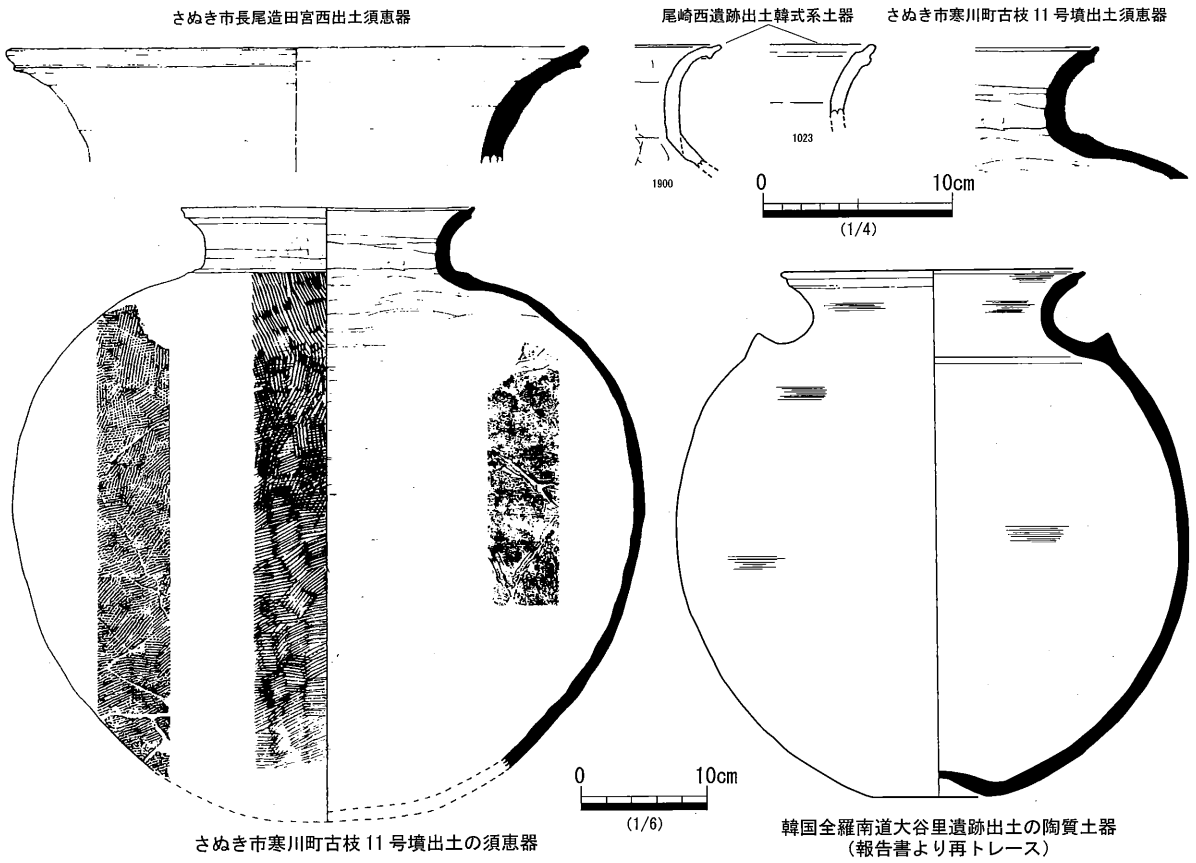
壺　口縁部が3点出土した。**1900・1023**は外反した口縁部内外端部に強いナデを加えて段を作り出し、口縁先端を細く尖らせる。外面の段は、さらにその下端の強いナデにより、低い突帯を作り出す。同様の口縁部形態は第278図に示したように、さぬき市寒川の古枝11号墳出土の須恵器甕口縁部（松本1981の図版1-1）に類似する。壺や甕の口縁部外面に低い突帯を貼付する形態は、韓半島の三国時代の陶質土器や日本の初期須恵器の壺や甕に一般的だが、なかには強いナデを施すものもある。和泉の陶邑ではTG232窯（岡戸編1995）の甕口縁部に少量、ON231窯（西口1994）の甕に比較的多く認められるようである。全羅南道大谷里遺跡出土の耳付壺（崔1990の図版61）は、器形が古枝11号墳例に酷似し、法量は当遺跡の**1023**にほぼ等しい。

口縁部が内傾する短頸壺**1902**は、胎土は黄白色系だが、外面は黒灰色で瓦質に近い焼成である。太田下須川遺跡SD14に須恵器例があるが、他地域では一般的ではない。あえて類例を示すと、一つに硬質土器の有蓋脚付小型壺の口縁部付近に近い。金海大成洞古墳群39号木槨墓主槨（申・金2000の図版

第277図　尾崎西遺跡出土陶質土器・韓式系土器の器種分類



※ ●の土器は、土師器の技法・形態を備える折衷系土器



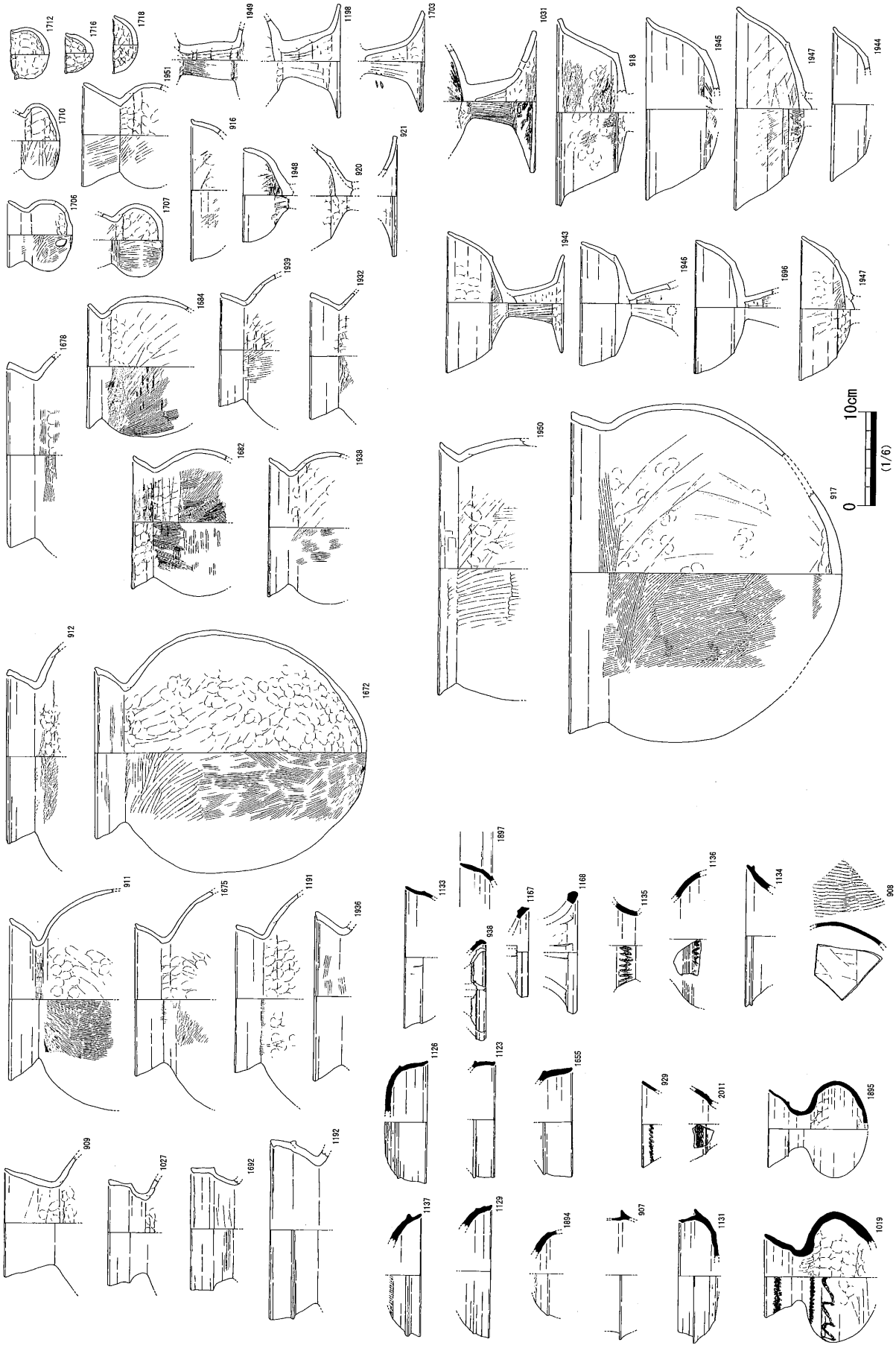
第278図　尾崎西遺跡出土韓式系土器と類例資料との口縁部形態比較

44の1）は当資料と同サイズの資料である。また、大谷里では口縁部形態がこれに類似する両耳壺（崔1990の図版54の1）や、台付壺（徐・成1989図面13の5）が出土している。

壺の頸胴部境の破片は7点出土している。ほとんどが縦位の平行叩きを施し、横方向の沈線を巡らせるものが多い。県内でこれまで出土した韓式系土器壺はすべて格子目タタキだが、今回報告する韓式系土器には格子目タタキは皆無で、系統や時期などが異なるものと考えられる。

鉢（椀）　口縁部が短く外反する平底鉢である。完形に復元できるものが2点（1903・1904）出土した。平坦な底部の内外面に顕著な指押さえがみられ、底縁から下胴部にかけて1～2段のヘラ削りを施し、上胴部は縦位の平行叩きで成形する。口縁部は内面稜線を介して短く屈曲するものと、丸くカーブして外反するものがあり、いずれも口縁端部は上下に拡張して端面をもつ。口縁部や底部の小片もこれらの特徴から抽出することができる。なお、胴部に沈線を巡らせる2013は甕の可能性もある。一方、口縁部が外反しない1656も底部や底縁部のヘラ削りを根拠として韓式系土器に認定した。ただ、椀の可能性がある1901とともに外面にハケ目調整がみられることから、国産土師器と折衷した土器と推定している。これらの胎土は、1656が他の韓式系土器と同質で、1901は国産土師器と良く似ている。

甕　1910は外面に縄蓆文叩きをもつ甕である。胴部が長くなる形態と推定する。器壁はやや厚めで、内面は指押さえやナデで調整する。一方、1657は外面に横方向のハケ目調整が顕著にみられる。胎土は国産土師器と同じだが、口縁端部を上下方向に細く摘み上げる形状が土師器と異なる。これは平底鉢に分類した2013の口縁部仕上げと酷似する。このように口縁端部を上下に摘み上げる形状は県内の陶質土器とされる高松市香南町の平等山遺跡甕口縁（松本1987）にもみられ、県外出土の韓式系土器に



第 279 図　尾崎西遺跡出土の古墳時代中期土器組成（須恵器・土師器）